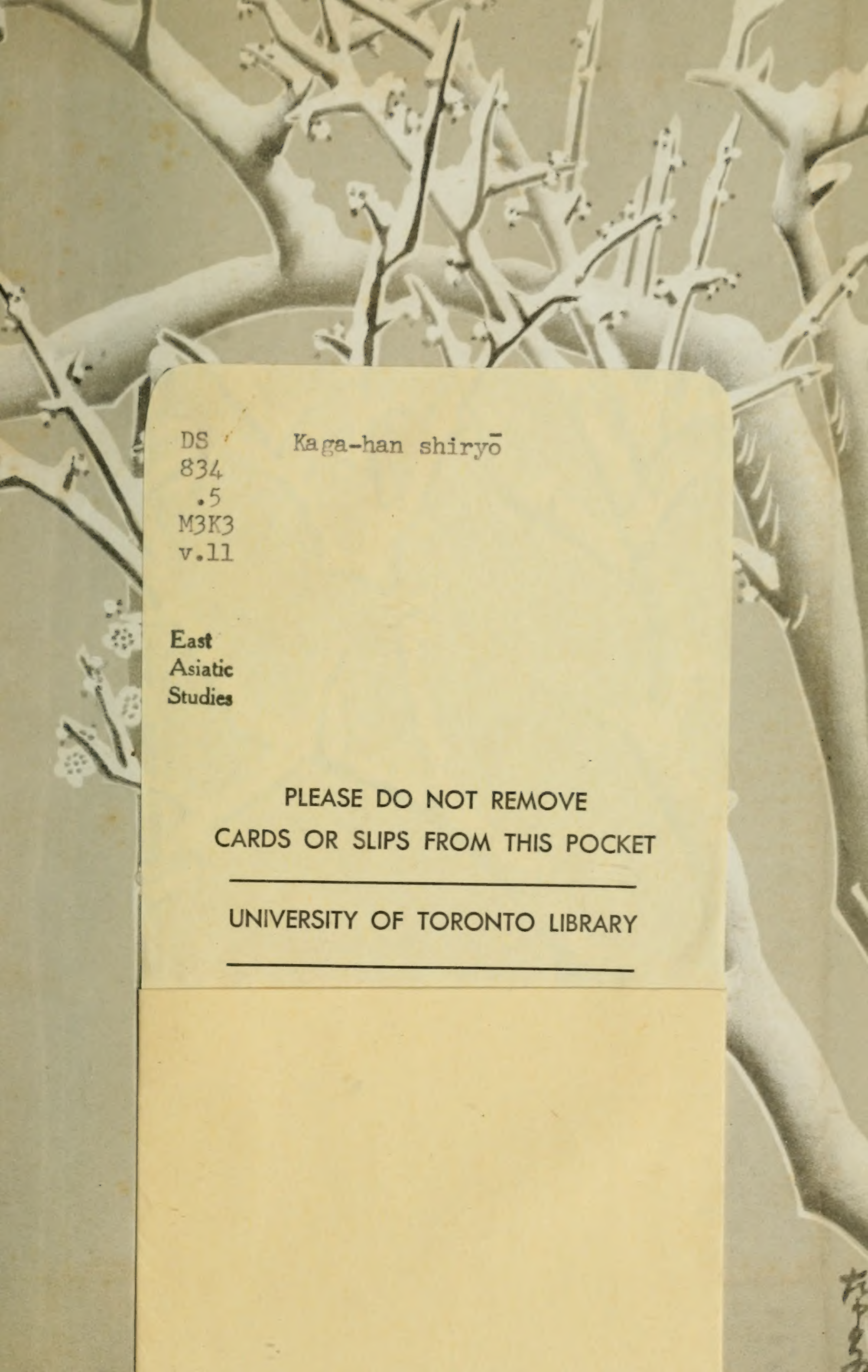




加賀藩史料

第拾壹編

自享和元年
至文化七年

加賀藩史料第十一編

享和元年

正月朔日。前田治脩風邪に罹るを以て登營年賀を廢す。

〔御年譜〕

一、正月元日就御風氣御登城御斷。併御家臣御禮被爲請。

正月四日。郡奉行能登に於ける猪・鹿の狩獵實行を督促す。

〔筒井觸留〕

雪積次第、猪・鹿狩取方爲勢子、拙者共可令出役旨、近年申渡置候通に候。然所舊冬より餘程雪積り候に付、追付出立之儀申談候所、村々之者共聊油斷無之旨申聞候。何れにも四郡共嚴重令勢子、雪消不申内精誠勢子を入可申候。猶更見計令出役候條、此段一統不相洩樣、其方中より夫々可申談候、以上。

正月四日　　高田彌左衛門
神保縫殿右衛門

鵜川村　喜兵衛
本江村　惣助
大澤村　內記

追而、不情之村方有之候はゞ、早々可及注進候、以上。

今日御郡所より、猪・鹿狩取方之儀に付御紙面御渡、尙更被仰渡候は、爲勢子方兩御役所より、御奉行衆之內御出役可被成段、吳々御申談に候得共、御出役無御座共村々油斷茂不仕、勿論組付十村中每日勢子に罷出候間、御出役之儀暫御見合茂御座候樣仕度段、御達申上置候。左樣御承知可被成候。幸今日口郡迄便有之に付、御紙面寫相廻申候。何れに而茂御書譯、双方ゟ急速御順達可被成候。尤狩取方御油斷無御座樣御尤に候、以上。

酉正月四日　　大澤村內記（自金澤）

仲間宛所

正月十日。金澤城の西町口門倒壞したるを以て通行を禁ず。

〔政隣記〕

西町口御門今曉之風に而吹倒候に付、今日より御修覆中右御門往來指留候條、此段夫々可被申談候事。

兩御役所は御郡所及び改作所

正月十日

附、右御修覆出來、二月廿六日より往來有。

右御城代大炊殿被仰聞候旨等、例之通御横目廻狀出。

正月廿三日。百姓驅落を爲したる者ある場合に於ける十村等の取捌を嚴にせしむ。

〔筒井觸留〕

走百姓斷延引之御郡有之躰に候。其内御郡々より、三年見合立歸不申分、斷出申流例茂有之躰に候。右三年見合候儀惜成證據有之儀に候哉。何れにも走人之儀者不輕儀、三年見合候而者人別茂不埒に相成紛敷候條、以來年切相斷可申候。洩候儀有之、追而相知候はゞ裁許可爲無念候條、心得違無之樣一統嚴重相心得可申候、以上。

酉正月廿三日　改作奉行

諸郡御扶持人・十村中

御別紙御渡、諸郡より紙面早速指上候樣被仰渡に御座候、以上。

五十里村　庄右衛門

諸郡御詰番中樣

一、諸郡之内走百姓等斷致延引、或立歸候者も御郡奉行ゟ相斷、拙者共ゟ者譯而不及案内分も有之躰。暨跡高取捌之儀も區々之儀有之躰に候。勿論流例等を以取捌來候躰に候得共、走百姓之儀に付而者前々重き被仰出も有之、改作方古格之通嚴重に不申付候者而は、百姓之懲にも不相成、高方縮も忽に相成形も有之儀に候得者、是迄之儀者格別、以後流例たりとも古格に違候儀者難相用、既に其方中勤方帳にも委曲有之通りに候條、諸郡共急度相改、古格之通無違失相守可申候。自然等閑に相心得、斷延引等之儀於有之者、可爲越度候。勿論廻口御扶持人無油斷可遂穿鑿候。則其方中勤方帳拔書爲念相渡之候、以上。

酉　正　月　　改　作　奉　行

諸郡御扶持人・十村中

十村勤方帳之内拔書

一、百姓病死或溺死之ヶ所之内、欠落百姓跡高之儀、其者忰或親類共村ゟ者不申付候。

一、欠落人何れ之組に而も見附申歟、立歸り候得ば縮いたし置之、十村ゟ案内仕に付、欠落人書附爲致、十村奥書仕、欠落人に其村肝煎・組合頭・十村等相添、御郡奉行ゟ召連罷越、吟味之上先々に而惡事不仕候得者、百姓之儀者改作奉行へ書附を以相斷、受指圖、居在所に指

置不申候。頭振并下人等之儀は、御郡奉行受指圖、申渡格之通申付候。先々に而惡事仕百姓・頭振等之儀者、御郡奉行より公事場に指遣申候。

一、百姓・頭振之内、欠落・死罪・御國追放・居村追出・自害・溺死人等有之刻、組之十村より御郡奉行に相斷、百姓之儀者改作奉行にも相斷、高締肝煎・組合頭に申付書付取置、其段改作奉行に書附出申候。

此外欠落人取捌ヶ條有之候得共、右之ヶ條に而相分り候事。

正月廿五日。金澤の町人にして家中諸士の名義を借り傳馬人足を徵發することを禁ず。

〔政隣記〕

付札、定番頭に

所々御郡奉行等支配町・在宿役之儀者、前々より御定も有之候處、次第弛、御城下町人共之内にも、御家中侍中等名前を借、傳馬 人足召仕致往來候者も多有之、猥成躰相聞、宿々及難澁、宿役も勤兼候に付、町人共より相願候而も、先觸傳馬帳等猥に指出不申筈に候得共、猶更心得違無之樣、御家中を初寺社家にも急度申渡候樣仕度旨、御算用場奉行等申聞候條、被得其意、組・支配之人々に可被申渡候。組等之内裁許有之面々者、其支配にも相達候樣可

被申聞候事。

右之趣一統可被申談候事。

酉　正　月

右廿五日御用番安房守殿御觸出。

正月廿九日。二朱判の通用等に關する幕府の令を傳ふ。

〔政隣記〕

此度二朱判吹方差止、丁銀吹方被仰付、勿論二朱判之儀者永代通用可致旨被仰出候。猶又諸色直段正路に相守、下直に致し候樣、江戶・京・大坂町々に相觸候。且只今迄遠國等者、二朱判通用いまだ致馴ざる場所も有之哉に相聞え候。以來永代一統通用之事に候得ば、少も無指支之樣可致通用候。

右之通天明八申年相觸候處、二朱判之儀近年拂底に付、猶又吹方被仰付候間、彌無指支可致通用旨、最前相觸候向々に可被達候。

十　一　月

松平伊豆守殿御渡候御書付寫一通相達候間、被得其意、答之儀者井上美濃守方に可被申聞候、以上。

十一月十一日　　　　大目付

御名殿留守居中

二朱判通用等之儀に付、從公儀相渡候御書付寫一結二通相越之候條、被得其意、御組且又御家來末々迄可有御申渡候、以上。

辛酉正月廿九日　　　　奥村河内守

本多安房守殿

正月。十村等、名字帶刀を許されんことを請ふ。

〔上田源助舊記〕

御内分申上候、

御郡方十村役之儀、慶長年中御取立御座候而、承應元年頭取之者御扶持人に被仰付、御郡々取治仕、私共先祖之者共御草創之比より御改作方等御用相勤、御扶持高之儀も御城中に而頂戴仕、御時服・御武具・御馬等之類度々拜領被仰付、其内御槍者御郡方爲締被下之候間、村廻仕候節爲持可申旨被仰出茂御座候。勿論御次迄度々被召出御用相勤申候。且又私共御扶持高之儀は御印物被成下、夫銀等迄御渡、御知行同樣之趣、只今以其御格合に御座候。年頭御禮寬文七年迄者竹御間に而被仰付、御料理被下候節、足輕給仕に被仰付、右給仕は只今茂古來之

通り之御格合に御座候、其外御算用場奉行始、外々御奉行所より殿付之御紙面被遣候御様子に而、于今私共之内所持仕候、ヶ様之御振合に御座候所、延享・寶暦之初比より、いつとなく私共役權相衰、小役人中迄名前申放し被致候樣之儀有之、甚緩怠成被及會釋、近比は御家中末々小者躰、町方輕き者共迄輕しめ候様に相成、御城下幷町方・宿方に者御郡方百姓二三男躰奉公に罷出、舊里に罷在候節心底不宜者共、不實之儀に而十村より受批判候者、自分之非儀を亡失仕、遺恨を含、御支配違に罷在候へ者勝手次第雜言抔申散し、自御郡方に茂風俗押及、以之外御縮方に相障り申儀に御座候、御扶持人十村之儀者莫大之人家御指預け、其外田畠御收納方・諸役銀に至迄、過分之裁許被仰付置、百姓中不法之儀有之節者、人々手前に而手鎖縮或者指扣・追込等申付候様之儀も御座候而、町役人抔与者役前格外之御様子在之、非常御手當之儀粗承知、尤御扶持人者御徒小頭列、平十村者御徒列と申儀、前々より上使御通行等他國御用、都而應答仕來申候、大應院様御時代不時富山御通り之節、人馬御指支之儀も可有御座哉与、大白石村又太郎・東海老坂村五兵衛先達而被遣候砌、組柄之儀有之通相心得可申旨御覽之上、竹田金右衛門殿を以被仰出候段、御郡御奉行葭田六郎左衛門殿被仰渡候、

一、御領中之内私共往來仕候砌、驛々等に而人馬指出候節、近年は商人荷物同様に相心得、過分之駄賃を貪、且人足之儀者自郡に而者隨分指出候得共、他之御支配幷他郡之内にも難指

出抔申候而往來指支、無據人足賃過分指出相雇申樣之儀御座候。右等之趣に而御用方指支申儀、中古茂御達申上候由に而、享保十一年私共御用に付他郡等へ罷越候節、御扶持方・路銀等之儀被爲達御聽候上、御席幷御算用場より御書立御渡被下候趣茂御座候間、御定之駄賃を以人馬無滯指出候樣、驛々問屋等へ急度被仰渡可被下候。

一、私共先祖之者共へ帶刀可仕旨、明曆二年正月十三日中村久越殿奉を以被仰出候段、諸郡舊家柄之者之中所々に留御座候。其比町・在人氣質素故、一刀に而茂御締方隨分相辨じ申樣子に而、御辭退申上候由に御座候。當時之人氣に候はゞ、御郡方取締之爲に相成申儀速に御請可仕与奉存候。

一、富山樣御領分者、御扶持人役之者、當時本役二人並役一人罷在、孰茂前々より平生家名相名乘帶刀仕候。町人之內にも時々名字御免之者も御座候。私共他國懸引申御用筋に者、家名相名乘帶刀被仰付候へ共、平生方諸書物等村名に而一刀を帶し候故、他國應對等之砌甚不都合之儀御座候而赤面仕申儀に御座候。

一、山廻之儀者役前も輕、元祿・享保之比迄、折々被仰渡候趣御紙面等之內所々に相見、役儀被仰渡候砌、前々より御扶持人手前に而人柄相撰、請合紙面指出候上被仰付、御扶持人・十村人支配被仰付置候役向とは別段と奉存候。然處中古以來、御禮等新田裁許・山廻一集に

被仰付、人數多に相成、進退懸引繁雜に而失敬之儀も御座候。御目見被仰付候節、兩度に被仰付被下候はゞ、次第も宜相成可申、且名字帯刀之儀若一様御免被下候而者、役前下々に而相分り不申、御締方之爲不宜奉存候。人支配・役筋相分り候様被仰付可被下候。

一、私共類役、寳暦以來奢靡之者も御座候様被思召候御様子に而、折々御書立等を以、質素を相守怠惰之儀無之様可相心得旨被仰渡、其時々奉承知罷在申候。數多之御郡役人、其内了簡違之者茂有之、美服を好不相應之儀有御座間敷共難申上候得共、人々居宅を始衣類器財に至迄、昔年より持傳候品者何茂宜、近年家作拵仕候者共、先年与は似寄申程之事無御座、衣服 臥具様之物迄も先年者結構成物を拵置、御鷹野等之節度々御用に相立候様子に御座候。輓近者一統難澁仕、麁抹之品も容易に者出來兼申位に御座候處、是も畢竟小役人中等何角申立候故風聞と相成候哉奉存候。當時者人々難儀仕、倹を相守候様に心得候得共、近來難澁人多に相成候者、次第事多に而人數も多相抱、尤諸色先年与者高直至極に相成候故と奉存候。御治世に者商家之利運と相成、士農困窮者必然之道理与奉存候。若き者等之内に者、少々僭踰之儀茂可有御座哉、是も多分世上之侮りを耻申方に茂可有之とて、役前相立候様に被仰付被下候はゞ、人々心得も自然与宜相成可申与奉存候。

有之趣に而、私共平生方名字・帯刀御免之儀、享保以來寳暦・明和之末迄數度奉願候得共、御

詮議中今以御聞届無御座、別而當時者次第人氣六ヶ敷、迚も此儘に而者御郡方取縮之處無覺束、自然行屆兼申樣之儀有之候而者恐入申儀に御座候。名字帶刀之儀者、御家人末々御徒並・足輕中・御餌指、或者御算用中より納方に指出候下代、其外右に相記候御家中幷陪臣衆等、一季奉公に御郡方より罷出候者迄、名字帶刀仕、勿論他國私共役前に類仕候人々、割本・大庄屋何茂名字帶刀仕、鑓迄も爲持候由承り申候。既に私共類役今津甚右衛門抔茂右之振合に御座候所、私共に限り名字帶刀御免不被下、內外面目を失申候。何卒是以後平生方名字帶刀御免被下候はゞ、他國應對等之御不都合之儀茂有御座間敷、勿論於御郡々御縮方相立可申。本文私共曾而身分迄を申立候趣に而者無御座候。役品之儀者私ならず、此末不行屆樣之儀有之候而者、御奉公之筋目相立不申、旁名字帶刀之儀重而押立奉願上候間、何卒御許容被下、御示談之上夫々御達御聞屆被下候はゞ、重々御恩惠を相荷、難有仕合此上有御座間敷可奉存候。此節御取持被下候而者、難遂役業奉存、人々心痛仕候。何分御憐察被下候樣、幾重にも奉願上候、以上。

寛政十三年正月

澤村　源三郎

波佐谷村　文兵衛

三坂村　孫助

田井村　次郎吉
田中村　三右衛門
福富村　六郎右衛門
御所村　長次郎
酒見村　八三郎
南森下村　金右衛門
杉瀬村　少左衛門
鵜川村　喜三兵衛
本郷村　惣助
武部村　四郎太夫
纐日村　五兵衛
大澤村　内記
馬場村　八左衛門
折戸村　源助
戸出村　又右衛門

內島村 孫作
中田村 小四郎
和泉村 市右衛門
宮丸村 次左衛門
加納村 權六
五十里村 庄右衛門
沼保村 彥四郎
天正寺村 十次郎
新堀村 半三郎

二月三日。石川郡の十村等、百姓の名跡相續の手續に關する件を定む。

〔加州郡方舊記〕

一、百姓病死いたし、せがれ二十歲に不滿者は、身近き一門父方・母方兩方より後見人相立可申候。或は後家入聟いたし、親分後見に相願可申事。

一、百姓病死、せがれ等無之者は、身近一家之內名跡人貰請させ可申候。尤二十歲に不滿者は、前條之通後見人相立可申候。少高に而跡目望申者無之候得は、一門等之內へ寄せ高、或

少高は小高

は頭振に候得は入百姓に相願可申候事。

一、百姓病死、嫡子茂病死等に而、次三男跡式相續人に相立候はゞ、前條之通り願出可申事。

一、兄嫁添相成不申事。

一、七歳未滿之者家内之處に名前相記置、文言之末名前相省、印形等取可申事。

一、後家方親・兄弟之内名前書附に載せ可申事。

一、名跡人并親分後見人親・兄弟之内、書附に名前載せ可申事。

一、支配違之一門無謂跡式納得不仕候はゞ、御郡詮議之上名前印形指省き可申事。

一、從弟以上之一門并村役人連名、十村廻り口宛所に而書付取立可申事。

一、組附に而自身判元見屆候刻、從弟以上之一門相洩不申段、別紙に付役人印形取置可申候事。

一、男は印章を用ひ、女は書判爲致可申事。

一、右跡式に拘り候一門、他組・他郡之者に而も、村役人より爲申談、無構爲呼出判元見屆可申事。

右之趣以來年暮仕廻寄會之砌申渡置、早春書附取請候而、正月中に廻り口へ相談之上御改作所へ上可申事。

酉二月三日　石川郡寄會所

二月七日。足輕小頭にして勤續五十年以上に及ぶ者の切米を增給す。

〔政隣記〕

二月七日、足輕小頭等五十ヶ年以上勤功之者江、御增米五俵被下候段々仰渡有之。

二月十四日。去年不作なるを以て、諸郡に夫食米の貸與を許す。

〔加州郡方舊記〕

夫食御貸米

一、二千六百石　能美郡

一、三千二百石　石川郡

一、二千二百石　河北郡

一、三千八百石　口郡

內百石追而割符方可申候。除置可申候。

一、二千百石　奥郡

一、四千石　礪波郡

外四百石五ヶ山

本文は能登奥郡に係る

一、二千六百石　射水郡

一、三千八百石　新川郡

〆二萬四千七百石

右今日夫食願方御聞届に御座候間、御禮廻り、明十五日朝五つ時三右衛門旅宿ニ而御越可被成候、以上

二月十四日

田井村次郎吉

田中村三右衛門

福富村六郎右衛門

相合谷村五郎左衛門等五人

[筒井觸留]

覺

一、二千百石　夫食御貸米

内

百十七石八斗四升　馬場組

六十三石九斗七升　走出元組

百三十八石三斗五升　大澤組
二百四十五石三斗　稻舟組
二百二十二石五斗　鈴屋組
二百五十七石三斗七升　折戸組
百九十五石一斗一升　飯田組
二百八十三石七升　宗玄組
二百六十五石九斗　鹿野組
二百二十二石四斗五升　鵜川組
八十八石八斗六升　中居組

〆

右去作一躰不思敷作躰に付、當出作夫食御貸米、段々詮議之上御願申上候所、前段之通被仰付難有仕合奉存候。就夫去秋不作御貸米被仰付候村々之分指省可申旨、當春嚴敷被仰渡候に付、拙子共より申上候は、成程舊冬結構に被仰付候得共、其村方之内に茂甚難作有之、暨地盤等茂惡敷、當時夫食必支と指支申儀に御座候間、一統に御貸渡米被下候樣奉願候得共、御聞屆無御座、村撰を以被仰付、無是非御請仕、組々割符前段之通に御座候。其餘は御聞屆無御

座候間、指省中村々及御面談申通に御座候。左樣御承知可被成候。且又前々之通身元宜敷者御指省、精誠御詮議之上御貸渡、幾重にも出作指支不申樣御取計、勿論御貸付之上百姓中人別借用帳御取立、早速爲御登可被成候。此狀先々御順達落着より、内記方江御返可被成候、以上。

酉二月十九日

筒井内記

伊藤八左衞門

上田源助

十村中宛所

二月廿三日。金澤に於いて改元の事ありしを告ぐ。

この改元は二月五日に行はれたるなり

〔政隣記〕

二月廿四日左之寫に御添紙面を以、例之通安房守殿御廻狀有之。

年號享和与改元之旨、當月十三日被仰出候條、可相觸由被仰出候段、從江戶表申來候間、被得其意、御組中江可有御觸候。且又御組之内裁許有之面々者、夫々相達候樣可有御申聞候、以上。

辛酉二月廿三日

奧村河内守

本多安房守殿

二月廿六日。能登の諸郡に道路を修理すべきことを命ず。

〔筒井觸留〕

往還道、常々請取候在々より致修理、損不申樣可仕、打捨置及大破候はゞ村役人可爲越度旨、勿論道端を掘ひろげ、道せばめ候はゞ可爲不届旨、年々御郡廻之砌御定之趣申渡置候所、村々より以之外左右より掘取、道せばめ申ケ所有之、人馬行違も出來兼候程之ケ所有之、不届至極に候。急度可遂穿鑿筈に候得共、今度之儀者令猶豫候條、當春中領付之村々より急度加修理、道せばめ惡敷ケ所之分、手代指出置修理可申付候。別而笠師組・今江先組并飯田組・宗玄組境之邊道狹、將又折戸組之內抔、殊之外道惡敷ケ所も有之候條、夫々可申付候。稻舟組之內繩又道茂折々爲加修理可申候。且又是以後年々春中一兩日宛、村中罷出加修理候樣、急度可申渡候、以上。

酉二月廿六日　　　　神保縫殿右衛門

高田彌左衛門

能州四郡十村中

二月。藩侯の參覲又は歸國に供奉する諸士に、土產物を携ふる等のこと

を禁ず。

〔御觸留〕

前々より、江戸御供等に而罷越人々江餞別いたし、又は罷歸候節土產物、無用可仕旨被仰出申渡有之、其々年御歸國之節御供人并交代等に而罷歸候人々茂、土產物等致持參候茂堅無用いたし、假令身近親類縁者たり共、勿論右之沙汰におよひ申間敷候。御發駕・御歸城之節、衣類相改候族も有之躰に候得共、見苦儀は不被及御貪着候間、不及相改旨仰出、一統申渡候通に候。當御歸國御供等に而罷歸候人々茂、是迄之通相心得、嚴重相改可申候。

右之通可申渡旨被仰出候條、被得其意、組・支配之人々江も嚴重可申渡候。組等内裁許有之面々は、其支配江も可申渡旨可被申談候事。

酉　二　月

二月。諸郡十村組に奉公人座を設くべきことを命ず。

〔眞館留帳拔書〕

諸郡召仕候男女奉公人、是迄締方無之、其中に者流浪者抔不計召置、不慮之故障等時々出來、其外奉公人主江對猥之躰、風俗に至迄不埒之樣子も相聞候に付、今般格別詮議之趣有之候條、組々にて奉公人座相建、都而右奉公人座に而出生所相糺、其村役人迄り狀持參不致もい

は日漆不致、且又諸部より出奔人等糺方御縮茂相調候樣に、以來仕法相建、尤給米等に至迄
上中下三段に相極、其奉公人より少し宛座頭取人ゟ爲附屆候之樣に遂詮議、委曲帳面に仕立
早々夫々可指出候、以上。

酉　二　月

高山表五郎
杉山新平
神保縫殿右衛門
高田彌左衛門
長屋平馬
在小杉　脇田哲元郎
松崎左衛
在岩瀨　稻垣三左衛門
林彌四郎
小谷左平太
江上淸左衛門
毛利與衛

前田源六郎
遠所御用 木梨左衛
在大坂 山岸七郎兵衛
同 青木彌四郎
中村宅右衛門 役引

諸郡御扶持人・十村中

二月。百姓の高方仕法に關して定む。

「上田源助品々留帳」

高方御仕法

一、元祿年中凶年等に寄、不得止事取扱方多端に而、いつとなく規矩を失、切高區々に相成、其上虚に乘じ不埒之切高等仕、及混雜候に付、寛政十二年高方御仕法被仰付、以來御收納不足仕切高可仕方、五ヶ村役人立會其村ゟ爲讓可申。禮米他村之者餘慶指出候儀に候者、他村之者ゟ爲買取可申。切高證文、村役人幷五ヶ村役人奥書を加、買請人与幷切高人十村手前へ呼立、御收納不足相違無之候はゞ承屆、禮米爲相渡可申。右振に相違之分は高取揚、禮米相渡居候はゞ買人損分に候。右之通り切高取捌相濟候上、翌春品々帳之表、右切高讓替致付

札、改作奉行印章請置可申候。
一、他組より懸作所持之百姓切高可仕節、其組十村より年貢明之儀紙面十村方へ取立、切高取捌可申候。
一、寺社方居住之者子弟等、入百姓願仕高買受候はゞ、右入百姓相願候村之内江懸作小屋爲相建、作配爲致可申。懸作高村數有之候はゞ、最初之取高仕候村に而も一ヶ所假小屋爲懸、手作爲仕、其餘村方之高は卸し作に仕候而も指支不申。入百姓与申名而已にて、懸作小屋も懸不申者には、右所持之高讓替爲致可申候。讓替も不仕、作小屋も懸不申、高に應じ人馬等も召仕不申者は、高取揚可申候。且又右様小屋懸之上、高番代等爲相立申間敷候。高番代を相立、此者より高を卸し候而は、請作之者往々衰微いたし候間、親作より直ぐ卸しに爲仕可申。若小作年貢相滯候はゞ、裁許十村へ申斷候上、致不足候小作者、妻子共奉公に而も爲致、給米并諸道具賣立させ、親作年貢米爲相濟可申候。
一、百姓死後年貢明之分、親類等村役人立會切高相願候はゞ、當納之儀は承屆可申事。
一、頭振・後家、入百姓之名を出取高仕、或は百姓入聟を取、別家可仕覺悟に而、別名を以致取高候分は、名与高与離れ候分は高取揚可申事。
一、百姓子弟等名前に致取高候分、別家爲仕可申。若別家不致内致病死候はゞ、名跡人相立、

別家爲仕、爲跡目立願出させ可申、親元ゟ寄高仕度旨相願、重々僉議之上格別に承届可申旨之事、

一、百姓後見中切高承届申間敷事、

一、寺社方俗縁を以高所持之分、切出候儀は、指支不申、指添高仕候儀は堅承届申間敷事、

一、質入高御停止、借銀方へ出入仕候高有之候はゞ、高取揚咎可申付事、

一、昔切高之儀、懸作・新開之外承届申間敷事、

一、百姓二・三男ゟ分高之儀、五十石以上之高持人分高爲仕、殘り高五十石より内に不相成樣可相心得。尤奥郡山方村、大高持稀に而、五十石より内に而も格別に承届可申旨、先年申渡置候、外御郡も山方少高所之儀は、品に寄僉議可仕、尤死後遺言等に而分高爲仕申間敷事、

一、人百姓之儀、其村人多に而高不足に候はゞ、爲相願申間敷事、

一、十村・新田裁許・山廻致取高候儀、元祿年中被仰渡之通りに而、御扶持人幷十村致取高候儀、或は切高仕候節、內證に相違取高・切高とも可仕旨之事、

一、穢多・藤內等人非之者高持來候分、今般御仕法に付、村方百姓ゟ買取、右人非之者高取

少高ハ小高

持爲仕中間敷旨之事。

一、名代を賴高持居申者有之候はゞ、前々條同樣高取返し可申旨之事。

一、切高之儀、成限其村之者に爲買取可申。禮米之儀、大躰近例切高之振合も可有之候間、禮米振合を以爲指出可申。他村之者過分禮米指出候儀に候はゞ、若切人与馴合、不埒之取組無之哉相糺可申。其村に何分望人無之時は、他村へ切出させ可申旨之事。

一、町方居住之高持人、兄弟等無之に付、一門之內養子相賴、作小屋を懸居候者致手作、其者へ讓り高相願度、勿論合力銀等請取不申儀に而、其村に而望人無之、村中納得に而相願候はゞ承屆可申。若右之內作小屋懸候儀相厭、暨其村ゟ高讓候儀も嫌ひ、他人を養子之形に仕成讓高相願候分、此分は村方納得之上に候とも、承屆不申筈。右之類得与相糺可申聞旨被仰渡候事。

一、前々條之內新開高・懸作高皆切高仕候儀不指支旨被仰渡候儀、居村持高有之人、或は本高致所持、其外に新開高致所持候者之儀に而、懸作高幷新開高而已所持仕候百姓は、懸作高・新開高たりとも、皆切高不仕樣重而被仰渡候事。

一、新開高作人抔と申名目に而、十村帳には一名出置、下に而致切高、作人相違之分有之候はゞ相改、尤品々帳付札印章請置可申旨之事。

一、是迄切高不願出、下百姓与申名目に而高持申者有之躰。右様之分相改、名爲出可申旨之事。

一、一村之内廉地高、品々帳之表肝煎等惣代に名前を出置、或は惣地与申分も有之、假に名を出置候分、申分之端に候間、是以後相改、右様惣代に名前等出申間敷。名高に付此後申分出來候はゞ、高取揚可申旨之事。

一、是以後切高有之節、町居住之者江取高爲仕申間敷候。

一、右之條々諸郡請書御取立、以來右品々御改後相違之分於有之は、高御取揚之旨被仰渡候事。

高方御仕法に付ヶ條書

一、無高所之者懸作高所持之分、作小屋等出家仕候に及不申旨之事。

一、切出し殘り高、二升高限に殘し置可申事。

一、頭振に而高持候分、出家、入百姓に相改可申事。

一、下百姓与申分、百姓面爲出可申事。

百姓面は百姓名歟

一、穢多・藤内所持之高取揚可申事。

一、寺號に而高持候分俗稱出可申事。

但、寺庵之内町居住に罷在候者は、高持居候村方へ作小屋を懸、出作仕候樣申付、町家高持人同事に取扱可申事。

一、富山御領之者、射水郡之內持高有之人御座候。此分町方之者高持同樣取扱可申旨之事。

〔司農典〕

高方之儀に付先達而委細帳面に相記相渡、其後諸郡より詮議之趣申聞、夫々承届置候。右之內無高所之者取高いたし置候分、都而懸作高与相記置候。元來懸作名目者、一村に而高致所持候百姓、外村に而致取高候を懸作与唱申儀、各承知之通候。既元祿年中寺社・町人等爲致取高度之旨、御扶持人申聞候節、役所詮議之趣は、寺社・町人等ゟ高爲持候儀者難承屆、寺社・町人等之子弟たりとも、其村ゟ入百姓に相成候得者、高爲取可申旨申渡候。然者無高所之者、孰之村へなりとも入百姓に不相成候得者、高取候儀不相成等。右之通無高所もの懸作与唱候而者、懸作名不正に候條、都而右之分何村入百姓与相改可申、其村ゟ引越作小屋懸候儀者、最前申渡候通、郡支配へは百姓同樣とも可申ものに付令用捨候。此段一統不相洩樣相心得可申候、以上。

二　月　　　　　　　　　　　　　　改作奉行

諸郡御扶持人・十村中

三月五日。金澤火除町に火災あり。

〔叢々雜曆〕

三月五日夕、火除町火事二百軒許り。

三月十三日。前田齊廣金澤を發して江戸に赴く。

〔政隣記〕

付札、御横目え

筑前守様御發駕御當日、一統布上下着用之事。

一、七十間御長屋御門外下馬・下乘之儀、平日は前々之通に候得共、御發駕御當日迄、松平屋敷右垣角に而下馬・下乘之事。

一、七十間御門御番人之外、金谷御殿幷玉泉院様丸等に役所有之面々罷出候節、御發駕御當日は七十間御長屋御門往來指留候條、何も金谷御門より罷出申筈に候事。

　但、御發駕後は指支不申候事。

右之通夫々可被申談候事。

　二月

別紙之通夫々可申談旨、前田織江殿御申聞候旨等、御横目廻状到來之由、同組筆頭・同役筆

頭より廻状有之。〔二月二日〕

〔政隣記〕

三月十三日筑前守様五時御供揃に而、四時過益御機嫌克御發駕、今夜今石動御泊之事。

右に付爲御祝詞、御用番内匠助殿御宅江參出。

但御日圖之通御旅行之處、御成に而戸田川舟留に付、浦和驛に一日御逗留、今月廿六日江戸御着府。

御成とは將軍のなり

〔筆のまに〳〵〕

三月十三日

一、今日筑前守様益御機嫌好金澤御發駕被遊。御供御家老津田玄蕃。御泊附左之通。

十三日	金澤	津幡御中休	今石動御泊
十四日	今石動		高岡御泊
十五日	高岡	東岩瀨御中休	魚津御泊
十六日	魚津	船見御中休	泊　御泊
十七日	泊	靑海御中休	能生御泊
十八日	能生	長濱御中休	高田御泊

豫定を變更し浦和に一日逗留となる

十九日	高田	關川御中休	牟禮御泊
二十日	牟禮	丹波島御中休	榊御泊
廿一日	榊	海野御中休	追分御泊
廿二日	追分	坂本御中休	板鼻御泊
廿三日	板鼻	本庄御中休	熊谷御泊
廿四日	熊谷	桶川御中休	浦和御泊
廿五日	浦和	蕨御中休	江戸

三月廿六日。前田齊廣江戸に着す。

〔齊廣樣御傳略等之内書拔〕

三月十三日金澤御發駕、同二十六日江戸表江御着府なり、上使等都而御先格之通なり。

三月廿九日。前田治脩就封の期を延ぶ。

〔政隣記〕

三月廿九日

相公樣御歸國御發駕、四月六日ニ被仰出置候處御延引。

四月五日。前田齊廣の江戸に着したる報金澤に達す。

〔筆のまに〳〵〕

四月五日

一、筑前守樣前月廿四日浦和御泊、翌廿五日江戸御着之筈之處、廿五日王子筋御成に付、同日浦和御逗留、廿六日御着被遊候之趣從相公樣被仰遣、廿五日同驛御逗留に而、廿六日午中刻江戸御着。同日中飛脚今五日到着、其段申來。

申來るは金澤へなり

四月十一日。前田治脩就封の暇を受け齊廣は出府を勞せらる。

〔政隣記〕

四月廿六日、去十四日江戸發之町飛脚來着、左之趣申來。

去十一日以上使御老中安藤對馬守殿、相公樣御國許江之御暇被仰出、御例之通白銀・御卷物御拜領。從大納言樣も以上使御老中水野出羽守殿被蒙上意、御卷物御拜領。從御臺樣も以御使御廣式番之頭中島伊豫守殿、御卷物御拜受。夫々御都合克相濟、筑前守樣にも就御參府に、以上使安藤對馬守殿被爲蒙上意候事。

〔三守御譜〕

筑前守樣御着府之上、四月十一日御兩殿樣へ御暇・御參府之上使、安藤對馬守一人にて被蒙

御遠。

四月十三日、前田治脩病むを以て就封辭見の爲登營し難きことを屆出づ。

〔三守御譜〕

四月十三日、御痛積氣にて御禮被仰付候ても御登城難被成旨、御用番被及御屆。

四月十五日。前田齊廣登營して出府の禮を行ふ。

〔三守御譜〕

四月十五日御登城、御禮被仰上。

〔續德川實紀〕

四月十五日、月なみの拜賀例の如し。松平筑前守齊廣・松平伊豫守治好・松平越中守定信・松平阿波守治昭・細川越中守治年・松平大膳大夫齊房はじめ、參覲廿五人。

四月十五日。年寄村井又兵衛、御先弓頭吉田彦兵衛等に命じて同僚と和解せしむ。

〔政隣記〕

自分は津田備中

四月十五日月次出仕四時頃相濟。且於御席自分・久能吉太夫に左之御覺書御用番又兵衛殿御

津田權平以下は御先筒頭及び御先弓頭

渡に付、同役一統ゟ可申談旨及御答候事。

津田權平　杉野善三郎　久能吉太夫　永原佐六郎
佐藤治兵衛　永原末左衛門　廣瀬武太夫　青木多門
山路忠左衛門　中村八郎兵衛　千田治右衛門　村杢右衛門
堀部五左衛門　本保六郎左衛門　吉田八郎太夫　水越八郎左衛門
茨木源五左衛門

吉田彦兵衛儀、各組足輕御褒美等被相願候節、不被及示談儀不能了簡与申聞、以來組用之儀申談間敷。左候得ば毎月各寄合は組用之外御用は無之儀に候間、以後寄合彦兵衛出座仕間敷旨申聞候一件に付、再三被及懸合候上、各不能存念候に付、以來御用之外申通間敷旨彦兵衛ゟ被申入候段、先達而以紙面被申聞、其後右一件懸合之始終も内分被申聞候。御褒美願等、是迄被及示談候儀は無之躰に候間、可爲是迄之通候。併新役之人々、古役ゟ示談抔は尤格別之事に候。寄合は組用之外御用は無之儀に候間出座仕間敷旨、彦兵衛より發端廻狀を以申達候段は、彦兵衛心得違にも相聞え候。何れにも同役不和に而は、品に寄御用不辨にも可相成儀に付、和順有之樣彦兵衛ゟ申談候。尤右之趣は御内聽にも相達置候條、可被得其意候。將又右躰同役心得違にも可至儀は、猶更打返、相互に助言等可有之儀勿論之事に候。以後尚又

心得も可有之候事。

〔政隣記〕

左之通吉田彦兵衛より廻狀等到來。

組足輕之内御褒美願方之儀に付、去々年及御懸合候趣御達申上置候處、私儀役引に付、別紙御覺書之通御用番又兵衛殿以御紙面被仰渡候趣、以廻狀得御意候。右被仰渡に付寄合罷出候。且又和順之儀も被仰渡候間、各樣思召次第相心得可申候、以上。

四月十五日　吉田彦兵衛

同役十三人連名樣

致承知、從是も可得御意候。別紙附廻申候。

追而御在江戸之御面々は、彼地ゟ申達候に付、名前相省申候。且又此廻狀御示談も可有御座候間、御順達御座候樣致度候、以上。

吉田彦兵衛

去々年同役中組足輕之内御褒美願之通被仰付候儀に付、被及懸合候趣有之。以來御用之外申通間敷之旨、同役一統申聞候一件に付、御手前よりも委曲以紙面被申聞、其後も尚又存寄之趣紙面等被指出候。右御褒美願同役何も不及示談段難被心得、依而以後組用之儀は御手前よ

りも被及示談間敷。左候得ば寄合は組用之外御用は無之儀に候間、罷出不被申段、御手前より發端被申達候由。御褒美願之儀同役一統申談候儀は、是迄も無之躰に候間、可爲是迄之通候。然し新役之人々、古役ゟ示談等は尤格別之事に候。組用之外寄合之御用無之旨被申聞候得共、元祿年中組足輕闕如有之時分は、割場足輕請取之組之人高相違無之樣可仕旨等、被仰出之趣有之候處、外より召抱候樣不被仰付而は指支候段、同役一統存寄之趣連名之紙面指出候。組用に而もヶ樣之類も可有之候得ば、前段願方不示合儀迄に拘り、寄合に不被罷出段被申達候儀は、御手前心得違にも相聞え候。何れにも同役不和に而は、品に寄御用之不辨にも可相成儀に候間、和順有之可然候。此段御內聽にも相達候上申談候。尤外同役ゟも右之趣申談候事。

〔政隣記〕

右に付左之通連名紙面指遣之候事。

組足輕之內御褒美願方之儀に付、去々年及御懸合候趣、御達申上置候處、別紙御覺書之通御用番又兵衛殿被仰渡候。右に付御自分樣ゟ茂、又兵衛殿より御渡之御覺書御廻狀御添爲御見、右被仰渡に付寄合御出座被成候。且又御和順之儀も、私共了簡次第御心得可被成段致承知候、御自分樣御心得違にも相聞え候段被仰渡、以來寄合にも御出座被成候儀に御座候間、

尤存寄之儀無之候條、可致御和順候。右之趣爲可得御意、連名を以如斯御座候、以上。

四月十七日　　　　津田より茨木迄連名　判

吉田彦兵衛樣

四月十七日。前田齊廣、徳川家齊の紅葉山參詣に豫參す。

〔政隣記〕

四月十七日紅葉山ゑ就御成に、筑前守樣御豫參之處、御番見習御供岩田源左衛門乘馬、下馬之上、向より牽來候車に驚駈出、若御年寄京極備前守殿式臺ゑ駈込、夫より書院ゑ駈入、於其所に仲間繩に蹴き轉び候處を捕得候而、馬は源左衛門家來ゑ被相渡候得共、內濟整兼、爲御挨拶御使被遣之候事。

但、源左衛門儀指扣伺候得共、不及其儀旨被仰出。

右江戸より申來候段承に付記之。

四月廿二日。前田利命の爲建につる幟の觀覽を許すことを告ぐ。

〔政隣記〕

裕次郎殿御幟、來月朔日より同五日迄土橋御門外相建候に付、甚右衛門坂御門內より御宮坂御門爲御用往來致行抜候人々、右御幟相建候內相扣可申事。

右之趣寄々可被申談候事。

四月十六日

右御城代河内守殿御渡之旨等、御横目廻狀有之。

〔政隣記〕

四月廿二日左之通被仰付。

御算用場奉行　人持組　大野木隼人

篠次郎殿御幟、土橋御門外堀端に相建候。來月朔日より五日迄、御家中幷町方男女拜見之儀可被申渡候。

但、男子は十五歲以下に候。都而拜見人、甚右衞門坂御門より御宮坂御門通り、西町口御門江出申等に候。

一、拜見人供之者、御門內江草履取一人召連可申候。

但、平士以上之男女、若黨一人召連候儀勝手次第之事。

右之通夫々可被申渡候事。

四月

右織田主稅殿御渡之旨等、御横目廻狀有之。

五月朔日。前田治脩明年八月までに退隠すへき豫定なることを告く。

〔内密御用留〕

一、先刻甲斐守殿御渡之別紙、爲御留相廻申候。御順達可被返下候、以上。

五月朔日　　青地七左衛門

同役　中様

一、相公様御退隠等之儀、御容子有之候に付暫御猶豫被成候段、先達而被仰聞置候通に候處、來戌八月迄之内御隠居御願、筑前守様江御家督御讓可被遊思召之旨、重而被仰出候に付、猶又拙者共より段々申上候趣も有之候得共、無御據御容子に付、彌右之通御内定に候。此段潜に可申聞旨被仰出候事。

〔内密御用留〕

一、此間御用番江御達之内密之紙面扣壹通相廻申候。御廻達可被返下候、以上。

五月十九日　　青地七左衛門

同役　中様

一、去春御退隠之御儀御内定之段潜に被仰出、其節乍恐私共愚存之趣各様迄御達申、被達御聽候處、御意之趣御演述に而奉承知、御前江も被爲召、御直にも段々被仰出、此上可申上様

も無御座、無是非奉畏罷在候。然處右思召立暫御猶豫被爲在候段、舊冬御内密被仰出候段御演述に而、誠活出候樣難有奉存罷在候處、今般御退隱之御儀、來戌年七八月迄之内に御内定被爲在候旨。依而各樣よりも段々被仰上候へ共、無御據御儀共被爲在、彌御内定之趣潛に被御申聞被成候樣被仰出候段被仰聞、何も十方に暮奉迷惑至極候。右御退隱之御儀は、疾より江戸表等に而風聞仕候躰、暨去冬松平伊豆守殿ゟ被爲入御内談被爲在候御首尾合、且又當春御發駕御延引之御儀に付而も、色々風說仕候躰に相聞申候。元來去春御内定之御儀、公邊向御首尾合御宜被爲在、暫御猶豫之御儀に候得者、せめて來年御參勤被遊、來々亥年御歸國被遊、翌子年御參勤之上御退隱御願被遊候樣之御儀にも御座候者、御首尾合も御宜、將又御家中一統難有可奉存候。去冬御猶豫被爲在候思召に而、今年又思召立候而は、乍恐何とやらん思召御輕々敷樣に若御外聞も御座候而は、不御爲儀与奉存候。御前無御據御趣意之御儀は、乍恐いかゞ被爲在候哉不奉存候得共、各樣は勿論、私式迄茂御内定之趣奉承知候而は、誠に歎息仕儀に御座候。是迄各樣種々御深慮を被盡、被仰上候上之御儀与は奉存候得共、今般重而御内定被仰出候より、去春御内定之御儀被仰出候与は、品も違可申哉与奉存候。此度之儀は幾重にも各樣御請不被仰上候儀御本意与奉存候。乍恐私共にも何分御請難申上程に奉存候之間、强而御願被出・候樣仕度奉存候。私式迄も御指加被下候而成共、急度被仰上候御了

箇御座候様、何分御勘辨可被下候。且又當時之世柄四民共及難澁、御上にも彌増に御逼迫之御時節、右思召立之御物入莫大之御儀、左候へば自ら四民御憐愍之御救等之御沙汰被爲成間敷哉、左様御座候へば彌増に及難澁候而は、御國政にも差拘り申儀、此所も各様には尤御勘辨可有御座候得共、右御外聞之所、且四民難澁之儀は誠に不御爲第一之儀、御退隱之御趣意無御據御儀には可有御座候へ共、私共には右二ヶ條之所甚不容易御儀与奉存候に付、各様より達而被仰上、何分今暫御猶豫被爲在候御儀、御願被成下候様に与奉存候に付、存念之趣御達申候事。

五　月　　　御馬廻組頭

五月五日。金澤城二ノ丸の石垣を修理するを以て、附近の往來を禁ずべきことを告ぐ。

〔政隣記〕

五月五日、端午爲御祝詞、例月出仕之面々登城如例。

二之御丸御居間先柵下御石垣御普請就被仰付候、御數奇屋々敷・唐御門幷松坂御門往來、當月十日より指留候條、此段夫々可被申談候事。

右御城代大炊殿被仰聞候旨等、御横目廻狀如例出。

五月十日。能登の諸郡に令し、本願寺の使僧を款待し又は寄進・參詣をなすを制止す。

〔筒井觸留〕

先頃已來本願寺爲使僧、越中高岡海照寺儀能州寺庵相廻り、御書致披露候に付、村々男女多く令參詣、晝泊所において萬事馳走之筋等有之躰相聞候。村方之内取持人等可有之候間、右之族一圓有之間敷候。都而寄進之筋者一圓不相成筈に候。殊に野業之時節致參詣間敷旨、一統可申渡候。彼是爲御締、追付足輕指出候、以上。

酉五月十日　高田彌左衛門

神保縫殿右衛門

鳳至・珠洲兩郡十村中

五月廿八日。町會所より諸士に貸附したる銀子の返納方法を改定す。

〔政隣記〕

五月廿八日

町會所調達銀一作貸附銀、

同　三ヶ年賦貸附銀。

同　五ヶ年賦貸附銀。

同　十ヶ年賦貸附銀。

同　諸方預銀貳拾ヶ年賦等を以貸附銀。

同　妙立寺祠堂銀貳拾ヶ年賦貸附銀。

〆六口

右去る丑年より去申六月迄貸附銀六口之分打込、去申十二月迄之利足幷滯利足銀等元銀に壹匁三分宛之利足に候得共、是以後百目に付一匁宛之利足を加へ、年賦當り百目に三石宛之圖りを以、遠所米幾年藏給拂切手幷證文一紙に相改、尤頭加奥書取立置、當年より毎歳七月五日切可有返納候。五日過候得ば、右切手賣拂迄指引候。且又貳拾ヶ年賦迄借用之分は、取立方利足等是迄之通に候。證文調方等之儀は、町會所江聞合之事。

但、御切米之分は、頭加奥書證文取立候。毎歳三月中返納之事。

一、加入格段銀貸附　　一、今石動信用銀貸附

一、御所務銀貸附

右三口、去未年より去申之年迄元利不取立候分、當年より致二ヶ年繰に、去未七月返濟當り

元利、當七月五日切取立候間、前々之通定之加利足、毎歳限月返納之事。
但、御切米之分も右之振合に而、毎歳三月返納之事。併二ヶ年繰之外、是迄返納方滞之分は、元利此度一集に取立可申事。

町會所より御家中侍中江貸附銀、今般僉議之上別紙仕法を以取立申候に付、拙者共より直に夫々可申談旨、御用番大炊殿江相達候處、御聞届被成候段被仰渡候間御承知被成、證文調方等之儀は町會所聞合有之、御組・御支配幷御組等之内裁許有之面々は、其支配へも右之趣不相洩候樣御申談可被成候、尤御同役御傳達、先々御順達、落着より御返候樣致度御座候、以上

酉五月　富永右近右衛門
井上井之助

樣

追而御身當り御借用之分も、本文之通御心得可被成候、以上。

五月。能登惣持寺の財務困難なるを以て一ヶ年を限り領内の勸化を許す。

〔筒井觸留〕

付札、御算用場奉行江

能州惣持寺近年就難儀、三ヶ年之間御領國中相對勸化被相願候に付、各江先達而遂詮議候處一ヶ年承屆、當町をはじめ、百姓地之外勸化相廻、御郡方之分從公儀諸國勸化御免之節之振を以、御上より御取替御渡可被成旨、且又御郡地之内に而も無高所之分者、志次第之施物御郡奉行取立可指出旨等詮議之趣、紙面被指出候。右詮議之通承屆、寺社奉行江申渡候條可被得其意候事。

酉　五　月

能州惣持寺御領國中相對勸化之儀に付、先達而夫々相觸置候。然所先達而相達候御覺書文面之內、浦方無高所有無之分ちも無之辨兼候に付、其段相達候處、重而別紙被相調御渡に付、相越之候條、可被得其意候。被取立候上達方之儀、先達而相觸候通に候、以上。

六　月　八　日　　　　御　算　用　場

杉　山　新　平殿　　高　山　表　五　郎殿
神保縫殿右衛門殿　　高　田　彌　左　衛　門殿
長　屋　平　馬殿　　稲　垣　三　左　衛　門殿
松　崎　左　兵　衛殿

六月十三日、前田治脩、今秋まで滯府すべき願意の許されたることを告

ぐ。

〔政隣記〕

今月十三日、於江戸左之通津田玄蕃殿御申聞に付、御小將頭高田新左衛門より演述之事。

御持病之御疝癪等に而、當秋迄御滯府御保養被遊度旨、御用番戶田采女正殿江御願書被指出候處、昨十二日夕御願之通被仰渡候。此段爲承知申達候。頭分江も可被申談候。

右之趣に付、御道中方先御用無之候間、夫々可申談旨奥村左京殿被仰聞候間、夫々可申談旨、諸頭江御道中奉行高田新左衛門・永原佐六郎より廻狀出之。

六月十六日。前田齊廣初めて嘉祥の登營を行ふ。

〔齊廣様御傳略等之內書拔〕

六月十六日初て嘉祥に御出仕有之なり。

六月廿二日。十村等の公事場に提出する書類の宛所記載方を定む。

〔上田舊記〕

公事場御用之儀に付、十村共より指出候公事場江相達候書附等文面之內、對公事場江候儀有之節は、以來公事場御奉行所与相調可申旨に付、今度御用番御覺書御渡、加州御郡奉行江可

申談旨被仰渡、則申談候。依而為承知申達候、以上、

六月廿二日　　御算用場

長屋平馬殿

加州御郡之者變死故障等有之、御扶持人等より指出候書附に、公事場之名目御公事場与為相調可申旨、右場より申來、加州御郡奉行高山表五郎等へ申來候得ども、御之文字難為相調旨懸合に相成、右御郡奉行より御用番御年寄衆江相達置候處、以來は公事場御奉行所与為相調可申旨、今般御用番御覺書を以被仰渡候段、別紙之通御算用場より申來候條、得其意、以來公事場之名目相調候節、先右之通公事場御奉行所与調可指出候、以上、

酉六月廿二日　　長屋平馬

礪波・射水兩御郡御扶持人・十村中

他諸郡皆同一なるべし

六月廿四日。石川郡宮腰の漁夫等、同町奉行玉井主馬の家に至り騒擾す。

〔政隣記〕

六月廿四日朝、宮腰町奉行玉井主馬宅三社左十人町江、宮腰之猟師共等五・六百人計未明より罷越及騒動、依之御使番・御横目等右宅江罷越、是趣意者大野境猟場争論願方之一件与云々、御使番津田權五郎、右主馬直に宮腰江罷越、兩人より彼是申宥、其比歸与云々、

六月晦日は發喪の日なり

〔菅原直養覺書〕

一、六月廿四日朝より宮腰之者大勢相催、凡千人許金澤ゟ參り、宮腰町奉行玉井主馬方へ參り、獵場之儀に付大野之者与爭論之儀に付彼是之儀あり。主馬儀は其日宮腰ゟ參り候儀有之。何茂つゐかけ居候處を無構宮腰ゟ參り、町役人等呼出詮議いたし、彼是与申越、其上御横目・御使番等も右群集に付見廻り、彼是助言にも及候歟、八半時過各宮腰ゟ引入る也。主馬捌方不十分儀之沙汰也。

六月廿九日。昨今兩日天德院に於いて前田齊敬の七回忌法會を營む。

〔御觸留〕

御横目ゟ

觀樹院樣御七回忌御法事、來月廿八日・廿九日於天德院御執行就被仰付候、頭分以上之面々勝手次第拜禮被仰付候條、廿八日・廿九日罷出拜禮可仕事。

　但、長袴着用可致候。

一、觀樹院樣御附相勉候平士之人々、願次第拜禮被仰付候條、來月廿九日拜禮罷出可申候事。

右之趣被得其意、夫々不相洩樣可被申談候事。

［政隣記］

六月廿八日、今明日於天徳院觀樹院様御七回忌御法會御執行有之。都而寛政九年同斷に付畧記す。但自分拜禮、今廿八日卯刻階上横疊三疊目に而仕候事。

七月四日。十村等が改作奉行の諸郡に出張する前後にその邸を訪問するを禁ず。

［筒井舊記］

今日御改作所御用番様より被仰渡候者、都而諸郡へ御奉行衆御出被成候砌、御出立以前或者御歸着後、爲御機嫌伺御屋敷江御人々御越之儀、必有之間敷候に候。畢竟右様之趣に心を止候而者、御用多之節指支も可有之哉に候間、必御越被成間敷旨呉々被仰渡候。

右之趣私より諸郡江申談候様被仰渡候に付、爲御承知如此に御座候、以上。

七月四日　　田中村　三右衛門

諸郡御請番中様

尚々本文之趣、此以前も被仰渡候得共、今以御越被成候御面々も有之様子に而、重而被仰渡候趣に相聞候間、間違不申様御心得可被成候、以上。

七月十一日。割場支配の足輕・小者に貸與したる銀子返納延期の請を卻く。

〔政隣記〕

付札、割場奉行ゟ

各支配足輕・小者ゟ去暮御貸渡銀、當春一時返上可仕處、一統難澁之旨に而數度願之趣紙面被指出候。右は當春御切米等受取次第、頭・支配人より取立上納之趣に申渡置候儀に候得ば、才覺等に拘り候譯は一圓無之筈に候。當春御切米等相渡候節取立不申段、小頭幷小者裁許共手前被相糺候處、奉迷惑至極罷在候旨先達而紙面にも調被指出候。左候得ば第一右小頭共等心得等闕故、申渡置候返上之期月如斯及遲々候段、不埒之至に候條、右小頭等其節主付候者共急度咎可被申付候。外支配足輕・小者之內、期月全取立致返上候者共有之候得ば、各支配に限り返上方品付候儀は、一統ゟ相障り難承屆候條、先達而申渡置候通可被相心得候事。

七月

御借米は借上米の意

御步並之內には足輕小頭よりも小祿之者も有之候得共、御借米も被仰付候。足輕・小者等は左樣之儀も無之、且近年於江戶每月被下銀一旦被指止候分も、依願最前之通被下候得ば、御步並之者と違ひ難澁申立も無之筈に候處、去暮は不調達之躰に付、格別之趣を以御貸渡有之

儀に候得は、申渡置候通速々返上可仕處、彼是申立、是迄及延引候儀は有之間敷儀。各にもヶ様之所了簡も可有之儀与存候。此段も爲心得申聞候事。

右御用番安房守殿御渡に付、諸小頭共割場江呼出申渡有之。且左之趣御達申候處、同月十一日平馬左之通御覺書を以、重而安房守殿被仰渡。

付札、割場奉行江

足輕・小者共暮御貸銀返上方等之儀に付、覺書を以申渡候處、主附之者被申付儀は、右御貸銀方主付与申者も無之、足輕は小頭共、小者は裁許人共、面々裁許切に取曖候事故、一統咎等申付候事は御用向も指支、御縮方も相立不申候間、以來之儀急度可申渡哉。且返上方は先達而以紙面被申聞候通、來春迄に追々被致上納度旨、委曲以紙面被申聞候。小頭共等江以來之儀急度可申渡置候。扨又上納延引之儀は難承屆候條、小頭共は急度上納被申渡、平足輕等之儀も才覺を以急速致上納候樣可申渡候事。

七月十一日

七月十八日。徳川家齊使者を遣はして前田治脩の病を訪はしむ。

〔三守御譜〕

七月十八日、公御氣色爲御尋上使、御奏者番水野左近將監を以て、公方樣・大納言樣より御

懇之被蒙上意。思召掛も無御座雖有御仕合被思召候段、於御國八月朔日御弘あり。

七月廿二日。十村以下年頭以外に郡奉行等の私宅を訪問するを禁ず。

〔筒井觸留〕

御扶持人幷十村等、是迄拙者共宅々江、暑寒・年頭其外御郡々より氣分見舞にも罷越候儀有之候次第、彼是御用多之內、右自分勤等に相廻り候而者、おのづから御用も行屆兼申躰に候。依之以來年頭之儀詰合之分相勤可申候。其外一圓相勤候儀無用に候。遠所之人々罷歸候節も、役所において其段申聞有之儀に候間、別に相勤申に不及候。勿論御用有之節者、不依晝夜罷越可申候。此段一統無間違相心得可申候。且手代・番代共も右之振に相心得候樣可申渡候、以上。

七月廿二日　　江上清左衛門

毛利與兵衛

御扶持人・十村・新田裁許・山廻中

江上清左衛門等は能登奥郡の郡奉行

七月廿六日。諸士の借用したる町會所銀は、本年限り返納を要せざることを告ぐ。

〔政隣記〕

七月廿六日、前記五月廿八日に有之町奉行富永右近右衛門・井上井之助廻狀之通に候處、今般上納御用捨に付、今年取立不申候條、戌年收納拂切手等指出次第、今年分一作藏解可相渡旨等、今日富永等重而廻狀有之。

七月、家中諸士難澁するを以て上納銀の一部を緩くすることを告ぐ。

〔政隣記〕

七月五日、左之別紙御用番安房守殿御渡之旨等、定番頭御用番江守平馬より例文之廻狀有之。

付札、定番頭江

御家中之人々勝手難澁に付、御救等之儀頭・支配人より段々願之趣有之、無據相聞え候得共、當時御運方御逼迫至極に而、如何共可被仰付樣無之候。依之役・出銀之外、當年分上納之內別紙書立之通御用捨被成候條、何分にも取續方之儀、專要相心得候樣可申渡旨被仰出候事。

右之趣被得其意、組・支配之人々江可被申渡候。組等之內裁許有之面々者、其支配江も相達候樣可被申談候事。

右之通一統可被申談候事。

酉七月

覺

一、會所銀

一、産物銀

但、右二口利足銀迄上納、元銀都而御用捨之事。

一、諸方御土藏上納を初、今年分上納御用捨之事。

一、當三月上納相濟候分者、來年御用捨之事。以上。

〔政隣記〕

御家中之人々勝手難澁に付、御次銀今年年賦當り元銀幷利足共不及取立、上納御用捨被仰付候旨被仰出候條、右之通御心得、今年當り上納元利共、末ゟ繰御取立可有之候。且御切米之分は、來三月上納御用捨に候。此段夫々御申談可有之候、以上。

辛酉七月

不破五郎兵衛

玉川七兵衛

村杢右衛門

横山引馬

林　彌　四　郎殿
山岸七郎兵衛殿
江上清左衛門殿
前田源　六　郎殿
中村宅左衛門殿

右林彌四郎等より同役筆頭迄廻狀有之候旨廻狀有之、
御家中之人々勝手難澁に付、塁堂銀今年年賦當り元銀上納御用捨被仰出候條、利足迄取立可申候、元銀は末江繰可取立旨等、不破五郎兵衛等五人より申談候旨、會所奉行半田惣左衛門・伴七兵衛より、右同斷筆頭江迄廻狀有之。

七月。村肝煎の任免に關する取扱を改定す。

〔筒井觸留〕
諸郡共是迄見立肝煎等願方一樣に可有之所、區々に相成居候間、猶更私共詮議仕、一樣に相成候樣被仰渡候に付、詮議之趣左に申上候。
一、何村によらず、是迄肝煎相勤來候所、病身或者不屆之趣等御座候而役儀御指除に相成、

代り肝煎之儀村方に而人柄撰、兩願等に相成、了簡區々に付肝煎願納得致延引候分、是迄其御郡々御扶持人幷十村中相談所において、人柄相撰見付肝煎申渡候節、最初小紙を以人柄等之樣子奉窺、御聞届を請、其上に本紙相調可指上儀に候。右最初御窺之小紙に者、御扶持人迄連名に仕指上可申儀与奉存候。勿論本紙に者十村惣連名に而、都而是迄之通可仕与奉存候。

一、肝煎不屆之趣等有之、役儀御指除に可相成者之儀、其御郡々御扶持人及示談、御達申上、御聞屆之上、役儀指除可申儀に候。最初者御扶持人一統江及示談候得共、御達紙面に者組付十村書付に、廻口迄連名に而、指上可申儀与奉存候。

一、肝煎病死等仕、小村抔に而肝煎可相勤者無御座候に付、隣村何村肝煎を寄肝煎に願指出候儀者、一統相談之上、最初御窺不申上、願書付指上可申儀与奉存候。

但、村々より人撰之上肝煎相願候而も、前條之通小村抔に而御用に難相立者、且又外可相勤人柄も無之時者、隣村寄肝煎相願、或は見付肝煎相願可申与奉存候。願方之儀者前ヶ條之通可仕与奉存候。

一、役儀全相勤來、及老年役儀相勤兼候に付、役儀相斷候者之忰、曁是迄肝煎役相勤不申者之忰に而も、御用可相勤慥成者に而、村方より茂代り肝煎に相願申節者、紙面之内に肝煎願文段書入、尤肝煎願之儀に御座候間、一統及示談、願書付に者廻り口迄連名に而御達申上、

一、大村或者格別事多成村方、是迄肝煎一人に候得共、村方納得之上改而兩人に相願申儀茂御座候。左樣之節者猶更人柄等得与相糺、尤御扶持人江及示談、最初小紙を以御達申上、御聞届を請、夫より本紙を以奉願儀与奉存候。且是迄最初御達紙面に者、御扶持人連名に而指上可申儀与奉存候。

附り、扶持米之儀は當分に仕可申儀与奉存候。

一、村方納得に而代り肝煎相願候分は、是迄之通直に本紙指上可申儀与奉存候。

右肝煎願方之儀、私共詮議之趣書上申候間、以來右之通可被仰付候哉奉窺候、以上。

酉七月

内島村　孫　作
田井村　次郎吉
田中村　三右衛門
福留村　六郎右衛門
御所村　長次郎
酒見村　八三郎
南森下村　金右衛門

御改作御奉行所

御付札に

本文令披見候。以來書面之通相心得可申候。此寫諸郡ゑ相廻、本文之通相心得、區々に無之樣締寄に可申談候事。

改作奉行

八月朔日。金澤に於いて諸士に、前田治脩の德川家齊より起居を問はれたることを告ぐ。

〔政隣記〕

八月朔日月次登城之處、御弘之趣有之段、御用番山城守殿被仰聞候由、御横目中演述。四時此例之通柳之御間列居候處、御年寄衆等御列座に而、左之通山城守殿御演述。

相公樣御氣色爲御尋、去月十八日上使水野左近將監殿を以、被爲蒙御懇之上意、御存懸も無御座、難有御仕合思召候。此段可申聞旨御意に候。

右畢而、今日御弘に付御用番宅へ不及相勤に、座上より當座に恐悦申上候趣に而宜、且又今日出仕不能出人々ゑ傳達に茂不及旨之御覺書、山城守殿御渡之由、於横廊下披見候樣、御横目中申談有之、各披見之上退出。

八月十三日。前田治脩、保養の爲時々下屋敷に行歩することを許さる。

〔政隣記〕

八月十四日、左之通被仰出候旨被仰渡、小將頭高田新左衛門より諸頭へ演述之旨、江戸より申來。

御持病之御痞積、少々御滯方に候得共、御氣滯御眩暈御出來不出來御座候間、御快節は爲御保養、折々御下屋敷ゟ御行步に御越被成度旨御願書、御月番ゟ被指出候處、御願之通昨晚被仰渡候事。

八月十四日

八月二十日。能登口郡に、町人が家中諸士又は寺院の名を借りて傳馬を徵發するものなきやを調査せしむ。

〔眞館留帳拔書〕

侍中幷寺院之繪符を以、町人抔傳馬を取罷通候者等有之哉、驛々相調理可書出旨、先達申渡候得共、未書出候間、夫々繪符之寫等を以委敷可書出候。近くも酒井村永光寺儀、傳馬を以松村木付通候由相聞候。委敷相調理書出候樣、宿々可申渡候、以上。

酉八月廿日　　　　　　　　　神保縫殿右衛門

口郡十村中　　　　　　　　　高田彌左衛門

八月二十日。金澤に於いて暴風樹を折り家を倒す。

[政隣記]

八月廿日、夜前より大風雨、晝より風止雨天。于時今朝辰之上刻比狂風刻、御馬廻組七拾間御長屋御門御番人長谷川三九郎(領八百石、小立野寶圓寺向町)泊番跡に而通行之處、松大木枝等搖折、不明御門屋根ゟ落、夫より地ゟ落候節三九郎腰を摺り、着類裂破れ、刀・脇指之鞘等割れ砕け、尤身も大に損じ、鍔鐵に候處内之方ゟ曲り候由。三九郎身體者怪我無之候。持せ候槍者木に當り折れ、鎗持小者少々致怪我候。且御表小將津田和三郎門吹倒し、本家屋根板等不殘吹散し、土塀屋根も同斷。其外門吹倒等、右同斷之風損所數多有之。御表小將上坂久米助(領百五十石 御小人町)居宅致作事、頃日上棟に而壁はいまだ不附候處、今朝之風に而搖潰れに相成、蔕穴折れ候に付、作り直し不申而者難建直族に相成候由云々。

八月。能登諸郡に於ける山方の取締法を改定す。

[貞館留帳抜書]

能州四郡山方今般御改法就被仰付候御縮方申渡帳

能州四郡山方今般御改法就被仰付候、御縮方等左に書記申渡候。

一、山方御縮之儀、跡々より其方共組下江申渡置候通、御林之七木・唐竹、随分林立候様急度縮可申付候事。

一、往古より在來候御林山十五ヶ所、只今迄之通り嚴重御縮方爲相守可申候事。

一、今般相改候一村に一ヶ所之御林山堺筋堀切之內、頭木目廻尺相糺、小木之分一尺廻り迄員數相調理出來之分、員數調理がたく候得共、大數之處帳面に記置候分綿密に爲相守、尤鎌留に被仰付候條、雑木・下草・落枝等に至迄、堅くいろひ申儀御停止に候。尤山番人相立置、猥之儀無之樣嚴重に可申渡候事。

附り、大風雨後山廻共切々相廻、御縮方申付筈に候條、村役人立會夫々可遂見分候。自然風折・根返・立枯等有之候はゞ、前々之通早速相斷可申候。尤御用に付伐出候竹木有之候はゞ、山本之肝煎・組合頭召連罷出、山廻共申談伐渡、跡山縮等前々之通可申付候事。

一、御林山之內竹木盜伐候者於有之者、先規より御定之通急度可申付候事。

一、御林山之外、百姓稼山等に而七木伐取候節、其方共於手前極印入取捌筈に候。廻り一尺以上之材木には極印有之筈に候。自然無極印之材木取扱申者在之候得者、山廻り共より相咎、

無極印材木之分御拾ひに被仰付候御定に候條、末々百姓共ゟ不相洩樣嚴重可申渡候事。
一、山火事等都而稼山に變事有之候節は、其方共於手前遂詮議、委曲拙者共ゟ可申聞候。尤大變之節は拙者共出役いたし可遂見分候。於御林山に山火事等變事之儀有之候はゞ、前々之通山廻り共ゟも早速及案内、尤夫々相斷可申候事。
一、御藪之儀、是迄之通御縮方嚴重に可申付候。雪折・立枯し・ねこ付等致出來罷候はゞ、山廻共幷村役立會遂見分、前々之通相斷可申候。尤御藪番人相立置、御縮方嚴重に爲相守可申候。御藪之ねき幷垣等急度申付、竹の子出候時分、別而無作法爲致申間敷候事。
一、寺社境内之竹木之儀、是迄之通山廻指出爲伐渡、極印入申筈に候事。
右山方御縮之儀今般相改、御定書之趣を以申渡候條、得其意、肝煎等ゟ急度可申渡候。少しに而も猥之躰有之においては、見咎申樣山廻共ゟ申渡置、此上若不吟味に仕置候者、其方共可爲越度候、以上。

享和元年八月

蜂谷太郎左衛門

堀　與　八　郎

能州四郡十村中

九月三日　富山侯前田利謙卒去の報金澤に達す。

卒去は六月廿五日なるを八月廿六日發喪したるなり

〔御觸留〕

出雲守樣御氣色御滯候處、不被爲叶御療養、前月廿六日被成御卒去候旨、江戸表より申來候。依之諸殺生・普請・鳴物等、今三日より明後五日迄、日數三日遠慮之筈に候條、被得其意――

右之趣――

九月三日　　村井又兵衛

九月廿五日。金澤城石川御門附近の石垣を修理するを以て通行を禁ず。

〔政隣記〕

付札、御横目江

石川御門續御櫓下石垣孕所御普請有之候に付、右御櫓取除被仰付候間、來月二日より往來指留候條、御城中御番人且又就御用罷出候人々、河北御門より往來之筈に候。火事之節者石川御門往來不指支候。此段一統不相洩候樣可被申談候事。

九月廿五日

附、十月廿五日より往來不支段重而廻狀。

九月廿八日。百姓等の緣組及び養子願の手續に關し上申せしむ。

〔加州郡方舊記〕

一、各支配百姓幷頭振緣組・養子願之儀、十村共ゟ相達、聞屆を請候古格与存候。彌其趣に候哉、爲念申進候、以上。

九月廿八日　　御算用場

杉山新平殿

高山表五郎殿

右之通申來候に付、只今も古格之通取捌候旨申答置候。猶寫相越候條、可得其意候、以上。

九月廿九日　　杉山新平

高山表五郎

加州三郡十村中

〔筒井觸留〕

今御場御郡所より、別紙を以被仰渡候は、百姓幷頭振緣組・養子願之儀、彌此通に相心得居候哉之旨御尋に付、是迄は右之通に相守罷在候段相答置申候。若御組々之內心得違有之、同組之內は十村ゟ相願不申候而も指支不申樣に相心得居候而は、御法に違候間、以來は十村ゟ相達、聞屆之上緣組可仕筈に御座候。今般御尋之趣は樣子も可有之哉与被存候間、以來猶更嚴重に御糺置御尤に御座候、以上。

十一月八日　　筒井内記

十一組宛所

九月。百姓・町人の名字帯刀に關する幕府の令を傳ふ。

[改作所公邊觸]

松平伊豆守殿御渡候御書附寫一通相達候間、被得其意、答之儀者伊藤河内守方江可被申聞候、以上。

七月十九日　　大目付

松平加賀守殿　留守居中

大目付江

百姓・町人苗字相名乘幷帯刀いたし候儀者、所之領主・地頭より差免候儀は格別、用向等相達候とて、御料所者勿論他領之者共江、猥に苗字を名乘せ、帯刀いたさせ候儀者有之間敷事候間、堅可爲無用候。

右之通可被相觸候。

七月

付札、御算用場奉行江

百姓・町人苗字相名乘幷帶刀いたし候儀に付、從公儀相渡候御書付一結二通寫相達候條、可被得其意候事。

辛酉九月

九月。家老前田内匠助、江戸在府中に於て知行萬石の待遇を與へらる。

〔三守御譜〕

九月前田内匠助儀、今般江戸表へ出府相詰申處、當時之知行高にては乘物乘用指支候に付、本多玄蕃之助出府之節之振を以、壹萬石被下候趣に被仰渡あり。内匠助新知二千五百石に被召出也。玄蕃之助も同樣也。御横目觸。御家來乘用當時十人御免なり。此外御家老の内江戸詰中は、五十歳以下に候得者、三月駕籠とて、三月毎に誓詞ある也。五十歳以上に候得者見切駕籠とて、一度誓詞あれば夫にて重て不及御願。前段十人は年寄中、外に萬石以上今枝内記・津田・横山政五郎等い内二人御免なりと松田氏承合。然所天珠院樣御代寶曆三年御先例書に、上總介家老之内乘輿御免之者可爲十一人之旨、享保八年水野和泉守より被仰渡候とあり。此年五月十八日青山將監知行高壹萬六百石、年六十三。玉井市正知行高五千石遺置候。年六十一。右家來乘輿爲致度相願申候とある御書付に、家來乘用者御免十一人之處、是以後十三人御免候條、乘輿之儀可申渡候とあり。猶可考。是不慥といへ共記置。

九月。金澤町奉行、城内を通行する銀座小者に脇指を帶せしめんことを

出願す。

〔袖裏雑記〕

銀座召連候小者、御城中脇指を指候付、御門押に無之故、御番人より咎候後、町奉行より右脇指爲指度願出候得ども、不承届候處、重而願紙面出候節、左之紙面も添候而出之。御城方に出候紙面也。

右享和元年之事也。

銀座之儀從往古之振合御尋に付、傳承之趣等舊記相しらべ、左に申上候。

秀吉樣御時代、權現樣・高德院樣銀座御願被遊、關東へは後藤庄三郎、御國表江は後藤用助罷下り、其節於御當所矢田主計と申者、用助相司に被仰付、此兩人に而銀座相勤申候。尤關東・御國表にも新銀吹立通用御座候而、於御國表灰吹菊極印銀を以通用仕、其頃御分國之銀子、銀座買上吹立申に付、御次向御寄合所每度御用御座候而罷出。尤銀座之儀は、將軍家・御當家樣之外、餘國には不被爲成儀与承申候。其後用助・主計不調法有之、役儀御取揚御座候而、元和五年淺野屋次郎兵衛・金屋彥四郎兩人江銀座被爲仰付、右次郎兵衛・彥四郎方に而新銀吹立、墨判金裏判抔も仕、用助支配仕罷在候者に、後藤才次・後藤次右衛門と申者、次郎兵衛等支配被爲仰付、都而押方之儀、用助等相勤候通相替品無御座候。寬永四年稻葉左近樣・青木助之丞樣より御定書、銀座次郎兵衛等充所を以御渡、萬治三年對馬樣等より、銀座紙屋

武兵衛等充所に而、御條目・御定書御渡被遊、此分は銀座三人に被仰付置候。其後寛文九年天下一統之丁銀通用に相成、京都銀座共新丁銀持參仕、御當地銀座に而吹立候菊御極印銀、新丁銀与引替に相成、御國之吹座相止、右御極印は御土藏江納り候と奉存候。同十年京都銀座より銀見七人御召抱、尤銀座支配仕、遠所五ヶ所江も一人充遣置申候。是より銀見と申役名相立候与奉存候。右之通後藤用助・矢田主計より連續仕、只今に至り候ても於自宅役所相立、前々御渡之御定書を以萬端取捌來申候。將又元祿八年出雲守樣等より、銀座本吉屋彌左衛門等充所を以御渡之御條目・御定書之內、御土藏へ罷出候手代幷銀見等人數、御扶持銀、幷小者給銀等御書立御座候而、小者迄御城中幷御役所へ罷出候付、人柄等相撰、容易にも不召抱趣に御座候。尤銀見之者も、手代之趣に候へども、常々脇指帶、御城中に往來仕、能・越・小松等も右手代に而重御用爲相勤、旣に關東に而後藤家之者は、格別御取扱も達申躰に承申候、以上。

酉 九 月　　銀座 九郎兵衛

同 伊右衛門

十月五日。前田治脩、來春まで滯府するの請を許可せらる。

〔三守御譜〕

十月五日、御病未癒、來春まで邸に留在せられん事を願はせられ、許命あり。

十月十四日　明年より鳳至・珠洲二郡の政務を混同して取扱ふべきことを令す。

〔筒井觸留〕

鳳至郡・珠洲郡之儀、是迄諸郡相分り居候得共、兩郡同樣之取扱に候得者、相分り居候而者彼是萬端詮議方に指障候間、來年より兩郡打込混同に可申渡与遂詮議候。且又是迄用水打銀致中絶居候得共、是又改而混同に打銀可申渡候。則今度大澤村内記出府之節、荒增申入置候趣も有之、此節詮議も可有之候間、來春迄に兩樣共遂詮議可申聞候、以上。

酉十月十四日　　江上清左衛門
　　　　　　　　澤崎源太郎

奥郡御扶持人・十村中

十一月三日。藤内の平人に交際することを禁ず。

〔御郡典〕

御郡方に罷在候藤内共、平人に相交り猥成躰。別而近年藤内共之内致醫療者有之、仍而彌增

猥之躰粗相聞候。元來藤內、平人交候儀有之間鋪候處、甚不埒至極之爲躰に候。殊に藤內に馴合候族於有之に者、於公事場御吟味之上、御刑法之品も有之事に候條、以來心得違無之樣、嚴重一統江申渡、藤內共江者猶更急度可申渡候、以上。

酉十一月三日　高田彌左衛門
　　　　　　　神保縫殿右衛門

能州四郡十村中

十一月十四日。藩の收納する米穀の調製を完全ならしむべきことを令す。

〔眞館留帳拔書〕

御收納米納方之儀に付、近年申渡候趣有之候處、今以不心得之者も在之躰に相聞候得共、慥成儀も不相知候に付、猶追而可申渡儀も可有之候。且又去年御收納米當春大坂爲御登に相成候分、惣躰米粧惡敷、取分伏木・岩瀨兩浦積之內莫大損じ米に相成候分も在之、其外浦も右に準じ惡米有之候段、彼方より申越候趣在之候。損じ米に相成候儀は、不熟米或は水氣不乾米相納候ゆゑ前段之通に候。以來右樣之米於有之者、中入札相改、當地へ指越候樣彼方江申遣置候得共、此儀一旦船頭江相渡上之儀に候得者、全諸代官而已難遂詮議候。依而不依何時御米改役人相廻候儀も可有之候條、納方隨分入念に相心得候樣、早速代官々々江可被申渡候、

粧は性なるべし。

中入札は俵裝中に入れたる作人の名札

已上、

十一月十四日　　　御算用場

改作奉行中

御收納米納方之儀に付、御算用場より紙面相渡之候條、委曲可得其意候。近年別而御收納米納方之儀に付、御算用場より申渡之趣等嚴敷申渡置候處、今以心得違之者有之候に付、猶更嚴重可申渡候、已上、

十一月十四日　　　御用番　林　彌四郎

中村宅左衞門

諸郡代官中

十二月朔日、諸士難澁するを以て貸銀を許す。

〔政隣記〕

十二月朔日月次出仕例之通、

付札、定番頭へ

御家中一統難澁に付御救方之儀、諸頭中を初組・支配之人々、毎度願之趣有之候得共、各組承知之通御勝手御運方御難澁之上、不時成御物入も指續、大坂表莫大之御借金に而、江戸表御

仕送も出來兼申族に候。乍然段々願之趣達御聽候處、難澁之趣被聞召、尙更可遂僉議旨被仰出候に付、打返種々詮議之上、誠に御當用を打欠、別紙割合之通五百石以下之平士等江、格別之趣を以御貸渡被成候。右以上とても指支候人々も可有之候得共、御かね指支候故無是非右之通に候。猶更遂勘辨取續可申候。且又返上之儀者追而可申渡候。

右之趣被得其意、組・支配之人々江可被申渡候。組等之內裁許有之面々者、其支配江も相達候樣可被申談候事。

右之通一統可被申渡候事。

酉十二月

御知行之分　一、百分知六十九石迄都而百二十目當り。

一、同　七十石より九十九石迄百三十目當り。

一、同　百石より百四十九石迄百七十目當り。

一、同　百五十石より百九十九石迄二百目當り。

一、同　二百石より二百四十九石迄二百五十目當り。

一、同　二百五十石より二百九十九石迄三百目當り。

一、同　三百石より三百九十九石迄三百五十目當り。

一、同　四百石より五百石迄四百目當り。

御扶持方之分　一、十四人扶持以下都而百二十目當り。

一、十五人扶持より十九人扶持迄百三十目當り。

一、二十人扶持より二十九人扶持迄百七十目當り。

一、三十人扶持二百目。

御切米之分　一、御切米之分都而百二十目當り。但新番並御切米六十俵以上は百三十目。

一、足輕之分都而一人三十目。

一、坊主三十目。

一、小者二十目。

一、去暮御貸渡之分當時全返納無之人々江者、御貸渡無之候事。

右御貸付方之儀者、委曲御算用場奉行江申渡置候條、直に承合可申事。以上。

〔政隣記〕

十二月廿九日。明年菅公の薨後九百年に當るを以て、人持組前田橘三二を京都北野社に派遣すべきことを命ず。

十二月廿九日

聖廟九百回御忌、來年二月廿五日就御相當に、京都北野社江御代拜等之御使人持組前田橘三江被仰付。

但、二月七日發足与翌正月廿九日御用番山城殿被仰渡、則同日發足、且御獻納物は江戸より北野江被遣候に付、指副取嗳御歩并關右平太、從金澤取嗳爲御用御歩中西八郎、橘三同日發足之事。附、各三月二日金澤江歸。

十二月。御扶持人十村の悴及び組を有せざる御扶持人十村列の序位を定む。

御扶持人十村は御扶持人と平十村とにあらず

〔加州郡方舊記〕

御扶持人十村悴者平十村之次。

御扶持人十村列組持不申分、組持御扶持人並之次。

右列之儀御算用場相談之上、以後左之通取極候事。

享和元年十二月

列之儀に付別紙御覺書御改作所より御渡被成、以來右之通りに相心得候樣被仰渡候。猶更一統不相洩樣夫々可申談旨、御用番江上清左衛門樣より被仰渡候に付、則御覺書寫仕相廻申候間、御承知之上夫々御順達被成、從落着御返可被成候、以上。

戌正月十日　　　　　　田井村　次郎吉

御扶持人中様

戌は享和二年

是歳、麻疹流行す。

［螢日光］

一、麻疹のはやりしは、寶暦三年・安永四年・享和元年なり。此年の麻疹には、日本共に人多く死せり。寶暦・明和のはじめにはさにあらず。然れども餘毒殘り久しく、疱瘡の如し。

安永四年とあるは五年なるべし

享和二年

正月朔日。前田治脩病に依り滯府中なるを以て登營年頭の禮を缺く。

［三州御譜］

享和二壬戌年正月朔日御登城不被爲遊、御城への御使者組頭團多太夫相勤る。

明和七年正月泰雲公御病氣に付御願、明和六年九月不時御出府未御出勤無御座に付、右振合を以て御登城不被爲遊候事。

右之通御登城御斷に候得共、御內輪にては年寄中初年頭御禮被爲請。

正月二日。前田齊廣登營して年頭の禮を行ふ。

〔三壽御譜〕

享和二壬戌年正月二日兩御丸へ御登城。御例之通御時服等御頂戴あり。

日記。御嫡子樣には正月二日御登城なり。

正月四日。前田木工、母の服忌中學校に於いて聖像を拜したるを以て自分指扣を伺出づ。

〔政隣記〕

正月四日御射初・御打初・御乘初御規式御例之通。

學校御用寄合　前　田　木　工

今朝於學校、母之服未明之儀不心付、聖像え拜禮仕不念に付、先自分に指扣可罷在哉与、御用番山城殿え相伺候之處、不及其儀に旨御指圖等有之。

正月二十日。九十歲に達したるものに扶持を與ふる際、その趣旨を訓示すべきことを告ぐ。

〔國事雜抄〕

九十歲に罷成候者一人扶持充被下之候儀、元來重き被仰出を以被下、一旦之御助成迄に而無

之候間、子孫之者家内和順いたし、孝養を盡し、聊不致麁略、其身茂相つゝしみ可罷在儀、已來御扶持被下毎に得与可申入置儀に付、則被仰出書茂相添渡候間、其段肝煎より時々可申讀聞候事。

戌正月二十日

正月廿八日、種籾の池入は之を彼岸中日に於いてすべきことを命ず。

〔司農典〕

村々種籾之儀、先年者彼岸中日致池入候處、何頃より歟相後れ、多分結願に致池入候躰。尤氣候之程を考合、右之通成來候に而者可有之候得共、重々御詮議被成候所、種籾は必中日に致池入候儀宜趣に付、當年より相改、三州一統之仕來を止、彼岸中日に爲致池入可申段、諸郡御扶持人御呼出、御改作御奉行所より嚴重被仰渡候間、右之趣譯而御申含、御組々一統中日に致池入候樣可被成候、以上。

戌正月二十八日　東江村惣助等

口郡々裁許中名宛

正月、家中諸士の遠所收納米にして一石に滿たざるものに限り該地方に

て賣却することを許す。

〔政隣記〕

付札、定番頭江

御家中之人々遠所收納米、藏宿江申談所拂者難相成、於當所中買江賣拂候樣、明和七年一統申渡置候通に候。然處近年御家中拂米御召米被仰付、都而石詰を以御買上相成候に付、在殘少々之半米相拂候節、中買共容易に買受不申、拂方指支、且又飯米致不足遠所より爲取寄、在駄賃銀渡方に少々之半米相渡候節抔、所拂に不致而者甚指支候躰相聞え候。依之以來一石より內之半米致所拂に候儀承屆、藏宿共江も夫々申渡候樣、御算用場奉行等江申渡候　尤半米之外者所拂難相成趣、前段明和七年申渡置候通、尙更無違失樣可相心得候。有之趣被得其意、組・支配之人々江可被申渡候。組等之內裁許有之面々者、其支配江も相達候樣可被申談候事。

半米は端米なるべし

壬戌正月

正月。收納米皆濟以前に新米を賣出したる百姓の處罰を定む。

〔加藤氏日記〕

皆濟以前指紙無之新米賣不申樣、從前々御縮方御座候處、密々致賣買候儀も有之に付、實曆

年中以來ハ密々買置候儀相顯候上者、爲懲買人御咎之上、米御取揚被成候段、御場より一統御觸渡有之、相顯候へば共支配人へ被仰談御取揚被爲成、賣出候百姓之儀者手鎖縮を以村預等申渡候。然所右賣米之內、百姓作德米に相當り候分も御座候。右御收納米に相當り候分賣出置候得者、御收納不足に相成、出道無之に付、多分同苗等馳合候而表立未進に相成不申候得共、此等は別而不屆至極不輕儀に候間、作德米も無斷皆濟以前賣出候者与同樣、手鎖縮を以村預り等に仕、追而指宥候はゞ惣百姓之懲にも相成可申儀に候間、御收納米を賣拂候者於相顯者、急度詮議之上入牢申付、樣子により追而居村追出しにも可申付儀与奉存候。右之通申付候上は、買人手前より米御取立、私共へ御渡之上共裁許之十村へ相渡、右馳合候者共へ引渡、御收納爲立可申儀与奉存候。右之通今般詮議仕御達申候。尙又御詮議之上被仰渡候樣仕度奉存候、以上。

壬戌正月　　　　　改作奉行

御算用場

付札に

本文之趣意承屆候條、以來書面之通可被相心得候、以上。

御算用場

改作御奉行中

正月。先に改めたる高方の仕法を守らざるもの〻有無を調査せしむ。

〔司農典〕

高方累年及混雜候に付、近年夫々仕法相極、帳面相渡、其後追加帳も相渡、一統請書指出、諸郡共混雜之儀相糺、段々申聞候趣有之、其時々詮議之趣申渡置候。右仕法帳之通、諸郡共仕法相整候哉、其中僉議中に而未だ相決不申儀も有之哉に候條、一郡切綿密相調理、未詮義等に而仕法之通相改不申分有之候はゞ、委細一組切帳面に記、當三月中を限御扶持人より役所に指出可申候。且亦先達而嚴重申渡請書も受取置候儀に候得者、糺方不行屆等閑之族は有之間敷儀に候得共、拙者共相察候は下切高等混雜之儀少く、其上諸郡又は一郡之内も、村役人申聞之儘に而穿鑿相糺不申、表裏之形も有之樣風評も及承候。自然右躰之儀有之、追而於相顯に者、第一裁許之十村急度越度可申渡儀に候條、猶又綿密相調理、萬一不分明之儀有之候はゞ、穿而相糺、當三月中限可申聞候事。

戌正月　　改作奉行

諸郡御扶持人中・十村中

二月十二日。昨今兩日寶圓寺に於いて前田重熙の五十回忌法會を營む。

發表の四月十二日を繰上げたるなり

〔政隣記〕

二月十一日・十二日、於寶圓寺謙德院樣五十回御忌御法會御取越御執行、同役替々一人宛相詰。十一日は九半時相濟、十二日者八時頃相濟候事。

但御法事相濟候上、御法事御奉行席江頭分以上詰人追々出、無御滯相濟御恐悅申述。

二月廿五日。前田治脩北野天滿宮に太刀等を獻納す。

〔續漸得雜記〕

一、享和二年二月二十五日天滿宮九百回御忌に付、京都北野江相公樣より前々之通揃御太刀御獻納被遊に付、備前國清則一鞘御國に而御揃出來之上、前年十二月二十九日金澤より江戸表江被遣候。相公樣御覽之上、二月四日江戸表より東海道通り京都へ被遣候。且又金澤より江戸表へ指添には、割場附小頭一人・裁領足輕二人、持參人割場附小者等中故四十人に而罷越候。江戸表より京都迄指添人御步一人・足輕二人・小者八人・宿人足十六人、京都北野へ御名代前田橘三(二千五百石・人持組)・京都御買手會所奉行岡田又右衛門、京御屋敷より北野迄、御太刀・御獻納金銀入御長持七棹行列相立、跡より御用聞町人三十四人、布上下着用に而御供仕候。北野御先詰に而御太刀等之御指圖は、高辻大納言殿御父子御三人御裝束にて御詰被成候。前田橘三は烏帽子直垂にて馬上、先乘りは岡田又右衛門長袴にて馬上也。御獻納之品々左に記。

御太刀一腰、金御拵（備前國清則）、但御袋は唐にしき、御箱蠟色、內金平目梨子、上箱とも三重に入、其上篋入にしてしめ繩張、箱之蓋之裏に金の盛上にて左之通り有之。

享和二年歲次壬戌春二月二十五日奉納

參議正四位下行左近衞權中將兼加賀守菅原朝臣治脩

箱之蓋表に左之通有之。

備前國 清則

天滿宮寶劍 一 鞘

御獻納左之通。

相公様より
一、五　枚　判　金

御同人様より
一、三百枚　白　銀

筑前守様より
一、百　枚　同　斷

壽光院様より
一、五十枚　白　銀

正姫様より
一、五十枚　白　銀

松壽院様より
一、五十枚　同　斷

大聖寺飛驒守様より

一、五十枚　　白　銀

但、淡路守様御家督被遊候へ共、御服中に候故御獻納無之候事。

十一月廿五日、諸部の作毛見立及び引免の仕法に就いて告ぐ。

〔作毛見立方引免村僉議之趣御書立寫〕

今般見立并引免村等詮議之趣申渡覺

一、秋繩御請已來見立村撰等之儀、部々詮議方區々之趣有之躰相聞候に付、毎度申渡通、秋繩御請之儀は皆濟始終を可堅之儀に候得ば、諸部渙々之儀は無之筈、就中部により人氣六ヶ敷、秋繩御請等手間取、少之作難に茂一統相難候様に成來候儀は、畢竟御扶持人等取扱等閑に而、初發舊之氣味有之村々を嚴敷不遂穿鑿、不埒に致置候故、次第癖付致增長、一部之風俗に相成躰。元來一村之癖付は一部ゟ移、一部之癖付は餘部ゟ障申儀に而、甚不輕趣に候條、當時右躰之族有之部は、御扶持人初十村中常々能致熟談、速々癖付取直し、末々迄無蟠、誠實に相成候様專心懸出情可有之、且莫大之人民之取扱申儀に付、第一人氣を害ひ不申様、專一に可取扱儀は勿論に候得共、其事に深く泥、時に當り隔与可指押儀も押兼申様之部有之躰に相聞。是等は却而人氣を害ひ、癖付を致に茂相當り候。別而秋繩御請已來見立村撰、翌春に至り夫食方等之儀は、其筋を能致詮議、一旦人氣に障り候共、畢竟百姓無蟠實を盡候様、少

も無泥取扱等申儀肝要に候。

一、郡により秋縮之節少之作難を申立、見分強而相願候村々有之候はゞ、右之通初發嚴重に可相糺筈之處、其儀不行屆、御扶持人中茂輕々敷遂見分候族故、自少し作難をも押立申形に而難捨、聢指續候村々も難切捨、心外願付過分に相成申儀も有之躰、甚不穿鑿之至に候。且年々打續作難有之村々は、畢竟心立悪敷、修理等も不沙汰故与相聞候。ヶ樣之村々、裁許之人々深心を付、不埒之族於有之は急度可有穿鑿、品により役所ゟも可申聞候。是等之趣能詮議方行屆申郡々も兼而令承知候得共、今般改而一統ゟ申渡候條、猶更已來嚴重に相心得、輕々敷御扶持人中立毛見分等不仕、彌作難相違無之候はゞ、其旨組付十村書附を取、自分持組等之儀は同役相互に致吟味候上、其段飛脚を以委細拙者共ゟ申聞、指圖を請見分可有候。尤見分之上不相應之村々は、急度遂穿鑿可申儀。第一十村詮議行屆不申儀に候はゞ、其段拙者共ゟ無泥可申聞候。

一、秋縮御請之儀、以來彼岸以前より取懸可申、年により無據趣に而少遅相成候共、彼岸初日限に申渡、少も無由斷晝夜取頻詮議有之、士用入之日限り役所ゟ見立願可指出。勿論大躰之作難には見立難相願儀は、兼而承知之通に候條、精誠嚴敷粉骨を盡し、村撰可有詮議。御扶持人中於役前、右詮議方少も等閑有之候而は、不輕儀に候條、嚴重に相心得可申候。尤拙者

其出役見分之上、自然不相應之村於有之に、少も無用捨指除、品により御扶持人初急度相咎申儀可有之候。

一、見立之節、諸書物等を初無用之儀指省、詮議之上帳面に記相渡候條、御扶持人棄而可有會得候。

一、諸郡引免村之儀、累年及混雜、當時引免之名与實与致齟齬、見立之節支之儀も有之、役所之義方も如何は敷、其上しらべ方にも數日に而甚紛敷候條、是迄品々引免、毎年願次不仕分共打入、左之通地不足引免・地味劣引免兩樣に相改候間、夫々可有詮議候。

一、是迄檢地代年限不極引免等を初、品々引免有之村々、其引免之根元綿密に致吟味、變地等都而地不足之村々候はゞ、是迄申渡置候引免を今年より地不足引免一口に相願、猶又精誠引免相減候樣入念遂吟味、指詰に而相願可申候。尤其村々地不足之程豫見圖は可有之候得共、決而綿密無相違とは難申筈に候間、地不足村々之儀は今年より來々年春迄に、一郡切御扶持人致手分兩人宛罷出內檢地仕、爾与地不足之樣子相糺可申。地不足村之內にも川崩之村は、地不足之外變地に而作付出來不仕、暨地味劣之分茂可有之候。此分別株に申渡候而は却而紛敷候間、內檢地之節其所も得与致見分。暨引免何程之內、何程は地不足に而容易に難立歸、何程は變地に而當時作付出來不仕、何程は地味劣与相立、其步數委細書記、免に直何程

ケ極、來々年より引免高相改書分置。右地不足之外變地地味劣之分は、丑之年より七ヶ年に何程何程立歸殘而何程出不足等、急に難立歸分も引免に相願置可申候。此分は七ヶ年滿候上重而可遂詮議候。地不足迄に而變地無之村は、內檢地之上是又實に不足之分相改、地不足引免相願可申。兩樣共地不足之分は、容易に難立歸道理に候得共、是茂一涯には難相極、或は川緣等に候得ば、川形により存外ごみ留付寄等も出來可仕儀。ヶ樣之所も深く心を付、年を積立歸方可有詮議候。且前々より、高千石之村に五十石迄之變地は取揚不申格に候條、今般內檢地之上、右割合を以可有詮義、夫々しらべ相濟候上、來々年より一部二ヶ村（地不足村一ヶ村、變地村一ヶ）村、宛圍取を以村取相極、重而內檢地申渡、拙者共之內出役遂見分、自然先達而之圖りと餘程之相違有之候得ば、其一部之地不足引免詮議を加へ指引可申渡候。

一、地不足村之儀、村高過半餘茂不足歟、又は何ケ歟無據村之分は、重々遂僉義、彌永久立歸之手段無之村は檢地相願可申、高引之儀は不輕儀に付、容易に相願兼申儀に候得共、今般格別之趣を以檢地引高にも被仰付候條、其心得を以可有詮議候。

一、地不足引免之帳一冊、今年より相改置、來々年迄に內檢地相除候上指引致、其樣子別冊に委細に記指出可申候。

附り、地不足村內難澁等に而地味劣も有之村は、可成丈は二口に不相成樣に可遂詮議候。

乍去押而一口に仕候得ば趣意致相違候間、無據分は地味劣・引免与兩口相願可申、ヶ様之村は一人綿密に相糺可申事。

一、難澁に依而地味劣之村は、是又綿密に相糺、是迄品々引免有之内精誠相減、今年より地味劣三ヶ年季引免相願、右地味劣引免は當年より四ヶ年目必立歸方可遂詮議旨、村々江申渡置、毎秋立毛之様子得与致見分、爲試歩苅致得与相考置、四ヶ年目四ヶ年目に引免増減可有之、外無據新引免・増引免可申渡村も有之儀に候得ば、其節持替等之儀も綿密可有詮議候。尤拙者共隨分致出役、歩苅之儀も見屆申儀も可有之候。毎歳歩苅致候村數有米之様子等、委細其節に書出可申。元來是迄難澁或は地味劣与而已成來申儀に候得共、其實相糺不申候而は、其村成立之所江は至り不申、引免も年久敷相立候得ば、其村定免之様に相心得、引免申渡節合も無之躰に候條、年々穿而致吟味、其村地味劣之本は、何与歟故障有之人不足致、作修理等不行屆、年々地味劣に相成候歟、風俗悪敷惰農に候歟、又は子細有之難澁に相成、年々跡引に相成候歟、元年地性免相に引合不申歟、能其實を相考可申聞。根元相糺候上は、其品に依而成立之仕法可有之所に候。乍去諸郡數十ヶ村之儀に而、一時に仕法も成兼可申哉に候得共、何分遂僉議、寄々仕法も可有之候條、前段之通り深く心懸可有穿鑿候。

一、右地味劣引免之帳、今年一冊相改置、年季明遂僉議指引可申渡候。

一、諸郡川添或は潟邊村々等之內、荒地等を切廣げ漸々地廣に相成、當時餘程歩當多村、豐新開一村立に相成候內抔には、先年与は格別地味宜成候村も粗及承候。ヶ樣之村は、御扶持人初裁許之人々承知可有之にて候得ば、得と遂僉議、手上高等可爲仕候。是より村指致內檢地等申渡候而は、等閑にも相當り申儀甚如何敷候條、無油斷可有穿鑿。今般格別變地多難立歸村之儀は、引高にも可被仰付、爾与拙者共より御達申上候上は、右躰之村々格別之詮議無之而は、役所詮議之趣も難相分候條、樣子により押立檢地被仰付候樣御達可申村々も可有之儀に存候。

一、諸郡新開之儀、數年相立候得ば、必地味も宜く可相成、段々上免致、村一免下り迄には先可相成儀に候所、爾々上免不致候。依之今般詮議之上、左之通申渡候條、今年より十五ヶ年以前承屆候新開、十ヶ年以前承屆候新開、田開・畑開十村帳入幷十村帳不入、圖り免之分定免之分共不相渡、一部切當四月中帳面に記指出可申候。

一、十五ヶ年以前承屆置候分は、去年毛附高之通に而、免相右之通可申渡候。是迄定免に申渡置候分、本村一免下りに不行屆分は增免申渡、本村一免下りに可申渡候。其內川筋・潟緣等に而地元不定程之分も可有之候得共、今般一統右之通申渡、水込・汐込等に而作難有之候得ば、拙者共別段致出役遂見分、免切用捨可致候。

一、十ヶ年以前承屆候分者、右に准じ精誠上免可致、地元宜敷分は尤右之通村一免下り可申渡候。圖り免之分は右に准じ定免可申渡候。

一、畑開之分植物・地味等得与相糺、免相之儀は前段二ヶ條に准じ可申渡候。

但、右三ヶ條新開之內、格別地味惡敷候歟、或は用水入用年々過分に相懸り候歟、實に無據子細有之分は、重々詮議之上引免可申渡候。乍去格別之子細無之而は、取揚詮議に不及候事。

一、右新開檢地極高之分は跡ゟ付、未檢地無之分より御扶持人中致手分內檢地取懸り、今來年中相濟候樣心懸可申、右內檢地を以當分高相極置可申候。檢地極高之分も、指續內檢地致樣子可申出候。右內檢地大躰相濟候はゞ、來々年より一郡二・三ヶ所宛鬮を以ヶ所相極、重而內檢地申渡、拙者共出役見屆可申。最前打立与餘程之相違有之候得ば、一郡之內新開內檢地極高之分、右圖りを以指引之儀可加詮議候。且右之內勝手地味惡敷、又勝手宜敷ヶ所は、年々立毛致歩苅得与試可申、其內拙者共出役見屆申儀も可有之、彌地味惡敷分は減免可申渡候、宜敷分は增免も可申渡候。

一、右之通申渡候上、自然新開作人之內難請合旨申斷候はゞ、其新開取揚、外作人承立爲作可申候。

一、内検地仕様或は拔物等之儀、御定書之外時々御算用場より申渡候趣區々に相聞、會得違も可有之儀に付、今般詮議之上別冊之通り御算用場ゟ相達候處、右帳面之通可相心得旨被申談候條、可得其意候。

一、右新開方之儀書出候帳面等下しらべ主付、左之通申渡候條、帳面主付ゟ迄指出、詮議之趣は追而直に可承候。

加州三郡主附　加人

内嶋村　孫　作　　田中村　三右衛門　　波佐谷村　文兵衛

酒見村　八三郎

能州四郡主附　加人

本江村　惣　助　　馬場村　八右衛門　　武部村　四郎太夫

越中三郡主附　加人

戸出村　又右衛門　　田中村　小四郎　　五十里村　庄右衛門

天正寺村　十兵衛

右之人々郡々より指出候帳面得与相しらべ、洩々之儀等無之哉入念承糺、一郡宛相揃役所ゟ指出可申候。猶委細之儀は直に申含候。

右之通得其意、追而嚴重遂詮議可申聞候。別帳二冊之儀は御扶持人中可有披見候、以上。

享和二年二月

林彌四郎　江上淸左衛門
澤崎源太郎　前田源六郎
賀古橘江　伊藤三郎太夫
在大阪 山岸七郎兵衛　在大阪 木梨左兵衛
毛利與兵衛 煩　中村宅左衛門

諸郡御扶持人・十村中

外御添紙面寫

今般諸郡引免仕法之儀申渡通に候得共、是迄能州四郡之内種々取扱來候趣有之事故、譯而左之通申渡候。

一、四郡共近年一作引免等之村々、拙者共巨細見分詮議之上、去々年より三ヶ年季引免に申渡、來年より引免可相改旨申渡置候儀に候得ば、當年より本則之通地味劣之分三ヶ年季難相改候條、本則之通當年より綿密に相しらべ置、引免之儀は來年より相改可申候。近年格別加詮議申儀に候得共、來年相改候節は猶更格別遂詮議、引免相減候而帳面指出可申候。且又奥郡之儀は、變地引免仕法近年申渡相改候得共、村數多にも無之儀に候間、本則之通且又來年

より帳面相改可申候。

右之通可得其意候事。

二月廿五日　　　　　　　　改作奉行

能州四郡御扶持人・十村中

二月、御扶持人十村・平十村等の切高若しくは取高する場合の取扱方を示す。

［筒井觸留］

御扶持人幷十村等取高切高之格申渡帳

御扶持人・十村是迄切高幷取高仕候節、外百姓中切高等仕る振与者別段に相成候躰に候得共、御郡々之内一様に無之様子に付、以来御扶持人・十村等切高等、諸郡一致に相成、不締之儀無之様可致儀に候。仍而委細左に申渡候。

一、御扶持人・十村切高幷取高仕候節、前廉組付十村へ申談、切高仕候側者、其村々望人無之哉之旨、手代を以村肝煎江申入、望人有之候はゞ禮米代銀相極相渡可申候。併其村禮米銀等に手立ヶ間敷儀申談、禮銀下直に取請可申躰見聞に及候様之儀も有之候はゞ、懸作持望人間合、何れにも其時々相場も有之物に候間、相應之取扱可有之事に候。尤不相應之禮銀等不

決而は必ずの意

請取樣に、急度相心得可申、取高之儀茂大抵右に准じ、居百姓望人有之候はゞ、强而取高相望不申樣相心得、禮銀之儀も前後承合、相應に相極候而可致取高也。

一、御扶持人・十村切高證文之儀、何村に而懸作高之內手遠に而作配不手寄与歟、或者何村懸作致切高、何村に而致取高振替に致度旨等相調、組付十村江相渡可申候。

一、自分持組之內切高・取高仕候節、前廉廻り口御扶持人等江及相談、村方望人承合候趣等前條同樣に相心得、切高證文宛所廻り口御扶持人宛所に致、乃至百姓より致切高、御扶持人・十村取高人に候はゞ、取人者右之通廻り口宛所、切人者是迄之通十村廻り口宛所に而證文を出可申、勿論御扶持人等切高に而取人百姓に候共、百姓之分者都而十村廻り口宛所に相調可申候。

一、新田裁許・山廻切高・取高致候節、是迄村肝煎及五ヶ村組合肝煎江も申談候振も有之由に候得共、向後組付十村へ直に申聞、切高・取高共證文之儀者、十村廻り口宛所に致可申、村方望人等其村肝煎江申届聞合、禮銀等之儀前條同樣に相心得可申候。

一、御扶持人・十村等他郡等に而拜領高之儀者、決而切替可申、證文文而作配不手寄、或者切替高之趣に相調可申事。

右向後御扶持人・十村等切高・取高致候節、本文之通り無相違相心得、尤先達而申渡候通、兼

而内分拙者共江可申聞候事。

戌　二　月　　改作奉行

諸郡御扶持人十村中・新田裁許中・山廻中

二月、能登幕府領の百姓等に、加賀藩領の百姓より村御印を質物として金銀を貸附するを禁ず。

〔河合錄〕

御預所村々江、御私領村より村御印等質物に入、或は爲證據指入に致し、銀子致借用候者も有之躰に候。右者御法度之儀に候間、是以後村御印質物に取請申間敷候。萬一心得違に而取請候者有之候はゞ、急度咎申付、尤代銀可爲損分候間、已來は右申渡之通違失有之間敷候於村々小前之者共迄得与申聞、請印形可指出者也。

戌　二　月　　御預所役所

三月二日、前田治脩、隱居願を幕府に提出す。

〔政隣記〕

三月二日、於江戸御隱居御家督之御願書、武藤庄兵衛殿（御用御頼之御先手衆也。）を以被指出候處、御用番

戸田釆女正殿御受取。依之同日より筑前守様御居間書院江被遊御引移、御附之人々尤御舘江相詰勤仕、御附御歩小頭幷御歩中、裏御式臺御使者之間、右小頭等溜に渡り相詰、尤右等之趣達御聽候旨等云々。

三月二日。前田齊廣本鄕邸内北居宅より居間書院に移る。

〔三守御譜〕

三月二日晝以後、北の御居宅より御居間書院へ被爲移。

三月三日。前田齊廣登營の途火災に會す。

〔三守御譜〕

三月三日御登城之處、天澤寺前火事。右に付治脩公より被仰進、御途中足輕二十人、神田十郎左衛門（御附頭也。尤御平生御供外也。）火事裝束にて御先手乘、神田橋外にて何茂相殘。

日記。三月三日今朝六時過天澤寺前出火、五時過鎭火。此時筑前守様今朝御登城之處、右火事に付段々御詮議有之、享保□間合之儀も長瀨五郎左衛門（聞番）被申上、或は御病氣御斷等の趣も被申上候得共、何分御登城被遊度旨。御時刻移り候共、御三家様御登城前迄に御登城被遊候へば御宜との由にて、御途中見分抔にも被遣、五時前御居形御出、御途中は相公様より被仰進候旨にて、御先へ足輕二十人、神田十郎左衛門火事裝束にて御先を乘、神田

橋外にて何茂相殘御登城被遊、例之通於御白書院御禮、西丸へも御登城、四半時頃御歸殿被遊候とあり。

三月四日。年寄長甲斐守、前田治脩の將に致仕せんとするを以て江戸に向ひ出發す。

〔政隣記〕

三月四日長甲斐守殿發足、十五日江戸ゟ參着。前田織江殿六日發十七日着。今村内記殿・不破彦三殿七日發十八日着。前洩織田主税殿は前月六日發足。

右は今般御内定之御願書被指出候に付而之御用与云々。

三月九日。前田治脩致仕を許され齊廣家督を承く。

〔三壽御譜〕

三月八日、御用之儀御座候間、明九日五半時相公樣御名代前田信濃守殿并筑前守樣御登城被成候樣、老中連名之奉書到來。右に付前田信濃守殿へ明日御名代御登城之儀猶又御賴、且右御扣淡路守樣へ御賴之御使、聞番を以て被仰遣。

右に付御用番戸田釆女正、且御用御賴老中松平伊豆守へ、明日御名代并筑前守樣御登城、於

殿中御心添御頼、御兩殿樣よりの御使被遣。聞番御使也。則恒川七兵衞相勤る。

此日戸田釆女正殿より平井專阿彌へ爲心得被聞候旨にて、專阿彌より被申越候趣左に記す。

兩人一同に御入側へ出、披露、夫へ與御意を伺、御敷居の内へ一同に入、御意有之、御取合、又御意、御取合、又加賀守へ御意、取合、一同に引。

御座之間相濟、夫之御杉戸前にて老中謁候儀、御目付土屋長三郎申聞候とあり。

同九日、公御名代前田信濃守長福高宗幷筑前守樣齊廣公御登城被成候處、於御座之間御願之通御隱居、御年六十歳に被爲成、實は五十八歳なり。筑前守樣へ御家督被仰出、御懇之上意あり。

此時御名代、老・若御廻勤あり。御口上書日記に有之に付記。

松平加賀守名代

前田信濃守

私爲名代今日前田信濃守登城仕候處、於御座之間願之通隱居被仰付、同氏筑前守へ家督被仰出、御懇之蒙上意、重疊難有仕合奉存候。右御禮以名代申上候。

三月九日

若年寄衆へは御口上、拙者爲名代――以名代申進候。外替ることなし。略すとあり。

今日御願通御隠居、筑前守様御家督被仰出、此上は不相替筑前守様へ急度御奉公仕候様被仰出。

昨日依御奉書、今日相公様御名代前田信濃守殿、筑前守様御登城被成候處、於御座之間相公様御願之通御隠居、筑前守様御家督被仰出、段々御懇之被爲蒙上意、難有仕合被思召候。此段可申聞候。此上は不相替、筑前守様へ急度御奉公仕候様可申聞旨御意に候。

［三守御譜］

三月八日老中依奉書、翌九日治脩公御名代前田信濃守長禧高家并公御登城六つ八歩御出殿、御裝束御服紗小袖・橘麻御上下。被成候處、於御座之間治脩公御隠居御願之通被仰出、御家督公に被仰付候旨、御懇之被爲蒙上意、萬端御例通被爲濟。尤西丸へも御登城、御退出より老中・若年寄御廻勤被遊。此時西丸御退出より諏訪部久右衛門方へ御立寄、御休息被爲在、夫より老若御廻勤なり。公御年二十三歳。實寅年にて御二十一歳なり。

御廻勤に付り口上書。

松平筑前守

今日致登城候處、於御座之間同氏加賀守願之通隠居、私に家督被仰付、御懇之蒙上意、難有仕合奉存候。右御禮致參上候。若年寄衆へは、依之致伺公候。

三月九日

日記

前田信濃守殿より、御家督被仰出候節筑前守様御召服、幷是迄相公様御登城之節御召服等、内々御聞被成度旨、當六日申來候に付、御兩殿様へ相伺、左之通申遣す。

一、家督被仰出候節服、服紗小袖・上下。

一、加賀守殿は是迄登城之節、都て木麻上下被致着用候。此度筑前守殿は横麻上下着用之筈に御座候。

一、御座之間へ被罷出候節、帶劒に御座候。

今日は御座之間へ被爲召候。前々より御代々御登城は木麻上下之由横濱善左衛門（御用部屋）被申上候處、左候ては御進退被遊にくゝに付、やはり横麻上下被爲召候旨御意の由にて、則相公様へも其段善左衛門より被申上候旨にて、横麻御上下被爲召候御様子。

今日は御座之間御表へ出御と申にては無之、依て御老中御上りも例刻四時に候。併御前右之儀故、御登城御時刻は五半時与御奉書に申來候旨にて、五半時迄に御登城被遊候へは隨分御宜、朔望之御出仕より御遲く候て可然。五時前六つ八歩位御出殿にて隨分御宜旨、昨日善梓・幸固（御城坊主）被申聞、菊池氏より被申上候躰にて右之通。

五千石とあるは誤なり

三月九日、加賀國金澤の城主松平加賀守治脩、病により致仕し、養子筑前守齊廣に、所領百二萬五千石餘をつがしむ。

三月十一日。前田齊廣は筑前守の稱を加賀守に、治脩は加賀守を肥前守に改む。

〔三守御譜〕

三月十一日御名加賀守様と御改。

十一日朝御名替御願書、御用番戸田采女正殿へ、武藤庄兵衛殿御先手なりを以て御指出之處、治脩公御名替御願と御一集に被指出。同日夕戸田殿より聞番御呼立、菊池九右衛門罷出候處、御名替可爲御願之通旨之御付札物御渡。

〔三守御譜〕

三月十一日御名肥前守様と被爲改。

十一日朝、御名替御願書御用番戸田采女正殿へ武藤庄兵衛殿御先手也。を以て御指出之處、同日夕戸田殿より聞番御呼立にて、菊池九右衛門聞番なり罷越候處、御名替可爲御願之通旨之御付札物御渡。

御南殿様より御老中方四方・水野へ御禮之御使白分相勤ると、日記の表にあり。

三月十一日。諸士に命じて新たに先祖由緒一類附帳を提出せしむ。

〔御觸留〕

定番頭江

年寄中席江、御家中之人々先祖由緒一類附帳、先達而指出置候處、年月を經候間、此度増減等相改、當五日中迄に可差出候。帳面口張等に不及候。本組與力且御歩等之内、御知行被下候人々之分も、最前之通可指出候。當時舊宅之面々者、追而跡目被仰付候上可指出事。

右之趣組・支配有之面々江可被申談候事。

三月十一日　村井又兵衛

三月十八日。前田治脩の隱居と齊廣の家督相續とを許されたる報金澤に達す。

〔政隣記〕

三月十八日、昨日御用番左京殿依御廻文、今朝五半時より頭分以上登城。於表御式臺御帳に附、四半時頃柳之御間に一統列居之處、御年寄衆等御列座、左京殿左之通り御演述。畢而各退出。

相公様近年御持病之御疝癪等度々御指發、去夏以來御勝不被成、色々之遂御保養候得共御全快可被遊御様子無御座。依之御隱居、筑前守様江御家督御相續之儀御願被成候處、御老中方依御奉書、去九日相公様御名代前田信濃守殿幷筑前守様御登城被成候處、於御座之間相公様御願之通御隱居、筑前守様江御家督被仰出、段々御懇之被爲蒙上意候旨、前田內匠助等より以早飛脚申來候。先以恐悦之御事に候。此段先爲承知申達候。御祝詞被申上候儀者、追而委細之御様子被仰下候上可申達候事。

今日頭分以上江申聞候趣、當病等に而不罷出人々江者、筆頭又者向寄より傳達有之様、夫々可被申談候事。

三月十八日

右左京殿被仰聞候旨、御横目中申談之事。

三月十九日。自今諸伺書は凡て前田齊廣に宛て差出すべきことを命ず。

〔政隣記〕

付札、御横目江

是以後相公様御身分之儀、只今迄之通相心得、其外窺事等之儀、都而筑前守様江相窺可申旨被仰出候。

右御役人中ゟ夫々可被申談候事。

別紙之趣御役人中ゟ可申談旨、御用番左京殿被仰聞候條、御承知被成、御組・御支配之内諸役懸之人々ゟ、不相洩御申談可被成候、以上。

三月十九日　　御横目

御歩頭衆中

三月廿二日。金澤に於いて諸士に前田治脩の隱居と齊廣の家督相續を公示す。

〔政隣記〕

三月廿二日四半時過、左之通御廻状到來。但頭分以上一役等連名。

猶以病氣等に而難被罷出人々は、其段名之下に可被書記候、以上。

御意之趣可申聞候條、熨斗目・布上下着用、追付可有登城候、以上。

三月廿二日　　奥村左京

津田權平殿

右下書相調順達。追付九時頃登城、御式臺に而御帳に附、暮頃一統柳之御間に列居之處、六時過御年寄衆等御列座、左之通安房守殿（御用番左京殿依御風氣に也。）御演述。

當月八日御老中方依御奉書、翌九日相公樣御名代前田信濃守殿幷筑前守樣御登城被成候處、於御座之間相公樣御隱居御願之通被仰出、御家督筑前守樣江被仰付候旨、段々被爲蒙上意、重疊難有御仕合被思召候。右之趣何茂召寄可申聞旨、今般御使者林十左衞門を以、從御兩殿樣被仰下、御書茂被成下候。先以御願之通被仰出、目出度御儀恐悅之至に候事。

三月廿二日

右畢而於檜垣之御間、安房守殿左之通御演述。

但、一役切等に而追々御呼立、御横目中誘引之事。

相公樣御隱居、筑前守樣御家督被仰出候段、只今申達候通に候。此上は不相替筑前守樣江急度御奉公仕候樣可申聞旨、此度分而御意に候間可被得其意候。

右相濟、御横目を以左之通安房守殿被仰聞。

今日御弘之趣爲御祝詞、今日中年寄中・御家老中宅江可相勤候。且又幼少・當病等に而今日登城無之面々は、今般之御樣子向寄より傳達、爲御祝詞御用番宅江以使者可申越候。當番等に而難罷出人々、當廿五日相勤可申候。

一、今般之御樣子組・支配之人々江も申聞、爲御祝詞組頭等宅江罷出可申候。

右之趣夫々可被申談候事。

右之通候得共、一統退出夜五時前に至候に付、一統今夜は御用番左京殿御宅江迄相勤、其外は廿五日に廻勤之事。

一、右御使林十左衛門（御持筒頭兼御近習）儀、去十一日江戸發出、夜前津幡驛に止宿、今朝五時頃御城江參着御使勤之。土佐守殿江之御使は、同人宅江罷越勤之。（就當病に御請等都而名代大野木舍人。）翌廿三日休息、廿四日發出、大聖寺江之御使廿五日勤之、廿六日歸家、廿七日・廿八日頃發足歸府之筈。但、廿八日發出四月十日江戸着。

三月廿七日、金澤に於いて前田齊廣の加賀守、治脩の肥前守と改めたることを告ぐ。

〔政隣記〕

付札、御横目江

相公様御名肥前守様与御改、筑前守様御名加賀守様与御改被成候條、一統可被申談候事。

別紙之通夫々可申談旨、御用番左京殿被仰聞候條、御承知被成、御同役御傳達、御組・御支配御申談可被成候。且又御組等之内裁許有之面々者、其支配江も不相洩相達候様御申談可被成候、以上。

三月二十七日

廿四日に作るものあり

三月、領内の富豪に調達銀の上納を命ず。

調達銀を命ぜられたる個人の名と銀高は之を略す

〔郡方舊記〕

一、享和二壬戌年三月在・町へ御調達銀、左之人々御算用場へ御呼出、御郡奉行・御改作奉行御立會、御題紙を以被仰渡候事。

二十六貫目　能美郡
六百六十三貫目　石川郡　河北郡
二百八十九貫目　礪波郡
百七十貫目　射水郡
百五十貫目　新川郡
百五十二貫目　口郡
二百三十三貫目　奥郡
千六百六十貫目　町方
在・町合三千二百九十三貫目

右御調達銀、享和二年四月七歩、七月三歩、兩度に上納。同三亥年より元銀迄十ヶ年賦を以

御返被下候事。

〔御郡典〕

今般不得止事、在・町身元相應之者ゟ御調達銀之儀、年寄中被申談、當場よりも委曲申談候趣を以、各支配夫々被申渡候處、得其意、請書付指出候分、且右今般之御調達不被申渡者之內、身元可也之者も有之候得共、左樣之者ゟも割合爲指上候而者、人多に相成、其所々商方等手狹に相成、末々輕き者共渡世之指障りに相成、御郡方は是迄仕來候同苗等田畠養之屎物取替遣候儀等も指支、一統之可及迷惑に事に付、精誠被遂詮議、右等之者は被指省、當場より先達而申談候趣意之通、人少被申渡候旨等、委曲致承知候。先以大銀之處何れも速に請書指出候段、奇特之至りに候。然上者御當用可也可被辨候間、兼而申入置候通、此上重而追御調達等申達候儀無之候條、是迄仕來候商賣等彌出精手廣に致し、末々輕き者共すぎはひ不指支樣可相心得。御郡方に而者右屎物仕込并稼方手支無之樣、何分骨折相働尤に候。右之趣共自然心得違いたし、商方等致手廣候而者、追御調達可申付哉与相扣、末之者之指支に相成儀をも不顧貧之者於有之に者、急度咎之筋可有之候條、各支配所ゟ可被申渡候事。

右之趣可被得其意候、以上。

二　月　　　御算用場

右之通御算用場より申來候條、追而御調達も無之候。商方少も無泥致出精候樣、夫々一統へ可申渡候、以上。

神保縫殿右衛門

能州四郡十村中

今月は四月

三月。是月以後金澤に風邪大に流行す。

〔政隣記〕

三月中旬より今月中に懸風邪大に流行、尤輕重は有之候得共不煩者は一人も無之。今月朔日・二日觀音祭禮能茂、やう〳〵に不指支族。同日等諸祭禮、例年親族等招候家例も多分延引、今月下旬に令來客。右風邪江戸表も同樣之流行。依之長髮之儘、供人も大小名中等共應分限格別之減少を以登城等可致旨、御大目付衆より御觸有之。且江戸町裏店等に居住之貧人に藥代爲目御貸渡、此代金都合十萬兩餘与云々。將亦此度風邪者、日本中之流行に候得共、東北別而多く候由也。

〔三壽御譜〕

三月中旬御國表風邪流行する。

日記。三月十四・五日より御國表風邪流行、廿一日には年寄衆御家老衆にも風邪にて一人

も登城無之。河内守殿役引之處、押て登城見廻被申。執筆一人出申候由。珍敷事に候故記置。

四月十三日。前田齊廣家督相續を許されたることを謝する習禮を行ふ。

〔三守御譜〕

四月十三日御奏者番阿部播摩守殿・脇坂淡路守殿、御家督御禮之御習禮に御出。御前御對顏之上御習禮あり。相濟、長甲斐守殿等御禮あり。

四月十五日。前田齊廣登營して家督相續を許されたことを謝す。

〔三守御譜〕

四月朔日、御前御風氣に付今日御登城御斷。同九日御風氣御快、御用番へ御屆あり。御家督御禮四月朔日之御心取等之趣、御用御賴松平伊豆守殿へ三月十二日御內達あり。然所御風氣少々に候哉、四月十日、彌十五日御禮被仰上儀に相極る。

〔政隣記〕

四月十五日、於江戸御家督御禮被仰上候に付、御表向御勝手共御目見以上熨斗目・布上下、其外者服紗給・布上下着用。翌十六日者一統服紗給・布上下着用。但前々者、御當日より三ケ日布上下着用平詰に候得共、十七日御日柄に付右之通兩日之旨等、昨十四日御横目を以內匠

助殿等被仰聞。且今日頭分以上ゟ御弘之趣、於金澤二十五日御弘之趣与同断に付記畧。於御席内匠助殿御演述、畢而於竹之間御祝詞之御帳に附、夫より今日・翌十六日之内、在江戸年寄衆等六人之御小屋ゟ、爲御祝詞相勤候樣被仰聞候旨、御横目中申談之事。

同十五日、頭分以上於船之間に年寄衆等一席に而、御祝之御吸物・御酒・御肴一種被下之。給事御大小將、指引同御番頭・御横目、取持御表之物頭、且御近習頭を以御意有之候。將御歩並以上ゟも、御臺所邊に而御吸物・御酒被下之。

〔三守御譜〕

四月十五日、御家督御禮於御黑書院被仰上、御刀備前師光、代金廿枚。白銀・縐紗・綿・良馬を献ぜらる。献枚數量及熨斗鮑等の事先君の例の如し。御懇之上意、御自熨斗鮑御頂戴、御退座、御部屋へ被爲入、甲斐守等七人御目見被仰付。長甲斐守連愛・前田内匠助直養・津田玄蕃政本・不破彦三爲章・織田主税益方、献物等例の如し。今枝内記易直當病、前田織江道濟忌に依て登城なし。相濟、於御白書院縁頰御禮、老中方へ被謁。夫より西丸へ御登城、於御白書院御縁頰御禮、老中へ御謁。老中御指支に付、御奏者番へ御謁か。猶可考。御下り、老若御廻勤被遊。

此時治脩公御隱居之御禮、御名代前田信濃守殿を以被仰上。

〔續德川實紀〕

四月十五日、月次の拜賀例のごとし。中畧。松平加賀守齊廣襲封を謝して、備前師光の刀・馬

二疋・銀百枚・巻物二十、齊廣父肥前守治脩は致仕を謝し、太刀・銀三十枚・巻物五さゝげ見えたてまつる。

四月十五日。諸郡に課する打銀の額は、御扶持人十村等綿密に調査の上之が許可を求むべきことを告ぐ。

〔筒井觸留〕

諸郡打銀願方之儀、以來一郡切御扶持人一統致熟談、誠精無據分連名を以相願可申旨、先達而申渡置候。是迄願高之內、役所詮議之上相減承届候得共、右之通綿密に遂穿鑿、聊未熟之詮議於無之者、以來願之通承届可申候條、猶又其心得を以相願可申候。勿論如此申渡候上、詮議方不行屆趣有之候はゞ、御扶持人可爲越度候條、一統不相洩樣可相心得候、以上。

四月十五日　　林彌四郎

江上清左衛門

諸郡御扶持人中

右之通御改作所より御紙面出申に付、寫相廻申候。夫々御承知可被成候、以上。

四月二十三日　　馬場村　八左衛門（金澤より）

大澤村　內記樣

折戸村　源　助様
馬場村　喜右衛門殿

四月廿二日。諸郡村々に於いて徴集する萬雜の決算を明らかにし、村肝煎の屋前に公示すべきことを告ぐ。

〔筒井觸留〕

諸郡之內、近年次第に組萬造多く相懸り候組々有之躰に候。右に付小百姓等疑惑を起し、一統之人氣にも相障り申躰に候。勿論人々聊油斷等閑之族者有之間敷儀に候得共、近年度々承及候趣茂有之に付、段々相考候所、畢竟組々年々入用高等、爾与末々迄不致承知候に付疑惑も起り可申儀与存候條、來春より組餘荷決算之上、百石高に付何程懸り与申儀、爾与相記村々江相渡候而、肝煎家入口に張置、往來之者迄も見請候之樣爲致置可申候。右組々決算相濟候上、役所江も委曲書出可申候。不及申候得共、猶更以來嚴重遂詮議、少分たりとも萬造相減候樣可有詮議候、以上。

戌四月二十二日　　林　彌四郎
江上清左衛門

諸郡御扶持人・十村中

四月廿五日。金澤に於いて諸士に前田齊廣の家督相續を謝する爲に登營したる次第を告ぐ。

〔政隣記〕

四月二十五日、昨日依御廻文、今朝五時過頭分以上登城御帳に付、四時過一統柳之御間に列居之處、御年寄衆等御列座、御用番又兵衞殿左之通御演述。畢而御同間於横御廊下左之通披見、退出。

去十五日加賀守樣御家督之御禮可被仰上旨、御老中方御連名之御奉書、幷御家來七人御目見被仰付候間可被召連旨、御別紙前日到來。則御登城被成候處、於御黑書院御禮被仰上、御懇之上意、御手自御熨斗鮑御頂戴。其上甲斐守等御目見被仰付、忝御仕合被思召候。此段可申聞旨御意に候。將又相公樣御隱居之御禮、同日以御名代可被仰上旨、御老中等御連名之依御奉書、爲御名代前田信濃守殿御登城、御首尾能御禮被仰上候段も、甲斐守等より申來候事。

付札、御横目江

御家督御禮被仰上候爲御祝詞、今明日之内年寄中等宅江可相勤候。幼少・病氣等に而今日登城無之面々者、御弘之趣向寄より傳達、爲御祝詞御用番宅江以使者可申越候。此段可被申談

候事。

四月

四月廿八日、前田齊廣初めて月次登營を行ふ。

〔三守御譜〕

四月廿八日御登城。御服紗袷・御上下。御家督後初て月並於御書院御禮御着座有之。初てに付御先格之通兩丸へ御登城、御城御下りより直に老中方幷西丸老中水野出羽守へ爲御禮御廻勤、四半時御歸殿。

〔齊廣様御傳畧等之内書抜〕

四月廿八日より御出仕御禮席等御先規之如く改るなり。年始・佳節・八朔は御白書院、月並は御黒書院にて御三家の次なり。

五月五日、前田齊廣初めて佳節登營の禮を行ふ。

〔三守御譜〕

五月五日御登城、御長袴於御白書院御禮、御着座も被遊、御退出西丸へ御登城。御白書院御緣頬にて西丸老中水野出羽守へ御謁。尤當日御祝儀、幷今日御家督後初て五節句御登城に付、御先格之通於御白書院御禮被仰上候。御禮御引請被仰述、御退出、四半時頃御歸殿被遊候。

日記。今日御家督後初五節句故、於御白書院御禮被仰上に付、御老中方へ御禮、若年寄衆へ右に付御使。昨日相伺置、今日尤御先格之通於御白書院御禮に付、菊池氏暫後夫々被相勤。

五月十二日。昨今兩日寶圓寺に於いて前田重教の十七回忌法會を執行す。

〔政隣記〕

五月十一日・十二日於寶圓寺泰雲院樣十七回御忌御法事御執行。自分拜禮、前々之通御寺詰中に仕候事。

前田重教の忌辰は六月十二日なるを繰上げたるなり

五月二十日。能登口郡に一村一ヶ所の御林山を選定すべきことを告ぐ。

〔眞館留帳拔書〕

山方御仕法に付、一村に一ヶ所宛御林山相定候儀、拙者共於役所相撰候條、其方共檢成手代可罷出候。御林山ヶ所町間附等可致持參候。尤所口山廻足輕・半部山廻り共にも罷出候樣申渡候條、其手合山廻り共手前承合可罷出候、已上。

戊五月二十日　　蜂谷太郎左衛門

堀　與　八　郎

口郡十村中

半部は鹿島郡の長氏舊領たりし所

五月二十日。諸色の價格を米穀に準じて低廉にすべきことを命ず。

〔簡井觸留〕

當春以來米穀直段下直之方、豐大豆・麥等も當時下直に候處、諸色直段引合不申、高貴之躰に相聞え候。右等之品に預り候諸色者勿論、野菜物等に至候迄、惣而日用交易之品者米價に順可申筈之處、引合不申躰に候條、米價等に引合候之樣、夫々精誠可被申渡候、以上。

五月二十日　　　　御算用場

神保縫殿右衛門殿

高田彌左衛門殿

五月廿四日。大小將橫目大脇六郎左衛門等、供奉登營の際規律を紊すを以て處罰せらる。

〔三守御譜〕

五月廿四日、御大小將橫目大脇六郎左衛門役儀被指除、遠慮。御大小將中村兎毛御大小將被差除、組外へ被指加閉門。御步橫目塚本九左衛門指扣被仰付、御國へ罷歸候樣被仰出。是當十五日御登城御供之節不心得之趣有之に付て也。

日記。昨廿四日御横目大脇六郎左衛門、御大小將中村兎毛、左之御書立を以御咎被仰付。御歩横目も御咎御國へ御返。大脇・中村は昨夜五時頃頭申渡、兎毛今曉七時發足、大脇は今晝發足。右は兎毛當十五日、水戸樣御先拂躊躇くわんたいに付かたを押付候を、又立あがり候に付、頭を手か扇子かにてはり候處、其儘にいたし置候旨を、大脇等も隱し、言上も不行屆樣に沙汰。依て兎毛儀は其場をはづし候儀、甚御殘念に被思召候旨にて、殊之外御殘念之御樣子にて、兎角遠島と被仰出候へ共、甲斐守殿段々御詫被申上、一等御宥免之躰に沙汰仕候。何れにも士道をはづれ殘念成次第、初めは八筋邊にも色々申候由に候へ共、右被仰出御殘念之思召を奉恐察候ては、感服恐入、目之覺たるこゝちの躰に候事。

大脇六郎左衛門

右六郎左衛門儀、當十五日御登城御供罷出候に付、御締方之儀專一に可相心得處、等閑相心得、言上方等彼是不應思召候儀有之候に付、役儀被差除、遠慮被仰付候。

中村兎毛

右兎毛儀、當十五日御登城御供罷出候處、水戸樣御通行之節、御先拂之者に兩手を被捕押候段、於內外邊侍之身分心得茂可有之處、不心得至極沙汰之限被思召候。依て嚴敷御咎可被仰付候得共、御大赦之砌に付一等御宥免、御大小將組被指除、組外へ被指加、閉門被仰付候。

右之通可申渡旨被仰出候條、夫々被申渡、御國へ罷歸候樣に是又可申渡候、以上。

戌五月廿四日

御步頭原田氏へ被仰渡、御步橫目塚本九左衞門御書付

塚本九左衞門

右九左衞門儀、當十五日御登城之節御供に罷出候處、役向不心得之趣有之候に付、指扣被仰付、御國へ御返被成候條、罷歸、急度相愼罷在候樣可被申渡候事。

戌五月廿四日

御先代樣御登城、高畠木工御供頭にて御下乘に罷在候處、御三家樣御同道にて御下り被遊候處、御同道之事故無構御駕籠指出、御乘用所に居申候。然處御三家樣御徒中等御駕籠際へ參、御駕籠除候樣再往申聞、法外之申方も有之に付、木工刀之抔に手を懸候へば、御三家樣御供之者散候に付相濟申候。御歸殿之上被仰出候は、今日抔之仕方、甚がさつにて不宜候。外方には餘り無之事に候。向方より何とか申かけられ候ても、被仰譯も無之事に候。向後之儀心得候樣にと被仰出候處、奉畏候。併主人を見懸駕籠指出候事は格合御座候。公方樣之外御三家樣にても構申儀無之候。又は被仰譯無之旨被仰出候得共、此儀は急度被仰譯有之事に候、私儀切腹被仰付候へば宜儀、是程之被仰譯は有之間敷由申上候旨。其後何之被仰出も無

之と云。御表小將御供方留にあり。

五月廿五日。前田齊廣、登營の際に於ける供奉諸士の心得を諭す。

「御年譜」

御大小將御番頭
御大小將横目

一、御登城之節、下馬者不及申、其外御勤先等に而作法宜、急度可致蹲踞候。晴雨に依差ひ候儀、心得違之様に被思召候。是以後右之趣急度相心得可申事。

一、御登城之節、御三家様・御老中方等御登城之節、猶更急度致蹲踞可申候。御縮番人不催促様相心得可申候。右之趣夫々可申談旨被仰出候。

戊　五　月

一、昨日御咎被仰付候儀に付、御供方之者共猶更心得違無之様可相心得候。御三家様御通行之節、此方様御家に拘り、緩怠之儀無之筈に候間、前廉より蹲踞可仕事。

戊　五　月

右青木與右衛門を以被仰出。五月二十五日。

五月廿五日。前田齊廣當年就封の暇を賜はるべきことを豫告せらる。

〔三守御譜〕

五月廿六日、御國許へ御暇之儀當年被下にて可有之旨、昨晩御付札を以被仰渡に付、老中方幷西丸老中水野出羽守へ御廻勤あり。

五月廿八日。前田治脩、その子利命の成育したることを幕府に屆出づ。

〔三守御譜〕

五月廿八日、裕次郎殿(治脩公御子なり。)當戌御五歳(實御年御三歳)にて、御丈夫に被爲成候段、松平伊豆守へ御屆あり、

日記、今朝伊豆守殿へ御内談、御勝手へ之御使菊池氏被相勤。御表へ直に右御屆御使も被相勤、()淡路守様・飛驒守様へ。右に記候裕次郎殿御丈夫御屆之儀爲御知之御使、自分相勤る、

五月。前田齊廣使を京師に上りて家督相續の恩を謝す。

〔金龍公記史料〕

五月遣多賀直清京師。謝恩献物。

五月。織田主計頭、前田齊廣に利家所用の鎧を贈る。

金粉にては板金にての誤

［御年譜］

一、五月大納言様御召領之御胴、鐵炮疵三ヶ所、眞中に天滿宮と金粉に而書付、横に前田又左衛門利家薨に而有之由。高家織田主計頭殿御所持に付、被進度之由に付、御所望に而御到來之旨。 但織田殿御所持之御傳承無之由。

［又新齋日錄］

五枚竪すけ大きなる鋲にて、菊坐抔の飾も無之、たゞの鋲にて打付たるなり。鐵の厚さ一歩五・六厘もあるべし。正面の板尤厚し。松梅の模様有之、板次の左右の脇引の板は薄板通例の具足程の鐵にして二枚打合せてあり。二枚にて松梅の板より又薄し。さび色なり。聖廟の尊號は今様の書に非ず。何やら手づゝなるからびたる様な、文盲な様なもの也。松梅是又大の不細工にて、松梅と心を付るによつて松梅、梅の花も松の葉もあらこましき作り様也。下の大祖公の尊號は、たがねにて假令ば刀劍の銘の如くに付たり。丸き印は鐵丸の跡と見えたり、三ヶ所あり。聖號の下のあと尤きびしく、裏へ打通んずる勢ひ、裏まさに破裂せんとするの形見え、縱横にひゞり目あり。梅の下是に次、御右の脇又次之。御おし付は尋常の板にして薄し、同五枚也。わだかみ打延にして、是又黒塗の跡あり。裏黒塗。うけ張は如何有之哉不分。兩脇一寸五分通り黒塗の跡あり。さすればうけ張は無之か、胴のすそひねり返しな

し。惣体の形もつもりより短し。是はすそに三間計横にようらう物と見え、形もすそひろがりい様也。惣体の古び様中々今様の物にては無之、うるしこくその色つやも誠に二百何十年と云品と見ゆ。此品風与織田主計頭殿古土藏を改め被申候處、古鑓に古具足いくらも有之内に有之由。御名も御座候而慥成旨に存候間、御用ならば上可申由にて、此外にも籠手・すねあて抔も有之候得共、験なくて分り不申候由にて、彼家にも由緒も無之傳も無之由。織田源五郎有樂入道之家之由に候。不思議之事に御座候。少し隙明候付圖仕、あら〳〵申上候。

享和二壬戌年

五月。前田治脩に對する諸士の獻上物の例を定む。

〔政隣記〕

跡目幷新知等御役儀被仰付候而々、當時御省畧に而、加賀守様ゟ都而年頭之通獻上可仕候筈に付、相公様ゟ獻上物左之通。

加賀守様ゟ御省畧以前御太刀・銀馬代・紗綾三卷又は二卷獻上仕候分、相公様ゟ都而御太刀銀馬代獻上可仕候。

右之外加賀守様ゟ年頭之通御太刀銀馬代獻上仕候分、何御禮に而も相公様ゟ御肴代百疋・同鳥目百疋獻上仕候分は、何御禮に而も鳥目五十疋、同五十疋は同三十疋、同三十疋以下は都

而二十疋。右品々獻上物目錄相添可指上候事。

右獻上物於江戸表は勝尾半左衛門江相達、於此表は諸方御土藏江上納可仕候。獻上目錄は御奏者方より遂披露候筈に候條、此表之分は江戸表江指上可申候事。

一、婚禮之爲御禮獻上之御肴代は、加賀守樣江も御省畧中獻上無之候間、相公樣江も不及獻上物候事、以上。

壬戌五月

相公樣江爲年頭御祝儀獻上物、加賀守樣御同事に指上可申候。目錄は御奏者方より遂披露候間、此表之分は江戸表江指上可申候。御太刀代銀・御馬代銀・青銅代金銀は、此表諸方御土藏江上納可有之候。於江戸は勝尾半左衛門迄相達可申候事。

但、無息人よりは獻上物に不及候事。以上。

壬戌五月

附記

相公樣江年頭御祝儀暨跡目並新知等御役儀被仰付候節、於江戸表献上物之御太刀馬代銀等は、勝丸半左衛門迄相達候樣、先達而相觸候得共、重而僉議之趣有之、江戸表御進物所に致上納候筈に候條、被得其意、組・支配之面々江被申渡、組等之內裁許有之人々者、其支配江

茂相違候樣被申聞、尤同役中可有傳達候事。

右之趣可被得其意候、以上。

七月四日　　奥村左京

六月三日。前田齊廣の本年就封すべき報金澤に達す。

〔筆のまに／＼〕

六月三日

一、今曉前月廿六日之急便到着、翌日御用番より御書相坂勝左衞門持參、拜戴之。左之通。（但當服着用拜戴之）

猶以左之趣西尾隼人へも可被申聞候、以上。

手前儀、今年參勤年候得共、宰相殿近年所勞に而久々在府に付、其許仕置等申付度、可成儀候者當年御暇被下置候樣相願候處、昨廿五日松平伊豆守殿ゟ聞番被召呼、願之通當年御暇可被下旨、右願紙面御附札に而被仰渡、重願之筋早速被仰渡、忝次第候。此段爲可申聞如斯候、頭分以上ゟ茂可被申聞候、謹言。

五月廿六日　　少將御實名　御判

奥村河內守殿

本多安房守殿
前田大炊殿
村井又兵衛殿
奥村左京殿
横山山城殿
前田内匠助殿
今枝内記殿
津田玄蕃殿
前田圖書殿
不破彦三殿

此御書に付六日に御弘有之。

六月四日。能登七つ島の鳥糞を試みに肥料に供せしむ。

〔加州郡方舊記〕

一、能州名舟村沖に七つの嶋与申所有之、此嶋鷗多集申所に而、年々鷗之糞溜り土に成居候に付、田地養にも可相成哉爲試相用可申旨に而、大野浦迄百俵御取寄に付、組々割符いたし

作はか本の儘

進申候間、此手形を以大野若狹屋藤右衞門方迄取に向候樣可被成候。藤右衞門ゟ見合印鑑遣置申候間、左樣御心得可被成候。且又御仕立村之內、地淺に而土味縮申樣之時御撰、尤御仕立百姓作はか之內ゟ爲御入可被成候。元來水鳥之糞に候得者、熱尿に御座候間、にち早き土味之所者必不宜儀に御座候。淸水冷等之土地に用宜敷与申事に御座候間、此趣を以御考、村々御極追而御書出可被成候。御改作所ゟ御書上可申儀に御座候間、無御油斷御書出可被成候、以上。

戌六月四日　　內島村　孫作

田井村次郎吉樣等八人

六月六日。金澤に於いて諸士に前田齊廣の本年就封すべきことを告ぐ。

〔政隣記〕

六月六日、一昨日依御廻文、頭分以上登城御帳に付、柳之御間列居之處、御年寄衆等御列座、御用番安房守殿左之通御演述。

加賀守樣今年御參勤年に候得共、相公樣近年御所勞に而久々御在府に付、御國許御仕置等被仰付度儀に候得者、當七月御暇被下候樣御願被成候處、前月二十五日松平伊豆守殿ゟ聞番被召呼、御願之通御暇可被進旨、右御願紙面に御付札を以被仰渡、重き御願之筋早速被仰渡、

忝次第被思召候。此段何茂江可申聞旨、拙者共迄以御書被仰下候事。

右畢而於横廊下、例之通御横目中申談に而左之御覚書披見。

付札、御横目江

今日御弘之趣に付、爲御祝詞今日中御用番宅江可相勤候。幼少・病氣等に而今日登城無之人々者、同役又者向寄より傳達、爲御祝詞御用番宅江以使者可申越候。

右之趣夫々可被申談候事。

六月六日

六月七日。前田利命の成育を幕府に屆出でたりとの報金澤に達す。

〔筆のまに〳〵〕

六月七日

一、前月廿八日左之通御屆被成候旨、於江戸成瀬監物を以被仰出、其段翌廿九日之急便に、從甲斐守・織江申越。

豬次郎殿御儀、御虚弱に被成御座候付、御出生之儀御屆是迄不被成候處、此節御丈夫に被爲成に付、今日御用番松平伊豆守殿へ御屆書被指出候。御年者御五歳与御屆被成候。此段被仰聞候條、年寄中へも可被相達旨被仰出候。

六月八日。前田齊廣の生母貞琳院に對する格式を改む。

〔政隣記〕

付札、御横目江

貞琳院殿御儀、御家督之上は御代々樣御生母樣之御取扱に被成候に付、今般御格式御改被成候。樣付に唱候儀は、御樣子も有之候間、先是迄之通殿付に唱可申旨被仰出候條、此段頭・支配人等江寄々可被申談候事。

別紙之通夫々可申談旨、御用番安房守殿被仰聞候條、御承知被成、御同役御傳達、御組・御支配御申談可被成候。且又御組等之内裁許有之面々は、共支配江も不相洩相達候樣御申談可被成候、以上。

六月八日　　御横目

御歩頭衆中

六月十一日。前田齊廣の入國に際し供奉の諸士の器什・着服等を調ふるを禁ず。

〔政隣記〕

六月十一日頭分以上に、於御席左之通被仰出之趣、甲斐守殿御演述。

附記、於金澤も一統可申渡旨被仰出候段等、七月十三日御用番奥村左京殿御廻狀出、

御書立寫

今般入國に付、供之人等旅中之器財・着服等粧候儀も可有之候間、是等之儀堅禁止可申付候。都而見苦儀者貪着無之候條、有來之品相用可申候。修覆等不加而不叶品々者格別候事、

一、餞別を含參會を企、或は品物差り候儀可爲停止候。土產之品是又堅無用之事。

一、武器者古來定も有之候條、應分限爲持候而可然候事。

但、是迄召連來候人數不增候共、雜用を省候者相辨可申儀に候。

戊　六　月

六月十三日。前田齊廣左近衞權中將に陞任す。

〔三守御譜〕

六月十三日御登城被成候樣老中連名御奉書に依て、則御登城被成候（五半時頃）處、御白書院於御緣頰老中列座。中將御轉任被仰出候段、御用番安藤對馬守演述。夫より西丸へ御登城、直に老中・若年寄右爲御禮御廻勤被遊、八時頃御歸殿。

〔續德川實紀〕

六月十三日、松平加賀守齊廣中將にすゝむ。

六月十五日。前田齊廣使を京都に上りて左近衞權中將陞任の恩を謝す。

〔金龍公記史料〕

六月十三日進左近衞權中將。十五日遣篠原一進京師。謝恩献物。

六月十六日。前田齊廣供奉の士の刀劍の裝具に就いて令す。

〔御年譜〕

一、御道中御供之頭分・御小將等、色替鞘・たゝきざや・引通柄幷鐺抔之乏引者、不苦樣御宥御座候段、坂井小平申渡候事。

六月十六日

六月二十日。前田齊廣左近衞權中將に陞任したるの報金澤に達す。

〔筆のまに〳〵〕

六月廿一日

一、左之御書昨夜到來、今日各拜戴之、拙者不致出席候故、與力神戸直次郎御書御本紙持參

之、拜領之仕、同人へ從家來爲渡遣候。

但、受取候も家來に爲受取候。此儀に付直次郎申聞候儀有之、夫々相糺候へども此記には畧之。

猶以左之趣西尾隼人ゟ茂可被申聞候、以上。

御老中方連名之奉書到來付而、今日令登城候處、手前儀中將被仰付候由、御老中列座、安藤對馬守殿被仰渡、難有仕合候。右爲可申聞、以飛札申達候。頭分以上ゟ茂可被申聞候。謹言。

六月十三日　　中將御實名　御判

奥村河内守殿
本多安房守殿
前田大炊殿
村井又兵衛殿
奥村左京殿
横山山城樣
前田内匠助殿

今枝内記殿
津田玄蕃殿
前田圖書殿
不破彦三殿
横山又五郎殿

六月廿一日。前田齊廣登營して左近衛權中將陞任の恩を謝す。

〔三壬守御譜〕

六月廿一日御登城、中將御轉任御禮被仰上。西丸へも御登城。夫より老中方幷西丸老中水野出羽守御廻勤。九時過御歸殿。五半時御登城、御轉任御禮可被仰上旨、廿日老中連名之奉書到來。六半時供揃にて御登城なり。

〔齊廣樣御傳畧等之內書拔〕

六月二十一日御黑書院に於て中將之御禮仰上らる。御懇之仰あり。御太刀金馬代・綿紗十卷・裸背馬一疋進上せらる。

六月廿二日。金澤に於いて諸士に前田齊廣の左近衛權中將に陞任したることを告ぐ。

〔政隣記〕
六月二十二日、昨日御用番依御廻狀、今日頭分以上登城如例御帳に附、四半時過柳之御間列居之處、御年寄衆等御列座、御用番安房守殿左之通御演述。
當月十三日御登城被成候樣、前日御老中方御連名之御奉書到來。則御登城被成候處、被任中將候段、御老中方御列座、安藤對馬守殿被仰渡、難有御仕合被思召候。此段何も江可申聞旨、拙者共迄以御書被仰下候事。
今般中將御轉任に付、前々之通御官名相唱申筈に候。此段寄々可被申談候事。

六　月

六月廿六日。前田齊廣家督相續及び陞任を謝する爲使者を日光山に派す。

〔三守御譜〕
御家督幷中將御轉任に付、日光山へ御使者横濱善左衛門(御用部屋)被遣。
日記、六月廿六日江戶發足、七月八日御使相仕廻江戶表へ着。

六月廿八日。前田齊廣就封の際供奉すべき士を命ず。

〔齊廣樣御傳略等之內書抜〕
六月二十八日甲斐守殿・前田織江殿御入國御供被仰付、御道中奉行等團多太夫・中川平膳被仰

渡有之なり。

六月廿八日。旱魃に付き用水の使用を節すべきを告ぐ。

〔政隣記〕

當年照強、頃日村々田地用水段々及減少、番水等申付候得共、今以潤雨も無之、所々より飲水も指支申躰に付、水源に而も隨分水致大切に、少に而も麁末に至候様可相心得旨、改作奉行より御郡方江一統申渡候段、御算用場奉行申聞候。右躰之儀に候得共、侍屋敷之内相通り候用水、幷金澤町・遠所町共家廻り用水流通り候所者、猥に堰留、打水等仕候儀者、人々心得も可有之儀に候事。

右之通被得其意、組・支配之人々江可被申渡候。組等之内裁許有之面々者、其支配江も相達候様被申聞候。尤同役中可有傳達候事。右之趣可被得其意候、以上。

六月二十八日　本多安房守

六月。輕罪の者の刑は成るべく速に判決せしむべきことを命ず。

〔追加公事場御定書之寫〕

付札、公事場奉行江

公事場禁牢之者言上書付仕立方之儀、同類に而無之候共、賊或は欠落立歸抔之者は、其類を

集、幾組に而も言上書一卷に仕立可被指出旨、寛政六年申渡置候通に候得共、是以後は最前之通り、一組一組を分け言上書相仕立候樣可申渡旨被仰出候。

一、輕罪に而月刑に可被仰付者、詮議中彼是日延に相成候得者、輕き者抔に而も禁牢日數相延候儀は、御不便之事に被思召候間、成限早速相伺可申旨被仰出候條、可被得其意候事。

享和二年壬戌六月

七月四日。前田齊廣家督相續後初めて治脩等を招請す。

「政隣記」

七月四日於江戶、御家督後初而御表居間江相公樣・壽光院樣・御前樣・松壽院樣御招請。於御同所御饗應。御表舞臺に而御能御番組左之通之御圖りに候處、御能は俄に御延引被仰出。

七月四日。諸士に役・出銀以外は當分上納を要せざることを告ぐ。

「政隣記」

本文は七月四日の條に記さる

付札、定番頭江

御家中之人々勝手難澁之上、町方調達も指支申躰に付、近く連年諸上納御用捨等被仰付候處、今年も世上甚不通用に而、銀子調達等不致出來躰に候。依之役・出銀之外諸上納之分者、追而申渡候迄先不及指上候事。

右之趣被得其意、組・支配之人々江可被申渡候。組等之内裁許有之面々者、其支配江も相達候樣可被申談候事。

右之通一統可被申談候事。

戌七月

右定番頭御用番佐藤勘兵衛より、御用番左京殿御渡之旨等、如例廻狀到來。

〔政隣記〕

七月廿八日、御家中之人々勝手難澁指支候躰に付、役・出銀之外諸上納之分、追而被仰渡候迄先不及指上旨被仰渡候に付、御城御造營方人足賃銀も取立方相見合、根高帳は一統相改候間、帳面前々之通に而當八月中可指出旨等、今日御普請會所より廻狀出。同斷に付、御所務銀・今石動宿役銀・加人格段銀・調達銀、十五ヶ年賦之分も、當年分御家中より返濟取立方御用番江御達申、追而被仰渡候迄不取立旨等、町奉行富永右近右衛門・井上井之助より廻狀出。御次銀上納方、追而被仰出候迄先上納及延引候樣被仰出候旨、小杉喜左衛門・渡邊久兵衛・永井貢一郞より申談紙面之寫を以、林彌四郞・山岸七郞兵衛・前田源六郞・中村宅左衛門より廻狀出。學堂銀上納方追而被仰出候迄、先上納及延引候樣被仰出候旨、小杉喜左衛門・渡邊久兵衛・永井貢一郞より申談紙面之寫を以、會所奉行佐藤八郞左衛門等より廻狀出。

七月十二日。御算用場奉行、收納代官及び藏宿の不正手段防遏の方法に關し稟議す。

〔御算用場舊記〕

御收納米請取候諸代官、納米石に付二升宛之口米被下、御家中知行米預候藏宿、石に付二升宛給人より相渡候。右御定之外諸代官幷藏宿共、百姓より少茂米可取謂無御座候處、前々より諸代官之下代・藏宿共に茂、姦曲を以百姓より過分之米奪取候躰、近年益増長仕、百姓共不時之及難儀候に付、寛文四年・享保九年・同十一年に諸代官江申渡置候書立帳面相添候面、寛政六年嚴重に申渡。其以後未不埒之族有之躰に付、同九年猶又申渡候得共、是以不行屆躰。同十年猶々申渡、且諸百姓江茂諸代官・下代等幷藏宿共不正こぼし米等爲仕、百姓共費、聊私之意地を以、相應之米茂米性悪敷抔与申立米不爲納、及難儀之族有之候はゞ、百姓より無泥速に夫々申出候樣に、双方江嚴重申渡候。然處今以不埒不相止躰に候得共、寛政六年以來段々相考僉議仕、種々申渡、最早手を盡、此上制禁可仕手段無御座に付御達申候。何とか別段御仕法を以成共、右百姓之費等無之樣に相改度、色々申合相考候得共、未可然存付無御座に付、是迄御達方猶豫仕申儀に御座候。右諸代官之內第一邪曲之悪癖甚敷は、與力明知幷御借知方、其次は侍中代官之樣子に御座候。十村等代官方手代數十百人之內、深淺は可

有之候得共、多分は元來百姓之子弟手代に仕候に付、百姓之難儀を少は厭候意氣方も有之故歟、邪曲薄樣子聞申候。戸出村又右衛門抔手代之內、一粒も不取掠、潔白至極之者茂有之候。當町等都而町方之者召抱代官方手代勤候者は、惣樣惡敷樣子に御座候。町藏に而は新川郡泊町藏宿共、定之通刺米・こぼれ米悉百姓江相返、右に記候戸出村又右衛門手代同樣潔白に付、先達而納方之儀一統申渡候節、右藏宿正米之儀書顯、賞美之文段を以申渡候。

一、右百姓より掠奪取候仕成方は、米納に向候得者、米性之善惡爲見改、五斗之俵一俵ごとに、刺竹を以跡先中三ヶ所刺取、大抵一俵に一升五合計、石に付三升計充刺取、見改候上百姓江可相返、暨こぼれ米も可相返定之處不相返、幷刺竹通候俵口或米計之節等、こぼれ米多相成候樣、手段仕奪掠候樣子相聞申候。尤姦曲厚薄有之儀。明知方抔に而者右に付八升計茂被奪取候樣に、百姓共之內口達候者も有之樣子に御座候得共、甚敷申立、或百姓勝手之取計等仕候に付、色々雜費掛り候故に可有御座、十村等之手代宜者は、石に七八合より一升二三合位、其內にも町方出生之惡敷手代は、石に三升計も取候樣子、侍中等下代は通例石に三升計取候樣子に御座候。

一、百姓共直々御藏江米持運相納候筈に候得共、中古已來依村依所百姓共直々御藏江不相向、御藏近邊之百姓等に相頼、其宅江米持運置、御藏納は右被憑候者罷出相納候。就夫刺米・

こぼれ米幷骨折料相兼、雜用米何程充与極、相對請負之躰に相成候所も有之候。ケ樣に付而者、石に付八升計茂失墜に相成候。右請負納尤仕間敷事付、申渡置候得共、未全相止候。其譯も無據儀、百姓共下代あしらひ仕兼、其上從前々諸代官所へ御藏御米納日定日相極置、定日之外難納、御藏所より三里・五里之遠方之村々より米持參仕、其日限に御藏納不相成儀も每度有之。無是非重而之納日迄自分預に仕候樣之儀も甚費相懸候故、旁以內分請負之躰仕候樣子に御座候。右等に付、納米一石に八升宛被取候樣歎申者も可有御座候。

一、前條之通石に付三升或五升・八升充百姓不時之費難儀甚敷事に付、下代等ゟ彼是申入候得者、米性・米仕立方或繩俵等拵惡敷抔、色々餘事に懸り苦しめ候に付、無是非其分に仕置候躰。是則不告之民之常に御座候。且又邪欲深百姓は、下代等邪曲に付而已之邪曲を構、下代ゟ親み、辯舌を以米性等不宜分をも相納、或米計り方麁略に仕者も有之躰。畢竟御米不宜、幷內實少く相成、御上之御費にも至申儀に御座候。依而代官幷百姓ども、誠實を以納方仕候樣、去年も色々申渡置候得共、行屆兼申候。

一、當時御藏入高幷給人米高、大凡圖を以前條刺・こぼれ米費之高相計候所左之通。

現米

一萬七千石計。 納米石に付失墜三升宛之圖にして

此米高四つ免之草高に直し、三萬八千二百石計。

現米

二萬三千五百石計　　右同斷四升充之圖にして

此米高四つ免之草高に直し、五萬二千七百八十石計。

同

二萬九千石計　　右同斷五升充之圖にして

右同斷、六萬五千百九十石計。

右之通下代等善惡惣樣押平均候而、石に付三升宛之失墜に圖候而も、一萬七千石計年々過分至極之儀。此費無之候者村々茂成立、引免立返し所も追々可有之。尤作難有之年柄も、御貸米等相減可申候。右惡弊全は相止不申とも、大抵相改候樣仕度、數年種々相考僉議仕候得共、存付無御座候。指支之儀も可有御座哉、樣に者難申候得共、左之趣に茂被仰付候はゞ、大半相直も可申哉、不容易儀乍如何左に相記申候。

一、與力明知代官は、寺社奉行手先寺社方取次與力之兼役に御座候得共、明知取捌當分之趣に而右與力代官御指止、明知之儀御算用場取捌に被仰付、代官は十村等に被仰付、右與力唯今迄之口米代大抵知行五十石之物成程充、爲役料每年金子を以被下可然奉存候。

一、御借知代官は、先年御貸銀方御用御算用場諸役所之内、御知行割所・諸方御算用所・御下行所、此三定役棟取共兼帯相勤、御貸銀方除知代官相勤來、明和八年右除知被返下、一統御借知に相成、直々御借知代官右棟取相勤申候。此代官被指止、前條同事十村等ゟ被仰付、右三役所棟取之御算用者共ゟ者、毎年銀十枚計宛被下候樣仕度奉存候。

一、別宮口留奉行を勤侍中御代官、是も被指止候者可然哉に候得共、其所に罷在人々は、何歟御樣子も可有御座候間、是迄之通に不被成置而者相成間敷哉。其内にも能美郡御代官六人之内二人は小松御馬廻之內御作事奉行より相勤候。是も其所に罷在候に付、下代制し方等成易事、旁只今之通被成置、殘四人は此表に罷在、悉皆下代任に御座候間御指止、唯今迄之代官米是又十村等代官に被仰付可然奉存候。乍然當時之人々勤功等御褒美之趣に而被仰付置候事にも可有御座候間、只今之人々銀二十枚計充被下置、此後小松御作事奉行之外、於此表は能美郡御代官不被仰付樣奉存候。

一、諸郡十村等代官米高割減に相成、千石之代官可仕者纔六百五十石之代官仕、夫故被下口米も當り之半分餘に付、納方手代給米等も不行屆、自ら納方こぼれ米等不正不埒も仕候。右明知・御借知等之分は、十村等代官に割候へば、十村等之代官米高相增、大抵當り之高程に茂可相成哉。尤被下口米茂增候間、手代給米等茂相應に可仕、左候へば不正儀猶相心易可有御座候。

相心易本のまゝ

一、侍中初諸代官ゟ被下口米、於所々相拂、夫に相混下代共百姓より掠取候米相拂候儀も相顯し兼候之間、右口米之分代銀に而被下可然、左候へ者御藏米高相增候方可然儀に御座候。

一、代官手前御藏納定日茂指止、何日成共百姓共向次第御藏納不指支樣、尤請負納嚴重に爲指止可申、是等之仕方は幾重共可相成与奉存候。

一、前條相記候姦曲之趣共、慥成證據等有之候者、爲懲御嚴刑にも被仰付候樣可相願儀に御座候得共、急度證據茂不相顯、唯百姓共手前穿鑿仕候而茂、諸代官之憎を受、後難を恐容易に不申顯。依而私共等數年格別內聞等仕候趣、下代等之姦曲決而相違有御座間敷候。人々貧福有之事に者候得共、下代共纔二十俵位之充行之所、不相應結構至極之暮方等仕罷在候儀等、幷町・藏宿共に茂、御定之藏敷米計之取方に者難引合爲躰御座候。

一、右之通被仰付候得者、寺社方取次與力四人、御知行割所等三役所棟取御算用者九人計被下、金銀一ヶ年七貫五百目計、能美郡御代官四人三貫四百目餘、都合十一貫計御不益之趣に御座候得共、是程之儀は何とか致方も可有御座哉。假令此埋合之仕方無御座共、每年百姓過分之失墜相止、漸々成立、御藏米內實等宜相成候得者、御扶持方御切米等之人々茂難有儀、御廻米等御拂米御値段茂宜相成儀等、一々不及申上儀に御座候。

一、明知方・御借知方下代共、足輕之振に而苗字帶刀仕罷在候。是迄不埒は彼者共に候共、數

年相勤來、今更俄流浪仕外所業茂不得仕者は、何とか被仰付方も可有御座哉与奉存候。右不容易儀に御座候得共、是迄段々盡僉議穿鑿仕候處、何分舊染之悪癖姦曲故難相止、手段茂盡候間、御僉議之上可相成事に御座候はゞ、右之振に被仰付被下候者、姦曲大半相止可申候与奉存候。右之趣に被仰付候得共、猶更諸代官江嚴重被仰出茂御座候様仕度、其上不埒之者有之候者、爲見懲嚴刑に被仰付候はゞ、姦曲相止可申与奉存候事。

七月十二日　　御算用場奉行

七月十四日。前田齊廣就封の際供奉する諸士に銀子を貸附すべきことを告ぐ。

〔齊廣様御傳略等之内書抜〕

七月十四日甲斐守殿御渡。

今般御入國御供之人々旅用指支可申躰に粗相聞候。御省略之儀被仰渡も有之候得共、當時於御國調達出來兼候躰。御供道中之儀は彼是費用も有之候に付、難澁之人々も可有之候。御上にも御勝手御難澁之上、今年は過分之不時御入用に而、彌増之御指支に候得共、今般は御入國之儀旁、御供人古詰之人々は御扶持方仕切之外一人百日充、當春以來罷越今度御供人江は一人百六十日宛、御貸渡被成候條、此段可被申聞候事。

七月十七日。能登奥郡の御扶持人等、前田齊廣入國の際迎馬を發せしめんとすることを告ぐ。

〔筒井觸留〕

殿樣來八月御入國被爲遊候に付、爲恐悅舊例之通加越能より一統御迎馬、信州牟禮迄指遣申度旨、頃日三州連名に而御郡所江願紙而指出置申候。尤願之通御聞屆御座候得ば、奥郡は馬數三疋に而、毎度之振を以津幡馬相雇指遣申圖に御座候。左樣御承知可被成候。

一、當秋作毛之儀、自然難事有之候共、御代始之御事に御座候得ば、別而作難等之儀難申上年柄に御座候間、兼而左樣御心得、猶更勢子入作難相凌候樣、村方江御申談御尤に御座候。

尚秋縮御請日限之儀追而廻狀可致候、以上。

七月十七日　　大澤內記
馬場八左衛門
折戸源助

十一組宛所

七月廿二日。前田齊廣入國の後謁見する諸士の服裝に就いて告ぐ。

〔政隣記〕

今般御入國之上、御家中之人々一統御目見被仰付に而可有之候。其節奉敬人々裝束改候心得も可有之候哉、聊其儀は不及事に候。熨斗目・上下等有合を着用、見苦敷は不苦候。熨斗目損難用候は、新に拵候には不及、服紗袷幷小袖或は綿衣勝手次第着用可仕候。此段可申渡旨被仰出候條、被得其意、組・支配之人々江可被申渡候。組等之内裁許有之面々は、其支配江も相達候樣被申聞、尤同役中可有傳達候事。

右之趣可被得其意候、以上。

七月二十二日　　奥村左京

七月廿五日。前田齊廣就封の暇を受く。

〔三守御譜〕

七月廿五日、上使安藤對馬守を以て御國許へ之御暇被仰出、白銀百枚・卷物三十御拜領。西丸より水野出羽守を以て、卷物二十を賜ふ。御簾中よりも、以小笠原大隅守御用人卷物御拜領。御家督初てに付、對馬守・出羽守へ御刀被爲遣。右上使爲御禮七時過御出、老中御廻勤、夜六半時頃御歸殿。

日記。上使安藤殿九時過御出、水野殿八時過御出、御退出。指續若殿樣よりの上使とあり。

七月廿八日。前田齊廣登營して就封の辭見す。

〔三守御譜〕

七月廿八日御暇之爲御禮御登城。

日記、六つ五歩御屋形御出、五時前御登城被遊。御裝束御暇故御半上下。前日御詮議、當朝於御城御習禮有之候間、例六つ七歩御屋形御出に候へ共、此日六半に御出にて可御宜申上候て、例より早く御登城。於御黑書院御暇之御禮被仰上、御懇之上意、御手自御熨斗鮑御頂戴。其上御腰物美濃兼光・鷹・馬を賜ひ、一先御部屋へ被爲入、御家臣長甲斐守連愛・前田織江道濟御前へ被召出、御卷物頂戴。御白書院外御大名當日の御禮也。御禮相濟候上、同所於緣頰老中方へ右御禮共夫々被仰述。畢て御用番例之通宗門方之儀、且來御參勤之節御人少々被召連候樣御意被仰渡、御承知之旨被仰述。御家督初てに付御刀被進。

〔續德川實紀〕

七月廿八日、月次の拜賀例のごとし。松平加賀守齊廣就封の暇たまひ、美濃國兼光の御刀に鷹・馬を下さる。

七月。內檢地施行の方法に關して示諭す。

〔加州郡方舊記〕

内檢地に付詮議之覺

一、内檢地之儀、里方村々頭等格別入組不申、分間抔隙取不申を先江附可申候。

一、當秋苅取以前村取相極置、手後れ不仕取懸り可申候。及至一部二三手合に而仕候はゞ、上・下モ中筋与歟程能、一日に三・四ヶ村宛相極置、最初一村江何も罷出能申談、一村全相仕舞、夫より致手分、右一日三・四ヶ村之分指續相仕舞可申候。小村抔に宿等申付候而者、費も可多儀に候之間、三・四ヶ村之中程相應之村々宿極置、夫より通ひ候而可然候。村毎宿等申付候而者、入用多相懸り申由に候間、可成丈右之趣に順じ致省畧候而尤候。乍去郡により内檢地村家散居申所に者格別之事。

一、内檢地之儀、何程廻り込候而も一村五・七日も可致逗留、左候得ば入用も餘程相懸可致迷惑事に候條、誠に飯たかせ香之物之外、一切魚類等堅く爲指出申間敷、別而酒抔少も買寄不申樣嚴重可申渡候。御扶持人中等、手合頭宅より取寄申儀者格別に候。勿論聊も村役人等心得違不仕樣、能綿密に可申含候。是迄人足等其事に携候者多相成申躰に候間、精誠人多に不相成樣可致詮議候。尤人足等自分に買調候趣に而も、酒抔一圓爲給申間敷候。如此申渡候上、等閑之族於有之者、第一裁許十村・御扶持人中不行屆故に候條、末々百姓迄嚴重に可申渡候。

一、今般分間幷繩張等之儀、委細相記渡置候通に而、自身所作有之儀に候得者、繩張人等雇申間敷候。乍去竿取等之內一兩人、少々才覺有之者相撰、得与教候而召連可申候。村毎人足迄に而者、結局隙取費之筋可有之哉に候。併右之人足も年を重相用候はゞ、人に寄不宜儀も可致出來候間、久敷召仕申間敷候。繪圖之儀も、其方中自身に相調可申候。

一、步苅仕樣之儀者、別冊見立一卷に委曲相記置候通可相心得候。是又山方等者跡に付、領形等宜村、畧地味劣り之樣子無心元村より取懸り可申候。

一、新開之分右に准じ可有詮議候。

右之趣何も能申談、郡々區々に相成不申樣、急度可相心得候。別而右之內酒肴等無用之費無之樣、委曲綿密に末々小百姓迄可申渡候。自然等閑之族承及候はゞ急度可及穿鑿候、以上。

戌七月　改作奉行

諸郡御扶持人中・內檢地御用加人十村中

八月三日。前田治脩湯治の爲歸國の許可を得んことを請ふ。

[三守御譜]

八月三日、公御國許温泉へ御入湯、齊廣公より御願書付、安藤對馬守へ御先手武藤庄兵衞（御用御使番）を以て指出さる。

〔御年譜〕

一、相公様當九月・十月之内、御湯治被成度旨、従中將様八月三日御願書御指出、此段可申聞被仰出。

八月六日、金澤城二ノ丸・金谷御殿の廣式を互に交換す。

〔齊廣様御傳畧等之内書抜〕

八月、是の月六日二之御丸・金谷御殿御廣式御双方御移り替に相成なり。

八月七日、金澤に於いて諸士に前田齊廣が就封の暇を得たる等のことを告ぐ。

〔政隣記〕

八月七日、昨日之依御廻文頭分以上登城、御帳に付、四半時頃柳之御間列居之處、御年寄衆等御列座、左之通御用番山城殿御演述。

前月二十五日上使以安藤對馬守殿、初而御國許江之御暇被仰出、白銀・御巻物御拜領。従大納言様茂、以水野出羽守殿御拜領物、（私記御巻物也）有之。従御臺様も、御使小笠原大隅守殿を以、御巻物御拜受被成候。

右爲御禮、同二十八日御登城被成候處、於御黒書院御目見御懇之上意、殊に御手自御熨斗鮑御頂戴。其上御腰物・御鷹・御馬御拜領。且又長甲斐守・前田織江御前江被召出、御卷物頂戴之、重疊難有御仕合被思召候。右之趣何茂可申聞旨、以御書被仰下候。

右畢而於横鋪下、左之御覺書披見退出。

付札、御横目江

今日御弘之爲御祝詞、年寄中等宅江今日・當十日兩日之内可相勤候。且又幼少病氣等に而登城無之人々江者、向寄より傳達、爲御祝詞御用番宅江以使者可申越候。

右之趣夫々可被申談候事。

八月十二日。前田齊廣將に就封の途に上らんとするを以て老中に廻勤す。

〔三守御譜〕

八月十二日老中牧野備前守へ御出、御通り、假養子之御書付外、俄に御出府之節御願之儀被仰入。夫より明十三日御發駕に付老中方御廻勤被遊。御暇之御禮被爲濟候上、御發駕前老中御廻勤被遊候儀御例なり。尤御家督初て御發駕と申儀にて無之、例々御發駕前御廻勤被遊候、

八月十三日。前田齊廣江戸を發して就封の途に上る。

〔御年譜〕

一、八月十三日晝九時江戸御發駕被遊候事。御供年寄中甲斐守、御家老前田織江、御道中奉行御馬廻頭岡多大夫、御小將頭中川平膳、御步頭兼御用人安達彌兵衛、御步頭原田又右衛門、御大小將橫目坂井甚右衛門、鈴木三左衛門、御步小頭岩倉庄助、御步頭橋本八太夫、御步小頭那古屋恒作。

但、八月二十五日御歸城、神通川支富山御廻り。

八月十五日。金澤に於いて諸士に前田齊廣の江戶を發駕するを告ぐ。

「政隣記」

八月十五日、月次出仕例之通四時相濟。今般御入國、今月六日江戶御發駕、同十九日御着城与先達而被仰出候處、少々時氣に御觸、御勝れ不被遊に付、六日御發駕御延引之處、段々御快然に付今月十三日江戶御發駕、同廿五日御着城与被仰出候段、去八日立之早飛脚今日來着申來候事。

八月二十日。前田齊廣の江戶を發したる報金澤に達す。

「学のまに〳〵」

八月二十日

一、當十三日江戶發足中飛脚、今日到着。

中將樣益御機嫌好、十三日午之后刻御發駕之旨、織田主稅より申來。且又同日天氣も宜敷、同夜六時頃浦和驛御止宿之旨、甲斐守・織江より申來。御泊所左之通。御供長甲斐守・前田織江。

江戸　蕨御中休　浦和御泊　鴻巣御中休　熊谷御泊　落合新町御中休　板鼻御泊　坂本御中休　追分御泊　海野御中休　榊御泊　丹波島御中休　牟禮御泊　關川御中休　高田御泊　名立御中休　糸魚川御泊　靑海御中休　泊御泊　船見御中休　魚津御泊　東岩瀨御中休　高岡御泊　福岡御中休　津幡御泊　金澤

八月二十日。山方より金澤等に出でゝ冬稼に從ふものは十月より二月に至る間を限らしむ。

〔筒井觸留〕

山方等より爲冬稼金澤等江出申者、十月より翌年二月限り可申渡候。無斷先々に居留り不申樣、嚴重に可致詮議候事。

但、右冬稼に罷出候者、村役人に相願、十村聞届を受、小札に一人一人名前相記、十月より翌年二月限り、冬稼他所江奉公に罷出候儀承届候段、裏書に致印章、其者江爲持指出、罷歸候上小札取揚可申事。

右之通相極候段、當町奉行江申遣、町方において右奉公人世話人相立申筈に候條、見合印鑑三枚宛可指出候、以上。

八月二十日　　前田源六郎
　　　　　　　賀古橋江

諸郡御扶持人・十村中

八月廿二日。百姓の二男を嫡子とすべき願を許されたる近例を通牒す。

〔司農典〕

私裁許之內、百姓之嫡子を外江養子に遣、二男を嫡子に仕度旨相願申に付、緣組承屆可申哉与、御郡所幷御改作所へ御窺申上候處、御相談之上御聞屆に而、以來右樣之分御聞屆可被成旨、一統此段可申談置旨、御改作所より被仰渡候間、左樣御心得可被成候、以上。

八月二十二日　　內嶋村　孫作

諸郡御請番中樣

八月廿五日。前田齊廣金澤に着す。

〔政隣記〕

八月二十五日、津幡驛朝六時不遲御供揃に而御發駕、森下御中休、晝九時頃益御機嫌克御着

城被遊候。前記御用番山城殿御廻文之通、三之御丸ゟ奉出迎候處御意有之。夫より爲御祝詞、於御式臺に御帳に附、夫々御用方相濟、八時頃致退出候事。附、同役一人宛毎日四時より八時迄詰之事。

但、御入國之御着城に付、御供人御歩並以上御料理被下之、足輕小頭以下ゟ者、赤飯・御酒等被下之。御作法都而御前例之通に候事。

[續漸得雜記]

一、中將樣御入國被遊候節、御道中御先例之通り三品當番・非番共相建、御鐵炮二十五挺、御弓二十張、御長柄二十筋、非番御鐵炮二十五挺、御弓二十張、御長柄十本也。御先牽馬三疋。御供年寄衆長甲斐守。御家老前田織江。人持組橫濱善左衛門・成瀨監物。甲斐守は七つ道具、織江は六つ道具、橫濱・成瀨者臺笠・折物無之候事。

[三守御譜]

御入國い上爲御謝使、前田修理知周(御家老)を江戸表へ被遣。(初めて御入國に付先例通御家老被遣、二度目より人持也。公邊へ獻上御太刀馬代白銀壹枚拜領、紗綾・ちりめん內二卷、是は御家老にても人持にても無差別。)初て御着城被遊に付、人持并頭分以上何も三之御丸へ罷出躋踞、直に二之御丸へ罷出御帳に付。

〔累年雜記〕

一、八月廿五日天氣宜敷、殿樣御機嫌克九つ時比被遊御歸城候段、何茂奉恐悅候。廿四日晩より數萬の拜人出申候。旅より多く金澤等ゟ入込、金澤御通筋は武士幷下々前代未聞之賑々敷事也。殿樣森下御休に而、夫より御馬被召、御供武士方森下より不殘御馬召、長甲斐守殿・津田玄蕃殿・成瀬殿・菊池大學等其外多く之御供、此度惣御供三千五百人と申事也。又長甲斐守樣同四百人と申事也。當廿五日・六日金澤盆祭月なり。引山造物所々に有。提灯抔一町一手に拵へ申事。

八月廿六日。前田齊廣入國後初めて寶圓寺・天德院に詣づ。

〔政隣記〕

八月廿六日五半時御供揃に而、寶圓寺・天德院ゟ御參詣。御入國初而之御參詣に付、御供人布上下着用之事。

八月廿八日。前田齊廣の入國を祝する爲郡方に一日の休暇を與ふることを告ぐ。

〔筒井觸留〕

今般御入國爲恐悅、來十日・十一日・十三日・四・五日之内一日休日之儀一統可申渡候。且又右に付於金澤町、作物等格別之沙汰無之樣申渡候間、其心得可有之旨申來候條、可有其心得候、以上。

八月廿八日　　　高田彌左衛門

神保縫殿右衛門

能州四郡十村・山廻・新田裁許・無役御扶持人中

八月、前田治脩歸國の際東海道を經由すべきことを決す。

〔御年譜〕

一、相公樣今般御國へ被爲入候所、冬御道中にも相成候に付、東海道御通行被遊候樣、從中將樣被仰進候趣も有之、段々御詮議之上、此度東海道御通行可被遊旨被仰出候事。

八　月

九月四日、前田重教夫人の爲に新築せる本郷邸の居館を梅之御殿と稱せしむ。

〔袖裏雜記〕餘後錄一

九月四日

御横目江

今般御普請被仰付候壽光院樣御殿、是以後梅之御殿与相唱候樣、從相公樣被仰出候條、此段一統可被申談候事。

發喪の十月五日を繰上げたるなり

九月五日。昨今兩日天德院に於いて前田重靖の五十回忌法會を執行す。

〔政隣記〕

九月四日於天德院天珠院樣五十回御忌御法事御取越御執行。同役替々相詰、九半時過御法事相濟、八時過御參詣被遊御燒香。追付御還城之上、八半時頃御寺詰人罷歸、且前々之通御寺詰中拜禮仕。尤其段昨日惣見分之節、御法事御奉行御達申置候事。

〔政隣記〕

九月五日、於天德院昨日同斷御執行。今日も御參詣上堂、御聽聞等被遊候事。

〔金龍公記史料〕

九月五日修天珠公五十年忌祭于天德院。奉行前田內匠助。是月與城下民錢穀。

九月十日。能登山方の仕法を改め、社寺の七木及び村々の宮林伐採の手續を定む。

〔眞館留帳拔書〕

能州四郡山方御仕法御改に付、諸社寺境内七木・村々宮林伐取方仕法左に申渡候。

一、諸寺社拜領地に罷在候分、是迄之通り夫々願出、宇出津山奉行取捌候事。

一、未進地に罷在候諸寺社之儀も、右ヶ條同樣之事。

一、村々定之内請地に罷在候諸寺社は、其村方相談、連印書付を以裁許之十村江願出候はゞ、遂詮議極印相渡可申候。

一、村々宮林伐取候節は、村方より兼而支配仕來候社家へ及示談、其村役人幷社家連印書付を以、裁許々々江願出候はゞ、詮議之上加奥書、拙者共役所江指出候。然上は猶遂詮議、承屆趣令裏書相渡候はゞ、裁許より極印打渡可申候。

但、宮木伐取候はゞ、是迄之通社家初穗遣り方之儀、志之通可及沙汰候。

右之趣可得其意候、已上。

戌九月十日　　　高田彌左衛門

　　　　　　　　神保縫殿右衛門

能州四郡御扶持人・十村中

九月十一日。前田治脩湯治の爲歸國するの許可を受く。

十月朔日の條參照

【金龍公記史料】

九月十一日將軍遣奏者番内藤豐前守信敦。許可老公歸國湯治願。

九月十五日。是日以降前田齊廣諸士をして獨禮を行はしむ。

【御觸留】

猶以萬端年頭之通可被相心得候、以上。

今般就御入國、御家中之面々當月十五日より、段々獨禮可被仰付旨被仰出候條、被得其意、組・支配之人々江も可被申聞候。年頭之通獻上物有之筈に候。組頭以上之面々、御太刀に而不及獻上、御太刀馬代年頭之通可有獻上候。右以下鳥目者、御進物所より頭・支配人江受取申筈に候。年頭には、御禮錢座封に而鳥目与取替候得共、今般は餘日無之候間、假切手を以、人々身當り御禮日前日に鳥目被受取、追而座封銀与、右切手取替可被申候事。

一、頭分以上は十五日六時揃に候。平士等御禮日限幷揃刻限は、頭・支配人江御横目より直に申談候筈に候事。

但、頭分以上之せがれも年頭之通御禮被爲請候。日限者當月廿五日六半時揃に候事。

一、在江戸等之人々も、當り候御禮日に獻上物有之儀等、年頭之通可被相心得候事。

右之趣被得其意——尤同役中——

右之趣――

九月六日　前田內匠助

九月十五日。前田齊廣、賜謁の士の刻限に遲るゝを戒む。

〔富田覺書〕

九月十五日

御書立寫

御禮人列立等甚遲々に相成候間、明日より御禮日朝五半時御表へ御出可被遊候條、左樣可相心得候。且又御禮人共朝に相成當病等有之候者、御左右之內續き候而も、本列に不指障儀に候者不被及御貪着に候間、是又左樣相心得可申候事。

一、佳節・朔望等、以來者四時を限御表へ御出可被遊候間、是又左樣相心得、列立之儀可申談候事。

戌九月

一、御用番より同役何茂罷出候樣申來、則掃部・久兵衛・左膳罷出候處、內匠助被申聞候者、今日御禮人列立等遲々に相成候に付、唯今前段御書立を以被仰出候。尤右御書立表向被仰渡候に而者無之候得共、先致拜見、可相成儀に候哉相考相答可申候。被仰出之上之儀には候得

共、先御用番迄被成下候御書立に候間、何分被仰出候而も決而難相成趣に候得者、押而申渡候而茂埒而御用支に相成候間、相考存寄之趣可申聞旨に付、相答候者、委曲奉得其意候。朔望等之被仰出者、何分御指支御座有間敷候得共、御禮人之儀者依其數列立等甚遲速も可有之儀。剰今日抔四百人計之御禮人、其上跡目等被仰付候人々上げ目錄多く有之、將又御門方等不時御用有之、彼是遲々仕候。元來御禮人交名帳、先達而も御達申候通、御横目所ゟ取立、右役所に而相調理候上、私共席ゟ指越候故、私共於席之調理甚遲く相成候。且又第一列立之儀に候得者、先御横目方御詮議有之可然候。私共存寄に而者、幾重に仕候而も被仰出之通に御出被遊候而者、迚不敬而已之事に而決而御指支に候。猶御横目御詮議之上、私共存寄可申上旨申達、何茂退候處、御横目不殘被呼立、詮議有之樣子に而、暫く有之、御横目不殘席ゟ罷越申聞候者、唯今御用番より委細被申聞候趣、承知之通に候。右被仰出迚御請難得仕儀、御奏者方詮議之趣承度旨申聞候に付、相答候者、御申聞之如く、是迄之御振合を以不指支旨致御請候儀は甚難仕事、各御內存に候。併今般之被仰出者格別之趣に候得者、何卒御懐之相立候樣仕度事に候。元來列立遲く相成候者、其朝に相成斷人等各被相調理、其上に而御左右附得寺被致鏡合候上列被相立候。然者今日抔之如く多き御禮人之節者、右御帳而仕立迄に茂其刻限移り候儀に候間、以後列を一列に致し候得者御左右附茂無之、且斷人等御帳面を被消候迄

に而相濟候。左候得者列立は甚早く相濟候事与存候。右一行之列人、御奏者毎之如く御左右に罷在、御禮錢請取候節、代々御奏者方に而御左右ゟ引分け候者、列相違之儀も有之間敷候。尤御奏者方に不致手帳茂、御禮人ゟ名前相尋可致披露候。然し入念に致し候而茂、是迄折々は列立間違候事も有之候得ば、右等之通に致し候而者、自ら与風御左右違候儀も可有之候。左候得ば其節は御奏者方之迷惑に相成候儀に候得共、其儀は不及是非事。第一格別之被仰出、何分明日之儀者御憤之通に仕度事。併其上に茂不調法有之候得ば、拙者共より迷惑申上、以後前々之通無之而者指支候之段御斷可申上候。甚御憤茂有之處、何分是迄之通に御作法無之而者指支候段唯今申上候儀、甚背御憤恐入候間、各御僉議如何可有之哉与相尋候處、於御横目方右申聞候通列相立候得者甚早く相成、御横目方に指支之筋無之候得共、御左右御奏者方に而引分候而者、御奏者方勤向別而可致混雜旨申聞候に付、尤是等之儀は覺悟も有之儀。是迄無之事共に候得者、決而不調法も可致出來候得共、其儀者不及是非、何分格別之被仰出有之處、御先例に拘り幾重に相考候而も、外に御表早く相成候儀出來兼候段御請申上候而者、御憤相立不申儀恐入候故、右之通決斷之旨申達候處、何茂前段之通御横目方に右列立仕法之儀不指支之旨申聞候に付、御大小將御番頭申遣候處、何茂罷歸り、泊御番野村源兵衛迄罷在、則席ゟ罷越候に付、前段之通委曲に申談、引方に指支之儀も無之候得共、御禮

錢繰數に依り、右數を相調理、何人罷出何貫引与申趣に候故、下附帳不致出來而者指支候得共、御奏者方すら右之通に候得ば、右何貫引之圖り不致、指懸り引不足に相成候得者進退能、不敬に無之樣相心得退候与歟申事に相成候得者、引方に交名帳入用に無之候。是等之處御奏者方より何与歟譯立申上候得者、外に御小將方不指支段申聞候。尤右等之趣是迄之振合に而相答候時は、同役詮義も不致而者雖相答候得共、指掛り明日之儀、其上格別之被仰出に候故、一存に而相答候旨申聞候に付、被申聞方尤に相聞え候間、何分引方不調法に相成不申樣に引請、拙者共より御用番江相達可申旨申達候。依而御横目何茂申談、御用番席江罷出、重而相達候者、唯今被仰出之趣奉得其意、何分右等之通に而は御指支共可有之候得共、右唯今迄御作法之儀は、段々重念之上相極り居申御作法に候得者、右を欠き候而者必不調法茂可致出來事に候。併し格別之被仰出故、精誠詮議仕候處、畢竟古來御作法等都而早く相濟候儀者、當時与違何厖諸事あらめに相見え候樣に相考候。左候得者何与歟可相成程御作法を欠き不申而者、御憤之通御表宜段早く言上難仕候故、前段之通詮議仕候旨具に相達候處、委曲被致承知、可有言上旨御用番被申聞候に付、相退候處、重而御用番被申聞候者、御用部屋成瀨監物を以委曲被遂言上候處、具に被聞召届、猶明日御下知可有之旨被仰出候に付、重而御用番より被申上候者、左候而は明日之處彌遲々に可相成候間、何分今晩御下知御座候樣仕度旨被申上候

處、監物申聞候者、先明日之處唯今迄之通御作法可然候。尤御內意も右之通に候旨申聞候に付、左樣相心得候樣執筆原篠喜兵衞を以、御奏者方・御横目何茂江申聞候。尤御用番に直に可被申渡候得共、被仰出与申に而茂無之故、執筆を以被申聞候。先明日之處者唯今迄之通に相心得、隨分成限り早く列相立候樣被申聞候故、承知之段申達候事。

但、御大小將御番頭野村源兵衞重而席江呼立、右之趣申聞、先明日之處は唯今迄之通被相心得候樣申談候。右御用夜四時過相濟、何も退出之事。

九月十五日。前田治脩の名代大聖寺侯前田利考登營して湯治歸國の辭見す。

〔筆のまに〱〕

九月十五日

一、相公樣御湯治御暇之御禮可被仰上、若御病氣に候へば御禮不及被仰上、御名代被指出候樣、前日御老中方御連名之御奉書に付、翌十五日御持病御勝不被成に付、御名代飛驒守樣御登城之處、御白書院御緣頰御老中御列座、御病氣に付御目見者不被仰付旨、松平伊豆守殿御演述、御羽織御拜領被遊候趣卽日急便に申來。依之今日中將樣へ御祝詞申上。

〔續德川實紀〕

九月十五日、月次の拜賀例のごとし。松平加賀守齊廣父致仕肥前守治脩病を以て、封地溫泉浴湯の暇たまひ、羽織を下さる。

九月廿四日。請人なき質物を預ることなかるべきを告ぐ。

〔眞館留帳拔書〕

御組々質屋之內、請人無之質物預候儀、公儀御制法に相背申に付、向後一統請人爲相立質物預り候樣、御郡奉行所より被仰渡、尤質物に付故障之品出來請人無之時は、嚴重相咎被仰付儀に候間、無心得違請人を爲立候樣、質屋中え急度御申渡可被成候、已上。

戌九月二十四日　　本江村　惣　助
　　　　　　　　　鵜川村　喜三兵衞

仲　間　宛　所

十月朔日。金澤に於いて諸士に前田治脩が湯治歸國の許可を得たることを告ぐ。

〔政隣記〕

十月朔日月次出仕、如御例一統御目見、且出度与御意有之、御取合等年寄中座上より言上。右相濟、左之通御用番又兵衞殿御演述。畢而於横御廊下、左之御覺書披見、四時頃一統退

出。

相公樣御國許溫泉江御入湯御暇之儀、從中將樣御願置被成候處、去十一日上使内藤豐前守殿（私記作奏者）を以御願之通被仰出。且又同十五日御登城御湯治御暇之御禮可被仰上候、若御病氣候者御禮被仰上に不及、御名代被指出候樣、前田御老中方御連名之御奉書到來之處、御持病御勝不被成候に付、御名代飛驒守樣御登城被成候處、於御白書院御緣頰御老中御列座、就御病氣に御目見之者不被仰付候。御拜領物（私記御羽織五つ也）被仰付候旨、松平伊豆守殿御演述、御羽織御拜領被成、雖有御仕合思召候段、御兩殿樣より拙者共迄被仰出候事。

十月朔日。前田重教夫人本鄉邸内の梅之御殿に移徙す。

〔政隣記〕

壽光院樣、十月朔日辰之中刻御供揃、本御行列に而御本宅御廣式御玄關より御出、長塀通り梅之御殿江御移。御供人侍以上熨斗目・上下着用、御道筋警固足輕相建候事。

一、火事之節馬上に而罷出候者、梅之御殿前罷通り候刻、下り立候には及間敷旨奉存候段、相公樣江申上候處、其通与被仰出候條、組・支配江も達旨等、田邊判五兵衛・大橋作左衛門・杉江助四郎・水原清左衛門連名之廻狀諸頭江出。

十月六日。前田治脩江戶を發し東海道を經て歸國の途に就く。

〔政隣記〕

九月十六日、去る十日江戸發之早飛脚來着。今般相公樣爲御湯治御歸國、十月六日江戸御發駕可被遊旨被仰渡候段申來。且左之通東海道十九御泊に而、同月二十五日御着國之段も申來、

	品川御泊	川崎御中休	六里十八町	金川御泊	戸塚御中休
五里十二町	藤澤御泊	大礒御中休	八里八町	小田原御泊	箱根御中休
八里	三嶋御泊	原御中休	六里六町	吉原御泊	由比御中休
七里十六町計	江尻御泊	岡部御中休	十里十六町	島田御泊	掛川御中休
九里二町	見附御泊	濱松御中休	八里二十六町	新居御泊	吉田御中休
七里二十六町	赤坂御泊	岡崎御中休	十一里五町	鳴海御泊	清洲御中休
八里十八町	起御泊	大垣御中休	七里四町	垂井御泊	春照御中休
十里	木本御泊	中河内御中休	十里十八町	今庄御泊	脇本御中休
五里	府中御泊	福井御中休	九里十八町	金津御泊	大聖寺御中休
八里	小松御泊	松任御中休	七里餘	金澤御着	以上

附記、十月六日江戸御發駕之處相州湯本川出水橋落候に付、小田原に一日御逗留、且又松任

に御泊、同月二十七日御着与被仰出候處、重而於御旅中二十四日小松御泊、翌二十五日御着与被仰出、則同日御着。

〔筆のまに〳〵〕

一、廿七日御着立之筈之處、御道中長く、御退屈被遊候に付、府中御泊一つぬけ、小松御泊より直に廿五日御着と被仰出。

〔御年譜〕

御供御家老今枝内記、御道中奉行物頭林十左衛門・山口清太夫、御歩支配御使番田邊半五兵衞・同大橋作左衛門、御横目御歩頭岡本次郎左衛門。

〔續漸得雜記〕

十月六日江戸表御發駕に候處、下道中冬向荒御難儀被遊候に付、御願東海道御通行、御先牽馬三疋、三品も爲御持之旨被仰出、御鐵炮十五挺・御弓十張・御長柄十筋。但御長柄は黒なめし半靹、太刀打はげぬり、打柄毛白かしらの頭也。御供御家老今枝内記、御國より御迎に被參候。押は小原惣左衛門。東海道荒井御關所迄御出向。御弓押は江戸より山路甚左衛門。御長柄押は御小將湯原友之助。今枝氏は六つ道具爲持候也。

十月六日。百姓に土肥を用ふべきを諭す。

諸郡共近年屎物仕込不行屆候に付、氣候之外作劣り有之躰に相聞候。屎物之儀干鰯・油粕・下も屎抔にも不限、坪土・門土・蒸土等作屎之儀は、別而虫にちら之障にも相成不申、土地之差別も無之能利目有之樣子に而、隨分無油斷相用申郡も有之躰に候得共、郡に寄土屎等作屎相用不申、米錢を以代替候屎而已相用候に付、小百姓等自ら屎不足に相成、不作仕躰相聞候に付、裁許十村より村々嚴重申渡、第一村役人・長百姓・大高持之百姓會得いたさせ、末々小百姓迄も當秋より土屎を拵、來春より屎物多入候樣一統可申渡候。勿論裁許十村格別心懸、末々迄委曲綿密に敎不申候半而者行屆不申儀に候間、等閑に相心得申間敷候。能美郡・石川郡抔は別而土屎用ひ不申躰、其內相合谷組・淵上組之內には泥屎相用申所も有之候得共、其餘は土屎等作屎相用申儀無之、年々屎不足之樣子に而、氣候之外作劣り有之儀顯然に候。勿論相考候處、土屎之儀者人力も相懸り候に付、自然与相止候儀与存候。耕作之儀は作人精不精に依而、下田も上田に相成候儀相違無之、耕作手懸候者は人々能存居候事に候得共、畢竟耕作心懸薄く致不精候儀、不屆之至に候。依而當秋より村每高持之儀者不及申に、末々小百姓・請作迄も坪屎を拵、來春より出作屎指支無之樣、嚴重裁許々々より可申渡候。尤今般古例を以屎裁許人申渡、村々爲相廻、屎土等等閑に致置候村方有之候はゞ、人別遂詮議、急度可申

付候。第一裁許々々より村役人へ得与申渡置、常々村役人格別心を配遂穿鑿不申候而は、不行屆趣に候條、聊油斷無之樣爲相心得可申候。尤本文之通裁許十村・廻り口共、時分能心を附、尿物手當之樣子見屆置可申候。勢子方等閑之趣於有之に者、急度相咎可申事。

戌　十　月

今日御改作所より別紙覺書御渡被成、尿物拵之儀油斷不仕樣、且亦追而尿物裁許人に御申渡可被成、猶更私より一統へ可申談旨被仰渡候間、爲御承知如斯御座候、以上。

十月六日　田井村　次郎吉

諸郡御請番中樣

十月十日。金澤に於いて老臣等、前田重敎夫人が梅之御殿に移徙したるを祝す。

〔筆のまに〳〵〕

十月十日

一、梅之御殿（御本宅續、下の御馬場邊に新出來之御殿也。）御造營成就、當月朔日壽光院樣御移徙之旨江戶より申來候付、今日各中將樣へ恐悅申上、拙子積氣不出來不罷出故、紙面を以申上。相公樣（御途中迄御前より飛脚を以被仰進候趣有）

之、それに傳附て申上・壽光院様・御前様へも以紙面申上。

［御裏書記本餘後錄］

十月十日何も布上下に改め、梅之御殿出來に付、當朔日壽光院様益御機嫌能御移徙被遊、目出度恐悅之至奉存旨、年寄中・御家老中一列、傳太郎を以申上候處御意有之。

十月十六日。前田齊廣諸頭等の行狀に就いて戒む。

［政隣記］

十月十六日同役御用番河内山久太夫ゟ、御用之儀有之候條、今十六日九時過可有登城旨、昨日御用番又兵衛殿依御紙面、則登城之處、左之通被仰出之趣御書立御渡、同役中ゟ演述、組・支配之人々ゟも可申聞、尤同役連名之御請可指出旨被仰聞候事。

御家中諸士暮方等質素有之候樣、從御先代每度被仰出も有之候處、等閑に相心得候躰。此儀は尙更追々可被仰渡茂被爲在候。先以頭分之儀は、諸人之目當に相成候處、參會等華麗、且又轉役等被仰付候節大勢相招、料理數多指出、其中にも甚心得違之者も有之、於奥向及深更候迄大酒いたし候族被聞召候。此等之趣を懸意之樣に心得候段、不心得之至被思召候。尤追而可被仰渡候得共、當時別而猥に相成候躰被聞召候之條、急度可相心得候。先此段拙者共より、諸頭等ゟ可申聞置之旨被仰出候事。

戌七月

右御請左之通、今日之日付に而翌十七日上之。吉田八郎太夫御請は、従江戸到來次第御達申筈に候事。

今般御家中諸士萃方等之儀に付、被仰出之趣御覺書を以被仰渡、奉得其意候。依而御請上之申候、以上。

戌十月十六日

原田又右衞門 判
安達彌兵衞 判
河内山久太夫 判
津田權平 判

村井又兵衞殿

十月十七日。前田重教夫人逝去す。

御室は前田重教のなり

〔御年表〕

御室紀伊宰相宗將卿女、御名勝姫。寶曆四年四月廿一日御緣組御願書被指出、同廿七日御願之通被仰出、同十一年十一月十五日御結納、同月廿七日本郷邸へ御入輿、明和二年二月十五日御着帶御祝、四月廿九日御流產。同年七月廿一日御名袞姫と被改進。同五年六月朔日御名

千間姫と御改。享和二年十月十七日本郷御屋敷梅御殿において御卒去。御年五十八。壽光院殿天嶺妙雲大禪定尼、江戶廣德寺。

［菅原直養覺書］

十一月十九日

一、今日左京俟に承り候は、壽光院様御大切之趣御一門様方へ爲御知有之、夫々御つけ使者梅之御殿へ相詰る內、讃岐守様御使者相詰罷在內夜半に相成、代り之御詰使者永見藤八郞と云者替り合相つゝある內に、相模守様御使者御式臺取次奧村斧七郞を呼、只今讃岐守様御使者氣配相滯り候躰にてふさがり被申候段申候故、罷越見候處最早絕命之躰。早速御醫師丸山了悅等しんさつ、蘇香圓等相用候得共其詮なし。梅之御殿大騷動也。依て駕籠にのせ返し候由也。其後此方より御使者を以て御挨拶も有之候處、段々快く相成候由之御返答之由。併中々快氣抔可有病症にては無之處、右之御挨拶は此方様へ被對而之御返答と相見え、御殊勝成事也、方々之御使者之口上を聞、其趣書附而、其趣も讃岐守様へ申參り候躰也。此儀左京方へ斧七郞より申越候由也。斧七郞は左京弟也。

十月廿二日。前田重教夫人の病重體なる報金澤に達す。

［筆のまに〳〵］

十月廿二日

一、壽光院樣當春以來御滯、一旦御快處又不御宜、御急變も難計段、御醫師中申聞候段、中泉七太夫等より當十四日急便を以言上今日到着。依之爲御見廻、戸田傳太郎早打爲御使可被遣旨被仰出。右に付相公樣御途中へ今日御次より出候飛脚に傳附、從各伺御機嫌。且壽光院樣へも近便伺御機嫌筈也。

［金龍公記史料］

十月廿二日壽光大夫人急報至。乃命戸田傳太郎急使。又遣醫者八十島東安・久保貞元・大場卓元。

十月廿四日、前田齊廣一統難澁の際なるを以て家老等に能囃子を行ふべからざることを告ぐ。

［横山氏覺書］

當時一統難澁之時節故、年寄共於宅々能囃子等之慰事有之候而者、一統之氣請不宜候に付、爲心得申遣候趣も有之候條、其方中にも其心得可有之候、以上。

十月二十四日

家老中

十月廿五日。前田治脩金澤に着す。

〔政隣記〕

十月廿五日七時暫前、（申御待請刻限者五半時揃也。）相公樣益御機嫌克御着、七十間御門外に爲御迎罷出列居蹲踞之處、御駕籠之戸明之、御例之通出ましたか与御意有之。夫より二之御丸に罷出、於御式臺御帳に付、御祝詞等申上退出候事。

但、今曉八半時之御供揃、且小松御泊に從中將樣御使辻平丞を以、御餠菓子（蕎饅頭）御肴（鰤味噌漬）被上之。松任御晝休にも御使岩田内藏助を以、御干菓子・御干肴被上之。同所に御家老前田圖書御使町端迄御迎に出、御着之上御旅館に罷出御目見被仰付、御菓子等被下之、夫より御先に罷歸。

中將樣者、野々市御小休御立之御附人に而、金谷御殿に爲御待請被爲入候事。

〔舊　記〕

覺

一、九貫六百三十二匁六分　　御入用銀

但粟生假舟橋幷打懸橋入用方

右享和二年十月廿五日相公樣東海道通御通行に付、粟生舟橋等諸事主付波佐谷村文兵衞・寺

井村傳右衛門江被仰渡候。假舟橋・打懸橋下裁許橋新村甚左衛門・赤井村忠次・西任田村十右衛門・土室村太右衛門、此人々江申渡候。則杉山新兵衛様より、右名前御入用に付書上候。

十月廿七日。前田重教夫人危篤の報金澤に達す。

〔筆のまにまに〕

十月廿七日

一、壽光院様御様子、廿二日に記通にて、當月十八日に成次第に御疲、一向御食氣無之旨等、翌十九日之急便前田修理より申越、今夕到着。

但、別紙を以御療養方之儀、橘宗仙院を初、御醫者も手を盡し被申候へども、終に不御宜。實は昨夜十七日五半時頃御逝去に候へども、段々御次第御様子も候故、いまだ長向へは御指重りと申儀も御沙汰無御座旨等内分申越。十八日付之修理紙面也。

十月廿九日。江戸に於いて前田重教夫人の喪を發す。

〔三守御譜〕

十月廿九日壽光院様御逝去。御養母なり。

十月。學校都講長谷川準左衛門老年を以てその職を免ぜらる。

〔富田覺書〕

十　月

一、御儒者長谷川準左衛門儀、御書立を以組外に組替被仰付、都講幷學校御用御免被成、拜領物被仰付候に付、尤組替之御禮は重而於御前申上、獻上物茂有之候得共、役儀御免之節拜領物有之候得ば、御奏者所ゟ御禮有之候間、御禮罷出可申哉、支配頭高田庄太夫承合候に付、幸同役何茂出席故詮議之上、御禮に不及段申遣候事。

御書立寫左之通。

長谷川準左衛門

右準左衛門儀、泰雲院様御書物御用烈敷相勤、其後都講被仰付置候處、數年入情に相勤、及老年候に付組外被仰付、能美郡御代官被仰付、御儒者役相勤可申候事。

都講幷學校御用者御免被成、唯今迄被下置候役料者被指除候事。

右之通御書立に付、段々僉議有之候處、都講等者誠に付物に而、重も立候者儒者役与申物に候得者、儒者役御免無之候得ば、はきと役儀御免に茂相當不申候に付、詮議之上御禮に不及段申遣候事。

十一月四日。前田齊廣及び治脩、急使を發して重教夫人の病を問はしむ。

〔政隣記〕

十一月四日朝四時頃、從江戸之早打兩使左之通來着。

壽光院樣就御病氣、相公樣爲御看病御出府之儀、從飛驒守樣御願之處、十月廿六日御願之通御老中方より御奉書就到來、右御奉書持參、前田修理より年寄中迄言上之早打御使、且御指重之言上相兼。

御大小將　山東久之助

副使御廣式御用人　村上金九郎

兩人共十月廿六日夜江戸發之處、越後駒返り高波逗留。

右に付爲御見廻、江戸表ゟ被遣候早打御使左之人々今日發出。

相公樣より　御近習御先手　村　杢右衛門

中將樣より　御使番　津田權五郎

十一月五日。前田重教夫人逝去の報金澤に達す。

〔政隣記〕

十一月五日從江戸之早打左之通り來着。

御廣式御用人　中山武十郎

壽光院樣御氣色段々御指重被及御大切候言上。

御大小將　飯田半五郎

御廣式御用人　佃　源右衛門

壽光院樣十月廿九日卯之中刻御逝去之言上。

猶以病氣等に而難罷出人々は、其段名之下に可被書記候、以上。

〔政隣記〕

壽光院樣御氣色御滯被成候處、段々御指重、不被爲叶御療養、前月二十九日御逝去被成候段申來候。依之諸殺生・普請・鳴物等可有遠慮候。日數之儀者追而可申渡候。

一、右に付頭分以上之面々者、御兩殿樣爲伺御機嫌、明六日可有登城候。幼少・病氣等之人々者、御用番宅迄以使者可申越候。

右之通被得其意、組・支配之人々江可被申渡候。組等之内裁許有之面々者、其支配江も相達候樣可被申聞候事。

右之趣可被得其意候、以上。

十一月五日　　前田大炊

〔政隣記〕

壽光院樣就御逝去、普請・鳴物等遠慮日數之儀、追而可申渡旨先達而相觸候通に候。依之普請は當五日より十一日迄七日、諸殺生・鳴物等は當廿九日迄、御忌中日數遠慮可仕候。且又御家中之人々は末々迄、相公樣御忌中十二月廿四日迄、諸殺生・鳴物等指扣可申候事。

但、致家業候者・役者等は、當十二日より無構可致稽古候事。

一、相公樣江頭分以上爲伺御機嫌、今月廿日・十二月二日・同廿二日、右日限五時より可有登城候。幼少・病氣等に而登城無之人々は、御用番宅迄以使者可相伺候事。

但、御近習之面々は拙者共於席可相伺御機嫌候事。

右之通被得其意、組・支配之面々江可被申渡候。組等之內裁許有之面々は、其支配江も相達候樣可被申聞候事。

右之趣可被得其意候、以上。

十一月十日　　前田大炊

津田權平殿

但同役六人連名

十一月十日。前田齊廣、家老津田玄蕃を派して壽敎夫人の葬儀に列せしむ。

〔金龍公記史料〕

命津田玄蕃。以居大夫人葬。且中陰等法事。使代兩公參拜。十一月十日發金澤。前十日賜胴服一縮緬白銀十枚。

十一月十二日。德川家齊が前田治脩等の喪中慰問の爲に發せしめたる奉書金澤に着す。

〔金龍公記史料〕

十二日幕府老中奉大將軍旨。寄書弔兩公喪。兩丸老中奉大納言旨。寄書弔大公喪。書二日發。本日達。

十一月廿二日。西本願寺が松材の寄進を求めたるを謝絕せしむ。

〔毎日帳書拔〕

十一月廿二日

一、西本願寺本堂破損に付、御修覆に御取懸り有之に付、御領國之內に而松木三千本御寄附被成下候樣被成度旨、御使僧を以寺社奉行迄御申越之由に而、則御使僧口上之覺書右奉行出之候。右御門主等より右樣之御賴申來候儀是迄無之、其上御領國山々も近年は松木伐出、荒山に相成居候躰に候へば、右樣之木數伐出候儀は迚も出來不申儀に候へば、旁以右之趣

申立、寺社奉行より品能御斷之趣申達、御使僧相返候方に而も可有御座哉と遂示談、猶更御用人江も遂僉議候所、同樣之旨申聞候間、其通可申渡哉与奉存候旨申上候處、伺之通被仰出。

十一月廿七日。前田重教夫人の葬儀を行ふ。

〔政隣記〕

十一月廿七日卯之下刻、壽光院樣御遺骸御葬式有之。御中陰御法事同廿九日・晦日。

十一月廿七日。鹿島郡河崎村百姓半助の妻三子を生む。

〔金龍公記史料〕

十一月二十七日。鹿島郡河崎村百姓半助妻生三子。一死。給二子一口。至十五歲。

十一月。諸士に命じてその家の系圖を錄上せしむ。

〔御觸留〕

御家中之人々御目見以上、其家々元祖より之系圖御用に候條、帳面に書記可指出候。同姓并男女子之分、何某江養子、何某江嫁、或遂出家候等之わけ、可書載候。

一、末家之分者、本家より分れ候所より調之可申事。

別紙案文は略す

一、本家より末家可書出儀、別紙案文之通に候。末家より又別家に成分者、末家之子孫より可書出、本家より不及書出候事。

一、本家より書出候末家之分者、名前・實名迄可調、是又末家子孫より委細可書出候事。

但、若末家及斷絶候分者、本家より名前・實名之外、由來・行年暨及斷絶候子細、可書出之候。本家斷絶之分茂、末家より由來可調出事。

一、都而實名・定紋・宗旨・行年書記、不相知分は其わけ可相調候事。

但、改宗幷定紋最前とかはり候はゞ、其趣も可書加候事。

一、右帳面紙者美濃紙に而、寸法幷調樣別紙案文之通に候。帳面一組切二冊宛取揃、袋に入、出來次第可指出候事。

一、幼少人者代判に而可指出候事。

幼少に付何の誰代判　誰

一、組中より出候帳面、目錄相添可差出候事。

一、舊宅之人々は、跡目被仰付候上指上候樣申渡、取立可指上候事。

但、右寫等之儀目錄に可調候事。

一、御目見以上与は有之候得共、與力之分者本組與力迄取立可申候。寄親附等與力は不及指

出候事。

戌十一月

十一月。村肝煎選定の心得に關して告ぐ。

〔國部舊記〕

近年諸郡共村々肝煎願之節、百姓共彼是存寄申立、納得相揃不申、久々願致延引候族有之躰、射水郡・能州口郡別而右躰之儀多有之躰に付、肝煎申渡候得ば、急度村方縮をも可仕者を相嫌、惰弱成者を好候者多に付、相應之人柄に而決而肝煎に相願可申者必納得相整不申躰、不埒至極之儀に候。仍而以來代り肝煎僉議之節、其心得を以嚴重申渡、人柄之儀猶更遂吟味、長百姓之内急度縮方可仕慥成者を爲相願可申候。是以後は一往承糺、無謂別存に而納得相揃不申においては、無構其方中遂詮議、人柄等精誠相撰、代り役引請相願可申候、以上。

戌十一月

江上淸左衞門

澤崎源太郎

諸郡御扶持人・十村中

十一月。諸郡に於ける奉公人召抱の手續を令す。

親類は本のまゝ

〔加州郡方舊記〕

御郡方男女奉公人近年縮方弛、風俗悪敷、別而出所等不相糺召置候躰之儀相聞え、不埒之趣に付、去年奉公人座申渡、ヶ條書を以仕法申渡置候郡も有之候得共、猶更詮議之趣有之、奉公人座之儀者指止、去年相渡置候ヶ條書帳面も得与相改、以後縮方之儀來春迄に三州共可申渡候。當年季代り之時節指懸り候間、主人奉公人相對を以召抱可申、尤古格之通請人を爲立、證文取置可申儀。且又奉公人親類与村々肝煎、右證文に當時誰せがれ与歟弟与歟相違無之段爲致裏書可申候。召抱候者は何村誰せがれ・弟誰与歟申者當季召抱候段、主人居村肝煎屆置可申候。自然請人證文取置不申奉公人故障有之候而も、主人申分相立不申。村肝煎裏書無之證文取置、出所紛敷者於召抱候者、主人・請人とも嚴重咎可申付候儀に候。

一、他郡江罷越奉公仕者、相互に右之通送り狀等指遣可申候。

一、御郡方居住之寺社幷町方等、御郡之者召置候時分、其奉公人居村之肝煎送り狀に、十村裏書之書附を取候而召置候樣申遣候。若其儀無之召置候儀有之候はゞ、其段可申斷候。

一、奉公人若病氣或者欠落等いたし候節者、證文定之通たるべく候。肝煎證文之表不分明に候はゞ、主人申分相立申間敷儀に候條、綿密に證文取立可申候。

一、奉公人出替限月之儀、十一月晦日与申渡候通に候。乍併無據指支有之分者、十村承屆勝

手宜敷樣可爲致候。

一、是迄奉公いたし居候男女、組切綿密に相調理帳面に記、來二月中兩役所宛所に而可指出候。右之分以後無謂奉公を止爲引込申間敷候。何与歟無據儀有之候はゞ、其段村役人ゟ相達、十村ゟ書附取置、兩役所ゟ相達候上爲引込可申候。

一、古來より御制禁に而今更不及申渡儀に候得ども、十村聞屆不申者、町方ゟ一圓奉公に罷出候儀相聞候においては者、本人・親類者勿論、村役人之儀嚴重可申渡儀に候。

一、奉公人作法之儀者、去年申渡置候定書之通、衣類・食餌等聊奢侈之儀無之、主人々々聞屆不申而者、休日たりとも不爲致他行、勿論夜行等猥之族無之、風俗宜、實躰に奉公相勤、召仕候者も加憐愍候樣、村役人より重々敎諭申入、古來より申渡置候御法之儀等少茂無違失、急度相守候樣可申渡候。

右之趣一組切村肝煎等嚴重綿密に爲申聞、末々迄心得違之族無之樣、具に可申渡候。猶委細之儀者追而可申渡候、以上。

壬戌十一月

杉山新平

高田彌左衞門

長屋平馬

進士求馬
林彌四郎
木梨左兵衞
加能越御扶持人・十村中

十二月十六日、前田齊廣初めて入國せしを以て、諸士に本年の借知・借米を返却すべきを告ぐ。

〔政隣記〕

十二月十六日、昨日御用番安房守殿依御廻狀、人持・頭分登城之上御横目所に相揃候處、九時前一組一役宛、於檜垣之御間御年寄衆等御列座、安房守殿左之通御演述。

御家中一統難澁之儀被聞召、甚以御心配被遊、重々御僉議被仰付候處、御上とても御難澁至極に候得共、今般御入國初之儀、其上以來之風俗をも御改可被遊思召に付、來年大坂御廻米をも御引欠、御借知・御借米當年一作全被返下、且諸上納之分別紙之通被仰付候。將又五百石以下之人々は、別而難澁之躰に付、別紙割合之通御貸渡被成候條、以來勝手取續之儀急度可相心得候。猶又節儉心得方等之儀者追而可被仰渡候。尤此上者以後容易に難澁之申立等有之候共、一圓御聞届不被成候條、兼而其覺悟仕候樣嚴重可申渡旨被仰出候。當時之御勝手振

に而者、誠以不一通御救方に候條、共旨一統能相辨可申候。

但、御借知等之分御米に而可被返下候得共、月迫彼是及混雑にも候故、代銀に而被渡下筈に候事。

右之趣被得其意、組・支配之面々江可被申渡候。組等之内裁許有之人々者、其支配江も相達候様可被申聞候事。

右之通に被得其意候事。

壬戌十二月

御知行之分

一、自分知六十九石迄都而二百二十目當
一、同　七十石より九十九石迄二百五十目當
一、同　百石より百四十九石迄三百目當
一、同　百五十石より百九十九石迄三百四十目當
一、同　二百石より二百四十九石迄三百七十目當
一、同　二百五十石より二百九十九石迄四百目當
一、同　三百石より三百九十九石迄四百三十目當

一、同　四百石より五百石迄四百五十目宛

御扶持方之分

一、十四人扶持以下都而二百二十目當

一、十五人扶持より十九人扶持迄二百五十目當

一、二十人扶持より二十九人扶持迄三百目當

一、三十人扶持三百四十目當

御切米之分

一、御切米之分都而二百二十目當

一、新番并御切米六十俵以上は二百五十目

一、足輕之分都而一人四十目

一、坊主　四十目

一、小者　二十五匁

右御貸附之儀は、委曲御算用場奉行ゟ下渡候條、直々承合可申候事、以上。

覺

一、諸方御土藏ゟ上納銀　一、學校銀　一、産物銀

右之分幾口有之候共、口々一紙證文に相改、無利足を以來亥年より百石に付三十目當上納、御切米之分も其割たるべく候。是迄年賦にて右割合より小銀之分は、尤是迄之通に候事。

一、會所銀之儀は只今迄之通に候事。

右御家中之人々勝手難澁に付、諸上納之分如斯被仰付候。且又諸場・諸役所より貸附銀之儀は、其向々遂僉議、追而可申談候事。

戌十二月

十二月十六日。前田齊廣、人持組の士の行狀に就いて戒む。

〔政隣記〕

十二月二十九日、左之通今月十六日人持組之人々江別段被仰出有之候由今日見聞に付記之。

各儀者難澁乍申、大身之事に候得者、猶以心得次第勝手取續之仕方可有之候。乍然中には儉約に事よせ、吝嗇之族有之樣子粗被聞召候。ヶ樣之處能相心得、尤不益之參會遊藝に耽り及難澁候者不心得之至候。隨而家來取治方肝要之事に候。今般御借知一作被返下候に付而は、向後急度相愼、幾重に茂勝手取續、文武之心懸尤之事に候。此等之趣先拙者共より急度可申渡旨被仰出候條、可被得其意候事。

戌十二月

十二月二十日。流浪者の諸郡に入るものあらば藤内をして之を捕へしむべきを令す。

〔筒井觸留〕

先頃已來御郡方江流浪者致徘徊、村々江立入候樣子及承候條、右躰之者立入、若不法之族有之候はゞ、向寄之藤內江申渡召捕候樣、面々組下村役人共江可申渡置候。尤疑敷躰之者候はゞ、心を付村々江申達候樣可相心得候、以上。

十二月二十日　高田彌左衞門

能州四郡十村中

十二月廿二日。村肝煎の送狀を有するものにあらざれば奉公人として召仕ふべからざることを告ぐ。

〔筒井觸留〕

付札、町奉行江

御郡方之者共送り狀等無之、當町幷遠所町・寺社方等に致奉公罷在候者有之、人別等之儀御奉行等手前において無油斷遂詮議候得共、御郡方迄制止候而も行屆兼候に付、今般改而町幷遠

所町・寺社方等奉公人召置、暨其支配地新に爲致居住候者有之節、御郡方より新に罷出候者は、其村肝煎送り狀に十村裏書いたし相渡申等に候間、右書物所持不致者は、堅く召置不申樣嚴重に可被申渡候。且當町に而奉公人宿請仕候者、等閑に相心得候躰にも相聞え候間、此儀も譯而可被申渡候事。

戌十二月

御郡方奉公人締方之儀に付、各內詮議之趣被申聞、夫々相達候處、別紙之通一統可申談旨、御用番年寄中被申聞候條、寫相達候間、被得其意、夫々不相洩樣可被申渡候、以上。

戌十二月廿二日　　御算用場

高田彌左衛門殿

十二月廿八日。前田齊廣風邪に罹るを以て來年頭の賜謁を廢することを告ぐ。

〔每日帳書拔〕

御風氣に被爲在候付、來年頭御家中之人々等御禮被爲請候儀は、追而可被仰出旨先刻被仰出候。依之先例相しらべ候處、安永十年正月相公樣御疝積等爾々不被遊候付、御參勤御延引御保養中故、御家中等一統御禮被爲請間敷候。年頭御祝儀物獻上物目錄を以指上候樣被仰出

候得共、今般には相當り不申候。來年頭之儀は御風氣御快然被爲在次第、元日之通年寄中を始御禮被爲請、夫より追而元日より之御順之通、御日柄被除御禮被仰付、御射初等も年頭四日に相當り候所に而被仰付に而可有御座候。

一、元日は前々御留守年之御振之通、頭分以上登城、益御機嫌能御超歳恐悦奉存旨、座上之者申述、年寄中謁候而相返申に而可有御座候。

右之通僉議仕奉伺候。

十二月廿八日　本多安房守

右伺之通と被仰出。

〔政隣記〕

中將樣少々御風氣に被爲在候に付、御保養中來年頭御家中之人々御禮被爲請候儀御延引被遊、追而御禮被爲請候儀は、重而可被仰出旨、今日被仰出候。依之元日頭分以上前々御留守年之通可有登城候。右に付年頭御規式之儀も、都而御保養中御延引之旨被仰出候事。

右之通被得其意、組・支配之人々江可被申渡候。組等之内裁許有之面々者、其支配江も相達候樣可被申聞候事。

十二月廿八日　本多安房守

十一月。火災の際無用の者の現場に集るを禁ず。

〔政隣記〕

付札、定番頭〳〵

火事之節無用之人々火事場〳〵不罷越筈御定も有之候處、近年御役人之外早乘仕候族茂多、火元〳〵も無用之者入込、御役人之障にも相成候樣子相聞え候事。

一、辻々大勢相集、火消人數等致見物、往來之障にも相成候樣子相聞え候事。

右等之趣前々相觸、寛政六年にも急度相觸置候處、近頃者又々猥に相成候躰。夜中火事之節提灯無之、馬上に而駈廻候人々も有之躰被聞召候。每度被仰渡も有之候處如何之事に候哉、急度可申渡旨被仰出候。火事之節親類等之宅〳〵見廻候儀者御定も有之候間、都而心得違無之樣嚴重可被相心得候。尤右之躰之者於有之者、御横目より相咎、夫々名前も承屆候筈に候條、被得其意、組・支配之人々〳〵可被申渡候。組等之內裁許有之面々者、其支配〳〵茂相達、尤家來末々迄不相洩樣申渡候樣可被申聞候事。

右之趣一統可被申談候事。

十　二　月

正月朔日、前田齊廣微恙を以て年頭の賀を受くることを廢す。

〔政隣記〕

正月朔日、舊臘廿八日御用番安房守殿御廻文之趣に付、今朝五時より頭分以上登城御帳に付、四時頃年寄衆謁退出。

但、御留守年之振に付各熨斗目・半袴着用。

同日五時過暫加蝕。暦考相違歟与云々。

〔富田覺書〕

正月朔日

一、當年頭御禮少々御不例に付、御延引之段舊臘被仰出候に付、今日出仕之人々御留守年頭之通に付、御式臺御帳五時より出し、五半時引候。出仕之人々柳之御間列居、年寄中被罷出候。筆頭より御機嫌能被遊御超歳恐悦に奉存候旨可申上之旨、御横目江御用番より被申談候に付、御横目より右之趣筆頭へ申談候之旨、坂井甚右衛門席江罷越申聞候事。

正月朔日。諸士の風俗に關して示諭す。

〔御觸留〕

覺

一、大鷹・鶻・弟鷹・兄鷹共に、三千石以下の者所持仕間敷事。

一、雀鷂・雀鷁・差隼、并天の網はり候儀、金澤三里四方御停止之事。

一、嫁入手道具之外、つゞら・はさみ箱・長持・衣裄之類蒔繪可爲無用事。

付、長持廿棹・乘物十丁之外御停止之事。

一、中陰・年忌三日より永法事無用之事。

一、かけの諸勝負御停止之事。

一、かこひ女堅御停止之事。

一、踊・辻相撲御停止之事。

一、女をむかへ候もの水あびせ候儀御停止之事。

一、家居金銀繪座敷、其外不應分限花麗の作事有間敷候。但仕懸候作事は格別之事。

一、上下共に刀、柄・鞘かけて三尺五寸、脇指一尺五寸より長をさし申間敷候。付、朱鞘・かいらぎ鞘・大つば・角つば、其外かぶきたる拵仕間敷事。

一、大撫つけ・大すりさげ・下ひげ・顎ひげ御停止之事。

右條々誰々によらず於令違犯者、隨過之輕重曲事可被仰付候。
此已前少之儀にも過料出し候得共、向後御用捨可被成候間、忝存彌被仰出候筋目違背仕間敷儀、急度可被申觸旨御意候、以上。

亥正月朔日

今枝民部 判
奥村河内 判
本多安房守 判

長九郎左衛門殿
横山左衛門殿
前田對馬殿
奥村因幡殿
小幡宮内殿
津田玄蕃殿

正月朔日。諸士の饗應に關し規定す。

〔御觸留〕

家中振廻之定

一、一汁三菜外精進汁一・鹽辛・香物可出之事。
一、酒可爲二返事。
一、吸物に而も取肴に而も一種可出之事。
一、鶴・白鳥・他國肴・木具停止之事。
一、後段之振廻無用之事。
右之通相違有間敷者也。
亥正月朔日　御印

正月朔日。諸士・町人及び百姓の衣類に關し豫め禁止すべき條項を示す。

〔御觸留〕

御家中侍々幷町人・百姓衣類之事

一、不依大身・小身、紗綾・縮紗・平嶋・羽二重之外、唐物小袖・羽織・袴・上帯・下帯は不及申、襟・袖縁等に至迄一切無用之事。但、奥島・麁相成毛織勝手之ため能物は格別之事。
一、御眤近之小々姓衣類、法躰人羽織等は唐物御赦免之事。幷家中之小々姓紗綾・平島・奥島、麁相成毛織之類是又御赦免之事。
一、與力又家中之侍羽二重・絹之外一切可爲無用。但知人のとらせ物は格別之事。

一、歩者鷹匠幷算用之もの、絹・紬之外同斷之事。
一、弓・鉄炮之者、紬 木綿・布之外同斷之事。
一、小者・中間・草履取、紬・木綿・布之外同斷之事。
一、町人絹・紬之外同斷之事。
一、百姓紬 木綿之外同斷之事。
右當亥ノ年より二ヶ年過候はゞ堅御停止可被仰出候間、兼々得其意、有來候古衣裳は格別、新敷拵不申樣に年中二度宛急度可被申觸旨御意候、以上。

亥正月朔日

今枝民部 判
奥村河內 判
本多安房 判

長 九郞左衞門殿
橫山左衞門殿
前田對馬殿
奥村因幡殿
小幡宮內殿

自分は津田政隣

津田玄蕃殿

正月十一日。御歩平田孫助の弟八右衛門、人持小幡雅樂助の給人を殺害す。

〔政隣記〕

正月十二日、吉田八郎太夫(在江戸)組御歩平田孫助(在江戸)弟八右衛門、人持組小幡雅樂助家來給人組山内伴助与申者を、人持組前田權佐家來飯田小左衛門於門內切殺、兄孫助宅ゟ罷歸有之旨一類より及斷候由、御用番原田又右衛門より今朝五時頃申來、即刻先又右衛門宅迄罷越、彼是及示談。自分今日詰番に付四時より登城、右之趣先一通り關屋中務を以口上に而申上置、八時退出、直に重而又右衛門宅ゟ罷越、同人同道孫助宅(彦三町)ゟ罷越、小頭中指引に而八右衛門樣子見屆候處、相尋候趣不致應答も、亂心之躰に付、縮方之儀同姓いとこ平田三郎右衛門ゟ申談退出。孫助代判大石半七郎より書付取立、原田自分添書を以、御用番左京殿ゟ原田持參相達、尤委曲之趣紙面に調之。原田・自分兩名之封言上に認之、原田御次ゟ持參、志村五郎左衛門を以上之。

但、夜前五時過切殺候由也。

〔政隣記〕

閏正月四日左之通被仰付。

吉田八郎太夫組御歩　平田孫助

平田八右衞門儀、當二日於公事場御吟味之處、不屆之趣就有之、同日より牢揚屋へ被入置。依之指扣被仰付、當時在江戸に付罷歸相愼罷在候樣可申渡旨被仰渡。右江戸表へ申遣、八郎太夫申渡。

御先筒頭　平田三郎右衞門

八右衞門儀父方いとこに付指扣被仰付。

定番御馬廻　高崎又太夫

同斷。

吉田八郎太夫組御歩横目　中島嘉平太

八右衞門姉聟に付指扣被仰付。

正月十九日。降雪により年頭の廻禮を來月に亙りて行ふべきことを告ぐ。

〔政隣記〕

正月十九日

付札、御横目江

此間之雪に而往來之人々指支申躰に候間、屋敷廻之雪早速除之、致道廣、往來支不申樣可相

心得候。且又年頭之儀は、閏正月へ懸相勤可致候事。

右之趣被得其意、組・支配之人々へ申渡候樣、夫々可被申談候事。

亥 正 月

右例文之以添書到來之旨、同役御用番原田より傳達有之候事。

正月廿八日。改作奉行等百姓に屎代銀貸附の方法を改むべきことを告ぐ。

〔加州郡方舊記〕

一、諸郡屎代銀貸渡方、是迄種々に相成居候躰に候。元來百貫目之銀子組々江割當候得者少分に而、一統江貸渡候而者曾而多足に相成候程之儀も無之候。依而當春より左之通り諸郡共相心得可申候。

一、組當り屎代銀、當春より請取候はゞ、一組何十ヶ村を十ヶ村程宛何つ与歟に分、組分を極置致鬮取、次第を立年廻りに貸渡可申候。右當年者何村々々、來年者何村々々与相極、帳面に記、役所江一組より一冊宛指出可申候。勿論其村々之內肝煎江得与申談、實に自力を以屎物行届得不申者共江貸附可申、貸渡候上者誰々致借用候段借用帳印形見屆、役所へ指出可申候。

一、返上之儀も、是以後十一月晦日限り取立致上納、十二月二十四日限り借用證文役所へ差出可申候。

右之通嚴重相心得可申候。右帳面二冊之内、一冊者屎物裁許江相渡置、右銀子を以屎物買入之樣子等、綿密爲遂穿鑿候條、此段も兼而可申渡置候、以上。

亥　正　月　　　　　　山岸七郎兵衛

　　　　　　　　　　　永　原　數　馬

御扶持人・十村中

御別紙御改作所御用番樣より御渡屎代銀之儀、一組村々一躰に借請候而者少分に相成、足りにも相成不申儀に候間、已來御本文之通一組十ヶ村程宛順番を以極置、鬮取を以貸渡候樣可被成候。猶更相知不申儀御座候はゞ、御窺可被成旨被仰渡候に付、爲御承知御紙面相廻し申候、以上。

正月廿八日　　　　　　田中村　三右衛門

諸郡御扶持人中樣

閏正月五日。前田重教の女顯姫逝去し、十日發喪す。

〔金龍公記史料〕

松壽院殿貞操妙幹大禪定尼。享和三亥閏正月十日。實五日。

〔齊廣樣御傳略等之内書拔〕

閏正月十日實重敎公第一之御女治脩公御養女、松平肥後守容詮公之後室松壽院樣御卒去。御年三十八歲。御法號は松壽院殿貞操妙幹大禪定尼と申、下谷廣德寺塀內ゟ御葬有之なり。御生母は御藩士林源左衞門政成女於舜之方なり。

閏正月六日。前田齊廣本年の參覲を九月に延期することを告ぐ。

〔政隣記〕

閏正月六日、一昨日之依御廻文、今日頭分以上登城御帳に附、四時過柳之御間列居、御年寄衆御列座、御用番甲斐守殿左之通御演述。畢而於横廊下左之御覺書披見、一統退出。

御國許御仕置方等之儀に付、無御據趣有之候間、當三月御參勤御用捨、同九月中御參府被成度段御願被成候處、御願之通被仰出、難有御仕合思召候。此段何茂ゟ可申聞旨御意に候。

閏正月六日。新に十村を命ぜられたる者の祝意を表する爲饗宴を催すを禁ず。

〔御用留〕

今般十村役被仰付候人々、於旅宿相祝申に而可有之、近年之樣子兼而粗承及候處、相應之料理等指出、逮深更候迄打寄馳走之躰に相聞候。去暮以來諸頭中を初一統吉事之節祝等之儀に

付、段々格別之思召有之御樣子に而被仰出候趣有之、御家中一統嚴重相心得罷在候儀に候。以來御郡方人々役儀等被仰付候節、料理指出候儀堅有之間敷、入魂之人々輕酒・吸物等相祝候儀者格別に候。尤祝儀物指遣候儀も相互指止可申候。乍然格別心易人々、誠に驗迄に可仕、都而節儉を相守可申儀肝要に相心得可申候。此段一統へ入念可申旨、內島村孫作ゟ於役所申渡置、承知与存候。尚更委細申渡候事。

亥閏正月

別紙今日御渡、一昨日指懸り被仰渡置候へ共、尚更一統不相洩樣可相心得旨、御改作所より御覺書御渡候旨に御座候間、左樣御承知可被成候、以上。

閏正月六日　　酒見村　八三郎

御詰番中樣

閏正月十二日。木實油を賣ることを許し、その取扱に關する心得を示す。

〔政隣記〕

當年油拂底に付、木實油も爲賣申候。右油は食物に用申儀難相成、暨燈火抔に而たばこ等給候儀不宜由に御座候。寛政三年にも取寄候節、御家中一統被仰渡御座候間、今般も一統ゟ仰渡候樣仕度奉存候、以上。

亥閏正月十二日　　富永右近右衛門
井上井之助

長甲斐守樣

付札、御横目江

木實油爲致商賣候儀に付、別紙之通町奉行申聞候條、人持・諸頭幷役儀御免之頭分、暨隱居之面々へも不相洩樣可被申談候事。

閏正月

閏正月五日の條參照

閏正月十三日。徳川家齊、奉書を以て前田齊廣の喪中を問はしむ。

〔三守御譜〕

閏正月十日未下刻松壽院御卒去。（御忌日五日に御立替。松壽院樣公御姉君也。）依之同十三日御朦中御尋老中奉書渡る。

閏正月十三日。前田齊廣人持組の士に對しその心得を諭す。

〔政隣記〕

閏正月十三日以御書立被仰出之趣、人持組者御組頭之年寄衆御宅へ御呼立被仰渡、尤御請も夫々御取立有之。御書立寫左之通。

付札、人持江

何茂先祖有功に寄、相應之祿を令扶助、後代有用之爲列位を重く定置候事に候。勿論心懸能き人にも有之躰に候得共、其中に者高祿之權而已に誇り、下民之情を不相辨、文武之道に慢り、分限相應之武器を相嗜む心懸薄く、家作・器物は品輕く共榮耀を餝り、遊興奢侈之形も有之、或は儉約を心得吝嗇之族も有之躰、且萃方惰弱之人々も有之様子、不似合儀不心得之事に候。自今嚴重に相守り、文武之道相勵、忠誠心得可爲肝要者也。

享和三年閏正月

別紙寫之通御書立を以被仰出候に付、相渡之候條可被得其意候。將又拙者共よりも猶更會得有之候樣可申渡旨被仰出候條、御書立之通被相守、以來無油斷可被相心得候。若不愼等之族有之候而者、一圓御用捨之御沙汰有御座間敷候條、被仰出之通萬端嚴重可被相心得候事。

癸亥閏正月十三日

閏正月十三日。前田齊廣諸頭に對しその心得を示す。

〔政隣記〕

閏正月十三日、昨日之依御廻文、頭分登城御横目所へ及届罷在候處、四半時頃於檜垣之御間二之間、御年寄中等御列座、御用番甲斐守殿一役同席宛御呼立に而、左之通御演述之上御書立御渡に付、拜見仕御請申述退、柳之御間横廊下に而御横目江御渡之御覺書披見、且今日之

日付に而翌十四日左之通御請上之候事。
別紙寫之通以御書立被仰出候に付、相渡之候條、可奉得其意候。將又拙者共よりも猶更會得有之候樣可申渡旨被仰出候條、御書立之通被相守、以來無油斷可被相心得候。若不愼等之族有之候而者、一圓御用捨之御沙汰有御座間敷候條、被仰出之通萬端嚴重可被相心得候事。

癸亥閏正月

付紙、諸頭江

爲頭者は別而心得も有之、行狀等能相愼、萬端平生心懸可申處、文武之道も慢り、分限相應に武器を相嗜む心懸者薄く、家作・器物は品輕とも榮耀を飾り、加樣之處に奢侈之風儀押移り、幕方惰弱之人々も有之樣子。江戶表江相詰候人々者、於彼地不益之器物抔相求、無用之參會過酒いたし候者も有之躰。不似合爲躰沙汰之限り不心得之至に候。於當地も都而職役不似合、若輩之心得方之人々多有之者、畢竟其道に暗く、剩心懸も無之、不所存之至に候。爲頭者は、不及迄も組等之習しにも相成候樣心懸、組・支配之者共之心底正敷樣に仕立、子弟之者共用立候樣成立て、幕方抔共祿分限に應じ、勝手向之仕抹方爲頭者心懸平生承糺、節儉無油斷申談、不心得之者は加異見、實意を以念頃に致撫育候得者、少は風儀も相改り可申事に候得共、其本意を取失ひ、輕薄而已にて自ら疎遠に相成組之實意も不相知、勝手向之厚薄さ

へ不相分ゆゑ、いつとても共無差別、一統之難澁与申立、事ヶ間敷申出、實儀無之故却而支配人之爲にも不相成、是を役向之働抔と相心得、本意を不致會得故、支配人江之申談方も品に寄り趣意相違之事も致出來、歎ヶ敷事に候。自今嚴重に相改可申候。且又藝術に付召出候者は、第一其業作無油斷相勵候樣常々可申談候。尤其勤之淺深急度可見屆置候。慢怠に依て家業仕下り候族者、可爲不覺事に候。右之趣何も致會得、聊無慢怠相心得、同役和順を以萬事勵可申儀可爲肝要者也。

享和三年閏正月

閏正月十四日。前田重敎の女顯姬危篤の報金澤に達す。

〔筐のまにまに〕

閏正月十三日

一、松壽院樣舊冬以來御血淋之御症に而御治し不被遊、御疲之氣味も被爲見、當二日以來御指引被爲在候內、御藥功も無御座、召上り方も御絕食御同事に而、御脈御細微、御指頭御微冷、御心下御煩悶、御上衝之御樣子に被爲在、御藥も種々指上候へども、爲指御功驗も不被爲見旨、去五日夜不時立町飛脚早飛脚步に傳附、前田修理より申來候旨等、今日御用番より紙面。右に付各松壽院樣へ、今日之日付に而明便に傳附、伺御機嫌有之旨に而、下書も到來。則明

便伺御機嫌。御兩殿樣伺御機嫌には不及由也。

〔筆のまに〳〵〕

閏正月十四日

一、松壽院樣御氣色御指重之段、御用人中孫十郎早打御使に而、八日に江戸發足、昨晩五時頃到着。依之今日四時過登城、以御近習頭戸田傳太郎、一列にて伺御機嫌候處、同人を以御意有之。退出、直二御丸御廣式へ罷出、以御用達伺御機嫌。夫より金谷御殿へ罷出、以石野主殿助を伺御機嫌候處、御指障も不被爲在旨、以同人御意有之。且又昨日主殿助へ相達候覺書之趣申上候處、勝手次第と被仰出候。依之津田宇兵衞へは主殿助より申渡候間、何時に而も申遣次第罷出候筈之旨演述に付、早速御聞屆被遊難有奉存候。早速被達御聽忝旨申述。將又右覺書に、御近習番と有之候へども、當時者御膳奉行に御座候。此儀昨日心付不申、右入御覽候節心付申候旨申候。何頃御膳奉行被仰付候と尋候處、去々年歟於江戸被仰付候旨申候付、左候へば麁末之儀に候旨申達。夫より同御廣式へ罷出、以津田孫兵衞伺御機嫌。但、當病等之人々は以紙面伺御機嫌候也。

但、右早打到着、可伺御機嫌候旨等、昨夜御用宅より以紙面申來候也。

一、御指重りに付而も、今便松壽院樣へ以紙面伺御機嫌。

閏正月十四日。百姓に對し火の元の注意を嚴にすべきことを命ず。

〔御用留〕

火之元儀每度被仰出有之、時々申渡置候通に候得共、是以後者別而農業等に茂罷出候時節に相成候間、灰置所等江入候取灰入念、火之またじいたし候樣嚴重に可申渡候。猶更油斷無之等に候得共、爲念申渡候條、得其意、此段不相洩樣可申渡候、以上。

亥閏正月十四日　　　高田彌左衛門

能州四郡十村中

またじは始末する

閏正月十七日。前田重敎の女顯姬逝去の報金澤に達す。

〔政隣記〕

閏正月十七日、今朝從肥後守樣去十日江戶發之早打御使御使番井深內記參着。松壽院樣去十日御卒去之旨御案內御口上申來。右內證登城無之、十九日朝發出歸。且御大小將御使を以白銀五枚被下之。

猶以病氣等に而難被罷出人々者、其段名下に可被書記候、以上。

松壽院樣御氣色御滯之處、去十日御卒去之段申來候。依之普請者今日より三日、鳴物者七日、諸殺生は當廿九日迄御忌中日數可有遠慮候。

肥後守は松平容詮

十日とあるは實は五日なり

一、頭分以上之面々者、御兩殿樣爲伺御機嫌、明日四時過可有登城候。幼少・病氣等之人々者、御用番宅迄以使者可申越候。

右之通被得其意、組・支配之人々江可被申渡候。且又組等之内裁許有之面々は、其支配へも相達候樣可被申聞候事。

右之趣可被得其意候、以上。

閏正月十七日　　長　甲斐守

閏正月。重ねて內檢地執行の手續に關して令す。

〔御用留〕

近年申渡候內檢地之儀、入用相懸り候而は、村々難澁之上可致迷惑儀に候に付、去年委細申渡置候儀も有之候得共、不行屆郡も有之躰甚心外之事に候。依而當春より諸郡共尙更嚴重に可相心得候。

一、御扶持人中初食事之儀、村方に而飯爲焚、至而輕品一菜認候儀、人々家來之內爲主附爲認可申候。

一、都而入用之品買調候儀、御扶持人中承屆、精誠詰、悉下品を相用可申候。

一、檢地相濟候上、役所へ繪圖指出候節、惣入用綿密に相しらべ、帳面に記指出可申候。

右之通嚴重に相心得可申候。勿論何茂可爲艱難事に候得共、内檢地之儀者樣子有之儀に候間、御扶持人初何茂艱難を堪候而相勤候樣有之度候。右之通書出候上、自然相違之趣於有之者、夫々相紀急度可相咎儀に候條、一統嚴重可相心得候、以上。

閏正月　　　改作奉行

諸郡御扶持人・十村・新田裁許中

二月七日。七十間長屋御門附近の石垣を修繕するを以て下馬下乘に關して告ぐ。

〔政隣記〕

七十間御長屋御門續御石垣御普請有之候に付、往來道幅狹候間、可致混雜候條、同所柵御門外に而下馬下乘有之候樣、夫々可被申談候事。

二月七日

右御城代駿河守殿被仰聞候旨、如例御横目廻狀出。

二月八日。德川家齊の前田齊廣に贈れる鶴金澤に着す。

〔菅原直養覺書〕

二月九日
一、昨夕寒氣代り之御奉書到來、鶴到來之由。御用番等出席之由。今日出席之上承る。
一、御代初御奉書初而之時は、何茂御前へ被召御意有之、御奉書拜見被仰付由。
一、九時前年寄中一切、御家老中一切、若年寄一切に御前へ被召候由に付、何茂罷出候處、御意有之候に付、御奉書甲州取候而拜見、次へ段々相廻、各拜見之上筆頭へ返し、筆頭より元之處へ直し、先以て御奉書を以不相替御安否御尋、殊に御鷹之鶴御拜領恐悦に奉存候。私ども御奉書拜見被仰付難有仕合奉存候旨、甲州御請。御奉書は追而渡被下候樣に仕度候。寫仕置度旨被申上、退去。

〔金龍公記史料〕
二月八日幕府所遣鶴到來。八月朔歩並以上登城賜拜領鶴之羹。

二月十日。前田齊廣去秋初めて入國せしを以て百姓に米を與ふることを告ぐ。

〔御用留〕
御入國被下米之儀に付、御郡所御紙面御本紙與郡へ相廻候に付、先爲御承知之寫相廻申候。
三州類役僉議之趣も御座候間、棟當米高治定之儀追而可得御意候。左候得者御組々家數御米

高等御書上に不及候間、左様御心得可被成候、以上。

四月四日　本郷村　惣　助

仲間宛所

別紙之通今般被下之候旨、御算用場より申談有之候條、得其意、此段夫々不相洩樣可申渡候。尤家數幷米請取高員數組々より可書出候。且請書夫々可指出候、以上。

高田彌左衛門　印

菅野平左衛門　煩

能州四郡十村・山廻・新田裁許中

中居村　三右衛門

笠師村　喜　八　郎

走出村　友右衛門

無役御扶持人中

追而同居人江は不被下候條、此段爲念申遣候、以上。

覺

一軒に付

一、一斗五升宛　　十村并新田裁許・山廻ゟ被下米

同

一、三　升　宛　　惣百姓へ右同斷

同

一、一升五合宛　　惣頭振共ゟ右同斷

右百姓共等貧窮之者共有之候處、農業無怠優相勤候。猶以來隨分出情候樣可相心得候。去秋御入國初之儀旁以被下之候段、御勝手方年寄中被申聞候條、被得其意、此旨可被申渡候、以上。

二月十日　　御算用場

高田彌左衞門殿

菅野兵左衞門殿

追而御米請取高夫々員數可被書出候、以上。

二月十五日。前田齊廣の生母貞琳院を樣付にするの命を傳ふ。

〔筆のまに〳〵〕

二月十五日

一、貞琳院殿御儀、向後樣付に唱候樣、從相公樣被仰進候付、樣付に唱可申旨被仰出候旨、御横目へ御用番より申儀有之候由。今日御用番より紙面到來、組へも如例觸之。

二月十七日。幕府伊能忠敬を遣はして加賀藩内を測量せしむべきことを告ぐ。

〔三守御譜〕

二月十七日御勘定奉行小笠原和泉守より聞番呼立、天文方爲測量伊能勘解由東海道より御國元へ相廻り候に付、覺書を以被仰渡あり。

日記。十七日勘定奉行小笠原和泉守殿より、御城中の口へ今日御呼出に付、不破氏半藏。聞番。被能越候處、御勘定組頭田口五郎右衞門を以、天文方爲測量伊能勘解由東海道より御國許へ相廻候に付、覺書を以被仰渡候。右勘解由は百姓躰浪人者にて、いまだ公邊へ被召出無之輕き者之由。

二月十八日。郡方に於いて盜賊改方與力及び足輕等に不正の擧動あらば屆出づべきことを命ず。

〔筒井觸留〕

盜賊改方與力・足輕等御郡方相廻り候節、右役人權威を以不正之族も有之、彼是村方及迷惑候躰有之旨に而、今般宮崎藏人より右役人共ゟ、於御郡方等不正之振廻等無之樣、改而急度申渡候由、此段御算用場奉行中ゟ演述有之。以來右躰之儀風評たりとも承候はゞ、藏人ゟ申聞候樣致度旨に候間、於村方共旨相心得、役人に不似合振廻等有之候はゞ、早速可及斷候。尤役人共權威に恐れ、不申出候族も可有之候哉。左候而者趣意に令相違候條、急度此旨可相心得候。且又前段之通藏人より右手合役人ゟ申渡置候事に候得者、不心得之者此後右手合役人等へ取組等いたし候を、於村方茂見逃し候族有之候はゞ、於彼役所も遂詮議、急度可申付儀茂有之候間、是等之趣嚴重に相心得候樣夫々可申渡候、以上。

亥二月十八日

高田彌左衞門

菅野兵左衞門

能州四郡十村中

〔筆のまにまに〕

今日云々は奥村尙寬

二月廿四日。德川家基の廿五回忌法會を神護寺に營む。

二月廿四日

一、今日孝恭院樣廿五回御忌御法事、於神護寺御執行。御奉行前田內匠助也。今日朝詰之

處、積氣等不出來に付斷紙面出候。昨日惣見分も斷之候。翌廿五日恐悅にも難罷出、以紙面申上候事。

三月二日。紫野芳春院宙寶和尙金澤城に登る。

〔政隣記〕

三月二日、京都紫野芳春院宙寶和尙、御入國爲御祝儀登城御目見、御料理被下之。

三月十一日。江戸詰の諸士難澁するを以てその貸渡金返納を免除すべきことを告ぐ。

〔御觸留〕

定番頭ゟ

覺

一、天明八年以來、於江戸表等諸物高貴等に而、詰人一統難澁に付、御貸渡金有之、返上方之儀追而可被仰渡旨申渡置候分、被下切之事。

但、近年於江戸表、頭・支配人爲組用支配別段御貸渡之分、幷頭分之内に茂願之趣有之、別段御貸渡之分者、尤舊臘申渡置候百石三十目宛之内ゟ打込、諸方御土藏ゟ上納之筈に候

事。
一、御家中一統難澁に付、寛政九年・享和元年御貸渡銀、曁去暮一統御貸渡銀之分、被下切候事。
右御家中之人々勝手難澁に付、右上納之分如此被仰付候事。
右之趣被得其意、組・支配之人々江可被申渡候。組等之内裁許有之面々者、其支配江も相達候樣可被申談候事。
右之通一統可被申談候事。

亥三月十一日　　横山山城

三月十八日。前田治脩夫人、本鄉邸內梅之御殿に移る。

〔三守御譜〕
三月十八日御前樣梅之御殿へ御移あり。十二月朔日より大御前樣与奉稱。是齊廣公小君御前樣と奉稱に付てなり。

三月十八日。學校に於いて當分儒學の稽古を停めしむ。

〔政隣記〕
三月十八日

付札、杉野善三郎江

於學校儒學修行方今般夫々御仕法被仰付候條、相極り候迄は右稽古被指止候。儒學之外は是迄之通に候。此段可申渡旨被仰出候條可被申渡候事。

三　月

右今日小塚八右衛門以廻狀到來之由、菊池より傳達之事。

三月二十日。學校諸役人の行狀に就いて諭す。

〔政隣記〕

三月廿日學校方御用杉野善三郎等江、左之通奥村左京殿被仰渡候旨承に付記之。

於學校御役儀被仰付候人々は、諸士教育之師長に候得者、第一言行を愼み、私之意地を離れ、人々相和し禮讓を守り可申儀勿論に候處、中には行狀不宜、且家內取締方不行屆者も有之、或は辯才を以猥に世上を談じ、奸佞にして媚を求候樣之躰も有之哉に被聞召候。乍去是迄之儀は、各指引方不行屆故与被思召候間、先御糺不被遊、今般御仕法も御立可被成候事に候間、急度夫々申聞無油斷指引可致候。

右之通被仰出候條、謹而可被得其意候事。

三月廿四日。本鄉邸の物見櫓類燒の難に罹る。

〔政隣記〕

三月廿四日、江戸表北風強吹候處、晝九時頃指違町より出火、御上邸へ風筋惡敷、于時烈風大火に相成、御厩之方危く、本郷六丁目町家半分許も燒失、御物見ゟも燃付候得共、御人數に而防留、夕七時頃鎭火。

右に付御一門樣方より御人數被進、御屋根ゟ上り防之。但御家老中依御指圖、御步中も御居間書院等之屋根へ上り飛火防之。且御邸內御土藏幷御貸小屋へも飛火來、燃上り候得共防留候に付、御別條無之候事。

三月廿六日。諸士及び町人の嫁娶を行ふ家に石礫を投ずるを禁ず。

〔政隣記〕

御家中之人々幷町方之者致嫁娶候節、石打候儀堅不仕樣前々より申渡置候處、近年甚猥に相成、石を打門戶等損、あやまち人も可有之躰。小身者は別而可制樣も無之樣子に相聞候。以來右之族於有之者、急度相咎、交名等相糺又は召捕候樣、盜賊改方廻役人ゟ可申付旨、宮崎藏人ゟ申渡候條、被得其意、此段組・支配之面々へ可被申渡候。組等之內裁許有之人々者、其支配ゟも相達候樣被申聞、尤同役中可有傳達候事。

右之趣可被得其意候、以上。

三月廿六日　　　前田内匠助

菊池九右衛門殿

三月廿八日。伊能忠敬將に領内を測量せんとするを以てその待遇方を定む。

〔筒井觸留〕

此度爲測量御用伊能勘解由与申者、東海道筋を初め致巡路、御領國江罷越候段等、別紙從公儀相渡り候旨に而、御用番年寄中より被相渡候に付、寫相達候條、被得其意、右勘解由先觸到來次第、休泊幷人馬繼立等夫々不指支樣可被申渡候。且又右勘解由、御領國に而江戸表江之紙面相願申儀も可有之段申來候條、是又可被得其意候、以上。

三月　　　御算用場

高田彌左衛門殿

菅野兵左衛門殿

猶以右勘解由格式等之儀者、聞番より承合候所、高橋作左衛門弟子に而、いまだ公儀江被召抱候儀に而も無之者に候間、敢而重き取扱に及不申旨。且勘解由上下六・七人に而、御用長持等爲持、當二月廿五日頃江戸表發足之筈に候旨申來候間、右等之趣爲心得申達候、以上。

五十子崎本のまゝ

天文方　高橋作左衛門弟子

伊能勘解由

右者爲測量御用、東海道筋品川より駿州沼津・江尻等に懸り、夫より海手に添、同國田中・遠州相良・三州五十子崎・尾州師崎等、都而南之方海手に添相廻り、同州宮より佐屋・津島等陸路通り、美濃大垣江出、關ヶ原より越前國敦賀にむかひ、若狹之國境迄罷越、夫より又海手に添、東ハ方河野・三國等、夫より加賀・能登・越中等都而北海之浦々に添ひ、越後出雲崎迄罷越、此所より佐渡江相渡り、同國四方浦々不殘相廻り、又越後江立戻、寺泊りより歸路同國長岡・上州高崎より板橋宿に向ひ、中山道通り當表江罷歸候事。

但、能登國之儀者北江出張候地に付、地圖〆り之爲同國川尻・今濱邊に而、勘解由弟子共之内より致手分、二手に相分り、一手者陸路に而飯山・高畠通り、東之方七尾江罷通り、一手者海手に添ひ北之方相廻り、一所に落合候積り。

右之通罷通致測量候之間、指支無之樣可致旨、堀田攝津守殿被仰聞候に付、此段申達候、以上。

二　月

右寫之通申來候條、得其意、夫々可申渡候。尤本文之通り、右勘解由先觸到來次第、休泊等

之儀不指支樣可相心得候、以上。

菅野兵左衛門

能州鳳至・珠州兩御郡十村中

〔筒井觸留〕

天文方高橋作左衛門殿弟子伊野勘解由、爲測量御用近々御領國ゟ罷越候に付、支配所において村方役人共等會釋之事。

一、勘解由往來筋之村方者、其村役人一人宛先立可申候。

一、宿方之儀者、宿端より宿端迄役人一兩人跡より爲指添、其領之內者村役人等之內先立可申候。

一、晝泊等ゟ者村役人一兩人宛、幷十村手代も爲相詰、諸用爲相辨可申候。

一、往來之村々裁許之十村手代一人跡より爲指添、幷十村儀者晝泊候用事も無之哉与罷越候樣に可申付候。會釋之儀者御代官手代同事に爲致可申候。

一、晝泊共宿亭主袴着用可爲致候。上下に者及申間敷候与奉存候。

右之通私共詮議之上御達申候。尙御指圖御座候樣仕度候、以上。

亥三月十四日　杉山新平

菅野兵左衛門
松　崎　左　平

御　算　用　場

右之通御用番ゟ相達候所、紙面之通可相心得旨被申聞候條、可被得其意候、以上。

三月廿八日　　　御　算　用　場

高田彌左衛門殿

菅野兵左衛門殿

別紙之通御算用場より申來候條、得其意、會釋等之儀夫々不相洩樣可申渡候、以上。

四　月　朔　日　　　高田彌左衛門

能州四郡十村中

三月。火消の勤方を記して提出す。

〔火消勤方諸事留帳〕

一、御鷹野等、或は火事に付、若御巡見之節、都而馬禮仕馳通可申候事。

但、家來騎馬之者は下立、作法能馳通可申事。

一、御通之節、火之見所より見え渡候所は、番人御通之間下し、戸は其儘明置可申事。

一、纏持・鳶之者、大模様之物着仕、御城中江入込候儀不指支候事。

但、此一ヶ條、寅三月十五日御城代本多安房守・前田大炊より申談候間、勤方帳面に記來候事。

一、當番之節は馬爲牽申筈に候事。

一、火之見所等致出來候はゞ可致役人候。其節御用番幷組頭江茂可及屆候。且亦御横目江茂及屆、纏・長柄・持柄・鑓印等迄繪圖相調、以紙面可相達事。

一、役人等に而上下組合致相違候砌は、組合之儀相調、筆頭より御用番江及屆、且御横目所江茂相達可申筈候事。

一、町續在鄉出火之節、防可申候。町外れ少間在之在鄉に而茂、風筋悪敷町之方危く候者、主人は町端に相扣、人數迄遣打消可申候事。

一、非人小屋之儀は、裁許與力より申聞次第、罷越防可申筈に候事。

一、都而人非之圍中江は、人數入防不申筈候事。

人非とは穢多非人などといふ

一、非番中行歩等に而遠方江罷越候内出火之節は、人數迄指出、其段御横目江家來之者より相達、且又同役江人數迄指出候間、指引有之樣兼而申付置候旨可申達筈候條、及指圖爲防可申候。役引に而人數迄指出候節茂、右に準候事。

一、御横目・御徒横目等、無構梯子江揚可申事。
一、忌中之節は都而出馬有間敷事。
但非番よりも罷出候程之火事に候はゞ、人數は指出可申事。
一、家來之者長髪に罷在候忌中之節、出馬は勿論、人數指出候儀茂指扣可申事。
但、此儀寛政十年午二月十五日本多勘解由より、御用番村井又兵衛江、小竹政助を以相達申候處、其通可相心得旨同人を以同日申談候事。
一、雪途に相成乗馬指支候砌は、火事之節馬上指止候儀、筆頭より廻狀を以同役中江可申遣筈に候。尤牽馬茂指止可申候。且又御横目へも以紙面可申達、御使番江茂演述有之樣書出可申事。
附、雪消乗馬指支不申節茂、最前之通廻狀等可指出候。且又筆頭忌中に候者、次之筆頭より夫々可申談筈候事。
一、巡見上使御通行之節は、火之見所より見渡候所は、番人下し置申筈候事。
但、火事之節茂、上使旅宿前成だけ除罷通可申筈に候事。
一、御寺等請取火消、役引等に而、若御寺近火事之節人數指引之儀、且又御宮請取火消指引等、或は服中に付人數指引之儀、御用番より申渡候者、助先より右指引相勤可申筈に候

事。

右火消役勤方、天明四年志村五郎左衛門を以御尋に付、元祿年中以來勤方帳面、今枝刑部等より指出申候。然處其後追々被仰渡等之趣御座候に付書加、今般同役遂詮議、右之通勤方帳面相調上之申候、以上。

享和三年三月

多賀左近 判
深美主計助 判
山崎伊織 判
玉井勘解由 判
松平大膳 判
三田村內匠 判
篠原彌助 判
生駒內膳 判
篠原賴母 判
富田外記 判

右帳面御代替に付、享和三年三月御用部屋横濱善左衛門を以指上。前々御代替に書上候例無

之に付、御用番長甲斐守殿ゟ如何相心得可申哉相尋候處、一統之通書上可申旨被申聞候に付、則同役申談調上候事。

四月六日。前田齊廣、治脩と共に石川郡粟ヶ崎に行歩を行ふ。

〔政隣記〕

四月六日粟ヶ崎ゟ御兩殿樣御行歩。御道筋宮腰街道御早乘有之。

四月六日。諸士の上納すべき借用銀を凡て一紙證文に改め提出することを命ず。

〔政隣記〕

享和二年十二月十六日の條參照

舊臘御家中一統被仰渡候、諸方御土藏ゟ上納銀并學校銀・產物銀、幾口有之候共、一紙證文に相改、無利足を以、百石に付三十日宛之圖りを以、當七月より取立、御切米・御扶持方被下候人々は、來三月より取立候樣被仰渡候條、別紙草案之通、當時殘元高堅物に認、人別に取立、一組切一集に可被指出候。於當場根帳に引合、當時殘元高相極、重而證文取立可申事。

一、他國御使人組當御貸渡金等、都而年賦返上に相成居候分も、一紙證文に打込取立可申

事。

一、地·他國爲御用罷越候節相渡候御扶持方代、本勘相滯候分、年賦に被仰渡出銀所へ返上之分も、一紙證文に打込取立可申事。

一、寛政十一年·享和二年會所裁許御貸銀、右二ヶ年滯利足之分も一紙證文に打込取立可申事。

一、御參勤御歸國之節、越中境より信州牟禮迄通人馬增賃銀、返上殘り元銀之分も、一紙證文に打込取立可申事。

右ヶ條之通に候條、早速取立可被指出候、以上。

四月六日　　御算用場

津田權平殿

追而同役中傳達可有之候。且證文文段之儀は當場可被承合候、以上。

四月十日。三寶院門主明年入峰せんとするを以て領內の當山派山伏に通牒せんことを求む。

〔三寶院御門主御入峰一件〕

一翰致啓達候。然ば當御門主、來子七月天下御安全御武運長久爲御祈禱、和州大峯山江入峯被遂御修行度旨、今度公儀江被仰立候處、御先格之通御勝手次第可被遂御入峯之旨被仰出、因玆彌來年七月被成御入峰候。就夫其御領内罷在候當山派山伏、來年六月廿日迄に醍醐江參着供奉相勤之樣、乍御世話被仰付可被下候。尤病氣之輩は格別、其餘之分は袈裟頭帳本始諸山伏共、當御門主御一世一度之御入峯之儀に候間、不殘罷越供奉可仕之旨、頭職之者共江宜敷被仰付可被下候。誠に御事多中御面倒之儀に御座候へ共、任先例得御意候間、何分宜御計意之儀御賴爲可得御意、如此御座候。恐惶謹言。

三寶院御門主御內

四月十日　飯田周防守經明　判

北村長門守季保　判

加賀中將樣

寺社御奉行中

追啓、本文得御意候通、來子七月當御門主御入峯に付、諸國當山派山伏共江先格之通頭襟役銀申付候。若我意に任不指出之、相滯候者も有之候はゞ、其御役所江頭職共より相訴、無滯樣可仕之旨申達候間、萬一不埒者御座候はゞ、彼者共より可願出候。其節は乍御世話被遂御

享和二年九月十二日の條參照

吟味、急度被仰付可被下候。
右御賴爲可得御意如斯御座候、以上。
四月十日
飯田周防守
北村長門守
加賀中將樣
寺社御奉行中

四月十五日。御禮人列居の件に關し御用番年寄より戒告す。

〔富田覺書〕

一、當四月十五日御用番より申來、左膳罷出候處、出仕列居今以折々は四時以後に相成候儀も有之候。去年被仰出候趣も有之候に付、猶更御横目江も夫々申聞置候條、以來列居幷御禮人慣も遲々不及樣相心得可申旨、御用番左京被申聞候。右に付御横目よりも彼是及示談致詮議候得共、必是に而引立早く可相成候与申仕境も無之、畢竟御禮人等多き節は、慣に隙取遲々にも相成候。唯今迄之振、五つ時御帳出し、同半時に御帳引候而、其上に而出人等しらべ、御横目所に而仕、夫より御禮人有之節は、御奏者番何茂相揃、尤御横目何も罷出慣相始め候。御禮人進退慣之節、其披露人人品得与見屆不置而者難成候に付右之通候得共、同役江申

談候得ば難相成譯にて茂無之候間、御舊格には相違候得共、御奏者番幷御横目、御帳前へ罷出候分無貪着、五つ時頃より慣相始候者少は違可申候。又者御用番より一統江被申談、六半時より五つ時迄之御帳之趣に相成候得者、是に而者半時之違に相成候間、大躰しらべ方も五半時迄に者相濟み、短日たりとも指支申間敷候。先此兩樣より外仕法も無之候。同役共相揃慣見屆候儀も、御古格之御作法に相拘り候儀に候得ば、爲私容易には難致御座候間、御指圖次第相心得可申候。假令慣五つ時に相始候而茂、御帳五つ半に引、夫々出人於御横目所相しらべ、其上に而列立致候得者、前段に申如く格別之違無之候。夫より者右之通御帳出刻限六つ半時に致候得者、短日之頃たりとも多分四つ時前には列居揃、指支申譯無之。去共此儀者重き儀に候得者、此方より者彼是与難申儀に候段、御横目永原治九郎同道に而、源左衞門・小竹直右衞門迄申達候事。

右之通四月廿九日相達置候處、今四日御用番より御横目一集に罷越候樣申來、治部・池田勝左衞門申談罷出候處、別紙之通御用番又兵衞口演に而被申聞候に付、爲念覺書乞請置候事。

　朔望等に而出仕人有之節、御禮人等有之候得ば、御帳引候上、出仕斷等相しらべ候上、御禮人慣各相揃被致見分候振合に候得共、列御勢込に付、御帳前へ被出候各兩人不相揃慣可被致見分哉之旨等被申聞候趣、達御聽候處、不被相揃共早く慣被致見分候樣可申渡旨被仰

出。

四月十六日。學校の組織を改むべきことを議す。

〔政隣記〕

四月十六日、於學校討論之席就被仰付候、右席立方之儀遂僉議可被申聞候。且左之御定書之儀、追而學校へ張出しも可被仰付思召之旨被仰出候。尤其節者御右筆ニ調筆被仰付候由、奥村左京殿御口達に而被仰聞。承、杉野善三郎。

定

學文之本意は、書物之理に通達し、聖人之遺教を法則として、五倫之道を守り、分限に應じ都而有用之儀を可致修行之儀、いつしか本意を遺却し、儒行之者は博識を事とする而已に而、世事を外にし、御國家之用をなし候儀曾而無之候。以來は於學校有用之儀を可修行ため、別に討論之席を設、識之多少によらず實志輩は此席へ入、有用之義を論じ、學頭等与是非を辨じ、事理を諭し、行狀を責可致教導候。若私之意地を立、會得致し兼候族有之節者、可達御聽候。理非に依可被爲及御裁斷候。且又講義・會讀等者勿論、習學之書生たり共、右之趣意を令可致教諭儀尤候事。

右之通可申渡旨被仰出者也。

享和三癸亥年四月

文學校御仕法

一、學　頭　　一　人

但、組頭並役料百五十石。

一、學　監　　一　人

但、御大小將橫目格、御小將頭御用番支配、役料百石。

右兩役可被仰付候。乍併相應之人品有之候迄は、いつ迄も可爲闕役事。

一、都　講　　一　人

但、御大小將組、役料五十石。

都講之儀組柄、以後右之通御定可被遊候。此分も相應之人品指當り無之候ば、當分可爲闕役事。

一、助　敎　　人數不定

一、助敎格　　同　事

但、勤方助敎同事。

一、讀　師　　人數不定

一、讀師格　　同　事

但、勤方讀師同事。

以後右之通に御定、士列以上は助教・讀師に被仰付、其以下者助教格・讀師格に可被仰付候。

一、生　徒　　人數不定

右は助教・讀師等相望候人々大勢有之節、諸士之儀は、相應之人々候者、尤直に可被仰付候。

子弟之儀者、學才等勝れ候人々は格別、其餘者此生徒に可被仰付候。

一、討論之席

右之席を御定有之、不依識之多少、實志之輩此席江入、有用之義を可致修行事。

四月十八日　所口町奉行が能登口郡十村配下の者を召喚し得る場合を制限す。

〔岡部舊記〕

口郡之者共、所口町奉行於手合相尋品等有之、互に裁許々々江申渡、是迄指出來候組々も有之候得共、僉議之趣有之候條、以後は指定り候御藏方幷島之內流刑に拘り候外は、一圓指出間敷候。若指出候樣所口より申渡有之候はゞ、拙者共より申渡無之候而は、指出間敷旨申渡置候段可及返答候。右之趣可得其意候、以上。

亥四月十八日　高田彌左衛門

菅野兵左衛門

口郡十村中

四月廿二日。犀川・淺野川の川除取締方に就いて令す。

〔政隣記〕

犀川・淺野川川除へ塵芥等捨置、御普請之節取除不時人足相懸り、其上竹籠等之上殺生人等致往來、籠石等に相障、別而夏中水遊人多、御普請所踏荒し、甚御不益に相成候に付、川邊之者烈敷相廻り候得共、人少に而御縮方行屆不申候。前々一統被仰渡候得共、末々心得違之者も有之躰に相聞候間、猥成儀無之樣一統嚴重に被仰渡御座候樣仕度奉存候、以上。

亥四月十二日　石川兵勝

上木金左衛門

小幡右膳

津田善助

奥村左京樣

犀川・淺野川川除へ塵芥等捨置申間敷旨等之儀に付、別紙御普請奉行出候に付、寫相越之候

條、被得其意、組・支配之人々江嚴重可被申談候。組等之内裁許有之面々は、其支配へも相達候樣被申聞、尤同役中可有傳達候事。

右之趣可被得其意候、以上。

四月廿二日　　奥村左京

津田權平殿

但、新番頭より御留守居物頭迄御用番連名。

四月廿四日。金澤城七十間長屋御門附近の石垣修理を終りたるを以て通行を舊に復せしむ。

〔政隣記〕

付札、御横目江

七十間御長屋御門續御石垣御普請中、同所柵御門外に而下馬下乘有之候樣申渡置候得共、右御普請相濟候間、當廿四日より下乘所御平常之通不指支候條、此段夫々可被申談候事。

四月廿三日

同年二月七日の條參照

四月廿六日。前田齊廣諸士に對し行狀及び節約の件を諭す。

〔政隣記〕

四月廿六日、昨日御用番左京殿依御廻狀、組・支配有之人持・頭分登城之處、九時前檜垣之御間於二之間御年寄中等御列座に而、一役宛被呼立、左之四通左京殿御渡。畢而左之御横目ゟ御渡之御覺書、柳之御間横廊下に而披見退出之事。

但、人持組幷御先手物頭ゟ者、御組頭之年寄中於御宅被仰渡、御大小將御番頭・同御横目者御小將頭於宅、御使番は寺社奉行於宅申渡有之。

附、御近邊之人々ゟも夫々被仰渡有之。

人持・頭分之面々ゟ者、先達而愼方等之儀被仰出候品も有之候得共、一統ゟ者未被仰出候。依之今般愼方等幷儉約之儀御書立寫兩通之通被仰出、尙又省略等之儀別紙之通可申渡旨被仰出候に付、都合三通相渡之候條、奉得其意、嚴重可相守候。

右之趣被得其意、組・支配之人々急度可被申合候。組等之內裁許有之人々者、其支配へも申渡候樣、是又可被申聞候事。

右之趣可被得其意候事。

癸亥四月

御書立寫

諸士何も家祖之功に寄夫々令扶持、後代有用之爲格別之定も申付置候處、別而近年自分取失候族も有之躰。尤其内に者心懸能者も有之候得共、惣躰風儀悪敷故、子弟之成立もおのづから不宜候。且又分限相應之武器を可相嗜心懸も薄、家作・器物抔榮耀を餝り、次第に奢侈之風儀押移り、家内暮方惰弱に相成、武士之本意を取失ひ候者も有之躰、畢竟其道に暗き故に候。自今學問を勵み、武道を相嗜可申候。勿論武道を勵むとていかつ之風儀有之間敷、學問に志候とて高慢文雅風流に流れ不申樣に相心得、唯本意を不取失樣、能々致會得相勵み可申事可爲肝要者也。

享保三癸亥四月

御書立寫

近年不時物入多、其上元來入用与取箇不引合故、年々難澁相重み候。依而夫々節儉之儀可申付候得共、急には符合之所江至り不申儀候間、乍心外當分借知難相返候。左候者家中之人々、勝手取續方行屆兼可申候條、都而遂儉約可申候。衣食住之儀者、貴賤貧福之差別有之事に候得共、前段之通之時節に候間、たとへ禮式に拘候事たり共、少も世風不拘萬事を令省略、何分取續心得尤に候事。

享和三癸亥四月

覺

一、御城中たり共召連候從者之儀可致省略候。尤頭分にても、從者指支候節挾箱爲持不申儀、可爲勝手次第事。

但、近年年頭には行粧飾候樣子に候得共、以來は右に准可申事。

一、衣服之儀者、自・他國共成限致麁服可申候。袴等も准而麁品を用可申事。

一、女之衣類、禮服たり共麁品を用ひ、常は成限麁服可爲致着用、花美成染色等一圓有之間敷候。銀之笄御停止之儀每度被仰渡候得共、今以相用ひ候者も有之樣子、且又櫛等上品無用之儀前々被仰渡候得共、是又今以高料之品相用させ候躰、畢竟父・夫等且其主人之申付方等閑故に候。以來榮耀を加へ候品堅差止可申事。

一、花麗成風躰之下女召置、惰弱之風俗に寄、妻子迄も見習、おのづから不宜風俗に押移申事に候條、以來嚴重に相改可申事。

一、無據押立候振廻之儀、大身之面々たり共一汁三菜、酒三篇に過べからず候。勿論右之外肴・濃茶・後菓子等出候儀堅有之間敷候。右に准小身之人々、成限可致省略候。其外者長座之儀有之間敷事。

一、家作之儀輕くしつらひ、榮耀之儀有之間敷、同役等寄合候節も人多に候共、成限從來之

間に而用事相調可申事。

一、婚禮之儀、近年押立候式は無之躰に候得共、內證に而者身上に應不申物入をいたし、此一事に而難澁之基に相成候人々も有之躰に候。此儀は第一申請候者も心得可有之儀に候。且又捨料或は普請料として金銀を取遣り之儀御停止之儀に候。前々より被仰渡有之候處、今以心得違之者も有之樣子沙汰之限に候。以來嚴重に相心得可申事。

一、神事・佛會等之儀、隨分輕執行等之儀可相心得候事。

但、身分不相應之寄進いたし候者も有之躰、不所存之至、急度可相心得候事。

一、音信贈答之儀者、樹木・菓物類或は至而輕き品取遣りいたし候儀者格別、態々相認、費をいたし候儀は有之間敷、親類緣者共之內吉事之節も、輕き干肴類にても祝儀は可相整事に候。年回等之節も右に准、輕き品取遣り之儀は格別、費ヶ間敷儀無之樣可相心得候事。

一、新役幷新に御番入いたし候者、或は江戸表等江初而相詰、又は爲御使罷越候者抔、都而不案內之事に候得者、互に勤向幾重にも念頃に可申談候處、無左して互に輕薄に相成、夫に付費ヶ間敷事も有之樣子、甚風儀不宜事に候。以來急度相心得可申事。

但、江戸表等へ罷越候節餞別幷土產之儀、先達而被仰出候通急度相守可申事。

一、年頭・暑寒幷江戸表等へ罷越候者抔廻勤之儀、近年別而多相成候躰、以來は其頭・一類・

同役暨親き者は格別、其外廻勤之儀心得も可有之事。

一、諸殺生之儀致間敷儀に而者無之候得共、次第に盛に相成候而、色々与自由をいたし、費に相成候躰。其上殺生之於場所不埒之族も有之様子に候。以來急度相心得可申事。

右ヶ條之品々、前々被仰渡候得共、猶更今般改而被仰出候。且亦是迄慎等之儀被仰渡候得共、萬事ひそと罷在候事之様に相心得候者も有之躰、畢竟御趣意不致會得故に候。緣者・親友相寄、互に爲を語合、或は稽古事に而寄合申儀、暨家内之者も誠に順氣之ため不加榮耀費なき様に相守、致行歩候儀抔可有之事に候得共、只榮耀ヶ間敷儀、且者惰弱之風儀無之様嚴重に相守、此外前々被仰渡候條々、彌以可相守候。若相背候者於有之者、急度御糺可被仰付候事、以上。

癸亥四月

四月廿七日。寛政十一年地震の際諸士に貸與したる銀子の一部返納を命ず。

〔政隣記〕

四月廿七日左之通御用番左京殿御渡之旨等、定番頭佐藤勘兵衛より例文之以廻狀到來之事。

付札、定番頭江

寛政十一年五月地震に而、御家中之人々居宅圍通り等損所多可爲難澁儀に付、増御借知之分一作被返下、其節半知并三ヶ一被下置候人々江者、三百石より以下者百石に付十石宛、夫より以上者百石に付五石宛之圖りを以、代銀に而御貸渡、本知被下候上一時返上候樣申渡置候。右半知等之人々返上之分、去暮被仰渡候百石に付三十日宛之圖りを以、諸方御土藏へ上納銀之内へ打込可有返上候事。

右之趣被得其意、組・支配之人々江可被申渡候。組等之内裁許有之面々者、其支配江も相達候樣可被申聞候事。

四月

右之通一統可被申談候事。

五月六日。前田齊廣、治脩を招請す。

〔日記〕

一、五月六日曇。今日相公樣御招請、御能被仰付候に付、各望次第見物被仰付候段、此間被仰出候。右御禮、今朝表方において、何も一所に以五郎左衛門申上候事。

一、相公樣四半時之御供揃に而、九時過被爲入、九半時過御能初り、年寄中・御家老中・若年

寄、服上下に改、見物所に罷越。御能暮六時相濟、各一列表方において、以十郎左衛門御禮申上候。追付退出之事。

但、御能之內相公樣御出被遊候に付、年寄中等手をつき居申候處、關屋中務を以手を揚候樣被仰出、甲斐守より御禮申上、何も手を揚候事。

五月七日。前田齊廣入國後初めて生母貞琳院を招請す。

〔政隣記〕

五月七日、今日御入國後初而御表に貞琳院樣御招請、御能御番組御饗應御獻立左之通。但御番組並御獻立書略之。

五月十日。老臣等能囃子を行ふ際役者と共にすることを禁ず。

〔御家老方留用之覺〕

五月十日。

一、御用番又兵衛より內記被呼立、今日甲斐守御前に被召候節、左之通御意に付及演述候段被申聞。依而猶更聞請之趣左之通相調、圖書別席之序に甲州に入披見候處、大綱此通之旨被申聞候事。

能囃子之儀に付、兼而各樣に被仰出之趣も御座候得者、是已後は家來等致相手、事靜に能囃

子折々慰にいたし候儀は不苦候。役者加へ申儀者不可然候。尤長じ不申様可相心得候。且又役者呼立、役者のみにて爲仕候儀は不苦候。先達而私共ゟも御内々被仰出置候間、右之趣可被申聞旨被仰出候由御演述之事。

五月十四日。伊能忠敬測量の爲來るべきを以て能登の十村等に主附を命ず。

〔筒井觸留〕

覺

口郡外浦筋　武部村　四郎太夫　堀松村　平　藏
同　内浦筋　縵口村　五兵衛　高田村　喜三次
外浦鳳至郡　大澤村　内　記　稻舟村　藤　太
珠洲郡筋　折戸村　源　助　宗玄村　忠左衛門
内浦鳳至郡　鹿野村　恒　方　鵜川村　爲次郎

右天文方高橋作左衛門殿弟子伊野勘解由、測量爲御用御領國ゟ罷越候に付、村役人等出迎之儀先達而申渡置候。右勘解由罷越候時分、御用方も如何可有之哉難計候條、右之通其方中主附申渡候條、尚心得方等之儀追而可申渡候。奥・口共巧者成手代相撰、奥・口に而一人宛主付

可申付候、以上。

亥五月十四日　　高田彌左衛門

右主付人宛所

五月十九日、御横目足輕岸本喜右衛門先年寶圓寺檢分の際高足を用ひたるを以て指扣を命ぜらる。

〔御横目方留役記〕

付札、寺社奉行ゟ

一、寛政九年十一月廿一日寶圓寺破損所、右見分寺社方破損修理裁許與力本橋仙右衛門罷越候節、御作事所御横目足輕岸本喜右衛門儀も罷出候處、前後高足に而仙右衛門与一所に致見分候儀に付、仙右衛門与及掛合候品有之。右一件に付、仙右衛門等より毎度紙面各存寄之趣等紙面を相添被指出、口達に而も時々被申聞之。先以仙右衛門は草履に而致見分候處、喜右衛門儀は高足罷在、何様及應答候族等、彼是分限を取失不埒之至に付、小頭役指除、指扣罷在候樣申渡候。且又足輕共之儀は、都而才領・御使御用下足に而相勤候身分之所、右躰御寺見分之場所等ゟ高足に而罷出候儀は有之間敷儀候。且足輕共書付等に與力を書放に相調候儀も、御用に附而は左樣にも可有之候得共、身分之儀に付相尋候品有之取立候書附等は、心得

茂可有之儀候。畢竟身分之儀与御用向相混、次第僣上押移り、心得違之儀共致増長候躰に付、以來心得違無之樣一統心得方之儀、急度可申渡旨、割場御奉行江申渡候事。

亥五月十九日

付札、御作事奉行江

一、寺社方破損修理裁許與力本橋仙右衛門儀、寛政九年十一月寶圓寺破損所見分罷出候砌、御横目足輕岸本喜右衛門儀高足に而罷出候に付、段々及懸合候品有之候。各に而は何茂役元相勤候人々之儀に候得共、右掛合之儀は、全御横目足輕心得違之儀与被存旨等、舊臘委曲紙面被指出候。先以仙右衛門は草履に而致見分候所、喜右衛門儀高足罷在、何廉及應答候族等、彼是分限を取失、不埒之至に付、小頭役指除、指扣罷在候段申渡候。且又足輕共之儀は、都而才領、御使御用下足にて相勤候身分に候處、右躰御寺見分之場所等を、高足に而罷出候儀は有之間敷儀に付、以來一統心得方之儀、割場御奉行江申渡候事。

亥五月十九日

五月廿九日。江戸の詰人等難澁を訴ふるも貸銀等の方法より救濟することを能はざるを告ぐ。

〔坂井留記〕

付札、組頭江
近年打續諸物高貴、諸人一統難澁之旨、其時々願書有之候得者、是迄御救茂被仰付候。然處去年已來莫大之御物入有之、當時御運方如何共御手段無之候付、今般御節儉之儀被仰出、御家中之人々茂何分遂儉約、取續方之儀可爲肝要旨被仰出候通に候得者、此表諸物高貴に候共、諸人假令御公界向相勤候人々たりとも、先達而被仰出候御趣意を以、遂儉約取續可申儀に候。仍之如何樣之願方有之候とも、右樣之御指支に候得者、是迄与違御貸渡金等之儀一圓無之候條、其心得有之、取續方之儀猶更嚴重に相心得候樣、兼而一統可申渡旨被仰付候事。
右之趣被得其意、組·支配之人々江可被申渡候。且亦諸頭中江演述、組等之人々江申聞候樣可被申談候事。
一筆致啓達候。向著の砌——然者別紙前田修理殿御渡に付夫々申談候。去年七月抔結構に被仰出御貸渡、去暮も相應之御貸渡有之候所、當月に至り右被仰出之趣誠に當惑至極いたし候。併此上相願申儀も致がたく、先紙面指出不申候。乍去當春病氣等に而罷歸候者江も、一圓御貸渡被成間敷旨被仰渡候付、其節非常罷歸候者江は、何分是迄之通御貸渡御座候樣仕度旨、紙面も指出置申候。病氣に而御暇願罷歸候者は、尙更旅用金等手薄に而者難相成趣に付、卽日御同人江於別席段々存寄申述、及御催促置申候。右得御意度如此に御座候。猶期重

便候、以上。

五月廿九日　　　　　　　　　　堀　兵　馬

同　役　中

是月は大盡なり

五月晦日。文武學校に出席の手續等を命す。

〔政隣記〕

御家中一統兩學校稽古出座致度人々、前廣紙面不及指出候。致出座候節、頭分以上者手札に名前相調、肩書に初而与相記、平士以下者組柄も相記、出座人學校頭溜江可致持參候。且又子弟等之儀、父兄より私嫡子・二三男或は弟等、今日より兩學校江致出座稽古爲致度旨覺書相認、右出座人致持參可指出候事。

但、何とか様子有之候厄介人等出座之儀は、前廣人持頭分者直に學校へ相願、平士以下者頭・支配人江紙面指出、其頭奥書を以學校江指出、否申談次第爲致出座可申事。

一、陪臣是迄之通師範人幷御儒者江名書可指出候。足輕・坊主・小者暨町・在之者も是迄之通に候事。

一、轉役幷組替且又跡目相續等之儀、都而兩學校江不及案內候事。

一、人持・頭分幷平士に而も組・支配有之人々、以來見合印鑑不及指出候事。

一、兩學校ゟ罷出候人々痛所有之、夏中足袋相用度節、前廉不及届に、學校へ罷出候上同所御横目ゟ相達可申事。

一、同所御閣中杖相用度人々願方是迄之通に候。併指懸り痛所有之節者、杖相用罷出候上、學校御横目ゟ相達可申事。

右之趣夫々可申談旨、左京殿被仰聞候條御承知被成、御同役・御同席方等御傳達、御組・御支配へも夫々不相洩樣、早速御申渡可被成候、以上。

五月晦日　御用番　木村茂兵衛

原田又右衛門樣

毎月稽古割。但七月三日より稽古相始候事。

三日　夕八時より　論語集註　人持・頭分子弟共、御大小將六組子弟共、御大小將御用番支配之人々子弟共。

八日　夕同　孟子集註　御馬廻十二組子弟共、右御用番支配等之人々子弟共。

十三日　同　小學　定番御馬廻八組子弟共、組外四組子弟共、右御用番支配之人々子弟共、寺社奉行支配平士子弟共、御射手御異風子弟共。

十八日　同　論語集註　町同心・火矢御用・御厩方・新番組・御歩小頭・三十人頭・御醫者・御茶堂頭・坊主頭・同並・新番組御歩子弟共。

二十三日　同　孟子集註　與力・御大工・御鷹匠・六組御歩、右人々子弟共。

二十六日　同　小學　定番御歩・御鷹役等・御歩並・御算用者・御料理人・御細工者・町奉行支配・町下代・御細工人等、右人々子弟共。

二十八日　同　孝　經　足輕・坊主・小者子弟共、町在之者。

一、御近習之面々者毎月三日・八日講日出座。

一、人持以下毎月二十八日之外、講日不時出座勝手次第之事。

一、陪臣之分毎月二十八日之外、講日不時出座之事。

四月より八月迄朝五時より四時迄、九月より三月迄朝五半時より四半時迄。

毎朝習學

但佳節・朔望除之。

六・六朝四時より、二・七八時より

生徒　會讀　二日、六日、七日、十二日、十六日、十七日、二十二日、二十六日、二十七日

朝四時より　會讀　四日、九日、十四日、十九日、二十四日、二十九日

同八時より　易學　二日、七日、十二日、十七日、二十二日、二十七日

夕八時より　討論

十日助教讀師勤學

二十五日生徒勤學

三　日　朝四時より　算學　宮井柳之助・馬淵源之丞

四日　夕八時より　醫學
五日　夕八時より　算學　和田耕藏
六日　禮法　晝九時より中嶋瀨太夫・飯山紹左衛門
夕八時より渡邊喜内
十一日　夕八時より　醫學
十四日　和學
十七日　朝四時より　算學　宮井柳之助・馬淵源之丞
十九日　夕八時より　算學　和田耕藏
二十日　禮法　晝九時より中嶋瀨太夫・飯山紹左衛門
夕八時より渡邊喜内
二十四日　夕八時より　醫學
二十九日　同

以上

付札、定番頭江

今般學校御仕法御改に付、講日等日割別紙之通相定候に付、相達之候條被得其意、組・支配之人々江申渡、組等之内裁許有之面々者、其支配江も相達候樣可被申談候事。

右之通一統可被申談候事。

亥　六　月

右學校御奉行奥村左京殿御渡之旨等、主附頭御用番九里幸左衛門より、例文之廻狀到來之事。

五月。前田齊廣の近習の士にして家內に痲疹患者あるものゝ勤仕を指扣へしむ。

〔政隣記〕

付札、御横目江

中將樣御痲疹未被爲濟候得共、表向之人々家內痲疹病人有之候節、二御丸へ罷出候儀不及遠慮段被仰出候。乍然年寄中等は、右病人有之節は湯三度相濟候迄指扣候。表向之面々も御目通へ罷出候儀は了簡も可有之事に候間、右之趣頭々江可被申談候事。

五　月

付札、御横目江

中將樣御痲疹等未被爲濟候に付、御近邊相勤候人々は、家內痲疹病人有之候はゞ、湯三度相濟候迄は罷出候儀指扣可申候。

一、痲疹病人は湯三度相濟、肥立次第罷出相勤可申候。

右之趣被得其意、組・支配之内御近邊相勤候人々江可被申渡候。組等之内裁許有之面々は、其支配へも相達候樣被申聞、尤同役中可有傳達候事。

右之通頭・支配人江可被申談候事。

五　月

右御用番又兵衛殿被仰聞候旨等、御横目より例文之廻狀出。

六月九日。領內の御扶持人十村及び十村に賞賜す。

〔司農典〕

昨九日拙者共之內御次江罷出候樣申來候に付罷出候處、其方中江被仰出之趣有之、依之に一統呼出可申渡候得共、此節草修理勢子等指支申儀に付、詮議之上一部御扶持人兩人・十村兩人呼出、相殘候人々者追而御用達に出府可有之、其節可申渡候條、兩人宛早速可有出府候、以上。

亥六月十日　江上清左衛門

木梨左兵衛

能州口郡御扶持人・十村中

御題紙

一、紬二端　　本江村　惣　助

右之者諸郡御用方棟取罷在致入情、其上先年被仰出候御改作御法久敷相成、何与なく違亂之品も有之、改作奉行遂詮議候趣出情相勤候段被聞召、奇特之至り被思召候。此段格別之趣意を以呼出、於御次に可申渡旨御意に候。右之通被下候事。

亥　六　月

御扶持人・十村

右之者共御郡取次方彼是骨折入情相勤候段被聞召、奇特之至に被思召候。猶更心懸尤に候。此旨可申渡段御意之事。

亥　六　月　　平　十　村

右之者共御扶持人共致和順、御用向入情相勤候段被聞召、奇特之至被思召候。猶更何れも申談可致入情候。此段可申渡旨御噂之事。

亥　六　月

右今般於御次に、青木與左衛門殿を以御噂之趣御書立御渡之旨に而被仰渡、難有冥加至極に奉存候。猶更向後出情相勤可申候。仍而御請上之申候、以上。

享和三年六月　　口郡平十村六人

御改作御奉行所

六月九日。領内に痲疹流行するを以て村方に藥劑を頒つことを議す。

〔筒井觸留〕

付札、御算用場奉行江

御領國中痲疹流行之躰被爲聞召候に付、爲御助御醫者被遣、療養可被仰付旨御噂之趣も有之候。就夫先年疫病相煩候節、右樣之御沙汰有之候所、村方江御醫者向候而者村方難儀仕候躰に付、於此表御醫者中相考藥調合有之候はゞ、御郡奉行等より裁許之十村江相渡、夫々相用候樣仕度旨申聞、其通被仰付候振合も有之候。痲疹は別而御領國中之儀、病症茂相知居申儀に候間、右之通被仰付候而も可然哉。右御噂之趣御郡奉行等江被申聞、猶更詮議有之、可被申聞候事。

御領國中痲疹流行之躰被爲聞召、爲御助御醫者被遣、療養可被仰付御噂之趣有之段等、今日御用番甲斐守殿より別紙寫之通御申聞に候條、被得其意、早速御詮議御申聞可有之候。先以右御噂之趣、御同意難有儀に存候、以上。

亥六月九日　　笠間九兵衞

菅野兵左衞門殿

高田彌左衛門殿
江上清左衛門殿
廣瀬欣左衛門殿

別紙之通笠間九兵衛殿より申來候條、得其意、夫々可申渡候。誠に以難有奉存候儀に候。然上者一統江被下候儀被仰出候得共、元來貧窮者藥茂用兼候者、療養方不行屆儀第一被爲加御不便候御趣意与奉恐察候。左すれば身分相應に而其身等服藥無指支者、奉頂戴儀可奉恐等に候之條、夫等之者江今般之御趣意難有儀可爲申聞置儀に候。只今迄拙者共より相願御藥被下候儀者有之候處、今度者其儀も無之、思召を以被下候儀、誠に乍恐御仁惠之儀、於拙者共難有、何れも同意に此旨末々迄得与爲申聞置べく候事。

右之趣可得其意候、以上。

六月十四日

菅野兵左衛門
高田彌左衛門
江上清左衛門
廣清欣左衛門

珠洲・鳳至兩御郡十村中・山廻り中・新田裁許中

六月十日。金澤の町人にして諸士の名を借り傳馬人足を使用するものあるを戒む。

〔御觸留〕

定番頭江

所々御郡奉行等支配町・在役之儀者、前々より御定も有之候處、次第弛、御城下町人共之内にも、御家中侍中等名前を借、傳馬人足召仕致往來候者茂多有之、猥成躰相聞、宿々及難澁、宿役茂勤兼候付、町人共より相願候而も、先觸傳馬帳等猥に指出不申筈に候得共、猶更心得違無之樣、御家中を始寺社家江茂急度申渡候樣仕度旨、御算用場奉行等申聞候段、去酉年相觸候處、今以侍中等几寺社方等より、傳馬帳并會符貸渡候人々も有之、御定之賃錢を以人馬取候付、宿方及難儀候躰に候。宿方迷惑之譯も不心付、不指支儀に相心得貸渡候段者、不心得之至に候。向後心得違無之樣、急度相心得可申候。

右之趣被得其意、――

右之通一統――

六月十日　長甲斐守

勘解由儀は太仲儀の誤記なるべし

六月十五日、伊能忠敬領内測量の際西村太仲の補助を得んことを求めしを以て之を謝絶せんことを議す。

［袖裏雜記零餘後錄］

六月十五日、測量御用として罷下候伊能勘解由儀、御領國江罷越候節、西村太仲・小原治五右衛門江手傳賴度旨、太仲等へ紙面指越。依之左之通伺上候之通被仰出。

伊能勘解由より越中城端西村太仲等江之紙面、井上勘右衛門出之紙面之通承届可申哉と奉存候得ども、——勘右衛門口上に而申聞候付、——御用人聞番了簡相尋候處、勘解由より賴越候儀に御座候間、差支申儀も有御座間敷与奉存候旨申聞候得ども、猶更御算用場奉行江も申聞詮議仕候處、勘解由儀元來城端之產と申沙汰に御座候。寛政六年にも海邊之村々等御書上に御座候。加樣之品を以御しらべも被仰付候哉。然所太仲等手傳仕候へば、海邊等之樣子委く申傳候樣成事にては不可然樣奉存候間、太仲等不罷出樣に被仰渡方も有御座間敷哉与奉存候間、尙更詮議御座候樣奉存旨申聞候。右申聞候所も無據相聞候付、不被差出時は如何申渡可然哉与內存相尋候處、支配人より徘徊留与申樣成事に申渡候樣成儀に而も可有之哉之旨申聞候。何れにも不差出趣に取計可然儀と奉存候付、勘右衛門江も內分申渡方相尋候所、左候はゞ御樣子有之候間、病氣とか申立、不差出趣に取計候樣被仰渡候はゞ、其段可申渡旨申聞候

付、猶更御算用場奉行へ申聞候處、其通被仰渡候而も差支申間敷儀与存候。尤書通は不仕樣被仰渡可然奉存候旨申聞候。右之趣に御座候間、公邊御役人之儀、御樣子有之候條、爲手傳罷出候儀、幷及面話候儀も不相成候。依之此度輕返事遣候儀は格別、以後致書通候儀堅不仕候樣可申渡旨、勘右衛門江申渡可然与何れも僉議仕候。勘解由紙面被入御覽候。猶更被仰出次第奉心得候、以上。

六月十五日　　　　　長　甲　斐　守

〔金龍公記史料〕

是歲幕府天文方高橋作左衛門々人伊能勘解由。與其徒平山群藏。測量沿海。初勘解由。寄書于越中城端西村太冲・小原治五右衛門。囑助手。而藩吏不喜之。命令謝絕之。

六月十七日。寺家社家等の濫に藩侯の家紋を用ふるを禁ず。

〔御用留〕

御紋附提灯等取扱候儀者不容易候所、近年猥に相成、寺社家之內心得違之人々も有之躰に而、夜中火事等之節、或は御祈禱之御札曁年頭献上物之節、上箱幷雨覆等抔にも御紋附置候爲躰相聞候。元來御紋附提灯等相用候儀者、御位牌被建置候歟、又者表向御預之佛神御遷座、或は非常之御退座等之外者不相成候之所、御祈願所者不及申、御紋附之品御寄附有之寺庵等、惣

而御紋附之品々取扱いたさす候而者不叶樣相心得候躰に而、今般寺社家一統へ以來之儀申渡候。職人共於手前も、御紋附之品々之儀者容易に出來不致筈に候處、其願主之任申分候哉、近年御紋附之品々數多出來之躰に候。以後之儀御紋附一切自分賴を以出來いたし不申樣、御支配之職人共江嚴重御申渡置可被成候。御紋附之品相用不申而者不叶寺社家之分、拙者共江相達候上、夫々承糺、彌爲致出來可申儀に候はゞ、其時々可申達候條、左樣御心得置候樣致度御座候、以上。

亥六月十七日　　品川圭　殿

高田彌左衞門樣

菅野兵左衞門樣

右之通申來候條、得其意、夫々不相洩樣早速可申渡候、以上。

菅野兵左衞門

能州四郡十村中

追而披見後可相返候、以上。

六月十八日。卯辰八幡神主等子供角力の興行を出願して不許可となる。

〔毎日帳書抜〕

寺社奉行申聞候は、卯辰八幡神主厚見丹波守等三人、近年世柄悪敷、諸參詣薄難澁至極仕、無祿之人々神職取續兼候付、御貸米等奉願度候得共、御時節柄其儀も難申上。依之木やり狂言興行之儀奉願旨、先達而書付指出候得共、諸士愼等之儀に付段々被仰出之品も有之御時節、右様之願は御達も難及儀与遂僉議、難承屆段申渡願書相返候處、御領國寄り人之子供角力御聞屆被下候はゞ、三人申談、三ヶ年之間天氣宜時分、日數十五日計宛年中四度興行仕度旨、重而別紙之通相願候。子供角力之儀は、前々より神事賑之ため興行之儀相願候得ば、私共切に承屆候得共、御當節之儀故如何可有御座哉。尤木やり狂言与は品も違申候間、承屆候而も苦ヶ間敷哉。指押候はゞ御貸米等に而も不被仰付而は難成所へ至り可申哉と奉存候付、一往及内談候旨申聞、別紙指出申候。子供角力之儀は神事之節抔、寺社奉行切に承屆候振合も有之由に御座候間、其振に相心得候様可申聞哉、一往奉伺候。則別紙書付入御覽申候。且又書付之内、爲冥加一ヶ年金子二十兩充指上度旨調置候得共、其儀に不及段可申渡と奉存候旨、寺社奉行申聞候由。

六月六日　　長甲斐守

右以與右衞門上之候所、人氣指障之儀も有之間敷哉、御算用場奉行等手前遂僉議候様被仰出候付、僉議之上、畢竟致増長候得ば風俗之害にも可相成わけ故、不可然儀と奉存候間、其段

寺社奉行へ可申渡旨等、同十八日申上候事。

六月廿二日。十村等の非違に就いては盜賊改方にて干與せしめざる慣習を繼續することを告ぐ。

〔岡部舊記〕

付札、御算用場奉行江

十村共盜賊改方江呼出候儀、思召被爲在候に付、當分呼出不申筈之段、寛政十一年被仰出置候通に可相心得候。依之以後十村共御締方之儀は、御郡奉行・改作奉行於手前、尚更常々無油斷心を付、嚴重相糺、不分明之儀有之候ば、於御算用場遂吟味、其上にも不相分儀候はゞ、於公事場御糺方可相願候。此段可申渡旨被仰出候事。

向々盜賊改方江指出間敷儀に付、拙者共より段々相達置候趣も有之候處、被爲思召入被仰出之趣、寛政十一年申談置候通に候。右に付重て相達置候品も有之候處、今般別紙之通被仰出候間、御扶持人幷十村中江、向寄を以可及演述候、以上。

亥六月廿二日

長屋平馬

進士求馬

林彌四郎

寛政十一年六月參照

江上清左衛門

六月廿七日。道中川留解除以後出發を爭ふことなかるべしとの幕令を傳ふ。

〔政隣記〕

道中川筋出水に而川留有之候節、前後宿々逗留之面々、川明候得者一統落合越立方差急候故及混雜に、品により候而者不束之儀等も有之間敷とも難申、左候而者各不安心之事に有之、混雜に及び候得者却而越立方も延引に及び候。畢竟先を爭候故之儀に而如何之事に候。既に享和年中相觸候通、參勤交替之面々一日三人程宛不落合樣旅行可致事に候得ば、川場之儀は別而其心得可有之儀に候條、以來御用道中之外は、彌前宿泊到着順を以、川役人取計順に越立有之候樣申渡候間、其旨相心得、銘々家來下々に至迄心得違無之樣堅可申付、尤其所之爲致支配候者より、出役之者差出相改に而可有之候。猶心得方之儀者道中奉行可相談候。

右之通可被相觸候。

三　月

道中川筋出水に而川留有之候節、前後宿々逗留之面々、川明候得者一統落合越立方之儀に付、大御目付久田縫殿頭殿より到來之御書付寫一通相達之候條、被得其意、組・支配幷與力

且又家來末々迄可被申渡候。組等之內裁許有之面々者、其支配へも相達候樣可被申聞候事。

右之趣可被得其意候、以上。

癸亥六月廿七日　　　長　甲斐守

六月。御扶持人十村・十村以下先に藩侯より賜與せられたる米穀を貧民に頒たんとの請を許す。

本年二月十日の條參照

[筒井觸留]

御郡方貧窮之者共、農業無慢怠相勤候に付、去秋御入國初之儀、旁以御扶持人・十村を初、百姓・頭振迄茂御米被下候。然所御扶持人・十村・新田裁許・山廻暨身元相應之百姓江被下候分を以、小百姓等貧窮之者共江割增配當仕度旨、御扶持人・十村等之願書付に、各被加奧書被指出候に付、猶吏遂詮議候所、被下物如此相願申儀如何に候得共、人々奉頂戴、其上極貧之者へ增割り配當仕度趣神妙之儀に付、年寄中江も相達候所、被承屆候旨被申聞候條、被得其意、可被申渡候事。

六　　月

右寫之通御算用場より申來候條、一統得其意可申候。仍而今日御米切手請取、奧・口番代江相

渡候條、夫々受取可致配當候、以上。

菅野兵左衛門
高田彌左衛門　煩

能州四郡十村中・新田裁許中・山廻り中

猶以一統御請書付可指出候、以上。

七月朔日。文武學校の制度を改めたるを以て修業に心を致すべきことを告ぐ。

〔異本三等御譜〕

七月朔日左之通觸。

寛政四年以來學校被建置候得共、學問執行方不宜故、書を讀物を覺候事而已にて、孝弟忠臣之道を勵み、當務有用之義を相學び人品之執行致候儀曾て無之、學問之詮無之候に付、此度御改、於學校都而有用之學問執行可仕候。諸士以上之儀は、別て聖賢之道を學、道理を辨、私之意地を離宜成立、相應之御用可相勤心懸專要之事に候。且諸士之內學才有之人々は、追々助敎・讀師等被仰付候。子弟之儀も御撰擧之上助敎・讀師可被仰付候得共、其餘は先生徒に被仰付置、仁義有用之學問修行可仕事。

一、文武を勵み士業不怠儀は忠義之基と被思召候。然るを武學校之儀は年中一藝僅之出座數にて執行之ためには不相成、無詮事抔と存、實に心懸候人々も不致出座族も有之樣子に被思召候。武學校被建置、藝術も御覽可被遊ためには候得ば、右等之族有之間敷候。尤師範人宅之稽古場等へも猶更致出情、武學校は邂逅之儀に候得者、尤無怠可致出座候。何れにも藝術致上達、無藝無能之士に相成、不忠之覺悟有之間敷儀肝要に被思召候。此等之趣會得仕、無怠急度執行可仕候事。

享和三癸亥年七月

別紙被仰出候趣、組・支配之人々へ申渡、組等之內裁許有之面々は、其支配へも相達候樣被申聞、尤同役中不相洩樣可有傳達候事。

右之趣可被得其意候事。

七月朔日　　奧村左京

七月二日。伊能忠敬金澤に來り宿す。

〔伊能忠敬日記〕

七月二日朝より晴天、六つ半頃宮越町出立、測量に量程車を用、四つ後に金澤松平加賀守居城尾張町に着、止宿住吉屋太兵衞。此日午前は晴、午後は曇、晴、夜は雲あり。雲間に測量。

子後は大風雨。金澤町は石川郡なり。此處より粟ヶ崎迄泊觸を出、同前。

同三日曉七つ頃大風雨、六つ後風雨餘程止、六つ半後金澤城下町出立、途中大風又雨。四つ頃宮ノ越町に着、大風雨に付暫時見合中食をなし居る。四つ半後雨止、猶風あり。九つ頃宮腰町出立大野村、夫より橋粟ヶ崎村七つ後に着。此宿木谷勘太郎、海邊は十六・七町もあり。本家は木谷藤右衛門と云ふ加州の富家なり。高松村迄泊觸を出同前。元吉町より是迄石川郡。

同四日朝より晴天、手分、先手郡藏は六つ頃、我等は六つ半頃に橋粟崎村出立、向粟崎村、是より河北郡になる。宮坂村・荒屋村・室村・大崎村・白尾村・外日角村・秋濱村・北村・遠塚村・松濱村・木津村・高松村此所に而は宿と云。是迄河北郡、九つ頃に着、此宿島屋市郎右衛門。此夜晴天測量。此所より所口町七尾迄ない泊觸を出す。

〔金龍公記史料〕

勘解由七月朔日至宮腰。二日來金澤。四日至高松。五日自今濱邊創功。勘解由沿内海　群藏沿外海。廿七日經鳳至郡至七尾。晦宿庵村。

〔累年雜記〕

一、江戸天文方高橋作左衛門弟子井野勘解由、爲御用上下八人浦方分見に廻り被成、越前より加賀へ御越、他國に而境々等には配竹杭木打候樣相聞候。當御國者左樣之事者無之、重御

役人に河北之川尻市次郎・高松村貞左衛門兩人大小を帶し、挾箱等持せ、手代二俣屋宗兵衛・塩屋品七行也

七月十一日。前田齊廣、歩組の士は世襲すべきものにあらざることを告ぐ。

〔御親翰拜寫〕

金龍院様御代享和三七月十一日御親翰拜寫。

此方被仰出候長谷川永藏――

當時供方指支候はゞ、先供方用立候者僉議可有之候。永藏等年齢之者に而用立不申事に候はゞ、先其儘指置可申候。數年令相勤候者を勤功与申立候者は有間敷候。先祖之功を以遺知致相續候、父祖之勤功を以召抱候者士之綱例に而、夫を以士之規模与いたし候。歩は其身之器量をもて召抱候者に而、岩乗水練は不及申儀、且其外柔術等一藝申立候程之藝無之而は不召抱、勤功を以致立身候儀格別、父祖之勤功に依而無藝無能之者を名跡に召出候儀は、元來不相當事に存候。近年猥に相成、わづか二十年・三十年之功を申立候儀、一圓不相當事に候。是等も當時其頭・支配人之手柄之樣に相成來り、僅之勤功を稱し候。左候而は士列之内二・三十年皆勤之者は如何稱し可申哉。於歩共親如何程之有功之者に而も、其子無能無藝之者は不召抱

管之事に候。右に付近年風俗も次第に柔弱に相成、本意を取失ひ候事に候。畢竟右趣意を以僉議可有之候。依而貞助養子も名稱に不拘、六組歩撰方に相當候者に候はゞ、召抱候儀僉議可有之候、以上。

七月十一日

家　老　中

此後右之御文段に不拘、僉議之趣可相伺旨、文化三年八月被仰出。

七月十七日。儉約奉行を廢し省略方御用主附を置く。

〔毎日帳書拔之鈔〕

享和三年七月十七日

一、當春以來御節儉之儀段々就被仰出候、長瀨五郎右衞門等四人御省略方御用主付被仰付、御算用場奉行も相加り、同意に可相勤候。且又御儉約奉行靑地七左衞門等者、御僉議之趣有之、御儉約所當分被指止候付、右御用無之候。依之是迄御儉約奉行取捌候御用向、當分御用人取捌候樣被仰出。

右之趣今日夫々申渡候事。

七月十九日。學校の儒學稽古に當分陪臣をして出席せしめざることを告

く。

〔政隣記〕

今般學校儒學執行方御仕法就被仰付候、陪臣之分は講日不時出座之外、稽古日出座之儀御僉義中に候間、當分出座不仕筈之段一統可申談旨、左京殿被仰聞候條、御承知被成、御同役御傳達、御組・支配之人々江も、夫々不相洩樣御申談可被成候、以上。

七月十九日　木村茂兵衞

菊池九右衞門樣

猶以都而儒者・醫者之分は、出座之儀指支不申候間、是又爲御承知申進候、以上。

七月十九日。前田齊廣、歩士等の増俸願に關する事務に就いて告ぐ。

〔御密用之覺〕

猶以歩而已にも不限儀、此並都而本分之趣に可有僉議候。

其方共席江諸方より増米等之願、近年別而多相成、其外此間も申遣候通、歩組等跡之儀僅之勤功を申立、士列之跡式之樣にも相成、右増米等之願多相成候得ば、おのづから難承届所江至り、年々打重り僉議も遲々におよび候事に而、下より者毎度願出不承届候得ば、等閑にも相當り、人氣も指障、物事多端に而者其方共取捌も不行届候間、以來は萬事閑易に相成候樣

之仕法可有僉議候。右に付是迄增米申伺之分は當座之遣物に而相濟し、其中には難承屆分は願紙面相返し、取捌に滯無之樣有之度事に候。此趣其方共迄致承知候而も不益事候間、猶年寄共江茂可申聞置候間、申談不都合無之樣可取計候。

一、其方共江親翰遣候意、返書人々自筆に而申越候得共、文面指定候樣に而、人々了簡も全不相知候間、是以後は文面不都合之儀、或は遲り候儀は貪着無之候條、人々存寄次第調可指越候、以上。

七月十九日

家老中

被成下御親翰奉拜戴候。私共席へ諸方より御增米等之願、近年別而多相成、其外此間も被仰出之通、御步組等跡之儀僅之勤功を申立、士列之跡式之樣にも相成、右御增米等之願多相成候得ば、おのづから難被仰付所江至り、年々打重り詮議も遲々に及候事に而、下よりは每度願出不承屆候へば、等閑にも相當り、人氣にも指障り、物事多端に而は私共取捌も行屆不申候間、以來は萬事閑易に相成候樣之仕法僉議可仕旨等、被仰出候趣奉畏候。內記等出席不仕人々江御親翰寫拜見爲仕、追而詮議之趣可奉伺候。

一、私共江御親翰被成下候意、御請人々自筆に而申上候得共、文面指定候樣に而、人々了簡

も今不被爲聞召分候間、以後は文面不都合之儀、或は遲候儀は御貪着不被爲在候間、人々存寄次第相調可指上旨奉畏候。猶更此儀に付追而奉伺儀も可有御座候。

一、御親翰幷御指札御封印奉返上之候、以上。

七月十九日

津田玄蕃
横山又五郎
前田織江
本多勘解由

七月廿三日。諸場・諸役所に於ける一切の支出を停止し、その必要あるものは凡て伺出さしむ。

〔政隣記〕

七月廿三日、從御勝手方御席一役一人宛御呼出、左之御覺書駿河殿等御渡之。

今般御節儉之儀段々被仰出候得共、御省略之儀中々行屆不申候。依之諸向成來候類例、或者多端に相成來候仕癖之品、嚴重に遂詮議、古格舊例たり共可相成品者相改、萬事々輕不相心得而者減方付不申旨等、拙者共迄被仰出之趣有之、追々御仕法も可被仰付候得共、當時之處指當り、如何共御取續方之御手段も無之候。依之當分諸場・諸役所都而渡り方指留候間、其

内指懸り無據品は、金銀米錢暨品物共、拙者共席江相達可被申候。其上猶更遂僉議、無據分者共時々承屆可申候。將又是迄御定銀に而仕來り候品、且定入に而相渡來候分たり共、都而渡り方指留候間、御普請方又は新出來物等に而も、前方拙者共席江相達、承屆之上取懸候樣可被相心得候事。

亥　七　月

[御横目方密後記]

付札、御作事奉行江

一、當時御勝手御運方如何共御取續候御手段も無之候に付、當分諸渡り方指留候儀等、別紙に申達候通に候。併當時御普請等に取掛り有之ヶ所之分、或は當御參勤御用与歟、指掛り無據渡り方之分は、是迄之通りに候條、可被得其意候、以上。

亥　七　月

七月廿五日。御省略方御用主附等、財政整理の良法を得ざるを以て指揮を老臣に仰ぐ。

[毎日帳書拔]

私共儀今般御省略方御用主附就被仰付候、御算用場奉行より御物成高幷御入用高等委曲申

間、奉承知候。御取箇に御家中御借知候分打込候而御不足之儀に御座候へば、不時之御物入、作躰之善悪、且時變之儀は難計儀に御座候間、御手當無御座而者難相成御儀奉存候。然處當時之御運方に而は、非常之御手當者指置、定式之御入用茂御不足之御儀。是迄御勝手御難澁之儀は毎度被仰渡、粗奉恐察罷在候得共、今般御出入大綱奉承知、初而奉驚入候。加樣之御樣子に而は、行々如何共可被爲成樣無御座御儀に付、以來諸場・諸役所等出來之類例、或は多端に相成來候仕癖之品嚴重逐僉議、古格舊例たり共、可成品は相改、事輕に相成不申而は減方付不申旨等、被仰渡之御趣意通奉得其意候。乍去當時之御圖りに而は、御入用方半減に茂相成候はゞ、御定式之所は御符合も可仕候得共、是迄之通諸場・諸役所茂被建置、御格式をも端々御改被爲成候共、減方之程茂可有御座儀。左候へば、何与歟格別之御仕法茂不被仰付而は相成申間敷儀与奉存候。乍然此儀も不容易儀。尤連々相整可申儀に奉存候得共、其年々々之御用筋奉行横目或は下役人勤方、曁御用聞町人・諸職人仕方等之儀迄巨細に熟得仕、後年指支茂無之哉否、大樣見切之場に而可被仰付候得共、是以近年人氣悪敷、下々不正之風俗に移來候上之儀に御座候得者、今更嚴密之御仕法被爲建候はゞ、末々不心服之場に茂至り、騒動之基にも相成候得ば、御大事至極之御儀与奉存候。しかればとて是迄之御省略之筋御僉議御座候共、中々其詮難相立儀与奉存候。何卒才力有之者御撰擧御用被仰付、其上に事々

被爲加御下知候はゞ、御趣意通御成就可被爲成御儀。いづれ嚴重に御格を茂御改無御座而者、今一等御指支之場へ至り候而は、乍恐御政事茂難相立儀に奉存候。依而何分格別之御仕法不被仰付而は相成申間敷、無左指當御省略之筋私式幾重に僉議仕候共、手段有御座間敷与奉存候。御僉議之上大綱御指圖御座候樣仕度奉存候。此段御算用場奉行茂同意に申聞候、以上。

亥七月廿五日

長瀬五郎右衛門　判

人見吉右衛門　同

小原惣右衛門　同

田邊五郎右衛門　同

長甲斐守樣

前田駿河守樣

不破彦三樣

七月。自今他國に出張するものに貸與すべき會所銀の額を定む。

〔正德至天保雜留〕

覺

一、是迄借用之利足立幷無利足に而返上仕來會所銀上納方之儀、是迄之通に候事。

是以後他國御供人會所銀御貸渡銀高本文之通、常交代之節者但昔之通り御貸渡之事。

一、四十貫目　年寄中知行高無構

但常交代之節者三十六貫目。

一、二十五貫目　御家老役同斷

但常交代之節者二十二貫五百目。

一、十三貫目　若年寄同斷

但同十一貫七百目。

一、人持江御貸渡會所銀之儀者、追而可被仰渡候事。

一、三貫五百目　組頭・同並知行高に無構

但常交代之節は三貫二百目。

一、三貫目　物頭・同並同斷

但二貫七百目。

一、二貫八百目　諸番頭同斷

但同二貫五百目。

一、二貫五百目　御使番以下頭分同斷

但同二貫二百目。
一、二貫五百目　八百石以上平士
　平士等之分
但同二貫二百目。
一、二貫目　四百五十石以上平士
但同一貫八百目。
一、一貫八百目　御奥小將　馬持以下
　御表小將　同
　御大小將　馬持以下役掛り之外
但同一貫六百目。
一、一貫五百目　諸役懸り之平士　馬持以下三百石迄
但同一貫三百目。
一、一貫目　諸役懸り之平士　二百九十石以下
但同九百目。
一、八百目　諸役懸り之平士　百九十石以下

但同七百目。
一、七百目　御儒者・御醫者
但同六百五十目。
一、六百目　三十人頭・坊主頭・諸小頭・同並・與力
但同五百五十目。
一、四百五十目　新番　御知行被下候
但同四百目。
一、三百五十目　御歩并御歩並　御知行被下候
但同三百目。
一、三百目　御歩并御歩並　御切米被下候
但二百五十目。
一、地廻り之分は、常他國詰之半銀高御貸渡之事。
一、出船御用等に罷越候人々は、三百石以上に而候。
一、是迄之振を以、二百石當り御貸渡之事。
一、右之通御貸渡之上者、返上方等委細之儀者追而可申渡候事。

右會所銀、追而御仕法被仰付候迄、先當分如此御貸渡有之候條、被得其意、夫々可被申談候事。

癸亥七月　　　　前田駿河

會所御奉行中

七月。衣類食料中賣買を禁止する品目を定め、且努めて藩内の製産を用ふべきことを告ぐ。

〔政隣記〕

商賣停止申付品々

一、縮緬くゝり紐類　　一、女子ゑり掛　　一、他國傘

一、他國元結　　一、織物絹縮緬等草履之緒、但木綿くけ緒皮緒不苦

一、他國製干菓子　　一、他國製蒸菓子　　一、塗木履類

以上

付札、定番頭江

御家中之人々儉約等之儀に付被仰出之趣、追々被申渡候通に付、町方江も嚴重申渡候。然處近年商賣物種々榮耀高料之品取扱候族有之、都而商物は御家中を初買人之好みに應じ候事故、

今般被仰出之趣に而者榮耀之品等取扱無之筈に候得共、猶又以來御國產之品を專致商買、其餘御國に無之他國より取寄候品々之儀者、麁品を取扱候樣町奉行より嚴重申渡、衣服之類中分以下之圖りを以直段極申付、高料之品者商賣不爲致筈に候條、御家中之人々得其意、成限御國產之品を以用事相辨候樣相心得、若他國之品入用之節者、應分限成限り麁品を相用可申候。右之通申渡候上者、京都を初地方之品を直に申遣、榮耀ヶ間敷儀有之間敷候。且又別紙之品々商賣停止之儀町奉行江申渡候事。

一、高知之人々抔、他國贈進等無據佳品入用之節は、呉服類者用事申付候呉服屋江前廉申渡候得者、京都等江申遣相辨、追而町會所へ及届筈に候。越後縮之儀者、町會所承合候得者相辨申筈に候事。

右之趣被得其意、組・支配之人々江可被申渡、組等之內裁許有之面々者、其支配江も相達候樣可被申談候事。

七月

右之通一統可被申談候事。

七月。町人に儉約を勸むる爲、二日讀定書中の十七ヶ條に脇書を加へて之を示す。

〔二日讀定脇書〕

定

一、賣人は其商賣、職人は其職專にすべき事。

此御ヶ條誠に町人平生忘間敷第一に候所、近年段々奢侈に相成、もうけ方より家内物入多に成、自ら品物引下げ賣出候所へ到兼間敷候。向後は家内暮方急度相改、成限り儉約、大躰の世間勤合等も欠、家業入情に相勵、諸品引下可致商賣候。

一、町人の衣類男女共、絹・紬・木綿・布共分限に應じ可爲着用事。

御家中衣類の御掟も此御ヶ條に候得共、町家は尙更可致麁服所、御家中歷々に似寄候衣類着用致し候儀は、町人の分限取失候事に候。妻子抔は表は爲指品に無之ても、高料の染模樣等致し、又は不目立樣に上品を用、且又合羽襟に羅紗・天鵞絨、帷子裾うらにちりめん抔付、其外下女等に至迄ごらうど緒に塗下駄等はき候事、皆奢侈の至り候。向後急度可相改候。

付札

幼少者は袖・緣抔紅絹等付、幷裾かた輕く付候儀は、御指ゆるし御座候樣仕度奉存候。

一、男子合羽襟木綿裝束に爲仕替可申、女は下女のしゆす・ひら紗類爲付候儀不苦樣爲心

得申度奉存候。

一、女小袖・帷子、定の直段より高直の表商賣不仕候事。

附り、何方より蒔繪の道具雖誂、惣梨子地・惣金粉だみ・惣切金の道具、向後不可仕事。

賣方の儀は、誂人手前に有之儀に付、追て可申渡候。

一、町人衣類絹・紬・木綿・布・郡内嶋・日野嶋・御國絹・縮・八丈。

但し、京織共。木綿しま類・唐木綿不苦事。

絹・紬は其土の御國産可相用、其御ケ條の品々女の分、大抵表染かた幷嶋物等四十五匁を限り、但し振袖ものは是に可准、唯今まで在來り候染模様の衣裳下着に着盡し可申、男子は成限り木綿に可致候。

付札

女子振袖の者は幼少に准じ候間、輕く裾模様付候儀は御ゆるし置候様仕度、尤其餘は御觸書の通り堅く爲相守可申候事。

一、品々毛おり・天鵞絨・繻子・繻珍の卷物のるゐ、綸子・紗綾・縮緬・明石絹、幷女小袖一反に付百三十目、同帷子一反に付四十三匁より高直なる商賣一圓御停止。但し毛おり其外卷物、武具・馬具の用に立申程切にて賣候儀、幷女の帶は不苦事。

是等之儀御家中等への商方に當り候。

付札

女帶の儀錦幷天鵞絨の類、都て高直の品堅く無用、其外在來候品は御指免し置候樣仕度奉存候事。

一、振舞の儀、たとひ雖爲富者、一汁三菜不可過事。

當時も御家中致急度候祝儀此通に候條、町人は猶更の儀嚴重相心得、輕く料理出し、品々不可指出候。一汁二菜と可相心得候。

一、町中振舞一汁三菜香物共、酒可爲二篇之事。鶴・白鳥・他國肴・木具出候儀、幷盛菓子後段無用の事。

附り、他國客人幷御家中歷々振舞候共、右定之通可相守、重菓子抔出候儀は不苦事。

往古は御家中高知歷々相招、或は御用儀等に付、他國富たる者等急度振舞の躰、近年御家中歷々相招候儀無之、他國者罷越候て急度可振舞儀は、役人可受指圖候。其外前條の通。

一、葬禮・佛事の儀不可過其分限事。

急度致したる夜食、或は連日の法事、寺疊替及音物等、都て僣上の致方向後可指止候。賄夜食候とも、一汁一菜、親子兄弟迄輕く認遣候儀は勝手次第の事。

本用は無用に對するものなるべし

一、家作諸事相守儉約、成程輕く可致事。付り、長押作・杉戸付書院・くし形彫物・組物無用、床ぶち・さんふち塗候儀、幷唐紙張付令停止之。但し上使宿一二軒は格別の事。

本道筋を初前建等相應に作事可致所、其儀は淺間に致し、内分は闇形の小間等華耀の普請、自今急度可指止候。家業に付在用の家作は格別の事。

一、古家を買候とも家振舞都て無用の事。

家賣買組合納得、今以急度振舞候所も有之躰に候。元來振舞と申は料理ヶ間敷事に候間、納得時刻おくれ候はゞ、輕品一二品指出、其外可爲無用事。

付札

本町納得の節、吸物・かさおし外に輕品一種指出、酒は輕き鉢肴抔は少しは不苦樣、爲相心得申度奉存候。

一、地子町の内七ヶ所は本町に准じ可申候。其餘都て地子町は、古來より申唱候手やり團子と申頓にて可相濟。酒は本町爲准、尤肴抔は至て輕調出候儀、不苦樣爲相心得申度奉存候。

一、嫁娶・新宅・前髮を取候祝儀、幷二日寄合の刻振舞一圓無用の事。

嫁娶輕祝、家内身近きものゝ外一圓可爲無用候。新宅・前髮等之祝儀も家内迄輕祝可申候。

二日寄合振舞の儀急度無用に候。

一、嫁娶の刻萬事成程輕く可致事。
附り、刀・脇ざし等遣し候儀無用の事。
品々宜請道具遣し、又節の爲禮服等迄令調遣、或は數日人集祝候樣子急度可指止。且町人はふくさ小袖にて可辨事に候。

一、正月の餅面々祝計輕く可仕事。
近年鏡餅に不限、音信贈答甚しく相成候。悉く可改止候。

一、正月はご板・ぼい幷雛の道具、五月菖蒲刀・甲など、金銀押箔一圓無用之事。
はご板等榮耀の品を付、時に當而不長樣の掟に候。ひな抔は享保年中嚴重被仰渡有之、近年八寸以上商不申筈に候所、珍しき人形を仕出し、高料の品共在之候條、內裏雛は對にて五十日、人形は三十日を限り可申候。

一、年頭・五節句等の祝儀音物贈答無用。
佳節至て輕く家內迄祝、雛・のぼり等右に順じ、聊奢候儀無之可心得、音信・贈答親方分輕く遣候儀は心次第、親子兄弟等身近き內輕く不目立品は格別、其餘は急度可指止候。

一、年頭幷五節句禮儀無用の事。
年禮の儀頭人・親類心安き者迄可勤候。五節句の勤合は指止可申。且又平日所用の節等袴

着用にも及間敷、成限り可致省略候。併役所御家中出入等之節は是迄の通の事。

付札

袴の儀役人并御用聞町人の分着用爲仕、平町人の内にても相應に手代召仕候身上柄の者は、時により着用爲仕、其餘都て御觸書の通着不仕樣爲心得可申候。且手代の身分にても、主人爲名代諸役所ゟ罷出候節は着用爲仕可申候。尤御家中向も商用に罷出候節は無袴にて不指支、惣て容易に着不仕樣可爲心得と奉存候事。

一、葬式の儀楠にいたし、成程輕く仕、一門の外は一人も罷越間敷候事。

葬禮寺參詣の儀は、緣類・給合并格別親しき朋友等の外、大勢名聞の參詣一圓無用たるべく事。

付札

葬式輕く可致儀に候間、地子町七ケ所の外内取置に爲仕可申候。併相應に手代召仕候身上柄の者は、肝煎指圖を受け、七ケ所並に可爲取置と奉存候。且本町・七ケ所たり共、微力の者は地子同樣に是亦肝煎指圖仕候樣可申談と奉存候事。

右古來御掟の所、次第に風俗猥に相成候に付、町家身分可相守品々、當時心得違の趣共致觸書候。多分此御ケ條は町人中分以上に當り候。中分以下の者共は是に准じ急度可相心得候

事。

享和三年癸亥七月　　　村　杢右衛門

井上井之助

右御ヶ條書を以被仰渡の趣奉得其意候。右被仰渡候御ヶ條の內、乍恐私共心得方の儀、下ヶ札にて御伺申上候所、此の通と被仰渡候事。

〔口達之覺〕

町方衣食住之儀、前々之御定在之所、いつしか世間一統奢侈之風俗に移り、勝手不如意之者も、世風に押れ人並に相揃候樣に成行、年中もうけ高より物入多相增、人々多分難澁の場へ至り候。今般御上より儉約之筋等、御書立を以被仰出候。依之猶更二日讀御定書に、御奉行所より御觸書を以被仰渡候に付、相達之候條、夫々可被申渡候。ヶ樣に被仰渡候ても指當り窮屈に成儀之樣に覺候者も可有之哉、是今更新規の儀にて無之、前々御家の御趣意にて、人々身爲の儀に候條、相互に此通相守候上は、往々後世すぎやすく可相成候。此所致合得、先町內重も立候者より、妻子は勿論家來等に至迄の風俗も急度相改、末々見替にも成候樣可心得儀尤に候。乍然何事も潜龍在事の樣に存候ては、御上御趣意にも違候之間、春秋神事を初、家職の祝ひ、或は家業の暇家の者等、行歩鬱散に致候儀は、面々相應可在之儀は御貧着

無之候。是等之趣聞受違無之様、夫々得と可被申渡候事。

享和三年亥七月

町年寄　兵助
同　伊右衛門
同　八左衛門

本町・地子町肝煎衆中

〔八月朔日、前田治脩の子利命を齊廣の嫡子とすべきことを發表す。〕

〔筆のまに〳〵〕

八月朔日

一、今日御用番より添紙面を以、左之覺書被指越。

裕次郎殿御儀、中將様御嫡子様に御願被成度趣、相公様へ被仰進候處、先達而より再三之被仰上に付、御許容被遊候旨等被仰進候。公邊へ者御參府之上御願可被遊思召に候。此段内々可申談旨御意に候事。

右に付左之通調遣候。

裕次郎殿儀、中將様御嫡子様に御願――此段内々可被仰談旨御意之由奉承知、先以恐悅之至奉存候、以上。

八月朔日

横山山城守樣

奥村河内守

八月四日。町人にして門構の家に居住する等のことを禁ず。

〔國事雜抄〕

近來町內御家人并醫者等、長屋作り・門構等致置、右家賣拂町人買請候而も、有來之儘致居住候。元來上使宿等之外、町人家作御定有之、町並に居候而者右等之儀不相成事に候條、已後寄々相改、心得違有之間敷事。

一、町人刀を指奉公人に罷成候儀は、肝煎ゟ相斷、承屆候上に無之而者不相成格ケ、享保十四年酉年正月申渡有之候處、近年勝手次第致帶刀候。苗字名乘候而者以後重科候ケ、子孫迄罪科難遁御定に而、苗字名乘奉公人に成候儀不容易儀。依而以來無據趣、委曲肝煎及詮議候上相達可受聞屆候事。

一、御家中奉公人者、多分町家等之子弟に候處、致奉公候へ者主人之威をかり、却而町家ゟ對しいかつ之振舞、又は買物等にはざかり事いたし、不宜趣共有之。畢竟常々子弟そだて柄不行屆故に候條、奉公に出候者親に者勿論、右請人に立候者、急度ヶ樣之儀無之樣申含、得ケ本人會得之上請人に立可申候。右に付以後御家中奉公人、於町々不宜儀有之候者、其宿

許肝請人に懸り咎可申付候條、奉公に出候宿許請人等、兼而此段覺悟可有之候事。
右之趣一統申渡候樣可被申渡候事。

亥八月四日　　井上井之助
村　杢右衛門

竹村三郎兵衛殿

八月七日。前田齊廣が先に諸郡に米穀を下賜したる恩を謝し、百姓等に一日の業を休ましむ。

〔筒井觸留〕

去秋初而御入國被遊候に付、御郡一統江被下米有之候。右爲恐悦來月七日一日休日可申付候、以上。

亥七月廿六日　　菅野兵左衛門
高田彌左衛門　頬

能州四郡十村中

八月八日。他國詰の者の扶持方人數高を改定す。

〔政隣記〕

他國詰人御扶持方御僉議之趣有之、追而可被仰渡候得共、御扶持方人數高、先當分別帳之通被仰付候條、可成だけ致勘辨、取續候樣相心得可申候。

右之趣被得其意、組・支配之人々江可被申渡候。組等之内裁許有之面々者、其支配江も不相洩候樣被申渡、同役中可有傳達候、以上。

八月八日　　横山山城

河内山久太夫殿

相改候御扶持方帳

御家老役

一、古來御定之四千石當り。

四千石以上

但四千石より内は古來御定之通。

若年寄

一、千九百五十石より二千九百五十石迄　上下二十三人・馬一疋

但千九百五十石より内は古來御定之通、三千石以上之分は此度相極候平人持人數高之通。

平人持

一、千　石　上下十三人・馬一疋
一、千五十石より千五百石迄　同　十四人・馬一疋
一、千五百五十石より二千石迄　同　十七人・馬一疋
一、二千石より二千九百石迄　同　二十二人・馬一疋
一、三千石より四千九百石迄　同　二十六人・馬一疋
一、五千石以上都而　同　三十人・馬二疋

頭　分

一、組頭知行無構　上下十二人・馬一疋
一、諸物頭同断　同　十一人・馬一疋
一、御番頭以下同断　同　十人・馬一疋

平　士

一、百四十石以下　上下四人
一、百五十石より二百四十石迄　上下五人
一、二百五十石より二百九十石迄　同　六人

一、三百石より四百四十石迄　同　七　人

一、四百五十石より七百五十石迄　同　九　人・馬一疋

一、八百石以上都而　同　十　人・馬一疋

但被下足輕有之役柄者右人數之內へ建込候事。

御醫者

一、御知行二百石以下、御扶持方三十人扶持以下　上下　四　人

一、同　二百五十石以上、同　五十人扶持以上　同　五　人

諸小頭

一、都而上下　三　人

但百三十石以上者四人

新　番

一、都而上下　三　人

但右同斷

輿　力

一、都而上下　三　人

但右同斷

一、都而上下　　二　人

但百三十石以上者三人

一、他國詰人御扶持方代御詮議之趣有之、追而可被仰渡候得共、先當分右之通被仰付、尤道中往來幷御使等罷越候人々、在留中共右之通に候事。

一、御扶持方直段之儀者、寛政六年御改之通に候事。右之通來月朔日より被相改候條、先達而江戸表等江相詰罷在候人々も、右之通に候事。以上。

癸　亥　八　月

右八月八日新番頭御用番神田吉左衛門御呼出、御紙面幷帳面御用番山城殿御渡之由に而廻達之事。

八月廿九日。江戸詰の者の物品買上代は現金拂とすべき前令を恪守せしむ。

[御觸留]

定番頭江

御家中之人々、於江戸表諸色買上物代、現金拂之御定に候處、近來心得違、相滯候人々も有

之に付及公訴、其時に於會所、御取替金等に而内濟取扱申儀毎度有之、御外聞に茂相拘り、御難題成儀甚以不心得之至に候。仍之以來不依何品買上物代、都而現金拂に可致候。其者内にも何与歟當座に難相拂儀も候者、一ヶ月切急度相渡可申候。若月を越候者、不依多少會所江斷出候樣、用事相達候町人共江江戶於會所申渡候條、家來末々迄違失無之樣嚴重可申渡候事。

右之趣被得其意――

右之通一統――

八月廿九日　　　　　　　　　　　　　　　　　　横山山城

是月は大盡なり

八月晦日。金澤町奉行、諸士の需要する鹽は之を當町以外の問屋より購入せざらしむることを議す。

〔政隣記〕

先年より御家中幷御城下諸寺庵等用鹽、都而當所本町肝煎御鹽問屋被仰付置、懸渡來候處、近年宮腰問屋等へ直々賴遣懸渡申躰に而、當所問屋共手合甚不數に相成申候。尤洩鹽等堅相成不申儀に候處、他所より懸渡候而者甚紛敷、御締方相立兼候。右問屋前々本町肝煎相勤候儀者、御買手役相勤候爲骨折被仰付置儀に候處、右之通相成候而者其詮も無之儀に御座候。

依而以來者前々之通當所問屋江申達、塩取請候樣仕度奉存候。右問屋之儀、肝煎宅々に而取捌候得共、向寄不宜人々も可有之候間、是以後塩入用之節者、町會所迄小紙を以申越候得者、早速爲懸渡申筈に御座候。尤宅々江申遣候而も相辨申候。御塩代銀之儀者、御定高之通其時々指出可申儀に候。近年宮腰問屋等より直々取寄候儀多き躰に而、御縮方紛敷儀共有之、旁右之通詮義仕候間、此段御聞屆、一統被仰渡候樣仕度奉存候、以上。

八月晦日　　村　杢右衛門

井上井之助

横山山城樣

右十月御用番長甲斐守殿御渡之旨等、定番頭佐藤勘兵衛より例文之廻狀有之。

八月晦日。御郡所詰番に當る十村の勤務を缺くことを戒む。

〔司農典〕

諸郡詰番之儀、近年も相改申渡置候處、今以彼是外御用を申立相詰不申、手代詰勝に候。元來御扶持人之儀者、於郡々御用繁之儀に候間、指支申儀も可有之事に候。十村之内にも久々相勤候老人抔者格別、年若之面々右躰相詰不申而は、御郡之諸御用方も疎く可相成、畢竟心懸薄く故与存候。以來は無據御用指支申節者格別、大概之儀者夫々申談相詰、御用相勤候樣

可相心得候、以上。

八月晦日　　木梨左兵衛

大平欣太夫

加越能御扶持人・十村中

九月五日。前田治脩、齊廣を招請して送別の宴を行ふ。

〔金龍公記史料〕

九月五日老公招公。開別筵。奏能樂。

九月十三日。前田齊廣金澤を發して參覲の途に就く。

〔日記〕

九月十三日、天氣吉、折々曇。

一、今日御發駕に付、各五時半迄に登城之事。

一、當御留守中、年寄中・御家老中式日迄出席有之趣、月番より伺之上、右之通に候段演述有之候事。

但、右之外甲斐守・彥三、御勝手方御用に而寄日每出席有之候由。且彥三儀、右之外に御次御用に而、町飛脚出日に出席有之由之事。

一、若年寄方も尤式日迄出席之事。

但式日迄出席之段、寛政十二年にも月番江相達置候得共、其節は年寄中等寄日毎に出席有之候。此度は前段之通、年寄中等式日迄出席之事故、譯而相達不申候事。

一、四半時前御居間書院江御着座、相公様御附使者横山引馬、并御前様御附使者井上太郎兵衛御前江被爲召、御直答相濟、年寄中一切、主殿一切、御家老・若年寄一切被爲召、御意有之に付、應御請申上退去之事。

但、被召候段太田數馬申聞候事。

一、九時前益御機嫌能御發駕被遊。御先立大學。年寄中御式臺內より御左之方被罷出、御家老・若年寄は內より右之方、裏御式臺を後にして罷出有之候處、御意有之。

[政隣記]

自分は津田政隣

九月十三日陰、四時頃微雨。今日九時前御機嫌克御發駕。自分御中休津幡より御近習騎馬御供に付、五半時御城に出、四時頃三品持出以前發出、津幡に御待受申上、御供。御小休くりから長樂寺江上り、献上物披露、御先立御用等勤之。

[筆のま〳〵]

九月十三日

一、今日晝九時前、益御機嫌能御發駕被遊候事。
但、御供前田駿河今日も不罷出候故、以紙面夫々御祝詞申上候事。
御入國後初而之御參勤故、先例を以惣代飛脚を以、泊之御泊迄伺御機嫌。右飛脚者内匠助より指出之。

御泊附左之通

十三日	金澤	津幡御中休	今石動御泊
十四日	今石動		高岡御泊
十五日	高岡	東岩瀬御中休	魚津御泊
十六日	魚津	浦山御中休	泊　御泊
十七日	泊	青海御中休	糸魚川御泊
十八日	糸魚川	名立御中休	高田御泊
十九日	高田	關川御中休	牟禮御泊
二十日	牟禮	丹波島御中休	榊　御泊
廿一日	榊	海野御中休	追分御泊
廿二日	追分	坂本御中休	板鼻御泊

廿三日　板　鼻　落合新町御中休　熊谷御泊
廿四日　熊　谷　鴻巣御中休　浦和御泊
廿五日　浦　和　蕨御中休　江　戸

九月十九日
一、一昨十七日越後山之下かゝり森宮と申所、波附込、御通行難被成候付、泊驛に御逗留之段、中飛脚に申來。

九月廿四日。諸浦に戻船の砂錢を輸入すべからざることを令す。

〔御郡典〕

付札、御算用場奉行ゟ
砂錢取扱之儀、天明三年御算用場より一統へ被申渡候趣有之候處、近頃亂に相成、諸浦戻り船等に買請來候躰に而、入錢多候に付、町奉行僉議之趣紙面指出、各ゟ遂詮議候處、存寄之趣委細紙面を以被申聞、猶更町奉行手前も詮議之上、委曲相達御聽に候處、天明三年之振を以一統ゟ可申渡旨被仰出候條、被得其意、御郡奉行等ゟ嚴重可被申渡候事。

亥　九　月

諸浦共他國戻り船に砂錢買請來間鋪等、天明三年一統へ申渡置候處、近年猥に相成、砂錢入

方多候に付、錢相場之處を以、諸物直段詮議方等障に相成、委曲町奉行詮議之趣御用番に相達、段々詮議之筋有之に付、右天明年中申渡置候通、以來他國より砂錢不積來樣嚴重可申渡旨、別紙之通御用番年寄中被申聞候條、被得其意、右之趣各支配之者に急度可被申渡候、以上。

九月廿四日　　　　御算用場

高田彌左衞門殿

菅野兵左衞門殿

九月廿六日。前田齊廣江戸に着す。

［三守御譜］

九月廿六日江戸御着九半時頃被遊、御着の上重て御出、老中御廻勤あり。御供人常服、羽織・袴也。

御參勤每、一先御着の上重て御出、老中御廻勤あり。若年寄へは爲案内御使者聞番相勤る。

九月廿八日。德川家齊使を遣はして前田齊廣の參覲を勞せしむ。

［三守御譜］

九月廿八日上使老中土井大炊頭を以て被爲蒙上意、退出後追付之御供揃にて七時過御出、

御着服御熨目・御上下。老中并西丸老中御廻勤被遊、若年寄へ聞番御使者被遣。上使有之節、退出後、いつとても追付い御供揃にて御出あり。本文は御登城可被遊所、御城外にて夕七つ時御城太鼓打候得者御登城無之、直に老中御廻勤なり。七つ時前に候得者御登城被遊、御奏者番へ被謁。若七つ時御城中にて御太鼓打候へば、御登城被遊當番御目付へ御届、夫より老中御廻勤被遊御格也。尤七時前にて御登城被遊候ても、老中御廻勤はあり。西丸も同様、七時前なれば御登城、七時太鼓打候へば御登城無之。若御不快等にて御出御延引い時は、御名代御兩樣等い內御勤被遊。此時上使八時過、依て公御出七時過也。依て如本文。多分七時頃に相成に付、先は御登城不被遊。併本文は御登城ある御格也。依て御登城有無、其時々御もやう次第也。今公御家督初て御參勤に付荒々記。

九月。江戸に於ける諸士の奉公人は三年以上滯在せざるべき舊例を實行せしむ。

〔政隣記〕

付札、定番頭江

於江戸表御家中奉公人、三年より久敷罷在不申格合に候處、猥に相成候躰に候。依之以來江戸表へ着致候者、家來末々之者名書其主人々々より割場江及届、出代り等之節も不相洩樣相

届可申候。猶又右家來共寄々割場へ呼出、人別判形取置、根帳に引合せ、時々綿密に相改候樣、右場奉行へ申渡候事。

右之趣被得其意、組・支配之人々江可被申渡候。組等之內裁許有之面々者、其支配へも相達候樣可被申聞候事。

右之通一統可被申談候事。

九月

十月朔日。前田齊廣登營して參覲の禮を行ふ。

〔政隣記〕

十月朔日、御歸舘後頭分以上四・五人宛御席江御呼立、左之通駿河殿御演述。

今般御參勤に付、前月二十八日上使土井大炊頭殿を以被蒙上意、且又今日御參勤之御禮可被仰上旨、昨日御老中方御奉書到來に付、御登城被遊候處、於御黑書院御參勤之御禮被仰上、御懇之上意、其上駿河・修理御目見被仰付、重疊難有被思召候。此段可申聞旨御意に候

右に付於竹之間に御帳に附、爲恐悅駿河殿・修理殿御小屋へ相勤之事。

但、右御弘に者、前々相勤候事無之候得共、此度者御家督後初而之就御參府に、僉議之上相勤申事に相極り候事。

〔三守御譜〕

十月朔日、御參勤御禮被仰上に付、朝六時不遲之御供揃にて、六つ三歩御殿出被遊、（御着服御熨斗目・御長袴。）御登城被遊、御先例之通於御黒書院御禮被仰上、御懇之被爲蒙上意、御居殘、御家老兩人前田駿河守（後伊勢守）孝友・前田修理知周御目見被仰付、御白書院於御縁頬黒鷲之御杉戸御後に被遊、御用番之老中へ被謁。夫より西丸へ御登城、御下り（御長袴御くゝりのまゝ。）老中四方・安藤對馬守御廻勤被爲遊、九半時御歸殿被遊。

〔續德川實紀〕

十月朔日、月次の拜賀例のごとし。松平加賀守齊廣・松平阿波守治昭はじめ、參覲のもの四人。

十月五日。前田齊廣、上野東照宮等に參詣す。

〔政隣記〕

十月五日五半時御供揃に而、上野御宮惣御靈屋御參詣、御本坊御勤。夫より廣德寺御參詣之事。

十月五日。二條治孝の使者金澤に來る。

〔菅原直養覺書〕

仙洞樣本のまゝ

某は前田內匠助

一、二條左大臣樣より爲御內用、御用人鈴木縫殿當十月五日石浦町菅波屋幸助方へ當五日到着。同七日於旅宿御使者相勤、取次御奏者番御口上承る。登城之筈に候得ども、於旅宿御使者相勤候先例もあり。

一、同日同席へ御諚之趣有之由に付、是又宅々へ相勤候儀も有之候得共、寛政六年二條御使者西村東市正等下向之節も、於旅宿御諚拜聽故、右之振を以各八時迄に中宿北川屋豐右衞門方へ參り、相揃候上御使者宿へ參る。各上下也。(他國御使者へは凡而上下也。)左京は痛所にて名代山城、駿河は在江戶故甲州御諚拜領物等被受取。右縫殿御使者に罷下り候主意は、鷹司樣關白職御辭退之御樣子に付、御願之通り被仰出候へば、二條樣へ關白職可被仰付。然る處御燒失にて御建物も成就不致、彼是御難澁至極に而、假令關白職被蒙仰候而も、一月も御勤被成儀無覺束程之儀に候。然る處仙洞樣には、乖而關白職御望に付、御宸殿其外之御普請等御指急ぎ之御樣子に候。二條樣には關白職被蒙仰候は、御五代先吉忠公より此方無之、此度若相はづれ候而は、實に御家之得失、臣下之身分としては不忠之取計故と得罪可申候。依而每年御助力被進候十ヶ年賦御くり上被進候樣に被成度との趣也。

一、御使者座付罷在候處へ、甲州・又兵衞・山城・某一所に罷出。御諚之趣は、冷氣之砌各堅固被相勤、一段之儀被思召候。此度御賴之趣有之御使者御指下に付、各へも御口上被仰

三夕本のまゝ

遣、且拜領物も被仰付候由に而、目錄一人宛相渡、拜見之上床前に拜領物飾り有之所へ少し進、（但せばし候故全進退不成也。）頂戴歸座之上、御謚之趣謹而奉承知、且又拜領物も被仰付忝仕合奉存候段及御請。（拜領物は御菓子一箱、三夕和歌色紙寄合書也。）夫より段々前段之趣口上に而も申聞、手扣も相渡、たまりへ一先ひらき、重而御使者座所へ出、前段之口上之趣を以縫殿迄拜領物之御禮申上る。

十月七日。前田治脩夫人上野附近に行歩を行ふ。

〔政隣記〕

十月七日五半時御供揃、御忍御行列に而、御前樣上野邊江御行歩。岸本太兵衛亭御休所に相成候。

十月十五日。前田齊廣、尾張侯德川宗睦の養女琴姬と婚禮の期を定む。

〔政隣記〕

十月十五日、從尾州樣御使者御用人小笠原惣左衛門を以、御婚禮且御結納御時節被仰進。右惣左衛門四時參上、御小將誘引に而御廣間二之間江相通、物頭罷出及挨拶、御家老役罷出御口上承之、達御聽、物頭誘引御廣間上之間へ相通、御吸物・御酒・御肴二種指出、御酒之內御使組頭勤之、爲挨拶御家老役幷物頭罷出、給事御步。御答者取次之御家老役申述、披候節御家老幷組頭・物頭・取次御小將、階下迄相送候事。

但、携候人々、無地熨斗目・返小紋に而無之布上下、平士は服紗小袖・同斷上下。且時刻移候に付御湯漬之名目に而、一汁五菜等之御料理、向詰一つ・燒鯛・御濃茶等、後御菓子迄段々被下之。挨拶組頭・物頭出候事。

附、一汁五菜に而は向詰無之筈に候得共、今日は格別に而如本文。

右爲御答禮、從此方樣も御使者御用人津田權五郎被遣之、於尾州樣之御會釋等、大抵此方樣御同准之事。

十月十六日。干鰯の樽を一斗五升入とし御算用場の檢印を受けしむ。

[筒井觸留]

御領國干鰯取扱方紛敷儀有之、段々遂詮議候所元來斗り升諸浦同樣に無之、大俵・小俵入交り候に付、津出・津入等紛敷、縮方難相調。仍之以來御領國一統、斗り樽一斗五升入に相改、當場極印を受、右升に而二盃を以一俵に取扱候樣可被申渡候。尤右極印當場より各に可相渡候條、斗り升被遂見分、極印可被打渡候。右之通相改候條、被得其意、一統可被申渡候、以上。

十月十六日　　御算用場

高田彌左衛門殿

菅野兵左衛門殿

別紙之通干鯖斗り樽之儀に付、御算用場より申來候條、得其意、此段夫々不相洩樣可申渡候、以上。

十月十八日　菅野兵左衛門
高田彌左衛門

能州四郡十村中

十月十九日。二條治孝の使者金澤より歸路に就く。

〔菅原直養覺書〕

某は前田直養

一、十月十八日二條樣御使鈴木縫殿儀、明十九日此表發足歸京之事に此間懸合相極る。右に付安否御尋・拜領物之御請は相濟候得ども、御內用についての御詮之御請未相濟候。夫に付月番罷越候も如何に候間、次順筆頭又兵衛歟、翌月御用番某歟罷越、御請申述可然との甲州より之廻狀也。某名下に愚存之趣申入候は、右御內用としての御請には及間敷、其子細は安否等之御詮相濟、咄合之內に尾州樣等之御助力之御樣子等申聞候序に申候事に候得ば、其節應答も相濟候事に候。左候得ば改而旅宿へ參り、御請等申述候程之事には有間敷旨申遣候處、重而甲州より申越候は、其節之返答には、承知仕候、此方にも逼迫之時節、中々御賴通り相調可申樣も無之候得共、猶更同席申合遂詮議、江府江も相達可申旨返答之儀に候得ば、其節

不在合同席も候得ば、旁罷越可申述候はでは不敬にも相當り可申。左候と而、御用人を以申入候儀に而も有間敷候。併わけて旅宿へ罷越不申候而も宜きとの思召にも候はゞ、又兵衛どの等へも及示談可申旨申越候故、名下に、致承知候、被仰越候趣に候得ば此上存寄無之旨申遣。

十八日朝竹中爲兵衛參り、又兵衛樣・阿方樣とも、旅宿へ御越之儀はどなた樣可被爲入と申儀も不被仰越候故、御用番樣先又兵衛樣へ罷出思召相伺候樣被仰候に付罷出候處、次順御筆頭之御越乎申御振も御覺不被成候間、翌月御用番樣御越之儀之樣に被思召候。併如何樣とも御心得可被成旨被仰候。あなた樣には如何被思召候哉尙更相伺候段申候故、存寄無之候、罷越申に而可有之旨申達候處、左候はゞ御請覺書指上候段申聞、受取、町奉行中へは昨日八時頃、御同席樣之內御一人被爲入候。御一人之儀に候間中宿無之、直に御赴可被成段昨日被仰込候間、右刻限に被爲入候得ば指支候儀無之旨申候故、致承知候、坊主一人參り居候樣可申談旨竹中へ申談候處、畏り候段申罷歸り候事。

一、八打、上下に而、行粧等は當七日旅宿へ參り候通り、兩挾箱・引馬あり。旅宿には町奉行村杢右衞門、御小將石黑庄司郞・岡田圭馬參り居候事。某罷越、口上御使者へ申達罷通り候處、二之間迄出向居る。二之間之次は式臺に而、町奉行等列居之處也。挨拶に及、明日御歸京之由致承知候。右に付御內用について之御請爲可申述參扣いたし候段申述、座を下座へ

相改、覺書之通り相述候事。

覺書左之通り。

今般中將殿へ御助成之儀御賴被仰入候に付、右御趣意之御次第私共にも奉察、御賴通相調候樣取扱之儀厚御賴思召候旨、御謹之趣具に奉承知候。御格別之御儀に付精誠遂詮議、江府江も相達申候。御請宜御披露候樣致度候事。

右申述、口上之覺書持參いたし候間、猶更爲念御渡申候段申述相渡、座相改暫く咄いたし、隨分御無事に御歸京可被成、又折も候はゞ可得御意旨申述退去。次之間迄送り、溜りに而供坊主へ相導、追付退出する也。

十月廿二日。江戶に於いて用聞町人の猥に算用者等を訪問するを禁ず。

〔於江府御親翰帳之內書拔〕

十月廿二日

一、右之御親翰以小平被渡下。

當所用聞町人共、是迄算用者幷役先により足輕・小者小屋々々江罷越候躰に相聞候。右に付而者不正之儀も種々可有之候間、以來急度不罷越樣、嚴重可被申渡候、以上。

十月廿二日

前田駿河守殿

被成下御親翰、勘解由・修理申談奉拜戴候。當處御用聞町人共、是迄御算用者幷役先により足輕・小者小屋々々罷越候躰に被聞召候。右に付而者不正之儀も種々可有之候間、以來急度不罷越樣嚴重可申渡旨、奉畏候。右小屋々々江罷越候儀、御算用者等迄之儀に而も有御座間敷候間、別紙下書之通申渡候はゞ、御締方行屆可申与僉議仕候。則下書一通入御覽申候。猶更被仰出次第奉心得候。御親翰・御封印奉返上之候、以上。

十月廿二日　以十郎左衛門上之　前田駿河

會所奉行江

御當地町人共、是迄都而其役先之人々幷足輕・小者小屋々々江罷越、別而御算用者小屋々々江罷越候躰に被聞召候。右に付而者不正之儀も種々可有之候間、以來急度不罷越樣、嚴重可申渡旨被仰出候條、被得其意、御用之外は不罷越樣に、急度町人共江可被申渡候事。

十月

十月廿五日。徳川家齊、前田齊廣に鶴を贈る。

〔政隣記〕

十月廿五日、上使御使番鵜殿十郎左衛門殿を以、御拳之鶴御拜領。萬端御例之通に而、八半

時頃相濟、御吹聽御三家樣江之御使者相勤候事。

十月廿九日は發喪の日なり

御使者は津田政隣

十月廿九日。昨今兩日江戸廣德寺に於いて前田重教夫人の一周忌法會を修す。

〔政隣記〕

十月二十九日、昨今於廣德寺壽光院樣御一周忌御法事、無御滯相濟、今日者四半時御供揃に而九半時頃御參詣。

十月。江戸詰の諸士に、商賣人の賣物を預り置くべからざることを令す。

〔政隣記〕

付札、組頭江

諸商賣人賣物、御家中之人々御貸小屋へ預置、御屋敷中諸方江賣捌候儀も有之躰に候處、近年別而致增長候段相聞え候。元來御停止之事に候處、心得違之段沙汰之限に候。以來預り置不申樣、末々之者江主人等より急度可申渡候。若心得違於有之者、御紀可被仰付旨、拙者共迄被仰出候に付、右躰之儀見請候者、御横目足輕より爲相咎候樣、御横目へ申渡候條、被得其意、諸頭中申談、一統不相洩樣可被相觸候事。

癸亥十月

別紙之趣駿河殿等御渡、各樣江も可申談旨被仰聞候に付、寫相廻申候、以上。

十　月　　　　中村九兵衞
　　　　　　　人見吉左衞門

十一月五日。藩の財政困難の狀を告げ、諸士も亦儉約を旨とすべきことを令す。

〔政隣記〕

十一月五日、左之趣駿河殿等御渡、夫々可申談旨被仰聞候旨等之以廻狀、中村九兵衞等より傳達有之。

付札、組頭江

御家中儉約之儀前々被仰出、別而去年被仰出も有之に付、一統質素に相暮候事に候得共、御勝手御難澁至極に付、今般此表御借金方年賦御返濟之儀も被仰渡候事に候間、此御時節猶更一統家來末々迄も萬端相愼、心得違無之樣相守可申旨被仰出候事。

右之趣被得其意、諸頭申談、一統不相洩樣可被申渡候事。

十　一　月

十一月十五日。前田齊廣、尾張侯德川宗睦の養女琴姫と結納を交換す。

〔政隣記〕

十一月十五日月次御登城有之、今日御結納御祝儀物御取遣有之。委曲御作法前條之通に付畧之。

十一月十六日。前田齊廣、江戸詰の者の救濟を議せしむ。

〔於江府御親翰帳之内書抜〕

十一月十六日

一、左之御親翰以藏人被渡。

勝手向連々難澁に付、一統之不顧難澁嚴重節儉申付候に付而者、一統も彌增可及難澁處、少分之救も不申付儀は、誠に以心外之至り、一統難澁之處存付候而者不安寢食事に候。依之當節不似合申出事に者候へ共、何とか一統江少分たりとも救に相成候樣申付度心願に候。多用中不時成儀に候へ共申遣候間、趣意被致會得、何分僉議有之樣致度候、以上。

十一月十六日

前田駿河守殿

被成下御親翰奉拜戴候。御勝手向――段々被仰出之趣奉畏候。先以難有被仰出に奉存候。一

統与被仰出候處は、此表詰人之儀与奉心得、僉議之趣者猶更追而可奉申上候。御親翰勘解由・隼人助江も拜戴申談候。御親翰――奉返上之候、以上。

十一月十六日　以御近習頭上之　　前田駿河

十一月十六日。前田齊廣夫人の入輿後、治脩夫人を大御前と稱すべきことを告ぐ。

〔政隣記〕

十一月十六日左之通り御横目永原治九郎より例文を以て廻狀到來。

付札、御横目江

琴姫樣御入輿之上、御前樣御儀大御前樣与稱可申候。琴姫樣御儀は御前樣与唱申筈に候條、御家中之人々一統承知候樣相觸可被申候事。

十一月

十一月廿八日。本鄉邸内なる梅之御殿を梅之御居宅、北之御殿を北之御居宅と改稱す。

〔政隣記〕

十一月廿八日、左之御覺書駿河殿御渡之旨等、御横目永原治九郎より例文之廻狀を以到來之事。附、於金澤は十二月廿八日於御横目所、寄々一統可申談旨、御用番御渡之覺書、諸頭等え披見申談有之候事。

付札、御横目え

梅之御殿之事　　梅之御居宅

北之御殿之事　　北之御居宅

右兩御殿、是以後右之通相唱候樣被仰出候條、此段一統可被申談候事。

亥十一月

十二月朔日。前田齊廣夫人入輿す。

〔齊廣樣御傳略等之内書拔〕

十一月十五日御緣女琴姬樣え御結納被進、同十二月朔日御入輿御婚禮御整、御年御十九なり。公の御年は御二十二なり。

〔政隣記〕

十二月朔日就吉辰、八時過御出輿之段御附人追々告來、七時過御入輿。御輿渡瀧川豐後守勤之、請取前田駿河勤之、御貝桶渡御家老代大寄合高橋司書勤之、請取前田隼人助勤之。御門

下ゟ本多勘解由、各裃子持筋熨斗目・長袴着用之諸頭御白洲等ゟ罷出。御表向御客御惣様夜五時前御披、夫より御結納之節同断御作法に而、赤飯等頂戴被仰付、四時頃各相披候事。

但、年寄中・御家老中ゟ、今日者御重肴被下候に付、最初に御頂戴。右相済、頭分二建に頂戴。御吸物ふきのとなよし、

一、御奥御規式夜六時過初り、八時過相濟。御前同刻御表居間ゟ御披、暫御休息、追付御奥ゟ被爲入、翌朝五時過御表居間ゟ御出之事。

一、今日左之通於御横目所披見申談有之。

明日より四日迄御表向一統平詰与、駿河殿被仰聞候事。

但、三日者御日柄に付、御規式者無之候得共、御表向服之儀者御三つ目迄之服同様之旨、御同人被仰聞候事。

一政隣記一

琴姫様御輿入御行列左之通 但從尾州樣調來候通寫之

右案内小使 從從 馳走人見分役 使番 人別中間 若黨二人 鎗 挾箱 長柄 草履取

左案内小使 從從 馳走人見分役 使番 人別中間 若黨二人 鎗 挾箱 長柄 草履取

口付口付　馬　沓籠　合羽籠　帳付歩行　若黨　料紙硯箱持　中間　草履取　此間
口付口付　馬　沓籠　合羽籠　帳付歩行　若黨　料紙硯箱持　中間　草履取

十丁程置　案内小使　案内小使　徒徒　持筒頭　若黨若黨　簞　挾箱　長柄　草履取　口付口付　馬　沓籠

合羽籠　同　小人目付　小人目付　歩歩　歩歩　小十人　小十人　小十人　小十人　徒目付　徒目付　類輿類輿

挾箱持人二人　挾箱持人二人　類輿長刀持人一人　歩歩　類輿　小人六人　小十人　小十人　類輿類輿

長刀渡　挾箱渡　類輿渡書院番　輿立持人二人　輿立持人二人　擔持人四人　歩歩　擔渡書院番　具桶

持人四人　歩歩　具桶付書院番　挾箱持人一人　挾箱持人一人　長刀持人一人　見送老女乗物

陸尺六人　同心同心　挾箱持人一人　挾箱持人一人　長刀　聖聽院殿　見送老女乗物　同心同心　挾箱挾箱

長刀　附上﨟乗物　以上持人等同上　同心同心　小人目付　小人目付　新番　挾箱二人　挾箱二人

幕目矢　幕目矢　弓方書院番持之　同断　介副　介副　弓方　弓方　書院番　書院番　長刀持人二人　使番　新番組頭　使番

挾箱渡　挾箱渡　新番　新番　小十人目付　小十人目付　貝桶渡　輿渡　家老　家老　徒目付　守脇指　附用役持之

介副附用役　小十人　小十人　小十人　使番　使番　長刀渡　廣式番　廣式番　新番　新番　附用役　輿　小人十人　附用役　新番　新番

廣式懸り　廣式懸り　廣式懸り　小納戸　小納戸　物頭　附醫師　脇指箱持人二人　刀箱持人二人　脇指箱渡　刀箱渡　書院番　書院番　廣式番　廣式番

徒目付組頭　新番頭　新番　新番　小十人　小十人　中間頭　小十人頭　立傘持人二人　簑箱

持人二人　輿立　輿板　輿立　持人二人　同二人　同二人　茶辨當二人　數寄屋坊主　肱机一人　挾箱二人　挾箱二人

中間組頭　小人組頭　小十人頭　小十人　小十人　小十人組頭　挾箱一人　挾箱一人　長刀一人　附介添

乘物六人　同心　同心　挾箱一人　挾箱一人　長刀一人　附老女　乘物六人　同心　同心　附若年寄

乘物四人　同心　同心　附中﨟　乘物四人　同心　同心　同断　乘物四人　同断　乘物四人

同心 同心　附小姓　乘物　四人　同心 同心　附表役　乘物四人　同心 同心　附次　乘物四人

同心 同心　中間組頭　合羽籠　六荷 中間　中間組頭　合羽籠　三荷　徒目付組頭

徒目付 徒目付　小人目付 小人目付　家老供　同勢同斷　小人目付 小人目付　小人目付 小人目付　附用人供廻

惣供　若黨 若黨　草履取 草履取　長柄 長柄　挾箱 挾箱　鎗 鎗　供馬　沓籠　惣供合羽籠

小人目付 小人目付　徒 徒　目付　若黨 若黨　鎗 挾箱　長柄 草履取　口付 口付　馬　沓籠　合羽籠

同　徒目付 徒目付　小人目付 小人目付　小使 小使 小使

以上

十二月六日。徳川家齊、前田齊廣の成婚を祝して物を贈る。

〔政隣記〕

十二月六日、今般御婚禮被爲濟候爲御祝儀、從公方樣上使長谷川藤太郎殿、大納言樣より西尾忠四郎殿、御臺樣より宮本三次郎殿、公方樣より相公樣江清水新右衛門殿、大納言樣より

御同公様江堀田孫作殿、御臺様より御同公様江桂山三郎兵衛殿、公方様より御前様江桂山藤太郎殿、御臺様より御前様江桂山三次郎殿を以、干鯛一箱一種・御樽一荷宛御銘々御拜領、九時過御都合能相濟、御表に而者御餠菓子等、御廣式に而は二汁六菜等之御料理出之。附右上使等御六人共御使御廣式番之頭也。

但、御表之分も御料理御所望に付、御用意有之候處、御出之上御斷、御燒物者御所望に而御取拔。將又宰領持人都合千人餘來、依願御料理代都合金小判八十六兩被下之候事。

右相濟、爲御禮御老中御廻勤、御守殿幷尾張樣江者、爲御普爲聽物頭御使被遣之、且相公樣御名代淡路守様上意御拜聽之事。

同日御餠菓子御餘計有之に付、御臺所奉行より相伺候上、於御臺所右御菓子頭分頂戴之、御禮御臺所奉行江申述。

十二月七日。前田利命、紀伊侯德川治寶の女と緣組を內約す。

〔政隣記〕

十二月七日、紀州樣御息女樣裕次郎殿与御緣組御內約、御用人津田權五郎爲御使者參上。此方樣江も紀州樣より御用人淺倉三郎右衛門御使者に來る。御双方共御酒・御吸物・御肴被下之候事。

十二月九日。近習御用坂井克昌精勤を以て知行を加增せらる。

[金龍公記史料]

十二月九日褒近習用坂井克昌。加賜秩百石。克昌故廣式用達。寛政五年轉爲公保。公有過。克昌徵畀親樹世子言行而規之。克昌在近習凡十餘年。知莫不言。故其命曰。克昌自余幼時。能仕余左右。余之得爲人。其規諫之力居多。余嘉其忠誠。欲報之德未果。今聞不幸罹疾不起。故賜之慰其勤勞。

十二月十日。前田齊廣、職務に適せざる吏は嚴に黜陟すべきことを示す。

[於江府御親翰帳之内書抜]

十二月十日

一、年寄中席執筆服部直助儀、人品不宜候に付、執筆幷小頭並共被指除候段、一昨日被仰出候に付、直助儀久々相勤候者之儀にも御座候間、小頭並之儀は何分にも此儘に被成置候樣仕度旨、昨日駿河儀御前江罷出奉願候へ共、御聞届難被遊旨御意に付、重而駿河儀被召候樣仕度旨、以御近習頭申上、御前江罷出、直助儀に付昨日奉願候儀御聞届無御座候者、御指除之儀は於御國申渡候樣仕度旨段々奉願候へ共、思召被爲在候間、今日可申渡旨御意に付、猶更退候上、勘解由等江も及示談、今般御大禮之御用も全相勤罷歸候儀にも御座候間、再々往奉願

候儀奉恐入候へ共、可相成儀にも候はゞ、今日申渡候儀御猶豫、御國江罷歸候上申渡候樣仕度、今一往奉願旨勘解由を以申上候處、再々往申上候儀、手先相勤候者之事申上間敷儀与は不被思召候間、右申上候儀不應思召に而者無之候得共、別而年寄中執筆抔は大切之勤向にも候條、人品不宜者は早速被加御嚴政、一躰江相響候樣に有之度事に被思召候間、再往之願に候へ共御聞屆難被遊旨被仰出候事。

十二月十五日。金澤に於いて諸士に前田齊廣の成婚を告ぐ。

〔政隣記〕

十二月十五日於金城、頭分以上江、今般中將樣御婚姻御整之御弘有之。依之同日・翌十六日之內、爲恐悅御年寄中等宅へ廻勤。且御步並以上は頭等宅江爲恐悅罷出候筈に付、廿一日夫々參出、病氣等之人々は名代人參出、京等詰人は代判人より申遣、承知之上頭等迄以紙面恐悅申越筈之段等、夫々御用番村井又兵衞殿より被仰渡有之。

十二月十五日。前田齊廣、柳營に上りて成婚を謝す。

〔政隣記〕

十二月十五日、昨日御老中方依御奉書今日御登城、御婚姻之御禮被仰上。依之一統服紗小袖・布上下着用平詰。右に付相公樣より御獻上物之御使、爲組頭代拙者可相勤旨、昨日駿河殿就

拙者は津田政隣

被仰渡候、今曉七時過御舘江出、夫より御城江罷出、委曲左之通。着服無地熨斗目・小紋上下、九半時頃歸候事。附記、御大小將今日開番代也。

公方樣

一、干鯛一箱　一、御樽一荷　御目錄

右今朝開番外御用御座候に付、小泉權之助同道、御城江持參仕候處、御坊主衆檜之御間江被相廻、土井大炊頭殿・御奏者番松平周防守殿御出席に付、御目錄周防守殿江御渡申、今般中將樣御婚姻御整に付、御目錄之通御獻上之旨、大炊頭殿江申述候處、御披露可被成旨御同人被仰聞候。御目付土屋長三郎殿御指引被成候、以上。

十二月十五日　津田權平

右相公樣江指上候に付、御用所江指出之候事。

十二月廿一日。徳川家齊夫人、前田齊廣に歲暮の祝儀を贈る。

[政隣記]

十二月二十一日、爲歲暮御祝詞御表江、從御臺樣御使御廣式番之頭鈴木左門殿を以、白銀十枚・干鯛一箱御拜受。御作法御例之通に而、御餅菓子等出之。御廣式・梅之御居宅江も、御廣式番之頭石尾喜左衛門殿を以、縮紗二十卷紅白從公方樣御拜領、從御臺樣干鯛一箱・白銀十

枚宛御拜受、兩御廣式共二汁六菜之御料理等出之、御作法都而御例之通に候事。

但、梅之御居宅ゟ者、鈴木左門殿御表相濟、二枚開より直々御越之事。

右夫々相濟、御用番之御老中ゟ爲御禮被遊御勤候事。

十二月廿八日。前田齊廣登營して初めて歲暮を祝す。

〔三守御譜〕

十二月廿八日公兩丸へ御登城。御代替り初てに付、御先例之通年頭元日御着座被仰渡。尤御居殘、歲暮御祝儀被仰述。畢て御着座之儀、正月御用番被申述。夫より西丸へ御登城、歲暮御祝儀被謁。右御着座御禮も、御老中指支にて御奏者番有馬左兵衞督へ被謁。夫より直に御老中方三方・西丸御老中安藤對馬守へ右爲御禮御直勤。御服御熨斗目御上下とあり。日記。

十二月。江戸詰人等の扶持方を特に增貸す。

〔政隣記〕

付札、中村九兵衞・人見吉左衞門ゟ

御勝手向運之依御難澁、御格外嚴敷御節儉就被仰付候、追々御仕法も被仰付候處、何も御當節を奉存入精相勤、別而當年は彼是御用繁多付、一統勤方烈敷、自分失墜も有之、彌可爲難澁与深く御痛心被遊候。依之當御在府、格別之思召を以、御步並以上一人扶持に金貳步宛御

貸渡、足輕以下江は金二歩宛可被下旨被仰出候。

右之趣被得其意、組・支配之人々江可被申談候。尤諸頭中江演達、組等之人々江も申聞候樣可被申談候事。

亥十二月

付札、中村九兵衛・人見吉左衛門江

今般御貸金等被仰付候趣、以別紙申渡候通に候。此儀先達而拙者共迄被仰出之趣有之候得共、御勝手向御逼迫至極に付、段々御仕法も被仰付、於此表不時成拜借等之願は一圓御聞屆無之趣一統承知之事。就中此表御借金方御年賦御返濟被仰渡、未金主共より御請不仕、御調達も一切不致出來御時節故、中々御救抔可被仰付御手當は勿論、御地盤御手繰も甚指支に付、其段及御請候處、幾重にも仕、少々たり共御貸渡之儀遂僉議候樣、重而被仰出、當御在府別而一統烈敷相勤、失墜可有之處、願方も無之に付而は、彌增可及難澁与、御仁惠格別之思召を以被仰出候御儀に付、此上強而申上候儀も仕兼候に付、此段御運び之處も不顧、無理成取計を以御貸渡に候條、被仰出之御趣意難有奉存、猶更萬事儉約を相守、御奉公取續候樣相心得可申候。前段之通、此度格別之趣を以御貸渡之儀に候間、尤以後之例には不相成候。此段も致會得候樣可被申渡候。

右之趣一統夫々可被申談候事。

亥十二月

別紙兩通前田伊勢守殿御渡、各樣江も可及演述旨被仰聞候に付、寫相廻候條御承知可被成候、以上。

十二月廿七日

中村九兵衞

人見吉左衞門

在江戸諸頭連名樣

十二月。諸士にして會所銀の貸與を得たる者の返濟方法を定む。

〔正德至天保雜留〕

會所銀、今般役儀且知行之高下に依而、御貸附高相改候に付取立方左之通り。

一、御供人知行高百石に付五百目當、四百目圖に當り候分より以下者、是迄之通十五ヶ年賦を以、元利取立可申事。

一、役高等に而、是迄之知行當り銀高より過借に相成候人々者、是迄之知行當り銀高者、十五ヶ年賦を以元利取立、知行當りより過借に相成候分は、別證文を以借用年之翌年より、百石に付二十五匁宛、無利足を以取立可申事。

但、無利足上納有之人々は、本文過借に相成候銀、右無利足之内ゟ打込可致上納候。都而前借之分は無利足ゟ打込、是迄之通可致上納候。尤是以後幾度致借用候共、右之通候事。

一、御借渡之上御用無之、居留に相成候人々者、借用之分返上方、是迄之通知行當り銀高に相當り候分者、十五ヶ年賦を以返上、過借之分は百石に付五十目宛返上之事。

一、御貸渡之上、病氣に而御用御斷申上不罷越人々は、知行當り之分者、願有之候者十ヶ年賦に而返上、過借之分者堅く一時返上之事。

一、地廻り當り借用之分、十五ヶ年賦を以元利返上方只今迄之通、尤前借有之内、重而御貸渡無之儀茂、是迄之通之事。

但、知行百石に付二百目闔りより、過借に相成候人々有之時者、右過借之分者無利足ゟ打込可致返上候。無利足上納無之人々は、別證文を以百石に付二十五匁宛返上之事。

一、就幼少亡父遺知之内三の一被下候人々、年賦上納之分、元利共三の一之割合を以取立、本知相續之上者尤最前之年賦當り之通取立、十五ヶ年終り候上に、右三之一之内淀み候元銀、右十五ヶ年賦一ヶ年當り之割合を以、取立可申事。

但、三の一被下置候内三の二宛御用捨之利足者被下切之事。

一、病死人代借重、并跡目相續之上引請證文等、惣而元利上納之分證文改候節者、其月之利

是二重に取立候儀、是以後指止可申事。
右會所銀取立方、以來右之通候條、被得其意、可被申談候事。

癸亥十二月　　長甲斐守

會所御奉行中

文化元年

正月朔日。前田齊廣、江戸に於いて元日の儀を行ふ。

〔政隣記〕

元日快天長閑也。晝より陰微雨。御例之通御直垂被爲召、朝六時御供揃に而同刻過御出。兩御丸御登城。於殿中都而如御先規、九時前表御式臺より御歸殿。御作法都而御先例之通。

正月十八日。前田齊廣、治脩夫人を招請す。

〔政隣記〕

正月十八日御表江年頭初而大御前樣御招請。且御前樣御入輿後初而就御招請。御居間書院於御敷舞臺、左之通御囃子狂言被仰付、番組略御歩並以上見物被仰付。且携候人々熨斗目、御勝手向服紗小袖・布上下、御式臺向者常服与、昨日御横目中申談之事。

但、尾州様より之御附頭内藤喜左衛門等、於御勝手座敷一汁五菜之御料理等、御大小將給事に而被下之、挨拶并御使物頭相勤。其外夫々御附之人々御作法を以御料理被下之、御囃子等見物被仰付候事。

正月廿一日、前田齊廣、治脩の子利命を世嗣とすることを許さる。

〔政隣記〕

正月廿一日、昨日御老中依御奉書、今日不時御登城可被遊候處、就御痛邪御名代淡路守様江御願。

右に付一統四時揃之旨、伊勢守殿被仰聞候段、御横目より申談之事。

一、今日於御席頭分以上江左之通伊勢守殿御演述、畢而於竹之間爲御祝詞御帳に附候事。

昨日御老中方御連名之依御奉書、御名代淡路守様今日御登城被成候處、於御白書院御縁頬に、裕次郎様御養子に被成、御嫡子御願之通被仰出候段、御老中方御列座御用番牧野備前守殿御演述、難有被思召候。此段被仰聞候。松平之御稱號、且是以後萬端御振合、前々御嫡子様之通相心得可申候。此段何茂江可申聞旨御意に候。

本文御弘、於金澤は二月二日有之、爲御祝詞年寄中等江廻勤。

右に付御表向服紗小袖・布上下着用、三ケ日平詰、今・明日之内爲御祝儀年寄中等御小屋江可

相勤旨、御横目中申談。且三ヶ日之内爲御祝儀、御出之御客衆等ゟ御料理出候筈之事。

〔齊廣樣御傳畧等之內書拔〕

文化元甲子年御年御二十三なり。同年正月二十一日御望の如く裕次郎殿(治脩公御男)御養嫡之台命あり。公御所勞により御名代淡路守利幹朝臣登城せられ、御白書院緣頰に老中列座、御月番牧野備前守忠精台命を傳らる。

〔金龍公記史料〕

正月廿一日出養裕次郎君爲嫡子之願書于幕府。二月九日被允。同日大將軍及大納言賀我立世子。遣奏者番松平和泉守乘寛賜物。大將軍夫人亦遣廣式番之頭共々賜物。

正月廿六日。郡方に於ける人別の取締を勵行すべきことを命ず。

〔郡方御觸〕

御郡方人別御縮方、古來より紛敷儀有之候に付嚴重遂穿鑿、人別御縮方相立候樣前々申渡候得共、不容易儀共有之躰に而未詮議中に候。然處礪波郡四ヶ町村傳四郎三男嘉十郎儀、金澤ゟ稼に罷出居申內、去々年七月割場付足輕に被召抱候躰、裁許之十村下牧野村平助より申聞候旨に付、長屋平馬等より割場奉行ゟ懸合、委曲之趣御用番年寄衆ゟ相達、右嘉十郎引戾筈に候得共、右嘉十郎一人引戾候而者、外紛敷人別相顯兼候儀茂有之、種々遂詮議候內、右

傳四郎等前田式部手合江引出し相糺候内、右足輕に被召抱候儀茂相顯候に付、式部方より公事場江引渡、於右場詮議之上嘉十郎儀者不及申、嘉十郎足輕に罷成候儀致取持候足輕兩人茂、御扶持被召放候。右嘉十郎一件に付、下牧野村平助手前手ぬけ之儀も有之候得共、平馬等より無念之趣御用番・年寄衆竪公事場江も相達候に付、平助手前不及糺、以來人別御縮方相立候樣にと公事場より申來候。是迄之儀者先其通、以來紛敷人別之儀に付何与歟事起り候而者、面々申譯難相立儀に付、今般人別巨細に相調理、拙者共切に而難取捌品茂有之候得者、兩役所詮議之上御算用場江示談、御用番年寄衆江茂相達可及裁判候條、可得其意候。依而左に記候通、人別巨細に相調理、左に記候覺書之通、有之儘帳面に記可指出候。且又覺書末々記候分は別册にいたし可指出候。

一、都而他所江罷越居申者、竪他所より罷越致住居候者も可有之哉に候間、不相洩樣綿密に相調理書出可申候。是迄之儀は數十年來成來候儀に付、平馬等より引請無念之趣茂相達候得共、今般之調理に相洩候者有之、其者之儀に付、以後において故障出來致候はゞ、村役人等不輕咎可申付、面々茂越度に可相成候條、村役人江も譯而此旨申渡、少茂等閑之族無之、念を入巨細に相調達可書出候。以後人別御縮方之儀は遂詮議可申渡候、以上。

子正月廿六日　　　　　　　　　　　　　　高田彌左衛門

菅野兵左衛門
林　彌四郎
毛利與兵衛

能州四郡御扶持人・十村中

享和四年何月

何郡何村誰組村々人別帳

内に
何村　誰

一、何人
何郡何村　誰

内
一人
妻

但、何村誰娘或者姉妹。

一人
何十歳　せがれ誰

一人
次男誰

但、此者何の何年何月より誰方江稼に罷越居申候。

一人
三男誰

但、此者何の何年何月より金澤江稼に罷出居申候處、當時御家中一季居何奉公仕罷在申候。

一人　　　誰

但、此者何頃より金澤江稼に罷出居申候處、當時何組足輕、或者小者、或は役小者に罷成居申候躰に御座候。

一人　　　誰

但、此者當時剃髮仕、何郡何村に庵室繕、何与唱罷在申躰に御座候。

一人　　　誰

但、此者當時御家中何の誰樣譜代之御家來に而召抱、何の誰与相名乘罷在申躰に御座候。

〆

覺書

一、一組切一村々々人別一軒宛巨細に相調理、帳面下書之通、金澤江稼に罷出、其外他支配江奉公等に罷越し、且又御家中致奉公候譯等有成可調事。

一、御家江被召抱候者、或は御家中之内給人等譜代に召抱、其外役小者等に罷成居申者も可有之哉に候條、右樣之類無泥可書出事。

一、無謂剃髮致、品により古來より無之庵室等建致居住候者も可有之候條、其譯委曲可書出事。

右一村一軒々々人別帳脇書に可調事。

一、御家江被召抱候足輕・小者幷役小者。

一、御家中江召抱候譜代之小者家來致出家、庵室等繕罷在候者。

一、町方居住之者。

一、醫者に罷成候者。

但、右五ヶ條は別册に記、一組切に可書出事。

今般申渡候人別根帳之儀、郡々五人組・十人組有之事に候間、帳面之上右五人組・十人組を分、一切々々〆右何人組与相調指出可申候、以上。

子二月四日

高田彌左衛門

菅野兵左衛門

木梨左兵衛

毛利與兵衛

能州四郡十村中

正月廿六日」幕府に報告するの要あるを以て酒造高を調査すべきことを命ず」

〔部方御觸〕

去戌年従公儀被仰渡候酒造役米之儀、追而被及御沙汰候迄不及指出段、且又前々造高に無構、銘々分限に應じ、改而實を得候高を得与相糺、御書出之節天明八年御改之高に相違有之候与茂、其段御勘定所ゟ御屆可有之旨江戸表より申來候條、夫々當場より可申談年寄中被申談候條、可被得其意候。當時酒造人共、天明八年被仰渡候三分一造高不致増造儀者勿論に候。元來酒之儀は、年々豐凶に依而致酒造候儀に候得者、右三歩一造高より相減致酒造候者も有之躰に付、今般實を得候造高御改に候條、去秋より當春中酒造米高得与相糺、軒別書譯、急速當場ゟ可被書出候、以上。

子正月廿六日　　御算用場

松山新平殿
高田彌左衛門殿
菅野兵左衛門殿
山崎十三郎殿

松原安左衛門殿
山比勘兵衛殿
中村宅左衛門殿

追而本文之外、先達而申達候通酒造米高軒別書譯、年々各手前江可被取立置候、以上。

酒造方之儀に付、別紙之通御算用場より申來候條、得其意、面々組下酒造人共江申渡、本文之通增造・隱造等不致樣、嚴重可被申渡置候。且又三の一造より相減造込候者も、今度一集に夫々相調理、帳面に仕立急速可指出候、以上。

子正月廿八日

高田彌左衛門

菅野兵左衛門

能州四郡十村中

正月廿八日。御步橫目山口才次その職務を誤るを以て指扣を命ぜらる。

〔政隣記〕

正月廿八日左之通以御覺書、甲斐守殿頭河內山久太夫江就被仰渡候、才次儀久太夫宅江呼立、吉田八郎太夫立會、小頭河邊八左衛門指引に而申渡候旨申來候事。

付札、河內山久太夫江

御歩横目　山口才次

右才次儀、去春金谷御廣式御膳所御用相勤罷在候處、右御膳處古き帳面之分虫入等に相成候に付、賣拂代料を以役所向入用之料紙等相調候はゞ可然旨同心共之內申聞候に付、御料理人吉田丈藏・寺尾五郎作江及示談候處、同意之旨申聞候に付、同心宮村文左衛門江申談、右帳面之分三貫文餘に相拂候由。且又右代料之內右丈藏致借用度段申聞候旨、同役土山三郎左衛門より相達候に付、承知之上三貫文貸渡候。麁忽之至不念之趣奉恐入迷惑至極仕候旨等口上書兩通、添紙面を以被指出之。將又先達而より再往御尋之趣御座候處、麁忽之仕方不都合之段申聞候。其上御參勤御供も御差省之儀に御座候間、先指扣罷在候樣可被申渡哉之旨紙面被指出候に付、紙面之通被相心得候樣申渡置候。右之趣夫々相達御聽に候處、先以帳面相拂申儀に候はゞ、御用に難相立品々否得与相糺、御廣式頭等江も相達遂熟談可申處、其儀無之、剩同役三郎左衛門へも內談仕候處、承知之旨申聞候趣に申聞候得共、得与思慮仕候得ば、三郎左衛門江內談仕候儀は無覺束候に付、三郎左衛門江相尋候處、最初內談は不仕旨申候由重而申聞。其上右拂代吉田丈藏江貸渡候族等、彼是不埒至極之儀被思召候。依之役儀被指除、指扣被仰付候旨被仰出候條、此段可被申談候事。

正　月

同日左之趣御覺書を以、頭菊池九右衞門ゟ甲斐守殿就被仰渡候、則申渡有之。

御步橫目　土山三郎左衞門

右御覺書留略。相達御聽候處、同心任申旨に帳面迄出候族等不行屆儀に被思召候。以後之儀相心得候樣可申渡旨被仰出。

正月廿八日。能登奧郡より輸出する屎物の入津する場所を上申す。

〔郡方御觸〕

奧郡より積出候屎物入津いたし候ヶ所書上候樣、御郡所より被仰渡、別紙之通書上候。尤右之所々ゟ拙子等印鑑被遣候等に候間、左樣御承知、津出調方等舊冬致廻狀候通御心得可被成候。

一、干鰯斗俵樽之儀、舊冬被仰渡有之、浦々右樽拵中に而可有之与存候。御極印之儀尙更御窺申上候處、追而御場より可相渡、當時干鰯出來候分有之候はゞ、先三斗入に爲相仕立候樣被仰渡候間、是又左樣御承知可被成候、以上。

正月廿八日　馬場村　八左衞門

折戸村　源　助

鹿野村　恒　方

十村中宛所

覺

安宅　本吉　相河　宮腰　大野　粟ヶ崎

所口　氷見　伏木　放生津　東岩瀨　魚津

〆

右奥郡より積出候屎物入津仕所々書上申候、以上。

子正月　馬場村八左衛門等三人

高田彌左衛門樣

菅野兵左衛門樣

正月廿九日。前田利命、紀伊侯德川治寶の女豐姫との縁組を許さる。

〔政隣記〕

一、正月廿九日、昨日御老中方依御奉書、今日不時御登城、依之一統四時揃之旨伊勢守殿被仰聞候由、昨夜御横目中より申談有之。御歸殿之上頭分以上ニ、於御席左之通伊勢守殿御演述。畢而於竹之間、御祝詞之御帳に附候事。

昨日御老中方御連名之依御奉書、今日中將樣御登城被成候處、裕次郎樣御儀、紀伊中納言樣

御息女豐姫樣与御緣組、御願之通被仰出忝思召候。此段何茂𪜈可申聞旨御意に候。
本文之趣、於金澤二月十三日頭分以上𪜈御弘有之、爲御祝詞年寄中等𪜈廻勤有之。
〔齊廣樣御傳略等之內書拔〕
正月廿九日裕次郎樣、紀伊中納言治寶卿御女豐姫樣と御緣組御願之通被仰出有之なり。

正月。御步等の增米給與を出願するも容易に許さゞるべきことを告ぐ。

〔政隣記〕
付札、御步頭𪜈
都而諸願方之儀、是迄者先例しらべ被仰付候上御聞届、追々御增米等被仰付候得共、相勤候年數而已を以、左迄も無之勤功を申立願出候樣に相成候而者、畢竟職分之勵も薄く、自ら不宜風俗に押移り、不本意之至に候。依而以來御增米抔願有之候而も、容易に御聞届無之候。格別之勤功有之者は、時々之御僉議に而被及御沙汰、或は時宜に寄御增米願抔者、當座之御賞美抔可有之候。右等之趣兼而爲心得申聞置候樣被仰出候條、可被得其意候事。
正月

正月。諸士以下に對して嚴に博奕禁止の令に背くこと勿らしむ。

〔政隣記〕

付札、御横目江

博奕御制禁之儀前々被仰渡置候得共、猶更御家中末々之者共違失無之樣、嚴重に可申渡旨被仰出候。右之通就被仰出候、少しも心得違之者有之候得者、御横目足輕より相咎候筈に候條、被得其意、家來末々迄主人々々より嚴重に申渡候樣、一統相觸可被申候事。

子正月

正月。能登に手上高又は手上免を命じ、田租を增徴す。

〔郡方舊記〕

一、享和年中以來諸郡共手上高・手上免被仰渡。能州四郡は文化元年正月被仰渡、則手上高・手上免仕。委くは高免帳に留置事。

二月二日。金澤に於いて諸士に、前田齊廣が治脩の子利命を養子とすることを許されたるを告ぐ。

〔筒井舊記〕

前月廿日御老中方御連名依御奉書、翌廿一日御登城可被成處、少々御疝邪氣に被爲在候に付、御名代淡路守樣御登城被成候處、御白書院御緣頰御老中方御列座、裕次郞樣御儀御養子

に被成、御嫡子に被成度段御願之通被仰出候旨、御用番牧野備前守殿御演述被成、難有被思召候。此段何れ茂ゟ可申聞旨、拙者共迄以御使札被仰下候事。

裕次郎様御儀、松平之御稱號、是以後之御振合、前々御嫡子様之通に候條、此段一統可被申談候事。

二月二日

二月九日。徳川家齊、前田齊廣の利命を世嗣とせるを祝し物を贈る。

〔政隣記〕

二月九日、今度裕次郎様御養子御嫡子爲御祝儀、今日従公方様・大納言様、上使御奏者番松平和泉守殿を以、中將様ゟ卷物十・干鯛一箱・御樽一荷、従大納言様干鯛一箱・御樽一荷、従御臺様御使御廣式番之頭木曾七郎左衛門殿を以、干鯛一箱・御樽一荷御拜受。

裕次郎様ゟ右御同使（和泉守殿也）を以、干鯛一箱・御樽一荷、従大納言様干鯛一箱、従御臺様御使御廣式番之頭石尾喜左衛門殿を以、干鯛一箱。

相公様ゟ御同上使和泉守殿を以、干鯛一箱・御樽一荷、従大納言様干鯛一箱、従御臺様御廣式番之頭御使筑山文左衛門殿を以、干鯛一箱御拜受。御料理御盃事御斷に付、御餅菓子等出。夫々御都合能被爲濟、右爲御禮御老中方御勤者、少々就御風氣に、淡路守様ゟ御名代御

頼被遊候事。

但、九時頃和泉守殿御出、同半時過、七郎左衛門殿等御三人御一集に御越被成候事。

〔續徳川實紀〕

二月九日、奏者番松平和泉守乘寛して、松平加賀守齊廣のもとに卷物十・一種一荷を贈らせらる。西城よりは一種一荷なり。こは養父松平肥前守治脩が子裕次郎利命をもつて、加賀守齊廣が嗣子と仰出されしによつてなり。裕次郎利命・肥前守治脩に一種一荷をつかはさる。

二月十三日。金澤に於いて諸士に前田利命の縁組を許されたることを告ぐ。

〔留帳鈔錄〕

予二月十三日御弘之趣、年寄中・御家老中列座、月番左京殿被申述候趣。

裕次郎様御縁組之儀、紀伊中納言様御息女豐姫様与被仰合度御願置被成候處、前月廿九日御登城被遊候様、前日御老中御連名之御奉書依到來、御登城被遊候處、御願之通被仰出、難有御仕合被思召候。此段可申聞旨被仰出候。

御兩殿様ゟ右爲御祝詞、年寄中等今日・明後十五日相勤可申旨披見物有之。惣廻り服紗小袖・布上下、家來は常服。

二月十四日。能登奥郡に干鰯斗り升の極印を受くべきことを告ぐ。

〔筒井舊記〕

干鰯斗り升極印爲打渡、當廿五日・六日御郡所より足輕中御廻に付、右斗り升入用之所には、去年被仰渡候通寸法等間違不申様出來爲致置、極印請候儀等不指支様可申談旨被仰渡候間、此段早速御申渡、若未だ斗り升出來不致分茂有之候はゞ、急々御申付、極印請候儀指支不申様御心得可被成候、以上。

二月十四日　　馬場八左衞門

仲間中宛所

二月十五日。前田齊廣、登營してその養子を許されたること等を謝す。

〔政隣記〕

二月十五日朝六時過御供揃に而御登城、西御丸にも御登城、御下り御老中方御廻勤、九半時頃御歸殿。且今日爲御祝詞御出之御客衆等に二汁五菜向詰一つ燒鯛等之御料理出。將於御席頭分以上に左之通伊勢守殿御演述。畢而於竹之間御祝詞御帳に付候事。

今度御養子就被仰出候、當九日上使御奏者番松平和泉守殿を以、從公方様・大納言様、相公様・中將様・裕次郎様品々御拜領物被成、從御臺様も以御使御拜受物被成、御前様にも從公

方樣・大納言樣・御臺樣、大奥御女中衆奉文を以御拜領物被成候。且又從相公樣御禮之御獻上物、今日以御使者名尾能被指上、中將樣には昨日御老中方御連名之依御奉書、今日御登城被成候處、於御白書院御禮被仰上、御懇之被蒙上意、裕次郎樣にも御名代飛驒守樣を以御禮被仰上難有被思召候。此段何茂御可申聞旨御意に候。

一月十五日。前田治脩、湯治在國延期の請を許さる。

〔三守御譜〕

文化元甲子年御湯治御居延の事、二月十五日御願の通りたるべく旨被仰渡。

文化二年八月十三日再御願之通被仰出、四年正月廿七日、五年閏六月廿七日、六年十二月廿八日御居延御願之通被仰出。泰雲公御例の如し。

二月十九日。德川家齊、前田齊廣に鶴を贈る。

〔政隣記〕

二月十九日、今日上使御使番日根野織部殿を以、御鷹之鴈御拜領、萬端御例之通被爲濟、中村九兵衞氣滯見合に付、代御客方御用伊勢守殿被仰渡、自分相勤。

一、右相濟爲御禮、御老中方御廻勤時刻七つ時被成候に付、御登城者不被遊候事。

鴈とあるは鶴の誤

〔政隣記〕

鶴上使御作法

一、上使御案內之御小人目付來次第、御付人大手・昌平橋・本郷三丁目二人宛付置、外付廻之者二人可指遣候。

但、御小人目付來次第、一統布上下着用可仕候。

一、御拜領之鶴來候者、聞番先立仕、御玄關敷付に而御使番請取之、御大書院上之方前々之通持出、扣可罷在候。

一、上使御出之節、御門外江年寄中・御家老幷聞番罷出、組頭・物頭御白洲江罷出可申候。

一、上使御下乘より御玄關敷付先迄、聞番御先立可仕候。御前御玄關鑑板內より御右之方江御出向、敷付右之方江飛驒守樣・淡路守樣・前田信濃守殿・前田大和守殿等被出、同左之方江御先手衆御出可被成候。御前御誘引に而、上使御大書院上之間江御着座、御刀同二之間御床之內上之方に、御表小將直之可申候。

但、御玄關階上に御大小將扣罷在、御跡より罷越、御刀御渡被成次第請取、御表小將江相渡可申候。

一、上意御拜聽、御拜領之鶴扣罷在候所江被爲寄、御頂戴相濟、上使御座付御改之上、御挨

拶之內御拜領之鶴御勝手江引入。畢而御熨斗（木地三方）出之、引之、御前御勝手江被爲入、御火鉢・御たばこ盆・御茶出之可申候。

一、御前重而御出御挨拶之上、御先手衆御相伴に而御菓子出之、御酒之上御肴御前御持參可被遊候。御相伴江者、御給事人引之可申候。

一、御吸物出、御土器（木地三方）・御肴同出之、御前御出御挨拶之上、御盃事上使御初に而御前江被進、御肴も被進、御加被遊上使江被遣。此時替之御肴指出、御肴も被遣、御加。畢而重而御前江被進、御肴も被進、御納被遊、御勝手江御入可被遊候。御銚子御勝手江入、御土器・三方等引之、御濃茶等段々引替に可仕候。

一、御取持衆御挨拶之上、御前御出御請被仰述、追付上使御退出、御前最前之所迄御送り、飛驒守樣初御取持衆最前之所迄御出、其外年寄中・御家老以下前條之通罷出可申候。

一、上使御退出以後、御廣間溜に而御步目付、御使者之間に而御小人目付御料理出之。且又御拜領物持參人江者、大御門續內腰懸に而御菓子・御酒等可被下之候。

右前々之振を以奉伺候、以上。

二　月

二月十九日、使番日根野織部弘篤をして、松平加賀守齊廣に御鷹の鶴をおくらせらる。

二月十九日。前田齊廣登營して改元のことを告げらる。

〔政隣記〕

二月十九日朝五時前御供揃に而、不時惣御登城、九時頃御下り。今日文化与年號改元被仰出。

この改元は二月十一日に行はれたるなり

文化

年號右之通、今日より改元に候條、此段一統可被相觸候、以上。

甲子二月十九日　前田伊勢守

本多勘解由

御横目中

右永原治九郎より例文判形之以廻狀到來。於金澤は三月朔日公儀御用長甲斐守殿より御觸紙面被出之。文段前々之通也。

二月。足輕の養子にして單に名義のみに止るものは、父の死刑に連座する例より除外すべきことを定む。

〔公事場御定書之寫〕

割場足輕古森市郎太夫養父古森甚丞与申者、不屆至極之趣有之死刑に被相伺候。甚丞死刑被仰付候へば、養子市郎太夫儀養父依罪殺害可被仰付者に候處、足輕共に而者養子之名目迄に而、合力銀等取受、以後互に貪着不仕樣之儀有之趣相聞え、父依罪共子殺害之儀者、誠に父子一躰之所を以被仰付候儀に而可有御座、尤養子与實子之差別者無之事に候得共、彼等式立替を仕、表向養子之名目迄之者を殺害之儀いかゞ歟被心付候に付、則市郎太夫召出被相糺候處、內分に而合力銀指出致立替、親子之親み相絶罷在候由。依而表向之名目を以、養父之依罪殺害与被仰出、本人幷一類共公事場ゟ召出、落着被仰出之趣爲申聞候上、首代銀申付命を助候趣被申渡候はゞ如何可有之哉之旨、委細各僉議之趣紙面被差出候。然處甚丞儀、壽光院樣御一周忌御赦之砌に付而、命御助被成候に付、市郎太夫殺害之沙汰に不及候得共、以後ヶ樣之類は各僉議之通可被仰付旨被仰出候。夫に付甚丞赦之儀被申渡候節、市郎太夫儀被召出、養父之依罪殺害可被仰付者に候得共、甚丞儀爲赦命御助に付不被及其御沙汰趣被申聞、可被相宥候事。

享和四年甲子二月

二月。十村以下濫に名を改むることを禁ぜらる。

〔筒井舊記〕

諸郡御扶持人幷平十村等名替之儀、是迄者無謂願出有之、承屆來候得共、今般詮議之趣有之、以來は跡職相續或は役儀或は轉役被仰付候歟、曁拙者共等名前指合申節之外、無謂名替之儀不承屆候條、可得其意候事。

子 二 月　　木梨左兵衛
　　　　　　廣瀬順左衛門

諸郡御扶持人・十村・新田裁許・山廻中

二月。十村等、その着用する衣服等に就き申合を行ふ。

〔杉木氏小留帳〕

仲間定書之事

一、於御城下十村之分、平生木綿着用、紬羽織・小倉袴幷有合之古き裏附け袴着用に而、御役所向町勤仕申候。御郡方においては是迄之通綿服着用之事。

附り、事立候砌は紬着用仕候。

一、十村妻子等之儀、押立候砌は絹・紬着用、帯之儀は繻子・縮緬之外堅無用。合羽之儀は布裏之外堅爲用申間鋪候事。

但、其外品々之儀は被仰渡之通爲相守可申事。

一、年頭・歳暮都而平生音信・贈答仕間鋪、緣者親類之儀は樹木・作物取遣格別之事。

右之通相守可申事。

子 二 月

御扶持人・十村

三月朔日。金澤に於いて諸士に改元の事ありたるを告ぐ。

〔御觸留〕

年號文化与改元之旨、前月十九日被仰渡候條、可相觸由被仰出候段、從江戸表申來候間、被得其意、御組中江可有御觸候。且又御組之內裁許有之面々は、夫々相達候樣可有御申聞候、以上。

三月朔日 長 甲斐守

前田土佐守殿

村井又兵衛殿

奥村左京殿

三月四日。前田齊廣、家老に命じて年寄等の風儀を監せしむ。

〔御親翰寫〕

諸士風俗等之儀者、去々年以來一統爲申聞候儀者何茂存之通に候。然處又近頃者萬事相ゆるみ申体に相聞え、就中年寄共心得等之樣子、如何有之候哉無心許候。其方中事は意味茂有之勤向に候條、右之趣申達候間、年寄共心得違之儀も見聞有之候者可被申越、其外心付之儀等は、聊無泥人別に可被申聞候。最早歸國間も無之候間、手前趣意之儀者對面之節可申入候、已上。

三月四日

家老中

猶以留守中、何茂無異被相勤一段之事に候。猶不順之氣候に候間自愛尤に候、以上。

家老中

三月四日。能登鳳至郡に、百姓の屋敷に生ずる槻木を伐るべからざることを告ぐ。

〔筒井舊記〕

御郡所より被仰渡候は、百姓垣根廻り等槻木立少く相成候躰御見聞に付、伐取不申樣縮方

可仕旨被仰渡候間、右之趣村方江御申渡、尤伐取申度旨願出候はゞ、御詮議被成、容易に御聞届被成間敷儀に御座候。此書狀先々早速御順達、落着より私共之内向寄江御返可被成候、以上。

三月四日　馬場村　八左衛門
　　　　　折戸村　源助
　　　　　鹿野村　恒方

三月六日。博奕に關する處分を郡奉行に於いてする例を改め、自今公事場奉行の指揮を受けしむ。

[郡方御觸]

付札、御算用場奉行江

御郡方百姓等博奕等致候者有之、其村方より斷出不申、後日相知候得者、本人は牢舍申付、其村方一作過怠免申渡、且無高所者過錢取立候。若村方より早速訴出候得者、當人同類迄曲事に申付、村方過怠免者不申渡候。右之通取捌に成候濫觴之趣被相糺候所、天明元年より之儀に付、必被仰出之趣茂可有之与打返相しらべ被申候得共、一圓見當不申旨等、先達而被申聞候。

御刑法之儀者甚品重儀に候得者、被仰出之趣も有之、拙者共より各江申渡無之候而者、御郡奉行手前に而左樣之取捌者無之筈に候處、拙者席にも何等之儀茂相見不申、左候得者御算用場切に而申渡有之儀にも候哉。其所甚不分明に相聞候に付、相達御聽候所、博奕御制禁之儀前々より被仰渡置、近年別而被仰出茂有之、品重儀に候條、以來御郡奉行切に而取捌候儀指止、公事場奉行江相斷、右奉行指圖次第に相心得候樣可申渡旨被仰出候條、被得其意、此段御郡奉行江可被申談候事。

甲子三月

御郡方百姓等賭奕宿等いたし候者、於公事場に御刑法之趣も有之候處、近年各切に而取捌有之候段、先達而右場より尋之趣有之に付、各手前相糺候得共相分不申、當場留帳等にも不見當、依之御用番年寄中手前に被仰出之趣も御座候哉と、御達申上置候處、右御席にも御見當り無之に付、別紙之通被仰出候旨、御覺書を以御用番山城守殿被仰渡候に付、寫相達候條、被得其意、以來各切に而取捌之儀被指止、公事場奉行江相斷、右奉行指圖次第可被相心得候、以上。

甲子三月六日　　　御算用場

三州御郡奉行中

三月十三日。前田齊廣就封の暇を受く。

〔政隣記〕

三月十三日上使御老中牧野備前守殿を以、御國許ゟ之御暇被仰出、御例之通御卷物三十・白銀百枚御拜領。從大納言樣も御老中安藤對馬守殿を以、被爲蒙上意、御卷物二十御拜領。從御臺樣も御使御廣式御用人小笠原大隅守殿を以、御卷物五御拜受。八時頃萬端御都合克段々被爲濟候。

但、對馬守殿ゟ者御盃事有之。其外者御斷、尤二汁六菜之御料理等被出之。向詰御持參、大隅守殿者御餅菓子等被出之、御重引御持參。其外御作法都而前々之通に付略す。

右爲御普爲聽、日光御門跡幷水戸樣ゟ御使に參上、且尾州樣・紀州樣ゟも御使可被進候處、今日者市ヶ谷御守殿ゟ御成に付、道筋人留指支候に付、右御方ゟ者明日は御日柄、明後日被遣候筈之事。

三月十五日。前田齊廣登營して就封の辭見す。

〔政隣記〕

三月十五日、昨日御老中方依御奉書、今朝六時過御供揃に而御登城。御下り御老中方幷若年寄衆御廻勤、九時過御歸殿。左之通於御席頭分以上ゟ伊勢守殿演述。畢而於竹之間恐悅之御

帳に附。

一昨十三日上使牧野備前守殿を以御國許ゟ之御暇被進、白銀・御卷物御拜領。從大納言樣安藤對馬守殿を以御卷物御拜領。從御臺樣も小笠原大隅守殿を以御卷物御拜受被成候。昨日依御奉書今日御登城被成候處、於御黑書院御禮被仰上、御懇之被爲蒙上意、御鷹・御馬御拜領。次に伊勢守・勘解由御目見、拜領物も被仰付、重疊難有被思召候。此段何茂ゟ可申聞旨御意に候。

〔續德川實紀〕

三月十五日、松平加賀守齊廣就封の暇たまひ、御鷹・馬を下され云々。

三月十八日。前田齊廣江戸を發して歸國の途に就く。

〔政隣記〕

三月十八日陰、今朝六半時御供揃に而五半時頃御發駕、八時過浦和驛御着。自分御先蕨驛より御近習騎馬。但、六時過御小屋出立、蕨に而奉待請御供。

〔御年譜〕

御供前田伊勢守・本多勘解由、御歩頭津田權平。

三月廿三日。郡方に於いて僧侶を招き法談聽聞の爲集合するを禁ず。

〔郡方御觸〕

於御郡方遠所僧等を招、法談爲致人集致候儀不相成段、是迄毎度申渡置候處、心得違之者有之、今以人集いたし候者茂有之候旨粗承及候。先以申渡方等閑之致方沙汰之限に候。以來心得違之者有之、人集等いたし候儀承及においては、人別に相糺嚴重致取縮可申候。右に付足輕折々相廻候儀も可有之候條、得其意、末々迄不相洩候樣嚴重可申渡候、以上。

子三月廿三日　菅野兵左衛門

高田彌左衛門

江上清左衛門

毛利與兵衛

能州四郡十村中

四月二日。前田齊廣金澤城に着す。

〔政隣記〕

四月二日雨天。今朝六時過御供揃に而同刻頃御立、森下に而時刻御見合等有之、四半時前晝御機嫌克御着城。自分今日は本役御供所に加り御供歸着、御用番內匠助殿に於御席恐悅申述歸宅之事。

〔御年譜〕

姫川出水、糸魚川廿七日御逗留。四月二日御着城。

四月六日。能登所口の小代官が盜賊改方として廻村の際、村役人出迎の件に關し調査を命ず。

〔筒井舊記〕

先達而申聞候所口小代官、盜賊改方として御郡方相廻り候時分、通筋村々役人出迎之儀、先年は無之、近年組々之內罷出候例を以一統指出候由、委曲申聞之趣令承知候。依而山崎方懸合候之所、先年より一統出來候得共、近年は不指出村々茂有之に付、先年之通に立歸候樣に与申觸候由。右に付裁許々々より山崎方江達置候趣も有之哉に相聞え候。何れ實意候哉辨兼候。先年より不罷出与申慥成儀承度候間、委曲可申聞候、以上。

四月六日　高田彌左衛門

菅野兵左衛門　見合

奥兩御郡十村中

所口小代官、盜賊爲改方御郡方相廻候時分、通筋村々役人出迎之儀、御郡所より山崎十三郎殿江御懸合之儀に付、今度御郡所より御紙面致到來、相廻申候間御承知被成、今一往御詮議

被成、舊記等に而茂無御座候哉、且又右出迎之儀に付近年所口江御指出被成候小紙等扣も御しらへ置、追而寄合申節、無御失念御持參可被成候。其上に而遂示談、御郡所江御答可申上儀に御座候。御郡所御紙面先々早速御頓達、落着より私共之内向寄江御返可被成候、以上。

四月十七日

馬場村　八左衛門

折戸村　源　助

鹿野村　恒　方

十一組宛所

四月七日。前田齊廣、自今毎日御居間書院に出勤せんとするの意を告ぐ。

〔御家老方若年寄方日記之内覺書〕

四月七日

一、勸解由を以被仰出候は、去々年御入國之砌より、毎日御居間書院江御出被遊御用可被聞召思召之處、月番等より相伺候品無之節は、其段執筆を以御近習頭迄申上候得ば御出不被遊候。然處此度江戸表以來御考被遊候處、御居間書院江御出被遊候儀は御勤与被思召候間、御用之有無に御構ひなく毎日御出可被遊候間、月番等より相伺之儀等も無之候はゞ、其節銘々より少し進出其段可申上候。左候へば毎日御目見も有之、御とうかんに無之可然儀与思召候。

しかし右之通に而は、是迄も無之儀不可然与存候儀に候はゞ、其段可申上候。御前より決而以後如此可被仰付与御治定に而被仰出候御儀には無之候。可然儀与存候はゞ、右之通に可被遊旨御意に御座候間、示談仕可申上候。御家老方之儀は、同人より直に可申談旨被申聞候に付、被仰出之趣乍恐御尤之様に奉存候。今日は同席共退出仕候間、明日何茂示談仕御請可申上旨申達置候事。

同　八日

一、右被仰出之趣何茂遂示談候處、何之相障申儀も無御座候間、被仰出之通可奉心得候。右之内銘々より御用之有無申上候儀は、却而紛敷奉存候間、何茂奉伺候御用無御座節は、月番より引取其段可申上候。或は月番より相伺申品無御座、御勝手方・御城方等に御用有之時は、有無不奉申上一先退き、御用有之人々罷出、終りに罷出候者より、此外年寄中より相伺候品無御座段申上候はゞ可然与示談仕候旨、以勘解由申上候處、翌九日同人を以、示談之趣に而も可然候得共、御前思召には一統相伺候品無之時は、御用番より引取申上宜思召候。御用番より相伺候品無之、外御勝手方等豎人々存寄も申上度儀も候はゞ、其段申上可然様思召候。一通り御前より氣色之儀御意有之、御請は御機嫌伺之迄に而はあまりかた／＼敷如何にも思召候。併か様与御極被仰出候に而は無之候間、猶更遂示談可申上旨被仰出候に付、奉畏候、示

談仕後刻可申上段及御請。

一、右之趣何茂遂示談候處、右之通に而指支申儀も無之候間、彌右之通可奉心得候。左候得ば月番は、伺之品等無之節は其段可申上候。御城方等は伺之品有之節は銘々より可申上候。何茂御用無之節は月番より引取其段可申上候事。

右之趣に付、御家老方に而示談之上左之通申上候事。

一、年寄中より御請申上候趣は御座候得共、私共儀は御用有無共御家老方・若年寄方主附より可申上候。且又主付之外申上度儀御座候者は、尤人々より可申上候事。

四月八日。不用の作食藏を賣却すべきことを告ぐ。

〔筒井舊記〕

付札、御算用場奉行に

諸郡作食藏當時入用無之分、及大破修覆之手段無之候間、相拂代銀致上納置、追而作食御再興被仰付候はゞ、其砌新出來被仰付可然旨等、改作奉行詮議之趣紙面指出候由に而、各添紙面を以被出之刻相達御聽、右詮議之通承屆候條、明藏之分相拂、代銀致上納候樣可被申渡候事。

兒鶴はこのり
鶴ははいだか

諸郡作食藏當分入用無之に付、おのづから修覆行屆不申、當時修覆之手段無之分多候に付、詮議之上夫々御達申候所、別紙之通御年寄衆被仰渡候條、一郡切入札取立可指出候。右之趣其方中より十村中江茂可申談候、以上。

四月八日　　改作奉行

諸郡御扶持人中

四月十三日。前田齊廣學校に臨む。

〔金龍公記史料〕

四月十三日臨學校。聽小學內篇講義。大島忠藏講。又於武學校觀馬術演習。佐野源藏等御。

四月廿四日。諸士の鷹所持に關する制限の勵行を命ず。

〔御觸留〕

御家中儉約被仰出候節、鷹所持等之儀に付享保十三年別紙寫本文之通被仰渡、延享三年にも重而付札を以被仰渡候處、今以心得違之人々茂有之候間、前々被仰出候通無違失相心得可申候。

四月廿四日　　前田內匠助

鷹所持仕度存候者は、八百石以上兒鶴・鶴・隼之內一据、三千石以上右之內一据或二据、五千

石以上三据、一萬石以上四据、大鷹は五千石以上之外可爲無用候。八百石以下はかり鷹も無用之事。

一、陪臣者假令高知遣置候者に而茂、鷹所持仕儀一向無用之事。

付札

鷹所持之儀本文之通に候處、近年小身之人々茂所持仕候躰に候。向後小身之者共者勿論、大身に而茂不勝手之面々は鷹所持之儀遠慮可仕候事。

右御算用場奉行御用番杉野善三郎より相觸候事。

四月。御鷹場にて鳥を捕へ及び留場にて投網を用ひ漁撈するを禁ず。

〔文化雜記〕

付札、御横目江

當國御鷹場江、近來殺生人多紛込、不締成躰に而、去冬以來も毎度網等有之取上候。御家中・一統御免場たりとも、網懸もち或八寸以上之串指、且三里四方天網張候儀御停止候處、心得違之者有之躰に付、以來右殺生人見請次第召捕候樣、御郡方之者共江申渡、曁藤内共茂相廻し、嚴重見咎候樣申渡候。

一、御留場之内堀々・俣川・不湖に而投網打候儀、獵師たりとも御停止に而、惣而本川筋之分

茂、毎歳九月朔日より翌年三月晦日迄、投網打候儀、御家中は勿論、殺生渡世之者茂前々より御停止に候。水戸口より大潟之分者御免候得共、是亦潟縁へ寄、鳥之とがめ候所に而者打申間敷旨被仰出置候處、甚猥に相成候躰。且又都而御場之内、本道之外者、殺生道具拵携罷通り候儀不相成候處、是又猥成躰に付、以來右之族之者急度見咎候樣、御郡方之者共藤内共江茂申渡候。

右之通被仰出、一統申觸有之筈に候條、可被得其意候事。

子　四　月

〔若年寄御申渡之寫〕

付札、町奉行江

向後毎歳九月朔日より翌年三月晦日迄、宮腰口・粟ヶ崎筋、金澤町端より上者犀川迄、下は淺野川を限り、兩川幷大野川共濱手迄、豎古保川・金くらゐ川・安原川とも、都而魚殺生御停止に被仰付候。

但、獵師之分は水戸口より大潟迄大川筋御免被成候。

右之通被仰出、一統申觸有之筈に候條、町方之者江も可被申聞置候。

一、右場所尤九月朔日より翌年三月晦日迄、川請負も被指止候條、可被得其意候事。

子　四　月

四月、諸士の鷹匠にして郡方に出づる者不法の擧動あるを戒む。

〔郡方御觸〕

御家中之人々鷹匠御郡方江出候節勢子人足賃、並致止宿候節拂方相對拂に可致申處、御用拂に致候者も有之躰相聞候。此儀は主人不存儀に而、鷹匠共指支不申事に相心得居候者も有之躰に候條、以後心得違無之樣、御家中之面々等家中末々迄嚴重に申付候樣申觸、御郡奉行・改作奉行江も御申聞可被成候事。

子　四　月

〔郡方御觸〕

御用番御年寄衆幷若年寄衆御渡之御覺書寫兩通相達候條、可奉得其意候。右被仰渡之通、近年御餌指共心得違之者共多有之躰、當人者不及申、於御郡方茂前々被仰渡候取扱方格合茂有之處、近年甚致相違、餌米抔茂過分に指出候樣子相聞え、第一村役人等閑に相心得候故、次第費多下々可及迷惑候。則安永年中被仰渡候寫茂相達候條、以來嚴重に相守可申候、以上。

一、御家中之鷹匠へも、御定之宿賃等を以村方止宿、暨勢子人足等召仕候儀茂有之躰不屆之至、別紙被仰渡之通に候。今般之儀者格別之御趣意を以被仰出候儀に候。第一耕作之隙を費

安永年中被仰渡とは同九年にあり　御定の宿賃とは前出の御用拂の意なり

し、曁下々費用茂有之儀を御厭被仰出候儀与奉恐察、於御郡方別而難有仕合に候。右御趣意之趣得与村役人等江可申聞置候。尤以來聊たりとも御餌指等不法之儀有之可斷出儀を、村方之面倒与存不及斷候而者、格別被仰出之御趣意にも致相違、都而奉恐入儀に候之條、是等之儀入念申渡、請書其方中手前江取置可申候、以上。

子四月　　改作奉行

諸郡御扶持人・十村中

付札、改作奉行江

御餌指共於御郡方御用を申立、村方不厭費奢ヶ間敷族無之、萬端相愼可申旨、前々申渡置。尤勤方等定之品々曁泊殺生に罷越候節、人足遣方且止宿等之儀に付、安永九年申渡候趣、彌無相違相心得、百姓共少茂及迷惑に候族無之樣、重而御餌指共江申渡候條、猶又定之品相違之儀も有之候はゞ、名前承糺可及屆候。且又御餌指之名前を僞り、紛敷殺生人有之躰にも相聞候條、右等之趣も相糺候之樣、御郡方之者共江可被申渡候事。

子四月

右之通御郡奉行江申渡候條、各江も申聞置候事。

四月。町人等の鷹を遣ひ及び藩の忌日に鳥を捕ふるを禁ず。

〔御用番御觸之寫〕

鷹商賣いたし候者共、拵賣抔与申立、又者御家中之面々より被指預候而鷹拵候儀も有之候。元來町人共鷹拵候儀は無之筈、向後鷹屋共鷹爲拵申間敷候。御家中若黨・足輕体之輕者共も鷹拵候躰に候。主人より申付爲拵候儀は格別、自分として鷹拵候儀は一向有之間敷旨、先年被仰出申渡置候處、近年甚猥に相成、鷹屋共曁浪人躰之者鷹拵候躰に候。且又高はご抔に懸り候鷹も、御鷹部屋へ不指出隱置候族も有之体相聞候。

一、小鳥商賣之者たりとも、御日柄には相扣可申處、流例之由に而御日柄にも無構鳥構に罷越、心得違に付以後有之族無之樣申渡候。近年御家中末々之者等之內、鳥屋名前を借、御日柄にも鳥構罷越、甚不埒成者も有之躰相聞候。右等之族無之樣、今般町方之者へも急度申渡候條、以來心得違無之樣、御家中一統御申觸可被成候事。

子四月

四月。張切網を以て鶫を捕獲するを禁ず。

〔御用番御觸之寫〕

春秋張切与唱候網を以、峰々越張いたし鶫捉候人々有之体に候。右は御停止之儀に候處、近年猥に相聞候に付、今般御餌指共江も急度申渡候條、御家中之面々等家來末々迄嚴重相心得

候様、一統御申觸可被成候事。

子四月

四月、奉公人以外諸士の邸宅に同住するもの、數を屆出でしむ。

〔政隣記〕

覺

一、御家中侍中屋守或長屋等借罷在候者之內、奉公人之外都而十五歲以上之男女當月之在人高可被書出候。何程男・何程女与可被書分候事。

一、寺社奉行・町奉行・御郡奉行等支配地に罷在候侍中家來之儀は、右奉行中不及貪着候間、宅を貸置候內右族之者有之候者、其主人々々より不相洩樣、前條之趣を以可被書出候事。

一、人高郡分に調申に付、侍屋敷淺野川橋よりあなた居住之者は河北郡、橋より此方は石川郡に候事。

一、右人々僧俗・穢多之類迄都而男女之人高に候故、內書に者品々書分候に不及、則紙面調樣左に記候事。

右寬政十年相觸候通に候間、其趣を以當五月廿日迄之內、有無之儀可被書出候事。

四月

享和三年四月十日の條参照

五月三日、前田齊廣學校に臨む。

〔金龍公記史料〕

五月三日臨學校。聽新井升平論語講義。又觀吉田派射術。

二十四日又臨學校。

五月六日、山伏頭乾貞寺・醫王寺将に入峰せんとするを以て銀子を下附す。

〔三寶院御門主御入峯一件〕

別紙覺書一通相越之候條、可被得其意候、以上。

五月六日　　　　　　　　前田伊勢守

品川主殿殿

付札、寺社奉行江

三寶院御門主當七月御入峯に付、山伏頭乾貞寺・醫王寺致供奉候に付、拜領銀願各副紙面を以被指置、遂詮議候處、當時格別御省略中に付難承届候得共、先例も有之儀、各詮議之趣無據相聞候間、願高之内銀一貫目兩寺江被下候條、被得其意、可被申渡候事。

三寳院御門主當七月御入峯に付、私共先格之通供奉相勤候樣申來候に付、自力を以不得相勤、先例之通銀子二貫五百目兩寺へ拜領之儀先達而奉願上候所、當時格別御省略御儀に付、御僉議之上私共右願高之内銀子一貫目兩寺へ拜領被仰付、難有御儀奉存候。右御請上之申候、以上。

文化元年五月七日

山伏頭
乾貞寺
醫王寺

寺社御奉行所

五月十一日。大聖寺侯前田利考金澤城に登り前田齊廣を訪ふ。

〔政隣記〕

五月十一日飛驒守樣御登城御對顏、御料理被進御退出。直に金谷御殿ぢ御出、相公樣少々御痲邪氣に被爲在、御對顏無之。

一、飛驒守樣今般御歸邑、御城下御通行に付、今日此方樣御入國後初而御登城に候得共、御太刀等御持參之儀御斷之段、先達而於江戸表被仰進置有之候處、其儀しらべ違に而、今般就

相公は前田治脩

御登城に而之御作法書に、御太刀・馬代御持參之記有之候。然處飛驒守樣御登城之上、御太刀等參り不申に付、御奏者番中より御用番又兵衞殿江及示談候處、飛驒守樣江伺可然旨申聞、則伺之候處宜取計候樣被仰聞、彼是僉議之上右御作法書調方間違之趣相知れ、就中飛驒守樣少々御不快に付、於御旅宿町奉行等江如御例御目見も不被仰付候得共、久々御對顏も無之事に付、押而御登城被成候間、何卒御隙取無之樣御願。其儀兼而御許容ゆゑ、御登城之上は早速に御對顏之思召に而御登城之御案內申上候に付、御口上御待被爲在候得共、右等之永僉議に而御口上不申上、度々御催促被仰出候得共、彼是と及遲滯、一時餘りも飛驒守樣御待被成御座候事。

右之趣に付又兵衞殿迷惑被申上、飛驒守樣江も迷惑被申上候段被達御聽候。

一、右しらべ方不念之趣等に付、今日指扣伺有之候處、同十三日不及指扣に旨等被仰出。其人々左之通。

御奏者番　永原久兵衞・藤田五郎・松原治部

五月十二日。百姓に召使はるゝ下人等にして給銀を前借し義務を履行せざるもの、取締を嚴にせしむ。

〔筒井舊記〕

御郡方之者共下人召置候節、給銀致前貸候儀茂癖に相成候躰に相聞え候。然所致前貸候者給銀不及返濟にも、外主人取いたし候者共多有之、不埒之趣に付、於承出者夫々咎等申付候。其內に者從所々致前借、右同樣不埒之者も有之候。畢竟致前貸候故之儀与存候得共、猶更不致前貸樣には難相成趣も有之候はゞ、以來致前貸候節、縮方一統嚴重に被仰渡候樣に与存候。於改方役所以來嚴重に相糺可申与存候間、可被得其意候、以上。

子四月十三日　　宮崎藏人

遠田誠摩樣

別紙宮崎藏人紙面御渡に付、遂詮議候所、於御郡方奉公人給銀前貸之儀爲指止候而は指支申候。元來從前々御收納入不足之百姓辨方無之節は、其身致奉公給銀を致前借、御收納不足に立込候格合に而、是迄之通に無之而は難相成御座候。尤給銀致前貸候奉公人致不埒暇を貰、右給銀不相返儀は不届至極に付、其主人より茂御郡奉行・改作奉行江相斷可申筈に御座候得共、品により呼立詮議に逢候得者、出作最中奉公人に事を欠候上、其身茂隙を費候儀をいとひ、速に相斷不申者共茂有之躰、是又不埒之至に御座候間、今般嚴重に申渡、以來右樣之不埒有之候はゞ、兩役所江斷出候樣申渡、急度詮議之上夫々縮方等可申渡候。乍併右之通申渡候上に茂隱置候者も可有之哉難計御座候間、於改方聞出次第詮議有之、兩役所江引渡有之候

様仕度候。下々に而愚頑之者共、右之通出作隙を厭、隠置候儀茂有之哉に御座候間、不及申儀に候得共、右於役所茂成限り人多呼出等之儀無之様仕度儀に候間、右之趣を以御返事御座候様仕度奉存候事。

五　月

別紙之通宮崎藏人より申來候に付、兩役所詮議之趣覺書に相認御算用場江相達候條、委曲得其意、組々綿密に可申渡候。若等閑に相心得不及斷に、外より相顯候はゞ急度相咎可申候、以上。

子五月十二日

菅野兵左衛門
高田彌左衛門
林　彌四郎
比良莊五郎

能州四郡御扶持人・十村・新田裁許・山廻中

五月十八日、前田齊廣、年寄等の參會及び行歩は豫め之を屆出づべきことを命ず。

〔御親翰帳拔書〕

文化元年五月十八日年寄中等より以御用人被仰出。

各前方より申合、一類之外同席中等參會之節、幷行歩之儀茂、思召有之候間、被罷越候前日又は其朝に而も、横濱善左衛門等之內を以可被申上置旨被仰出候。且行歩之節同道人も有之候者、是又可被申上置旨被仰出候。

五月廿四日。足輕及び坊主の衣服に關する制限を令す。

〔坂井舊記〕

足輕幷坊主共等、近年僭上に相成、其中に者分限を取失、第一於江戸表者致御門外候節、衣類茂紬類致着用候躰に相聞候。右等之心得違無之樣急度可申渡候。元來紬類致着用候儀者、御定も有之候。向後地・他國共綿衣迄相用可申候。此段無違失相心得候樣、一統可申渡候事。

右之通足輕等支配有之面々、幷坊主頭より可被申談候事。

子　五　月

別紙寫之通御用番又兵衛殿被仰聞候條、足輕等御支配有之御面々、夫々御申渡、御組等之內右支配有之面々より、夫々不相洩申渡候樣御申談可被成候。且又別紙御覺書之內御定与申儀有之候間、足輕小頭幷坊主之儀者紬着用不指支樣相心得候者も可有之候得共、右文段に拘り不申、右小頭幷坊主たりとも、綿衣・布類之外一切着用難相成筈に候。尤羽織之儀も同樣に候

條、此旨茂申談候樣御同人被仰聞候。以來心得違之者有之候者、急度見咎候筈に候條、無違失嚴重相心得候樣御申談、尤御同役・御同席御傳達可被成候、以上。

五月廿四日　　　御　横　目

町御奉行衆中

五月廿八日。年寄前田伊勢守職務を免ぜらる。

［御家老方御密用之覺］

伊勢守儀了簡有之に付、月番幷勝手方用差免之候。此段可被申談候、以上。

五月廿八日　　　中　將

長　甲斐守殿
村井又兵衛殿
奥　村　左　京殿
横　山　山　城殿
前田內匠助殿

伊勢守儀、元來生質柔弱に而惣躰輕薄、第一言行致相違、重職不相應之趣も有之、其上家內幕方不宜不正之儀有之旨等、前々粗承およひ候。就中去々年入國以後も、右躰之儀令承知候

伊勢守は前田孝友

に付、其砌以紙面加異見候處、致會得候躰之返書差越、如何樣にも其頃は相愼候樣にも相聞候處、右に申候通り生質輕薄に候故、萬端に付心付も薄く、去年江戶詰中も貸小屋ゟ猥に役者之類相招、夜中迄も座邊に差置候族も有之躰。曁伊勢守內緣有之候知明屋亭作与申役者、此表より爲稽古江戶表ゟ罷越居候處、多分は伊勢守小屋ゟ相招、家來同樣之致方も有之哉に相聞候。是等之儀も書面を以心得申入候處、其一事は致會得候樣にも相聞候へ共、其內には色々取計之樣子も有之躰。且亦其後持馬之儀に付得內聽候趣有之候。其節も彼是不能存寄儀有之候に付、其砌も爲心得書面を以申遣候處、一旦は畏候躰に候へ共、是等之儀も追々取組ヶ間敷族も有之候。併格別之職分に付、一事爲申聞候はゞ萬端に心得も可有之与、是迄相考居候處、萬事に相改候樣子も無之爲、又組之人々無用之參會等之儀に付、當春江戶表より以書面相尋候事も有之候間、先其身よく參會等之儀心得可罷有處、左樣之儀も全く會得無之躰に候。申さば僅之事に相聞候へ共、一事爲申聞萬端に心配行屆不申儀は、心得不宜故与存候。且又用向申聞候にも表裏有之躰に而、各被申談候にも、此方より申聞候趣意与相違之儀も致出來候哉にも被存候。ヶ樣之儀も別而不輕事に候。其上去春も前田余所次郎忌中に罷在候處、伊勢守行步に同道いたし候儀も有之候躰、是等は不都合之至りに存候。其外余所次郎儀に付而も、不都合之族も有之候躰、一々は不申出候。曁鷹狩候儀に付難辨事共も有之候。右

免許は免除の意

之首尾に候間、急度存寄も有之候へ共、深慮有之候間其儀者令猶豫、今般月番幷勝手方乞免許候。右等之趣各心得に申聞置候、以上。

五月廿八日

長　甲斐守殿

村井又兵衛殿

奥村左京殿

横山山城殿

前田内匠助殿

六月十五日。東本願寺末寺の看坊より道場の取締に就いて稟請す。

〔上田舊記〕

東末寺附道場、御郡方村々に罷在候者共、心得違之趣共御座候旨に而、末寺看坊書付に瑞泉寺等加奥書指出候に付、別紙御達申候。

右書附之通に成行候而者、御縮方も相緩み申候間、心得違無之様夫々被仰渡候様仕度奉存候、以上。

六月十五日　　中川清六郎

長　甲斐守様

束末寺附道場共、御郡方村々に罷在候末寺直参諸旦那之内、村方死去人有之節は、其村方道場より取次仕、末寺江相達候上、拙僧共より法名指出指圖を受、道場ども致取置可申旨、往古より相定申渡置候處、近年道場共任我意、一寺同様に相心得、村方死去人有之節、末寺江相達不申法名指出候而、取置等仕様子。別而當四月廿五日河北郡舟橋村十兵衛母病死仕候處、同村に罷在候知道与申道場より法名指出、其節取込之趣有之旨に而、取置之儀者末寺江相達可申様、十兵衛江申含候に付、則十兵衛末寺江罷越右之趣申聞候。則道場知道より指出申候法名持參仕相達申に付、法名相改候處、一寺同様之調方に御座候。依而道場より指出候法名末寺江取上、此儀追而相調理可申旨十兵衛江爲申聞、先取置之儀者指支無之様、拙僧共より法名相渡、取置候儀は拙僧共下役之内指遣相仕舞申候。其後道場知道呼出相糺申候處、法名指出申儀申譯無之段申聞候に付、道場役指留置申候。然者前段に申上候通、村々に罷在候道場共任我意候儀、明白に相顯申候。元來道場与申は一代切に而、死跡はせがれ御座候時は、人柄を見立御耕作方に指障不申趣、村役人より紙面取受道場役申渡、勿論剃髪相願候時者、寛政六年改而被仰渡之趣も御座候。村方指支無之旨村役人書附、則手先十村之裏書を以、其段御頭寺江御達申上、御聞届之上剃髪之儀承届申候。然所右道場共之内に者、寺庵同様に

相心得、寺かれを直に僧形に致置、死後末寺ゟ茂相達不申、道場役相勤罷在候者も有之躰。將又近年には道場共寺庵同樣之堂構仕、堂內莊方花美を好候故、自分村方ゟ茂身分不相應無心等申懸候躰相聞申候。且又道場之內連日法談等爲相勤、人集め等も爲仕樣之者も有之躰粗相聞申候。是等之趣第一御國法御縮方に相障申候。右等之儀拙僧共より每度申渡置候得共、任我意承引不仕候間、何卒御國法嚴重被仰渡被下候樣、寺社御奉行所ゟ被仰達可被下候。爲其書附を以奉願上候、以上。

六月八日　　東末寺看坊

瑞泉寺

善福寺

右東末寺看坊願書附指出候に付上之申候、以上。

瑞泉寺

善福寺

寺社御奉行所

別紙の通申來候條得其意、道場共心得違無之樣夫々嚴重可申渡候。尤組々道場共名前可書出候、以上。

子七月廿日　　菅野兵左衛門

能州四郡十村中

六月十八日。寺庵にして百姓より濫に募財するを禁ず。

〔郡方御觸〕

近年寺庵勸化等之儀に付被仰渡之趣茂有之、各幷御郡奉行無油斷申渡候得共、末々愚頑之者共一涯に存込罷在候故、今以密々不相應寄附いたし候者有之躰に候。御郡方費に相成、畢竟百姓衰、御收納に茂拘り可申儀に茂候。別而近年一向宗寺庵、官職昇進之儀多、其節に門徒等江密々相勸め候躰、且那寺より强而相勸候得者難默止、潜に施入仕躰、乍不屆無據意味にも相聞え候。勿論各寺前々之振も可有之儀、相應に昇進可仕事に候得共、近年之樣子粗承及候處、猥に致昇進候寺庵多、大金を爲登、父祖に越高位に相進み申儀專要に相成候躰。如斯に而者勸化多に可相成筈。門徒之費者畢竟御難題に茂可至儀、甚如何敷に付、寺社奉行於手前各寺相應之昇進者格別、緣茂無之寺庵、專勸化を以父祖に越相進候躰之儀有之分者、容易に承屆不申、右奉行より夫々御用番年寄中江相達、無據謂無之分者御聞屆無之樣致度。且近年之内右宗門始祖遠忌相當り候旨、右以前堂塔建直法會執行申度与內々門徒江及示談、過分之入用銀致勸化候躰。譬右に付佛檀之餝等僣上を相企、是又大金を以本山江願方等有之旨、都

而門徒之費莫大之儀に相聞え候。是等之趣格別被遂詮議、右躰之族無之樣申渡候樣、寺社奉行江被仰渡候樣致度旨、年寄中江相達候處、則右奉行江茂被申渡候段被談候條、被得其意、尙更御郡方之者心得違不仕樣、各より嚴重に可被申渡候、以上。

甲子六月　　御算用場

改作御奉行中

右之通御算用場より申談有之候條、嚴重相心得、村役人等江心得違無之樣可申渡、右躰之儀有之候はゞ、第一裁許幷新田裁許可爲無念、品により急度可相咎候條、可得其意候、以上。

六月十八日　　江上淸左衛門

前田源六郎

諸郡御扶持人・十村・新田裁許中

六月。學校に於いて助教討論の席を廢し、對策を課すべきことを告ぐ。

[學校方覺書]

富永權藏等江

去年學校御仕法被仰付候砌、討論之席を被建、實志之輩は識之不依多少右席へ入、有用之儀を修行可仕被仰出候趣は、右席に而専常志之厚薄、學業之淺深之程可被遊御吟味御趣意に

候。然處前月廿四日御出被遊候節、討論之樣子被聞召候處、誠に古語之內、古へ之事蹟、當時に不相當儀を相尋、及對候者も、徒に其理を辯解いたし候迄に而、且而有用之儀を及討論候所ゟは迂遠に被思召候。依之助教之人々討論之定日には、以來對策と名目を被替、尤策問之儀は、助教等之內より每月一兩人順番を以、二・三箇條有用之儀策問調出し、兼而入御覽置、當日右箇條に人別に對策之趣國字を以相調、頭へ取立、御次へ可致持參候。讀師・生徒之人々は、是迄之通討論之席に而專有用之儀を可致修行候。讀師等之內に而も格別有志之輩は、相願對策之席へ入、助教等申談及對策可申旨被仰出候條、謹而奉得其意可被申渡事。

甲子六月

六月、十村等をして前任者にその職務に關する書類の引繼を要求せしむ。

〔筒井舊記〕

諸郡之內度々裁許相替候組々は、御用方諸書物相傳り不申躰に而、是迄茂舊記入用之時分必支与指支候。元來十村役被仰付候砌、先裁許之者共ゟ懸合、諸書物綿密に請取置可申處、其儀等閑に致置候儀甚難心得事に候。相考候所、代々勤來候家筋等、餘人ゟ裁許被仰付候節書物等綿密に引取候儀、家筋之者ゟ對し懸合候儀等致兼候与相察候得共、御用儀に付私に斟酌仕候儀に而は無之筈に候條、以來者無泥諸書物綿密に相調理請取可申候。當分裁許之儀、拙

者共江相尋指圖を請、急度引取置可申候。如此申渡候上、若等閑に相心得候面々有之候はゞ可爲越度候條、取類此節請取可申候。何与歟指支候儀有之候はゞ、其譯可申聞候、以上。

子　六　月　　　　賀　古　橘　江

木　梨　左　兵　衛

諸郡御扶持人・十村中

七月朔日。前田利命將に卯辰山觀音院に宮參を行はんとするを以てその主附役人を命ず。

〔政隣記〕

七月朔日、裕次郎樣當九月卯辰觀音院江御宮參主附御用、奥村左京へ被仰付、同十一日右主附御用御大小將御番頭中村宗兵衛、御大小將横目永原治九郎今月廿一日轉役に付、代佐藤八郎左衛門江戸詰被仰渡候に付、八月十三日代永原七郎左衛門江被仰渡。江左京殿被仰渡。且左之通被仰渡候由佐藤八郎左衛門申談。

當九月卯辰觀音院江裕次郎樣御宮參之節、御供等之人々一統熨斗目・上下等不及相改、有合之品相用可申候。勿論從者着類之分も有來候を相用候。見苦儀は不苦旨被仰出候條、右御供等之人々江不相洩樣可被申聞候事。

右之趣夫々可被申談候、以上。

子七月廿七日　　　　奥村左京

御横目中

七月七日。寺院門前地に居住する者の宗門改證文に關して告ぐ。

〔政隣記〕

七月七日

一、左之通定番頭御用番佐藤勘兵衛より、例文之以廻狀到來之事。

寺社方門前地へ家相求罷越、或借家等仕候者有之候節は、其組合頭宗門相改、其地主之寺々江證文取立申儀、前々格合に御座候處、右改方區々相成候儀も有之樣子に付、近年惣門前肝煎共江申渡、宗門方改來申候。然處御家人之儀は其支配、又家中奉公人之儀は主人於手前、宗門改申儀に候間、別に寺證文指出候儀は難致抔申出候者も有之。彼是懸合に相成、しらべ方指支、其上右御家人等門前居住之內致浪人、或町人に相成候者も每度有之候處、其儀時々相知不申儀も有之に付、最初門前地へ罷越候節寺證文取立置不申候而は、しらべ方甚混雜仕、御締方にも相洩申儀有之候に付、以來御家人は足輕以下寺證文取立、又家中は給人等譜代に召仕候者は格別、其外は都而寺證文取立、右譜代に召仕候者は、門前地江罷越候節は主人より逹紙面指出、若其者暇指遣候節等は、早速其段肝煎迄及屆、且譜代に召仕候者たり共、足

輕以下は都而寺證文取立候趣に相心得、新に門前地江罷越候者江可申談旨今般改而申渡候。依而是迄致居住來候者も、前段之趣は以此度改、寺證文取立候樣申渡候間、門前地町役人共より寺證文之儀申談候節、無滯指出候樣、一統被仰觸置候樣仕度奉存候、以上。

六月十九日　　中川淸六郎

長　甲斐守樣

付札、定番頭江

別紙寫之通被得其意、組・支配之人々江可被申渡候。組等之內裁許有之面々は、其支配へも相達候樣可被申聞候事。

右之通一統可被申談候事。

七　月

七月十一日。前田齊廣、御馬廻頭及び御小將頭の職務に關し心得を諭す。

〔留帳書拔〕

文化元年子七月十一日御馬廻頭・御小將頭御前江被爲召、御渡之御親筆寫を以申談、一役連名を以直に御請可指上旨、高畠五郎兵衛・岡田助右衛門・團多太夫・村杢右衛門立會、於虎之御間申談候事。

但、神保縫殿右衞門方郎日同役寄合候上、御請相認、同夜縫殿右衞門御次江持參、池田勝左衞門を以指上候事。

其方共之儀は、組中之指引は勿論、諸頭之目當にも相成申儀、愼方等之趣は今更申聞候にも不及事に候。常々組中之儀心に懸、人品等相守候時分、無相違様可申聞筈に候。其方共之儀は平常格別心懸可罷在事に候。不圖心得方薄候得ば、私之好惡又他之申成しを以相撰候様に有之時は、自然与其弊不輕事に至候。且又何となく人情輕薄相成候故か、惣躰品重宻事をも相洩申族も有之躰に相聞え、此等之儀は士にも不似事に候條、其方共にもヶ様之所得与相心得罷在、右等之趣共組・支配有之人々能々可申談候事。

七月廿三日。小鳥網の禁止區域に關する疑義に就いて議す。

〔留帳書拔〕

腰張之儀は相成不申段被仰渡候。右は三里四方外に而は尤不指支儀与奉存候得共、右被仰渡書には其儀無御座、相成不申趣に御書出御座候。且又三里四方網張申事相成不申儀、御城よりに而は六里四方に相成申候。左様に而は無之、御城より一里半之儀的當之様に奉存候得共、其處區々に御座候付、猶更此儀得与申渡度奉存候事。

七月廿三日

朱書。目高成綱者御停止之旨。小鳥網御城より三里之由に候事。御馬廻高畠五郎兵衛留帳之内致抜書付札置候事。

七月廿六日。御歩吉田茂右衛門試斬に長ずるを以て賞賜せらる。

〔政隣記〕

七月廿六日、左京殿左之御覺書、頭水越に御渡、則申渡有之事。

付札、水越八郎右衛門江

白銀三枚　　　御歩　吉田茂右衛門

覺書

右茂右衛門儀、於公事場ためし者御用毎度相勤、生胴之御用も兩度相勤候處、首尾も宜、居物急度御用立候旨に付被下之候條、可被申渡候事。

子七月

八月十四日。前田齊廣、婦人の服装を華美ならしめざるべきことを老臣等に諭す。

〔御家老方御密用之覺〕

左之御親翰被渡下、同役申談拜見可仕旨御意之事。女共裝束之儀、先達而嚴重に申渡置候處、無間も猥に相成候に付、改而今般申渡候。就夫廣式向は不及申、各等家內女風俗幷裝束等之儀、格別に不相心得而は又々不遠內相ゆるみ可申哉与存候。尤廣式向江も心得之趣急度申渡候條、不及申事に候へ共、各等も心得も可有之候間此段申遣候、以上。

八月十四日

横山山城殿

〔坂井舊記〕

先刻致登城候樣御用番横山山城殿より申來、則致登城候處、別紙御書立兩通山城殿被仰渡、各拙者より致順達候樣被申聞候に付、相廻し申候。被成御承知、先々御廻、落着より御返可被成候、以上。

八月十八日　竹田掃部

杉野善三郎樣

岩田傳左衛門樣

付札、寺社奉行・御算用場奉行・町奉行

女共衣類之儀、先達而被仰出置候處、當時に而者次第に猥に相成候儀に付、重而別紙之通可申渡旨就被仰出候、相渡之候條、急度相守候樣、町・在之者共江嚴重に可被申渡候事。

子　八　月

女共衣類之儀に付、先達而被仰出候通に候處、當時に而者次第に猥に相成、品宜を相用、夏向抔は着服裾に縮緬等を以裏を付、或天鵞絨襟を用ひ、萬端右に准じ又々華麗之風俗に流候躰に相聞候。其上銀笄・高料櫛等も、中には宅々或は主人方に而相用ひ、町人共之内にも商賣等に而京都江罷越、或入湯中立、妻子引連遊里江罷越、衣服も御國許に而難致出來品は、京都より取寄用ひ候に付、下々迄も右風俗を見習、麁品に候共榮耀之染模樣申付候躰。先達而嚴重被仰渡候所、間も無之右之通等閑に相心得候儀は、先以沙汰之限に候。以來御家中之人々家内之女、且召仕候下女、幷町・在之女共、右樣之風俗等急度無之樣嚴重に可相守候。如此被仰渡候上、若心得違之者有之節は、急度可被申付候事。

子　八　月

八月十七日。金澤城内に於いて夜間伴ふべき提灯持の人數を定む。

〔御觸留〕

各御登城之節、只今迄流例に而、河北・石川兩御門内夜中提灯二・三張宛被持候へ共、元來寛

文年中御定に者、從者之外夜中提灯持一人可相通事与御座候處、先年より右之趣類例區々に而不相分候に付、右流例之趣に准じ、以來提灯二張充爲持度旨相伺候處、先規之通相心得候樣被仰出候條、以來者三之門丸之內提灯一張爲持候之樣に御心得可被成候事。

八月十七日

八月二十日。前田齊廣、老臣を召して藩政改善に關する親翰を授く。

〔御勝手方諸事覺書〕

一、八月廿日甲斐守儀御前江被召、左之御親翰被渡下。

世上風俗不宜、隨而諸士之風儀次第に輕薄に流れ候之躰に付、漸を以相改度存念に付、入國以來段々申渡候儀も有之候處、其砌は聊相改候樣にも候へ共、當時に而者致違失候輩も有之躰に候。右之通り格別存立申渡候儀、等閑に相成候儀は無之等に候處、畢竟上之不德に歸り申儀与、不及迄も日夜不慢樣に相心得候へ共、右申ごとく不才不德に而萬端不行屆儀に候條、尤可被泥樣は無之筈、以來何等之儀も心附之事は、少も機嫌を計らず被申聞候樣に有之度候。上は下之表準に候へば不及申事に候。各に茂補佐之職、別而當家においては代々其職を繼被申候而、諸人之目當に相成申事に候間、萬端無油斷可被相心得儀は勿論に候。右之通上は不及申、各にも慥に諸人之目當与相成候へば、不言して漸々風俗相改り候處江至り可

申筈に候、且南組頭之儀者、是又諸頭之目當ニ相成申儀に候間、其身之慎は不及申、當々組中之儀心頭に懸け可罷在候、扨又組之人々撰擧之節、自分之好悪、又は他之申成を致信用候樣に有之候而者、畢竟其弊不輕事に至り候。暨右風俗に付而者、品重き密事をも相洩し候者共も有之躰に相聞候。ヶ樣之儀は士には不似合事に候。是等之趣急度相心得候樣、兩組頭廣間書院ゟ呼寄、直きに爲申聞置候。且又當時勝手向逼迫之儀は、各存之通に候。依之近年格別之趣を以、出納符合之詮議申付候事に候。就中財用之儀は、政事中に而も尤重く相預る品に候條、いつ迄も財用致不足、勝手向不取直而者、政務方にも自ら相障り、其上借知も申付置、誠に寢食不安事に候間、何分萬事加節倹、近年之内に者是非勝手向取直り、借知も相返し候所ゟ至り不申而者不相成事に候。就中近年諸頭を初、組・支配等之儀に付願方多、中に者當時をも辨へ兼候哉、一概に組・支配之事而已心付、强たる願も有之躰に候。尤組・支配之儀を一途に存候儀は當然之事に候へ共、右等之風俗は夫とは品も違候條、右之意味能々致辨別、是以後一統其所ゟ存付、願方等急度心得も可有之候間、此趣頭・支配人等ゟ可被申聞候。其上にも願出候節、願方右之趣意に致相違候族は、各等より急度了簡之趣申入、幾重にも致會得候樣可被申聞候。將又右出納符合之僉議就申付候、省略仕法共向々に寄格別に遂僉議、仕法書等差出候分も有之候へ共、いまだ僉議不行屆役所も有之に付、寺社奉行を始め夫々別紙之通

於次爲申聞候。且又家中之人々他國詰之節等借用銀返上等之儀、去年相定ゐ候通彌嚴重に可有之候。右等之趣爲心得有增申出候。右申出候內勝手方に拘り候儀者、甲斐守譯而承知有之、織江にも可有演述候、以上。

八　月

八月廿二日。諸士の鳥構を行ふものゝ松山を荒廢せしむるを禁ず。

〔政隣記〕

別紙御郡奉行紙面之寫相越之候條、被得其意、組・支配に嚴重可被申渡候。組等之內裁許有之人々者、其支配にも相達候樣被申聞、尤同役中可有傳達候事。

右之趣可被得其意候、以上。

八月廿二日　横山山城

水越八郎左衛門殿

石川・河北郡松山、近年以之外木薄く相成申候。就中御家中初鳥構場之邊松木に障不申樣、暫松木之株に火を焚候儀不相成趣、是迄度々一統被仰渡も有之、御郡方にも嚴重申渡置候得共、近年猥に相成、其上御家中家來末々夜之內より山へ參り、出來松を勝手次第伐取火に燒候族も有之、鳥構木に眞を付に罷越候節は松木之枝を下し、是迄無御座處を伐ならし構場之

批取はへぎとりと訓む

樣に捨置、或は理名与名付松木之根本へ名札を入置、後日に至り申分出來、甚紛敷新場共多有之躰、委曲山廻り共及斷、構場之札も批取指出申候。其上近年構場之儀に付、不筋之族も有之躰粗相聞え申候。且又爲構人家來末々、百姓持山之內に捨置候芝にうを無斷取荒し、又は持はへのはりい木を伐取、構木之眞等に相用候族も每度有之、百姓共迷惑仕候段申聞候。畢竟御郡方之者稼人等見習、賊木等每度有之、御締方行屆不申候。依而今般百姓共之內嚴重僉議仕置候儀も御座候。元來山廻共等閑に相心得候故、右等之族も出來候儀与此度嚴重に申付候。依而構場等江山廻り共繁々爲相廻、不埒之儀見受候者差懸り見咎、名前爲承糺申筈に御座候。勿論先年より相願不申構場にても、年久敷定構場之樣に成來候分者、不筋之譯無御座候得者先見逃置候得共、たとへ定構場たり共松木に障、出來松に札を揚、都而新場之分者無構札批取指出候樣申渡、尤山番人共江も其段嚴重申付置候。右等之趣御家中一統家來末々迄、嚴重に仰渡御座候樣仕度奉存候、以上。

子八月八日　杉山新平

宮崎久兵衛

橫山山城樣

是月は大盡なり

八月晦日。能登の質業者にその定書を示す。

能登口郡にても同日同様の申渡あり

〔郡方御觸〕

覺

一、六　枚　中居組　　一、二　枚　鵜川組
一、十　枚　鹿野組　　一、十三枚　稻舟組
一、一　枚　大澤組　　一、八　枚　走出元組
一、七　枚　馬場組　　一、十一枚　宗玄組
一、十三枚　飯田組　　一、四　枚　折戸組

〆

右は先達而質商賣承屆候者共、今度詮議之上改而質定ヶ條書相渡候。且ヶ條書之内にも有之通、質請人江見合札早速相渡候樣、質屋共江可申渡候。元來奥郡之儀は、是迄質物三十ヶ月或は二十ヶ月を限与任之候得共、此度改而十五ヶ月限相定候條、其餘待札仕間敷、尤無左而は畢竟御郡方爲にも不宜儀与遂詮議候間、此段可申渡候。

一、是以後新に質商賣相願候者は、是迄之通願書付出候得ば、役所より右定書可相渡候。

一、質屋相仕舞候者は、右札取上急速可指出候。

右之趣夫々可得其意候。勿論質定ヶ條之趣、無違失嚴重可相守旨、不相洩樣夫々可申渡候、

以上。

子八月晦日　高田彌左衛門

菅野兵左衛門

能州奧郡十村中

追而右札先々順達有之候而相廻可申候。且質屋共手前よりヶ條書之趣得其意候旨請書、面々手前江取立置可申、此段爲心得申渡候、以上。

質定

一、質物十五ヶ月、其餘待札仕間敷、幷口請合仕間敷事。

一、利足は百目に付一ヶ月一歩五之事。

一、俵物は十ヶ月切、尤利足右同斷之事。

一、質屋尻請人無之分質取申間敷、尤質請人見合札可相渡置事。

一、質物取扱夕七つ時限り之事。

右質定ヶ條之儀嚴重可相守也。

八月。前田齊廣、頭分等をして政事を議せしむべからざることを老臣に告ぐ。

〔御家老方御密用之覺〕

頭分等之內寄合候而、人々我意を相立、當時政事方之樣子を及批判、色々申觸し、曁儒者抔之內にも右江加り申者も有之躰。不及申事に候へ共、政事之儀は大臣而已與り申處に而、右等之趣は誠以不輕儀、言語道斷之事に候。尤相顯候上は、急度可加嚴令存念に候。ヶ樣之儀は、不圖不存寄所より害も致出來ものに候條、各に茂被承置候得者心得も可有之事故、內々申遣候、以上。

各とは老臣を指す

八　月

九月二日。金澤城の土橋御門を修營するを以て通行を禁止す。

〔政隣記〕

八月廿七日左之通御城代又兵衞被仰聞候旨等、御横目より例文之廻狀を以到來之由、御用番水越氏より廻狀之事。

付札、御横目江

土橋御門御普請就被仰付候、來月二日より右御門往來指留候條、二御丸御廣式へ罷出候人々、河北御門通り可致往來候。右御廣式江罷出候女分は、七十間御長屋御門玉泉院樣丸通り、御數寄屋屋敷南御門往來之筈に候條、此段一統不相洩樣可被申談候事。

九月二日。能登奧郡の十村等に民間に藏する鐵炮の員數を調査せしむ。

〔筒井舊記〕

於組々、先年より相渡置候猪・鹿威鐵炮員數、且又其方中幷百姓等、惣而前々より無斷持來り候鐵炮有之候はゞ、右所持人名前書記、委曲急速可及斷候。右者御内々御尋之趣有之、申渡候條、無急度相しらべ在之、備可書出候、以上。

子九月二日　菅野兵左衛門

高田彌左衛門

奧郡十村・新田裁許中

山廻・無役御扶持人中

九月六日。前田齊廣、治脩と共に金澤城下に行歩を行ふ。

〔金龍公記史料〕

九月六日公與太公散歩街路。

九月六日。前田重教の女頴姫の生母慧照院金澤に着す。

惠照院は慧照院

〔齊廣樣御傳略等之內書拔〕

九月六日頴姬樣御產婦之方惠照院、江戶表より金澤へ御呼戾し、二之御丸御廣式之內に居住被仰付、九月二十四日着。御宛行是迄之通江戶御格に而被下候段、同年十月五日被仰出有之なり。

九月十三日。前田齊廣の世嗣利命宮參を行ふ。

〔御觸留〕

御橫目江

當九月十三日、卯辰觀音院江裕次郞樣御宮參之節、御城表年寄中始御步並迄、服紗小袖・布上下着用之事。

一、御廣式江罷出候面々、熨斗目・布上下着用、御步並服紗小袖・布上下着用之事。以上。

御橫目江

裕次郞樣御宮參之節、觀音院近邊居宅有之人々、坂中より見通候家者、御社參之時分戶障子等建置可申候事。

右之通彼邊に居宅有之面々江可被申談候事。

八月十七日

〔政隣記〕

九日の記は略す

九月十三日快天。今朝五時御供揃に而裕次郎樣御宮參、夫より奥村義十郎宅江御立寄御作法等、且御歸後御供人江拜領物等、都而敎千代樣安永八年御宮參御同趣に候事。

但、觀音院より義十郎宅江被爲入候御道筋違候儀は、九日記に有之通に候事。

一、安永八年之記に、御歩小頭等に拜領物記無之に付左に記之。

金三百疋　御目錄　　御歩小頭　藤田新左衞門

右檜垣之御間於二之御間御宮參爲御祝儀被下候段、左京殿御申演、御目錄は於其席御用人渡之、指引は御横目。但頭誘引等無之。御呼出之儀は、前日頭迄左京殿より以御紙面被仰談候事。

一、於御同間御供之御歩横目・御歩中江被下候御目錄、御用番水越江左京殿御渡、則於御城夫々申渡。

銀一枚宛　御歩横目兩人　　金貳百疋宛　御歩九人

九月十六日。前田治脩近習の士に帶佩を行はしむ。

〔政隣記〕

九月十六日、八時過より御近邊之人々江たいはい被仰付候に付、各見物被仰付候條、金谷御殿江可相揃旨、昨日同役連名之廻狀石野主殿助より到來。然處自分儀痢合惡敷難罷出段、主

殿助ゟ以紙面申達候事。

九月十七日。儒者木下槌五郎、學校の助教を免ぜらる。

〔金龍公記史料〕

九月十七日罷儒者木下槌五郎助教。處遁塞。以横議時政也。寺田九之丞亦以副旨。處遠慮。

十月。盜賊改方奉行その所管に係る犯罪の種類等を上申す。

〔於加州改方咎申付候罪輕重幷賊物取捌方等留〕

於盜賊改方咎申付候罪輕重ヶ條書

覺

一、火付・人殺・盜賊之者。

但、本文疑中之者入牢申付候。

一、出奔人。

一、謀書等を以金銀等或は品物謀取候者。

一、破戒之僧

一、贋銀等仕候者。

一、町家百姓家等に而押乞不法之者。

一、町家等に而刀等を抜、又は道具等打毀し、狼藉仕候者。
一、捨子・捨馬仕候者。
一、博奕仕候者。
一、主人等手前より金銀抔謀、且引負仕候者。
一、不孝之者。
一、賄賂無債仕候者。
一、役人を賂、金銀等取請候者。
一、十村幷村役人等役權を以、押たる調達不筋之取立物抔仕候者。
但、十村之儀は、近年御樣子御座候に付呼出不申樣被仰出、呼出不申候。
一、縊死之者押隱、病死之躰に仕成候者。
一、女を勾引他國・他領へ遣候者。
一、於御留場鳥殺生仕候者。
一、難船之品拾揚不及斷者。
一、醫行不存者在方等徘徊僞藥用候者。
一、人を不法に打擲仕候者。

人非とは穢多等をいふ
いすりはゆすり

但、疵付共所において検使に相成候者は指構不申候。
一、賊荷擔之者。
一、不屆有之預等申付候中徘徊仕候者。
但、右勤番之者本人同様に申付、又は依時宜預等に申付候者。
一、御制禁之品無屆他國へ洩し候者。
一、人非平人交之者。
一、博奕參會之場へ不法に踏込、いすりを申懸、鳥目等ねだり取候者。
右は禁牢申付候罪之者共に御座候。此外御制禁を相省、又非常之不屆にて牢舍申付候者數多可有御座、尤改方に而は火付・人殺・大賊等、不輕不屆に而大躰死刑にも可相成程之者は、公事場へ引渡申候。
一、女出會宿仕候者。
一、酒商賣人方に而不法に高聲仕等之者。
一、諸商賣人共賣買方格相違之者。
一、役人依怙贔負不筋之者。
一、賭之諸勝負仕候者。

一、他國・他領之者無斷使置候者。
但、使居候他國者は御關外江差出申候。尤不屆有之者は咎申付、宥之上差出申候。
一、伎藝・遊興相催、人集仕候者。
一、魚物等定之口錢相洩し候者。
一、在方博勞いたし、牛馬賣買に付不屆有之者。
一、無願諸勧進仕候者。
一、於御郡方主人より給銀前借仕不致奉公、或逃去外主人取仕候者。
一、婚禮之内石打仕候者。
一、身分不相應之致着服、銀笄相用、并奢侈之振廻等仕候者。
右は主人預・町預・村預等に申付候者共に御座候。尤此ヶ條之中、時宜之様子により追込にも申付、又は輕く相咎候儀も可有御座儀与奉存候。
一、他國・他領之富突札買受候者。
但、金銀取當り候者は、以來懲め之ため取當り候金銀取揚候事。
一、隱質取請候者。
但、質物取揚、品主共双方損失に申付候。

一、不行狀者。

但、若年者等行跡不宜、親共等より異見願候はゞ、樣子により親預等にも申付、又は當座に叱り返候儀も御座候。

一、花火を揚候者。

一、出買仕候者。

一、百姓共御收納不相濟內は、十村より拂米之指紙無之米買請候者、曁賣拂候者。

一、百姓持山に有之候七木隱伐仕候者。

一、町方亭主番夜廻り不番之者。

一、途中に而拾物不及斷者。

一、質屋幷古手・古金等商賣人等江、賊物似寄觸相廻候上、品似寄候共不及斷者。

右徘徊留申付候者共に御座候。此咎之者共も不埒之厚薄により、追込・預等に申付候者も可有御座候。

右改方に而咎申付候品々荒增如斯御座候。改方之儀者、先達而奉申上候通り、公事場与は咎之樣子違候儀、振合に相成居申候。博奕仕候者、先一旦は主人預・町預又は親兄へ指預、尤宿仕候者は手鎖縮を以預に申付候。其上にも不愼時は入牢等申付候故、禁牢之ヶ條へ加へ置

申候。預等に申付候時者、賭之勝負与唱申候。右之條々は前々より之舊例を以取捌申候。罪之輕重により臨時咎等申付候、以上。

文化元年十月

右御川部屋本多勘解由を以帳面に認差上候事。

奉行　宮崎藏人記す

十一月七日。前田齊廣石川郡粟ヶ崎に放鷹す。

〔政隣記〕

十一月七日

一、今七日九時御供揃に而粟ヶ崎口ゟ御放鷹。御拳に而小鴨二、御鵰鷹に而雁一被爲獲、御拳之鳥は從御途中相公樣へ被上之、御表小將駒井淸六郎早乘御使被仰付。

十一月十五日。前田利命着袴の儀を行ふ。

〔政隣記〕

今月十五日裕次郎樣御着袴に付、從中將樣御使御家老前田織江を以御大小被進之、右取既御步高橋鐵之助ゟ申渡、勤之。

十一月晦日。石川・河北兩郡に於ける諸士の鳥構場に關して令す。

今月は十一月

是月は大盡なり

〔御觸留〕

御家中鳥構場仕法、今般段々遂詮議、夫々御達申上候處、御聞屆被成、各樣ゟ者私共より直々可及演說旨、御用番左京殿被仰聞に付、則帳面一冊相添指進申候。御組等夫々御申談、御同役・御同席御傳達被成、御順達留より可被返下候、以上。

十一月晦日　宮崎久兵衛

杉山新平

上山は石川郡、下山は河北郡

上山・下山・中通り共、是迄願等を以數年定構場に致し、年々眞揚構來り候本場之分、今般不殘相改、委く帳面に記置候。

但、伏場も同斷。併近く所々伏場之樣に致來り、是迄無之伏場に而、外之構場指障りとも至り候分者不及貪着、札拔取候事。

一、是迄構場に而も無之所々、松木に名札まで揚置、構者不致共、都而其分者一圓不及貪着、札取揚候事。

一、只今迄伏場に致置候處に、改而眞揚候趣に候者、其段御郡所へ可申出候。尤借用場之分は、只今迄之通夫々名札揚置可申事。

一、相對を以外へ構場迄遣候者、其段本主曁貰請候者より御郡所へ申出、其上に而名札相改

揚置可申事。

一、本場・伏場共四・五年も打捨置候分者、無構古札有之共取揚、不及貪着候。尤捨置候場たり共、外之面々より其所へ札入候儀、一圓不相成候。

但、追而改相願候儀者格別之事。

一、本場・伏場共、當時松木茂り構難相成躰之處者、其段御郡所江夫々及届候上、山廻り等指遣し得与見分之上、無據族に候得者格別承届、枝下し可申付事。

一、新に相願構場に致度所有之、外之場等に障不申所に候者、其段何村領等小名相調、願紙面指出候上、是又見分申渡候上承届、松木二十本枝下し可申付候事。

但、伏場に致度所者、是又願紙面別段可指出候。願紙面案文御郡所承合可申候。

一、與力并御歩並之分者、尤前々之通り構場願等承届不申候事。

但、借用場之分者格別之事。

右之通詮議相極、尤新に相願候構場所に寄り、指支等之山々も有之候間、容易に者承届申間敷、願人より御郡所承合可申候。近年松山薄く相成候間、是迄多く構場致所持候もの者、心得も可有之事に候。其上新場願数多に相成、一同に者難承届、見計ひ追々切立可申事。

子十一月

十一月。省略に付御作事所内の役所を減ず。

〔御勝手方諸事覺書〕

御作事奉行え

今般萬端御省略に付、舊例古格不拘、萬事事輕に而御入用減方等僉議有之候樣申渡置候處、各心付之趣帳面被指出候に付、則入御覽候處、各僉議之通可申渡旨被仰出候。依而御作事內役所數被相減、內作事奉行・外作事奉行・木藏裁許・鐵・荒物裁許幷御步橫目當分被指止、竪固り所役所茂指止候。內作事方御用は各可被相勤候。外作事方御用は地・遠共、寺社方修理方裁許與力より相兼候樣申渡候條、被得其意、御材木・鐵・荒物茂其手合々々え直に買上可申候。尤御省略之儀諸事無油斷、綿密遂詮議候樣可被申談候事。

子十一月

十二月十四日。前田齊廣、家中諸士が町會所より銀子を借用する手續等に就いて質す。

〔御親翰留其外密事暨內廻狀留〕

家中之者共勝手難澁之內、近年金銀才覺出來兼、別而難澁之躰に付、其方共組之面々勝手向

厚薄相糺、格別困窮之者へ、町奉行申談銀子貸渡爲取續可申旨示談治定に付、右之趣年寄共ゟ申出、表向申渡有之候樣致度旨等、先達而得內聽候に付、承屆夫々申出候而、當時右仕法取懸居申躰に相聞候。就夫其方共組にも不限、右銀子借用之人々も多有之、甚繁雜に相成候躰粗及承候。左候へば夫々より申出し候通りに貸渡申儀も、町奉行手前に而も出來兼候へば、都而人氣之障に相成、若不心服之者も致出來候而は、其方共心付候仕法不全候へば、畢竟組之面々勝手成立之爲にも可相成哉無覺束存事に候。尤油斷は無之筈に候へ共、元來不得止事其方共申談、得內聽取懸申仕法に候條、自然指當り申防而已に相成候而は、右仕法相立候詮も無之事に候間、何れにも最初其方共示合置候通り、組々之內極難澁之者共、行々勝手向取續申趣、彌無油斷入念可相心得候。且又右銀子借用方、平士は貸付方重々敷、頭分は一通り申込、町奉行相對を以致借用樣にも及承候。尤町奉行手前に而は潔白にも可有之哉に候へ共、彌借用方に差別有之候而は、贔負之取捌も有之樣に相聞、不可然事に候。箇樣之儀も委細承度、旁此段申遣候、以上。

十二月十四日

馬廻頭中

御親翰被成下、謹而奉拜戴候。御家中之者共勝手難澁之內、近年才覺出來兼、別而難澁之躰

に付、私共組々面々勝手向厚薄相糺、格別困窮之者江、町奉行申談銀子貸渡爲取續可申旨、示談治定仕候に付、右之趣年寄中江被仰出、表向申渡有之候樣仕度旨等、先達而奉得御內聽候に付、御聞届夫々被仰出候而、當時右仕法取懸居申躰に被爲聞召候。就夫私共組にも不限、右銀子借用之人も多有之、甚繁雜に相成候躰粗被爲聞召候。左候へば夫々より申出候通に貸渡申儀も、町奉行手前に而も出來兼候へば、却而人氣にも障に相成候。若不信服之者も致出來候而は、私共心付候仕法不全候へば、畢竟組々面々勝手成立之爲にも可相成哉、無覺束被爲思召候。尤油斷は無之筈に候へ共、元來不得止事私共申談、奉得御內聽取懸申仕法に候條、自然指當り申事防而已に相成候而は、右仕法相立候詮も無之事に候間、何れにも最初私共示合置候通、組之內極難澁之者共行々勝手向取續申樣、彌無油斷可相心得候。且又右銀子借用方、平士は貸付方重々敷、頭分は一通申込、町奉行相對を以致借用樣にも被爲聞召候。尤町奉行手前に而は潔白にも可有之哉に候得共、彌借用方に差別有之候而は、贔負之取捌も有之樣に相聞え、不可然事に候。箇樣之儀も委細被爲聞召度、旁此段被仰出候旨奉畏候。右之趣、先達而奉得御內聽候通、尤當時極難澁之人々入念相撰、行々成立之儀重々穿鑿仕、勝手圖帳取立、御勝手方年寄中江相達、右帳面町奉行へ相渡候上、銀子追々請取、夫々貸渡申候。右之外下地之勝手振極難澁与申程にも無御座候得共、當暮調達必至与指支、指當如何共可仕手

段無之旨申出候人々も、其儘に指置候而は、極難同様取治方無之に付、是又行々取圖り之樣子承糺、帳面頭々江取立、誠に當暮より來夏へ懸取續之入用而已貸渡申候。右糺方行屆候上は、町奉行手前に而貸渡銀多き方に相成候共、格別之趣を以、表向年寄中より申聞も有之、相立候仕法之儀に御座候得ば、銀高之處を以町奉行彼是申聞候譯も在之間敷哉に奉存候。猶更此度被仰出も御座候間、最初奉申上候趣意相違不仕樣可奉心得与奉存候。外組々之儀は、最初段々私共より申談置候通、無油斷取しらべ申に而可在御座与奉存候。委敷穿鑿仕候故、其所に相泥、仕法相立候人々も彼是与申立、一旦不信服之儀も可有御座、況や頭江申聞候而も不承屆人々は、猶以氣請不宜儀可在御座与奉存候。右仕法急度相立、一兩年も過候はゞ、人々爲にも相成候儀會得仕候はゞ、彼是評議も相止可申与奉存候。且又平士江銀子貸渡方重々敷、頭分は一通り申込、町奉行相對を以借用仕樣にも被聞召候段被仰出候。此儀は、平士之分は頭々に而嚴重に相糺貸渡申候。頭分之儀は、最初は借用方何れに而僉議与申儀も相定り不申に付、是迄之振を以町奉行江申入相辨じ來候得共、當時之所に而は、頭分も極難澁之者は、夫々以後之仕法相立、帳面に記、年寄中江相達、聞屆之上町奉行江申入借用仕筈に御座候。依而借用方に差別は無御座候間、彼是之取沙汰も有御座間敷与奉存候。右御請奉上之申候。

一、御筆之物幷御封印御指札奉返上之候、以上。

十二月十四日

中村九兵衛　判
高畠五郎兵衛　判
水野次郎太夫　判
岡田助右衛門　判
團　多太夫　判
長瀨五郎右衛門　判
富永右近右衛門　判
杉野善三郎　判
人見吉左衛門　判

十二月十九日。郡方に明年西本願寺前門主七回忌の爲上洛することを禁ぜしむ。

〔篤井舊記〕

來年三月西本願寺先御門主七回忌相當之樣子に候處、宗意安心一件取捌之趣有之時節に付、西方諸寺庵右年忌に付上京之儀指留候趣、寺社御奉行中より申談有之。依之御郡方之者共、

右時節伊勢參宮豐商方等に事寄、京都江罷越候儀も可有之候間、其方中急度遂吟味可願出候。右之趣に付而は、今度御用番より段々被仰渡之趣も有之、若し本山志之者有之、伊勢參宮抔与名付罷越候而は、被仰渡之御趣意とも致相違、不輕儀に候條、得与承知有之、無油斷遂吟味候儀肝要に候。尤新田裁許中江茂一統可得其意候、以上。

子十二月十九日　高田彌左衛門

菅野兵左衛門　不在合

能州

十村中・無役御扶持人中

新田裁許中・山廻り中

是歳。十村より百姓に衣食住の制限に關して告ぐ。

〔上田舊記〕

一、節儉方被仰渡、十村僉議之上御郡中江申渡候品々左に記。

一、男女着衣幷羽織布木綿。

一、火事裝束村役之外着用仕間敷、平百姓以下之者胸當迄地合木綿。

一、女子織物帶無用、鼈甲櫛・こうがい等相用間敷。

石踏は雪踏なるべし

一、蛇之目傘・日傘無用。
一、男女共石踏引ずり、表打はき物、絹類くけ緒、塗木履無用。
一、瞽女・座頭之外淨瑠理三味線無用。
一、家作之儀作方に付、間廣成儀者格別、美麗成儀仕間敷。
一、先祖年回法事・婚禮、身近き親類打寄食品輕く可仕候。
一、佳節或祭禮・野休等之節、一門共呼合來候儀、以後指止可申候。音信・贈答無用之事。
一、於寺庵佛會、社家神事執行之節、往來筋札建候儀は、寺社境内之外は爲建申間敷候。
一、在方に而綿打、太物・小間物商仕間敷候。
一、酒造無之村酒小賣場、御郡奉行聞屆無之村には小賣爲仕間敷候。
一、市日之節煮賣仕間敷候。
一、宿所之者在方へ小間物振賣仕間敷候。
一、御郡方醫者着衣、百姓同樣に相心得、惣髮・剃髮之者外脇刺帶間敷候。
一、合羽襟羅紗・天鵞絨を用申間敷、帷子裾裏縮緬抔仕申間敷、髮道具縮緬くゝり紐等相用間敷候。

右者今般被仰出之趣品重儀に付、ヶ條書を以十村より御郡御奉行へ相達候上申渡候儀に候

間、一統末々迄申渡、若右ヶ條に似寄品致見聞候はゞ、組々村役人之内陰聞立置候に付見咎可申旨、文化元年十村共より組々村役人宛所に書取を以申渡候事。

是歳。能登浦々にて船舶舟人より徴する口錢等の錄上を命じ、その額を減ぜしむ。

〔上田舊記〕

一、奥郡浦方着船之所々、商內物等口錢懸り物取請候品々、或は御算用場より押を以取請候口錢取立方書上可申旨、文化元年御算用場より御觸付に付書上候品々左に記。

一、奥郡浦方諸商物、着船之所々賣買之品共、代錢十貫文に付二百文宛問屋宿口錢、船手より右樣二歩之口錢取請申候。

但、小木・宇出津・乙ヶ崎此三ヶ所、米与くり綿・鐵物類之分は、十貫文に付百文宛、一歩之口錢に而請取候。

一、宇出津・小木・飯田・鵜島此四ヶ所、商內物賣買共、前條宿口錢二歩之外、一貫文に付二文宛宮口錢取請申候。

一、波並・甲・鵜川此三ヶ所、錢一貫文に付三文宛宮口錢取請申候。

但、此波並等三ヶ所宮口錢、是迄三文宛取請來候得共、文化元年以來一貫文に付二文宛請

取可申候。

一、比良村着船之分、年中一度舟一艘より二十文宛宮口錢取請申候。

但、此比良村宮口錢一艘より二十文宛取請來候得共、文化元年より商內物錢高一貫文に付二文宛請取申候。

右浦々宮口錢之儀、淵所拵候普請方入用引足、淵所無之浦方は氏神修覆方に仕、先年より御入紙面与申も無之、村方流例を以何時頃より取請來候哉、年限等も相知不申候。

一、中居村に而諸廻船淵入之節、舟一艘に付二十四文宛、切手錢与名付、淵改人方へ前々流例を以請取申候。

但、此中居村切手錢外浦に振合も無之に付、文化元年より取立方指止申候。

一、宇出津浦に而渡海船新艘造立候節、百石積に付銀三匁宛、淵拵入用与して前々流例を以請取申候。

一、同所江舟材木積越濱揚賣買仕候節、銀一貫目に付五匁宛相對を以取請、淵拵入用に仕候。

一、小木村淵之內沈瀨印竹建申に付、明記錢与名付、年中一度諸廻船乘人一人に付十文宛取請申候。尤舟手より賴合に付、右印竹建置申候。

一、飯田組浦方より買請指出候灰一俵に付十文宛問屋宿口錢、前々流例を以取請申候。

但、此飯田組浦方灰口錢之儀、灰持運方人足賃も相籠り十文宛請取來候得共、文化元年以來灰一俵に付三文宛爲請取可申、仍而灰持運方人足賃者、舟手人足相對を以爲請取可申候。

一、輪嶋浦産物類等送り荷物運賃十貫文に付一貫文宛、舟手より問屋江肩錢与して前々流例を以取請申候。

此輪島浦肩錢一貫文之分、文化元年より運賃十貫文に付八百文宛爲取請可申候。

一、同所に而船手より積廻陸揚荷物、加州・越中邊江指送り候分、問屋庭口錢くり綿一本に付銀子二分五厘、前々より流例を以取請申候。其外之品は見圖りを以、何品に而も問屋庭口錢請取申候。

一、名舟村澗入舟、年中一度澗懸り鼻くり錢与名付、舟一艘に付百文宛前々流例を以取請申候。

但、此名舟村鼻くり錢、文化元年以來舟人一人に付二十文宛爲請取可申候。

一、輪嶋崎村澗入舟之方、瀬印澗掛鼻くり錢与して、乗組一人に付錢十八文宛請取振、懸り澗所へ入不申舟者一人に付八文宛、前々より流例を以請取申候。右之外諸廻船見當燈明相立

申に付、寶暦十一年御願申上御算用場へ御達、御郡所入紙面を以年中澗入初一度、舟人一人に付二分宛請取申候。

一、大澤村澗入舟、年中一度鼻くり錢与名付、舟人一人に三十文宛取請、鵜入浦者澗入舟、舟人一人に付二十五文宛、光浦は澗入舟舟人一人に付十二文宛、前々流例を以取請、懸り澗普請入用に仕候。

但、右鼻くり錢文化元年より大澤村・鵜入村は、以來舟人一人に付二十文宛爲請取可申、光浦村は是迄之通舟人一人より十二文宛爲請取可申候。

一、五十洲村澗入之廻船、年中一度鼻くり錢与名付、舟人一人より二十五文宛、前々流例を以取請申候。

但、此五十洲村文化元年より舟人一人に付二十文宛、以來取請可申候。

一、組々浦方より炭・牧木・板・材木類積出候節、問屋宿口錢見圖りを以取請、尤所々に而口錢少々宛増減御座候。

一、小木浦等取請候燈明錢之儀、公儀御城米幷に爲御登米積舟よりは、右燈明錢取請不申候。

右奥郡浦方着船より、商内物等口錢幷諸懸り物取請來候分、前々流例に候分、幷御算用場よ

本文末尾に文化初年の比とあるを以てこゝに採錄す貝咳本の儘

り押に而も有之取請候分、委細相糺可申上旨、公事場より被仰渡候由に而、文化元年御郡所より被仰渡候に付、是迄流例を以潤入舟口錢等取請來候內、右被仰渡に付減方仕、以來取請方之樣子前段之通、同年組々裁許・十村より御郡所へ書上、以來右之通り相極置、不屆之口錢等請取不申樣可申談旨、同年御郡所より被仰渡候事。

是歲。石動山と山麓諸村との境界問題落着す。

〔能州郡方舊記〕

石動山七口

二宮口　貝咳口　角間口　越中口

平澤口　高澤口　七尾口

麓山境中分村々

鹿嶋郡武部組二宮村・蟻ヶ原村・多根村。

射水郡加納組角間村・大窪村・長澤村・平澤村・平村。

外に御預所熊淵村、山境論所之內へ入込居候得共、山論無之候。

一、慶安四年蟻ヶ原村新村立被仰付候節、新開願之儀二宮村より石動山入有之、二宮村より返答書等指上候事。

一、承應年中にも出入出來、境內御縮方被仰渡候事。

一、寛文十一年十月能州御郡御奉行田伏源右衛門殿・越中御郡御奉行郡勘三郎殿、幷口郡相神村彌六・堀松村喜兵衛・武部村太郎左衛門・野崎村孫右衛門・射水郡開發村源內・下條村小右衛門・加納村與兵衛・石動山衆徒、麓村論所村々役人相見、論所御見分繪圖等被仰付候事。

一、延寶二年論山之內、石動山より木を伐、山方御奉行江二宮村より御斷申上、重而双方入込申間敷旨、御算用場より被仰渡候事。

一、同三年三年六日岡崎市郎兵衛殿・奥村因幡殿・津田玄蕃殿御判之堅紙御入を以、論山へ入込間敷旨、二宮村江一通、石動山江一通御渡有之候。

一、元祿十年論山御縮方御郡所より被仰渡。

一、同十一年石動山与山境御寺に付、十村より書上る。

一、同十四年石動山觸頭金澤波着寺より書付上申に付、論山縮方被仰渡。

一、同十六年二宮村より入込申旨、石動山より御斷申上、御縮方被仰渡。

一、寶永二年寺社御奉行所へ石動山より書付上申に付、寺社所より御內意を以御郡所より被仰越趣有之候事。

多根村より論所へ猥に入込申旨之出入に而、事入組六ヶ敷樣子。

一、同七年論山之内槻くさり折御断申上候所、石動山与木名目に間違有之、十村・山廻り役・僧立會見分有之、折木其儘に相成居候事。

一、享保三年論山御縮方、中古二宮村論所之内畠地等有之儀に付、他郡御扶持人等見分、猶更論所御縮方被仰渡、公事場において決着被仰付候事。

但、此決着之節御公事場御出席之人々、公事場奉行奥村源左衛門殿・富田治郎左衛門殿、寺社御奉行前田左京殿・伊藤内膳殿・菊池大學殿、御横目熊谷忠左衛門殿、御算用場御奉行横山中務殿・野村勘兵衛殿、御郡御奉行澤田十郎兵衛殿、御改作御奉行今村源太夫殿・中村四兵衛殿、御扶持人田井村次郎吉・村井村與三右衛門・三階村源右衛門、石動山衆徒惣代五智院・性眞坊・阿彌陀院被召出、決着被仰渡候事。

一、寶暦七年射水郡御郡御奉行より論所下莿之儀被仰上、段々御詮議之上埒明不申事。

一、明和二年三月二宮村より論所之内山火事有之、右町間改之儀山廻り中立會、見分仕儀難相成旨に而、御詮議之上裁許之十村・石動山役僧・村役人立會見分之上、町間相改御斷申上、言上に相成候事。

一、寛政年中蟻ヶ原村百姓畠野畠之作物を、石動山衆徒より相荒し、二宮村・蟻ヶ原村より御斷申上、公事場御詮議之上作物相荒し候衆徒、一山追出被仰渡候事。

一、享和度より右論山段々御詮議、文化初年之比公事場御裁判有之、石動山与麓村境筋相立、公事場與力小嶋石之助殿・板坂雍左衛門殿、本江村惣助・武部村四郎太夫・酒井村一樂・加納村兵衛等、石動山衆徒立會堀切等出來、論地落着に相成候事。

文化二年

正月朔日。前田齊廣金澤城に於いて元旦の禮を行ふ。

〔政隣記〕

元日雪降、寒穩也。今朝六半時揃に而、於檜垣之御間諸大夫衆等より若年寄中迄年頭御禮被爲請。夫より鶴庖丁御覽。畢而於柳之御間、人持頭分獨禮被爲請、一先被爲入。重而御出、御小將中・御射手・御異風・新番・御醫師・御儒者座付之一統御禮被爲請、惣樣九時頃相濟候事。

正月廿七日。前田齊廣越中井波瑞泉寺の寶物を觀る。

〔金龍公記史料〕

正月廿七日。觀井波瑞泉寺所藏聖德太子傳。高德・瑞龍二公書。豐太閤書。太子傳畫金岡書宇多天皇。以公家襄封。一觀之爲例也。

正月廿八日。村々の算用を嚴に監督せしむべきを告ぐ。

〔郡方御觸之抄〕

村々算用之儀、年切綿密遂勘定、毎春裁許之十村見屆、百姓人別申分無之趣算用帳に相記、印章茂見屆置可申儀、古來より之格に而、此儀等閑に致置候得者、村役人不埒無之とも、人々疑を以人氣不穩、第一取治に指障不輕儀に付、前々より嚴重申渡置、勿論決算相濟申趣、夫々屆にも及可申候得共、實者村々役人之心得に而粗密之儀有之躰。組々において十村共急度穿鑿可仕處、不行屆所々も有之、何等申事等出來仕所々有之躰に候。組之內右躰之儀出來仕候儀を、如何相心得罷在候哉。尤一村々々役人有之事に候得者、不行屆村々者役人手前嚴重遂詮議、不行屆役人之儀者夫々申斷急度可致裁判、其儀等閑に致置候故にも相聞、沙汰之限に候。別而加州向混雜之躰にも粗相聞候條、不行屆所々者早速相改候樣、各手前より急度可被申渡候。若以後右躰之儀於承に者、村役人者不及申、十村之儀も品により無用捨急度申付候條、此段譯而嚴重に可被申渡候、以上。

丑正月二十八日　　御算用場

改作御奉行中

正月廿八日。前田齊廣、年寄及び家老に限り明年增借知を命ぜんとの意

を告ぐ。

〔御家老方御密用之覺〕

丑正月二十八日

一、表方において年寄中・御家老中江、勘解由・善左衛門・中務を以、左之通被仰出。
各存之通連年御勝手向御逼迫至極に被爲在、御入國以後格別御省略被仰付、少々減方も付候へ共、中々御符合之所江者至り不申事に候。去々年於江戸表御借金方御仕法も被仰付、彼是不心服に有之候得共、大半申談候通相整、去年御歸國之上甲斐守・左京等委曲存知罷在候通、御算用場奉行より段々申聞候趣も有之候付、大坂御借金方御仕法被仰付候に付、林彌四郎被遣候而段々金主共江申解候得者、御藏許共御請も仕、是又段々相整候躰にも被思召候。然處御地盤方段々御しらべ被仰付候處、一ヶ年六百貫目之御不足に相成、以之外御運方御指支候儀に候。依之色々打返被爲遂御思慮候得共、此上如何とも思召當り無之候。併來年より此上格別之御省畧可被仰出思召に候。就夫御身分を初、御次廻格別之御省畧被仰付候思召に而、御膳所幷奥御納戸等御入用悉御減少被仰付置候へ共、幾重に御艱難に被爲在候而も、何茂御國家之爲、其儀は聊御貪着不被遊候付、此上御省畧之儀段々御直に被及御指圖、二之御丸御廣式御入用金も八百兩之所、以來六百兩を以相辨候樣是又御僉議被仰付候。暨御鷹等も

被減、且御武用之儀格別之儀に候得共、御馬數も無理に被減候趣、夫々被及御下知候。或者表向萬端諸頭を初、來年中御指押、諸頭・諸役人も此御時節誠に存込、御省畧之儀和順に申談、是以後風俗も相移候樣、追々可被及御下知思召に候。右に付御家中半知にも可被仰付思召に候得共、甚以不容易、其儀も難被成候。各難澁之程被思召付候而、先以御心外至極、被仰出候も御斟酌被思召候得共、來寅年一作各より百石に十五石宛增御借知被仰付、御家老よりは萬石以上十石充、其外之御家老は五石充御借知可被仰付候。尤右之趣不輕儀、中々御前御一存を以御決斷之儀は難被爲成儀に付、相公樣江も御內意被仰上候處、御心外至極に被思召候儀は御同意に候得共、此上者御僉議次第与被思召候旨被仰進候。依之御心外ながら右之通被仰付候條、萬端暮方等心得仕、成丈遂儉約、來年より右增御借知指上候樣有之度思召候。各儀難澁与申內、勝手厚薄も可有之候條、一兩年も打續指上候而も、さのみ勝手向相廻り申に而も無之面々は、一兩年續候而指上候得ば、第一御勝手御運方にも相成申儀、別而一段之事に思召候。尤右之趣に付、各にも格別萬端可遂省畧候條、行粧相減、幷衣服等見苦敷儀は不及御貪着。此等之趣私共より申達候樣御意に候。

別段各より增御借知被仰付候儀者、全御不足償之爲に被仰付候儀迄に而も無之候條、各より御借知被仰付候儀承り、御家中之人々志次第指上度旨申出候面々有之候而も、一圓御許

容無之思召に候條、各にも共心得に而、自然申出候人々も有之候而も、承届不申樣可相心得候。

〔政隣記〕

正月廿八日

一、今般御省略被仰出候趣共左之通。

御馬五疋御減少。

御廣式女中同斷。

當御參勤御供人同斷。

但、御近習頭津田權五郎共外都合五・六人御減少。

御鷹不殘御減止。

但、不殘鷹屋新左衞門等に被下之、越前等に賣遣候筈之由。併去年御拜領之大鷹二据は被指殘。

正月廿九日。前田齊廣、老臣等を召して儉約の勵行に關する意見を徵す。

〔御勝手方諸事覺書〕

正月廿九日

一、甲斐守等三人御前江被召、昨日一統江被仰出候御趣意之趣等段々御意有之。猶何茂存付候儀有之候はゞ、御身分之儀を初無泥可申上候。先指當り申上候儀存付無之哉之旨御意有之。何茂奉畏候。是迄段々御省略之節被仰出候儀故、油斷も不仕儀に御座候得共、私共不才中々行屆不申、先指當相心付可申上品無御座候。猶又此度被仰出候趣に付、御算用場奉行等とくと申談、重々遂詮議可奉申上旨等御請申上候處、左之御親翰拜戴被仰付、御覺書之通猶更思慮いたし、何分會得有之候樣夫々可申談旨等御意有之。夫々拜見及御請。且又今般被仰出候御省略御趣意之儀は、兼而内分御算用場奉行へ申談候はゞ、何か心得にも可相成儀与奉存候に付奉伺候處、共通与御意有之。應而及御退去。

御親翰寫

一、借知之儀は先來年与申渡候へ共、省略之儀は只今より可申渡哉之事。

一、今般之所は、各三人共打寄格別に申談、且算用場奉行等も相招、誠に和順に底意も承り、省畧等之儀永久相整候樣有之度事。

一、今度年寄共江借知申付候儀、全く不足償之事迄に而は無之、格別之省略申付候事に候得ば、一統心服之儀も第一に候。依之身分之儀も、成丈省略申付候事。

一、省略方之儀何れ茂示合之上、夫々ヶ條書に而もいたし追々申聞候はゞ、可及指圖候事。

一、地廻等之儀、表向に而は不相知事候故、尤去頃以來直に及指圖候事。

正月。金澤町に於ける料理屋の增加を許し、その仕法を定む。

〔料理方定書〕

料理屋之儀、寛政元年御詮議有之、町支配幷寺社門前地共八ヶ所に被仰付候所、魚屋共之内密に料理屋に似寄候者有之。且法外奢侈之料理取扱、近來被仰出にも相背候に付、都而料理屋指止之儀、御用番年寄中より被仰渡置候。然處御家中吉事等、或は於町方無據寄合候砌、輕き肴等自宅において調候而は、却而失墜之筋も有之、且右料理屋共家業に放及難儀候に付、以前一人前二匁迄を銀高に直し料理取扱家業致度旨、裁許肝煎共願紙面指出、委曲御達申候處、願之趣御聞届に候。然處御家中吉事等之節、八軒に而は十軒之用事難辨、又は紛敷料理屋等出來すべく候に付、今般八軒相增、都合十六軒に相極、以來料理獻立御縮方等嚴重可申渡旨、重而御達申候處、是又御聞届に候事。

一、元來料理獻立之儀は、古來御定も有之候處、近年段々奢侈に移り、膳部之外酒肴之趣に名付、羹物等前廉品々不出而は振舞方麁略之趣に茂相當、自然与增長に至り、世風に分限取失候族も出來致し易く、畢竟人々身之爲に不宜敷事に候。依而以後改之、獻立直段付左之通り。

一人前　二匁　汁鱠に而も鰭添 鱠物に而も小焼物之内一品

右二匁限り、是より以上之料理令停止候。以下之分は大抵准之可調事。

一、酒之肴小蓋一面に付七分限り。

一、御家中等吉事之御出料理、一汁二菜、膳中輕き吸物、其代料二匁を限、是より下直之分勝手次第之事。

一、町方家賣買納得寄合等、身分大抵宜敷者たりとも、町中一統申渡置候儀も有之候條准之、好候共吸物は三分限り、高料之品取扱申間敷事。

一、獻立之外、或は到來物持參之品等に而、直段之外別に調出候樣、何方より賴來候共堅く無用之事。

一、料理屋宅指支、外座敷借出料理持運、或は料理方被雇他に罷越相調候共、御定之外法外之獻立堅令停止候事。但、若歷々方或は他國添客等、格別之獻立被賴候はゞ、其段相斷可請指圖事。

一、巡見等上使幷他國御使者等、格別之料理方之儀町料理人に申渡候得者、獻立書可調出、其筋指圖次第に可相心得。勿論諸色成限り遂勘辨、不成高直樣可相働事。

一、右料理方仕法相改候儀は、御家中吉事或は町かた納得之節、輕き賄等、自宅において家

具等之儀まで却而失墜之筋も可有之者、易簡之趣を以而重而商賣被仰付候得共、其所致會得、奢侈之儀至而可相止事、今般仕法申渡本義に候。永々無違失可相守候。若心得違之者共有之、法外之獻立取扱候者、其時々役人相廻し、因其輕重急度咎可申付候者也。

文化二年乙丑正月　　町會所

二月三日。前田齊廣、御馬廻頭・御小將頭に對し藩の省略方針を達成せしむべきことを告ぐ。

〔政隣記〕

御馬廻頭・御小將頭に被仰出之趣、二月三日於御次本多勘解由・横濱善左衛門より右組頭中に演述之覺。

各存之通、連年御勝手向御逼迫至極に付、御入國以後格別之御省略被仰付、少々減方も付候哉に被思召候得共、中々容易に御符合之所に者至り不申事に候。去々年於江戸表御借金方御仕法も被仰付、且又去年御歸國之上段々御詮議有之、大坂表御借金方も御仕法被仰付候趣に付、林彌四郎被遣候。右に付御地盤方段々御しらべ被仰付候處、年中御入用方過分之御不足に相成、以之外御運方御指支之儀に候。連年右之趣に而者、容易御勝手御取直し、御借知抔被返下候場に者不被爲至、左候得ば彌增御家中之人々及難儀申儀、御寢食不安被思召候。依

之色々打返御思慮も被爲成候得共、此上如何共思召當りも無之候。併來年より尚又格外之御省略可被仰付思召に候。夫に付御身分を初、御次廻格別之御省略被仰付度思召に付、御賄所幷奥御納戸等御入用悉く御減少被仰付置候得共、幾重に御艱難に被成御座候而も、何も御國家之御爲、其儀者聊御貪着不被遊儀に付、此上御省略之儀段々奉行等江御直々被及御指圖、二之御丸御廣式御入用金も御減少被仰付、暨御鷹等も被減、御武用之儀格別とは申ながら御馬數も被減候趣、夫々被及御下知に、いつ迄も御省略と申に而も有之間敷、不遠內に者是非御勝手向御運も宜敷被爲成、假令不全とも御借知も被返下、御家中之人々も相應勝手取直し、又は年柄に寄窮民等江御發賑被仰付、御指支無之程之場へ不被爲至而者、甚以御手薄之儀御心痛被成候。殊に御前には申さば不時成御家督、萬一にも四民風俗も惡敷、次第に困窮に相成、暨御勝手も最早御潰之場へ至候而は、被對御老君樣方江候而も、別而被仰譯も無之御事に候。然る上者各初一統深く此御時節存付、一途に風俗も宜敷所江相移、萬端御省略方等相整候樣有之度思召候條、彌無油斷可相心得候。每々右準候儀等被仰出候節、乍奉畏彼是後言仕候人々も有之哉に被聞召候。尤各には無之事に候得共、右等之儀者有之間敷儀に被思召候。向後者被仰出有之共難辨人々者、幾重にても奉伺、得与御趣意之程可奉畏候。右之通申上候はゞ、一端被仰出候而も、道理に相當不申儀も自然有之候者、速に御改可被遊候。又は

申上方道理に相當り不申儀者、相分能く會得仕候迄幾度も可被仰出候。若如此被仰出候上、以來被仰出候儀等、會得仕兼ながら不奉伺、退候而自然評議仕候人々も有之段被聞召候者、御咎可被遊思召候、右等之趣各奉承知、組・支配有之面々江も、能々會得仕候樣可申談候。尤於御前逐一可被仰聞候得共、入組申儀却而御前に而被仰聞候而者會得も如何与、先於御次被仰出候。猶近々被爲召候而可被仰聞、此段可申聞旨御意に候事。

丑　二　月

外に御算用場・御郡所御添紙而者畧す。

二月三日。年寄及び家老等増借知の命に從ひ得ざることを上申す。

〔御家老方御密用之覺〕

一、二月三日此間被仰出之趣に付、左之通覺書に認、表方において年寄中御家老中列座、善左衛門・中務江申述上之事。

連年御勝手向御逼迫至極に被爲在、御入國以後格別御省畧被仰付、江戸幷大坂御借金方御仕法被仰付候。然處御地盤方段々御しらべ被仰付候處、一ヶ年六百貫目之御不足に相成、御運方御指支に御座候。依之色々打返被爲遂御思慮も候得共、思召當り無御座候。併來年より此上御格別之御省畧可被仰出思召に候。就夫御身分を初、御次廻格別之御省略被仰付候思召

に付、御膳所等御入用悉御減少被仰付置候得共、御國家之爲御艱難御貪着不被遊、此上御省略之儀段々御直に被及御指圖、二之御丸御廣式御入用金も御減少、暨御鷹・御馬等も被減候。右に付來寅の年一作、私共より百石に十五石宛御借知被仰付、御家老より者萬石以上十石充、其外之御家老よりは五石充御借知可被仰付候。右之趣相公樣江も御内意被仰上、被仰付候。私共難澁ヶ中内厚薄も可有之候條、一兩年も打續指上候而、さのみ勝手向相迫り申に而も無之者は、一兩年續候而指上候へば、御運方にも相成申儀に御座候旨。且又私共より御借知被仰付候儀者、全御不足御償之爲被仰付候儀迄に而も無御座候條、御家中之人々傳承仕、志次第指上度旨申出候人々有之候而も、一圓御許容無御座思召に候條、其心得可仕旨段々各を以被仰出之趣奉承知。將又於御前御意之趣茂謹而奉拜聽、土佐守・安房守・義十郎江も被仰出候趣逐一申聞候。先以私共不才に而御省略僉義方行屆不申、御地盤方御不足に相成御符合不仕候に付、御身分を初御次廻御格別御省略被遊候。御廣式御入用等夫々御減少被仰付候御儀、可申上樣も無御座、奉恐入迷惑至極奉存候。依之來年增御借知指上候儀は、何も勝手難澁仕候故、乍殘念唯今御請は得仕不申候。土佐守・安房守・義十郎儀も同樣に申上候。此段可然樣被達御聽候樣致度存候。

二月四日。前田齊廣、老臣等の增借知の命に從ひたるを賞す。

老臣等の御請を上ぐるに至りし經緯は明かならず但しこの增借知は實行せられざりしなり文化三年四月五日參照

〔御家老方御密用之覺〕

二月四日年寄中一切御居間書院において御前江被召、相濟、御家老中一切御前江被召御意之趣。

今般各增御借知被仰付候に付、昨日御請之趣申上、委曲御承知被遊、御大慶思召候。此上猶更身分內外暮方・行粧暨衣服等見苦敷儀は不被及御貪着候間、何分可遂省略候。各儀は諸人之目當に相成候儀、猶更無油斷心得候樣御意之事。

二月十五日。富田景周自著の越登賀三州志を献ず。

〔金龍公記史料〕

二月十五日。藩臣富田景周。献自著三州志。

二月十八日。親鸞上人の遠忌將に近きにあるを以て百姓の過分なる法會を行ふべからざるを令す。

〔郡方御觸〕

親鸞聖人五百五十回忌近年之內相當り候に付、御郡方之者共且那寺等招寄、不似合法會を取行ひ、人多に致參詣候之族有之躰、粗相聞候。於俗家右樣之躰御停止之儀は、前々より申渡

置候通に候處、甚等閑之儀不埒至極に候。元來右樣之儀相企、宿等いたし候儀は沙汰之限に候間、追々綿密に及穿鑿、嚴重に相咎可申候。尤其方中、組々において相企候躰見聞候はゞ相糺可申聞候。若其方中より不申聞、外より相聞候はゞ、急度相咎可申候間、油斷無之樣可被相心得候。猶更此段末々迄不相洩樣急々可申渡候、以上。

丑二月十八日　　高田彌左衛門
菅野兵左衛門

奥・口十村中

［郡方御觸］

付札、御算用場奉行江

一向宗之者共御坊方江寄進等之儀に付、毎度申渡候所、今以町・在之者共密々寄進等有之躰に候。當年者先御門主年回相當に付、於在家寺庵相招、身分不相應之法會令執行、人多集候者も次第增長、追々可令執行心得之者も有之躰粗相聞え候。先祖等年回に候共事輕く可致執行段、前々より被仰出茂有之候所、是迄本願寺代々年回之節抔、於居宅身分不相應之法會令執行、人多集候儀等、畢竟御坊方より相進候に付、中に者不得止事致執行、且寺庵之內には右年回を申立、檀家江寄進等之儀申談候族も有之躰に候。人々先祖等之年回に付、輕く致法會

候儀は格別、本願寺代々年回に付、町・在之者共居宅江寺庵等相招、或密々寄進等いたし候儀者不埒之至に候。右躰之者於有之者、吟味之上咎可申付候。

一、本願寺代々年回之節、商用に事寄參詣いたし候者も有之躰に候。尤爲商用罷越候者を指留可申子細者無之候得共、前々より商用に而上京いたし候者にも、右年回之砌者、所々奉行等に而其品承糺候上に而、上京之儀承届可指遣候。若不受指圖罷越候者有之候はゞ、嚴重咎可申付候。

右之趣被得其意、遠所町奉行等江可被申談候事。

丑 二 月

後前田齊泰の生母となれるもの

二月十九日。藩士小野木助三の娘中﨟として召出さる。

〔齊廣樣御傳略等之內書拔〕

二月十九日小野木助三娘御中﨟被召抱、御充行御格之通被下。同二十五日名屋尾与相改候樣被仰出なり。

二月二十日。老臣等行粧省略の實行に關して上申す。

〔御家老方若年寄方日記之內覺書〕

二月二十日

一、今度各御前ゟ被召、身分を初行粧等省略之儀御意に付、猶更同役中申合、着服之儀は不被及御貪着段、御意之通相心得罷在候。行粧之儀は格別減少可仕様も無御座、併平日御城ゟ罷出候時分も、多分馬上或は歩行可仕候。召連候下人も、夫々順時に不同も可仕段、今日勘解由・圖書・織江・隼人助別席に而、鬮屋中務を以達御内聽置候事。

是月は大盡なり

二月晦日。郡方出火の際の死人は御郡所の見屆を得べきことを定む。

〔御郡典〕

是迄於御郡方に、出火之節燒死人有之砌、斷方區々に相成居候間、以來燒死人有之候はゞ、變死人同樣相心得、見屆方等之儀、役所受指圖取捌候事に相極候條、可得其意候、以上。

丑二月晦日　　高田彌左衞門

菅野兵左衞門

能州四郡十村中

二月。御步組の士他國に使する際藩より刀持足輕を貸附せし例を廢す。

〔御年譜〕

一、御步組之內より爲御用他國等ゟ罷出候節、御用之品により、爲刀持足輕御貸人相願候得者、時々承屆候得共、詮議之趣有之、以來刀持足輕御貸人難相渡候に付、右樣之砌者半分に

相雇召連、雇賃者御渡之趣可申渡候間、其時々可被相願候事。

丑　二　月

二月。學校に於ける讀師討論の席を廢す。

〔學校方覚書〕

學校頭に

於學校、毎月廿四日讀師討論之席被建置候へども、先當分可被指止旨被仰出候條、被得其意、夫々可被申渡候事。

二　月

三月四日。前田齊廣、治脩と共に白山比咩神社に詣づ。

〔政隣記〕

三月四日朝六時過御供揃に而、同刻御出、御鷹野之御振に而、御兩殿樣御同道鶴來邊御行歩、白山宮にも御參詣。同所續古城跡・八幡村御藪等御巡見、暮六時頃御歸城之事。

但、額谷村肝煎方御小休、鶴來村米屋等御晝休、御兩殿樣御一所に而は無御座候事。

三月十一日。前田齊廣、留守中に於ける心得を家老前田兵部に示す。

〔御親翰帳拔書〕
文化二年三月十一日以山崎小右衛門被渡下。
其方儀、當留守中用向萬端無油斷可被心得候。且又當時存知之通り、嚴敷省略中に候得ば、人受取治方心得所要に候。殊に各儀者一統目當にもいたし候事に候條、身分之儀も其心得可有之儀勿論之事に候。是等之趣爲心得申遣置候、以上。

三月十一日

前田兵部殿

三月十一日。前田齊廣金澤を發して參覲の途に就く。

〔齊廣樣御傳略等之內書拔〕
三月十一日金澤御發駕、同二十六日江戶表御着府。上使等都而御先格之通なり。

〔政隣記〕
三月十一日御見立揃刻限六半時過に付、同刻より登城。御供揃は五半時也。且五時御供揃に而金谷御殿江被爲入、四時過御歸殿。九時頃從御機嫌能御發駕、御作法前々之通。三之御丸へ草履捕一人召連罷出候處、御例之通御意有之。夫より御席へ出、御用番又兵衛殿江恐悅申述退出。但今日式日者無之旨、御横目中より申談有之。

一、御供人奥村左京殿・本多勘解由殿等、夫々無異儀發出。今夜今石動御泊、去々年秋之通御泊附に而、二十三日江戸御着之御日圖りに候事。

〔政隣記〕

三月十八日朝、去十六日夜越中境之飛脚到着、左之通申來。

御日圖之通御通行、十四日夜泊驛御泊之處、同夜强雨、姬川洪水、幷青海川も舟場切れ候に付、十五日も泊驛に御逗留。十六日は姬川等減水御支無之候得共、親不知幷駒返り高波之段注進。併境迄押而被爲入、段々御實儀被仰付候得共、御通行難被爲成由に付、十六日夜境に御逗留。二十一日糸魚川より之飛脚着、十七日親不知・姬川御通行、同夜糸魚川御泊之旨申來。二十八日板ヶ鼻驛より之飛脚着、松平豐後守殿与御出合之圖りに而指支候に付、二十三日者深谷驛不時御泊、二十四日熊谷驛御泊、二十五日浦和驛御泊、二十六日江戸御着之圖りに相成候旨申來。

〔政隣記〕

一、當御參勤御道中、越後姬川出水等に而三日之御逗留に相成、失墜多懸り、一統難澁之躰に付、格別之趣を以、御逗留中旅籠代御取替之分、被下切に可申渡旨被仰出候段、奥村左京殿被仰渡。

但、一宿御先御跡より罷越候人々江も、三日分旅籠代被下之。

三月十六日。金澤城石川御門の石垣を修築するを以て通行を禁ず。

〔政隣記〕

付札、御横目江

石川御門續御櫓下等石垣御普請就被仰付候、當二十六日より右御門往來指留候條、御城中御番人且又就御用罷出候人々、河北御門より往來之筈に候。若火事等之節者、石川御門往來不指支候。尤御普請所之儀に候間、往來人不込合樣可相心得候。此段夫々一統不相洩樣可被申談候事。

丑三月十六日

右御城代又兵衛殿被仰聞候旨等、例之通御横目廻状有之。

三月廿一日。鹿島郡永光寺の山林を沒收し、境域を定めたる繪圖を下附す。

〔職事日記〕

一、能州酒井永光寺地論、去年落着に付、右繪圖後來之爲、右始終之趣繪圖面に書記文面に

兩刹とは寶圓寺と天德院なり

書記。文面左之通り。

天明六年永光寺より兩刹江指出置候同寺明細帳之內に、應永十二年高田中務入道沙彌道教寄進狀之文面には、北川を限、東越中境を限、西路を限、其外寺寄之山は依有志永代寄進与有之。右寄進狀之通御當家大納言樣より被爲下置候得共、此儀虛文也。其譯は寬文十年迄鹿嶋半郡長家之領分に被成置候處、寬永十二年長九郎左衛門より預山にいたし、寺中薪之分山下莇を以用之、材木用事之節は樣子承届寄進可申与、九郎左衛門より定渡候書物に而可考也。大納言樣御代者慶長より以前之事也。

但、寬永十九年長家地頭之內、百姓共伐木いたし候節之誤證文有之處、右證文之寫文面を直し置、御當家御先代、永光寺古由緒御聞届之上、山林之儀中務寄進狀之通被下置候与申證據之樣に申立候儀も、右明細帳之調方与同樣之虛談也。

一、寬文十年長家領分鹿嶋半郡之所、御當家へ御引取之節、都而先地頭之除知寄進地は、當地頭之志次第之道理故、長家より永光寺江附置候十五石之知行所を以御引取有之。右預山之儀は、續筋より南西向之片平は永光寺境內除知与成、右片平之麓寺續之空地等、酒井村高之內に而未進地に相成、則元祿十一年右未進地打立も有之候。東北向片平は、字附御林其外酒井村持山に相成候事。

分見は分間なるべし

但、右之通故延寶三年神子原村其外四町村等之領与、酒井村・本江村等之持山領与之境塚出來之節、双方役人等立合、一統納得之趣に繪圖に相調、則字千かゐと申所東之境塚は、酒井村領与神子原村領之境に築候塚八つ之内に相成居候事。

一、明細帳之内に、境内山林前寄進狀之通、大納言樣より被下置候歩數之儀、大槩相見量候處、竪一里程横幅は隨所十五町或は二十町少々宛廣狹有之、四方之境北与東西は分明に有之旨調置候へ共、山の竪嶺筋は神子原村領境より口迄之町數二十一町計有之候。往古中務入道前寄進狀之通大納言樣より被下置候而、四方之境右之通に相違無之時は、神子原村領も打越、越中境迄境内に相成、其外西北之地面も境内へ多入不申而は、明細帳右之通には難調儀に候處、大納言樣より前寄進狀之通被下置候抔与、勝手次第之儀を明細帳に相調置候事。

右之通に而、往古之領主高田中務寄進狀之通には難相成處、先住以來鎌倉殿御下知之地抔与申立及爭論候故、住持泰陽儀公事場僉議之趣會得有之候者、品能可取捌与申渡候處、其儀も不致許容我意を立罷有、申開無之期に至り悔前非候趣申出、不屆之至に付遂言上候處、泰陽追院山林不殘御取上之旨被仰出。仍て此繪圖之通色取を以、御取揚之場所暨被下置候未進地幷墓所等除知之所分ちの分見番杭帳一冊相添相渡候條、各添翰を以、此繪圖共に永光寺江御渡在之、後々繪圖面之通相守候樣可有御申渡候、以上。

文化二年三月二十一日

〔職事日記〕

此山嶺筋を境、南西片平は永光寺境內除地、北東向片平は御林山曁村方稼山に候處、寶暦年中永光寺より右山不殘永光寺境內与申出及爭論、僉議中年月を經、今度於公事場令穿鑿候上、永光寺不屆之趣相顯候に付、永光寺山不殘御取揚之旨被仰出。依而十色之色分けを以、夫々境筋相分候繪圖永光寺へ相渡置候事。

但、永光寺へ渡置候繪圖、公事場幷御算場用に扣有之候事。

一、東北向片平之內御林山与稼山之境筋、今般堀切等申付候に付、此繪圖之通御林山前々之間數を以堀切申付候旨、御算用場より申來承屆候事。

但、右堀切は御林与稼山与を相分可申爲申付候事故、永光寺へ相渡置候繪圖には嶺筋之境築等相記、御林山堀切間數等は不相記候事。

附、右堀切間數等相記候繪圖は、宇出津山奉行幷御郡方へ相渡置、尤公事場曁御算用場に扣有之候事。

右書面之通於公事場相調、繪圖見屆置候。都而境筋之儀繪圖之通可相心得者也。

文化二年閏八月　　　公　事　場

三月廿六日。前田齊廣江戸に着す。

〔政隣記〕

三月二十六日益御機嫌克江戸御着、追付之御供揃に而御出、御老中御廻勤有之候段等、同日江戸發之飛脚、四月六日來着告來候事。

三月廿八日。徳川家齊、老中青山下野守を遣はして前田齊廣の參覲を勞せしむ。

〔政隣記〕

三月廿八日上使御老中青山下野守殿を以、今般就御參府被爲蒙上意、御作法都而前々之通に而、御都合能被爲濟。上使御退出後追付之御供揃に而、御老中方御廻勤。

四月朔日。前田齊廣登營して參覲の禮を行ふ。

〔政隣記〕

四月朔日、前日御老中方御連名之依御奉書御登城、御參府之御禮被仰上。隨駕之臣奥村左京・本多勘解由御目見。惣而御先例之通被爲濟。

右今月二十九日出飛脚指留に而、四月朔日江戸發、同九日金澤立之飛脚に申來候事。

預所とは能登の幕府領にして加賀藩に委任管理せしむる諸村をいふ

四月十五日。金澤に於いて諸士に前田齊廣が着府以後の狀況を告ぐ。

〔政隣記〕

四月十五日月次出仕、四時前年寄衆等被謁。其節御用番山城殿左之通御演述、當座之恐悅に而相濟。

前月廿六日御機嫌克御着府、同廿八日上使青山下野守殿を以被爲蒙上意、當朔日御登城、於御黑書院御禮被仰上、殊に御懇之上意、奥村左京・本多勘解由御目見、重疊難有御仕合に被思召候段、以御書被仰下候事。

四月廿四日。前田治脩草鹿を行はしむ。

〔金龍公記史料〕

四月二十四日於金谷外庭。命近侍射草鹿。使人持組觀之。

四月廿八日。能登に於ける幕府領と加賀藩領との百姓が互に婚姻養子する手續を議す。

〔上田舊記〕

御預所村方与御私領村方与、是迄緣組等申合候儀聊指支候儀無御座候所、近頃御私領方にお

いて、高方幷人別方等混雜之品々相改候旨に而、是迄之樣に緣組互に相整不申、甚迷惑之趣相聞え申候。元來御預所之儀者、土方勘兵衛殿料知越中新川郡之內に御座候所、慶長十一年能州四郡之內江御替地被仰付、貞享元年御代官所に相成、享保七年御預所に被仰付、數年來緣組申合來候。既に奧郡入會時國村、御料・御私領本末相別れ居候者有之。先年より于今不相替親み仕、一方に子持不申時者一方より養子貰請、大切至極にいたし罷在候旨兼而承り居申候。第一右等之者緣組・養子相成不申時者、不心服之儀必定に御座候。天明六年千路村等八ヶ村之內、右等に順候者共多躰に御座候。御預所六十二ヶ村、能州四郡之內所々飛散村建有之、御預所切に而緣組等申合候儀に相成候而者必至与指支候間、人迯りを以養子等指遣候儀者指支不申樣仕度、且小高所に水飲多、稼等も無御座村方者、是迄御私領方之內懸作之躰に而持參候分も御座候。是又指支候躰。右高に離候而は、最早生計無之難儀仕儀に御座候間、右人迯り遣度奉存候。左候得者御締方も相立可申儀与奉存候。早々御詮議之上指支候儀無御座樣、御郡奉行・改作御奉行江被仰渡置候樣仕度奉存候、以上。

丑四月二十八日

賀古群五郎
前田源六郎
中宮半兵衛

遠田誠摩様

戸田五左衛門

別紙賀古群五郎等より差出候に付、遂詮議候處、無據儀に御座候間、猶更同役共江及示談、右紙面承屆、夫々可申談与奉存候。此段申達候、以上。

四月晦日

遠田誠摩

横山山城様

御預所村方与御私領村方与緣組申合候儀、於御預所指支不申段等、別紙之通御用番年寄中江も御達申置候間、於御私領不指支様、能州御郡奉行・改作奉行中江御申談有之様致度候、以上。

寅二月二十四日

遠田誠摩

御算用場

（寅は文化三年）

御預所村方与御私領村方与緣組申合候儀に付、別紙之通遠田誠摩申聞候に付、寫相達候條可被得其意候、以上。

寅二月二十八日

御算用場

高田彌左衛門殿

菅野兵左衛門殿

五月九日。前田齊廣、陪臣の衣服に就いて令し、次いで之を撤回す。

〔於江府御親翰帳之内書拔〕

五月九日

一、左之御親翰以主馬被渡下。

御付札、奥村左京殿

近年衣服之儀に付段々申出候處、家中之人々家來之內、中には品宜衣服を相用候躰粗聞候。主人に急度心得も可有之事に候。惣躰奢侈ヶ間敷儀聊無之、分限を急度相守樣、主人々々より可申渡筈に候。此段家中一統に可被申渡候。尤於此表も一統に可被申渡候、以上。

五月九日

奥村左京殿

被成下御親翰奉拜戴候。近年衣服之儀に付段々被仰出候處、御家中之人々家來之內、中には品宜――可申渡旨、奉畏候。御親翰勘解由にも拜戴申談候。當時嚴敷被仰渡も御座候に付、絹・紬之外宜敷品相用候儀は私共には見聞も不仕候。自然絹・紬之儀も御制之儀にも御座候者ば、如何敷樣にも奉存候。依之今般金澤表に申遣候儀は先相扣置申候。猶更追而僉議之趣可

奉伺候。御親翰御着札・御封印奉返上之候、以上。

五月九日　　　　　　　　　　　奥村左京

御家中之人々家來之內、中には宜敷衣服を相用候躰被聞召、一統被仰渡方之儀に付、一昨日左京江以御親翰被仰出、共節追而僉議之趣可奉窺旨、同人より御請奉申上候通に御座候。依之申合候は、御家中之人々家來共宜敷衣服相用候儀、何与歟被聞召候儀も被爲在候哉。一昨日も申上候通、私共には見聞も不仕候。陪臣之儀に付、分而被仰渡は無之御座候へ共、是迄衣服等之儀、一統江毎度被仰渡も御座候間、此度之儀は先御見合被遊候而可然哉とも心付候に付奉窺候。猶更被仰出次第奉心得候、以上。

五月十一日　　　　　　　　　　奥村左京

本多勘解由

同　十二日

一、左之御親翰以十郎右衛門被渡下。

御指札、奥村左京殿

家中之人々家來衣服等之儀に付、重而僉議之趣令承知候。右之儀は横目共より言達之筋共有之に付申出候得共、被申越候趣茂尤に存候間、先令猶豫置、猶相考、重而可申出儀も可有之

候、以上。

五月十二日

奥村左京殿

五月十六日。前田齊廣、十ヶ年以上皆勤の士に賞詞を傳へしむ。

〔政隣記〕

五月十六日、十ヶ年以上皆勤之平士江、今日於御次、一段之由に被思召候段御意有之。頭々誘引、覺書を以不破五郎兵衞演述之。御禮は身當り頭々江勤。

五月廿一日。前田利命金澤に逝去す。

〔政隣記〕

五月二十一日、裕次郎樣當月上旬以來御腫氣有之、御勝れ不被遊候處、當十七日夕より御指引有之、不輕御樣子。御匕醫中村文安等者御脚氣御衝心与奉診察、町醫師津田休寛は脾胃虛与奉診候得共、御醫師中は同意無之、段々御僉議之上一昨十九日より休寛江御療治被仰付、御藥指上候處少御宜、御小水八勺計被爲通、しうきふ三粒被召上候處、昨二十日に至り段々御指重り、申下刻御指詰り、今二十一日未中刻江戸表江御大病御指重り之爲御案內、御大小將組御抱守松原牛之助早打に而發出、酉上刻頃御大切御逝去之爲御案內、御使番金谷御近習

頭大橋作左衛門早打に而江戸表〻被遣。御歳八、御實は御六也。
裕次郎様御氣色御滯被成候處、段々御指重不被爲叶御療養、今二十一日御逝去被成候。依之
諸殺生・普請・鳴物等可有遠慮候。日數之儀は追而可申渡候。
一、御家中さかやき可爲遠慮候。又者は及其儀不申候事。
一、御先祖様方御忌日御寺へ參詣之儀、當分指扣可申事。
一、右に付頭分以上之面々者、明二十二日御兩殿様爲伺御機嫌、御用番宅迄可參出候。幼少・
病氣等之人々者以使者可申越候。
右之通被得其意、組・支配之人々〻可被申渡候。組等之内裁許有之面々者、其支配〻も相達
候様可被申聞候事。

五月二十一日　　長甲斐守

右之趣可被得其意候、以上。

〔齊廣様御傳略等之内書拔〕
五月二十日裕次郎様御卒去、同六月九日於寶圓寺御葬式御導師相濟、野田山御墓地〻御納、
御年御六つなり。御法號は香隆院殿梅胤總賢大居士と奉るなり。御緣女は紀伊中納言治寶卿
女豐姫様文化元甲子年正月十九日御緣組之台命有之なり。香隆院様御生母於伊尾の方は竹村

大九郎安陣が伯母なり。

「御觸留」

裕次郎樣御逝去に付、普請・鳴物等遠慮日數之儀、追而可申渡旨、先達而相觸候通に候。依之不押立普請は、昨廿一日より廿七日迄七日、諸殺生・鳴物等は來月十一日迄御忌中日數、遠慮可仕候事。

一、御家中之人々、御目見以上月代剃申儀、昨廿一日より廿七日迄七日、御步以上は三日遠慮可有之候。又者は不及其儀候事。

御附之面々、頭分は五十日、平士等御目見以上三十五日、御步並御居間方等坊主者廿一日、足輕小頭以下二七日月代剃申間敷候事。

　但、本文日數相濟候共、御葬式相濟迄は相扣可申候。

一、頭分以上之面々、當廿七日御兩殿樣爲伺御機嫌、御用番宅江可有參出候。幼少・病氣等之人々者、以使者可申越候。

右之通被得其意――

右之趣――

五月廿二日　　長甲斐守

五月廿七日。前田利命逝去の報江戸に達す。

〔政隣記〕

五月廿七日朝、裕次郎様御氣色御指重に付而之早打御使松原牛之助、御逝去に付而之早打御使大橋作左衞門、追々江戸表江着。右に付從江戸早打御使御近習御使番今村藤九郎、(六月三日金澤着、翌四日發歸府。)幷御醫師丸山了悅(六月三日着、翌四日發歸府。)も、早打に而同日發出。就御逝去に而は御近習物頭並戸田與一郎(六月六日金澤着、翌七日發歸府、大村・淺野も同斷。)へ指急御使被仰付、從兩御廣式大村武次郎・淺野三郎左衞門指急御使被仰付、三人共同日江戸發。

一、右に付御客等多、御表向一統平詰。且普請・鳴物等遠慮日數は、追而可被仰渡旨小屋觸有之。

一、右に付、於竹之間頭分以上爲伺御機嫌、御帳に付。

一、左之御覺書奥村左京殿御渡被成候條、組・支配之人々江可申談旨等之以添書、御大小將横目山本又九郎より頭々江廻狀有。

付札、御横目江

御家中之人々御目見以上月代來月四日迄七日、御歩幷御歩並は同二日迄五日、足輕・小者は當廿九日迄三日遠慮可致事。

一、御表向御忌中佳節・朔望に候とも平日之通に候事。

右之趣被得其意、組・支配之人々へ可被申聞候。組等之内裁許有之人々は、是又夫々申聞候様可被申談候事。

五月廿七日

五月廿九日。德川家齊、前田齊廣に使を遣はして利命の逝去を弔せしむ。

〔政隣記〕

五月廿九日、今般就御不幸相公様御朦中御尋之御奉書相渡。同夜宿繼を以江戸發、六月八日曉金澤へ到來。右御禮之御使者御馬廻頭人見吉左衛門ゟ被仰付、同月十一日金澤發足。

同日、今般就御不幸上使御奏者番堀内藏頭殿を以、從公方様・大納言様被爲蒙上意。御前少々就御不例、御名代織田出雲守殿に而、御例之通夫々御都合克被爲濟候事。

五月。郡方の者の空米商賣を行ふことを禁ず。

〔筒井舊記〕

近年於金澤紛敷空米商賣多、曁支配所之内に茂當町米中買与申談、右米商賣いたし候者も有之躰粗及承候。右者御郡方に而有之間敷儀に候。米下直に向候得者過分損料有之、詰り候所者身を隱し候族も出來、且は米方作法も有之由故、無據他方より懸合に可相成も難計候。當

活は寛潤の意なるべし

町抔に而、中にも身上相應實躰之中買は、危き米取扱不致、先は町方之儀は兎も角、御郡方之者致米商賣候儀は甚不相當、身元相應之者茂終には身代致零落候。全躰御郡方之者も活つ成風俗に相成、全盛を人先江越可申存心故、暫之内に過分之得利德度、且欲心を以右樣之働、容米抔を取扱、甚危き働に而所謂山師与申なし候類に候。且又近年變作等に而、御郡方も不景氣至極之時節に候所、右等之働相募り、一躰潜上に相成候儀、彌難澁之基に候。此處輕き者に而茂不存付儀は殘念之儀。一人之出奔たり共不輕大切之儀に付、於拙者共茂致辛勞儀に候條、是以後心得違之者無之樣、末々之者に至迄茂不相洩樣急度可申渡、尤村役人共江茂制方能々致會得候樣可申渡置候。斯申渡候上心得違之者於有之は、其方中可及不審候條、會得之儀肝要に候事。

丑五月　　　　高田彌左衛門
　　　　　　　菅野兵左衛門

能州四郡御扶持人・十村中

六月八日。百姓の法寶物を觀る爲寺院に參詣するを禁ず。

〔郡方御觸〕

當年親鸞聖人年忌相當候に付、所々於寺寶物相弘候由、其内に茂追付越中富山極性寺寶物、

御郡中寺庵に而相弘候様子に候。若村々之者共參詣致候者茂可有之与存候間、此段村々役人共江申渡、參詣等之趣相制、一人茂不罷越樣可申渡置候、以上。

丑六月八日

菅野兵左衞門

高田彌左衞門

能州奥郡十村中

六月九日。前田利命の葬儀を寶圓寺に行ふ。

〔政隣記〕

六月九日、香隆院樣御葬送、今朝六時頃金谷御廣式御出棺、於寶圓寺御葬式夫々被爲濟、四時過同寺御發棺、野田山御廟所江被爲移、御納方相濟、御供之人々山城殿等夕七時前歸宅。

〔御觸留〕

御横目江

御葬式之刻、金谷御廣式より寶圓寺、夫より野田迄御供之人々、且又右之節曁御中陰御法事之節、御寺江罷越候役人・御番人等御步並以上共外、都而上下着用之人々者、白帷子・石餅無地淺黄上下着用之事。

但、御寺江相詰候頭分以上之面々者、長袴可致着用候。

一、御法事之内拜禮に罷出候頭分以上、白帷子・長袴之事。

但、長袴者何色に而茂可爲勝手次第事。

一、裕次郎樣御附之人々者、御側小將を初、御中陰滿散日拜禮罷出候人々、白帷子・半上下之事。

但、上下者何色に而茂可爲勝手次第事。

一、御三十五日・御四十九日・御百ヶ日御法事之刻者、御寺詰・拜禮共、頭分以上染帷子・長袴、平士者染帷子・布上下之事。

但、何色に而茂勝手次第之事。

右之通夫々申談可仕候事。

五　月

六月十四日。前田利命逝去せしを以て赦を行はしむ。

〔金龍公記史料〕

六月十四日令爲香隆公子中陰法事行大赦。

八月十三日行赦五十三人。

六月二十日。御林山の竹木を盜伐したるものある時の處置を定む。

[郡方御觸]

能州四郡一村一ヶ所御林山、往古より之御林山十五ヶ所、幷永光寺御取揚山唐竹御藪之內に而竹木盜伐有之節、山廻足輕見咎候歟、何に而茂、其村より斷出不申分者、一作一歩過怠免申付、尤伐人相知候得者御定之通禁牢可申付候事。

一、御林山等之內竹木盜伐有之節、伐人相知不申、其村より斷出候得者、一作一歩過怠免之內五厘用捨、五厘過怠免申付候。伐人指出候節者、五厘之過怠免も用捨可申付候事。

一、御林山等番人之儀者、村方より給米茂宛行置候儀に候得者、嚴重に相守可申儀、萬一盜伐之竹木有之節者、早速村役人江斷可申筈に候。等閑に致置、外より於相顯者、詮議之上山番人禁牢申付候事。

右之通今般御林山等之內伐木有之節、取捌方御定相極候間、其段村役人幷山番人江不相洩樣可申聞候、以上。

丑六月二十日　　御用番　堀　與八郎

山田三郎左衛門　不在合

奧郡十村中

六月。江戸に於いて禁牢の後放免せられたる者の處置に就いて議す。

文化五年閏六月の條參照

〔公事場奉行相勤候節職事日記〕

付札、公事場奉行江

於江戸表禁牢被仰付候者出牢之節、其主人相請罷在候而も、主人貪着不仕、出牢之者は割場より御門外へ追拂候御格に候由。右は御定等有之、前々より之御格に候哉。且自然江戸表に而惡事有之節、右追拂之儀公邊向譯立居候哉。御國は公事場より追拂之儀御屆有之儀与は相違いたし候事故被相達候間、江戸表之樣子承糺可申達旨等、先達而各紙面被指出候に付、江戸表割場奉行手前遂僉議候處、出牢者御門外江指出候儀、舊記等相しらべ候得共、御定等も相見え不申。尤いつ頃より与申儀も、年舊き事故相知不申、前々より右之御格合に相成居候旨等、別紙覺書之通に而、御國へ罷歸候儀不指支趣に候。且又此表に而之追拂は、御領國追拂之御刑法故、若於他國惡事等可致哉与公邊江御屆置有之候。江戸表禁牢者は、御刑法は禁牢に而相濟、月數等相滿出牢之節、乃至此表に候得ば主人江可相渡處、江戸表に而は主人相請罷在候而も貪着不仕、御門外江指出候譯に候得ば、此表追拂者与は樣子違候。併右御門外江指出候茂、御締方如何敷与申儀にも候はゞ、猶更僉議之趣可被申聞候。則別紙相渡之候事。

丑　六　月

七月七日。江戸に於いて御先手物頭堀萬兵衛の若黨酒狂を以て小者を傷害す。

〔政隣記〕

七月七日夜於江戸、御先手物頭堀萬兵衛家來若黨中谷與太夫と申者、於御小屋萬兵衛家來小者久內与申者之肩先へ脇刺を以切付。其夜主人萬兵衛は泊番之處、右與太夫御殿物頭溜緣際迄罷越、右等之趣萬兵衛へ直に及屆候に付、萬兵衛儀樣子承受候內、與太夫儀脇刺を拔、其身之喉江當之少々疵付候に付、其儘萬兵衛押留、取締御小屋へ爲引取候。右與太夫之疵は至而少々之儀、久內疵も死申程之事に而無之、翌八日夕爲檢使御歩横目兩人罷越、無異儀相濟候事。

但、右外に何等之趣意も無之、全酒狂之躰与云々。

七月。能登奧郡より每年浮塵子を生ずる田地の面積を上申す。

〔上田舊記〕

このぬか虫附候田地、魚油を入候得者虫散可申由に而、文化二年右虫附田地歩數書上可申分改作所より被仰渡、當右虫附候田地歩數書上方左に記。

覺

一、五十一萬歩程　馬場村　喜左衛門組　一、三十八萬歩程　走出村　友右衛門元組
一、三十三萬歩程　大澤村　內　記　跡　組　一、七萬五千歩程　稻舟村　藤　太　組
一、十二萬歩程　鈴屋村　九郎右衛門組　一、五萬歩程　折戸村　源　助　組
一、六萬五千歩程　飯田村　三郎右衛門組　一、十一萬歩程　宗玄村　忠左衛門組
一、七萬歩程　鹿野村　恒　方　組　一、十七萬歩程　鵜川村　爲　次　郎　組
一、三十二萬歩程　中居村　三郎兵衛組
〆二百二十萬歩程
右こぬかゝうぬか虫与唱候虫付候節、魚油を灌候得者虫散、痛等無之樣子に付、右虫付申御田地歩數書上可申旨被仰渡、奉得其意、奧兩御郡組々申談、例年大抵うぬか虫付申歩數僉議仕書上申候。尤其年柄に依多少可有御座候得共、大圖右歩數に應、魚油手當被仰付候はゞ相辨可申与奉存候、以上。
文化二年七月　鵜川村　喜三兵衛
折戸村　源　助
鹿野村　恒　方
御改作御奉行所

魚油浦方に貯有之哉、直段等僉議仕書上可申旨被仰渡、奉得其意、組之浦方僉議仕候處、年内より五月中迄鯨・いるか・さめ・ふぐ等之油出來仕候得共、燈油に相用、當時賣買之油無御座候。爲其私共より御達申上候、以上。

丑七月

鵜川村　喜三兵衞
折戶村　源助
鹿野村　恒方

御改作御奉行所

八月二日。他國流浪人の能登に徘徊する風聞あるを以て警戒を命ず。

〔筒井舊記〕

當盆前より越中筋ゟ他國流浪者大勢入込、放火・夜盜之沙汰に而、所々騷ヶ敷樣子專取沙汰いたし候處、前月廿五・六日頃より右之者共能州ゟ入込候樣專致風聞候旨、村役人共より相斷候に付、當所幷近邊高田村喜三次・武部村四郎太夫兩組ゟも縮方爲心得申渡候。依而共方共組々、村方・山入迄茂不相洩樣御縮方嚴重に申渡、若右躰之無心元者致徘徊候はゞ、宿廻之藤內共に爲召捕、所口役所ゟ可指出候。右之趣得其意、先々急速相廻、留より可相返候、以上。

丑八月二日　神尾孫九郎

奥兩御郡外浦十村中

八月五日。藩主等の忌日に當るとも河川漁撈者にその業を營むことを得しむ。

〔御用留〕

才川魚殺生請負人油屋長右衞門、幷下付商賣人共、過分川役銀指上殺生仕候所、去年鳥屋共手前被仰渡之趣も御座候に付、何と無御日柄には相扣申候。是迄は川下等も手廣御座候處、去年來川方嚴重之被仰渡も御座候故、彌手狹に相成候上、毎月餘程之御日柄指除、曁時々渇川等に相成、彼是殺生不仕日多御座候而者、畢竟上納方も指支難澁迷惑仕儀に御座候間、獵師之振を以、是迄之通御日柄にも殺生仕候樣可申渡与奉存、川請負人之儀者何之被仰渡も無御座儀には候得共、右等之儀私共切申渡候儀も難仕候之間、一往御達申上候、以上。

七　月　井上井之助

若年寄衆四人樣

才川魚殺生請負人　下傳馬町　油　屋　長右衞門

右下付商賣人

横傳馬町　小松屋藤兵衛　　千日町　淺野屋吉兵衛
才川橋爪　八尾屋彌兵衛　　河原町　釘屋與右衛門
川上新町　越中屋善八　　下傳馬町　油屋長兵衛
法船寺町　太郎田屋次右衛門　　才川々除町　紺屋平助
才川々除町　村屋八郎右衛門　　都合十人

右才川請負人幷下付之者共名書御達申上候。せがれ幷雇之者も罷越候儀に候間、可相成儀に御座候はゞ、鳥屋共同事札御渡被下候様仕度奉存候。左候はゞ紛敷殺生人入込不申、御縮方にも宜御座候間、此段御達申上候、以上。

七月　　井上井之助

若年寄衆四人様

〔御川留〕

一、川殺生人御目柄に罷越候儀、高構之儀は御家中構場に付而之儀、川方は右とも違候儀に而、敢而御貪着も無之儀与、一通若年寄衆聞濟有之に付、猶更御目柄に餘人も罷越候儀抔有之、紛敷事も可有之哉に候間、私共切札渡置申候間、御横目方江も一應被仰入置候様に致度、改方に者私共より申遣置可申段、岡部宗助を以御達申置、明十一日御横目所へも可被仰

入置旨に付、左候はゞ十日夫々可申渡旨宗助迄咄置、今日夫々申渡候事。

但八月五日治定井上承之。

八月十二日。諸士の河川に漁撈を爲すものは役銀請負の川師より鑑札を受くべきことを命ず。

〔政隣記〕

下傳馬町油屋長右衞門与申者、當年より七ヶ年之内才川魚殺生請負申付置候。然處前々御家中之人々初、都而自分に致川殺生候人々者、川師方へ相達見合札を請可致殺生筈に候處、當三月迄暫く請負人無之、明川に相成居候故、諸人勝手次第致殺生、今以不苦事之樣に相心得候者も有之、川役銀不指出、川師致難儀候間、投網・小目網・流網・鮎飛網・ねり網幷片瀨簗等に而致殺生候人々は、川役銀等定之通指出、札を請候樣致度旨、町奉行申聞候條、以來右致殺生候人々、都而札を請候樣相心得可申候。

右之通被得其意、組・支配之人々江可被申渡候。組等之内裁許有之面々者、其支配へも相達候樣被申聞、尤同役中可有傳達候事。

右之趣可被得其意候、以上。

八月十二日　　　　長甲斐守

吉田八郎太夫殿

八月十三日。前田治脩尙在國二十ケ月の請を許さる。

〔金龍公記史料〕

八月十三日。太公因疾尙滯在于國二十月之請見許。

八月廿七日。前田齊廣、從來發したる命令の當否を上申せしめ、その不可なるは之を改めんとすることを告ぐ。

〔於江府御親翰帳之內書拔〕

八月廿七日

一、左之御親翰藤九郎を以被渡下。

御指札、奧村左京殿

別紙差遣候條、披見候上金澤同席中ゟ可被相達候。尤不時に遣候に者および不申、明後廿九日出に可被相達候、以上。

八月廿七日

奧　村　左　京殿

猶々別紙之趣、尤此表に而も夫々被遂僉議、相改ゟ可然品は無泥可被申越候、以上。

入國以來申渡置候事共、其砌急速に申出候儀抔も有之候故、其内に者不相當事も可有之哉与存候。依之今般改而申聞候間、各得与被遂僉議、不宜儀は勿論、無左与も若後々に至り不可然品々者、相改候存寄に候間、格別に被遂僉議、其御急度申渡置候事に而も、無泥可被申聞候。其上にて可遂思慮候、以上。

八月廿七日

年寄中

〔御勝手方諸事覺書〕

一、江戸表より御用番江到來之紙面寫。

御入國以來被仰渡置候事共、其砌急速に被仰出之儀抔も有之候故、其内に者御相當不仕事も可有御座哉与思召候。依之今般改而被仰聞候間、得与僉議仕、不宜儀は勿論、無左とも若後々に至不可然品々は御改被遊候思召候間、格別遂詮議、其御急度被仰渡置候事に而も、無泥可申上旨等、御親翰を以被仰出候趣、先達而被仰越候。右之趣御勝手方甲斐守等江茂可申談与存候間、猶更御序を以御伺御申越可相成候、以上。

九月四日

横山山城判

奥村左京様
本多勘解由様

八月廿八日。石川御門櫓下の修理急に成就せざるを以て諸士通行禁止の令を解除す。

〔政隣記〕

付札、御横目江

石川御門續御櫓下石垣御普請被仰付、當春より右御門往來指留置候處、右石垣御普請今三・四年も相懸り候に付、右御門往來も急に難相辨由に候。左候而者右御門向寄之諸役人等、短日之砌抔相廻り候而者、指急候御用有之節おいづから指支も可有之儀に付、格別御普請奉行遂詮議、來月四日より石川御門先往來不差支候。乍去右之邊御普請所へ圍取り道橋も無之候間、往來之人々其心得に而罷通、猶更從者等末々迄込合不申相通候樣可申渡候。且又下馬・下乘も右に准じ、假圍外に而可致候。併嘉節・朔望幷御弘等に而出仕之面々者、人多に召連致混雜候條、是迄之通河北御門より登城可有之候。右之趣一統不相洩樣可被申談候事。

八月二十八日

右御城代又兵衛殿被仰聞候旨等、例之通添紙面を以御横目中より廻狀有之。

閏八月八日。百姓等の賴母子に類したる所行を停止せしむ。

〔加州郡方舊記〕

一、賴母子之儀者元來御停止之儀に候得共、時節柄に付無據節者、一門等へ一通り才覺等相賴申儀も相泥、無是非右に似寄申趣才覺等仕儀、當時一統之儀に者候得共、右之譯合に付役儀等相勤候者は急度心得可有之所、御郡方之者共儀令違失、十村共等之內衞与續も無之百姓共へ相賴、賴母子に似寄候調達等致候。依而夫々手當可申付候も如何敷事に候得共、累年右風俗之處今更相顯候者を嚴重申付候も如何に付、先是迄之儀者令用捨、以後之儀申渡候。十村之儀者別而支配之者風俗も可相改所、其身右躰不筋調達等仕族に而者、下々穿鑿も不行屆筈、誠に不埒之儀に付、是以後若右躰之儀企申者於承者、無用捨急度申渡儀に候間、此段譯而嚴重十村共へ可被申渡候。尤新田裁許・山廻り之儀も、人支配無之候得共、役儀も有之儀に候得者、十村共同樣以來之儀急度相心得候樣、是又嚴重可被申渡置候、以上。

閏八月八日　　御算用場

杉山新平殿

宮崎久兵衛殿等廻狀

閏八月十四日。物品を拾得したる時は往還に札を建てゝ公告せしむ。

〔郡方御觸〕

支配所之者ひろひ候品物有之節、役所江直々指出、尤是迄札建置候儀も無之候得共、以來拾物有之節者、其向寄往還等に日數七日札建置可申候。勿論主在無品共、前々之通役所江指出受指圖可申候。且海上拾物之儀者、是迄之通相心得可申候、以上。

丑閏八月十四日　　高田彌左衛門

能州四郡十村中　　菅野兵左衛門　不在合

閏八月廿二日。前田齊廣夫人高須侯邸に赴き病と稱して歸らず。

〔政隣記〕

閏八月廿二日

今月十一日御前樣五時御供揃、常御行列に而市谷御邸へ被爲入、同日御戻可被遊筈之處、就御不例御逗留。依而御供之人々一たん罷歸、御戻之御樣子相知れ次第御迎に罷越候筈。且御逗留中彼邊火事有之候節、御供之人數於市谷夫々御手當有之に付、從此方樣御供御人數不被遣筈之段、奥村左京殿夫々江被仰渡。附、御醫師大高東榮被指遣候得共、御診不被仰付、且年寄女中罷越候得共、御目見不被仰付候由。

市谷は夫人の實父高須侯德川勝當の邸

閏八月廿二日。外海及び湖潟に於ける諸船に郡奉行をして燒印を施さしむ。

〔加州郡方舊記〕

一、御領國諸浦共往來札を以相通候渡舟・商舟之外、外海幷內潟獵舟・川船・商船共、御舟之外者都而是以後燒極印入爲致通用候趣、今般詮議相極候に付、右極印可相渡候條、各手前へ被請取、船に不相洩樣極印爲入可被申候。尤右極印無之舟通用不相成儀に候間、以後新造出來之分者、其段當場へ被相屆、右極印可被申付候。尤今般極印入候上、舟數委曲可被書出候。且是迄船役銀十村散役裁許取立候分者、右散役裁許より極印打渡候條、此段夫々可被申渡候、以上。

閏八月二十二日　　御算用場

杉山新平殿

宮崎久兵衞殿

九月廿三日。前田光高夫人の百五十回忌法會を行ふ。

〔政隣記〕

九月廿三日、昨今於傳通院、清泰院樣百五十回御忌御法事無御滯相濟。昨廿二日は五時前之御供揃に而御參詣、今廿三日は曉八半時過之御供揃に而御參詣。同寺へ御先規之通御名代水野出羽守殿御出、御代香御香奠御備。依之爲御禮四時御供揃に而兩御丸御登城、御老中方御廻勤之事。

但、昨日者御寺詰人暮頃歸、今日は四時前一統歸。

右之通に而、廿一日より今日迄指支候に付、御客方且御用人も御步頭菊池九右衞門勤之候事。

同日於金澤如來寺も右御法會御執行今朝有之。

〔金龍公記史料〕

九月廿三日修清泰夫人百五十回忌法會于傳通院。大將軍使寺社奉行水野出羽守。參拜奠銀二十枚。

九月。諸士の家作に關する件を定む。

〔御勝手方諸事覺書〕

一、家建修理願は、何程加修理候哉樣子相知不申に付、御聞屆被成間敷事。

但、家取拂建直し候儀は、紛敷儀無之儀に候間、御聞屆可有御座事。

一、町家等に罷在、及大破難居住に付、同町家等ゟ家仕替之儀、宜家に仕替候哉、曁家大破之程茂分り不申、其内に者自由之仕替茂可有之哉に付、御聞届被成間敷事。

但、本屋敷ゟ罷越候儀は、新作は勿論、外居住家拂罷越、又者本屋敷ゟ家買戻罷越候共、本屋敷ゟ罷越候儀は不惡儀に付、御聞届可有御座事。

下札

家所持無之、一類等之内ゟ同居仕罷在候者、居屋敷ゟ家作いたし候か、又者外家求候節右同斷。

丑九月

十月八日。能登奥郡の十村等、一向宗西派の門徒騷擾の憂あるを以て警戒すべきことを通牒す。

〔筒井舊記〕

高田彌左衛門様より被仰渡候者、近年西方一向宗安心勸ゟ方之儀に付、右宗旨之者共騷敷。然處頃日越中古國府勝興寺、江戸表より御召出之旨に而致出立候。右等之儀に付猶更右宗門之者共騷立申儀可有之哉。何分此節御上之御邪魔に不相成樣取計有之樣に与、御席より被仰渡之旨に而、御郡方之儀者先御扶持人手前に而取鎮ゟ可申儀に候。尤奥・口共下々之者共騷

高田彌左衛門は郡奉行

立候儀無之躰に候得共、此末何角取沙汰有之候はゞ取計可申、併前廉より下々江可申渡儀に而者無之、其心得に而罷在候様に与被仰渡候に付、爲御承知申進候。自然右躰之取沙汰有之候はゞ、何分御取鎭め可被成候。猶更私共之内江も其段御申聞可被成候。此狀先々御順達、落着より喜三兵衞方江御返可被成候、以上。

丑十月八日

鵜川村　喜三兵衞
折戸村　源　助　不在合
鹿野村　恒　方

仲間宛所

十月廿三日。前田光高夫人の遠忌の爲に非常大赦を命ず。

〔政隣記〕

十月廿三日非常之御大赦被仰付。是依淸泰院樣百五十回御忌也。

〔職事日記〕

一、非常御大赦与一通り御大赦与は品違之趣、左之通り覺書今日御用番執筆齋藤源之丞へ渡也。

非常之御大赦与一通り御大赦与之差別有之哉之旨、御尋之趣承知仕、左之通に御座候。

一、先年は急度赦被仰付候節は、御大赦与被仰出る。
但、右御大赦には吟味未決之者をも言上仕候。然共右未決之者に而も、死刑に可當者は命御助追放被仰付、三ヶ所御構追放刑之者は爲御大赦御宥免も有之、又は爲御大赦御領國追放被仰付候儀も御座候。御領國追放以下之者共不殘御宥免御座候。尤吟味決着に而言上仕候者も、右同樣に被仰付候。
一、急度不仕、或者此節之儀故一等御用捨抔与輕き御赦被仰付候儀、先年御座候。
右御吟味未決之者、幷死刑之者は指除、追放刑より以下之者を書上候へば、御刑法一等宛御宥免被仰付候。
右之通御赦輕重有之候處、中古より御大赦幷輕き御赦之名目無御座、一通り御赦与申名目迄に而、未決之者御赦に掛り不申、罪治定之者迄御刑法一等宛御赦免御座候。元來未決之者は本刑難定者も有之候事故、何となく未決之者は御沙汰無御座事に相成候哉、何故与申儀相分不申候。
一、天明五年御改法之節、御法事に付死刑治定之者之外、爲御大赦吟味未決之者共迄も、御刑法之無差別不殘出牢被仰付候。
一、天明六年泰雲院樣御中陰御法事之節、非常之御大赦与被仰出、死刑之者を初未決之者共

迄も、不殘無差別出牢被仰付候。夫より以來重き御法事に非常之御大赦被仰付、右之通御刑法之無差別出牢被仰付、常御赦には未決之者被及御沙汰間敷旨、天明七年分而被仰出候。仍之當時は非常御大赦与常御赦与兩樣に相成居申候。右兩樣に相成候所は、先年之兩樣有之儀に相當候へ共、御助成之所は先年より結構に相成居申候。依而先年之御大赦与、當時之非常御大赦与は樣子違申候事。

右執筆齋藤源之丞に相渡也。

十月廿六日。河北郡百坂村に於いて磔刑を行ふ。

〔政隣記〕

十月廿六日下口桃ヶ坂女兩人磔被仰付。拷札之寫左之通。

はりつけ　越中高岡町　酒屋與三右衛門妻　そよ

此者意恨を以夫與三右衛門繼母之家へ火をつけ、其外盜いたすべきため老女をころすべき仕形有之所、仕損候故逃走候を召捕畢。重罪露顯之上如此申付者也。

十月廿六日

はりつけ　安江町異地借罷在候越中屋七兵衛後家　むめ

此者停止を背、男女出合之宿いたし、剩其身誰彼となじみ合、身持不埒に付存命難成儀有之

とて、幼少之子ども三人押殺、其身可相果と井戸へ入候を引上畢。重科顯然之上如斯申付者也。

十月二十六日

右に付爲檢使、御先手物頭茨木源五左衞門・渡邊久兵衞、公事場付御横目宮井傳兵衞、右場所へ參出之事。

十月廿七日。家中諸士直接に知行所の百姓を使役すべからざる前令を守らしむ。

〔異本三守御譜〕

付札、定番頭へ

御家中諸給人より不依何事百姓へ直々申付間敷、又百姓よりも給人へ相斷間敷旨等、寛政年中御定之趣も在之候處、知行所百姓へ飯米之內相拂候旨差紙面相渡、米持運候儀在之躰に付、右樣之儀は不相成御定に候へば、一圓在之間敷儀に付、猶更心得違無之樣、寛政十二年相觸候通に候。然處御家中之人々を初、收納米之由にて、知行所百姓を相賴、批屋等へ米賣渡候人々も有之、しらべ方紛敷、米縮方指障候旨、御算用場奉行申聞候條、以來右躰之儀無之樣嚴重可相心得旨、組・支配之人々へ可被申渡候。組等之內裁許有之面々は、其支配へも相

達候樣可被申聞候事。

右十月廿七日御用番甲斐守殿御渡、武田喜左衛門廻狀。

十月。河北潟の漁撈に關する細則を定む。

[河北郡內獵業相用候網員數長短並役銀取立方定]

八田村杪漬之事

一、杪漬方五十なぎ限りに相極、杪數六百ヶ所限り相配漬置可申、役銀一なぎに付五匁五分宛毎年取立可申候。杪漬場所之儀領切差支候はゞ、何村之前に而も漬申儀毎年九月中書出可申候。但本文定之通之外不時に漬申儀有之候はゞ、他村より可及斷、其上に而急度可申付候。

根縣獵之事

一、才田村に三ヶ所限、大崎村に二ヶ所限り与相極、一ヶ所之間數十二間宛与指定可申候。杪伏方之儀、其ヶ所之水面深淺により杪數伏可申事。兩村共伏方相違有間敷候。場所之儀大崎村に而者、本村より新村与之前中程に相究、才田村に而者、大崎村前に一ヶ所、太田村前に二ヶ所相究可申候。右向後少も場所替不致樣定置可申候。役銀之儀毎年一間に付三分宛取立可申候。

鯡網之事

一、内日角三統在來之通可相用候。網長八十尋を限、袋幅四幅、袋口左右三十間程之間六幅、袋二尋半廻り六幅相究可申候。

一、北間村四統在來之通可相用候。網長百尋を限、袋口五幅、中六幅、長三尋半、横廻二尋半に相究可申候。右役銀一統に付十二匁毎年可取立事。

卷網之事

一、荒屋村に五統、八田村十統限与相究、是迄之通相究可相用候。網大さ之儀四十六尋を限、船二艘に而獵業仕、是を一統与可相極候。網目者九節限、夫より細かなる網一圓相用間舖候。役銀者一統に付十一匁八分一厘宛毎年取立可申事。但是迄四艘に而卷揚候大網者捕揚、以來一切差止可申事。

阿兎鯡網之事

一、大根布村・荒屋村・八田村・大崎村・宮坂村・向粟崎村・内日角村・室村・西蚊爪村・北間村・川尻村、是迄之通可相用候。網長八尋三尺、横一目織布八幅限、是より大成分堅相用申間敷、役銀一統に付毎年一匁取立可申事。

海老網之事。但八田村にてはあまさぎ網与相唱候。

一、八田村・大根布村・荒屋村・宮坂村・室村・内日角村、是迄之通年中勝手次第相用可申。網長一丈八尺より七尋迄、横三尋二尺限りに可仕候。役銀一統に付、毎年二匁宛取立可申事。

白鰷之事

一、大根布村・内日角村・八田村・西蚊爪村・北間村相用可申候。網長九尋、横もじ十四幅限りに可仕候。役銀一統に付毎年一匁宛取立可申事。

小網之事

一、長二間二尺限り、横二尋限り、十月より正月を限り可相用候。尤船一艘宛散々猟業可致、ならべ引堅相禁じ可申候。役銀之儀者取立申間敷事。

おり引網之事。但五郎島村に而は追鰷網与相唱候。

一、内日角村・西蚊爪村・五郎島村・北間村、是迄通可相用候網、長四尋、横もじ七幅限り、六月より九月迄可致猟業候。役銀之儀者不及取立事。

川さす網之事

一、大根布村・向粟ヶ崎村・西蚊爪村・北間村・大野村・洲崎村・粟ヶ崎村・五郎島村に相用可申候。網長七十尋限、横一尋、網目十節限り可仕候。役銀不及取立事。

持網之事

一、是迄之通五郎島村・大野村・大根布村・粟ヶ崎村・八田村・向粟ヶ崎村可相用候。大潟に而は混同、其餘者領切に可相用、無役之事。但潟縁村々之内、持網是迄所持之分、其領切陸より持候儀は不苦。船に而持候儀堅不相成候事。

投網之事

一、是迄仕來之村々、網九尋を限り相用可申候。是より細かなる網堅相禁、何方之者に而も取扱候はゞ、見付次第捕揚可申候。尤不及役銀事。

立袋獵之事

一、粟ヶ崎村・五郎島村・大野村領切に相用可申。尤不及役銀事。

一、鯰釣・蜆貝・追狩獵之儀、是迄仕來之通獵業可致候。尤不及役銀事。

うなぎ網之事

一、北間村・西蚊爪村仕來之通相稼、役銀一人に付一匁宛毎年取可申。尤人數毎春書出し可申事。

うかひ本のまゝ

一、致獵役銀無之村、うかひ並ふびすき之儀者格別、持網等獵業に似寄候儀堅不仕樣可相心得候。若相用申儀有之候はゞ、獵師共見付次第取揚可申事。

一、前段網數等相究候品々、限數之內相減申候節者、斷次第役銀定之通退轉可申付候。重而

出來致候節、是又斷次第限數迄は承屆候事。

右之通今般相改申渡候條、村々獵師急度相心得、此外獵業致間敷、相互に吟味いたし、其村に無之網等相用候はゞ取揚可申斷。如此遂詮議申渡以上、紛敷網を以致獵業候村々有之を見咎不申、致用捨於置、其儀相現候はゞ、右致用捨候村々も急度相咎可申候。且又前掻之儀は元來御停止之儀に候所、近年似寄候網相用候者も有之躰聞候條、此儀も前條之通嚴重に申渡、都而紛敷網等見請候はゞ、少も無泥取揚可申斷候。勿論潟縁鳥に障候場所に而、網用不申樣可相心得候。是等之趣村々役人之儀は不及申、此帳面村々に寫取、獵師共人別に能致會得相聞候樣嚴重申渡、尤人別請書取立可指出候、以上。

文化二丑年八月　　　　御郡奉行

　　　　　　　　　　　改作奉行

淵上村　源五郎

相合谷村　喜兵衛

森元組才許

酒見村　八三郎

南森下村　金太郎

北川尻村　市十郎
森　村　市十郎
白尾村　理右衛門

十一月朔日。金澤城土橋御門の工事竣成したるを以て通行を許す。

〔御觸留〕

御横目へ

土橋御門御造營就出來、來月朔日巳の刻より、如最前右御門往來不指支候條、夫々一統不相洩樣可被申談候事。

十月廿八日　　前田伊勢守

十一月十一日。村々貯用林の取捌方を定む。

〔眞舘留帳拔書〕

村々貯用林枝下幷下草苅取、或者損木等伐取方取捌之儀御窺申上候處、御聞届に付、御裏書之小紙別紙相廻候間、御承知可被成候、以上。

十一月十一日　　本江村　惣　助

仲　間　宛　所

近年山方御仕法に付、村々貯用林一ヶ所宛相定、此分十村支配被仰渡置候。依而已後取捌方之儀左に申上候。

一、貯用村林之儀は、其村非常手當に可仕ため立置申儀に候得ば、御林山同事縮方嚴重為相心得、若盗伐仕候者御座候はゞ、組十村・廻口立會詮議仕、御郡御奉行所へ申上、急度御咎被仰付候樣可仕儀に奉存候。

一、松枝下し・下草苅取之儀願在之砌、書付爲指出、組十村見分、願之通相違無之候はゞ、廻り口御扶持人へ申遣、願書付に組十村・廻り口御聞屆之致裏書、枝下し・下草苅取爲仕、追而跡山見分之儀、組十村手代指出可申候。

一、立枯・風折・根返等之損木出來、伐取願出候はゞ、組十村見分、廻り口御扶持人へ相達、廻り口罷出立會爲伐取、伐木伐廻り、組十村極印を入可申候。

但、風折・根返等に而人家・往還道或は御田地へ指障り申節は、組十村より早速爲伐除置、廻り口御扶持人へ相達、廻り口立會に而極印を入可申候。

一、無據品御座候而松木伐取度段願出候はゞ、書付取立、組十村より廻り口御扶持人へ委細申達、無據品精誠相糺、隨分木數多く伐取不申樣成限り詮議を詰、願書に聞屆之木數、組十村・廻り口連名裏書仕、尤立會伐渡、組十村より極印を入可申候。

一、前段之通無據趣在之候歟、或は損木に相成伐渡候はゞ、木數見廻り、組十村・廻り口御扶持人連名之書付を以、追而御郡御奉行所へ御達可申候。

右貯用村林取捌方之儀、私共詮議之趣御窺申上候、以上。

丑閏八月

本江村　惣助
武部村　四郎太夫
鮟目村　五兵衛
高田村　喜三次

御郡御奉行所
御改作御奉行所

表書之通可相心得候、以上。

高田彌左衛門
菅野兵左衛門
澤崎源太郎
吉田兵馬

十一月十四日。諸士困窮するを以て救助の方法を議す。

〔御親翰留其外密事暨内廻状留〕

御朱書物寫左之通。

紙面逐披見、段々申越候趣令承知候。其方共存寄之趣尤之儀に候。當暮一統難澁之程彌令推察、先以寢食不安之事に候。しかし其方共存罷在候通り、時節柄之事故、手前幾重にもおもふとも、中々救方不行屆、別而心痛之至に候。乍去此儘に有之候而は、勤仕取續之程難計躰に相聞候付、何とか救方之手段も可有之哉、何分にも遂僉議申越候樣、先頃金澤表年寄共に申遣置候。先此段申遣候。何れ共其方共心付之趣は、聊無泥可申聞候。替存寄有之人々は、人別に成共可申越候。將又先達而其方共心付に而、組之人々勝手取續仕方之儀も相立置候得共、申越之族に而は其詮も無之哉、此儀は少辨兼候。組々面々難澁之儀も、種々樣子も可有之事に候。彼是無油斷、其方共深切に指引可有之候。尤此儀は不及申事に候得共、序にまかせ申遣候、以上。

口達之覺

當年米價別而下直に付、御家中一統難澁之處、金銀融通無之、必至与指支候に付、何とか御裁判御座候樣仕度旨、先達而申上置候處、御上御難澁之御時節故、容易御取扱は難被成候。乍併私共内存之趣如何樣に存付罷在候哉、可申上旨被仰聞之趣奉承知候。先達而御達申上候

趣は、當時世上之樣子御達申上候儀に而、此儘被指置候而は人々勤仕にも指障候場へ至り可申哉与奉存、其段申上候。然共當時御時節之儀御座候間、御救等之儀奉願候儀奉恐入罷在候に付、品を定候而者不申上候得共、此度御內分被仰聞候儀に付、私共內存之趣申上候。當年作方申分も無之樣子承及申候間、何卒一統御借知一作被返下候儀に御取計可有御座哉に奉存候。世上一統指支候儀被聞召、御上より之思召を以被返下候はゞ、格別一統難有可奉存儀に奉存候。此儀も私共より相願申に而は無御座候。如此之年柄格別之儀御座候間、右等之御取計も御座候はゞ、一統思召通心服仕、末々通用之所も自然に解可申哉に奉存候。御尋に付、私共內存之趣御達申上候事。

丑十一月　　　　　　　　　　　　　御馬廻頭

先達而奉指上候紙面に御朱書被成下、謹而奉拜戴候。段々申上候趣御承知被遊、私共存寄之趣尤之儀に被思召候。當節一統難澁之躰御推察被遊、先以御寢食不被爲安候。併私共存罷在候通、御時節柄之事候故、御前幾重に被思召候共中々御救方不被爲行屆、別而御心痛被遊候。乍去此儘に有之候而は、勤仕取續之程も難計躰に被聞召候に付、何とか御救方御手段も可有之候哉、何分にも遂詮議申上候樣、先頃金澤表年寄中ゟ被仰出置候。先此段被仰下、何成共私共心付之趣は聊無泥可申上候。替存寄有之者は、人別に成共可申上候。將又先達而私

其心付に而、組之人々勝手取續仕法之儀も相立置候へ共、申上候族に而は其詮も無之哉、此儀はちと御辨筆被遊候。組々面々難澁之儀も、種々樣子可有之事に被思召候。彼是無油斷、私共深切に指引可仕候。尤此儀は不及被仰出候事には候得共、被爲任御序被仰下候段奉畏候。當節一統難澁之程深く御推察被遊、何と歟御救方之御手段も可被爲在哉、遂僉議候樣年寄中へ先達而被仰出置候段、先以御憐愍之趣、於私共難有仕合奉存候。今般被仰出候通、此儘に被成置候而者、當暮之處必至与指支可申哉に奉存候に付、當時以之外不通用に而、及困窮指支之趣等見聞之躰申上候儀に御座候。其節奉言上候之通、何と歟御救方等之儀奉願度奉存候得共、御時節柄之儀甚奉恐入罷在候。乍去當年之儀は米價段々下直に罷成、町方金銀貸借等仕候者共及損毛に候故にも御座候哉、近來見聞不仕程之不通用に而、一統段々難澁申躰に御座候。然者當暮之儀、如何可有之哉も難計奉存候に付、先頃年寄中ゟ委細相達、何と歟裁許も有之候樣仕度旨相達候處、御上御難澁之御時節故容易難致取扱、乍併私共內存之趣如何樣に存付罷在候哉可申達与、御用番山城申聞に付、別紙之通口達書相認相達置申候。則別紙寫奉入御覽候。右紙面に相認置候通に而、外存付之趣等無御座候。町會所仕送之儀に付被仰出之趣、乍恐奉至極候。尤極難澁人之儀は、追々頭々ゟ申出候へば及僉議、町會所へ仕送申談取續申候。且又人々勝手向之儀は、難澁におよび候程彼是樣子も有之ものに御座候故、手

斐はあやと訓むべし

奉達御聽歟

前々々指支に而も、右仕遂仕候時は、難打顯斐も不申出候而は相濟兼候に付、其所へ及不申人々も可有之哉に奉存候。右之族に御座候間、存外右仕遂に相成不申譯は、人々存寄も有之、且は難申出品も有之候哉、此所は如何共難申上奉存候。依之右仕遂之分、當時取續指支不申候へ共、其外一統融通不仕候に付甚指支及困窮申儀、いづれにも御家中指支候之故、町方等も速々逼迫仕、當暮之所何分にも御裁判之趣無御座而は、一統指支可申哉に奉存候に付、前段之通年寄中に相達、何とか僉議有之候樣相達置申候處、先達而御仁政之趣年寄中被仰出候由。然上は此節僉議之筋も可有御座与奉存候。

一、御朱書物幷御上包御印之物奉返上候。

一、青木與右衛門へ先達而奉□聽候趣申遣置候に付、此度御朱書之趣寫を以拜戴可爲仕与奉存候。

右御請上之申候、以上。

十一月十四日

十一月十八日。江戸廣德寺に於いて前田吉德の生母淨珠院の廿五回忌法會を營む。

〔政隣記〕

十一月十八日於江戸下谷廣德寺、淨珠院樣二十五回御忌御法事有之。

但、十二月十八日御相當之處今月へ御取越御執行也。

十一月廿二日。細小の網を用ひて幼魚を捕獲するを禁ず。

〔政隣記〕

近年潟獵業之儀、微細之網等を以、小魚より捕絶し申樣之仕業次第に致增長候に付、今般潟廻獵業方相改、夫々申渡候。依而御家中を始殺生人、其心得可有之候。且又川々瀨違抔、元川を勝手に堰留候族、掘すき抔と名付、小き引網樣之殺生も右に准堅不致樣、組・支配之人々へ嚴重可被申渡候。組等之內裁許有之面々者、其支配へも相達候樣被申聞、尤同役中可有傳達候事。

右之趣可被得其意候、以上。

十一月二十二日　　　　横　山　山　城

津　田　權　平殿

十一月廿六日。足輕及び坊主の着衣に就いて令す。

〔政隣記〕

付札、御横目江

足輕幷坊主共等近年借上に相成、衣服も絹類致着用候躰に付、向後地・他國共綿衣迄相用可申旨等、去年申渡置候通に候。然處於江戸表、御用之筋に寄無據指支之品等有之分は、夏向絹羽織着用之儀依願承屆置候。是以後者御用に付御仕着小袖等被下候分者、御仕着之品爲致着用、御貸衣類之儀も前々絹羽織等相渡候分は、以前之通被仰付候。依而足輕・小頭着服之儀は、御定之通可相心得旨、江戸表に而申渡候條、致其心得候樣一統申渡候。右に付而者、平常之儀者彌以綿衣着用、分限不取失樣に急度相心得候樣可申渡候事。

右之通足輕等支配有之面々、幷御坊主頭へ可被申談候事。

丑十一月

別紙寫之通、御用番山城殿被仰聞候條、足輕等御支配有之御面々、夫々御申渡、御組等之内右支配有之面々江、夫々不相洩申渡候樣御申談可被成候。尤御同役・御同席御傳達可被成候、以上。

十一月二十六日　　御横目

御步頭衆中　但諸頭役連名書

右御步方不相當に付不觸出之。但小頭中へ者爲承知寫令披見置候事。

十二月十一日。前田齊廣、德川家齊夫人より歳暮の祝儀を受く。

大御前は前田治脩夫人、梅の居宅はその住居

〔政隣記〕

十二月十一日爲歳暮御祝儀、中將樣ゟ從御臺樣御使御廣式番之頭長谷川藤太郎殿を以、白銀十枚・干鯛一箱・御目錄御拜受。大御前樣ゟ從公方樣・御臺樣、上使右同頭桂山三郎兵衞殿を以、御卷物等御例之通御拜領。但梅之御居宅へ上使被越也。御前樣者市ヶ谷御屋敷に就御逗留に、右御屋敷ゟ上使有之、萬端御例之通御都合克被爲濟候段、丟十四日江戸發之飛脚に申來候事。

十二月十一日。人持組三田村縫殿不謹愼を以て役儀を除き逼塞を命ぜらる。

〔政隣記〕

十二月十一日左之通、甲斐守殿於御宅、伊勢守殿御在合、御横目指引に而被仰渡。

人持組　三田村縫殿

縫殿儀不愼之趣有之、一々可被仰渡筈に候得共、其儀は御用捨被成、定火消役并小松御城番被指除、逼塞被仰付、急度相愼可罷在候事。

十二月廿二日。江戸に於いて物價高直なるを以て扶持方を增給す。

〔政隣記〕

十二月廿二日、左之通於江戸表左京殿被仰渡、青木與右衛門等より廻狀有之。

付札、青木與右衛門・中川平膳江

此表米價は下直に候得共、諸品は高貴に候。詰人一統格別致省略、質素に相暮候得共、金相場迄も當年過分に引上、彼是以別而致難澁候。例年は分限に應じ、宅々より才覺を以取寄、夫々仕拂方引足仕來候得共、當年は御國表米直段下直、其上才覺も一圓不致調達、旁以此表之諸拂方必至与指支難澁至極之段、各見聞之樣子先達而より段々被申聞候得共、一統承知之通、當時御逼迫至極之御時節に候得ば、前方より金澤表へ申遣候而も、中々御救之詮議方も一圓無之事に候。然處此節に至、段々に指支候趣共猶更被申聞、諸方よりも申出、誠以無據相聞候に付、委曲相達御聽、不時成御貸渡等可有之御時節に而は無之候得共、御逼迫之內ながら格別之趣を以、御步並以上一人扶持に金二步宛御貸渡、足輕以下江は一人金二步宛被下之候事。

右之趣被得其意、組・支配之人々へ可被申渡候。且又諸頭中へ演述、組等之人々江も申聞候樣可被申談候事。

丑十二月

十二月廿四日。諸士の困窮するものに町會所仕送銀の借用を許す。

〔政隣記〕

十二月廿四日、當幕之處世上銀支に而不通用、曁米下直等に付頭々より依願、左之通町會所仕送銀之内借用貸渡之儀、御勝手方甲斐守殿等就御聞屆、頭々より借受、夫々令配當候事。

平士　八百石以上、六百五十目宛。七百石より、六百目。六百石より、五百五十目宛。五百石より、五百目宛。四百石より、四百五十目宛。三百石より、四百目宛。二百五十石より、三百五十目宛。二百石より、三百目宛。百五十石より、二百五十目宛。百石より、二百目宛。

諸小頭新番與力　百五十目宛。但、新番小頭者平士割之通り。

御歩御知行被下置候分百二十目宛。

御切米之分　百目宛。

十二月。越中古國府勝興寺の住僧が江戸築地門跡に預けられたるを以て、能登の門徒の騷擾を警戒せしむ。

〔筒井舊記〕

古國府勝興寺儀、前月廿五日寺社御奉行脇坂中務大輔殿ゟ御呼出之上、翌曉築地門跡ゟ御預に相成候。勝興寺與力之寺庵等致上京、於本願寺邪正相糺度旨先達而願出候趣茂有之候得共、右御預に相成候趣承傳候はゞ、本願寺ゟ人多に馳登り及狼藉、又は江戸表ゟ拔々に罷越候者も可有之哉難計儀に付、猶更御縮方之儀嚴重に可申渡旨被仰出候段、江戸表より申來、則寺社奉行ゟ申渡候條、御郡方等門徒之者共ゟも、右躰之族可有之茂難計候條、御縮方之儀嚴重に相心得候樣、御郡奉行等ゟ可被申談候事。

右之通御用番年寄中より被申談候條、寫相達候條、被得其意、夫々不相洩樣嚴重に可被申渡候、以上。

十二月　　　　　　　　　　　　　　御算用場

高田彌左衞門殿

菅野兵左衞門殿

右之通申來候條、得其意、門徒共有之候はゞ、猶更無油斷制方嚴重に相心得候樣可申渡候、以上。

高田彌左衞門

菅野兵左衞門

文化三年

正月朔日。前田齊廣登營して年頭の禮を行ふ。

〔政隣記〕

正月元日。今朝六時御供揃に而御登城、九時御歸館、年頭御作法都而御例之通之旨、江戸表四日立之飛脚十七日來着告來。

正月八日。馬廻頭等町會所仕送銀の借用を許されんことを前田齊廣に訴ふ。

〔御親翰幷言上其外內密留〕

乍恐謹而奉言上候。去暮町方不通用等に而、御家中一統指支候躰に付、先達而見聞之趣等奉申上候處、被仰出之趣御座候得共、御上にも御難澁に付、御救方之御手當無御座、乍御心外有之不被及御沙汰候旨被仰出候段、御用番甲斐守申渡候へ共、段々及月迫別而調達等出來不申、必至与指支候に付、其後彼是甲斐守ゟ相達候へ共、幾重にも難及裁許旨申聞候に付、左候者去年之趣を以町會所調達銀爲組用借受、少銀に而も貸渡申度之旨申達候處、調達銀も難

承届、是非指支候はゞ町會所仕迄銀之內借受、指支之人々ゟ少々宛成共貸渡候樣申聞候に付、右銀子貸渡候趣等舊臘奉達御聽候通に御座候。去年米價下直等に而、世上不通用に相成、一圓才覺相調不申、一統指支候故奉達御內聽、且年寄中へ再往存底之趣等相達申儀に付、平士に限り不申、小身之人持・頭分之儀も指支候面々は致借用申事与存罷在候處、頭分は一圓承届不申候條、爲心得申談置候旨甲斐守申聞候。此儀私共會得難仕候。御上思召を以御救等に而御借知被返下、又は御貸銀被仰付候節は、頭分以下或何百石以下抔与有之儀も御座候。今般借用銀は町方之不調達に而、地盤難滿与申程に無之而も、覺悟相違仕候而行當り指支候故之儀に御座候へば、頭分も借用之心得に罷在候處、前段に奉申上候通甲斐守申聞に付、頭分一統不信服に罷成、彼是申合候儀に御座候。然所御小將御番頭爲組用右銀子致借用、右兩役之面々ゟ貸付申候。此儀は甲斐守より頭分は借用相成不申と之儀承及不申已前、夫々貸渡申由御座候。仍而定番頭支配・定番御馬廻御番頭より同樣借用致度旨、定番頭ゟ申出、甲斐守ゟ相達候處一圓承届不申に付、定番頭甚不信服に而、最早御役儀も相勤兼候旨申聞候段承及候に付、右樣之儀に御座候而は甚不御爲御儀に奉存候に付、定番頭彌其心得に候者、其段御用番へ心得可申達与奉存、舊臘廿六日同役共申談御城ゟ罷出居申候處、同日定番頭よ り段々存念相達候へ共、頭分借用承届候而は被仰出之御趣意与致相違候間難承届、大小將

可成以下本のまゝ

御番頭等江貸渡候儀は、甲斐守にも一圓不致承知儀、御小將頭手前に而爲支配用借受貸渡候儀に候。只今定番御馬廻御番頭江貸渡候儀承届儀、不奉伺而者難相成候旨甲斐守申渡候間、御番頭中江夫々申渡候旨定番頭申聞候。併組外御番頭・小松御馬廻御番頭抔、御小將御番頭等致借用、外頭分不相成儀甚不心服之躰に而、誓詞御前書御條目にも、金銀米錢指引合之儀不埒等無之可相心得旨毎月爲讀聞候儀、爲其頭者指引合等隨分可成□事の立不申樣可相心得候所、不通用に而指支、其上右仕迯り方銀子も不致借用候而者、指引等指支可申候。乍去平士江は貸渡有之候得共、頭分之儀は聞届無之与申儀趣意相分候へば、格別左樣之儀無之而者難致會得候。私共心得いかゞ候哉抔与相尋候面々も有之、返答も致當惑候族。右に准諸頭中不信服に而、彼是申合候躰に見聞仕候間、今般町會所仕迯り銀頭分一圓無之旨、夫々願候人々江申渡有之候處、大小將御番頭等御小將頭より貸渡候に付、諸頭中彼是申合不信服之躰に相聞え候。諸頭不信服に有之候而は、押移り下々迄不信服に可相成、左候而者不御爲御儀与奉存候に付、心付之趣御用番へ相達置候處、翌廿七日甲斐守より申聞候者、昨日御爲不可然旨同役共より相達候。右は不輕申聞に付、甲斐守存寄に而裁許も致兼候に付、外年寄中等加判之面々今日出席遂僉議候處、今般町會所仕迯り銀不致借用候に付、頭分不信服等之儀何も會得難致候。平士之儀承届候へ共、頭分之儀は常々心得も可有之儀、行當りか樣之銀子借用

之儀有之間敷儀。頭分・平士之達は此所之旨申聞候へ共、町會所仕送銀貸付候趣意は、當年米價下直暨町方不通用に而、一統指支候に付而之取扱に御座候へば、頭分・平士之差別は無御座儀与奉存候所、頭分之儀は前段申聞に而不承届与有之候而は、彌不信服に可相成儀に付、重而同役共一統罷出、右之趣申達、畢竟か樣に御座候而、不信服に相成候而は不御爲儀故、心付之趣段々相達置候儀に御座候。私共より相達候儀与趣意相違仕段申達置申候。然所表小將御番頭支配之人々へ貸付候儀、御用番江相達候處、御横目之儀は難承届旨申渡候へ共、段々存念之趣相達候哉、御表小將横目之儀承届候躰に承候。夫に付舊臘廿九日定番頭一統罷出、先達而御大小將御番頭等之外は頭分借用之儀承届不申旨、御用番申聞候處、御表小將横目承届候躰。左候而者支配之御番頭江申渡候趣致相違候旨、段々存念之趣種々申達候へ共、一圓承届不申に付、支配御番頭江申渡置候趣意致相違候而者、御番頭江重而可申樣は無之に付、定番頭三人共甚存念も有之躰に而致退出候所、佐藤勘兵衛、甲斐守自分に逢可申旨に而逢候に付、勘兵衛より段々存念相達候處、尤に候、依而春に相成候はゞ可承届旨申聞候故、右存念止候旨申聞候。定番頭支配御番頭借用承届之儀承及、組外御番頭等にも又々申出候而者、寺社御奉行支配之頭分も彼是可申發与奉存候。左候而者彌諸頭不信服に可相成与奉存候。私共底意不御爲御儀与存付候儀に付、彼是及懸合申候間、始終之趣乍恐奉達御內聽置候。

一、青木與右衛門儀は、其御表に相詰罷在候儀に付、名前相省き申候、以上。

寅正月八日　　　　御馬廻頭十一人

正月八日。是日以後越中の百姓等、金澤西本願寺末寺に參集し藩に請ふ所あらんとす。

〔文化雜記〕

一、文化三年正月古國府勝興寺配下の門徒共、當八日より追々罷越、西末寺の內に罷在候旨に付、御横目足輕山村直右衛門等兩人申渡爲承合候處、右之通追々罷越、翌九日夜迄には千六百人許末寺の內に罷在、猶追々罷越候旨願之筋有之。右之通候故がさつ之爲体等者無之、隨分穩便に罷在候由に候段、右直右衛門申聞候に付、御横目足輕彼筋に繁々見廻候樣申渡候。

一　前段得御意候勝興寺配下之門徒之百姓共等、西末寺並照圓寺に相留り居申者、當十一日之所に而者、壹萬人許も罷在候樣子に候段、御横目足輕申聞候處、翌十二日五半時頃より追々引取り、晝九時前迄に、兩寺に罷在候者共不殘引退、越中筋に罷歸候段、爲相廻候假御横目足輕中村喜太夫等見屆候上、御殿に罷出申聞候に付、其段御用番又兵衛殿に御達申候。右之通引取候に付、御横目足輕相廻り申に不及旨申渡候。

正月十一日。金澤西本願寺末寺に參集したる越中の百姓等に退散を命ず。

〔郡方御觸〕

願之趣有之由に而、僧俗西末寺江人多に相集居候躰に候。御郡方之者共願之趣、右末寺江罷出申達候筋に而者無之、假令尤成儀に而も、筋合違候而者取揚候事難被成候。右願之趣有之候はゞ、其役筋江神妙に願出可申儀に候條、此段申聞、早速致退散候樣可被申渡候事。

願之趣有之由に而、御郡方之者共西末寺江致來集候由に付、御用番年寄衆より御覺書を以被仰渡候條、得其意、幾重に茂相宥、金澤表江罷越不申樣可取計候、以上。

寅正月十一日　　菅野兵左衞門

鳳至郡十村中

猶以自然取計方不相用、何与歟申儀も有之候はゞ、喜三兵衞急速出府可有之候、以上。

勝興寺門徒共願之趣有之旨に而、西末寺江人多に罷出相詰居候躰に付、別紙之通御用番又兵衞殿より被仰渡候之條、得其意、幾重にも品能申教、爲立退可申候。猶委曲御郡奉行より茂申渡候條、夫々取計可申候、以上。

正月十一日　　賀古橘江　不在合

澤崎源太郎

〔政隣記〕

正月十一日、今日御用多年寄中等下城及暮。是西本願寺宗意相違之儀に付、古國府勝興寺江戸表ゟ被罷出候一件に而、越中國門徒之族去八日より金澤西末寺ゟ群參、今日に至候而は萬人餘に相成。

〔異本三守御譜〕

文化三丙寅年正月十一日、一向宗派門徒越中國百姓金澤西末寺に集、不日して離散す。是先達て越中古國府勝興寺自得の安心不束の儀に付江戸へ被呼召、寺社奉行脇坂中務大輔宅へ被呼立詮議候上、公邊より逼塞被仰付、右一件相濟候に付、國恩を謝せんが爲金城大手迄百姓共來りて拜をなす。序に西末寺へ來る也。暫時そう動すれ共追付退散す。

脇坂中務大輔殿方にて勝興寺への書立

勝興寺闡郁儀自得の安心は本山之宗意に背不正儀に付、御吟味之上回心は致候へ共、一ヶ國同派之寺院を支配致し、殊に連枝之身分に候上は、宗意教化方祖師相承に不背様可心懸處、配下之寺院共講釋いたし候を承り、既に二途に在之上は　本山へ申立取計方も可有之所、其分に致し置、宗意安心心得違罷在候段不束に付逼塞被仰付。

此時西本願寺連枝河州久寶寺村顯證寺外に廣敎寺不屆に付、本山へ御預永押込被仰付。其外江州彦根明性寺追院被仰付事別記あり。

〔御親翰幷言上其外内密留〕

今般古國府勝興寺宗旨之儀に付、江戸表ゟ被致出府候故、右門徒共等騷合候由。然處此頃御當地西末寺ゟ、越中筋等百姓共追々相集、九千人計にも及び願之趣申出候處、相願候儀御僉議可被成候、何れにも致退散候樣、御郡奉行より十村を以爲申渡候由。仍之百姓共難有とて、尾坂下ゟ罷出奉拜、退散いたし候由に御座候。右之通末寺へ九千人計も集り候處、一統作法能、相互に嗜罷在候躰に而、客殿幷書院・小間等に致屯居申候處、疊・障子・張付抔少も損所無之、且は數千人之事故兵糧行屆兼候處、是又互に心を添平等に給之候由。餘寒者强、土民共之儀に候へば、酒抔相用ひ寒さを凌可申哉に候處、一同に申談罷在候哉、一人も酒を呑候者も無之由。於末寺年々十一月十七日佛事供養之節、大勢致群集甚騷敷候へ共、此頃相集居候中、右佛事之時分与は夥敷人數ながら、常よりも物靜に有之候由承及申候。此度勝興寺宗論一件は公邊之御僉議故、勿論當御家ゟ拘候儀は無御座、仍之土民ながら其處を奉恐、寔に禮儀を盡罷在候儀に被存申候。然ば願之趣御僉議可被成候條、歸村可仕与御郡奉行申渡之儀は、尤各樣ゟ御達申、御指圖も御座候に付而之事与奉存候得共、勝興寺浮沈之儀は、於公邊御裁

八萬人は越中の西派門徒の數歟

判等次第之儀に御座候間、各樣にも御不定に可有御座儀。乍去無御據趣公邊ゟ被仰達方等御座候故にも候哉。若此上勝興寺異變之趣等於有之は、右門徒等重而及騷動可申、其節は右御郡奉行より爲申渡候趣も有之儀故、御上を奉恨にも至り可申儀に奉存候。既右百姓共願之趣御聞屆無之候へば、投身命江戶表へ打出可申抔与申合候由致風聞候間、御僉議可被成与承、致安堵歸村仕候。然所勝興寺異議候而者、我々江戶へ罷越不申故如此与、必御上を可奉恨儀に御座候。右門徒共等凡八萬人計有之由。越前よりも右宗旨西方之者末寺ゟ相集候時分、此表へ罷出可申与騷ぎ候へ共押留有之由。將又河州・江州等西方一向宗之者共も、此方樣御領內勝興寺之儀は格別に付、此方樣より公邊ゟ御願之筋等有之宗論負には相成間敷旨、夫を力に罷在候由。虛實は難相知候得共、此間群集之內にも、江州之者餘程罷在候抔与も風說仕る由に御座候。先指當り此一件落着不仕內は、農業等にも相成不申旨申罷在候由、旁以一大事之儀に奉存候。尤各樣御油斷者御座有間敷儀は、勿論可被遂御詮議候へ共、急切公邊ゟ被仰達方之御評議御專用に奉存候。私共愚案に相考候者、御領國において勝興寺之儀は御樣子も有之儀。先以今般御城下ゟ數千人罷出及騷動候は、暫時江戶表へ相知居可申、右等之趣を以御國政に指障候に付、先勝興寺歸鄉在之、御僉議之筋暫御預り被成度与、幾度も御願被成候御事に而も可有御座候哉与奉存候。左候へば此度公邊ゟ御達方に而勝興寺歸村被致候へば、萬

代迄も御國威之程難有、御領分不及申、他國之儀も右宗旨之者は御當家ゟ奉慕樣に罷成可申候は顯然に候儀に奉存候。然ば勝興寺及異事候へば右に準可奉恨、雲泥之儀に御座候に付、是等之趣如何敷、御聞受も恐入儀に御座候へ共、前條之次第見聞仕候而者寢食不易奉存候に付、不得止事御達申上候事。

正月十六日　　　　　　　御馬廻頭

〔累年雜記〕

一、正月六日比より越中同行金澤西御坊へ詰申事、凡一萬六千人程与申事。風聞には二萬・三萬と申也。是願之趣、勝興寺樣早速御歸國有樣、左右なく者境之廻書被仰付可被下候、江戸表へ詰申度之事。金澤寺社所者不申及、孰役所茂混雜仕ると申事也。願所は寺社人は郡故、御郡御奉行より石川・河北十村中を被遣、段々詮議有之所、願之趣立紙差出し申所、願之趣早速御上へ相屆申候條、早速御當所退相歸り申樣に而、十日比より何も罷歸り、迚も前代未聞之事也。元來法義區々也。

正月二十日。鳳至郡總持寺燒失す。

〔金龍公記史料〕

正月二十日夜能州惣持寺五院中如意庵失火。坊舍盡燒。此寺四百餘年無災。今之燒亡云。

大門の間數は書損なるべし

「又新齋日錄」

文化三年正月五院之内如意庵より出火、惣持寺不殘燒失、普藏院・洞川庵迄相殘。燒失之ヶ所左之通。

一、大門二間三寸四方。

一、小門桁八間梁二間五寸。

一、山門桁八間半梁四間。

一、山門廻廊四間半・二間左右に有之。

一、廊下山門より大庫裏迄十八間。

一、浴室桁八間梁四間。

一、大庫裏桁十四間四尺梁十三間。

一、同玄關二間半四方。

一、廊下大庫裏より洞川庵迄二十一間半。

一、廊下大庫裏より侍者寮迄四間。

一、兩侍者寮桁十間梁八間。

一、廊下侍者寮より普藏院迄二十一間半。

一、廊下現方丈登り三間半。
一、現方丈桁五間半梁四間。
一、同二間四方入口板間。
一、客殿桁十七間半梁十六間、玄關廻廊三間五尺。
一、廻廊桁三間五尺梁三間四尺、客殿左右に。
一、廊下箱組四間に二間、客殿より佛殿の取附。
一、佛殿九間四尺四方。
一、無經塔二間四方。
一、觀音堂九尺に二間、三方緣有之。
一、廊下佛殿より禪堂迄折廻り十四間半。
一、禪堂六間四尺四方。
一、禪堂庫裡桁五間半梁二間。
一、廊下禪堂より維那寮桁九間梁七間、玄關二間四方。
一、廻廊維那寮より妙高庵迄二十一間半。
一、妙高庵桁十三間梁十一間半。

一、同玄關二間半に二間一尺。

一、短廊三間に五間。

一、同庫裡桁十二間半梁六間半。

一、廊下妙高庵より傳法庵迄十間。

一、傳法庵桁十二間半梁七間半。

一、同玄關二間一尺四方。

一、同短廊二間に三間半。

一、同庫裏桁九間半梁四間。

一、廊下傳法庵より如意庵迄二十五間。

一、如意庵桁十一間半梁八間。

一、同短廊二間に三間。

一、同玄關二間一尺四方。

一、廊下如意庵より淨頭迄十三間半。

一、淨頭桁八間梁三間四尺。

一、廊下淨頭より山門廻廊迄四方。

一、鐘樓堂桁三間梁二間六寸。
一、收納藏桁五間梁二間半。
一、材木藏桁十間梁三間。
一、作事小屋桁十一間梁四方。
一、鎭守白山宮拜殿桁三間梁二間半。
〆
右之通致燒失候。外に二十程坊燒不申候。

正月廿一日。江戸に於いて大聖寺侯前田利考の喪を發す。

相公は前田治脩にして在金澤なり

〔政隣記〕
正月廿七日、於江戸表飛驒守樣御滯之處御大切之旨、一昨二十六日申來に付、從相公樣爲御見廻早打御使御表小將松平康次郎、今日四時過發出、且左之通御廻文出。
附、實は舊臘二十五日御卒去与云々。
飛驒守樣御氣色御滯之處、不被爲叶御療養、去二十一日御卒去之旨申來候。依之諸殺生・普請・鳴物等、今日より明後二十九日迄三日遠慮之筈に候條、被得其意、組・支配之人々江可被申渡候。且又組等之內裁許有之面々者、其支配江も相達候樣可被申聞候事。

右之趣可被得其意候、以上。

正月二十七日　　村井又兵衛

正月廿七日。德川家齊、前田齊廣に鶴を贈る。

〔政隣記〕

正月二十七日上使御使番大久保新八郎殿を以、御鷹之鶴御拜領、御作法御例之通御都合能被爲濟。

正月廿七日。前田齊廣、足輕・坊主・小者等の作法を正しくすべきことを告ぐ。

〔政隣記〕

足輕・坊主・小者於此表御屋敷中、頭分以上之人々江對し不作法之者共有之躰に候。以後は急度相掵致時宜、尤雨天之節はあしたぬぎ、作法よろしく可致時宜候事。

右之通被仰出候條、夫々可被申渡候事。

寅　正　月

右廿七日大組頭等幷割場奉行江奥村左京殿被仰渡。

正月晦日。大聖寺侯世嗣前田利之を弔問する爲の使者金澤を發す。

是月は大盡なり

主水に前田利之

〔政隣記〕
正月廿八日、飛驒守様就御卒去、大聖寺主水殿等ゟ為御悔、従御両殿様御使番三浦助右衛門被遣候段今日被仰渡、同晦日發出二月三日歸。
同日右に付、御代香御使者御馬廻頭中村九兵衛ゟ今日被仰渡、三月三日發出、同九日歸、御香奠白銀十枚、従相公様は白銀五枚也。

二月二日。年寄中等の關川・碓氷兩關所を乘物にて通過することを許されたる報至る。

〔毎日帳書拔〕
二月二日
一、越後國關川・上野國碓氷兩御關所、年寄中乘物に而乘通之儀、御關所懸り御目付土屋帯刀殿へ御達置被成候所、御老中方へ御伺相濟、向後乘物に而乘通指支無之様、御關所預りへ御達置被成候旨に候。此段被仰聞候間、土佐守等へも可申達旨被仰出、御付札物被渡下候付、當座之御禮申上旨等左京より申來候事。

二月二日。他國の商人にして米穀を買入れ漕運せんとする者の便宜を妨

げざらしむ。

〔筒井舊記〕

御拂米幷御家中收納米、他國旅人等買受諸浦積出之節、於其所に彼是申立等を以積渡方爲及遲々候躰に而、買受人手前において費用多相懸り迷惑之筋有之、自ら御拂米直段等指障りに相成、第一御不益之筋、曁御家中之人々茂同様之趣に候條、以來右躰之族少茂無之、嚴重相心得、若御藏所江罷出候役人之內、無謂致遲參候儀於有之者、夫々及斷候樣急度可被申渡候。

一、右積出之節、諸雜用銀之分懸り物与名付、買請人手前より爲相拂候由に候。右米積受に向出帆迄之間、何々之品何程々々取受候儀に候哉、是迄取受來候分聊無間違委細に相調、帳面に仕立、積出之ヶ所々々より不洩爲書出、當月二十日限り取立、各加與書當場江可被指出候、以上。

二月二日　　御算用場

高田彌左衛門殿

菅野兵左衛門殿

二月四日。前田齊廣、西本願寺派門徒の處置に關して令す。

〔於江府御親翰帳之内書抜〕

二月二日

一、今日に而茂明日に而茂、御前御透次第左京儀御前江罷出申度御座候間、御序に申上候樣中務江申達置候處、九半時前十郎左衛門を以被召候旨被仰出候付、於御居間書院御前江罷出、左之來狀兩通共持參入御覽。紙面之通申來候。右僉議之趣は事立候儀に而御座候へ共、金澤において左樣之僉議も可有御座哉。前月廿四日出被仰出之御趣意通り申遣、右被仰出之趣申渡も有之候はゞ、左而已事立候樣成僉議之處江者至り申間敷哉にも奉存候へ共、唯今にも勝興寺手前、脇坂殿より被仰渡方により騷立候儀も可有之哉。其所者未前之儀に而難計御座候へば、自然之時之ため右樣之御手當いたし置候儀は、金澤表僉議之通に而も可有御座哉。猶更被仰出次第奉心得旨申上候處、いか樣左樣にも可有之哉、隨分穩便取計可然事に候。猶御考可被遊候。いづれにも金澤表江之返書相調可入御覽候。將又相公樣御噂被爲在候儀に付而、又兵衛よりの紙面も入御覽候處、御丁寧之被仰出与思召候旨等御意に而、來狀は被遊御留置、追而可被返下候旨御意に付、及御請退去之事。

西方一向宗安心一件之儀に付、先般勝興寺御呼出有之、猶又御糺明之上近々に者浮沈之御取捌にも至り候はんと之儀に付、御領國之内越・能之民間愚癡文盲之者共、今度御當國西末寺江

人多に集、寺社奉行抔より捕候は一萬も有之由に御座候。然處右人數籠り居申には似合不申、殊之外人々行儀正敷、尤無用之高聲も仕不申、質素至極に而、夫々引退候跡損處等も無之、畏り居申候躰之由、先々より申聞候。尤其時々町飛脚急便を以及言上候通に而、先是迄之處は可也に取治り居申候。尤此末迚も、御算用場奉行等より段々申渡候趣も有之候間、左而已之儀は有之間敷樣にも存候へ共、斯く申時は、勝興寺儀は安心に本願寺殿被心得方与相違之儀も有之躰に候へば、假令無難に御請印形出來与申候而も、是迄之處不被改候而は、印形は成不申事与存候。又印形無之時は、如何躰に被至候茂可難計、又公邊抔も是程に被仰渡、御手入申儀に候得者、不被改而は叶申間敷、改り申時は必重而騷立申儀眼前之儀に被存候。然ば幾重に仕候而も、騷申時は御國威を以御願無之而者不被爲叶、假令御國威を以御願有之候而も、御取揚者無之事与仕候時は、騷立可申候。其騷立樣は、彼越・能等之百姓不殘境御關所等江相向、品に寄打破り、江戸表脇坂殿に相向可申与申合居候由、粗評判仕候。雑說たり共、如此儀は甚だ心懸りに被存候事に御座候間、先境江足輕に而も增詰被仰付候半歟与存候へ共、一萬之人數、百人や百五十人之足輕何之益にも立申間敷。自然如此時は、享保十九年御代官所惡黨者有之節、御人數申來候節之御手配之振を以、御先手物頭弓・筒二組足輕召連、旅立之樣に而出立、彼地を相固め、心得方之儀は、尤御關所之御作法も可有之候得共、一人

も通申間敷候。併若与風人數多押破り候はん躰にも候はゞ、弓・鐵炮にて程能打懸、品により暫御關所閉申儀も可有之候。此儀も若ヶ間敷と及差圖に而可有御座候。尤脇坂殿江直に向ひ候而、直願直訴仕候与申儀に可有御座候へ共、江戸表江不伺而者一人も通申儀は相成不申与申入、夫より御使番二人之内一人直に江戸表江相向ひ、委曲及言上、此日數之間にも十日・廿日は相延可申候間、自然右様之貌に相成候時は、如斯心得罷在可申哉与存候。此表より時々御使番等に而爲承候に而可有御座候。其日數之間は、泊近郷之御藏より兵粮申付、飢に及び不申様に相心得可申候。其内自然と人數屈し、御國恩之儀存付、廻心仕候者共、追々爲退散可申候。若人數多く相成、危き躰にも至り候者、夫々申渡、御馬廻頭組共を引連罷越候様、幷御醫者も差遣申に而可有御座候。

一、豫而拙者共江、隣境異變之節拜見仕候様に与之一箱被渡下、奉請取罷在候。尤此内申談拜見仕に而可有之候へ共、此度之儀は誠に前段之處江者至り不申儀与存候。乍併若萬々一か様に相成候時は、拙者共申譯も無之儀故、申合候儘相窺候間、猶此節心得方等之儀御下知も被下候様に与奉存候付申進候間、早速被入御覽候而、其表よりも急便を以御申越可被成候。依之今日出町飛脚指出、道中早飛脚歩に申渡候。手先々々より申聞候趣も不一様候故、拙者共に而者難澁至極に罷在申仕合御座候、以上。

正月廿四日　　又兵衛等四人　判

左　京　様

〔於江府御親翰帳之内書抜〕

二月四日

一、左之御親翰以十郎左衛門被渡下。

御着札、奥村左京殿

紙面令披見、委細令承知候。か様之節境目相固め申儀、左も可有之事に候。しかしはやぎり申時は却而民心を挑き、後害可有之、元來法度之事にも候處、先以黨を組、殊に關所抔を押破り可罷通所存之儀は、不法之至りに候。すべて國民之存亡は主將之釆幣に有之事に候得共、上之下知を能々畏候て、次に宗意之儀可存儀に候所、兼て急度申渡候に相背き、關所抔押破り、江戸表え可罷越との儀は、先以不屆至極沙汰之限りに候條、右等之趣得と相辨へ、夫々歸鄉仕候樣に、罷越候先手等より深く利害を說きかせ、何分歸鄉いたし候樣取計候儀肝要之事に而可有之候。不得止事時は無是非儀に候へ共、矢玉を以程能く打拂与有之儀は、誠に大事之處与存候。少与徒黨に而放し候と申事は不應樣に茂存候。旁容易に矢玉を用ひ申儀に而者有之間敷候。何卒穩便に相さとし申樣有之度ものに候。假令一旦打はらひ申候とても、

又集り申は眼前之事に候付而、手あらく取扱、民心之愚癡を猶以かため申様に相成候而者、無其詮事に候間、なりだけ國民之儀は撫育を第一与いたし、ケ様之節猶更國恩を思ひ付、是迄よりも親しませ申様に有之度事に候。又取扱により民心疎くなる事も可有之哉。是はいやなる事に候。只々幾重にも利害を說きかせ、民心を治め申儀専要に被相心得可然候。乍去段々利害を申入候とも、不致承引場に至り、不法之族も致出來儀、誠不得止事、鑓・刀を以治め申程之所に至り申時は、何れにもか様之御先境目を嚴重にいたし置候儀は勿論に候。尤臨機應變之儀は難申極候條、尙各無油斷可被相心得候。先手前存寄之趣あらまし相調差遣候、以上。

二月四日

年寄中

文化二年十一月朔日の條參照

二月四日。金澤城土橋御門の工事關係者に賞賜す。

〔政隣記〕

二月四日

一、土橋御門今度御普請就出來、今日右御用懸之人々江拜領物被仰付、於御臺所御酒・御吸物被下之。但物頭並御作事御用淺加作左衛門江は生絹三疋、御作事奉行江は同二疋、同御横

目ゟは染物二端宛被下之。

二月十二日。越中の西本願寺派門徒に、その願書を藩侯に執達したるを以て敢て騷擾する勿らしむ。

〔郡方御觸〕

西方之一向宗安心之儀、當時於公儀御裁判中之處、是迄之宗意及改變候樣致傳聞候躰に而、勝興寺與力寺を初追々願之趣書附指出、西末寺ゟ茂御郡方之者等多人數罷出、願之趣申立候旨に候。元來宗意之儀者御國政に不拘儀に候得者、彼是公邊ゟ被仰立候筋に而者無之、於御上御難題成儀に候得共、願書御取立之上者御達方茂可有之候。乍去公儀御裁判之程者難計に候。若此上御裁斷有之候はゞ、其御趣意能致熟談、猶會得難調願之趣茂有之候はゞ、其筋々ゟ穩便に相願可申候。左候はゞ其筋々より猶又御達も可有之候。御裁斷之樣子及傳聞、其御趣意茂不致會得、猥に騷々敷儀決有之間敷候。御裁判之上たり共、願之趣者品により年月を經候共可被爲在御達方候。惣而公儀御裁判之品に候處、御國方ゟ御難題之儀願出候而已ならす、黨類相催御領內爲及騷亂候儀者、無勿躰次第沙汰之限に候。此上右樣成儀有之候はゞ、棟取之者等御糺明之上、急度可被仰付候。

右之趣被得其意、寺庵を初末々迄一統能致會得候樣可被申渡候。此段可申渡旨、江戸表より

申來候事。

西方一向宗安心之儀に付、御郡方門徒共願之趣有之、格別之御詮議を以御取揚、夫々可被遂御詮議旨被仰渡、則江戸表ゟ御達有之、以來心得方等之儀、別紙之通御用番年寄中より被申聞候條、被得其意、此以後聊も御趣意之儀心得違無之様、末々迄締密に可被申渡候、以上。

二　月　　　御算用場

高田彌左衛門殿

菅野兵左衛門殿

別紙御用番御覺書、御算用場添書を以被申談候。先以於江戸表夫々御達方有之御様子、何茂雖有奉存儀、以來被仰渡之通急度可奉畏候。此段不相洩様締密に可申渡候、以上。

寅二月十二日　　高田彌左衛門

菅野兵左衛門

江上清左衛門

吉田兵馬

能州四郡御扶持人・十村中

二月十四日、學校に於いて助教・讀師等缺勤の場合の手續を改む。

〔政隣記〕

二月十四日、左之覺書學校御主附横山山城殿御渡之旨等、如例定番頭御用番佐藤勘兵衛より廻狀有之。

付札、定番頭江

於學校助教・讀師等被仰付置候無息之人々、氣分等相滯學校江罷出不申節、是迄は學校頭江相屆、身當り頭江は相達不申樣子に候得共、以來は父兄等身當り頭江も相屆、且病氣等之人々行步願等之儀も、尤頭・支配人江相願可申候。

右之趣被得其意、組・支配之人々江被申渡、組等之內裁許有之面々は、其支配江も相達候樣可被申談候事。

寅　二　月

二月十四日。諸士の道中往來に關する心得を示す。

〔政隣記〕

道中繼人馬之儀に付、道中御奉行井上美濃守殿より段々被仰渡之趣有之に付、御家中之人々以來下道中等往來之節、一日人足十三人・馬十三疋より多繼立難相成候。依之江戶表等江都而罷越候人々、宿繼人馬高於會所引しらべ申筈に候間、發足之日限兩三日先相極、先觸寫

に頭・支配人印形之以添紙面、前廉會所江指出、會所より差圖次第可致發足候。且又宿人馬請取高、是迄區々相成來候躰相聞候條、猶更御定之通不分明之儀無之樣可相心得候。

一、一人に而宿繼人馬十三人・十三疋より過し申面々者、其段道中御奉行江御屆有之候條、早速可及斷候。

一、右之通に順能致發足候而も、道中川支等に而逗留有之候得者、夫より先不順混雜にも可相成候間、人々相心得、追先觸に日附割附いたし、何々に而逗留与申儀書顯、逗留宿問屋江相渡、尤追先觸寫江戶會所江無間違差出候樣可相心得候。

一、御參勤御往來御供人、幷御供代之人々、荷物多町飛脚所江可指出處、是又人馬數前段之通故、兩三日にも分け可爲致發足候。依而附出方不同出來之儀難計候間、荷物迄手形幷請符に日附割附いたし候而可相渡候。

右之趣被得其意、組・支配江可被申渡候。組等之內裁許有之面々者、其支配江も相達候樣被申聞、尤同役中可有傳達候事。

右之趣可被得其意候、以上。

二月十四日　　　　　　　　　　　　　　　　横山山城

二月廿六日。魯西亞船の來着するものあらば諭して退去せしむべき幕命

を傳ふ。

〔筒井舊記〕

先達而おろしや船長崎江致渡來、通商等之儀相願候得共、難相用筋に付其旨申諭、先年與へ置候位牌茂取揚之、以來渡間敷旨申渡候。再渡は致間敷候得共、此後萬一漂流に事寄乘渡、何れ之浦方に船を繫き申間敷物にも無之候間、異船与見請候はゞ早々手當いたし、人數等指配り、先見分之者指出、得与樣子相糺、彌おろしや船に無相違相聞え候はゞ、能々申諭、可成丈け穩に歸帆いたし候樣可取計候。尤實に難風に逢、致漂流候樣子に而、食物水薪等指支、直に歸帆難相成次第に候はゞ、其品々相與へ可爲致歸帆候。且何程相願候共、決而上陸は不爲致、歸帆迄は番船附置、見物等も相禁、其段品々可有注進候。尤再應申諭候而茂相拒、不致歸帆及異議候はゞ、時宜に應じ不及伺追拂、其旨可申聞候。右躰之始末に至り候而は、諸事寬政三亥年異國船之儀に付相觸候趣に准じ取計可申候。

右之趣萬石以上之面々、幷其以下に而も、海邊之領分或は知行所有之面々江、不洩樣可被相觸候。

正　月

青山下野守殿御渡候御書付寫一通相達候間、被得其意、答之儀は井上美濃守方江可被申聞

候、以上。

正月廿六日　　大目附

松平加賀守殿　留守居中

おろしや船之儀に付、從公儀相渡候御書付二通、御用番年寄中被相渡候條可被得其意候、以上。

二月廿六日　　御算用場

高田彌左衛門殿

菅野兵左衛門殿

別紙之通おろしや船之儀に付、從公儀相渡候御書附寫等一結三通就到來、指遣候條、面々組下に夫々不相洩樣一統申渡、右躰之船見掛候はゞ、本文之通急速可及注進候、以上。

寅二月廿八日　　高田彌左衛門

菅野兵左衛門　不在合

能州四郡御扶持人・十村中

二月。前田齊廣、物價高直なるを以て歸國御供人に旅費を給す。

〔政隣記〕

付札、組頭江

當御在府中米價は下直に候得共、諸品は高貴に付一統難澁之躰に候。當時御勝手御逼迫之儀に候得共、格別之趣を以、今般御供人江一人扶持に金二歩宛被下、外に二歩宛御貸渡被成候條、精誠致勘辨、旅用不指支樣相心得、御供可仕候事。

右之通被得其意、組・支配之人々江被申聞、組等之內裁許有之人々は、其支配江も相達候樣可被申談候事。

文化二年四月廿八日叅照

二　月

三月二日。能登に於ける幕府領百姓と加賀藩領百姓との緣組手續を通牒す。

〔筒井舊記〕

御預所村々与御私領村々与緣組之儀に付、先達而兩御役所御連名之御觸御紙面相廻り、夫々御承知与奉存候。就夫右緣組願之儀は、本人願書付に村役人加奧書、裁許宛所に相調候而爲指出、裁許奧書兩御役所宛に仕指上申儀。尤御預所村方右緣組申合候者より茂、夫々御預所御役所江願出候得ば、夫々御詮議之上御聞屆被下候旨被仰渡候間、左樣御心得、緣組申合候者より御預所御役所江願出候樣爲談合候はゞ、辨方可宜儀与奉存候。此狀先々御順達、落着

より喜三兵衛方江御返可被成候、以上。

三月二日

鵜川村　喜三兵衛

武部村　四郎太夫

奥・口仲間宛所

三月四日。廣式に使役する御次女中の志願者を募る。

〔政隣記〕

十七・八歳より三十歳迄手跡相調候者　御次女中

右二之御丸御廣式御用候條、御家中平士・與力・御徒並之内、幷又家中給人、又者御坊主娘・姉・妹等之内相望候者御座候者、頭・支配人より私共江申聞候様早速可被仰渡候。御宛行等之儀者前々之通、私共江直々承合候様被仰渡可被下候、以上。

三月四日

中村八郎兵衛

本保六郎左衛門

井上太郎兵衛

渡瀬七郎太夫

永井貢一郎

長甲斐守樣

別紙之通二御丸御廣式御次女中御用之旨、中村八郎兵衞等紙面出候に付、寫相越之候條、被得其意、組・支配江可被申渡候。組等之內裁許有之面々者、其支配江も相達候樣被申聞、尤同役中可有傳達候事。

右之趣可被得其意候、以上。

三月十六日　　長甲斐守

三月十三日。前田齊廣就封の暇を受く。

〔金龍公記史料〕

三月十三日將軍遣靑山下野守來賜休暇。世子遣安藤對馬守。夫人遣小笠原大隅守。來貽物如舊例。十五日登營。謁將軍謝之。賜鷹馬。奧村左京・本多勘解由見將軍。

三月十六日。前田齊廣江戶を發して就封の途に上る。

〔政隣記〕

正月廿四日左之通被仰出候由、同日江戶發之飛脚二月二日金澤着申來。

御例之通御歸國御暇被仰出候得者、三月十六日江戶御發駕、同廿八日御歸城与被仰出候事。

〔御年譜〕

三月十六日御發駕。但筑摩川洪水に付、廿一日榊驛御逗留。廿八日御歸城。

三月廿八日。前田齊廣金澤城に着す。

〔政隣記〕

三月廿八日、昨夜九時御供揃に而同刻前高岡御發駕、益御機嫌能今日七時過御歸城。但爲御待請今朝五半時より罷出候處、八半時頃森下御小休御立之御附人來候に付、三之御丸ゟ出蹲踞之處、御例之通御意有之。其外御年寄衆者大樋御附人に而、橋爪御門外迄被罷出候儀等、都而御作法前々之通。且右三之御丸ゟ罷出候節、如前々草履捕一人召連、手傘に而出、御通行之節傘後ろ之方へ指置之、蹲踞。御歸城之刻は雨晴有之。附、今日路次滑至極に付歩行區々、御着城御遲有之候由云々。

一、御歸城に付江戸表ゟ爲御禮被指出候御使者不破英之助、御目見幷於御用番席拜領物如御例に而直々發足。

〔三守御譜〕

三月廿八日御歸城。御供奥村左京・本多勘解由。

三月。金澤の山伏源法院、弘法大師と稱して詐僞を行ふ。

〔寢覺の螢〕

手叩きの清水のことは天明三年に出づ

一、文化三年三月河北郡田上村寡婦の家へ、弘法大師來り給ひ袋米を授給ひしが、此米何ほど取ても盡る事なし。又其米を服すれば、いかなる難病も治せざる事なしとて、群集手たゝきの如し。取持の面々上下を着し、施物を帳記す。茶屋々々は處々に懸つられ、參詣絡繹としてけしからぬ賑ひなり。扨弘法大師重て來り給ひ、是迄の散錢施物を皆わたせよと言置る。取持の者共渡さじと拒て言分となり、折節改方役人來り合せ、忽ち弘法大師を搦捕て詮議ありければ、金澤持衣町の源法院といふ山伏にて有し。これにて人々漸く夢さめ、參詣ひそかに成りし。

四月五日。前田齊廣、諸士一般に今明年の借知を廢せんことを告げ、次いで老臣の諫止により一たび命を撤す。

〔御家老方御密用之覺〕

一、御家中一統難澁之躰被聞召、依之格別之思召を以、御家中一統御借知、今・來年至可被返下旨、年寄中江御親翰を以被仰出、年寄中等も一統之通可被返下旨、左之通御親翰御書立を以被仰出。

四月五日

當時逼迫至極之儀に候へ共、別段存寄を以、各幷家老共借知、今・來年至可相返候事。

右之趣若年寄ゟ茂演達可有之候事。

兵部儀在江戶、又五郎儀保養中に而出席無之に付、主付ゟ申遣候樣月番演述に付、織江より內狀を以申遣。

右被仰出に付各示談之上、御家中一統難澁之躰被聞召、別段之思召を以結構成被仰出、誠存懸も無御座難有奉存候。乍去私共には御勝手振之御樣子も粗承知仕罷在候儀、御當節之御事、乍迷惑御辭退仕、是迄之通指上申度旨月番迄及御請候事。

但、又五郎儀も各与同存之旨被申越候に付、其段主附より申達、若年寄へは月番より演述有之事。

同　七日

右之通及御請候處、何茂職分之儀御辭退申上候儀尤に被思召候へ共、今般不被得止事格別之思召付を以被仰出候。御趣意之趣は月番ゟ御意被遊候通候。依之各にも被仰出候通相心得可申旨等、横濱善左衛門等を以段々被仰出候得共、尙又各詮議之上、當時之御勝手振中々右之通被仰付候御時節にも無之候付、再往被仰出候上之儀に候へ共、何分奉辭候旨重而申上候事。

同　九日

今般格別之思召を以、御家中一統御借知可被返下旨被仰出之趣に付、猶更御用番方御勝手方に而段々詮議之筋有之、當時御逼迫至極之御勝手振に候處、右之通被仰付候上は、彌御難澁至極之御儀、如何共存兼候儀無御座、迚難被仰付趣等種々遂詮議、則其段申上候處、格別之思召を以被仰出不一方儀に候へ共、段々詮議之筋申上候に付、此度一統御借知被返下候儀、先御指止可被遊候。依之年寄中等も同事に候間、其通心得候樣被仰出。依而各詮議之趣被聞召屆、先以難有奉存候段及御請候事。

（本年四月廿七日の條參照）

右之趣兵部・又五郎江も主付より委細申遣事。

四月七日。普請中の石川御門に佳節・朔望出仕の輩の通行を許す。

〔政隣記〕

付札、御横目江

石川御門續御櫓下石垣御普請中道幅無之に付、佳節・朔望等出仕之面々、河北御門一方より往來申渡置候得共、年限も相懸候御普請に付、格別遂詮議、召連候從者末々作法能込合不申樣、其主人々々より嚴重に申付、佳節・朔望等石川御門よりも一統出仕往來有之候樣可申渡候。併右御普請中は假圍外に而可致下馬下乘候。此段夫々不相洩樣可被申談事。

別紙之通夫々可申談旨、御城代又兵衛殿被仰聞候條、御承知被成、御同役御傳達、御組・御支配御申談可被成候。且又御組等之内裁許有之面々は、其支配江も不相洩樣御申談可被成候、以上。

四月八日　　御横目

御歩頭衆中

四月十一日。道中繼人馬に關する前令を改む。

〔政隣記〕

道中繼人馬之儀に付、當二月相觸候内、川支等に而逗留有之候得者、夫より先不順混雜にも可相成候間、人々相心得、追先觸に日附割附いたし、何々に而逗留と申儀書顯、逗留宿問屋江相渡、尤追先觸寫江戸會所江無間違指出候樣可相心得旨相觸候得共、追先觸に日附割附いたし候に不及、且江戸會所江寫指出候にも不及候事。

右之趣被得其意、組・支配江可被申渡候。組等之内裁許有之面々者、其支配江も相達候樣被申聞、尤同役中可有傳達候事。

右之趣可被得其意候、以上。

四月十一日　　村井又兵衛

四月十三日。前田治脩金澤千日町口に行步を行ふ。

〔政隣記〕

四月十三日、相公様八時御供揃に而、御鷹野之振を以千日町口ゟ御行歩。

四月廿四日、再び廣式に使役する御次女中の志願者を募る。

〔政隣記〕

十九歳より二十五六歳迄

但物縫相心得候者　御次女中

右二之御丸御廣式御用候條、御家中平侍・與力・御徒並之内、幷又家中給人、又は御坊主娘・姉妹等之内、相望候者御座候者、頭・支配人より私共ゟ申聞候様、早速可被仰渡候。御宛行等之儀者前々之通、私共ゟ直々承合候様被仰渡可被下候、以上。

四月二十四日

中村八郎兵衛

本保六郎左衛門

井上太郎兵衛

渡瀬七郎太夫

永井貢一郎

村井又兵衛殿

本年四月五日及び六月二十日參照

老臣は先に借知返附を辭退せしを以てこの例に漏れしなり

四月廿七日。前田齊廣の命により諸士に今年に限り借知を徴せざるべきことを告ぐ。

〔政隣記〕

四月廿七日晴陰、昨日御用番又兵衛殿依御廻文、今日五時過より人持・頭分登城、御横目所江及案内相扣有之候處、四半時頃檜垣之御間二之間江御年寄中等御列座、一組一役宛御横目指引に而御呼立、左之通御用番又兵衛殿御演述。

御家中之人々勝手難澁至極之段被聞召、御心痛之至被思召候。依之當時御逼迫至極之儀に候得共、別段之思召を以御借知・御借米當年一作全可被返下候條、此段可申渡旨被仰出。

右之趣被得其意、組・支配之面々江も可被申渡候。組等之内裁許有之人々は、其支配江も相達候様可被申聞候事。

右之通可被得其意候事。

丙寅四月

〔御觸留〕

定番頭江

今般御借知一作被返下候得共、逼塞・遠慮等之人々者不被返下候條、此段諸頭江可被申談候

事。

〔御觸留〕

御家中之人々より御借知米、今年一作全被返下候趣別紙之通に付、與力江者其寄親より申渡、御禮も寄親迄罷出、且自分御禮來月朔日・二日之內相勤候節、與力之儀も一所に申述候樣可申談旨、御横目御申渡に付、此段申進候、以上。

四月廿七日　　村井又兵衞

奥村左京殿

四月。學校に於ける讀書生に諭示する條々を定む。

〔學校方覺書〕

學校頭江

於學校習學之人々へ、教諭之法を相建申度旨、讀師之面々心付之趣、先達而各迄紙面指出候付、添紙面を以被指出置、御聽にも相達候條、別紙之通習學人へ申談候樣可被申聞候事。

諭讀書生條々

三日　十三日　廿三日

右每月於學校、辰之上刻より午の下刻迄、四書五經溫習候事。

一、學校罷出候而無用之咄合等不仕、尤稽古相濟候者直に退出可仕事。
一、辭儀挨拶之儀者、節義之第一に候間、疎畧之振舞無之、進退宜敷相心得可申事。
一、溜列居之儀、猥りに着座不仕、帳順を以、主付名前懸札之下に作法能着座可仕事。
一、稽古相初り候而は、別而猥りに立さわぎ申間敷事。
一、稽古之席に而は右之方に着座仕、句讀相授り候者左之方に着座候而、尙更誦讀仕候而相濟候者退出可仕事。
一、不審之儀師長にならひ受候節は、進退宜敷教を受可申事。
一、都而每部讀了之後、前書失忘無之哉試可申候。若失忘多く候者、立歸り溫習いたし可申候。後書へ移候儀任指圖可申事。
一、他人之長短過惡を論じ、或は出座之前後爭ひ申間敷事。
一、誦讀之法徐緩にして、聲音響亮に、伊吾無之樣心懸可申事。
一、素讀は學問之楷梯に候間、素讀一通り相濟候者、義理之會得を心懸、會讀等之席へ罷出可申事。
右件々相守可申候事。
寅　四　月

五月二日。今年諸士の借知を免除せられたるを以て町會所よりその費途に關して通牒す。

〔政隣記〕

今般御家中一統御借知・御借米一作被返下候に付、町會所勝手仕送之人々者、仕送方ゟ打込成立專要に可相心得儀に候得共、人々手前質物等有之、年々利足打重り、入替等差支候節者、質物請料願等有之、畢竟成立之爲にも不相成候に付、此度被返下候御借知米之分を以、質物請出之方ゟ不殘相渡可申候。左候得者以後質物之儀彼是願之筋一圓無之筈に候間、此段夫々御申渡可有之候。且又質物無之人々者、仕送方ゟ先達而指出置候圖り帳之內、無據借銀返濟方ゟ可相渡候條、是等之趣御申渡可有之候。尤御同役御申談有之候樣致度候、以上。

五月二日　町會所

津田權平殿

〔政隣記〕

町會所仕送之人々、當一作被返下候御借知・御借米之分、仕送方ゟ打込可申儀に候得共、人々質物等有之、年々利足相重り入替等指支候節は、質物請料願有之。畢竟成立之爲にも不相成候に付、此度被返下候御借知米之分、質物請出之方ゟ可相渡候。且又質物無之人々は、仕

遣方え先達而指出置候圖り帳之内之、無據借銀返濟方え可相渡旨申談置通に候。依而右質物之内成限流込、其餘御借知米代を以請出、殘銀有之分は借銀方え可相渡儀に付、別紙草案之通當月廿六日を限しらべ書御取立、御指出可有之候。尤質物請料之外、借銀方渡之儀は、委曲承屆候上可及指圖候間、其御心得御申渡候樣に与存候。此段御同役御傳達有之候樣致度候、以上。

六月廿二日　　町會所

菊池九右衛門殿

五月十二日。諸士に今年の借知返附の手續を告ぐ。

〔政隣記〕

今般被仰出を以、御借知今年一作全被返下候に付、人々より指上置候ヶ所々々に而、御米を以相渡候。依而來月中當場印之切手を以可相渡候條、別紙草案帳面之通、交名・知行高等相調、當月中當場え可被指出候。且又去年九月以後當時迄、新知・御加增知・跡目等被仰付候人々者、未所附相渡不申段、但書に可被相調候。所附相渡次第、早速御借知村附帳可被指出候。其上に而右指上候ヶ所々々に而、前文之振を以切手相渡可申候事。

一、指扣等被仰付置候人々は、不被返下候條、案文之通可被相調候事。

一、御切米・御扶持方被下候人々は、當春三の二御借米指上置候條、別紙草案帳面之通相調、早速可被指出候。且又當春渡御切米等請取候以後病死之人々ゟも相渡候條、何月何日病死之段可被相調候事。

一、當年被召抱候人々、幷足輕・小頭等より御步等に立身被仰付候人々は、當年御借米指上不申候條、右人々は名前相省可被申候事。

一、儒醫・隱居等、他國居住之人々ゟも、前條之振を以相渡候條、右振合に可被書出候事。

右之趣被得其意、組・支配之人々ゟ不相洩樣被申談、尤同役中急速傳達有之候上可被相返候、以上。

五月十二日　　御算用場

五月廿一日。昨今兩日前田利命の一周忌法會を行ふ。

〔金龍公記史料〕

五月廿日・廿一日修香隆院一周忌法會。奉行前田伊勢守。六月七日行赦。

五月。學校に於ける學頭・學監の職を廢す。

〔學校方覺書〕

學校頭ゟ

學頭　一人
學監　一人
右兩役可被仰付旨等被仰出候趣、享和三年四月申渡置候通に候へ共、今般思召有之、右兩役御指止可被成旨、重而被仰出候條、可有其心得候事。
丙寅五月

六月四日。組外組森榮左衞門亂行を以て流刑を命ぜらる。

〔政隣記〕
五月十三日
一、組外領百五十石森榮左衞門年五十歲儀、一類中申談、昨夜縮所江入置候事。
但、子細は召仕候妾下宿之節不埒之趣有之由に而、妾之宅江罷越髮を切、其上右宅を燒可申とて、竹筒に鹽硝を入候而持參、其外にも色々不行狀之趣共有之由風說。依之与云々。

〔政隣記〕
一、左之通御用番山城殿就被仰渡候、頭宅に而可申渡筈之處、前月十三日記之通不一通病氣之躰に付、一類より縮所江入置候故、今日昏過村田久左衞門・野村源兵衞、御大小將横目笠間源太左衞門・寺西平左衞門、榮左衞門宅江罷越申渡。但御步横目も罷越候得共、榮左衞門

八月六日の條參照

儀縮所江入有之に付、取〆御用無之候に付相返候由之事。

付札、村田久左衛門・野村源兵衛江

森　榮左衛門

右榮左衛門儀不埒之趣有之、先年御咎被仰付置、近年御免被成候處、無間も亂行不届至極に付、能州嶋之内江流刑被仰付候旨被仰出候條、此段可被申渡候。

但、配所江被遣候迄は、急度一類共江御預被成候條、急度縮仕置候様可被申渡候。尤一類交名可被申聞候事。

丙寅六月四日

右之通久左衛門等申渡候處、段々存念之趣、先達而一類共儀何等之趣も一圓不申聞、理不盡に押込、今以何等之趣に付押込候与申儀も不申聞旨等、憤之趣共申出。依之御請判形難仕趣申聞候に付、久左衛門等より段々申入候得共一圓承引不致。漸左候はゞ、憤之趣共追而紙面に調可指出候。先今日之御請は可仕旨及再三判形仕候由。夜九半時比各退出之事。

但、右之趣共逐一御達申候處、紙面爲指出候に不及旨、御用番御指圖有之候由也。

六月六日。収納米を取扱ふ代官に目捌米を與ふる手續を改む。

〔筒井舊記〕

諸代官納米之節目拂米、去暮御仕法相改入札拂申渡候上、米切手相渡申趣に取極候。右之通に相成候而者、甚入組御用多に相成候に付、當年より諸郡御扶持人江被申渡、右目拂米直段精誠遂吟味御拂に申付、代銀取立置、米相場當場江上納有之、請取切手御米所江指出候へば、日印いたし相渡候筈に候。尤諸代官目拂米高、於御米所に相知申候間、諸郡番代等寫取、御扶持人江相達候得者、夫を以御拂相極可申候。此段夫々御扶持人江可被申渡候、以上。

六月六日　　御算用場

改作御奉行中

御別紙御改作所より御渡被成、御郡々御扶持人彼是御用多に可有之候得共、御本文之通入組申趣に候間、御別紙之通相心得可申旨、此段私より申談候樣譯而被仰渡候間、左樣御承知被成、落着より私方江御返可被成候、以上。

六月六日　　田井村　次郎吉

諸郡御扶持人中樣

此外御郡御扶持人より一統江廻狀有之、毎歲八月限り目拂米代銀取立、番代迄爲登可申旨申談有之候事。

六月十六日。大聖寺侯前田利之金澤城に登る。

〔政隣記〕

六月十六日晴、昼より陰。主水様去三日江戸御發駕、昨夜津幡驛御止宿、明夜小松御泊、明後十八日大聖寺御在着之筈。今日五半時頃金澤御旅宿ゟ御着に付、御作法書に有之候通り、御近習頭御使番改田主馬を以左之通被仰進。

去三日江戸表御發駕被成、長途無御障只今此表御到着之段被聞召、珍重思召候。御休息被成候樣にと思召候。備者今日御對顏可被成候間、御登城可被成候。何も其節可被仰入候。

爲其以御使者被仰進候。

右前々、御暇被仰出候御悦も被仰進候得共、此度者初而之御暇に付、御發駕前御賻も被進、右御悦も兼而被仰付候趣を以、於江戸御發駕前取計相濟候に付、御口上之内に右御悦者不被仰進候事。

相公様よりも右同斷、御近習頭御使者被進、御口上右同斷。但従御城直々金谷御屋形ゟ御出被成候樣思召候旨等之御口上也。

一、九時過御登城、八時頃御退出。都而御作法書之通。御料理御相伴前田伊勢守勤之。御居間書院御馳走方水越八郎左衛門、御歩頭小林猪太郎御使番勤之。且御盃事被遊、御引菜御持參之事。

右相濟、直々金谷御殿江御出、左に記候御作法書之通、且相公樣与御盃事被遊、八半時過御退出之事。

糟漬鯛一桶　御目錄

相公樣より味噌漬鱈　御目錄

右御作法書に有之通御下城等以後、御旅宿江御近習頭を以、御登城等之御挨拶被仰進候節、御旅宿爲御見廻被進之。

六月二十日。家老等、老臣にも本年の借知を免除せらるべきことを進言し、次いで容れられず。

〔御家老方御密用之覺〕

六月二十日勘解由・織江兩人御前江罷出、左之通申上候處、委細被聞召候、心付尤に被思召候。乍然無據御趣意候趣、先達而被仰出置候通に候。猶更重而可被仰出旨等御意之事。

年寄中暨私共より、當年別段に御借知被仰付候旨等、段々無御據御趣意を以、去年十二月二十八日被仰出、何茂奉畏罷在候。然處當年御家中難澁之躰被聞召、御心痛被遊候付、近年被仰出之趣も御座候得共、御格別之思召を以一統御借知御用捨、當年一作全被返下候。年寄中等之儀は重職之儀、奉御請候儀迷惑恐入候儀は、再往被仰出候上之儀に候得共、段々奉申上

去年十二月廿八日の被仰出は去年正月廿八日の誤なるべし

候處、御許容之旨被仰出候。乍然年寄中之内にも格別難澁之人々も有之躰、其上私共与達上げ方も過分之儀に御座候へば、自然勤仕取續にも指支候所ゟ至り候而は、誠不容易儀に奉存候。人々勝手振之儀巨細には御存知不被爲在、至極難澁之場ゟ至候而は、畢竟御心外に被思召候儀も出來可仕哉与、此處私共甚泥罷在候儀に御座候。尤深き思召之上被仰出御儀、御賢慮可有御座御儀に奉存候へ共、今般一統結構に被仰出候御時節に御座候へば、先當年之所御猶豫被仰付間敷哉、私共心付之趣不奉申上候儀も仕兼候に付、乍恐奉申上候。只今に至加樣に申上候儀、事相おくれ候申上方、殊に私共身分にも拘候儀、彼是甚申上兼罷在候得共、同役共申合候趣に付、乍恐奉申上候。

一、同二十一日改田主馬を以、御家老中御前ゟ被召、何茂罷出候處、昨日勘解由・織江より申上候趣に付、左之御親翰被渡下、段々御意之趣有之、夫々及御請候事。

年寄共等より當年增借知申付候儀に付、昨日勘解由・織江申聞候趣、猶遂熟慮候。其方中心付候儀も尤に候へ共、元來右借知之儀者、乍心外別段之趣にて申付候事、子細は去春申聞置候通に候。然處當年一作借知全相返候。依之年寄共等も可相返之旨申出候處及辭退候。しかし年寄共等は別段之借知も申付候事に候へば、彌以勝手向差支可申与令推察、當年之儀格別之趣にて一統へ借知相返候事故、强而申出候へども達而再往及辭退候も、人々勝手向運方度

量も可有之處右之族者、此後いかにも職分不相立与申程之勝手向取扱有之間敷儀与存候。乍去年寄共等心得違にて、萬一此後身分不相應之勝手向逼迫に至り、難捨首尾も候はゞ、其節は何とか申付方も可有之哉与存候。右等之趣に候條、其方中心付に候へども、此度之儀乍心外多分難承屆可有之哉。各存付之趣身分に不拘申聞之儀は一段之事に候。尤此後も聊無泥何成共心付等之儀は可被申聞候。

六月二十一日

右御親翰、勘解由儀御前江罷出候節持參奉返上候事。

六月。陪臣・醫者等の學校に出席出願の手續を改む。

〔政隣記〕

陪臣之人々、是迄文學校江初而出座、講日聽聞に不限、禮法・算學・和學・令之稽古罷出候分、都而御儒者江相達來候得共、以來其講書聽聞等者御儒者江相達、其外者其品々之師範人江相達可申事。

一、陪臣醫者且御醫者中弟子、并陪臣醫者弟子醫學出座仕度者は、醫學指引之御醫者江被相達可申候。

一、醫者之外陪臣之人々醫學出座仕度者は、是又醫學指引之御儒者江相達可申候。

一、町儒醫之分出座之儀、是迄者町奉行迄相願來候得共、是又以來者御儒者、指引之御醫者、共品々之師範人江相達可申事。

右陪臣之人々等初而出座願方、御儒者幷師範人承請候上、學校主付頭江相達可申事。

右之通私共詮議仕候に付御達申上候。御聞屆之上夫々被仰渡候樣仕度奉存候、以上。

五　月　　井上井之助

中泉七太夫

堀　三郎左衛門

木村茂兵衛

奥村左京樣

横山山城樣

附札、定番頭江

陪臣人々等文學校江初而出座願方之儀に付、學校頭紙面指出候に付、寫相越之候條、被得其意、夫々可被申談候事。

寅　六　月

七月五日。御馬廻組金子十郎左衛門その妻の妹と出奔す。

〔政隣記〕

一、長瀨五郎左衞門組御馬廻、領知二百五十石金子十郎左衞門、居宅馬場一番丁金子武左衞門跡養子、實は御異風不破久太夫二男也。附、久太夫前月中旬病死、十郎左衞門忌中也。今月五日夜組外小杉半七郎姊同道出奔之躰、行衞不知、昨八日夫々書付を以及御斷。附、半七郎者小杉喜左衞門跡に而、領地百七十石也。喜左衞門嫡女者十郎左衞門妻に而、是又半七郎姊。此度同道之女は喜左衞門二番目娘に而、則妻之妹也。于時十郎左衞門儀、半七郎勝手方取㗀致在之に付、當半納・本納分共不殘賣拂、勿論自分收納米者地米に至迄不殘賣拂之、當五日晝迄に兩家之拂代銀不殘取納、同夜出奔。持參金都合二百兩計に而可有之与之沙汰也。

附、十郎左衞門今年二十九歲、同道之女廿三歲也。

七月九日。火災の際に於ける心得を恪守すべきことを命ず。

〔異本三壽御譜〕

七月左之通觸。

付札、定番頭江

火事之節無用之人々、火事場へ不罷越筈御定も在之候處、近年御役人之外早乘仕候樣族も多、火元江茂無用之者入込、御役人之障に相成候樣子相聞え候事。

一、辻々大勢相集、火消人數等致見物、往來之障にも相成候樣子相聞候事。
右等之趣前々より相觸、享和二年猶更被仰出候趣有之、急度相觸置候處、近頃は又々猥に相成候躰。夜中火事之節、提灯無之馬上にて馳廻り候人々も有之躰に候。火事之節親類等之宅へ見廻候儀は御定も有之候儀に候間、都而心得違無之樣嚴重可相心得候。尤右躰之者於在之は、御横目より相咎、夫々名前も承屆候筈に候條、被得其意、組・支配之人々へ可被申渡候。組等之內裁許有之面々は其支配へも相達、尤家來末々迄不相洩申渡候樣可被申談候事。
右之趣一統可被申談候事。
右七月九日御用番左京殿御渡、武田喜左衛門廻狀。

七月九日。江戸に於いて物價高直なるを以て詰人に金子貸與を許す。

〔政隣記〕
一、去九日出江戸御用狀來着、左之趣申來。
付札、河內山久太夫江
近年此表金相場高直之處、當春火災後彌增高貴に相成、且諸物共追々引揚、詰人及難澁候に付、御救方之儀夫々願之趣有之、委曲金澤表江申遣置候處、難澁之趣無據儀には候得共、御勝手向御逼迫之上、近年不時御入用打續、且當年御格別之思召を以御借知米一作被返下候得

ば、定式之御入用方さへ御手當無覺束候故、諸人願之趣取計方無之旨申來、則其段申渡候通に候。然處當年之儀は火災に付、金相場を初格別之引揚、近年無之高貴に相成、一統甚難澁、取續も指支候趣段々被申聞、諸向よりも追々同樣申聞、誠に無據相聞候得共、最早御國江往返之日間も無之候。依之格別詮議之上、此表切之取計を以、一人扶持に金二歩宛御貸渡之儀承屆候條、右を以遂勘辨取續可申候。

右之趣被得其意、組・支配之人々江可被申渡候。且又諸頭中江も演述、組等之人々江申聞候樣可被申談候事。

寅七月

七月十一日。馬廻組金森大作城中にて誤つて他人の刀を帶し去る。

〔政隣記〕

一、當十一日御馬廻組頭御用番支配野村仁之助、御廊下通に刀差置候處見當り不申に付、右組頭より御門入方之儀入紙面、橋爪・三之御丸御番人中江相達。于時同日八半時比、同日跡日被下候御馬廻組金森大作罷出、先刻刀取違罷歸候由に而、其刀指罷出候に付、先刻より御横目所江預り置候主無之刀見分申談候處、大作刀に相違無之旨申聞候に付相渡候處、則帶し出候刀与取替罷歸。右に付仁之助呼に遣し、右刀爲見候處、仁之助刀に無相違由申聞に付相

渡候得共、及暮候故又御横目所に預り置、翌日仁之助罷出右刀受取之、御門出方之儀御城代より夫々被仰渡。且昨十一日は御城代御退出後に候故、當番組頭取噯之、右等之趣時々當番組頭御横目より達御聽。但十一日晝番組頭辻平丞・御横目笠間源太左衛門、十二日朝番組頭堀平馬・御横目山本又九郎。

七月十三日。前田重教の夫人及び女顯姫の忌日を改む。

〔政隣記〕

壽光院樣御祥月十月廿九日之處、十月十七日に御改。

松壽院樣御祥月正月十日之處、御內輪に而正月五日に御振替。

右御忌日思召有之、右之通御振替に候。依之每月右御忌日、御家中諸殺生指扣可申旨被仰出候。尤十日幷大の月廿九日は相扣候に不及候。

右之通被得其意、組・支配之人々に可被申渡候。組等之內裁許有之面々者、其支配にも相達候樣被申聞、尤同役中可有傳達候事。

右之趣可被得其意候、以上。

七月十三日　奥村左京

七月廿二日。收納米の調製及び枡目を嚴にすべきことを告ぐ。

〔加州郡方舊記〕

一、三州御收納米幷給人米納方之儀、前々より申渡候通り、第一米干立幷仕立方手拔有之候而者、御廻米に相成候而茂過分欠減相立、甚御損失之儀に候間、彌以已來納之節重念に相撰、御定之通制とほに而、米持參候百姓に爲斗相納可申候。當年より大坂を初、船手等悉く嚴重御仕法被仰付候。然上者納方一方に相成、穿鑿不行屆而者、惣様之御仕法崩に相成候間、御定之通御藏前懸札之趣違失無之樣可相心得候。

一、代官納方之節、米撰方第一之所、中には手代に打まかせ置、油斷之躰も相聞え候條、以來重々意を附可相勤候。且又是迄出船之節、升取不正之儀も有之に付櫓升を相用候。其節代官共彼是申聞候向々有之候得共、入念に相納候藏々指而相違之儀も無之に付、當春より大坂・御當地共、彌以來出船之節櫓升相用候間、其段可相心得候。

一、下代等讓代之節、過分銀子跡役より取請候由、今以風評有之候。給米等も少分之所、畢竟こぼれ米等目當にいたし候故与相聞、左候而者斗米之穿鑿不行屆儀、曁百姓難儀之筋沙汰之限りに候。依之侍代官へも嚴重申渡候間、御扶持人・十村等へも右様之儀無之、不斷手代行狀等も心を付、往々古來ゟ立直候樣可相心得候。

右之趣被得其意、御扶持人・十村・新田裁許・山廻りを初、其外納候節百姓等に相當り候儀は、

小作之者にも夫々可被申渡候、以上。

戌七月　　　　　御算用場

改作御奉行中

御收納米納方之儀に付、別紙御算用場より相渡候に付相達候條、得其意、請書可指出候、以上。

七月廿二日　　　　改作奉行

諸郡御扶持人中・十村・新田裁許・山廻中

文化四年三月十八日の條參照

七月廿二日。能登一宮に附與すべき山林に關して議す。

〔職事日記〕

能州一宮御林之儀に付、其御場より寺社奉行江被及御懸合候趣、一宮社僧・神主共不致會得、先年より申分に相成居申儀、於公事場可相糺旨、先達而年寄衆より被申渡候に付、各江も段々申達、先年より之書き物扣等取寄、暨一宮江被下置候御書幷御制札之趣、神主等申立候趣を以拙者共遂僉議、ヶ條書に認寺社奉行江相達、右奉行にも公事場僉議之筋同意に候はゞ、神主等江相渡致會得候樣、彼奉行に而申渡、其上にも不會得においては、公事場江召出可相糺旨申達、再往理解之ヶ條書指遣、則寺社奉行より社僧・神主江申渡候處、右ヶ條書之趣夫々致會得、此上如何樣共申渡候筋可畏旨答書指出。併是迄成來之趣に而は、二町四方之外に

神林有之趣に相心得神務無手支所、向後二町四方に限候而者、寺社家共甚及難澁候間、此儀何分憐愍之取捌相願候旨別段願書付指出候故、寺社奉行よりも先爲內談指越候間、格別之御沙汰有之候樣致度旨申越候。則公事場より相渡候ヶ條書、幷寺社家之者共答書等別紙一二付有之書き物之通に而、夫々會得之上は、二町四方与相限境塚等可申付儀不指支事に候得共、元來論所に相成候儀は、往古二町四方与相定り候節以後、證據に可成繪圖等相渡候儀も無之、夫以後御林山奉行等之由斷故にも候哉、社僧・神主共神林与相心得候族に相成候儀、金山方奉行等之手拔故与存候得者、今般二町四方与相限境塚等申付、寺社家及爲迷惑候儀筋立候儀共難申候。併拙者共僉議に而は、元來御林間數之儀、往古見通り迄之間數に而、當時夫々分間有之候者、御林之間數延与も可有之与存候條、寺社家共別段願之儀少は取上、二町四方之外に寺社家江付候山等有之候樣に取捌候者、今般公事場より申渡候趣致會得候上、別段之願方改而承屆候筋に相成、外々へ指障に相成候儀も有間敷哉与存候。依而右等之趣及御示談候條、各御了簡之程御申越候樣に与存候。則公事場より寺社奉行江相達候ヶ條書、右奉行より公事場江指出候書き物、其外一の宮江被下置候御書寫幷御制札之寫等相達候條、夫々御見しらべ有之、拙者共僉議之外に、何とか各に而御心付之儀有之候者可有御申越候。右別段願之儀に付、二町四方之外に餘分相渡候儀に相成候はゞ、左右に有之地面を分相渡候而

可宜に付、繪圖も相違候間、各に而も拙者共僉議之通与御心得候はゞ、右繪圖に大抵何れよりいづれ之間を何百歩程可相渡与、繪圖に付札に而被爲記、尤右可相渡歩數相しらべさせられ候はゞ、誠に内々を以見計之歩數相しらべ候樣に御申渡、右之樣子寺社家へ相知不申樣に御申付候樣に与存候。早速右之趣否可有御申越、其上に而年寄衆に相達、年寄衆被聞届候上、双方に落着之書をたて相渡、追而堀切等出來之上繪圖等可相渡儀与存候、以上。

寅七月廿二日　　四　人　印

遠　田　誠　摩殿

水野次郎太夫殿

杉　野　善　三　郎殿

七月廿四日。拘禁中の北村屋淺右衞門病むを以てその女の代牢を許す。

〔職事日記〕

七月廿一日御達申代牢願之書記、左之通執筆堀口忠藏を以相達る也。

安　永　六　年

新町絹屋武兵衞儀禁牢之所、さき儀代牢願之通被仰渡。

寛　政　十　一　年

觀音院門前能とや與兵衛方借家人唐津屋吉十郎母禁牢之所、娘末儀代牢願之通被仰渡。

寛 政 五 年

犀川川除町岩内屋六兵衛儀禁牢に付、娘代牢相願候へ共、追付出牢之事故不承屆。

寛 政 六 年

羽咋郡米出村百姓與右衛門儀禁牢之所、娘儀代牢相願候へ共、與右衛門再往之吟味も相濟不申者故、詮議中之趣を以書付等相返。

一、河北郡大樋村領神谷屋善兵衛儀禁牢之所、娘いそ代牢相願、善兵衛儀下濟出牢之者故、いそ儀代牢におよばず出牢。尤一卷落着迄善兵衛儀指預置候樣被仰渡。

右は被相渡覺書に而、此分しらべ出候樣一昨廿一日執筆芝山彌一郎申聞候也。右を昨日御返申、左之通相達也。

安永六年新町絹や武兵衛娘さき儀代牢之儀は、元來さき之不埒に寄父武兵衛禁牢申付候事故、さき儀代牢願之通被仰渡候樣御達申、其通被仰渡候。

其身本の儀

一、寛政十一年觀音院門前、能とや與兵衛方借家人唐津屋吉十郎母は、其身外に出合女に遣候不屆に仍而、八ケ月禁牢之上御宥免之旨被仰出、其通申渡置候處、娘すへ儀代牢相願候故、いかゞ可申渡哉与御達申候處、代牢御聞屆之旨被仰渡候。右母牢屋に而大病与申に而も無御

座に付、願方迄を御達申候所、右之通に御座候。

一、右之外別紙に有之候岩田屋六兵衛・神谷屋善兵衛儀は追付出牢、又は下濟出牢之者に而、今般之者に相當り不申、米出村百姓與右衛門儀は相煩候儀も無御座候故、僉議中之趣を以書付相返候儀に相成申候。今般北村屋淺右衛門儀は、吟味落着之上は御領國追放刑に可伺者に御座候得共、當時痛等に而大病に相成罷在候而、吟味も相成不申所、娘代牢相願候故御聞屆可被成哉、又は願方奇特之趣を以不及代牢、本復迄牢より出預置候様可被仰渡哉与御達申儀に御座候。尤前に男子親之代牢相願候者、奇特之趣を以不及代牢出牢申付、預置候様被仰渡候者共は度々御座候得共、女子に今般同様之者只今見當り不申候。先達而之別紙御達申候事。

［職事日記］

七月廿四日代牢申渡方左之通り。

伏見寺門前北村や
淺右衛門娘　せん

其方儀父之代牢相願、父淺右衛門儀實大病に付、委曲年寄衆へ相達候處、御上御聽にも被達候而、其方代牢御聞屆被成、其方入牢申付、淺右衛門は病氣本復迄牢より出、寺社奉行江預置候様被仰渡候故、今日より其方入牢申付、今日御日柄に付揚屋へ入、明日より入牢申付、

淺右衛門儀本復迄牢より出候間、左樣に可心得、追而淺右衛門儀本復之上は入替候間、左樣に可心得候。

伏見寺門前北村屋　淺右衛門

其方儀禁牢申付置候處、娘せん儀代牢相願、其方大病相滯候事故、委曲年寄衆へ相達候處、娘代牢申付、其方は本復迄預置候樣被仰渡候故、せん儀入牢申付、其方は牢より出、寺社奉行に預遣候間、左樣可心得候。尤其方病氣宜成候はゞ、早速門前役人に可相斷、其節入替候間左樣可心得候。

七月廿六日。前田齊廣、政務の伺書に對し急に決裁せざることあるべきを告ぐ。

〔諸事覺書〕

七月廿六日左之通被仰出候に付月番より被申談候。

品之寛急に寄申儀には候得共、不差急品者御留置、猶更被遂御熟慮被仰出儀も可有之候。是迄は伺候品々隨分はやく被仰出候得共、御歸國以後御改被遊候儀も一二品有之候。

右之通に付伺之品急に不被仰出儀も可有之候。是迄での御樣子と致相違候付、不審に奉存儀

も可有之与思召候付、此段被仰付置候。尤差急候品者無泥御催促可申上候。御家老・若年寄ゟ茂可申談旨、勘解由を以被仰出候事。

八月四日。村々にて祭禮に際し踊・相撲等を催すを禁ず。

〔筒井舊記〕

頃日祭禮に事寄、踊り子幷角力抔相催候様子承及候條、如何之趣に候哉、其方中等閑成心得方に候條、右等之趣有之候はゞ、早速爲指止、尤棟取人等名前相糺可申聞候、以上。

寅八月四日　菅野兵左衛門

奥郡御扶持人・十村中

八月六日。組外組森榮左衛門能登島に流さる。

本年六月四日の條參照
今日は八月六日

〔政隣記〕

一、組外村田久左衛門・野村源兵衛組森榮左衛門儀、當月六日能州嶋之内半浦村ゟ被遣候旨等、左之通今月二日御用番又兵衛殿夫々ゟ被仰渡候に付、則今日森宅ゟ、朝五半時比組外御番頭御用番三宅權左衛門・堀左兵衛、御横目永原七郎左衛門・山本又九郎、幷御歩横目頭村田・野村煩役引に付兩人罷越、被仰渡之趣權左衛門等申渡候處御請相濟、道中指添之御歩田伏才三郎・平田孫助ゟ相渡、受取之、追付發出。且榮左衛門調筆之書面一卷指出、身當頭村

田江相達候樣に致度段申聞候事。

付札、御歩頭江

森柴左衛門儀能州嶋之内中浦村江流刑被仰付、縮小屋江被入置候に付、當月六日令發足候間、柴左衛門江指添罷越候御歩田伏才三郎・平田孫助彼宅江罷越候樣可被申渡候。其刻村田久左衛門等內幷御横目一人・御歩横目兩人罷越筈に候條、此人々參出次第、柴左衛門受取指添罷越候樣可被申渡候事。

一、柴左衛門儀駕籠に爲乘、鎖おろし可申候。網懸に者及不申候事。

一、道中足輕四人・小者二人指添申筈に候事。

一、御歩幷足輕等於所口齋藤中務等江申達、指圖次第船場迄召連罷越、致出船候を見屆可罷歸事。

一、若道中一日懸に難成候者、見計爲致一宿可申候。勿論夜中彌入念に勤番、縮宜可仕候事。

一、路次賄料會所より請取、足輕に申付賄方爲致可申事。

一、柴左衛門刀・脇刺者、兩人之御歩請取之、道中は小者に爲持罷越、彼表に而中務等江相渡可申事。

一、路次縮方之儀、其外諸事跡々之格をも承合、前々之通相心得候樣可被申聞候事。

先達は享和三年五月十日

右之通田伏才三郎・平田孫助江可被申渡候事。

〔政隣記〕

一、前六日に有之田伏才三郎・平田孫助儀、森紫左衛門受取五半時過發出、津幡驛に而爲致晝食、暮比今濱着止宿。翌七日朝六時發出、高畠に而爲致晝食、夕八時比所口江參着、同所奉行齋藤中務方江及案内候處、中務幷小代官渡邊直左衛門・早川武兵衛・渡邊八貫・渡邊與八郎罷越候に付、様子申達、紫左衛門渡之、大小中務江相渡候。無程右小代官二人・同所足輕四人指添出船仕、尤才三郎等船場迄罷越、出舟之様子見届罷歸。諸事又兵衛殿被仰渡之趣に相勤、同九日歸着之段才三郎等連名之書付、御用番菊池氏江出之候に付、菊池氏奥書を加へ、昨十日御用番又兵衛殿江被相達段、廻状到來之事。

八月九日。前田齊廣、諸士娯樂の爲自由に能囃子を行ふことを許す。

〔御家老方御密用之覺〕

文化三年八月九日甲斐守被申候。能囃子之儀先達而被仰出置候通之處、左候而は慰にも相成間敷候間、已來は役者相交、自身にも能囃子仕候儀勝手次第に候。しかし其時節により心得可有之与被思召候旨被仰出候。此段當月々番又兵衛より可申談筈に候得共、不快に而出席無之候に付被演述候旨、圖書江申聞候事。

享和三年七月十八日の條參照

文化四年五月廿八日の條參照

八月九日。前田齊廣、御歩の名跡人伺出に關する前令を改む。

〔御家老方御密用之覺〕

文化三年八月九日、享和二年・三年之御親翰留帳、御前ゟ相出可奉入御覽之旨、昨日勘解由を以被仰出候付、主付圖書儀御前ゟ持參入御覽候處、享和三年七月山森貞助名跡伺書に被成下候御下筆之處、此御加筆御文段之內、其子無能無藝之者は不被召抱筈与申所、其儀に付御意被成候は、此文段のみ堅く相心得候はゞ、御不仁之筋にも可相成候間、此所無泥詮議之趣可相伺候。御書改被遊候程之儀に而は無之候と、此段被仰出候旨御意に付、奉畏候、何も可申談旨及御請候事。

八月十一日。本鄕邸內大銀所に於いて銀子紛失す。

〔政隣記〕

一、八月十一日江戶御上邸大がね所に而銀二貫目紛失之事。
但、當詰大がね奉行御大小將三輪釆男・齋藤金十郎。

八月十一日。森幾太郎小立野嫁坂の火災に赴く途上足輕を殺傷す。

〔政隣記〕

八月十一日曉七時小立野ヨメ坂高片原町町家三軒燒失、内二軒大家也。六時前鎭火。但雨火事鎭候後降出。

〔政隣記〕

一、今曉火事鎭候後、年寄衆御川番支配頭分佐藤治兵衛三男幾太郎年十八儀、小立野鷹匠町御大小將和田知左衛門邊に而、御横目足輕割場附當横目加藤要助を及殺害、同役假定役聞番表昌左衛門組石黒萬藏に手疵爲負候處、萬藏儀同邊御大小將水野庄五郎門内に走込、最早歩行等難叶旨申聞相倒候處、追付御大小將横目永原七郎右衛門・山本又九郎・寺西平左衛門罷越、萬藏手疵見分之上、何被仰出之趣有之候間、不及乞檢使旨等庄五郎に被申談候に付、右萬藏引取之儀等御横目中伺指圖候處、無程引取候旨庄五郎より頭村杢左衛門に以書附斷に付、杢左衛門奥書を以御川番又兵衛殿に相達之。但萬藏宅に引取之上療養方之儀、御横目中指圖を以町外科山本玄清療治す。疵後ろ疵に而、耳後より首筋に懸深さ三寸竪八寸計に候得共、咽喉に不懸に付可致平癒与云々。

一、要助檢使乞書付者、佐藤治兵衛より御月番に指出候處、役先之儀に付御横目中より御達申趣有之に付、檢使不被仰渡、殺害之場所に御横目永原等罷越見分、其場に幾太郎呼立樣子尋等有之上、死骸取片付之儀夫々申渡有之。

一、佐藤より樣子書付を以又兵衞殿江御達申候處、同十三日御呼出、幾太郎手前とくと相糺、委曲書付可指出旨被仰渡候に付、同日出之。

一、佐藤書付之趣者、一類伊藤五郎方江火事爲見廻罷越候於途中、足輕躰之者三人過言之上手向候に付及殺害候段御達申候處、猶更相糺委く書出候樣被仰渡に付、重而十三日書出候。書付に者先達而於途中与調出候得共、於火事所与相調、其外取紛書落之趣、且萬藏に疵付候儀者、一圓幾太郎覺無之旨等書出候由之事。

一、萬藏申口之趣者、火事場江馬乘袴着用兩刀帶候者罷越候に付、相咎候處、名前不申聞に付、強而承懸り候內、持有之手鎌下江落し候得者、其儘拾ひ取迯出候に付、萬藏・要助・假御横目足輕割場附森隅喜太夫追懸候處、鷹匠町和田知左衞門邊に而追付組伏、右鎌取返名前尋候處、本名不申聞僞名申聞候に付、組柄尋候得者定番徒与申聞、心得違に候間是切に而赦し候樣誤り候段申聞候に付、喜太夫者火事所江罷越、要助・萬藏者知左衞門門前之方行過相分れ候處、幾太郎刀を拔要助を切殺、萬藏江も手疵爲負、最早難働に付庄五郎方江駈込候由申由之事。

誤りは陳謝の意

［御年譜］

一、御手前三男幾太郎手前被仰出之趣、別紙を以申渡候通に候。元來火事場者無用之者不相

越儀御定に有之、且毎度被仰出も有之候所、申談不行屆故与被思召候。依之指扣被仰付候。

此段可申渡旨被仰出候。

一、御手前三男幾太郎方、去年八月十一日曉、小立野嫁坂火事之節、御用御横目足輕共及申分、石黒萬藏江手疵爲負、加藤要助を致殺害候旨、其節之樣子相尋候所、委曲口上書取立被指出候。右要助及申分候上、致殺害候首尾、左樣にも可有之事に候。依之右に付而は此上不被及御貪着候條、此段可申渡旨被仰出候條、可被申渡候。

（去年は文化三年）

卯　三　月

（卯は文化四年）

右役御免許、頭分佐藤治兵衛江、三月十一日御用番年寄中被申渡。

八月十三日。犀川・淺野川出水す。

〔政隣記〕

八月十三日雨天在壽間。昨夜より犀川・淺野川共出水、常水より八尺計增水。依而御使番・御横目等御役人出、淺野川鈴見村江之往來橋流落、幷御歩町江之假橋も流落、小橋往來留候處、晝より段々減水。右出水に而流落候橋板等取揚爲可申水中江入候者之內、小者・浪人兩人流れ來り候。大木に身を打れ候躰に而、流行衛不知候事。

八月十三日。馬廻組和田長助能登島流刑を宣告せらる。

〔御預人之記〕

和田長助、二百石御馬廻六十七歳。養方弟武兵衛を以て奉願嫡子に相立置候處、長助實子六組御徒和田磯五郎江家督相續爲致度存念等に付、武兵衛儀文化二年九月四日公事場江懸込、養父長助存念之趣相調、一卷上る也。長助同年十二月廿一日山崎伊織長恒四千五百石但定火消役江御預。同三年八月十三日能州島之內遠島被仰渡、未配所に赴かざる內、同年十月朔日伊織儀及病氣大切に付、公事場江御引揚入牢、同年赴配所。

〔政隣記〕

八月十三日、和田長助等今日左之通被仰付落着。

山崎伊織江御預人　和田長助

右長助儀不行狀に付、先年閉門被仰付候處、御免後收納米二重に相拂、切手頭奥書致謀書、申譯無之に付虛病を構、數年引籠罷在、且又實子磯五郎を名跡に相願度所存に而、養父之實子嫡子に相立置候武兵衛を身退候樣に仕成候族等、重々不屆至極に付能州嶋之內江流刑被仰付。

右之趣山崎伊織宅江公事場奉行中川淸六郎・本多左近助・原九左衛門、公事場附御橫目高畠五郎兵衛、御大小將橫目笠間源太左衛門・寺西平左衛門・池田三九郎・土方勘右衛門公事場附御橫目宮井傳兵衛等に

付御大小將より富永右近右衛門（頭中村九兵衛可罷越處煩に付相頭富永罷越。是御横目也。）御歩横目兩人、公事場附與力三人、同御算用者留書一人、同足輕一人罷越、御用番清六郎申渡之。御請判形取立、右與力取噯之。

右畢而配所江被遣候迄、是迄之通伊織江御預之事。

和田長助嫡子　和田武兵衛

右武兵衛儀、父長助實子磯五郎を名跡に相願度躰にて、武兵衛病身之儀等申立、間閣江も可押込躰に相察候者、一類共江及示談候歟、如何樣にも仕長助爲も不惡樣覺悟可有之處、士道をも取失、公事場江駈込、身分を抛長助之不屆相願候段、不孝之至人倫に相欠候族不屆至極に付、急度可被仰付候得共、其儀者御宥免、越中五ヶ山之内江流刑被仰付、縮所江被入置候旨被仰出。

和田磯五郎

右磯五郎儀、父長助磯五郎を名跡相願方所存に而、武兵衛身退候樣取計候儀等悉皆不存旨申、先年女之儀に付不埒も有之、且長助・武兵衛間柄不和之儀幾重にも取扱可申處、其儀無之、彼是不屆之至に付、能州嶋之内江流刑被仰付。

和田磯五郎嫡子　茂三郎

右同人二男　兵三郎

右兩人不締に無之樣、先達而被仰渡置候處、磯五郎儀能州嶋之内江流刑就被仰付候、父依罪せかれ共同刑被仰付候得共、何も幼少に付、十五歲迄一類江御預被成候條、右及年齡候者及斷候樣、一類江可申渡候旨、公事場奉行中連印之紙面を以、頭水越八郎左衛門江申來、八郎左衛門より一類江申渡之。

定番御馬廻組　佐藤淸藏

右淸藏儀、和田長助父子間柄取披方之儀、長助申分不筋と相心得候者、幾重にも理解可申入處、武兵衛儀御奉公難成と申程之病身にも無之者江、身退候儀を申談、殊武兵衛者義理有之者之儀心付も無之、長助申分に隨ひ義を失候族、不埒之至に付閉門被仰付。

右於公事場夫々申渡之上、武兵衛配所江被遣候迄、是迄之通牢揚屋江被入置候事。

附、茂三郎年三歲、兵三郎當歲。

〔政隣記〕

十一月二日、前記八月十三日被仰出候通、和田長助等今日左之通配所江被差遣之、三人共二人扶持宛被下置。

能州嶋之内向田村江　和田長助

但、迄御步狩谷惣藏・渡邊余所助等罷越、六日夕歸。

越中五ヶ山之内大崩嶋村江　和田武兵衛

但、従御歩北村勇作・關助左衛門等罷越、七日夕歸。

能州嶋之内闇村江　和田磯五郎

但、従足輕等附。御歩以下者如此御格与云々。

八月十三日。前田齊廣、その夫人を離縁したることを告ぐ。

〔政隣記〕

付札、御横目江

御前様御病氣に而、去秋以來市ヶ谷御廣式江御逗留之處、急に御全快之躰無之候に付、尾張様より被仰進候趣有之、御双方御熟談を以御離縁に相成、公邊御届も相濟候。尾張様江御通路之儀者是迄之通に候。此段一統可被申談候事。

八月十三日

右於御横目所披見申談有之候事。

〔齊廣様御傳略等之內書拔〕

八月十三日琴姫様御不緣に依て、同日御双方御和順を以て御離緣之儀、將軍家江御達有之なり。右琴姫様後近衞基前公へ御再嫁有之と承るなり。

〔金龍公記史料〕

八月十三日報夫人大歸于幕府。去年閏八月以疾在尾州家。五年三月再嫁近衞内府基前公。改名維君。

八月。諸寺院檀那にして故なく住僧に反抗するを禁ず。

〔政隣記〕

諸寺院後住願之儀、前々之振を以於頭寺に承糺候上、書付を以私共江願出候得者、得与承しらべ、其筋相立申分者承届入寺申渡候。然處後住僧撰之節、其寺院々々之旦那より、歸依或は不歸依与申立、旦家一決不致、其内に者不筋之願方致し、理不盡に申張候族も有之、彼是後住撰方甚指支候。別而近年者右躰之趣度々有之、其内にも町・在之者抔者、菩提寺者自分々々之勝手次第に罷成候物之様心得違候躰に而、人々存寄申立、書付等頭寺或は其組合寺江指出候族多く御座候。一通り者納得之否可申出儀にも候得共、不歸依等之趣意相立不申、我意を申張候儀者決而有之間敷儀に御座候。且入寺之上にも左而已事不分儀を申立、住持心得不宜不歸依抔申立候者も有之、甚心得違之至奉存候。以來右躰心得違之族無之様、夫々急度被仰渡御座候様仕度奉存候、以上。

五月六日　　　　　　　　　　前田式部

竹田掃部
中川清六郎

長甲斐守様

付札、定番頭江
別紙寫之通被得其意、組・支配之人々江可被申渡候。組等之内裁許有之面々者、其支配江も相達候樣可被申聞候事。
右之通一統可被申談候事。

八月

九月八日。金澤神護寺に於いて德川家治の廿一回忌法會を執行す。

〔政隣記〕
九月八日於神護寺、浚明院様二十一回御忌御法會御執行。甲斐守殿等詰、中將樣四半時御供揃に而、御裝束被爲召、御法事御奉行より御案内被申上次第御參詣之筈に候處、御延引被仰出。

九月九日。本鄕邸内なる梅之御居宅を梅之御殿の舊稱に復せしむ。

〔政隣記〕

九月九日重陽爲御祝詞登城、於柳之御間御年寄衆謁、四時頃退出。且於御帳前、左之通披見申談有之候事。

付札、御横目江

梅之御居宅之事、最前之通梅之御殿与相唱候樣被仰出候條、此段寄々一統可被申談候事。

九　月

九月十九日。金澤卯辰圓光寺相對勸化を許されたるも若し强請せば之を却くべきことを郡中に告ぐ。

高田彌左衞門は郡奉行

〔筒井舊記〕

今日高田彌左衞門樣より被仰渡候者、當地卯辰圓光寺儀、御領國相對勸化相願、御聞屆之旨に而、右寺役僧御屋敷江罷出、御取扱宜敷相願申段御取次を以申上候に付、取扱与申者不相成段又御取次を以被仰渡候。其後茂御屋敷江罷越候得共、折節御留守之砌に而罷歸候由。就夫此節右圓光寺役僧等、御郡江勸化に罷出候樣子御聞請被遊候間、必村方役人始堅取持抔不致樣可申渡置、誠に相對を以一錢・二錢宛遣候儀者御貪着不被成旨被仰渡候。乍然右勸化之儀、御郡奉行江内分も申入置候抔与威しを懸申樣之儀有之候はゞ、相對に而一錢・二錢遣候儀も堅爲致申間敷旨、内分を以可申遣置樣に被仰渡候間、左樣御心得可被下候。此廻狀先々御

順達、落着より御返可被下候、以上。

九月十九日　　番　代　清　藏

仲　間　宛　所

十月十三日。三十人組喜兵衛儀に人を殺害したる罪を許さる。

［政隣記］

十月十三日左之通落着被仰付。

覺

三十人組　喜　兵　衛

右喜兵衛儀、前田土佐守家來步組大矢軍太与及口論候處、軍太儀喜兵衛宅ゟ不法に切込、難得止事軍太ゟ切付候處、右疵所に而無程相果候旨。前之通り口論等に而人殺しいたし候者は死刑被仰付候得共、元來軍太儀不法至極理不盡之致形に付右之首尾に候。依而相手軍太相果候得共、格別之趣を以御宥免、御奉公爲相勤可申旨被仰出。

右之通十月三日於公事場申渡有之。尤同日より出牢、如最前御奉公勤仕被仰付。

一、前田土佐守殿家來步組福嶋儀八幷三十人組增右衛門儀、右一件に付不埒至極之趣有之候得共、喜兵衛儀御宥免被仰付候に付、兩人も頭幷主人ゟ御預之處、同十三日御宥免。

右趣意は、七月廿三日三十人組喜兵衛居住町寺町法照寺門前組合之内絹屋某後家きよ病死に付、組合之者寄集り候處、後見平栗屋某不參に付呼寄、喜兵衛遅參之趣相咎候處、組合之内箱番大屋軍太承之申樣、喜兵衛儀近く此組合ゟ罷越者に候處、箱番之此方を閣き遮而之申條難心得旨等申募、喜兵衛之陰囊を抓み候に付、双方組合候內、喜兵衛着服大に裂け見苦く相成、一先我家ゟ退候處、妻申樣、追付軍太可參候間暫可隱旨申に付、法照寺ゟ罷越居候處、果而軍太參り、喜兵衛に可逢与申候得共不在合。然處喜兵衛幼娘爲病に而臥有之候を、軍太儀横腹を踏付罷歸。依而病氣指重及大切に付、法照寺より喜兵衛を呼越、喜兵衛歸致看病有之處ゟ、軍太儀赤裸に成重而罷越、蚊屋之外より切付候に付、喜兵衛蚊屋より出候處ゟ、灰を握り居候而蒔懸候に付、難得止事を切付候處、軍太被切倒れながら助け候樣に申、無程相果候。其節追而可有御詮議与留めは態与不刺由云々。但、右病娘も無程致病死候事。

十月十八日。諸方土藏奉行等保管の銀子を紛失せしめたるを以て閉門を命ぜらる。

〔政隣記〕

十月十八日於公事場左之通被仰出之趣申渡有之。

定番御馬廻　疋田半平

組外　高柳宇左衛門

右兩人諸方御土藏奉行被仰付置候處、去々年十二月廿日、御土藏戸前之封等に相替儀無之候得共、御かね箱積方も違、二箱輕く候旨銀見共申聞、半平儀封切遂見分候處、御かね無之、二十貫目致紛失候段、御流例平日勤方油斷之族も有之、不調法之至に候。殊に半平儀者銀見勘右衛門弟之銀子之由に者候得共、役先之者より致借用罷在、其段御番頭江達方も不宜、別而不埒に候。依之急度可被仰付候得共、勘右衛門儀御かね盜出候段一旦申顯、其後申替吟味未決之内致牢死、甚疑敷相聞候付、兩人共役儀被指除閉門被仰付。

十一月九日、江戸に於いて諸士の琉球人見物の爲外出するを許す。

〔政隣記〕

今般琉球人爲見物、御家中之人々可罷出候。左候得ば小屋々々人少にも可罷在候間、火之元之儀格別入念に相心得、麁抹無之樣家來末々迄嚴重可申渡旨、前田兵部殿御申聞被成候條、御承知被成、御組・御支配、且又御組等之内裁許有之人々は其支配江も不相洩樣御申談可被成候、以上。

十一月九日　佐藤八郎左衛門

諸頭連名樣

〔政隣記〕

覺

一、琉球人見物に罷越候人々、御作事方御門明け六時より勝手次第罷出、夜に入罷歸候而も不及證文候事。

一、見物人名書、前日九時迄之内御横目所江御指出可被成候。且又御組・御支配之分も、御聞屆之上是又御指出可被成候。

一、又者之分、主人承屆別紙案文印章之切手致持參、御門方江割場方より役人指出置候間相渡、罷歸候節も相斷入可申事。

但、夜に入罷歸候而も不及證文、且又右切手に而罷出候間、常之小札持參に不及候事。

一、琉球人來着之節は、曉七時より罷出、歸國之節は曉八時より罷出候儀、勝手次第に候事。

十一月十日。領内の船舶税を改めたることを告ぐ。

〔眞舘留帳拔書〕

加越能三州共船役改、左之通。

一、外海舟擢一枚役、是迄之通七匁。

一、獵舟櫂一枚役、同五匁。

但、内潟てんと舟、幷射水郡に而沖網場より諸魚積送り候小舟共。

一、礒獵舟幷内潟板舟・耕作通船・川獵等品々小舟一艘役、三匁。

一、他領等より借船相用候而も右應候役立之事。

以上

右に付札

本文射水郡に而沖網場より諸魚積送り候舟、是迄別に役取立來候得共、二重役に相成分は以來取立申間敷候事。

諸郡散小物成銀取立方等、致混雜候儀も有之、役立等之趣當時詮議中に候處、右之内先般役之分迄相改、別紙之通り取立候樣散役裁許江申渡候。依之各手合に而、先達而舟極印被入候分も、右に准じ當年より役銀可被取立候。此外諸品役立等之儀、來春に懸り遂詮議可申談候條、此段も申達置候、以上。

十一月十日　　御算用場

高田彌左衛門殿

中村逸角殿

右寫之通り申來候條、得其意、役銀取立方之儀以來本文之通可相心得候、以上。

高田彌左衞門

能州四郡十村中

追而先々相廻落着より可相返候、以上。

十一月十二日。前田齊廣、その乘馬檢閲に關する老臣の進言を慊らずとす。

十一月十二日

左之御親翰以表三郞被渡下。

勘解由より別紙差越、令披見候處、紙面之趣此方不官故歟一圓合點不參候故、則別紙相達候條、御手前可被致披見候。先以家中之者共乘馬申付候とて、事々敷外聞もいかゞ抔申儀可有之樣も無之事に候。たとへば備立とか申樣なる軍法に拘り申儀を時ならず申付候はゞ、成程にも外聞もいかゞと申事も可有之哉。しかし是とても平生相たしなみ申筋に候得者、折にふれ申付間敷事に而茂無之處、況一通頭共之乘馬申付候とて、か樣に事々敷申越候儀いかゞ之了簡に候哉。都而いぶかしく存る事に候間、則別紙相達候條可被致披見候、以上。

［於江府御親翰帳之內書拔］

十一月十二日
長　甲斐守殿

猶々申遣候。右之紙面は吉左衞門を以差越し、口上に而も申聞候は、此度之儀は何分差止候樣に致度与申越候儀等、一圓難辨候。猶委細被承度候はゞ、吉左衞門被申含可遣候間、相尋可被申候、以上。

本多勘解由　上

昨日詰人頭分乘馬御覽可被遊旨被仰出置候得共、雨天に付御延引之段昨日奉承知候。尤何与歟御樣子も御座候而不被爲得止事御覽之儀に御座候へば、御格別之御儀に御座候へ共、當夏以來異國船漂着之砌、御手當內しらべも被仰出置候御時節之儀、別而人々耳目も新たに相成居申儀。且は不斗御外聞も事々敷相成候而は、此表之事御座候間、都而如何敷樣に奉存、私式甚恐多奉申上兼候へ共、何分にも被爲成候御儀に御座候はゞ、此度之儀は先御延引被遊、來春御歸國之上御覽被遊候はゞ御宜樣に奉存候。右之趣存付申候故、不奉顧恐奉言上候、以上。

卯十一月十二日　　本多勘解由　判

十一月。義に足輕及び坊主の綿衣着用を令したるを緩和す。

〔典制彙纂〕

十一月。足輕・坊主僧上に相成候。御公界向御用相勤候節御仕着小袖等被下候分、當分綿衣着用可仕旨申渡候得共、指支之品有之分絹羽織着用承屆候。小袖御仕着被下候分、幷御貸衣類之儀も、前々絹羽織等相渡候分、以前之通被仰付旨。

十二月十六日。前田治脩在國の期限延長を請ふ爲に使者を命ず。

〔政隣記〕

十二月十六日、相公樣御入湯御願之御期月來年二月に付、今二十ヶ月御入湯被遊度御願延之御使、御大小將高山善四郎ゟ今日被仰付、來正月八日御當地發足之筈に被仰渡。但善四郎儀御使御用相濟、直に江戶表に相詰、古詰之者之可致交代旨も被仰渡。

十二月廿一日。金澤城石川・河北兩門に於ける與力番人の作法に關して質す。

〔政隣記〕

兩御門與力御番人、年寄中等往來之節當時會釋方緩怠之躰被聞召候。御火災已前者、板之上ゟ罷出つくばひ慇懃會釋仕候由。如何之譯に而當時之身躰に罷成候哉、此段相糺可申上旨被

仰出候事。

寅十二月

右今月廿一日於御次關屋中務を以被仰出。依之寺社奉行御用番前田式部宅江河北・石川兩御門御番人與力、一組より兩人宛召出、被仰出之趣申渡之。左之紙面取立之。

私共御年寄衆等御往來之節、御番所江御會釋之節、身躰當時緩怠罷成候躰被聞召、御火災以前与當時之樣子、被仰出之趣を以御糺被成、奉得其意候。元來御番所建方、往古者三之御丸御番所之通緣御座候而、緣江罷出者座仕候由。其後御番所板、足輕番所下座板与同樣之趣に相成候に付、當時之身躰に押移り申候樣承傳申候。御火災以前者つくばひ候与申儀、舊記傳承之趣存居申者無御座候。乍然當時之身躰不宜儀も御座候哉、緩怠之躰被聞召奉迷惑候。右等之趣に御座候間、宜御達被下候樣仕度奉存候、以上。

寅十二月廿二日　河北御門等御番人與力連名　判

但一組合宛

前田式部樣
中川清六郎樣
竹田掃部樣

十二月廿二日。賭博及び類似の行爲を禁止するの令を新たにす。

〔政隣記〕

かけの諸勝負者御制禁に候處、近年町・在之者共右樣之勝負事に携り、不埒成爲躰に候。此等之儀に付、今度町奉行等ゟ申渡候趣有之候。御家中召仕候輕き者共之內にも、不愼之者は右樣之出會に相交、小身之人々抔は畢竟子弟成立にも相障候躰。將又正月者勝手向等に而小兒抔之遊事与名付、博奕に似寄候慰事有之、不苦儀之樣存候族も候躰相聞え候。たとへ遊ひ事に候共かけもの仕、勝負を以慰といたし候儀者御停止之事に候條、其主人々々より堅制禁可仕候事。

かけの諸勝負等之儀に付、寛政元年以來別紙寫之通一統被仰渡置候通り、猶更違失無之樣急度可申渡旨被仰出候條、被得其意、組・支配之人々ゟ可被申聞候。組等之內裁許有之面々者、其支配ゟも相達候樣被申渡、尤同役中可有傳達候事。

右之趣可被得其意候、以上。

十二月廿二日　村井又兵衛

十二月廿六日。貰ひ子を殺害したる女を磔刑に處す。

〔政隣記〕
十二月廿六日上口於泉野町外礫被仰付、爲檢使御先手物頭音地清左衛門・高畠安左衛門、公事場附御横目不破東作、同所附與力兩人等罷越。捨札之寫左之通り。

かせぎ人熊走屋吉次妻

はりつけ　　　　よ　け

此者舊惡も有之、其上やしなひ子を口入いたすべき旨申、所々より小兒四人度々に請取、付錢を取、子は殺し、家下等に埋置畢。大罪露顯之上如此申付者也。

十　二　月

右之者、組外半圓新左衛門せがれ御算用者半圓佐介致離縁候妻腹の男子も、右四人之内也。依而佐介儀於公事場指扣被仰付。

但、佐介幷父新左衛門儀も指扣被仰付有之候處、佐介儀者改而如本文。

是歳。十村等、百姓の稼・奉公に從ふもの以外に送狀を與へざるべきを協議す。

〔上田舊記〕
一、人別縮方之儀、寛政六年以來被仰渡置候得共、御郡方數年等閑に相成居候に付、行屆不

白山下御料は同十八ヶ村、御預所は能登に於ける幕府領

申に付、今般相改申度旨御算用場より、御席村井又兵衞樣へ御達有、相改候品々左に記。

一、他國者先年親元相立、御國之内緣組等申合、當時出生も持候者有之、不埒至極之儀に候へ共、數年罷在出生迄も有之者、本國江今更相返候儀も難忍、仍而只今迄之分は其儘指置可申、尤寺送り人送り取請、他國之人別を爲切可申候。以來は他國者緣組申合候儀は相成不申、若他國者居候へば御關外江送り出、爲便置候者幷村役人急度可被仰付旨。

一、白山下御料・御預所者、幷富山・大聖寺御領之者も、是迄御國之内へ罷越居候者は指置、前條同樣人送り等受取可申、尤以來は養子等緣組申合候儀不相成旨。

一、御郡之者、御家足輕・小者に相成候者之儀、不埒至極成儀に候得共、是迄之分は人別方等閑故、右樣足輕等に相成候譯に而、此分帳面に仕立可書出、尤人別を切可申、尤鍬役米取立申間敷旨御算用場より觸付。

一、百姓子弟等御家中へ奉公に罷出、譜代に相成候者も有之樣子。此分も前條同樣、是迄之分は締方不行屆故之儀に候間、帳面に仕立可書出、尤以來右樣譜代に罷成申度節、其者より村役人へ相斷候上願出候はゞ、無據分は先々主人へ御郡奉行より及懸合、無相違候はゞ人別を切、鍬米取立不申樣可申渡。且御坊方・町宿之者江、御郡之者緣組申合候節も、前條同樣相心得、以後不埒之至於有之者、本人始急度可被仰付旨御算用場より觸付。

一、御郡之者御家中役小者に罷出候儀は、都而一季奉公人同様、稼に罷出候譯に而無之而は指支候。作方用事に付村方へ呼戻候儀、或者公事出入に付御郡奉行へ呼出候節、罷出可申旨送狀に相調、十村奥書を以相渡、主人方には右送狀を證據に召抱可申、請合狀之內にも村送り狀有之段爲書入、請人一人は居村之者、一人は町方之者可相立旨、御算用場より御郡所へ觸付。

右人別調理方、文化元年以來段々被仰渡、巨細に帳面に仕立書上置、右帳面之上を以御郡所より御算用場へ達に相成候處、御場より前條之通り文化二年被仰渡候事。

一、人別縮方之儀段々与被仰渡、村方人別幷御家中・寺社方・町方等他手合ゟ奉公稼等に罷出申者、帳面に記、御郡所ゟ達置、御穿鑿も有之候得共、諸郡洩々之儀有之、全御仕法行屆兼申躰に而、町方等ゟ奉公稼方に罷出候者、送狀無之候而も居留り候樣に相成候。十村方へ送狀相願申者有之、盲人・蹇等之類、病身に而耕作之用に立不申分、御郡所・改作所ゟ相願送狀相渡候へ共、病に託し相願候類際限も無之。尤前々被仰渡も有之、百姓・頭振に而も作人一代送り之儀は、容易に御聞屆無御座故、十村手前に而も取揚不申、礪波・射水十村共より僉議方相達候通り、稼人等送狀相願候者共ゟ卒爾に送狀難相渡、其內には不一樣成儀有之、不心服之趣も出來、おのづから洩々に相成候儀に而、諸郡御扶持人僉議之上、右一代送り之儀

古來より御樣子も有之、頭振たりとも容易に送狀指遣候儀難相成。其內盲人等作方不用立者は爲願可申、其餘病身等申立候者紛敷に付爲願申間敷、小高持たりとも實に御郡方渡世仕兼候者は、村役人僉議之上聞屆送狀可指出時は、裁許より其郡御扶持人へ示談之上、裁許十村聞屆裏書仕相渡候事に仕候者、縮方可相立旨。右稼人・奉公人送狀之儀相願、御郡所等聞屆を請可申旨に候得共、追々願出候分不少、彼是混雜、却而御縮方相洩申所江至り可申に付、右之通御扶持人幷裁許より聞屆申樣仕度、此段町御奉行所等江御通達有之樣仕度。尤稼方・奉公人送狀持參之者は、先々に罷在候內故障等致出來候而も、先々御支配之取捌に被仰付、落着の上品に寄御郡江御返に候得共引受可申旨、文化三年諸郡御扶持人より加州・能・越御郡御奉行江小紙を以相達候。仍而稼・奉公人之外、一代送り之儀は願方指留、送狀指出申間敷旨諸郡一統相談也。

是歲。町奉行歌舞伎狂言興行を許すべきを提議し、家老等之に反對す。

〔諸事覺帳〕

町方人氣和し候樣有之可然被思召候。依之町奉行心付之程調出候樣、先達而表方江被仰出、則右奉行江申渡有之候處、奉行手前に而詮議之上、歌舞伎狂言興行いたし可然、右ヶ所之儀は千日町町端に五十間四方計之地面等圍、夫々縮方等之仕法付等指出候付、年寄中僉議候

上、指支も有之間敷、自然申分等出來不宜候はゞ、其節被指止可然候間、御聞屆之段可申渡候。夫に付御家老中了簡も無之候はゞ可奉伺旨、前月御用番左京被申聞候付、於御家老方申合候趣左之通に付、其段申達候處、左之通迄之了簡に候はゞ申上兼候間、御家老中より直に可言上候。則其趣は月番より可被申上旨演述候。今二日玄蕃・圖書・織江三人御前に罷出、左之趣了簡之程段々申上候事。

町方人氣和調之儀に付、今般町奉行より書出候紙面之趣、尙更私共存寄可有之哉之旨、月番より申聞に御座候に付思慮仕候處、町方近年質素に罷在候內、近頃者何となく人氣和調不仕、偏に潛み罷在候樣子に候。町人者專諸職交易に携罷在候者ながら、人氣和調不仕候而は、自から世上之不通にも可相成候間、何れ歌舞伎狂言樣之儀興行仕候はゞ可然、就夫右仕法も相立、御締方も嚴重に仕候而、永く相續候樣有之度候。左候へば往々人氣も和調可仕旨、右奉行書面之通御聞屆被仰付可然哉に奉存候へ共、私式愚意に存付候は、右之通に御座候而可然儀とは不奉存候。町方之儀は右奉行裁判仕、當時符合之詮議に可有御座候へ共、今一篇何とか詮議方も有之間敷哉。此度右之通歌舞伎狂言樣之儀興行仕候と而、惣樣人氣之和し候等申儀いかゞ可有御座哉、會得仕兼申候。是迄數年御城下において、右樣之雜劇興行仕候儀も承及不申候處、今更相始候はゞ、却而下々風俗之害共可相成哉。元來歌舞伎狂言抔は、誠

に謡俗不正之猥褻に而、下賤幼愚之輩及見聞候はゞ、一端は歡喜可仕哉に候へ共、往々俗情に押移、農工商之正しきを失し、戲子之比類を見習、おのづから放逸懦弱之風俗增長可仕哉与奉存候。殊に水茶屋抔も營候躰に候へば、右見物人のみならず誰彼入込、其内には如何程之不埒出來可仕成も難計、必中分有間敷とも不被存ものに御座候。其上右興行之場所一圓之地取は、廣き樣に相見候得共、元來道幅も狹く候處、群集仕候而は必往來之指障にも相成、田畑も踏荒、彼是不可然儀に奉存候。自然御聞屆之上中分等出來仕、可指止旨被仰出候而は、御聞屆之詮議無之、剩下々に而は莫大之費可有御座与奉存候。右之趣に付、決而不可然儀与申上候儀に御座候。乍然紙面之通御聞屆之御治定に御座候はゞ、猶更御算用場奉行・御郡奉行手前も篤与御詮議御座候而、被仰付可然哉与奉存候事。

文化四年

正月朔日。前田齊廣金澤城に於いて年頭の禮を行ふ。

〔政隣記〕

元日快晴、今朝六半時揃に而諸大夫衆等・御家老中・若年寄中年頭御禮被爲請、夫より鶴庖丁御覽。畢而於柳之御間、人持・頭分獨禮被爲請、一先被爲入。重而於御同間、御大小將・御射

手・御異風・新番・御醫師・御儒者一統座付之御禮被爲請、且御表小將等於船之間、一統座付之御禮被請、惣様九時過相濟候事。

但、近例之通諸大夫衆も長袴に而御禮被申上候事。

正月二日。松囃子の儀を城中に行ふ。

〔政隣記〕

二日晩御例之通就御松囃子、七時過より追々登城之處、暮過列立、暮六時頃柳之御間江御出、左之通御囃子等始る。御年寄衆等御盃被下之、御肴御直に被下之、返盃被仰付。御家老衆・若年寄中同斷、返盃者不被仰付。夫より役懸り（定火消之外）人持・定番頭以下物頭並（御城に役所溜有之分迄并學校御用之人々迄也）迄御流御土器被下之、御肴役年寄中。五時過迄に夫々頂戴。畢而繹々（よと書じより）御囃子波吉宮門（但例之竹田儀兵衛相勤候得共、今年出府無之、諸橋權進痛有之不相勤に付、宮門勤之、高砂も同斷也。）舞納候所江、若年寄中御時服之御目錄持出渡之。波吉宮門御目錄頂戴被仰付難有仕合奉存候段取合言上。右之外委曲は別冊諸御作法書之内に有之。

附、御盃等頂戴之人々御禮無之。併初而頂戴之人々者居殘、御月番席江出御禮申述退出。

四海波　御土器御取揚之節謡之　　宮　門

高砂　宮門　次三郎　專次郎　太郎右衞門　市十郎　　松高き　陸之丞

東北　陸之丞　平七　勇藏　多嘉藏　　長生の家　波吉 甚二郎

祝ふなる　波吉 五郎兵衞　　松が根の　宮門

長き命　陸之丞　　此御代に　甚二郎

庭の砂　五郎兵衞　　桑の弓　宮門

老をだに　陸之丞　　初春の　甚二郎

松も木高き　五郎兵衞　　雲かと見えて　宮門

名取の老女　陸之丞　　よしや吉野　甚二郎

或は詩歌　五郎兵衞　　かゝる奇特に　竹中 甚助

友なひ語らふ　角間屋 文次　　秘曲傳へし　柳川 仝作

貴や大原や　宮門　　君が代は　陸之丞

せうの岩屋　甚二郎　　盛なる藤　五郎兵衞

かやうに名高き　宮門　　庭には金銀　陸之丞

ゆるすゆゑかや　甚二郎　袖ひぢて　五郎兵衛
春は廿露　宮門　夜聲もいとゞ　陸之丞
幾久し神松　甚二郎　難波の梅　五郎兵衛
君かしこしや　宮門　光ぞ增る　陸之丞
君八千代まで　甚二郎　此外御流相濟候小謠諷之。
猶々世も盡じより　宮門　佐六　亥子之助　金三郎　呂次郎

一、御銚子御表小將井上靱負、御流御銚子、御大小將飯田半二郎・山口左次馬・大河原彌太郎・寺西庄兵衛、役者指引御大小將平岡右近・加藤直次郎勤之。但御銚子御表小將神田忠太郎相勤候筈之處、依風邪御番引に付、扣より靱負勤之。

正月廿八日。徳川家齊の前田齊廣に贈れる鶴金澤に着す。

〔政隣記〕

正月廿八日餘寒御尋之宿次御奉書、且御拜領之鶴、今月廿二日江戸發、今朝六時頃金城に到來。鶴は五時頃到來。加州御郡奉行宮崎久兵衛・小幡左門罷出、御用番山城殿登城、御作法等都而前々之通。右に付御禮江戸表に被差出候御使、御馬廻頭中村九兵衛に被仰渡、明後晦

日發足。

但、晦日相延、二月朔日發足。

〔政隣記〕

二月廿八日今度御拜領之鶴、就御省略中表立御披不被仰付、年寄中・御家老中・若年寄中幷御近習向頭分迄、今日右御吸物等頂戴被仰付、給仕都而席懸り坊主。

但、頂戴人熨斗目着用。且年寄中常之席、御家老中者年寄中席に而頂戴、若年寄中者自分席に而頂戴之事。

正月。前田齊廣、諸士の風俗を正しくし文武を勵むべきことを諭す。

〔異本三守御譜〕

文化四丁卯年正月、諸士風俗等之儀に付、御入國以來段々被仰聞置候處、近頃は何となく等閑に相心得、中には文武之心懸もうすく、無用之參會、子弟之成立等不宜人々も在之躰被聞召、以來先達て被仰渡候御趣意、急度相守可申旨、御親翰を以て被仰出。御親翰は御馬廻迄被成下、夫々申談候樣就被仰出候、諸頭へも御馬廻頭御用番前田甚八郎より傳達あり。御請甚八郎より引請申上候筈に候旨なり。

諸士風俗之儀に付、御入國以來段々被仰聞置候處、何となく近頃は等閑に相心得候哉、中には文武之心懸も薄く、或は無用之參會もいたし、子弟之成立等心懸も不宜人々も有之躰に被聞

召候。依之今般改て被仰聞候條、以來彌以無油斷、先達て被仰渡候御趣意急度相守り可申旨、夫々尙又可申聞段、諸頭等へ可申談候。其上にも相改不申族も有之候者、其段可奉達御聽旨、御親翰を以私共へ被仰出候事。

正月　幕府前田治脩の今二十ヶ月在國すべき請を許す。

〔御年譜〕

一、正月相公樣從是二十ヶ月御在國被成度旨、御願之通被爲蒙命候事。

二月十日。前田治脩二十ヶ月在國を許されたる報金澤に至る。

〔金龍公記史料〕

二月十日。太公在國更延二十月之請見許之報至。

二月十八日。前田治脩の病を診する爲京都の醫畑柳啓金澤に着す。

〔政隣記〕

二月十八日京都禁裏御番醫師畑柳啓、今般就被爲召候に付罷下り、今日夕方旅宿菅波屋江參着。行粧五十人、最初劍梅鉢金紋附候藥箱爲持之、薙刀等、駕籠脇侍分六人、供乘物三挺弟子幷重立候家來之由。等、右旅宿に始終相詰有之。從此方樣御賄被下候者は三十九人、其餘は宿次人足

之由。且禁裏御番幷御ヒ相見も仕候得共、京都町醫与云云。
右柳啓被爲召候御入用金二千兩計与云々。是相公樣舊冬以來御風疝之御氣味に而、御勝れ不被遊に付而也。

二月廿五日。畑柳啓、前田治脩の病を診す。

〔政隣記〕

明二月廿五日、畑柳啓法眼就登城、今日御横目所御作法書向々に披見申談有之。則左之通。

　畑柳啓法眼登城之事

一、途中町下代誘引に而、表御式臺迄罷出候はゝ、御小將出向誘引、虎之御間上之間に相通し、町奉行罷出致挨拶可申候。給事御歩、御茶・たばこ盆出し可申候。追付組頭之内罷出及挨拶可申候。其後御小將誘引、柳之御間二之間に相通、組頭及挨拶可申候。其次年寄中之内罷出及挨拶可申候事。

一、於柳之御間御料理等被下候間、其節給事御歩、指引小頭。其節組頭罷出及挨拶可申候。

　但、相作御醫師之內。

一、御横目指引之事。

　以上

右摘刻限九時當服之事。

右柳啓法眼參着後は、廿日金谷御殿江被爲召、相公樣御診被仰付候上、御療治被仰付、御藥上之。同日二汁五菜之御料理等、御濃茶等、後御菓子迄被下之、給事坊主。廿二日御診に罷出、其節は御餅菓子・御吸物・御肴、後御菓子。廿四日罷出候節は、糸溫飩・御酒等被下之候事。

〔政隣記〕

二月廿五日、昨日記之通今日八時前畑柳啓法眼登城。御作法書之通御大小將吉田直九郎誘引、町奉行岩田傳左衛門、當番組頭堀平馬御小將頭、御年寄御用番左京殿挨拶。從柳之御間筋違御廊下迄、當番御横目飯田半六郎誘引。夫より御表小將横目誘引、御居間江者御近習頭誘引、御診被仰付。柳之御間二之間へ復座之上、御醫師横井元秀相伴に而、左之通御料理等被下之。

（獻立略）

〔續漸得雜記〕

恭奉加州前太守宰相金澤侯嚴命。伏診尊體不豫之狀。謹按疝癖之證。貴脈。左弦數。右緊數而濇。右脇拘急。心下悸動。少腹稍軟。帶脈不固。大便滑。小水自若。奉饌如常。法曰。弦數爲減。緊濇爲毒。肝木乘脾土。中州之氣。不得轉輪。弗養元陽。恐發風狀矣。此積聚之

久。非一日所能致。唐書載王太后之疾。欲急効而不獲。一醫進藥數年。得全癒。詩云。池之竭矣。不云自頻。泉之竭矣。不云自中。覆棄枝而固其本矣。治方。百一選方。回陽保攝。宜聊奏微績。此方也當否未可知焉。吐露管見。以竢醫之高案爾。

回陽湯方

益智　木香　半夏　附子　呉茱萸　陳皮　青皮　乾姜　甘草

右九味。水二合。煎取一合。

文化丁卯二月　　畑醫學院法眼柳啓拜

二月廿八日。河北郡南森下の百姓傳兵衞ばんどりを製して藩侯に上る。

〔政隣記〕

加州南森下村傳兵衞と申百姓、今年五十歳也。此者御上之御恩を奉思付、多年ぬるご之内宜分二三筋宛撰出、去年迄に大体ばんどり一つ分程溜り候に付、舊冬寒中三十日清水に曝し、能々相和らげ、尤糸等も自分手に懸水に晒し、青く染め、今年元日よりばんどり仕立に取懸り、納戸之内に新莚を舗置、其所に而仕立之、外ゟ立出候砌者度々手洗ひ口そゝぎ、清淨に仕出來。依之献上仕度旨夫々相達候處、志之程難打捨に付、御郡奉行へ相達候に付、平生之様子右奉行より尋有之候處、人品格別之心得之者に付、御用番御年寄衆ゟ御達申候處、奇特

げんどりは蓑の稍小なるもの

二十八日は二月

之至に付右ばんどり指上候樣に仰渡有之、則一昨廿八日右奉行御席江持參上之候事。

但、右ばんどり仕立方、見事至極成事に而、絶言語候事与云々。

〔耳底雜記〕

付札、御郡奉行へ

河北郡南中條村頭振

一、三　俵　　傳　兵　衛

右傳兵衛儀常々御上之御恩澤奉存候に付、爲冥加ばんどり獻上仕度旨、多年心懸致出來候に付、恐ながら今般指上度旨相願候趣、委曲各紙面之趣相達御聽、ばんどり指上候處、御差留被成候。多年心掛右躰候節之致方等、奇特成儀、其上母へ致孝心、彼是稀成志の者に付、爲御褒美如此被下候條、此段可被申渡候事。

卯　三　月

但、右傳兵衛父常々幼年之頃より申聞候者、稻のしとての穗を取てばんどりに仕置着候へば長命する事、古來之ためし有と云共、誠に多年心懸なくては出來不申与物語する故、十八歲の頃より存立、每年諸方尋候へ共、しとての長きは殊之外稀成者にて、年に五筋七筋より多く無之に付、數十年心懸、文化四年卯三月出來仕候。織中度々に水をかき候而出來

候。古今稀成者に付此所に委曲を記す。

是月は大盡なり

二月晦日。前田齊廣經武館に臨みて武技を閲す。

〔政隣記〕

二月晦日武學校へ八時頃御出。武藝師範人門弟之內、中段以上等に而當時入情之者書出候樣先達而被仰出、則夫々より書出置候內、左之通御覽。畢而今日御覽被遊候處、達者に思召候旨御意之趣、學校御用井上井之助等演述。

二月晦日。畑柳啓に物を與へ、明日を以て歸京の途に就かしむ。

〔政隣記〕

二月晦日、畑柳啓法眼（元來三十日之御暇に而罷下候由云々。）御用相濟御暇被下之、明朔日御當地發足罷歸候に付、今晦日旅宿へ御使者御使番久世平太郎を以御意有之、白銀百枚・生絹十疋（極上之由）・串海鼠一籠被下之。從相公樣茂白銀五十枚・鰍筋一籠、右同人を以被下之、御內々を以紋綃三端於金谷御殿被下之。

但、今般柳啓罷下り候節、同人弟畑柳泰（兄柳啓より者却而醫術上手之由云々。）も同道罷越候に付、柳泰儀者御指留に而相公樣御療治被仰付。

右柳啓儀、京都發足前爲旅用金百五十兩被下之、御當地旅宿へ參着之日者二汁五菜之御料理

等被下之、翌日より旅宿に而取計、御賄代柳啓者七匁五分、柳泰者五匁、若黨幷弟子三匁、小者二匁宛之圖りを以相賄、發足當日者二汁五菜之御料理等被下之。本文之通に候得共、内々御賄代銀を以受取之、自分家来に申付、食品壹菜を以爲相計、朝者粥を給候由等云々。勿論柳泰並若黨以下も同斷。將又歸旅用金重而百五十兩被下之。

三月十三日。前田齊廣金澤を發して參覲の途に上る。

〔政隣記〕

當春御參勤御道中十二御泊附等

金澤森下御小休、津幡御中休、倶利迦羅御小休、今石動御泊。六里三十五町

福岡御小休、高岡御泊。四里

小杉下村御小休、東岩瀬御中休、西水橋御小休、魚津御泊。十一里三十町

三日市御小休、浦山御中休、船見御小休、泊御泊。八里四町

境・雅樂御小休、青海御中休、糸魚川御泊。六里廿四町

鬼伏・能生・遠崎御小休、名立御中休、有間川・五智御小休、高田御泊。十二里十八町

荒井・關山・二俣御小休、關川御中休、柏原御小休、牟禮御泊。十二里十六町

新町御小休、丹波嶋御中休、南糸村・矢代・下戸倉御小休、榊御泊。十里十八町

鼠宿・上田御小休、海野御中休、小諸・馬瀨口御小休、追分御泊。十一里十八町
輕井澤・はね石御小休、坂本御中休、松井田・八本木御小休、板鼻御泊。十里七町
高崎御小休、落合新町御中休、本庄・深谷御小休、熊谷御泊。十二里七町
吹上御小休、鴻巣御中休、上尾・大宮御小休、浦和御泊。十里十二町
蕨御中休、江戸。五里廿八町

〔政隣記〕

三月十三日爲御見立六半時過より登城之處、五時御供揃に而金谷御殿江被爲入、四時過御歸殿、同半時頃御供廻被仰出、九時前甚御機嫌克御發駕。其節御式臺鏡板江御城代前田伊勢守殿・村井又兵衞殿、年寄中・御家老中等左右江被罷出、御意有之。御白洲江定番頭・同御番頭、菱御櫓續御長屋下之方江相公樣・貞琳院樣御附使者罷出、御意有之。橋爪御門外橋爪江奥村助右衞門殿被罷出、三之御丸江前々罷出候役儀之人持・頭分罷出、夫々御意有之。其外前々之通に付畧す。御供人長甲斐守殿・本多勘解由殿、御道中奉行并兼御行列奉行村杢右衞門・安達彌兵衞、御筒支配牧昌左衞門、御弓支配津田權五郎、御長柄支配水野庄五郎、御大小將御番頭岸忠兵衞、同橫目寺西平左衞門・飯田外記、御近習關屋中務・水越八郎左衞門等、夫々御供或御先拔に而發足。

〔政隣記〕

三月十五日東岩瀨不時御泊より之御用狀、翌十六日夜到來、左之通申來。

中將樣益御機嫌克被爲遊御旅行、十四日夜高岡御泊、于時小杉御郡奉行中等より、十三日晝頃より之烈風に而大門川出水、假船橋切れ、十四日より往來支候旨等追々注進。依之段々僉議之上、假船橋十五日朝迄に出來。右に付御通行御手間取有之、及晝頃候故、魚津御泊者相止、同夜東岩瀨に御泊、翌十六日夜泊驛御泊之旨申來。

三月十七日。道中繼人馬の數は、今回江戶より歸國するものに限り增加するを許されたりとの報金澤に達す。

〔政隣記〕

三月四日出江戶發之御用狀、同十七日到來、左之趣申來。

付札

道中繼人馬之儀、一日十三人十三疋より多繼立不相成段、公邊より被仰渡、先達而一統相觸候通之處、今般御着府之上御留守詰之人々罷歸候節、右人馬高に而は甚指支候に付、公邊江及御達之趣有之候處、御着翌日より日數五日之間、一日に二十二三人・二十二三疋宛繼立不指支趣、此度一作於公邊御聞濟有之候條、被得其意、尤右日限中發足之人々、人馬割合方會

文化三年二月十四日の條參照

一作は一回限の意

所へ相達、受指圖候儀者、平常之通可相心得候事。
右之趣被得其意、組等之人々江可被申渡候。且又諸頭中江演述、組等之人々江も申聞候様、
早速可被申談候事。

卯　三　月

三月十八日。公事場奉行、羽咋郡一宮の社地に關する處置を年寄等に報ず。

文化三年七月廿二日の條を參照

〔職事日記〕

能州羽咋郡一宮社地与御林山境筋、先年より論事有之に付、公事場において相糺候様被仰渡置候所、段々相糺候へば、元來社地は瑞籬二町四方迄に候處、其儀社僧・神主共心得違之旨、今般致會得候。併右二町四方迄に相成候而は難澁之至候に付、瑞籬之外に往古より墓所与申傳候場所千五百五十歩計、幷みそし山五千六百歩計、立石山六千歩計附添相渡可然旨、私共僉議之趣委曲被達御聽候所、格別之趣を以右歩數相增被下、猶更後年紛敷儀等無之様、嚴重可申渡旨被仰出候趣、先達而各御書立之趣奉得其意、仍而私共より寺社奉行江委曲書立に認、右奉行添書を以社僧・神主一統江相渡候様申達候所、則其通申渡、一統難有奉得其意旨御受指出候故、公事場江取置、御郡奉行・山奉行・改作奉行江も申渡候様、委曲御算用場奉行江申

達、今般被下候場所之儀、御郡奉行初夫々役人罷出打渡候上、分間繪圖相認、公事場印を加相渡、後來紛敷儀無之樣仕置可申趣、御算用場奉行ゟも申達候間、追而繪圖出來之上場印を加相渡可申与奉存候、以上。

文化四年三月十八日　　四　人　判

御年寄衆等十三人殿

三月十八日。船舶を賣却し又は破損したる際に於ける極印の部分の處置を定む。

〔筒井舊記〕

今般御領國船に燒御極印打渡方之儀、先達而申談候通に候。然處右極印有之船、他國・他領ゟ賣渡度旨相願候はゞ、各於手前極印削取可被申候。若海上乘廻り候內、不時賣拂候樣之儀有之節者、極印削取、買手形・削屑共各手前ゟ取立、退轉可被承屆候事。

一、御國・他國浦々に而難船之砌、其浦に手形有之候間、他國に而痛船に相成賣拂度候はゞ、船頭より極印削取、右浦手形幷に極印削屑共取立、退轉可被承屆候。海中に而解船に相成候分、若極印之處拾揚候はゞ、切抜浦手形に添爲持出、海中に而流失之分は、浦手形迄爲持出可被申候。

一、船朽損造作難仕分、極印削取退轉可被承届候事。

右之趣被得其意、此段船持共江申渡置、右退轉之儀當場江可被相達候、以上。

三月十八日　御算用場

高田彌左衛門殿

中村逸角殿

浦々等船燒御極印打渡之儀に付、先達而申渡置候處、重而別紙之通御算用場より申來候條、得其意、本文之通削取方等之儀、出來・退轉共夫々不相洩樣、其時々致譯書可及斷候、以上。

三月二十二日　中村逸角

高田彌左衛門

能州四郡十村中

三月。學校に於ける醫學稽古の日割を定む。

〔學校方覺書〕

學校頭江

於學校醫學稽古三日之內、一日本艸之會讀被仰付、十一日は書生致輪講、無泥詰問有之可然旨、各覺書之趣相達御聽候處、右之通可被仰付旨被仰出候條、可被申談候事。

四月朔日、前田齊廣登營して參覲の禮を行ふ。

〔政隣記〕

四月九日、去四日江戸發之御用狀來着、左之趣共申來。

三月二十九日就今度御着府、上使御老中青山下野守殿を以、御懇之被爲蒙上意、同晦日御老中方御連名之依御奉書、今月朔日御登城、御參勤之御禮被仰上、御例之通長甲斐守・本多勘解由御目見被仰付。

四月朔日、畑柳泰、前田治脩に投藥奏功したるを以て三十人扶持を給し、次いで歸京せしむ。

〔政隣記〕

四月朔日、月次登城、年寄衆等被謁、四時前一統退出。且左之通御覺書を以、御用番安房守殿町奉行江被仰渡、則岩田傳左衛門於宅申渡。

畑　柳　泰

相公樣御氣滯に付、御服藥被遊候處、段々御快に付、爲御合力三十人扶持被下之。

右柳泰儀、横井元秀（御參勤御道中切御供に而出府之事。）罷歸次第御暇被下歸京之筈之處、今月七日元秀罷歸候に付

御暇被下、九日拜領物被仰付、十一日發歸。

〔政隣記〕

四月十一日、今月朔日粗記候通、畑柳泰江一昨九日御使御使番松平康十郎を以御意有之、白銀百枚・生絹極上之由十疋・串海鼠一籠被下之。從相公樣も白銀五十枚・緞筋一籠同人を以被下之、於金谷御殿御内々を以紋絹三端被下之、且旅用金百五十兩被下之。今十一日朝發出歸京。

四月二日。大聖寺侯前田利之、本鄕邸に前田齊廣を訪ふ。

〔政隣記〕

四月二日、主水樣御入部後初而御參府御着。御老中御廻勤より直に御出、於御居書院御對顏、二汁五菜御料理等被進、諸事御作法前々之通に候事。

四月十五日。金澤に於いて前田齊廣が出府以後の狀況を告ぐ。

〔政隣記〕

四月十五日月次登城、年寄衆等被謁。其節御用番安房守殿左之通御演述、當座之恐悅に而相濟、四時前各退出。

前月廿五日御機嫌能御着府、同廿九日上使青山下野守殿を以被爲蒙上意。當朔日御登城於御黑書院御禮被仰上、殊に御懇之上意、長甲斐守・本多勘解由御目見、重疊難有御仕合被思召

候段、以御書被仰下候事。

四月廿六日」火の元の警戒を嚴にし、殊に山火事を生ぜざらしむべきことを諭す」

[筒井舊記]

火之元之儀嚴重相心得候樣、毎度申渡置候所、近年別而數度之出火、いつ迚も取灰より火移り候旨、畢竟灰之仕抹方麁相故与相聞え候。向後念を入、聊茂油斷無之樣可申渡候。且又近年山火事度々有之、別而春來斷等有之候所、多分山稼之者たば粉火に而も落し置、夫より燃出候抔与之斷、尤其通に而可有之哉に候得共、偏に火しめし方惡敷故に候。右に付何与歟樣子茂無之哉、裁許手前に而篤与相考、出火之樣子嚴敷其時に相糺、若心得違之者も無之哉、猶更無油斷山番等心を付候樣急度可申渡候、以上。

卯四月二十六日　　中村逸角
　　高田彌左衛門

能州四郡御扶持人・十村中

但、宇出津御奉行山田三郎左衛門殿・堀與八郎殿より茂、春以來毎度之山火事斷に付、火しめし方無沙汰之趣御紙面御觸有之候得共畧す。

本文は政隣記文化五年四月十八日の條に記さる

去年は文化四年

四月、京都の陶器師青木木米を招き窯を金澤春日山に興さしむ。

〔政隣記〕

前々金澤於大樋等に、樂燒類者致し來候得共、唐津・今里等之如き堅燒は不致に付、當用之雜器之品一切他國より入來、剰遠路之運送に付駄賃等加り、此代料他國江洩れ候銀高、年々積り候得者過分之事也。于時近年尾州等にも燒物竈企候處、最初は彼是不十分候得共、追月段々手に入候上は、追々宜き器物出來、當時に而者永久之國產に相成、隨而國中職人・工商・貨持之輕き者に至候迄、右燒物而已にて致渡世候者多旨に付、去々年於町會所僉議者、何卒金府にも右之品御國產爲致出來候者、年々無際限他國江之洩金銀も當府に留り、就中貧賤之者共土穿り賃仕事に爲働候者、下々之潤色にも可成事に付、京都粟田に陶器師青木佐兵衞与申者、陶器一件に委く候由に付、內分樣子爲承合候處、土之躰相試、用立可申土に候得者可致出來旨申に付、去々年寅年也九月右佐兵衞儀當府江呼下し、先年陶器致出來候大聖寺九谷之土取寄、當府茶臼山之土を主与して、先試に卯辰山瓦師平兵衞所持之瓦竈に而少々爲燒候處、無異儀出來、則其節入御覽にも。依之佐兵衞一先歸京、重而去年四月呼下し、近山より追々宜き土出候に付、山之上村領に致中絶有之瓦竈之ヶ所有之を、地面引受候て陶器竈に爲造直候處、新竈に而土氣濕り等全拔け不申ながら、南京燒に似寄候品も出來、則相公樣江も入

御覽候處、御好を以品々被仰付、幷年寄中等之内よりも誂物有之候處、夫々相應に出來。右樣子に付而は、竈も令乾き職人も追々手廻候者、畢竟御國產にも可相成、然上者上品は兎も角も、先以當用之皿鉢類雜器等は他國より不及取寄に、當府にて可相辨也。就夫前條之九谷之土取寄候而は、遠方に付費懸り候間、右に代り候土無之哉与穿鑿之處、能美・石川兩郡之山にて土見付、依之九谷より不及取寄に、御領内に而澤山に有之、其藥土等出候ヶ所左之通。

一、能美郡 瀬木野村 勘定村　　一、石川郡 別會村 三子牛村

一、河北郡 山之上村・二俣村・卯辰村。此分色白き石に而、南京燒類製し候土に加へ候。

藥土石之分

一、瀬木野村土中より出候白石藥に用。

一、三子牛村・別會村土中より出候塊石藥に用。

一、卯辰村土中より出候塊石藥に用。

一、竈場所之内より出候赤土藥に用。

藥解候灰之分

一、椿之灰　松之灰 此分落葉を用。　竹之灰 此分桶職之者細工に用立候屑を用。　堅木之灰 此分紺屋共用立候灰之垂糟を用。　堅炭灰 此分湯風呂屋共用立候

炭之灰を用。

右之外粉具之分者、紅柄・緑青・唐之土・硝子之粉。

一、呉州藍繪に用。

右之通當時用立候土藥共、都而御國產に而相濟、猶又追々宜き土等出候得者用之筈に候事。

五月朔日。前田治脩の病稍癒えたるを以て老臣以下之を祝す。

〔金龍公記史料〕

五月朔。太公去秋以來在病牀。頃以稍癒撤病牀。年寄以下賀之。

五月七日。前田治脩の表小將等、能役者のツレたるべき命を拒みしを以て指扣を命ぜらる。

〔政隣記〕

五月七日左之通被仰付。是者前月二十四日於金谷御殿御慰御能有之候節、橋辨慶シテ波吉宮門相勤候に付、左之人々にツレ被仰付候處、宮門等之ツレ難仕由に而、何れも御斷申上候處、左候ば何も歸宅可致旨被仰出。依而同日より先自分に指扣相窺相愼罷在候處、今七日左之通被仰出。

但、津田和三郎ッレ方覺不申候得共、古く相勤候處、申談方等不行屆、却而同意故与云々。

相公様御表小將配膳役

相公様不應思召儀有之候に付、急度指扣被仰付。

但、六月二十七日此節之儀に付六人共御咎御免許被仰出。

津田和三郎
矢野判六
奥田金太夫
九里覺左衞門
森　權太夫
堀田良之助

五月廿一日。昨今兩日前田利命の三回忌法會を修す。

〔金龍公記史料〕

五月二十日・二十一日修香隆世子三回忌法會。奉行本多安房守。行敎。

五月廿八日。大小將組三輪采男・齋藤金十郎自分指扣を命ぜらる。

〔政隣記〕
去年八月十一日、江戸表御上邸之内、大がね奉行預り之御土藏鎖前封印怪敷躰有之旨。則番人足輕當番黑川伊太夫・竹田左平次より、大がね奉行三輪采男・齋藤金十郎〻相屆候に付、采男等罷越、御土藏之內改之候處、銀二貫目紛失に付、右番人足輕伊太夫・左平次・海野半右衞門・田中一平、并留書足輕川崎喜太夫御吟味之上、伊太夫・左平次は牢揚屋〻被入置、半右衞門・一平・喜太夫は不縮無之樣割場奉行〻被仰渡置候處、同年右之者共御國〻御返、半右衞門・一平・喜太夫割場附人人共同斷。三十二月中旬金澤〻到着、從公事場割場奉行へ被預、伊太夫割場附・左平次橫山圖書同心は今年十四日到着之處、同日より牢揚屋へ被入置、同十八日於公事場御吟味之上、伊太夫・左平次・半右衞門・一平四人共禁牢被仰付、喜太夫は同廿七日御吟味之上、是迄之通割場奉行〻指預に而、共後五人共度々之御吟味・拷問等も有之候得共相知れ不申。于時今月五廿八日、右紛失之節大がね奉行相勤候御大小將三輪采男・齋藤金十郎〻、御用番山城殿御覺書を以可相尋旨、頭河內山久太夫〻被仰渡、則久太夫より相尋候處、申分難立趣有之に付、自分指扣伺候處、共通与山城殿御指圖有之。

文化三年八月十一日の條參照

今年十四日は正月なるべし

六月八日。前田齊廣使者を以て鷹司政凞の女と婚せんことを求む。

〔御留守中諸事覺書〕

一、大地縫殿左衛門儀、於江戸表御内用有之、當五月廿三日同所發足、六月七日京都到着。翌八日鷹司様諸大夫小林太宰少貳方江内狀を以申通候處、同九日御殿江罷出候樣申來。依之御玄關より罷通、太宰少貳江逢、段々及挨拶候上、今般外用向も相兼上京仕、得御内意度儀は、則先達而利倉善佐より粗御承知之通、當春御手前樣關東江御越被成候節、善佐迄被仰聞候姫君樣御縁談之儀、其砌は未再縁之存寄無之に付、右之御答におよび不申候。然處今度彌再縁組致し度存念に付、先達而被仰入候通、姫君樣之内与御縁組被申合度奉存候。右に付猶更委細及御相談候趣共、御許容被成候はゝ彌御熟談相極、追々御談合致し度段等、有増申述候處、段々承知之旨挨拶有之。猶此儀は、同列之内高橋兵庫頭罷出逢可申候間、此者江被仰述候樣致度旨申聞、退候上無程兵庫頭罷出候而、前段之趣始終得与申述、先年以來被仰込候儀御座候間、尤其通あなた樣より被仰込候御仕向に致し度段等申述候處、委細承知、追付關白殿江可申上旨に而相退候上、御料理・御茶等被下之。畢而重而兵庫頭罷出、被仰聞候趣共具に申上候處、先以姫君樣之内与御縁組被仰合度候趣、甚以御大慶思召候。尤先年以來此方より被仰込置候儀候得ば、別而御滿足不薄、彌被仰越候通御内約被成度候。乍早速此段御許容之趣被及御卽答候。猶入組之儀は、追々御手前樣迄拙者共より以來御懸合に可及旨申聞候。

一、同廿日關白樣御目見被仰付候間參殿仕候樣、御用人鈴木宮内より前々日申來、長袴着用

罷出候處、長橋殿ゟ關白樣御出座、御目見被仰付、蒙御意、御手自御熨斗拜戴之、退候上御料理等被下之。

一、廿六日御用相濟、御暇乞旁罷出候處、兵庫頭を以晒布壹疋・白銀三枚被下之。右等之御禮等、立戻り御玄關迄罷出候。

一、右相濟、同廿八日京都出立、七月七日江戸表ゟ到着之旨申來。

右は大地縫殿左衞門御使書之趣有增留候。

一、右御再緣被仰合度趣、先達而表方ゟ被仰出候段、江戸表より申來事。

六月九日。前田齊廣、海防の爲船舶その他の準備をなすべきことを命ず。

〔町家老方御留守中諸事覺書抄〕

此度蝦夷地ゟをろしや船渡來、及不法之儀有之躰に而、彼筋ゟ從公邊追々御役人被指向候御樣子、幷南部樣にも乍御病中御暇被仰出御歸邑被成、其外津輕殿にも御暇被仰出、御歸邑之由に候。右者能登國ゟ船路も程近く、何時寄り申間敷者に而も無之候。依之御手當之儀、夫々行屆不申而は不輕儀、殊に公邊よりも御手當之儀被仰渡御座候御沙汰も御座候。尤寛政六年異國船漂着之儀に付其砌被仰渡、御手當夫々御指支は無之節に候得共、船の儀は大要之御しらべに而、未聢与は相極候儀も無之哉に候。右之次第に而何時異國船寄申間敷に而も無之

由に候間、先内分船數別紙之通心當被致置、たとへ異國船漂流之躰無之とも、御手當之儀公邊より被仰渡候上、彼是遲々相成候而は御外聞も如何に候。乍併惣樣船數只今夫々しらべ申候而は、公邊江之響も有之儀不可然候間、別紙之通極内々心當有之樣に与被思召候。此段拙者共より御直にも可被仰聞与思召候得共、いまだ公邊より表向何之御樣子も無之處、ケ樣之儀被仰出も却而被對公邊御扣被遊候。併過急に相成候而は御不都合も可致出來哉、先此段各江申遣候樣無急度御噂之旨、人見吉左衛門を以被仰出候間、左樣御心得、宮腰町奉行手前極内々船引寄方等之儀、御内々御僉議可被成候。尤此度之儀於公邊も秘し有之躰に候間、少しに而も相洩候而は、甚被對公邊不御爲儀も有之事候間、此處深く相心得候樣被仰出候間、其御心得に而格別被爲入御念候。

一、右に付能登浦之儀、相圖など致しにくき所、其上御郡奉行とても常々在合不申事候間、右相圖之心得方之儀も内密に而僉議致可然旨、密に心付之趣牧昌左衛門申聞候故、則相達御内聽候處、各迄可申遣旨御意御座候間、左樣御心得御僉議可被成候。呉々未相顯れ不申事、殊に公邊に而も甚御秘被遊候御儀に相聞候間、萬一事々敷相成候而は甚不御爲御儀候間、目立申儀無之樣專一に御心得可被成候。此處得与申遣候樣被仰出候。依之今九日此表發足、町飛脚牧昌左衛門より、相公樣へ差急言上候品も有之旨申聞候付、旁拔書道中早飛脚步に申渡

申進候、以上。

六月九日　　　長　甲斐守

土佐守等六人樣

追而船數之儀御極被遊候而被仰出候に付而者、事々敷樣に可被存哉候へ共、數等も無之御領國中之船を相改候樣に有之候而は、却而響之處も如何与思召候間、先達而御手當之儀被仰出置候人數高に應じ、御圖りにて別紙之通被仰出候儀候間、其趣譯而可申遣旨以吉左衛門被仰出候間、左樣御心得可被成候。則右別紙差進之候、以上。

船數之覺

一、二百石積　十　艘

帆共外諸道具付くべし。水手百五十人計。但、船每に轉馬船付くべし。

一、百　石　積　七十艘

帆共外諸道具付くべし。水手六百人計。但、船每に轉馬船付くべし。

覺

一、御馬廻頭二組之事。

但、飛州騷動出雲守樣江御加勢之節、野村源兵衛組用意迄に而押出し不申儀候間、此度も

源兵衛組筋當時富井典膳跡組より、一二御用意迄可有之哉。是等之儀は豫而御馬廻頭へ被仰出も可有之候間、內用意無油斷樣心得可申聞置候事。

一、御先手物頭弓筒三組、御使番二人、御横目一人之事。

但、右同斷頭先之者承糺、內用意之儀可申聞置候事。

一、筆談役二人之事。

但、御儒者之內相應之者相撰、內用意可申聞置候事。

一、鐵炮役二人、大筒等之事。

但、御異風之內相撰、右同斷。

一、御醫師二人、御馬醫一人之事。

但、本道・外科・御馬醫本文之通內用意可申聞置候事。

一、右之外與力・御歩横目等、且火矢方小川兩家之內一人、或は火矢方御細工人之內一兩人指加、是又火器等內用意之儀可申聞置事。

以上

右早飛脚歩、道中川支に而十六日到來、御紙面之趣委曲致承知、相公樣へも入御覽置申候。

右御手當之儀、寛政六年公儀へ御屆は御座候得共、用意方之儀被仰渡無之故、荒增先達而申

進候通に御座候間、御伺之上被仰越旨可有之与存候。船之儀被仰出之趣を以脇田善左衛門へ申渡、遂詮議申聞候様申渡置候。二百石積・百石積与八十艘計、何時にても急切之御用に相立候様心當いたし置候時者、御雇上に不申付而は御用に立兼可申候。先達而善左衛門より伺書出候船高、百四十石以上別紙之通に御座候。此内八十艘も雇上候而は、第一諸方之運送も指支、且船主ども甚迷惑可仕儀。いつ迄と申限りも無之、彼是指支に可相成哉に存候。就夫渡海獵師船は他所ゟ出候儀も無之、其浦々に有之事に候間、是を御手當に致し置候はゞ、百石積などよりは小船に候へ共、結句懸引も自由に而も可有之哉と、此分も浦々相しらべ書出候様申渡置候間、遂僉議可及言上候。

一、能州浦相圖之儀、是又御郡奉行被致詮議置候ても、狼煙に而無之而は行届申間敷哉与存候。

一、北國之儀は異國船渡來不自由之樣にも相聞候へ共、能州より松前等へは程不遠、商船每年致往來候事に候へば、一向に御手當無御座事は相成間敷候間、先寛政六年御屆御座候御人數高、內密心得候儀可申聞置与存候。此等之趣以御序可被達御聽候。尤御算用場奉行初、夫々隨分內密心得に罷在候樣申渡候。猶追々遂詮議相伺可申候。依之昨日出町飛脚指留、今日發足、早飛脚步に申渡申進候、以上。

六月廿日　　左京等六人

甲斐　守樣

追而宮井典膳跡組當時一番に付、早速代被仰付可然旨、以別紙相伺候通に御座候。將又今度蝦夷地爭亂之主意は何故与申儀相知不申哉、聞番內々承合候樣御申渡、相知候はゞ可有御申越候、以上。

一、今般宮腰町奉行より書出候船數帳は留略す。

六月十四日。能登奧郡海岸の形勢を調査すべきことを告ぐ。

〔筒井舊記〕

狼煙より劍地迄浦々海岸等之樣子相調理書出候樣、足輕飛脚を以申來候條、明後十六日稲舟組手始罷出候條、浦方村々役人共罷出候樣可被申渡候。泊所之儀者及暮候ヶ所に而可致止宿候、以上。

卯六月十四日　　高桑定五郎

齋藤清太夫

山瀨圓右衞門

稲舟村　藤　太殿

鈴屋村　九郎右衞門殿

折戸村　源　助殿　　大澤村　直　作殿
鵜川村　喜三兵衛殿　　馬場村　喜右衛門殿

六月十六日。前田齊廣、金相場騰貴するを以て江戸詰人の增扶持に就いて議せしむ。

〔於江府御親翰帳之內書拔〕

六月十六日

一、左之御親翰以猪太郎被渡下。

近年金相場高直に付、詰人共一統及難澁之躰に而、追々頭・支配人より願出候樣子に粗承及候。依之其節之取扱方心得之儀承置度存候。いかゞ躰に相願候共一圓不被承屆、たとへば承屆無之時は、一統難相勤抔与申處江至り、致役引等候時宜におよび申樣なる儀有之候共、其儀も不被顧与申程之決心に候へ者宜候得共、一通り難承屆与被及差圖、其上又々强而彼是右樣之趣を以申遣候節、無是非被承屆候樣なる事に而者、甚以不可然事に候間、只今之內少分たり共增扶持方遣候儀、遮而申渡置可然存候。此兩端決斷之處承度候條、存寄可被申越候、以上。

六月十六日

長　甲　斐　守殿

被成下御親翰奉拜戴候。近年——存寄可申上旨奉畏候。御發駕前より、金相場等之儀に付前田甚八郎等申聞候趣有之、御勝手方左京等江も申談、僉議之趣紙面先頃奉入御覽置候通に御座候。金相場等高直、難澁之儀は相違も無御座候。金澤表僉議之趣も有之候間、宜時分御貸渡等之儀相伺可申与奉存候段、其節奉申上置候通に御座候。御親翰——奉返上之候、以上。

六月十六日　　長　甲　斐　守

六月廿一日。淺野川に洪水あり。

〔金龍公記史料〕

六月廿一日淺野川水溢。

六月廿一日。武具奉行に命じ藩有の侍具足及び足輕具足の數を調査せしむ。

〔諸事覺書〕

六月廿二日　折々雨

一、昨二十一日御武具奉行手先之侍具足幷足輕具足、當時御用立候分御在高如何程有之候

哉、內々承度旨脇田又八郎ゟ織江相尋候處、今日覺書指出左之通に候。此外御次より御預之分侍具足六十領計、足輕具足も五百領計も御座候。其內損候物も御座候。猶更被仰渡次第、打込惣員數しらべ相調可申旨申聞候事。

侍具足しらべ

一、七十九領　御預高
內二十九領　損　物
殘り四十領　御用立候分
此內にも念に入取しらべ仕候はゞ、損候分可有之与奉存候。

足輕革具足しらべ

一、五百九十六領　御預高
內百七十八領　御道中物
內百計　損　物
殘三百十八領　御用立候分
此分右同斷
一、五十枚　金之熨斗

六月廿一日。馬廻頭青木與右衛門等に非常の際出陣すべき準備を命ず。

〔穩樂齋隨意集〕

福富公御日記文化四年六月廿一日

一、去五月以來蝦夷地ゑとろふ御陣屋へをろしや船攻寄、勤番人鐵炮せり合在之。右狼藉儀に付、今日御馬廻頭一番組頭青木與右衛門、御先手弓一組・鐵炮二組茨木源五左衛門・青木多門・山路忠左衛門、御使番大橋作左衛門・三浦助右衛門、御横目佐藤八郎左衛門用意可仕旨被仰渡候由。

六月廿一日。領内三州の海岸に各船舶を準備し置くべきことを命ず。

〔筒井舊記〕

御付札に、脇田善左衛門江

一、五百石積　　船五・六艘宛

但、五百石より大船に候歟、又者三百石以上に候はゞ、其圖りを以船數增減之儀も可有之候。尤船每にてんま船相添る。

右之通三州に而、一ヶ國切右員數程、何れ之浦方に而も手當いたし置可申候。船持共申談、

繰々闔置可申候。右之通異國船漂着之砌爲御手當闔置候之樣、三州御郡奉行等江被申談致、手當出來候はゞ其段早速可被申聞候事。

丁卯六月二十一日

右之通御用番被仰渡候旨、宮腰町奉行脇田善左衛門より申越候條、可得其意候。夫々不相洩樣船持共江申渡、差支不申樣相心得、其趣委曲急速可申越候、以上。

六月二十五日　　中村逸角

能州四郡十村中

〔政隣記〕

六月廿三日、魚津在住・今石動等支配御領地方等海手支配之人々江、夫々內心得之儀、一昨日・今日夫々被仰渡有之。

六月廿二日。火矢方小川丈作をして豫め防備に關する調査を行はしむ。

〔諸事覺書〕

今は六月

一、昨日左之通可申談旨月番演述に付、今二十二日小川丈作呼出內意之趣織江申談、頓先之儀并場所等之儀、得と遂詮議可申聞候。用意方に付而は受取物等も可有之候間、夫々書出候樣申渡事。

異國船漂着之節爲御手當、火矢方小川兵左衞門・小川丈作兩人之內一人、內用意被仰付候儀も可有之候。頓而番等之儀被遂御僉議可有御申聞候。右兩家火矢之儀は、豫而打場拵置不申而は難成候哉。左候はゞ海邊場所遂見分候樣成儀に候哉。或は臺仕掛車等に而、何方へも運送成易儀も候哉。船に而は何百石積位に而宜候哉等之儀、被遂御僉議可有御申聞候事。

六月廿三日。能登奧郡の奉行、海岸巡視の爲に出發す。

〔政隣記〕

六月廿三日、能州御郡奉行高田彌左衞門、能州爲巡見發出。

六月廿四日。馬廻頭青木與右衞門・中川平膳に海岸防備の內調理を命ぜらる。

〔齊廣樣御傳客等之內書拔〕

六月二十四日をろしや一卷御取調理、御內意被仰渡、御馬廻一番組・二番組、其頭青木與右衞門・中川平膳ゟ左之通り被仰渡候覺書。

異國船松前邊ゟ渡來、能州浦海上程近き体に付自然渡來之体に候はゞ、御固めに可被指出候條、內調理致候樣被仰聞候。御用番左京殿なり。

付札、青木與右衞門・中川平膳江
今般御手當之儀御定も可有之候得共、先は在人高を以可成丈相辨、餘は其節に臨み割場雇等之心得に而相調理可被申候事。

丁卯六月　　　御用番　奥村左京

右一件に付、世上人氣以之外氣立、或は人之强弱相顯はれ、御手當組之家來共尻込む有、又進むあり。小者抔は俄に病身を申立暇を乞退く者多く有之由。又在家より相進み奉公に出るも有、分而田井村より多出候由、古老衆之物語色々承るなり。

六月廿四日。前田重靖の生母善良院の五十回忌法會を經王寺に行ふ。

〔政隣記〕
六月廿四日善良院樣五十回御忌に付、於經王寺一朝御茶湯御執行就被仰付候、御家中諸殺生御當日一日相扣可申候。且又普請・鳴物不及遠慮候。乍然御寺近邊に罷在候者は、御茶湯御執行之内自分に指扣可申事。
右之趣一統可被申談候、以上。

六月　　　奥村左京

六月廿六日。非常の事變に處する爲本道・外科の町醫師各一人を選定せしむ。

〔政隣記〕

六月廿六日。魯西亞國船一件に付、町醫師本道・外科一人宛名書指出候樣、今二十六日御用番左京殿被仰聞候事。

〔政隣記〕

七月朔日、異國船一件に付町醫師本道・外科名書指出候樣、前月廿六日記に有之通に付、翌廿七日書出置候處、今日村井又兵衛殿於御別席左之通被仰渡、則岩田氏ゟ申遣候處、同氏より申渡有之。

本道　千秋宗瓊

外科　高澤仙立

異國船漂着御手當しらべ方之儀、御馬廻頭等內密就被仰渡候、右手ゟ被指添遣候御用に候條、密々可被申渡候事。

六月廿七日。非常事變に處する爲御歩橫目及び火矢方等に準備を命ず。

〔政隣記〕

六月廿九日、今般異國船一件に付、御歩横目十人內用意之儀、一昨二十七日御用番被仰渡、御横目より夫々申渡有之候事。

同斷に付火矢方內用意之儀、一昨廿七日御家老衆御申渡、小川兵左衛門也。組外 順先に付、其段御達申、幷火矢方御細工人も五人內用意之儀申談置候樣、御家老衆より右兵左衛門等江御申談有之候事。

但、今一人火矢方組外小川丈作也。

〔政隣記〕

前記廿九日に有之通、異國船御手當爲心得、內密被仰渡有之に付、御歩横目左之人々江御横目中より申渡有之。

塚本和左衛門　原　與三兵衛　山邊森右衛門　森　惣兵衛　中村勘左衛門

松原　儀助　中嶋嘉平太　井關右平太　中西覺兵衛　大橋　六郎

右爲用意、料一人銀百五十目宛御渡有之。

〔政隣記〕

六月廿九日、異國船御手當內密用意之儀、左之人々江茂被仰渡有之。

御儒者　石黒源五郎
　　　　新井升平

六月廿七日。金澤にて馬匹を有する者に當分賣却し得ざることを令す。

〔政隣記〕

六月廿七日、當町馬持候者他國江賣出候儀も有之候者様子有之候條、當分可指留旨、若年寄中御申渡に付、傳馬肝煎幷博勞棟取坂井英助、且在馬博勞江も、同役岩田氏より夫々申渡有之候事。

六月廿八日。非常の際出陣を命ぜられたる一番組馬廻金森量之助自刃して死す。

〔政隣記〕

六月廿八日、青木與右衛門組御馬廻領千七百石（内二百石與力知、居宅安江町横町、實は人持組奥村源左衛門弟也。）金森量之助、今朝六時過於奥居間致内縮自殺、咽喉を脇指に而貫之。一番組に付、表居間竝書院等に、今般内用意就被仰渡之趣に武器類飾立置之。昨日頭與右衛門宅江罷越對談。同夜者同組之人々量之助宅江罷越、出立方等之内談に而夜半迄各罷在候處、何之相替躰も無之候處、不斗逆上にも

候哉右之族与云々。享年三十二歳。娘一人有之、四歳。妻は御馬廻組新川御郡奉行千秋次郎吉妹、歳廿一歳。當時懐孕、來月臨月之由也。
右に付頭與右衛門・相頭中川平膳罷越、爲檢使御大小將横目山本又九郎・笠間源太左衛門罷越、七時過退出。與右衛門等者暮前退出。

〔齊廣樣御傳略等之内書拔〕

六月二十八日金森量之助御馬廻二番組筆頭千七百石なり。右被仰渡に付何歟心痛、於居宅自害致し家斷絶。居屋敷は石屋小路、今之關屋中務拜領屋敷なり。

（頭注）二番組は一番組なるべし

六月廿九日。昨今兩日前田齊敬の十三回忌法會を天德院に執行す。

〔政隣記〕

觀樹院樣御十三回忌御法事、當月廿八日・廿九日於天德院御執行に付、御射手・御異風稽古幷諸組弓・鐵炮稽古之儀、御法事前日より御法事中相止可申事。

（頭注）當月は六月

一、鷹野其外諸殺生、且又鳴物之儀、二十七日より二十九日迄三日迄三日可有遠慮候事。

一、普請作事之儀、二十七日より二十九日迄指止可申事。

但、指急候普請等之儀者不及遠慮候事。

右之通被得其意、組・支配之人々江可被申渡候。組等之内裁許有之面々者、其支配江も相達

候樣被申聞、尤同役中可有傳達候事。

右之趣可被得其意候、以上。

六月十八日　　　村井又兵衞

〔金龍公記史料〕

六月廿八日・廿九日於天德院。修觀樹世子十三回忌法會。奉行村井又兵衞。八月廿八日行赦。

六月廿九日。犀川及び淺野川の水暴漲す。

〔歲々略歷〕

六月廿九日兩川洪水。才川橋西之方三之一流失、法嶋村流失。天明三年之洪水にひとしと云。

七月二十日。海岸防備の爲大筒方の準備を命ず。

〔政隣記〕

一、七月二十日、異國船一件に付大筒內密心得之儀、御異風裁許了簡之趣を可申渡置旨、昨十九日御家老衆御申渡に付、則廣瀨武太夫・堀萬兵衞より、御異風武藤固忠太・今村源助に申渡之。

七月廿二日。前田齊廣、鷹司政凞の女と縁組を內約す。

〔齊廣樣御傳畧等之內書拔〕

七月廿二日、鷹司關白政凞公御息女夙君樣と御再緣之儀御內約、同年九月十三日御願之通り台命あり。同年十一月二十三日京師に於て御結納被進なり。同十二月東武江御下向なり。

七月。能登諸村民に命じ、異國船着岸するときは一定の所に參集せしむ。

〔文化年間書物留〕

文化四年卯七月異國船漂着之体見付候はゞ海邊筋へ御郡中村々より人步馳集所等書上申帳。

羽咋郡外浦筋

二ッ屋村砂山江走集村々左之通。但此所海際三町程去松山。金澤江道程七里程。

二ッ屋村　二十六人　　中沼村　四十二人
夏栗村　二十三人　　元女村　三十九人
黒川村　三十二人 村持鐵炮一挺　　箕打村　十九人
大田村　六十七人　　上河合村　二十八人 村持鐵炮一挺
下河合村　三十四人　　瓜生村　二十六人

牛谷村　五十二人　　八野村　二十七人 源助持鐵炮一挺
野寺村　二十人 村持鐵炮一挺　　瀬戸町村　二十七人
森下村　三十一人　　冬野村　二十四人
坪山村　二十八人　　紺屋町村　二十九人 村持鐵炮一挺
正友村　十六人　　東間村　二十七人 村持鐵炮一挺
東野村　十三人　　澤川村　四人 村持鐵炮一挺
合二十二ヶ村　人數凡六百三十四人。村持人持鐵炮七挺。外先年御貸置鐵炮三挺。

〆

北川尻村砂山へ可走集村々左之通。但此所海際五町程去松山。
北川尻村　七十一人　　免田村　三十三人
大海川尻村　五人
合三ヶ村　人數凡百九人。先年御貸置鐵炮三挺。

〆

米出村砂山へ可走集村々左之通。但此所海際二町程去松山。金澤へ道程七里二十一町程。
米出村　二十三人　　門前村　八人

河原村　六十七人。村持鐵炮一挺。長兵衛持鐵炮一挺
山崎村　十五人　卯兵衛持鐵炮一挺

實達村　七十八人。村持鐵炮一挺。五郎右衛門持鐵炮一挺
吉田村　五十人　村持鐵炮一挺

平床村　十四人
荻谷村　四十五人

竹生野村　十二人　村持鐵炮一挺
荻市村　四十八人

子浦村　百六人。村持鐵炮一挺。加十郎持鐵炮一挺
聖川村　二十七人　村持鐵炮一挺

散田村　四十四人　村持鐵炮一挺
新宮村　二十一人　村持鐵炮一挺

下り石村　八人
菅原村　九十五人　村持鐵炮一挺

吉野屋村　二十八人　五兵衛持鐵炮一挺
中野村　五人

御館村　二十八人
三日町村　五人

上田村　九十人　村持鐵炮一挺
上田出村　四十四人

〆

合二十二ヶ村　人數凡八百六十一人　村持・人持共鐵炮十五挺

今濱村砂山へ可走集村々左之通。但此所海際二町程去松山。

今濱村　百三十人
小川村　六十人

麥生村　三十六人

合三ヶ村 人數凡二百二拾六人。三挺三階村源五・吉田村良左衞門所持鐵炮。

〆

宿村砂山江可走集村々左之通。但此所海際二町程去松山。金澤へ道程八里十一町程。

宿村 六十人 村持鐵炮一挺　　粟原村 十六人
兵庫村 三十四人　　立開村 九人
石野町村 十八人　　三ッ屋村 十五人
太田村 十二人　　中川村 三十八人
深江村 五十八人　　石坂村 二十四人
向瀬村 二十八人 村持鐵炮一挺　　所司原村 五十六人
杉野屋村 九十五人 村持鐵炮一挺　　土橋村 三十二人
二口村 三十四人

合十五ヶ村 人數凡五百三十八人。村持・鐵炮三挺

（下略）

本文の決定は文化五年三月に在り

七月。能登の海岸に於ける防備の方法に就いて議す。

〔文化年間書物留〕

一、外浦筋之内羽咋郡笹波村領字げんとくヶ端遠見番所に相成可申哉与奉存候。内浦筋之儀者奥郡之内に被仰付候はゞ、口郡遠見番所におよぶ間敷奉存候。

此所に雨除小屋相建、番人可被指置哉。遠目鏡御渡可有御座儀。晝夜相詰申に付、大抵七人程も常詰に、時替に不仕而者難成哉に奉存候。尤村方之者へ被仰付候共辨間敷、足輕中三人御下し置、舟路存候浦方之者四人御雇、相交詰居可然奉存候。

自然異國船見付候はゞ、笹波村之寺庵に有之鐘・太鼓を交打に仕、且右場所に而諸方へ為知之火を揚げ可申事。

但、為知之火右山に而揚候共、在方は常に茶等焚灰を取申事有之故、合圖難分御座候間、兼而臺を拵置、其上に而火を焚候様可被仰付哉。鳴物之儀鐘迄に而者火災等に紛、太鼓迄に而は神祭等に紛候得ば、鐘・太鼓を交打に仕可然奉存候。勿論裁許十村へ急々及注進、十村より御役所江急飛脚御注進可申上事。

附り、飛脚之者金澤迄走續候儀難成候間、通筋能州・加州之驛々江兼而被仰渡置、飛脚・轉馬不指支様可被仰付哉之事。

一、外浦筋合圖之火、げんとくヶ端より千浦村領延せ崎、瀧村領上野崎、珠洲郡三崎に遠見場所被仰付、合圖之火新保村・小木村・鹿嶋郡口出ヶ嶋村・江曾村・羽咋郡一宮村林山・河北郡

灯燈は提燈

木津村に繼候者可然奉存候。尤其所々に而鐘・太鼓交打、近村へ爲知可申事。

但、此所々よりも十村へ注進、十村より御役所へ御注進可仕事。

一、右所々之鐘・太鼓聞付次第、村々鐘・太鼓交打にいたし、山方村々へも爲知可申事。

一、何れ之村々に而も、鐘・太鼓聞付次第、村方に持合候鐵炮、或は猪・鹿狩之鑓、或は斧・長鎌・棒・鳶口等之物を持、兼而極置候場所々々ゟ走集可申事。

一、別册に調上候村々走集所松蔭に、村々神事之旗、或は寺庵に有之幕に而も打、御勢出張之形を似可申哉。夜中は火を焚可申哉之事。

一、走集所へ參候道筋之内、紛敷所在之候はゞ、晝は可行道筋に竹を建藁を結び置、夜は火を焚置可申事。

但、山路難所道筋は、向寄村々より松明持出居、爲燈候樣可仕、尤村方より火事之節之灯燈、或は寺庵に有之灯燈を持出候樣可仕哉之事。

一、右灯燈に入用之蠟燭、在々小賣人方に有之分不殘持出候樣申渡、爲燈可申哉之事。

一、村々に持傳候鐵炮、多分は用立不申候得共、先相用可申儀に奉存候。玉藥は一向無御座候間、組々裁許へ迄なり共、凡御圖り御渡置可被下哉之事。

一、村々より走集人數之儀、大抵村切に相極置、十人に一人充裁許之者、組合頭・長百姓之

内人柄相撰爲主付可申、肝煎は村切之惣裁許爲仕候者可然、五ヶ村に一人充十村手代等、又は村役人等之内才覺有之者に可爲致裁許哉と奉存候。

一、十村・新田裁許・山廻り之儀走集所へ罷出、諸事辨方指圖可仕事。

此勤ロヶ所極

二ッ屋村へ　酒井村一樂

北川尻村・米出村・今濱村へ　本江村六郎右衛門・土橋村次右衛門

宿村へ　菅原村行長

柳瀬出村・新保村へ　荻谷村圓次郎

塵濱村へ　本江村惣助・武部村彌兵衛・中川村太郎右衛門

瀧村へ　能登部下村與三右衛門・吉田村良左衛門

狄谷村へ　田鶴濱村丈助

大島村へ　三階村源吾・大嶋村堺兵衛

安部屋村へ　高田村由五郎

小浦村・赤住村へ　堀松村平藏

福浦村・生神村へ　三階村覺右衛門

給分村へ　笠師村喜八郎
風戸村へ　一青村孫右衛門
千浦村へ　笠師保村九郎次
鹿頭村へ　相神村彌六
篠波村へ　中島村與一
〆外浦之分
鰀目村へ　鰀目村五兵衛・野崎村清兵衛
鵜浦村へ　武部村四郎太夫
〆内浦之分

一、食事之儀村々より持運候はゞ甚混雑仕、迚も縮方も相成申間敷候間、其場所に而飯を炊相渡不申而は難成奉存候。ござ飯苞は人歩毎持出候様可仕事。
但、此飯米走集所向寄に而、身元相應之者へ申渡置、米貯置候様可仕与奉存候。大抵一晝夜一人に一升程充之圖に而、二日分程心得置可申哉之事。
一、飯米拂口之儀、身上宜百姓之内人柄相撰爲主附可申、飯炊候儀は向寄之村々に而可仕事。

但、一人前入程之器物拵置、村役人之内配分方爲主附、人々所持之ござ苞へ入渡可申、且向寄御鹽問屋より鹽爲出、飯に振渡可申事。

一、向寄之村々より大成桶を爲出、水汲溜置、人夫之渇を爲凌可申事。

一、走集候人夫之儀、金澤表より御出張御座候とも、其所へ御越之御方より御指圖無御座内は、村々へ爲引取申間敷事。

一、所々御藏番人・御給人米藏宿、右躰之節勤番方、猶更大切に心得候樣可申渡置事。

一、浦筋船々縮方之儀、舟肝煎へ嚴敷可申渡事。

丁卯七月

八月廿八日。是夜以降彗星西天に現る。

〔留書〕

文化丁卯八月廿八日の夜より、彗星昏時に西方に現る。長一尺五寸計、氐宿の北天市垣の西にあり。九月二日三日の夜窺ふに、一度半程づゝ東行す。漸々に天市垣に移り入るべき勢にみゆ。文獻通考の象緯考に、彗孛を記して、前史に載する所數多あり。皆現るゝ處より東行して消する文あり。能符合す。八月廿八日より以前は連夜曇天にてしれず。八月廿日の夜見たりと云人もありとぞ。いづれ以前より現るゝことしらる。

如晴昔本のまゝ

九月二日。老臣長甲斐守邸等に落雷あり。

〔政隣記〕

九月二日雨天如晴昔。未中刻頃大雷一聲大に響。此雷長甲斐守殿玄關高箱棟之上江落、餘程破損。又學校御園之内江落、椎之木破裂。又堀川町御大小將作造酒門前江も落、門柱幷園之内松大木下より梢迄裂跡有之。都合三ヶ所へ雷落。

九月十三日。前田齊廣鷹司政凞の女との縁組を許さる。

〔諸事留書〕

一、中將樣御儀夙姫樣与御縁組、御願之通被仰出候旨被成下御書、各服上下に改、於表方拜戴。織江・修理儀は不罷出候付、御書寫を以月番より直に演達之事。

御　書

手前縁組之儀、鷹司關白殿息女申合度旨、七月廿二日相願候處、今日可致登城旨、昨日御老中方連名之奉書到來、則名代織田出雲守殿被致登城候處、願之通被仰出難有仕合候。此儀爲可申聞如斯候。頭分以上江茂可被申聞候、謹言。

九月十三日　　中將齊廣判

前田土佐守殿　　前田伊勢守殿

本多安房守殿　　村井又兵衞殿
奥村左京殿　　横山山城殿
奥村助右衞門殿　　津田玄蕃殿
前田圖書殿　　前田織江殿
前田修理殿　　前田兵部殿

九月十五日。石動山論所の裁判方法に關して稟議す。

〔職事日記〕

能州石動山論所糺方之儀、先達而被仰渡、衆徒手前段々公事場理解之趣を以申渡候處、彼方へは明和年中綸旨も有之、其砌御當家様江御室御所より御芳札有之、御返翰も被爲在、其外右之節御年寄衆・寺社奉行江も、右御所より奉書之趣も有之旨等色々申立候趣者御座候得共、敢て右等之趣論所江拘る筋に而も無御座故、段々理解之趣を以相達候所會得仕、此上如何様共裁判次第可相心得、若御僉議を以論所之内石動山江付添被下候儀に候はゞ忝可存、彼等より間數を除相願候儀は恐入候旨衆徒共より書物指出し、此上は論所之場所不殘御郡地と裁判落着申渡候而も、其通に可相成儀に御座候へ共、論所之内末社舊跡有之儀申立、此地面御郡方に相成候儀を迷惑仕候旨申候儀有之。曁御室御所より今般申來候儀に付、寺社奉行より之

不肖は不承

返書に申遣候趣も、各御承知之通に御座候故、衆徒方ゟも慈愛御含之形有之様に与奉存候故、百姓方にも不肖仕、論所之内石動山之方ゟ付添遣候而も、彼是不申様に与御算用場奉行ゟも公事場紀方之様子委曲申遣候所、則御郡方之者共ゟ申示候得ば、論所理合御紀分被申上、境之儀は幾重共公事場裁判之通可畏旨、村々役人共書物指出申候。元来寛文年中繪圖出來、右繪圖に論所之印しは墨引朱引仕置、繪圖に而は相分候へ共、場所に望候而者、いづれの山よりいづれの山迄墨引朱引と申事難分躰に付、右境筋御扶持人・十村等内見申付候様、御算用場奉行へ申談、則衆徒共立會内しらべ仕候所、場所に望候而繪圖之墨引朱引、御郡方に申所衆徒申所与違居申、繪圖にも双方に違御座候儀も有之、難分事共御座候故、私共僉議は論所大抵三ツ一通り石動山へ附、三ツ二通りは御郡方之地と相分候様に仕遣候はゞ、双方共公事場裁判次第与有之上は、彼是申儀は無御座儀故、右内しらべゟ罷出候御扶持人・十村ゟも、山見分之節右含を以極内々見しらべ候様に改作奉行ゟ爲申談、則内分見圖之儀改作奉行迄指出申候。此儀は衆徒にも百姓にも存不申儀故、いづれを境に分候哉相知不申に付、追而右見圖之通分候而、双方に信服仕候哉、其様子難知事に御座候間、只今之所に而衆徒并村方役人右場所ゟ爲立合、公事場并御算用場之僉議を以、是より是迄は石動山ゟ被附、是より是迄は御郡方ゟ被附与申儀爲申聞、其所々に印を附置、彌双方可畏と申儀承候上に

而、各へ御達申落着申渡候者可然与奉存候。尤境付等申付候儀は、落着申渡候上に而改作奉行等罷出見届、夫々可申付候。右只今境分之印を仕候節、十村共迄に而は、分方に十村共依怙贔負も有之様に双方可存儀も可有御座故、公事場付與力兩人指遣、十村共分方之様子爲見屆候者、双方存入も可宜哉与奉存候に付、右與力遣候儀一往御達申候。尤落着申渡方御達申候節、右一件紀方前末之書物御達可申候間、先與力遣方之儀迄御聞屆之否、早速被仰渡候様に奉存候、以上。

九月十五日　　　　　　　　　　　　　　四　人　原　傾

横　山　山　城様

九月十七日。犀川及び淺野川出水す。

〔政隣記〕

九月十七日犀川出水、當時大橋御普請中に付船橋往來之處、右船橋切れ流、往來絶、淺野川も出水、小橋二間計流落。犀川十九日晝より渡船建往來通ず。

〔續漸得雜記〕

一、文化四卯年は氣候春來不正にして、唯雨降風吹て、穀を初其外畑物不熟にして、菓物類に至るまで都而拂底なり。今年御當地に限ず、降り勝に而水難多く、上下共道中水ありて旅

人を煩はしむ。御當地犀川橋年月滿て懸直る事に成り、七月初より取掛御普請初りぬ。舟橋より下に舟渡し、衆人往來す。然處に九月十七日殊に大雨頻りにして、河水漲り出、ほり込置し橋杭等流失、舟橋茂切れ流て、舟も漸二三艘を殘し、川除茂少々損じ、忽ち往來人越事不叶、甚混雜也。依之綱渡し舟一艘漸出來、越ゆる事を得るといへども、大城下之人民、殊に此程滯留人共群集して止まず。是に付て此舟者、川向の御家人等御番往來其外御用向迄通行之事に相成、舟揚り場双方へ割場より警固足輕兩人宛出で、私用人を制して不通。去に依て又候川師藤兵衞等頭取、其下に舟渡しを拵私用人を渡す。無程其舟御雇舟に相成、町會所より御役人出で、川除町家に番所構、足輕・肝煎等番所二ヶ所に出來して、夜中町會所灯燈立置往來を警固す。其外假橋も出來に而、兩三ヶ所に而往來漸要用をなす事になりぬ。去ども追付舟粧ひして舟橋出來に付、兩所渡し舟・假橋相止み、其月廿六・七日頃より往來自由を得る。いまだ橋普請は半に不過、此節舟橋兩度流るといへども、二度め追付舟集りて出來す。

十月中旬いまだ船橋往來也。

十月二日。脇坂義堂金澤に來り心學を講ず。

[政隣記]

右之者儀、先年松平越中守殿御上京之節、於京都心學教導与申儀愚民を導くに甚宜き由及御聞、手嶋派之門弟御召寄教說之樣子御聞被成候處、脇坂義堂甚妙辨に而面白御感心。其後江戸江御召有之。于時深川之末に八右衞門嶋と申所者、前々より惡き者共流罪に被仰付置、其内御大赦等之節御免有之候得者、卽日にも又惡事を致し候族に付、右嶋江義堂を被遣候て教說被仰付候處、義堂之教說を四・五度も承り候得者、右惡心之者共大に感服致し、皆々善心に往々歸し候もの出來。依之愚民を教へ導くには甚手近き宜き教与御感心に而、夫より以來今以每歲春末より秋末迄に江戸江御召寄、夫々愚民等教導被仰付候事に相成候由之事。

一、每歲江戸江東海道往來者傳馬先觸被仰付、尤帶刀御免之由。拜領方者大抵白銀百枚計宛之由。併去年などは教導方彌增に行屆候旨等、御懇之被仰渡之上、別段に金百兩拜領被仰付候由。

一、於江戸御大名方・御旗本方江も段々御召有之候而、於御廣式等にも女中江戸越しに教說を御聞せ之方も有之。追々所々より御呼に付、在江戸中一向隙無之、大に行はれ候由之事。

一、近年段々心學行はれ、日本にて當時心學教導之寄舍四十六・七ヶ所も有之、何れ茂男席・女席と分之、望次第聽聞、兒童・盲人之類迄も甚作法正敷致出入候由。尤右義堂一人に而も無之、手嶋派之門人多有之候。義堂者於江戸御用等多、一圓隙無之に付、相門生之内道二翁

といふ老人、江戸町方等教導致し、寄所を参善舎与名付有之。細川越中守殿先年御入來有之節、御普請有之候處、去々年之火災に致類燒候得共、松平播磨守殿水戸等よりも御寄進有之候而、最前之學舎よりも結構に早速成就、右之通餘程衆人之感服多く相成候事。

一、義堂往來之節、望候者有之候者暫宛逗留、假令少々廻り道等仕候ても、所望之方江者能越、隨分敎說可致旨從關東御内意も有之候由。夫に付東海道筋に而者、是迄數年每歳敎說を聞馴候事故、信仰之者多、道中驛次人足等之輕き者之中にも、義堂先生之事に候者駕籠舁賃は取請申間敷と申立も多く有之候由。

一、義堂者元來脇坂某と申書林之隱居にて、左而已博識之學者と申にては無之候得共、手嶋派之學風を傳へ、忠孝之道を第一に教導致し候。是迄之儒者は多分佛法を毀り候故、愚民之氣に逆ひ候て敎說も不聞入候。依て義堂者一向に佛法を少も不毀して、只々平生之心得を教へ候て、尤佛法をも可信と面白き譬へ樣を引候て、女兒之類迄も聞に不倦、能々合點の行候樣に說候故、何も甚感服仕候由。惣而善を揚げて、人之勞をいたはるを第一と致し候教方にて、近年之孝子・貞女等を段々書物に作り出し候者、多分は右之門人より出之申候。

一、京都より大津迄之道路は、諸方より之入込候處にて、晝夜往來繁く、山坂之道大に損じ候處、去々年義堂儀江戸江相願、諸人を助け之爲に道作り之儀申上候處、速に御聞屆有之、

道作り被仰付候。其後右往來者晝夜不絶往來有之所に候間、一町毎に常夜燈御免有之候者、施主人も可有之旨相願候處、是又御聞屆に而、當時は大津より京都迄之往來甚結構成事に相成候旨。如斯兎角諸人を勞はり助け候儀を第一与致し候由。尤義堂之人柄等篤實に而、著述は安樂傳授・孝行に成傳授等之書類夥く、近年段々板行に相成候て流行致し候。都而文を面白く說き和らげ候教導之書類に候。

右義堂此度之歸鄉には、今月十四日江戶發、北陸道より當府通行之由故、江戶・京等に而之樣子爲承合候處、有增右之通に候由之事。

〔政隣記〕

十月二日前月記に有之脇坂義堂儀、同月十四日江戶發之處、道中於所々講釋所望、幷川支等逗留有之、今夜旅宿袋町金屋專次郞宅江參着。召連候下人定八・善藏、都合上下三人。翌三日より朝四時・夕八時与兩度論語等之內を本文に講ず。聽聞人夥敷、何も令感服与云々。

但、聽聞人次第に人多に相成、旅宿專次郞宅に而者間狹に而指支候に付、五日より朝は十間町中買米集所、夕者本庵座敷借用。

右義堂年齡四十九歲、剃髮入道、裝束偏綴短刀、（前條記之通道中は兩刀。）容貌溫柔、氣力壯健与云々。食品魚鳥等曾濃不得手、淡薄第一、小豆を好み、酒は大に嫌ひ、茶者薄茶而已少々用。

明年正月相當を引上げたるなり

〔政隣記〕

十月十二日、前記二日に有之脇坂義堂發足歸。

十月十日。德川綱吉の百回忌法會を神護寺に行ふ。

〔金龍公記史料〕

十月十日修常憲公百回忌法會于神護寺。奉行本多安房守。行赦。

十月十二日。昨今兩日前田利常の百五十回忌法會を寶圓寺に行ふ。

〔政隣記〕

十月十二日、昨日・今日於寶圓寺微妙院樣百五十回御忌御法會御執行。兩日共二百僧。

昨日者自分相詰、尤詰中拜禮仕、（當上横疊四疊目に而）七時過歸。今日者同役岩田詰。

但御寺詰有之者は、兩日之内詰中に前々之通拜禮仕候段、一昨日惣見分之節、御法事御奉行山城殿に御届申置候に付、岩田今日拜禮之事。

〔金龍公記史料〕

十月十一日十二日。修微妙公百五十回忌法會于寶圓寺。奉行横山山城。行赦。

十月廿八日。金澤町奉行孝女知氣地屋てつに米三俵を賞賜す。

〔政隣記〕
十月廿八日於町會所左之通。

米　三俵　　石引町後町知氣地屋清右衛門後家つき孫　てつ

右之者祖母極老、其上當夏以來別而老耄之躰に而、食餌も乍相應、彌増相滯打臥在之、好食抔有之候處、てつ儀不致一飯共、貧敷中より小魚様之品相調爲給、苧つむぎ・かな引等相働候得共、不自由至極之爲躰。弟丈藏儀實躰者に而、輕き乍奉公給銀之内より少々宛小遣錢等見繼、致下宿候節者兄弟相互に睦敷遂看病、悉くてつ之働を以取續來候段、祖母病中取扱方等、いまだ乍若年(附廿一歳也。)孝心之趣共奇特之至に候。依而爲褒美右之通與之候。猶無怠可相心得候事。

丁卯十月二十八日　　岩田傳右衛門
　　　　　　　　　　津田左近右衛門

右前例之通町會所江呼出、於目通横目・肝煎てつ江爲讀聞、書物渡遣候事。

〔政隣記〕
前記知氣地屋清右衛門儀、娘一人有之處、最前中組足輕渡邊太郎左衛門江嫁附置候處、太郎左衛門儀定番御歩に被仰付、右清右衛門宅に同居之內、清右衛門儀寛政八年病死。同人妻つ

々後家業に而營み來り候處、享和元年三月太郎左衞門出奔、男女之子共四人有之、存外之厄介人出來、彌増難澁罷在候處、同年右太郎左衞門妻病死。幼少之孫共祖母之手業に而やうく育て來候處、同年之秋・冬孫之內兩人病死。次第に及老年、被雇稼等も仕兼候處、相殘在之孫てつ成長、苧つむぎ・かな引等致入情相稼。弟孫丈藏三・四年以前より若黨奉公に出、今年十九歲、祖母者今年八十四歲に相成、夏以來老耄等之儀前記之通。且てつ儀最早廿一歲に相成、年頃之事、其上女手業に而家事も不行屆事に候間、入聟致し可然事与人々申入候得共、左樣に致し若出生に而も有之候而者、祖母看病方等おのづから等閑に相成致迷惑候間、何れにも祖母存命中は入聟之示談不申聞樣にと神妙之申方。右等之趣に付、人々感稱之餘り、少々宛米等合力致し遣候者も有之、近隣者不及申に、右てつ之致方及見聞候者は感涙を流し不申者は無之。將又頃日次第に寒冷に向候處、其身者薄着を堪へ罷在、祖母江者細工に綴り候古衣等重ね着せ置申躰、甚奇特成趣共に候事。

十月。前田齊廣夫人來嫁の際に於ける行列附を定む。

〔政隣記〕

付札、御廣式物頭・御横目江

夙昔樣品川驛御止宿に而御着輿之筈に付、同所迄御行列之通御迎人被遣候條、猶更夫々相し

らべ可被申聞候。御旅粧に而被爲入候に付、御供人着束等之御用意も可有之候間、申談相しらべ可被申候。將又御送之女中向駕籠添足輕等、御前宿迄相廻可申旨、鷹司樣衆より申來候由、人見吉左衞門申聞候條、御送り女中人數に應、是又足輕等相廻候樣可被相心得候。則右御行列帳相渡候事。

十月

御着輿之節御行列附

御先拂足輕
御先拂足輕
御挾箱 手替
御挾箱 手替
御貝桶 手替
御傘 手替
御步 御步
御步 御步
御步 御步

御廣式御步
御廣式御步
御薙刀 手替
御小將
御小將
御小將
御小將
御小將
御輿
御廣式御用人
御廣式御用人
御廣式番
御廣式番

御小將
御小將
御小將
御輿舁
御廣式御步橫目
御廣式御步橫目
御茶辨當持人三人
御廣式附より才領
御廣式附より才領
御跡挾箱 手替
御跡挾箱 手替

御雨傘 手替
御雨傘前之御傘之所へ繰上
御途中に而御日傘御さゝせ候得ば相建可申候
御簑箱 手替

御廣式附より御手廻裁許　手明小者二人　御供乘物御迎之若年寄　足輕足輕　御供乘物御迎之御中﨟

足輕足輕　御供乘物被召連候御小將　足輕足輕　御供乘物御迎之表使　足輕足輕　御長持

足輕　手替手替　雨具三荷　手替共　押足輕押足輕　御供之草履取　御貸馬一疋　沓籠

御廣式頭騎馬　足輕從役一人　惣若黨　惣鎗　惣挾箱　惣雨具　押足輕押足輕

御横目騎馬御迎之御横目　御醫師被召連候御醫師　押足輕押足輕　御歩横目

十月。鷹司政凞その女の前田齊廣に嫁するに先だちて教訓を與ふ。

〔眞龍院樣御入輿之節鷹司樣より御心入に而被進候御教訓〕

一、此度加州御緣組あらせられ、關東御下向遊ばされ候。京都御發輿よりは、まつたく加州夙昔御方と御心得遊され、鷹司殿姫君と申御儀はかならず思召されず、御入輿の日よりは萬端彼御方御家風に御したがひ遊され、急度御守り可被遊候。是迄は何事も父御所樣御さし圖あらせられ、御方住居に入せられ候へども、御入輿の後は御はからひ事もかず〳〵あるべ

御よく本の儘

き御事に候へば、何事も御ゆだんなく御心を付らるべく候。彼御家の御事御大切に思食、麁略の思召あらせられまじく候。京都にて遊され付ぬ御事、御覧遊されぬ御事、又は御心よからぬ御事も數々あるべく候へども、御氣色にも出されず、御家風に御したがひ可被遊候。宰相様をはじめ御方々様御あひだがら御むつまじく、就中中將様御間柄殊更に御むつまじく遊され、何事も御したがひ可被遊候。夫女の嫁し候ては、其家の風儀を守り夫につかへ申事、高きも賤しきも定りたるならひに候へば、中將様を御大切に思召、朝夕の御つかへ御おこたりなく御給仕遊さるべく候。いにしへより唐・倭の賢女貞節いつかへよく御わきまへあらせられ、いさゝかも麁略の思召あらせられまじく候事。

一、御入輿の上は御隱居御夫婦を御大切に、父御所様御同様の思召にて御孝心をつくさせられ、萬端御さし圖を御うけ遊され、是迄御内にて父御所様へ御つかへ遊し候同じ御事に御つかへ可被遊候。是又貴きもいやしきも、女の嫁し候而夫の親を我親とたのみ參らせられ候事は定り候事にて候間、ゆめ／＼麁略の思召あらせられまじく候。

一、父御所様を御大切に思召され候御事は申までもなき御事、たとへ萬里をへだて入らせられ候とも、御心は朝夕御そばに入らせられ候御心にて、父御所様の御事片時も御わすれあるまじく候。しかしながら御大切に思召候餘り、御言葉にも御よくがましき御事あられまじく

候事。

一、彼御家の風儀よしあしは勿論、彼方家中男女の沙汰、何事によらずかりそめにも御取沙汰遊されまじく候。召連られ候女房など打よりぜんあくの沙汰いたす者候はゞ、かたくせいせらるべく候事。

一、御面には御にう和の御氣色を專らに遊され、御心の中は金石よりもかたく御守り可被遊事。

一、御言葉はかずすくなく可被爲在候。口は是禍の門、舌は是禍の根と申事の候へば、言葉よりこそ數々のわざはひも出でくるものに候へば、御愼みあるべく候。又女のするどきもあしきものに候へば、其ほど〳〵を能く御勘へあり、するどき御言葉づかひあらせられまじく候事。

一、御入輿の上は、老女をはじめ、それ〳〵召つかはれ候女房あまた附らるべく候。今度召連られ御下向の女房は、京都より深き御なじみの者どもにて候。彼方にて附られ候者はみなあらたなるものどもにて、御なじみうすく候へども、かならず御わけへだてなく、いづれも同じことに思召、平等に召つかはれ、御えこひいきなく、慈みんの御心深く、何ごとも御言葉やわらかに遊され、思召にかなはせられぬ御事も、御心ながく御つかひ遊し、多人數の內

にはよき者もあり、あしきものもあるならひに候へば、かれはよきもの、これはあしきものと申事、御心のうちに御見きわめ遊し置れ、御氣色にも出されず、あしきものには一入御れんみんふかく召され候へば、いつとなくあしき志ざしの者もはぢ奉り、つひにはよき人となり、御大切に存上、幾久しくつかへ奉るものにて候。君臣をつかふにふくしんのごとくあれば、臣君につかへ奉ること手足のごとくすと候へば、上より御じひふかく、御親昵に召つかはれ候へば、下よりは辱存上、一入實心御大切につかへ奉るものにて候。たとへ上より御しんじつに召遣れ候ても、下より實儀なくつかへのあしき者、かず／＼あるものに候。左様のものは人間にはあらず、鳥けものにもおとり候者に候へども、共人の事は思召れず、たゞ上の御つかひ方のあしきと思召、いよ／＼御慈れんふかく召遣れ候へば、みなふくしんの御家頼となり、長久に中將様思召にかなひ、幾久しく召遣れ候様御世話遊し可被遣候。少しも御嫉妬の御心ざしゆめゆめあらせられまじく、ふかく御つゝしみあるべく候。又かやうの事もあれば、ほうばいねたましき心より、共人をあしざまにとりなし申事、人間の情とて輕き者のならひ、人のよき事を見聞ては心よからず、人のあしきことを見聞ては、何となくよろこぶ氣色のあるものにて候。ましてこの道は、女の一しほに思ひのふかきゆゑ、ある事なき事までも御聞に入候事もあるものに候間、御まよひあるまじく候。申なしにては、よきこと

もあしくきこえ申ものにて候。かれこれと御氣に立候やうに申なし、君樣へ御いかりをそへ參らせ、御にくしみをかけ、其人を遠ざけ、又は御いとまを被下候やうにはからひ候者もあるものにて候。たま／＼心得よろしき者も、かたはらのねたみふかきときは、おのづからそれにそみ、あしき心になりやすく、あけくれ御側にもあしざまに申なし候へば、よく仕へ奉るべく候。たび／＼御家賴のかはり候は、みな主人のあしきと思召、御心ながく幾久しく召つかはれ候こそ、辱御事におはしまし候事。

一、召つかはれ候女房の中、中將樣御目にとまり候者も有之、御聲もかゝり候はゞ、さつそくに進ぜられ候御事は勿論、ことさら御よろこばしく思召、いさゝかも御心よからぬ御氣色あらせられまじく候。其人には一入御あはれみふかく、御物やわらかに御世話遊し遣され、何か心得ども仰ふくめられ、よく御心得遊し入らせられ候而も、つひにそれに御そみ遊されいつとなく御にくしみも出き、又はねたましき御心も出るものに候へば、ゆめ／＼御まよひなく、何事を申上候とも御とりあひあるまじく候。しひてかれこれさわがしく申上候女これあり候はゞ、其女ははやく御暇を出され、たとへいかやうに申立候とも、御一心をさへ御すわりあらせられ候而、何の御とんじやくなく、只ひたすらに中將樣思召にかなひ候やう、御はからひ遊さるべく候。其當人長久に召つかはれ、御れんみんふかく遊し下され候へば、

たとへあしき心得のある女も、つひにはありがたく存上、御大切に存上候様になりゆき候。中將様の思召もよろしく、いよいよ御夫婦の御中も一入むつまじく成事にて候。これらは御みさほの第一にあらせられ候へば、呉々も御わすれなく御守りあるべく候事。

一、貴きもいやしきも、女は男に近よらざる事は申までもなき御事、をつとある女は一入愼むべき事にて候。老若によらず、男にはゆめ〳〵近より給ふまじく候。たとへ御つゝしみ深く候ても、人のからかひやすきものに候へば、かたく御愼あるべき事に候。兩夫にまみえずのおしへ、片時も御わすれあるまじく候事。

一、酒の事よく〳〵御つゝしみあるべく候。酒よりこそさま〴〵の惡事も出來るものに候。中將様御酒御好み遊し、御好み遊されぬに付ても、ひとしほ御愼あるべく候。女の酒をこのみ候は見ぐるしきものにて、日頃愼み深き女も、酒よりはみさほもみだれ、氣も丈夫になり、あしき心も出來、行儀もくづれ、申まじき言葉も出、つひには御夫婦の御中もあしく成ものに候へば、呉々御愼みあるべく候事。

御供女中被仰渡

一、夙君御方此度加州御縁組被爲有、關東御下向被遊候儀、京都御發輿よりは、必鷹司殿姫君と相心得まじく候。全加州夙君御方と相心得可申候。御道中之儀は、御定目之趣堅相守可

申候。御入輿の日よりは、萬端かの御方御家風に相隨ひ候樣急度相守可申候。此方御風儀堅く申出すまじく候。京都にては是迄かやうの事は有つけ不申、かやうの品は御座無などゝ申事、ゆめ／＼これあるまじく候。何事によらず善惡ともに、彼御家の風儀堅く相守り可申事。

一、老女彼御方より附被爲進候筈に候間、萬端彼方老女の差圖を受、相隨ひ相勤可申候。何事によらず老女江相尋可申候。さし知れ候事も自分の心得にて致申間敷候事。

一、御入輿の後は、御方々樣御間柄、就中中將樣夙君樣御間柄の事第一に候得ば、とかく心得違なきやう專要に候。御緣組被爲在候へば、夙君樣御身につかせられ、加州へ對しいさゝもさかひ候儀有まじく候。御附の者存たがひより事おこり、上御夫婦の御中に相障り候事共、さきのたとへまのあたり毎々これ有事にて、人々聞およびも是ある事に候。夙君樣には御裏方の御事に候得ば、御表より仰出され候事、兎角彼御方御機嫌にしたがはれ候事、上下ともに夫婦の間定り候事にて候。御附之者は猶さら主君の事いさゝかも背くまじき事に候得ば、御家風をはじめ何事も御表にしたがひ可申候。君樣思召たがひの御事も被爲有候はゞ、御附の者ども御いさめ可申上候。君樣思召に入らざる事も、思召たがひの御事は幾度も御いさめ申上ぐべく候。御附の者心得たがひより事おこり、上の御間柄にも相かゝはり候間、呉

々相愼可申候事。

一、加州御入輿のうへは、御隱居宰相樣御夫婦を御大切に思召、父御所樣御同樣之思召にて、御孝心を盡させられて萬端御從ひ可被遊候。各々において心得たがひ無之樣可致候事。

一、御家風の儀は勿論、承り及候事是あり候とも、必噂致すまじく候。喩彼方にてよしあし沙汰有之候とも、堅く物語いたすまじく候事。

一、御里を御大切に存候のあまり、かへつて君樣御苦勞に成候樣なる言葉出ざる樣、相愼可申事。

一、御宛行よりはじめ、惣て拜領のしな輕重によらず、自分々々の部屋內たるとも、互に噂いたすまじく候事。

一、御前向之事は勿論、惣じて彼御家奧・表の事、傍輩中とても假初にも取沙汰口外あるまじく候事。

一、惣て何事によらず、彼家女中に過ざる樣、さし出がましき言葉堅く仕間敷、何事もさし扣へ可申候事。

一、酒の事能々相つゝしみ可申候。酒よりこそ樣々の惡事も出來候。また申まじき事も申ものに候。彼御方々樣酒御好被遊、御好あそばさぬに附ても、ひとしほ相愼可申候事。

一、上に立候人は末のあはれみ深く、悪き事はいけんを加へ、御用にも相立候様、人の爲にもよろしき様、萬事おだやかに了簡可有候。下に附候人は頭立候人を敬ひ、下知にそむかず、相つゝしみ可申事。

一、御前向にては勿論、詰所／＼自分部屋／＼にても行儀正しく致、かりにも不行儀のふるまひこれあるまじく、言葉も賤しからぬ様に相愼可申事。

一、各身の分限を計ひ、たとひ心易き中とても、禮節亂れざる様つゝしみ可申事。

一、不案内の事は彼方女中へ幾度も相尋、相辨へ可申候。たとへさし知れ候事とても、相尋候て取はからひ可申候。たとへば自分／＼の着用物も、彼家の風儀これ可有候間、其時々相尋候て着用すべく候。私の了簡にて間を合せ候事、堅く愼み可申候事。

右之趣急度相愼可申候。是迄は御方住の御事に候處、御發輿よりは表向に候間、いさゝかの事も大切に存、晝夜心をつけ油斷なく可相勤候。萬一右被仰渡に相背き、加州風儀に叶はざる儀有之節は、京都の御懸合にも不及、於關東永の御暇遣され候様に、かねて加州へも被仰遣有之間、其段も心得居可申候。呉々も堅く相守り、御奉公大切に致、幾久敷目出度相勤可申候事。

文化四卯年十月

十一月朔日。前田齊廣の成婚の際諸士の献上すべき金品に就き定む。

〔御觸留〕

今枝内記に

今般御婚禮御整之上、爲御祝儀、三千石以上幷前田氏之人持より、御肴一種代金百疋宛、御兩殿樣に獻上之筈に候。江戶表に者、惣代以飛脚可被指上儀に候得共、萬端格別省略之儀に付、享和三年之振を以町飛脚に傳附可有獻上候。中將樣に獻上御肴代金は、於此表御土藏に上納、目錄・披露狀迄江戶表長甲斐守等迄可被指遣候。右御肴代金、一組切組頭に取集、諸方御土藏に致上納候筈に候間、座封名印記、面々組頭迄可被指出候事。

一、相公樣に獻上之目錄、人々より以使者指出、御奏者番に相達可有獻上候。堅目錄に而、御肴一種与相調可申候。御肴代金は、是又一組切組頭に取集、諸方御土藏に致上納候筈に候間、座封名印記、面々組頭迄可被差出候。

右夫々日限之儀者、追而可申談候事。

右之趣被得其意、夫々可被申談候事。

十一月朔日

十一月八日。京都の醫畑柳泰、前田治脩の病を診せんが爲金澤に來る。

〔政隣記〕

十一月八日、畑柳泰儀相公様爲御用今夕參着、旅宿金屋惠次郎宅。但、上下十八人。

十一月廿二日、諸士より徴する本年の借知を免除すべきことを告ぐ。

〔政隣記〕

十一月廿二日、昨日御用番又兵衛殿依御廻狀、人持・頭分登城之處、四時過檜垣之御間二之間に御年寄衆等御列座有之候而、御横目指引を以、人持等一組切、其外一役等宛御呼立、左之通又兵衛殿御演述之上御覺書御渡。

御家中之人々勝手難澁至極之段被聞召、御心痛就被思召候、去年一作御借知等被返下、當時別而御運方御逼迫至極に候得共、當年之儀者格別之思召被爲在候に付、御借知・御借米一作全被返下候之條、此段可申渡旨被仰出。

右之趣被得其意、組・支配之面々江も可被申渡候。組等之内裁許有之人々者、其支配江も相達候樣可被申聞候事。

右之趣可被得其意候事。

卯十一月

〔御觸留〕

定番頭に
今般御借知一作被返下候へ共、遥塞・遠慮等之人々に者不被返下候條、此段諸頭に可被申談候事。

十一月廿三日。前田齊廣、鷹司政凞の女に結納を贈る。

〔三守御譜〕
十一月廿三日於京都、夙姫君へ御結納御祝儀被進。御使御用部屋戸田與一郎、組頭並。

十二月四日。本年の借知返還の手續を定む。

〔御觸留〕
今般御借知・御借米一作全就被返下候、夫々御米を以可相渡儀に候得共、此節之儀、少米に而者賣捌方等面倒之筋茂可有之儀に付、五百石以下代銀を以於當場相渡、五百十石以上者御米を以當り之通り可相渡旨被仰渡候。依而草案帳等相違候條、帳面之分當月十日限可被指出候。右に付銀子等渡り方之儀、都而當場可被承合候事。
一、右代銀、壹組切惣銀高に而、頭々手前に全可相渡筈に候得共、月迫しらべ致混雜候に付、何百目迄相渡、端銀之分者來春可相渡候事。
一、遥塞・遠慮等之人々者、不被返下候に付、名前迄案文之通可被書出候事。

一、當七月以後病死之人々者、都而跡目被仰付候上、御藏返米を以被返下候事。
一、寄親附等與力之分者、當七月以後病死人半納之分者、半納に相當り候分相返、本納後病死人者、尤當り之通り可相渡候條、知行高・変名・病死月日相記可申候事。
但、與力之分は都而寺社奉行引受可書出事。
一、御切米・御扶持方被下候人々、當年御増米幷御引足米被下候人々者、當年之所先祿に相當り候御借米指上置候。且又當三月御下行等受取候以後病死之人々者、當年分全指上置候間、病死月等但書にいたし可被指出候。將又當年被召出候人々者、御借米指上不申候間、名前相省、草案帳之通り調可被指出候事。
一、他國居住之人々、幷御儒醫・隱居之人々茂、前條之振合に而可相返候條、夫々品分り候様、帳面に可被相記候事。
一、御切米・御扶持方被下候人々は、前條之趣を以、帳面別冊に可被指出候事。
右之趣被得其意、組・支配之人々に不相洩様被申聞、尤同役中傳達、落着より可被相返候、以上。

十二月四日　　御算用場

十二月上旬。能美郡小松附近に於いて越後の縮賣惡漢の爲に燒殺せしめ

られんとす。

［政隣記］

十二月上旬、小松に而越後之縮賣某駕籠に乗道を急候處、殊之外吹雪候故、寒を凌がんため或酒屋江立寄、兩人之駕籠舁を相手にして酒を呑候處、三人共餘程醉ひ、寒を忘れ又駕籠に乗り行候處、駕籠舁大に醉ひ、路傍に駕籠を下し休息す。乗人も醉しまゝ暫く可休と三人共寢入候處、折節二人連の者通り、右三人沈醉之躰を見て、密かに彼旅人之乗りし駕籠を舁行處、往還の側なる三昧の燒場に、追付葬人來ると見えて釜拵へ、香花なども供へ有を見て、右釜の上江件の駕籠を居置候て立歸り、其邊にをんぼうの家有所へ立寄、只今葬人を三昧へ送り來たり。よき樣に賴むと家の外より言捨て歸りければ、をんぼうは今夜來る約束之葬人早く來れるならめと心得、早速出て釜の上を見れば、四つ手の驛駕籠するゑ有ゆゑ、是は如何と乍不審、簾を引上見候處、内には旅人と覺しき人熟醉の躰也ければ、をんぼうは大に怪しみ、ケ樣なる事をして人を迷はす不屆者哉。然れ共此方へ渡せし上は法の如く行はんとて、駕籠より引出し釜の中へ打込んとする時、旅人醉醒て肝を消し飛退き、最前の始終を語り、醉臥居たる間に何者か是へ連れ來りし哉、聊も此方に覺なし。外の者の惡業ならめと色々に詫れ共やゝ不聞入。一旦受取たる上は、此方の法に任すとて、鍬・鎌を以て打殺さんとす。

旅人は大に怖れ入て、懐中より金子を過分に取出し、是にて了簡候へと樣々賴みければ、やう／＼に承引て免し遣しけり。扨又最前醉臥居たる駕籠舁共、醉さめて邊を見るに駕籠も旅人もなし。扨は餘人を雇ひ行しやらんと、無心許半町計此方の茶屋に立寄りたばこ飲居しに、あなたの一間に咄聲あり。聞くに今の旅人は定めて今比は燒れて死せしか、又は醉さめて逃しやと、面白き事に思ひ高聲に言あひたり。駕籠舁はよく聞糺し居けるに、正敷最前舁たる旅人の事に付聞捨置難く、いかゞ計べし哉と兩人相談し居ける所へ、彼旅人三昧より逃げ來りて、不斗も此茶店へ休みに入し處、最前一集に酒呑し駕籠舁二人共居たり。それより互に最前よりの始終咄し合候上にて、あなたの一間ゑ三人共入候て、彼二人を召捕、夫々及斷候に付、則役所ゑ右旅人幷駕籠舁・をんぼう暨惡業せし者都合七人召出、罪の輕重に隨ひ夫々裁判有之候由云々。

右役所とは則小松町奉行河村茂三郎役邸也。

十二月十五日。歲末祝詞の爲登城すべき期日に就いて告ぐ。

〔富田覺書〕

十二月十五日

一、歲末御祝詞登城之儀に付、別紙之通御用番被相渡候旨、御横目より演說之事。

歳末御祝詞之儀、大之月者前々廿九日致登城候處、壽光院様御忌日に相成候に付、大之月茂廿八日登城候様に可申談旨、文化元年申渡候通に候處、右御忌日當時十七日に相成候條、以前之通當年より者、大之月は廿九日爲御祝詞登城候様、夫々可申談候事。

十二月十八日。前田齊廣、鷹司政凞の女夙姫と婚す。

〔齊廣様御傳略等之内書抜〕

十一月廿七日御出京、東海道を經て同十二月十五日御本宅江御着輿なり。同十八日御婚禮御整。御年御二十一なり。

〔政隣記〕

十二月十八日御婚禮御規式御首尾能御整。

但、夙君様兼而御日圖之通、十五日本郷御邸江御着。水野八郎左衛門御歩頭兼御近習爲御迎十四日發、品川迄罷越。

〔御觸留〕

御横目江

夙君様御婚禮御整之上者、御前様与相唱可申事。

右之趣夫々可申談候事。

十二月廿一日　　　　本多安房守

〔政隣記〕

夙君様京都御發輿前、禁裏江御參内御目見、爲御餞別軒端月といふ名香御手自御拜領。尤御香合御服紗包。且名勅筆、此名左の定家卿詠歌を以勅名と云々。

　梅が香の匂ひを移す袖のうへに軒漏る月の影ぞありける

右の上にて御盃被下、古今無例難有思召候而、江戸表御引移の上、中將様江御直々御普爲聽被遊候由の事。

但右御伽羅の外に、御香合、銀金具千羽鶴御好にて被仰付御拜領。其節梅は大事じやぞと勅諚。重て繁昌ある様にと祝てとの勅も被爲在候由云々。將又右御拜領の兩種共、御婚禮の御當日中將様江被進候様にと關白様御指圖、則御當日本文の通御普爲聽の上被進之候旨也。勅筆は一向他江出不申、大切至極の御品に候得ば、關白様の御女、其上當時關白様は甚天氣に被爲叶御首尾能ゆゑと云々。惣而攝家の御女にても容易に御參內は相成不申候へ共、關白様の御女、其上前記の御首尾故御格別の御仕合に候由也。夙君様御參內の節、御召物惣躰不殘御召替、其外御はな紙臺等に至迄、梅一通の模様ゆゑ右之通なる勅諚も御座候由。官女達も加州は梅哉とて被笑候由、御附女中咄しの由。猶又夙君様御容貌御美艶而已に非ず、御手跡

御能筆、御讀書など御達者に被爲在候御事云々。
右江戸御廣式老女中の内より、此御地に罷在候親族の方ゟ之來狀に密々申越候を、有謂任一覽に密に記之。
密に記す、右家元は御馬廻組大屋權三郎（領二百石、田町。）伯母、名は淸夕。（御城役也。）
右狀は弟表御納戸頭御大小持組中村彌左衞門（領百五十石、立野出羽町。）小方ゟ出候由云々。

文化五年

正月二日。金澤に於いて諸士に前田齊廣の成婚を告ぐ。

〔御留守中諸事覺書〕

正月二日折々雪降

一、舊臘十八日於江戸表御婚禮被爲濟。依而頭分以上御弘に付、年寄中等五時過登城、四時過人持・頭分柳之御間列居、年寄中等謁、御弘之趣月番演述、退去之事。

但、一統爲御祝詞廻勤有之事。

一、右爲御祝儀、年寄中等より中將樣ゟ獻上之御太刀馬目錄、幷甲斐守等ゟは披露狀、且御前樣ゟ獻上之御肴一種目錄（代金百疋、連封。）、木村茂兵衞等ゟ之披露狀、大御前樣ゟ御祝詞狀、惣代

使者代飛脚山城より被指出候に付、今日迄に各席江指出、表方江相達事。

但、御太刀馬代銀は當月之座封に而、今月十五日過人々より以使者諸方御土藏江上納候筈に候。御前様江獻上之御肴代は、舊臘之座封之儘に而、假に上包いたし指出。於江戸表認、并熨斗包等小竹直右衞門方に而相計候筈に候事。

一、四時過年寄中等退出、金谷御殿江罷出、右爲御祝儀相公様江御肴一種（代金百疋座封、居臺、熨斗包。）目錄山口淸太夫を以上之。在江戸勘解由并倅隨當病に付、名代圖書上之候處、重而以同人御喜悅被思召候段御意有之候事。

但、右目錄等舊臘之通、四時頃迄に各より以使者金谷御殿江指出、執筆之内罷出有之請取置候事。

一、三千石以上并前田姓之人持より、御兩殿様江御肴一種獻上有之候事。

正月四日。金澤町奉行、孝子能登屋三右衞門等を賞す。

〔政隣記〕

正月四日於町會所左之通。

米三俵　野町　能登屋　三右衞門

右三右衞門儀、若年之節父に離れ、髮結を以業とし、母を育み來候處、孝養無比類趣共、并

妹江慈心、其他神妙之致方委細聞屆訖。誠に輕き者に者奇特之至に候。依而書面之通與之候事。

戊辰正月　　　　岩田傳左衛門
　　　　　　　　津田左近右衛門

右三右衛門今年四十一歲、家內母幷妻子共四人相暮候處、甚家內和順。且姉妹有之候處、兩人共嫁附有之、其內妹甚難澁、且去々年以來眼病に而醫師に懸り、藥代百目餘も不遣候ては不叶處、一圓不調達。此儀母承り、心勞之旨三右衛門江申入候得者、三右衛門も母之心勞を察し、右銀子調達致候而妹江與之。將又母常に、以前之家は野町六丁目に而宜家に候間、何とぞ一生之內元之家を買返度由申に付、母之志を遂させ度と存込、去年右元家を代銀一貫二百目（內是迄之家代四百目、不足之八百目者、與諸旦那江賴候得者人々奇特之志を感じ、賴母子早速出來与云々。）に買返し候得者、母大に悅安心致し候由。惣而右妹江之助力等之儀、悉皆母之心を安からしめんためを第一と致し、右之外十ケ年以前母相煩候節之孝行方等、萬端難及禿筆趣共也。附、今一人之妹有之候處、是者去々年病死、是又病中看病等絕言語候族共之事。

安江町能登屋次右衛門手代
米三俵　　　堀川川除町　新保屋　小兵衛

右小兵衛儀、幼年之頃より次右衛門方に召仕、當時三十餘歲に相成候迄全相勤、多年之內聊も主人江對し亀略之儀無之。且又母及極老に、他家江預置候ては不自由等之程を察し、色々と才覺を以別に小家を求入置、無殘所孝養之致方共委細聞届訖。誠に忠孝之志不啻、輕き者には奇特之至に候。依之書面之通與之候事。

戊辰正月

岩田傳左衛門

津田左近右衛門

藥品は食品なるべし

右小兵衛十三歲より次右衛門方に致奉公、今年三十二歲に相成候處、主人江對し少も不調法之儀無之、其外家內之者は勿論、他所に而も人に對し口論ヶ間敷儀聊も無之、全躰柔和至極成生質。就中次右衛門書林商賣之處、近年勝手不如意に相成候を、小兵衛大に致心勞、次右衛門召仕之男女を減じ、小兵衛儀萬端相働、下人之所業迄も無厭勤之。夜者母方年六十八歲。江毎夜罷越、主家にて當り候藥品等之內、品能物は自身不食之、携へ行て母に與へ、身分に遊樂埜嬲ヶ間敷事毛頭も無之。右母方江者主家之用事濟次第罷越候儀故、多分夜半前にも及ぴ候處、翌朝はいつとても未明に主家江歸。右母老年等にて何等之所作も不得致候處、悉皆小兵衛之給銀等を以安樂に育ひ候儀等、其外病氣之節看病之致方、平生母に代りて親子之衣類洗濯・縫立等之仕抹、不能毫末事共に候事。

正月十五日。金澤城二ノ丸の殿閣悉く燒失す。

〔政隣記〕

正月十五日月次出仕、御年寄衆等謁、四時過相濟。

同夜六時比二之御丸より出火之處、段々及大火、御殿并御廣式不殘御燒失。夫より菱御櫓江燃附、同所續御多門より、橋爪御櫓御門二ヶ所、御番所共御燒失、同夜八時比鎭火。右之外者都而御別條無御座候。

貞琳院樣者、宮腰口淺野屋宗平(酒屋也。)与申者宅江御立退、鎭火之上金谷御廣式江御移。

右火事に付自分儀出馬、先町會所江出夫々申渡、甚右衛門坂より土橋御門内江出候處、最早御廣式一面に燃立難防、町歩共手に合不申族。于時二之御丸御式臺之方江も火移候躰に付、同所江罷越候處、段々及大火、最早菱御櫓等江も火移、定火消・町夫共防懸候得共、中々難防留族に付、同所續御多門内に有之御鐵炮類等、御書物類等取除、鶴之丸江持運び、或は窓より御堀江投込等致候内、段々燃來御燒失。

右之通に付、御鐵炮等類・御道具過半相殘、菱御櫓之内に有之候御矢等者多分燒失与云々。

右鎭火之上、金谷御殿江罷出、御近習頭杉江助四郎を以、相公樣御機嫌奉伺候處、益御機嫌克被爲在候段同人申聞。夫より重而町會所江出、町飛脚所之者之内人撰を以、江戸表江之早

飛脚申付候處、丑上刻比發出。

但、御城内御燒失、相公樣・貞操院樣御機嫌克被爲在候。尤御表向等より追々言上可有之候得共、何れにも右等之趣早く奉達御聽度趣に付、以飛札如此に候段、御用部屋勤之人見吉左衛門・戸田與一郎連名、岩田傳左衛門・自分連名之書面に認指出候事。

御大小將　伴　造酒

右火事に付、御城代伊勢守殿等御覺書御渡、江戸表江之早打御使被仰渡、同夜寅上刻比發出。

金谷御近習御使番　上坂平九郎

右從相公樣江戸表江之早打御使被仰付、同刻比發出。右之外割場足輕早飛脚追々發、御城代御用番より之書上御用也。

〔政隣記〕

二ノ御丸御燒失之夜、同所泊番之定番御馬廻口上書之寫

私共昨十五日夜、二ノ御丸柳之御間當番に御座候間、七半時比より泊御番に罷出勤番仕罷在候處、暮六時過半作儀御番所御緣頰江出申候處、虎之御間江御席之方より火燃來候に付打驚、相番之兩人江爲申聞、三人共御廊下江立出見申候處、柳之御間江燃移り、火勢甚敷、筋違御

廊下より御番所近く燃來、中々防申手便も無之候。三人共火事裝束取出候得共、着用可仕隙も無御座、頻に燃廣り候に付、先御定書等不殘携、無是非御番所を立退候內、最早御番所江も火移申候。依而御玄關を離れ、雁木坂之上に而三人共漸火事裝束着用仕候得共、火勢烈敷其所も難居、其內左京殿御登城に付、其段御達申候處、跡御縮方相心得、何れにても引取候樣被仰渡候。御定書等者、神保縫殿右衞門殿指圖に而、御本丸御番所江指預、御本丸御番所江相詰申候。右私共御番中之始終申上候、以上。

正月十六日

蓑輪平作判
神保釆男判
出野新平判

右十六日曉、前田伊勢守殿於御宅相調之、江戶表江之早打御使人伴造酒江相渡之候事。

〔齊廣樣御傳略等之內書抜〕

正月十五日暮六時前より金城炎燒、二之御丸御式臺・御臺所・御廣式・菱御櫓・橋爪御門等不殘御燒失、夜八時頃鎭火なり。同日朝登城。松之間之火鉢之殘り之火より出火と申事なり。御留守年なり。御大小將伴造酒、河北御門外寄場江罷出居候處江、村井豐後守殿被見得、江戶表江言上早打御使被仰渡、旅用金腐打入持參被相渡、同所に發足するなり。村井殿手早き事

と貫誠するなり。物語り承なり。右に付當分御城中御番人等都而火事裝束着用。御番所不ㇾ寢番夜中九時交代。武士屋敷町々晝夜一時廻り。金澤町中自身番。風廻り御役人晝夜相廻り、雪降り、市中迚も混雜至極之由承るなり。

〔寢覺の螢〕

一、文化五戊辰正月十五日暮六つ時（暮六つの時鐘より直に早鐘をつく。）金澤御城不ㇾ殘燒亡、御本丸（御殿なし。）・金谷御殿・御蓮池外御園・御門々々恙なし。此時殿樣江戸御留守也。御城代村井又兵衛一番に馳つき、先詰所々々勤番をあけさせ、其人々を以諸書物取出されたり。前田伊勢守鶴之丸の鐘を搗させられたり。此鐘を搗ときは惣門一時に可ㇾ開と古來よりの法令なり。是より町夫（所々の門々不ㇾ開、人々入事不ㇾ能、只是はㇾ、と雪しく、未ㇾ居え處、此がれにて門々開。）不ㇾ殘入て火を防。二百年の泰平に御先代の遺風くづれず、其號令正しきを感ず。

〔寢覺の螢〕

泰隆に御尋の談

一、太梁院樣（御隱居金谷御殿）此節御病氣にて、京師より畑泰隆と云醫者を被召寄置し。泰隆火事と聞より早速伺公を遂たりしに、火爺熾にして火の子はら〳〵と雪の降ごとく、御間あひは灯火なくてもあかるく、音は雷の落かゝる如く、はやも御殿へ火の懸るべき躰にて事急なり。御前は御平生の如く色々外の御物語共あり。御近習出て、只今御立退被仰付たり、御相伴致さる

ゝ様にと、御側にて戴きけるにうどん喉へ下らず、漸二椀給たり。御前はいと靜かに、常より多く三椀を召上られたり。扨二之丸より離御土藏（御土藏の名なり。）といふに火懸り、御近習より御裝束を可被遊と申上ければ、泰隆は早や御殿に火懸りたるかと思ひ、周章驚て御いとまも不申上歸らんとす。御前大に笑はせ給ひ、京師の人は左も有べし。江戸にてはかゝる事度々なり、先々しづまられよと、御裝束を被召又御物語なり。扨々我等一生は民の迷惑致さぬ樣にと朝夕祈りしに、此度は思ひ寄らざる難題をいふなるべし。隱居はいたせ共大に心を痛むる事なり。加賀守方へは誰か知らせたるかと御尋に、只今奥村卯八郎（表小姓）・何某（一人は姓名を失す。）兩人早打に參りしと、御近習頭より申上ければ、夫前に先足輕飛脚にても走らせばよき物をと御噂ありけり。後泰隆此事を申出し、百二十里の道を隣あるきさせる樣に思召、誠に大國の御威勢左も有べきよし感じけるよし。津田藤兵衛物語なり。

一、堀川町の者火の中へ入、御玄關の帶戶をはづし出たり。實檢の御間に、寒夜聞霜といふ銘の有大筒百挺餝りあり。木村左助（百二十石町同心。）差圖して取出せり。町夫は一挺に二人づゝ懸り、漸に取出す。斯ては果じと左助一挺を持出、八講屋（礒ケ崎と言し相撲。今金澤に住、歳六十餘也。）眞裸にてかけ來り、二挺づゝを輕々と引かつぎ、御堀の中へ投込〳〵たり。石丸太郎續て來り、三挺づゝを持出す。其時はや障子に火移り、煙に哽で名を尋るいとまなし。石丸太郎は家中にて强力の名知ら

眞隆院は眞璉院の誤

る。是に劣らぬ二人の働、其名聞まほしく思ひしがいまだ不知と、左助の物語なり。後磯ヶ崎歳六十に餘れ共、確歴として、此時の働初終拔群の事なりとて、後幾回の御褒美下さるなり。大筒を燒ざるは左助が働なりとぞ。

一、眞隆院様（宮君の御母公）は宮腰口へ御立退、最初淺の屋といふ酒屋へ被爲入、夫より出雲寺といふ所へ御入、宮腰中山主計方へ御入の圖りなりしが、其内火鎭り、曉六つ時御殿へ御歸なり。

一、此火大老衆の席より出たりとて、詰の坊主、其日の宿直皆召し籠られり。去れ共廣式方先きに燒たるを見ては、表より其定難し。色々爭ひあれ共、主誰と知れてはと、疑はしきにして其沙汰なし。斯廣式方火の手早ければ、女中の騷ひと方ならず、國母は跣にて小猫を抱き狼狽給ふ。佐々芸庵御介抱申、御乘物やあると尋めぐれ共更に人なし。御手を取て風上の方へ廻りければ、足輕の老さらぼひて案山子の樣なる男在たるをかたらひ、漸駕籠を尋出し、蒲團さへあらざれば、芸庵羽織を敷て乘せまゐらせ、芸庵と彼をとこと坂の下御門迄舁出たり。かくては御供の衆・女中方も尋奉らんと、大音を上、眞隆院樣は佐々芸庵御供して、そこ〳〵の方へ退くなりと呼しは甲斐々々しけれ共、霜に晒たる瓢のやうなり。天窓を振立てよろり〳〵と舁行姿、土佐の繪を見るが如くをかしかりきとなり。御附の面々漸に尋當り、宮腰口へ引取給ひぬ。此日は注連の終日とて、上下祝ひことぶき、女中の局々は神酒と

り散し、土器を戴き過して臥たるものありけり。され共宿直の女中は騷もやらず、襠かいしめ、長刀小脇にして立出たれ共、鬪ひの外は知らぬ人々、火の手煙に心うばはれ泣ぬばかり、此武家の風儀。輕き外樣の婦女は、着がへの衣裝に心ひかれ遁れかねたるを見て、老女（名を失す）何某、いづれも調度に目をかけず御上の御守護を申せ、燒たる品は跡より下さるゝぞと觸ければ、皆々心は殘ながら西よ北よと逃出ぬ。曉ちかく、最早下火といふになれば、國母を金谷御殿へ入奉れとの事にて、數多の女中かち路をひろひ還る姿は目も當られず、逃るときは跡先となく夢路を走るこゝちにて、恥らう色もなかりしが、金谷へ入給ふ頃は夜も明わたり、人顏もあらはに、殊更今朝は嵐はげしく、氷そば立雪冴かへる玉ぼこの道すがら、あゆみ習はぬわらんじの紐しどけなく、雪と見違ふ脛をあらはし、夜すがら吹すさみたる白粉は鹿子まだらに、みめよきも醜も雨に逢うたる海棠のすがれる花にひとし。されば後宮三・四百計の婦人、かち跣の御供はためし少き事なりし。月見・花見の遊行にして見まほしやと、皆人さゝやきあへり。

〔續漸得雜記〕

一、文化五辰之青陽を迎て四方豐に、武門之拜賀金城之繁榮、別而今春は去卯の冬より深雪もなくて路次之煩ひなく、市中の年禮半過て、十五日月次出仕の式も目出度終りて、其日酉

の上刻計に火事ありてかまびすし。追付火事は御城中なるよし罵りけるが、二ノ御丸にて御殿向不殘、御廣式・四十間御長屋・ひし御矢倉・橋爪角御矢倉・橋爪御門等、都而二ノ御丸廓不殘御燒失におよびぬ。卯之刻より曉天に至火鎭り侍りぬ。日の內は風もなく靜なりしが、夜分に至西風頻、元より火は昔より催しけるに哉、甚急火にて、宿番の人々唯狼狽周章して逃出より外なし。本より火元を見定る事もなく、唯一遍に黑煙燃上りて、金殿樓閣寶庫等忽に灰燼赤土となりぬ。去寶曆九己卯の大變に御城炎上ありてより、今年五十年の星霜年々歲々に巧積りて、漸御城御成就なりしが、唯半夜計に一廓不殘御燒失ありし事、唯恭恐怖而已。去れど法令之嚴なるに、火消人步等馳付ながら入事不叶。唯黑烟を見揚て手を空しく守り、法の解るを待。火は次第に廣り、滿風は强吹布候。火花四方に散亂しけれど、折節少々雪ありて幸に飛火の災はなかりし也。火半過ては火消人步防ぐ事に成りしが、此節別而風强火盛にして、人力のおよぶ事にあらず。去れど彼是する中に、此一廓にて火鎭りし。此節武家人步等の働も聞しかど、事多端にして書洩しぬ。

筆を採て思ふに、怪しみを見て怪まざれば怪なしといへり。去れどいにしへより、いかさま神社佛閣一城の大家に災あるに至りては、必其瑞を示に至る。此近年或は旗雲西北に顯れ、去卯の秋中にも怪星出現、彗星とやら俗に箒星とも呼び侍りけれど、此客星それにも非ず、

ボウ星といへるなるよし人口に罵り、辻々に立て仰向見る事夥し。且て又火吹星とも呼し。いかなるや折々炎をふくごとし。赫々とほのめく事もありし。此節もまた旗雲も立なるよし。果して此年東嶋異賊の一變あるに出る。御城の火によりて思ふに、舌を巻の一奇事あり。此年辰の元日御城二ノ御丸表御玄關の向櫓塀の上に、怪しき鳥ありて人々見物す。此日出仕の歴々衆も各立出で見物也。鳥は敢てあやしき鳥にもあらず、火焼鳥の類にして、大さ鳩計、赤く青く色々斑文あるよし。去ど常にはいかにも珍敷鳥なるよし。或云朱火焼となんいへるよし。本より爾与號するにはあらずとなん。不測にも元旦殊に二之御丸御玄關先に來りて囀合り、其鳥火焼の號も、旁此一變火の瑞を兼て示すものかと、衆人舌を震ひ侍りし。

正月十六日。老臣等の用部屋を前田伊勢守の邸に移す。

〔政隣記〕

正月十六日、昨夜二之御丸就御焼失、前田伊勢守殿御宅に而、年寄中初諸役人御用取噯候筈之旨等、御用番山城殿被仰聞候由、今曉御横目より紙面を以申談有之。

〔御觸留〕

御横目江

二御丸御殿向等御焼失に付、當分於伊勢守宅御用取捌候。仍之右宅江罷出候人々、門内從者

成限減少召連可申候。

右之趣一統——

正月十七日　横山山城

〔齊廣樣御傳書等之内書拔〕

正月十六日御用方都而伊勢守殿於宅御取捌、御用之人々火事具着用、右宅に可罷出旨、御用番山城守殿被仰渡候なり。

正月十六日。昨日火災の際諸役人の功勞ありし者を調査せしむ。

〔政隣記〕

今般御城中火事に付、御役人等働之樣子相しらべ早速書出候樣、御用番山城殿被仰聞候。此段御一統に私より可申談之旨被仰聞候條、御承知被成、御同役・御同席方等御傳達、御組・御支配御申談御書出可被成候。早速夫々御廻達、落着より御返可被成候、以上。

正月十六日　武田喜左衛門

正月十六日。二ノ丸御殿火災の當日宿直せる者に指扣を命ず。

〔政隣記〕

一、去十五日二御丸幷同御廣式當番之士組より小遣小者に至迄、指扣可罷在旨、翌十六日御

用番山城殿夫々頭・支配人え被仰渡、則夫々申渡之。

正月十七日。越前・越後の領界に吏を派して警戒を嚴にせしむ。

〔金龍公記史料〕

正月十七日遣先手頭音地清左衛門于大聖寺越前界。割場奉行富田左馬于越中界。守衛。

正月廿一日。金澤城の燒失を報ずる急使江戸に着す。

〔政隣記〕

前記十五日夜發出之早飛脚、町會所より指出候分、廿一日夜九時過最初に江戸御上邸え參着。其次割場より指出候分參着。其次早打上坂平九郎・伴造酒參着与云々。右平九郎者二日江戸發、早打に而昨廿八日歸着、造酒も同日江戸發、指急旅行に而二月二日歸着。

正月廿三日。用部屋を老臣津田玄蕃の邸に移す。

正月廿七日の條參照

〔御觸留〕

御横目え

伊勢守宅、御座所に御借上に付、明廿三日より當分、於津田玄蕃宅御用取捌候。仍之右宅え

罷出候人々、門內從者成限減少召連、且又雨天之節手傘相用可申候事。

右之通一統——

正月廿二日　　　　　　　　　　　　　　　　　横山山城

正月廿七日。德川家齊、前田齊廣に使者を遣はして居城燒失に付き慰問せしむ。

〔續德川實紀〕

正月廿七日、松平加賀守齊廣居城燒失せしかば、奏者番堀內藏頭直皓して問はせらる。

正月廿七日。老臣本多安房守邸を以て藩侯の居館に充つべきことを告ぐ。

〔政隣記〕

正月廿七日、先達而前田伊勢守宅御座所に御借上之處、指支候趣有之候に付、本多安房守宅御座所に御借上之段、爲承知今日御用番山城殿御橫目江被仰聞候事。

右は相公樣より被仰出之趣有之候故与云々。

右に付、上邸は御作事所江引渡之、房州殿等下邸之內江被退。且伊勢守殿は先達而下邸江被移、上邸は御作事所江引渡有之候處、右之趣に付上邸江移徙有之候事。

この日付は文化四年なり

正月。異國船の手當に關する幕府の令を傳達す。

〔政隣記〕

一、左之御書付等、翌年正月御用番横山山城殿御算用場奉行江御渡之旨承之。爲互見爰に集書之。

牧野備中守殿御渡候御書付寫一通相達候間、被得其意、答之儀者中川飛驒守方へ可被申聞候、以上。

十二月九日　大目付

御名殿　留守居中

大目付江

おろしや舟取計方之儀に付、去寅年相達候旨も有之候處、其後蝦夷之嶋々江來り狼藉に及候上者、向後何れ之浦方にても、おろしや舟と見請候者嚴重に打拂、近付候においては召捕、又者打捨、時宜に應じ可申候事勿論之事に候。萬一難船漂着にまぎれ無之、舟具等も損じ候程之儀に候者、其所に留め置、手當置可被相伺候。畢竟おろしや人不埒之次第に付、取計方きびしく致し候わけに候條、無油斷可被申付候。右之通萬石以上・以下、海邊に領分有之面々江不洩樣可被相心得候。

付札、御算用場奉行江
おろしや舟手當之儀に付、御書付寫相渡候條、御郡奉行等へ夫々可申談候。右手當之儀は、先達而内意申渡置候通に候條、猶更御書付之趣相心得候樣、夫々可被申談候事。

正　　月

〔政隣記〕

翌年は文化五年

右翌年二月三日御馬廻頭一番組中川平膳御呼出に而、寫兩通御用番奥村左京殿御渡、無油斷相心得候樣被仰聞、青木與右衛門（二番組御馬廻頭也。）江も可申傳旨被仰聞候。依之兩組筆頭兩人宛、中川・青木宅々江相詰、右寫を以御手當被仰渡置候面々、無油斷可相心得候樣可被申談旨申渡有之候由之事。

正月。淺野屋宗平、金澤城火災の際その家に貞琳院の避難せる事情を上申す。

〔政隣記〕

前記十五日に如有粗記、淺野屋宗平より指出候紙面左之通。

私儀酒造商賣仕罷在候處、當十五日夜御城御燒失之儀承候に付、十間町に罷在申候一家共方江、私幷せがれ・手代共等見廻、早速与罷越居申候而、宅には妻幷手代等男之分五人計罷在

大重は大重箱なり

申候。然處夜五時前比、周章大戸をたゝき候に付、右手代加兵衛与申者くゞり戸を明け候處、御作法を御申、大戸を開候様に御申に付開き候處、內場江御輿御舁入れ被成候處、御上様之御様子に付、先近所に居申候同姓淺野屋仕右衛門与申者直々呼に遣候處、座敷江御通り可被遊旨に而、是より御ひろひ可被遊旨、御附之御面々御僉議御座候處、其儀は相成申間敷旨御僉議相極り、又々外江御出被遊、私奥座敷所持不仕候に付、見世むしこを取はづし、御輿御舁入れ被遊候。尤早速私方江呼に參候に付、卽刻罷歸右之御様子承申候。御出之時分御供女中四・五人、外御侍中様二・三人、御輿舁も帶刀人之様に覺申候段、右留守に居申候手代申聞候。

一、私罷歸候處、御女中より御湯御乞被遊候に付、幸湯わき居申候に付獻上仕候處、貞琳院様御召上被爲遊候御様子に御座候。尤女中方も御給被成候。

一、御膳所御役人中様、二升計御膳米上げ候様御申被成候に付、幸上白米有合候に付二升指上候處、右御役人様御焚被成、何にても新き物上候様御申に付、新しき大重御座候に付指上候處、御燒飯に被成、隣町に居申候御用聞味噌商賣人石屋藤兵衛方江被仰遣、味噌上候處、燒味噌被成、私より重箱上候處、右重箱に御燒飯等御入れ御上被成候。御女中方江者再往御湯上申候。

一、私方より御居間江は行燈一張上申候處、燈芯も少しに而御靜に被爲在候。御きせる幷御たばこ等御用に付、せがれ七左衛門妻御居間江持參仕指上申候。尤御居間等江御火鉢上申候。

一、御見廻之御樣子に而、早馬に而御出之御面々樣方御座候。

一、私家來共內、爲警固前江出候樣御申渡に付、則三人前江指出置、往來之者高聲等不仕候樣に申渡候。

一、十五日夜五時前比御出被爲遊、四半時比迄被爲入、夫より折違町禪宗放生寺江被爲入候。

一、銅耳だらひ・蠟燭・わらじ・木綿風呂敷等品々指上候に付、此間二之御丸御廣式により小者使口達に而、先頃御出之時分費可有之候間書上候樣に被仰下候得共、買調候品も無御座、宅に有合之物指上申候間、書上候におよび不申候旨申上置候。

一、御手水之儀如何御座候哉。御女中樣方は御出之御樣子御座候。

一、二之御丸御廣式御附之御面々樣方、都而御近付等一向に無御座候。

一、一つ木綿風呂敷包、但御封付

但、二之丸御膳所と申紙札付有之。

一、一つ　長さ一尺計木具

一、一つ　赤地錦御鼻紙入胴〆之樣成もの、但小巾着共

一、一つ　のし紙に而箱之おひ之樣成物

一、一つ　小き紙包

〆五品

右之品々御立後に御座候。尤最初に御役人中樣、何を御忘れ被遊候も知れ不申候間、御跡に御座候御品御預り置候樣被仰候に付、御預り置申候而、當十七日御場ゟ指上申候。則清水鄉右衞門樣御添紙面に而、二之御丸御用達高橋新平樣ゟ爲持被遣候。

右御尋に付申上候。此段宜被仰上可被下候、以上。

辰　正月　　　六枚町　淺野屋　宗　平

肝煎　又右衞門殿

當十五日御燒失之刻、女中三人・足輕一人私方ゟ御立寄、其內女中一人御氣滯之樣子に而、湯を御乞被成候に付、素湯上候處、氣付之藥を御用ひ被成度由被仰候。折節養往散与申藥私所持仕居申候に付、可差上哉之旨御尋申候處、指上候樣被仰候に付、則指上御用ひ被遊候。然處丸山了悅樣方に貞琳院樣御立退被爲在由に候。依而了悅樣御屋敷迄負て參呉候樣御

金品獻納の事は後日に亙るものもあるべけれど假に是月に序次す

願に付、背負御供仕、了悦様方〻罷越候處、貞寿院様不被爲在に付、御座之所迄是非御供仕候様被仰候故、能々承合、折違町淺野屋宗平方迄御供仕候。宗平方に而各草鞋御入用之由被仰候に付、女草鞋七八足爲取寄、すげ候而女中七人様〻爲召申候。私儀者御暇可被下哉与相伺申候處、御供御人數御揃被成候迄相待候様被仰候に付、良半時餘相見合居申候。追々御人數御揃に付、私儀御暇被下罷歸申候。然處此間二之御丸御廣式より小使衆兩人被罷越、私名前等聞糺之上、御燒失之節御供仕候様子御尋之趣之由被申候。依而右之委細申上候に付御達申上候。此段宜被仰上可被下候、以上。

下堤町淺地屋長右衛門借家

乘物屋　小兵衛　印

長　正　月

肝煎　加　兵　衛殿

正月。火災後士庶多く金品を献納す。

〔政隣記〕

今般御燒失に付、粟ヶ崎藤右衛門より爲冥加、先左之通指上度旨願之候由、其外左之通同斷。

幅二尺餘長さ一丈計　草槇　七本

幅二尺餘長さ一丈四五尺計　檜　五本

同一尺餘長さ不知　　　　　　　草槇　五十本
糸大濱引二百筋計
小松邊より都而御長屋爲冥加御造營仕度旨之願、實檢之御間より御表御造營願人名前不詳。
右之外に粟ヶ崎藤右衛門より銀二百貫目爲冥加指上度旨願之。且左之人々左之通指上度旨願有之。

銀　百　貫　目　本多安房守　金　五　百　兩　奥村助右衛門
同　三十貫目　前田土佐守　幷下屋敷に有之大木共御用之程可指上旨。
同　十　貫　目　津田玄蕃　銀三十貫目　村井又兵衛
金　三　百　兩　横山圖書　同　七　貫　目　前田圖書
金　千　兩　青山將監　同　六　貫　目　寺西九左衛門
同　斷　山崎庄兵衛　同　三　貫　目　篠原頼母
疊表千五百枚　作　八　矢　人夫千人　横山織部
銀　三　十　枚　前田主殿助　但代銀八百目。一人に付八分圖。
同　五　貫　目　深美八郎兵衛
同　三百五十目　神保又三郎　但勝手難澁町會所仕送に付、座敷毀ち賣拂右之通上之。

三ヶ所は公事場町會所及び盜賊改方に屬する牢獄

いりせんは袴の一種

右承候分迄記之、此外夥敷有之由に候得共、虚説難計分不記之。且又町方に召置候下人よりも、銀子等差上度段相願候處、志之儀に候得共、先不及指上段被仰渡有之候事。

〔政隣記〕

一、二御丸就御燒失に、前記廿日に有之通、本多安房守殿已下御歩並以上より、金銀・人夫或は庭之大木指上度旨追々願人有之。足輕抔よりも内福之者は金銀等指上度旨願人有之。三州町・在よりも、前記に有之通爲冥加、金銀・竹木等・器財・屏風類、幷御廣式女中用之漬物燒失に付、三年糠漬大根千本指上度旨等之願人有之。

一、公事場等三ヶ所懸り町醫師之内白崎玄水者、御城中燒跡等え罷出候者共、風寒に而致難儀候に付、日に兩度宛用候得者風寒に中り不申湯呑藥家法有之候間、せがれ弟子に爲持御城中爲相廻度旨願出、

一、寺社方よりも金銀等右同斷指上度旨願出有之。

一、貞琳院樣御着類燒失に付、年寄中・御家老中より絹・縮緬類等夫々より獻上有之。

〔郡方舊記〕

文化五戊辰年正月十五日暮六つ時二ノ御丸御殿より出火、橋爪御門限不殘御燒失、其外御園は御異變無御座。三州詰合之十村等火事羽織・いりせん・帶刀に而御算用場へ相詰る。

一、火災之節燒材木灰寄等、御領國より爲冥加人足罷出、奥兩御郡之儀一組より人足十八に肝煎一人宛相添、暨番代指添、正月廿九日より二月五日迄相勤歸村いたし候。奥郡人足ども致入情候旨、御郡奉行中村逸角殿御宅において、指添之肝煎共へ御譽言葉有之候。且又御家中初、御郡方諸役人、幷在・町・寺社方・御預地村々よりも冥加銀指上申候事。

奥郡左之通

一、二　貫　目　鶴川　喜三兵衛
一、一　貫　目　鹿野　恒　方
一、一貫五百目　折戸　源　助
一、五　百　目　中居　三右衛門
一、二　百　目　馬場　八左衛門
一、三　百　目　鈴屋　九郎右衛門
一、三貫五百目　中居　三郎兵衛
一、二貫五百目　宗玄　忠左衛門
一、五　百　目　鵜川　爲次郎
一、三　百　目　馬場　喜右衛門

一、三　貫　目　　　　大澤直　作
〆十五貫三百目
一、銀二十五匁より五百目迄　　　新田裁許三人
　　　　　　　　　　　　　　　　山廻二十五人
　但、此銀高二貫三百目、此内五百目は時國藤左衛門也。
一、十四貫五百目　　　馬場喜右衛門組
一、十六貫三百目　　　走出友右衛門組
一、十八貫二百目　　　大澤内記跡組
一、百三十貫目　　　　稲舟藤太先組
一、十三貫五百目　　　鈴屋九郎右衛門組
一、二十七貫目　　　　折戸源助組
一、六十二貫目　　　　飯田三郎右衛門組
一、二十七貫目　　　　宗玄忠左衛門組
一、三十八貫五百目　　鹿野恒方組
一、十八貫五百目　　　鵜川爲次郎組

一、十六貫五百目　　中居　三郎兵衞組

〆　三百八十二貫目

銀高合三百九十九貫六百目

外　銀　百　枚　　稻舟村　藤　太

但、十村・新田裁許・山廻之分は同年七月・十一月兩度に上る。組々之分は同年七月・十一月、翌巳ノ年七月・十一月四度に上る。

五十目以上之分は人別名前を以上る。四十目以下之分は一村合して上る。依て御郡奉行・改作奉行より、人別・村方之分共御感狀相渡候也。

一、口郡よりは銀高都合四百三十貫目計上。其外御郡身分相應に上げ、中にも粟崎藤右衞門・戸出茂兵衞・窪村九左衞門等は、銀高餘程上り申由也。

正月。鳳至郡大澤村の長太、老狸を殺したることを屆出づ。

〔政隣記〕

覺

一、年二十七　　大澤村　五左衞門弟　長　太

右之者常々木挽稼仕申に付、去冬大澤村領之內字はうりを与申山ゑ右稼に罷越、晝夜獨身に

而寝泊居申候處、尤右山之儀、居在所より大概十二町計も隔り候山入に御座候。然所去十二月十四日、其日之稼相濟し、食物等拵給居候處、夜五半比に而候哉、稼小屋之外より呼り候者、其許母急病指發り、最早命之程も難計候間、此方と致同道早速歸候樣、人聲に不違申聞候に付、長太答候者、誰に候哉、母いか樣之病に候哉与尋候處、其答は不申、頻に前之通申聞候に付、定而狐狸之所爲と存、元來長太健氣者に付、少も不怖食を給居候處、暫有て呼不申候得共、何とやらん不心易、其夜焚明し、夜明候て早速歸宅、前夜之趣相尋候處、母氣分少も相替儀無御座候に付、彌狐狸之欺と存、又候右山ゑ登り、其日之仕事仕廻休居候處、此夜は六つ比にも候哉、前夜之通呼候得共、何共返答不致候處、其内又申聞候者、今夜は其方を捻り殺可申候間、是ゑ出候樣申聞候に付、長太申候は隨分相手に可相成候得共、今食給候間、それにて暫待くれ候樣申入候處、無程小屋入口に懸置候簾を引破り、それより首を出し候を見受候處、面躰薄黑く、眉目如人にして、凡丈六・七尺計も有之程之人形なる者に而、長太も始て見受申事にて、心中には驚候得共、其躰を不爲見、我も食休致候間、今暫休候樣申入、其間に思案を運し候へば、曾而相替者に而も有之間敷、彌狐狸之我を欺き、容躰を變じ參候には相違も無之儀と存、斧を脇に置、たばこを呑居候處、小屋之内ゑ飛込候に付、斧を持立むと致候得共、肩先を押付候与存候内、いつ之間となく小屋外ゑつれ出候に付、右斧

決而は必ずの意

に而打臥可申心持にて、柄先を持打懸候へば、肩先を押付、幾度打懸候ても埒明不申に付、斧を脇挾み無二無三に組合候内、相手は大き成者に候得者、折々被組臥、最早命も終る程之儀故、存付候は、斧之柄先を持幾度打懸候ても打込得不申候間、柄之元を可打込と存付、一生懸命之心持に而打付候處、速に打込候哉、夫より前とは餘程心やすく相成、其内夜も明懸り候に付、猶又心安く存候に付、前の如く斧を打込、都合二ヶ所疵付候哉と存候内、組離れ、足を遅くして立去り申に付、長太儀稼小屋を相尋候得共、近邊に見え不申、段々相考候處、隣村西二俣枝村字者せつけ与申領内江罷越居候に付、方角を相考小屋江罷歸候得者、最早夜も明候に付、在所江可罷歸と存出候處、いつの間に宅江歸候哉覺無御座、跡にて存付候事に御座候。扨家内之者共長太顔色容貌常ならず、申口之趣も不相分候に付、段々賣藥等を用候處、正氣附候に付相尋候得者、右之通申聞候。其後何となく物事に驚き、夜中抔寐入候て狂氣の如く呼り申に付、近所之醫師に見せ候上服藥爲仕候處、次第に快復仕申候。然處同月廿七日、右せつけに住居仕候百姓九郎三郎と申方之物置売小屋之内に、長け五尺計有之程之獣死し居申に付、右之者共打寄相改候處、右之方尻足に斧疵一ヶ所、咽之下に一ヶ所、都合二ヶ所斧跡御座候に付、決而先夜長太組留候狸に相違無之儀と存候間、早速長太江申聞候處、長太罷越、皮等剥取候て宅江持歸り、乾し上候得者皮之長さ五尺三寸御座候事。

辰　正　月

右御算用場江、皮相添及届候由承に付記之。

二月朔日、老臣長甲斐守、前田齊廣が災後に於ける下民の特志を賞するの意を傳ふ。

〔於江府御親翰帳之内書抜〕

今般御城中御住居向不殘燒失に付、御家中之面々は不及申、町・在迄も神妙に存付、志之趣申遣候人々不少由被聞召、奇特之至に候。依之思召も被爲在候御事に候。先此段夫々志申出候人々江、不相洩樣可申渡旨、金澤表江可申達由御親翰、昨日御前江被召被渡下。右に付猶又思召之趣御別紙も被渡下、委曲御親翰之通被仰出候。誠に段々結構之思召之趣、奉恐入儀に御座候。則右兩通差進候條、御拜戴被成、被仰渡之儀は前々之振も可有之候間、宜被取計候樣可申遣旨も御意候條、左樣御心得可被成候、以上。

二　月　朔　日　　　長　甲　斐　守　判

前田土佐守等六人樣

今般御城中住居向不殘燒失に付、家中之面々者不及申、町・在迄も神妙存付き、志之程申出候人々不少由相聞、奇特之至に候。依之追而者存寄も有之事に候。先此段夫々不相洩樣可被

申渡候旨、金澤表に可被申達候、以上。

正月廿二日

長　甲斐守殿

別紙にも申出候通り、今般居住向不殘燒失に付而者、下々迄も神妙に存込、志之趣申出候儀は、誠に以奇特之至に候。兼而申聞候通、手前不德不肖に而、何一つ行屆申儀も無之處、今般之次第に而下々迄ヶ樣に存込、志之趣共申出候儀は、偏に先祖之積善に候へば、右之處を存付候而者、一入手前之身分不自由之儀者、毛頭相厭不申候間、世上一統に難澁之時節にも候間、志之程は喜悅之至に候得共、猶々下々迄難儀無之樣可被取計、此儀差當り諸役人心得之肝要に候條、手前存寄之程、先各迄申聞置候事。

正月廿九日

二月三日。德川家齊が前田治脩慰問の爲に遣はしたる奉書金澤に達す。

〔金龍公記史料〕

二月三日幕府遞傳奉書到。爲罹災問老公罹災起居也。乃發謝使。

二月五日。德川家齊、前田齊廣に鶴を贈る。

〔續德川實紀〕

二月五日、使番瀧川彦次郎元鄉して、松平加賀守齊敬のもとに御鷹の鶴をおくらせらる。

●二月七日。金澤城災後の整理終りたるを以て火事裝束の着用を廢せしむ。

〔政隣記〕

付札、御横目江

御燒失跡燒灰取片付相濟候間、火事裝束におよび不申、御番人等竝御燒失跡江罷出候人々等、都而當分常羽織・細袴等可致着用候。

右之趣夫々可被申談候事。

二月七日

別紙之通夫々可申談旨、御城代又兵衛殿被仰聞候條、御承知被成、御同役御傳達、御組・御支配御申談可被成候。且又御組等之內裁許有之人々は、其支配江も不相洩相達候樣御申談可被成候、以上。

二月七日　　御横目

町御奉行衆中

〔齊廣樣御傳案等之內書拔〕

正月十五日夜御城御燒失に付、御番人等最初火事裝束、夫より常羽織・細袴着用に候へ共、同

二月二十八日より平生之通相心得候樣に被仰出候。

二月十五日。金澤城の災後日を經たるを以て市中家屋造營等凡て平常に復すべきを告ぐ。

〔政隣記〕

二月十五日、今度御城内就御燒失に、金澤中一統質素至極致し、懸置候繕り普請も相止、小兒いか・竹馬等も父兄より嚴制。右等に准じ候趣共に而、卑賤之者共日用暮方に令難澁候躰に付、御用番左京殿に得御内談、左之通町中一統申渡有之候樣、同役御用番岩田傳左衛門より、町同心御用先竹村三郎兵衛に以紙面今日申談之。

御城内御燒失奉恐入、萬事相扣一統相愼罷在候儀、左もあるべき事に候得共、今以中に者、家職之品をも相泥指扣罷在候躰にも相聞え候。左候て者共職に怠り之所にも至り申事に候。最早日數も相立候儀に候間、家職不相泥仕、懸置候家作等之儀も可爲勝手次第候。且又能役者稽古、座頭・ごせ勸進、將又無據祝等之儀不差支事に候。勿論質素之儀者常々申渡置候通、彌堅可相守候事。

二月廿三日。藩侯歸國後の住所本多安房守邸を城内格とすべきを告ぐ。

付札、御横目江

今般御歸國之上、安房守居宅御座所に相成候に付、表御門前左右柵御門被仰付、御城内格に相成候。依而右御門前通行、當廿五日より往來差留候事。

但、御座所御用に而罷通候人々者不指支候事。

一、右御座所柵御門より内、三之御丸表御門より内橋爪御門内格に被仰付候條、佳節朔望等出仕、其外爲御用罷出候人々、都而從者召連方共心得可有候事。

但、兩柵御門外に而下馬・下乘有之、從者込合不申樣末々迄嚴重可申付候事。

一、表御門・裏御門共諸役人向寄次第致往來、從者出入も不指支候事。

但、表御門往來之人々者、右御門内御馬廻御番所脇小口より可致往來候。尤從者出入も同樣之事。

一、御裏口通りに罷越候御番人幷足輕番人都而廣坂之方に有之柵御門内小口より往來可有之事。

但、右家來出入も同樣之事。

一、御座所に相詰候諸役人手合々々之諸色出入者、兩柵御門に而相改候條、見合印鑑來月十

日限り拙者共席江差出可申事。

右之趣被得其意、夫々不相洩樣可被申談候事。

　　二月廿三日

別紙之通夫々可申談旨、御城代又兵衞殿被仰聞候條、御承知被成、御同役御傳達、御組・御支配御申談可被成候。且又御組等之內裁許有之人々者、共支配江も不相洩相達候樣御申談可被成候、以上。

　　二月廿三日　　　　　　　　　御横目

　　町御奉行衆中

二月廿五日。前田治脩の醫畑柳泰京に歸る。

〔政隣記〕

二月廿五日、畑柳泰今朝發出歸京。

但、舊冬被爲召、當時相公樣御療養も被仰付置候處、京都向難去用事指添候に付、何卒御暇被下候樣御才江段々相願候趣、無據樣子被聞召、暫京都江之御暇被下候間、用事相仕廻次第可罷越旨被仰出。

二月。前田齊廣、幕府より殿閣復興の資を借らんとの老臣の請を却く。

〔金龍公記史料〕

二月。老臣等以治城罹災。請仍例借金於幕府。公曰。請之於將軍必得其請。然余有別所思。不欲請也。

三月九日。災後初めて學校を開く。

〔金龍公記史料〕

三月九日。災後兩學校授業始。

三月十三日。前田齊廣就封の暇を受く。

〔金龍公記史料〕

三月十三日。將軍遣牧野備前守忠精。來賜休暇。貽白銀卷物。世子亦使同人貽卷物。將軍夫人遣各務傳之丞。貽卷物。

三月十三日。金澤城罹災の爲金品を獻納したるものを賞す。

〔政隣記〕

三月十三日、四時過御用之儀有之候條、津田玄蕃宅へ可參出旨、役々筆頭幷隱居御役御免等之人々、筆頭御用番又兵衛殿より昨日以御書面御呼出に付、各參出之處、左之通又兵衛殿御

演述。

今般御城中御屋形等御燒失に付、御家中之面々者不及申、町・在迄も神妙に存付、志之趣申出候人々不少由被聞召、奇特之至に候。依之追而者思召も被爲在候御事に候。先此段夫々志申出候人々江不相洩樣可申渡旨被仰出。

但、此度下々迄も神妙に存込候段、誠以奇特之至に思召候。世上一統難澁之時節にも候間、猶更下々迄難儀無之樣可取計、此儀指當り諸役人心得之肝要に候旨、拙者共迄御噂に候。

右之通被得其意、組・支配之内志之趣申出候人々江可被申渡候。組等之內裁許有之面々者、其支配へ相達候樣可被申聞候事。

右之趣可被得其意候、以上。

三　月

〔江戶御留守詰諸事覺書〕

三月十四日。本多勘解由・前田織江二人、前田齊廣に謁しその政令の嚴肅ならんことを進言す。

三月十四日

一、御取紛に可被爲在候得共、勘解由・織江御前ゟ罷出申上度旨、以與一郎申上候處、追付罷越、八郎右衛門を以兩人共御前ゟ被爲召、暫有之勘解由退去、織江儀は御勝手方御用に付御前に居殘、暫有之退去之事。

申上候趣略記

當時御家中諸士下々迄之風俗、暨當御屋敷諸人等之樣子引合相考申候處、何とやら人々柔弱之風躰に而、瑣細至極之意氣方甚輕忽之族之者も有之、偏に御奉公焦心之躰不相見。身分輕き者は猶以分限をも不辨、自己之辨利のみ之樣子に相聞、諸願方抔も僅之意味を彼是与申立、御當節をも不憚強願之筋も御座候。右等之躰は是迄被爲聞召、御會得被爲在候御儀に御座候得共、加樣に成行候而は、後々御政事御取扱之御指障にも可相成哉共奉存候。依之尙更私共奉恐察候處、畢竟御威光之御薄き樣に御座候而、甚不御爲儀奉心痛至極候。勿論御寛仁之御政務は難有儀、左も可有御座儀に御座候得共、當時之風俗人氣之樣子を以相考申候處、乍恐少御嚴政を被加、今一篇御手強成被仰付方無御座而は、却而御寛仁之御恩澤も不重樣に相當り可申哉。剩御家中成立之御敎化に御座候得ば、時勢により是則御仁政共奉存候。兎角御威嚴盛に無御座而は不相成儀に奉存候。私共か樣之趣申上候儀、誠に不顧恐甚僭上之申上方、申上兼罷在候得共、兼而御意之趣も御座候儀、旁以愚意存付候通奉申上候。尤御會得被

爲在候御儀、達而申上候にも不及儀に御座候得共、猶更御賢慮被爲在候樣仕度奉存候。此間織江儀出府仕、兩人心付申合候處同存に御座候。織江儀は御留守詰被仰付、來年迄御目通茂不仕儀。旁只今兩人一集に罷出申上候處、存付之趣逐一御聞被遊候。心付之程御大慶与被思召、何分可被遂御思慮候。猶又存付之趣も有之候はゞ、何事たり共無泥心底之通可申上旨等、段々御意有之、夫々應候而及御請。

三月十四日。前田齊廣、金澤に歸着の際の順路を定む。

〔政隣記〕

三月十四日、今般御歸國之節、河北御門より御入、石川御門御通拔、夫より學校前通、御座所に御着之筈に候事。

但、尾張町・中町通り、尾坂口より河北御門等本文の通。

三月十五日。前田齊廣登營して就封の辭見し、向後三ヶ年在國することを許さる。

〔政隣記〕

今月十三日御歸國御暇以上使被仰出、同十五日御登城御暇之御禮被仰上候後、御用御座候間

御居殘被遊候樣、御用番松平伊豆守殿より大目付中川飛驒守殿を以被仰渡候に付、則御居殘被成御座候處、於御黒書院溜御老中御列座、伊豆守殿左之通被仰渡。

此度居城燒失可爲難儀思召候。拜借之儀者內存申聞候趣有之に付不被仰出候。依之參勤御用捨被遊、暫在國被仰付候。且又年中献上物も、五ヶ年之間御用捨被成候旨被仰出候。

御別紙

當年より三ヶ年在國之心得に而、來々午年參勤時節可被相伺候。

一、年中献上物之內、年頭・八朔・三節等者是迄之通。其餘之品者可及省略候。尤相減候分者一通り可被申聞候事。

〔續德川實紀〕

三月十五日、松平加賀守齊廣同じく就封のいとまたまひ、御鷹・馬を下さる。また加賀守齊廣こたび居城災にかゝり、難儀たるべくとて、參覲の事しばらくとゞめられ、年々の献物も五とせがうちは御ゆるし有べしとつたへられ、その他はこれまでのごとしとなり。

三月十六日。前田齊廣江戶を發して就封の途に上る。

〔政隣記〕

三月廿六日、去十六日江戶表御發駕被遊候旨申來候飛脚今日到着。

〔金龍公記史料〕

三月十六日駕發江戸、廿八日抵金澤。入本多政禮邸。扈從老臣長甲斐守。

三月十六日。年寄中席を本多安房守の邸内に設く。

〔齊廣様御傳畧等之内書抜〕

廣坂御座所、三月十六日より年寄中席等相建、御用御取捌諸役人罷出候事。

〔三守御譜〕

前田伊勢守宅御座所に御借上、正月廿三日より當分津田玄蕃於宅御用取捌有。然所重て今般御歸國之上本多安房守居宅御座所に相成。依て三月十五日切御座所出來、諸役所十六日より相建。

湯撰。正月十六日より執政已下諸官屬前田伊勢守孝友が第に會し、公事を達す。孝友が宅御座所となるにより、津田玄蕃宅に會し、公用を達することに成たり。又再本多安房守政禮が第御座所となる。

三月二十日。異國船來着の際に於ける心得を能登四郡に通牒せしむ。

〔文化年間書物留〕

能州四郡海邊おろしや船漂着之節心得方之覺

一、何方浦々に而も異國船及漂着候はゞ、御郡海邊は勿論、山手村々等迄、自組・他組之無差別、御扶持人・十村等相廻り、少も騒立不申樣懇々申諭之儀專要に候間、兼而心得尤に候事。

一、何方浦方においても、異國船与見請候はゞ、先其村方より急飛脚を以、御算用場拙者共改作奉行へ渡置候印札を爲持可及注進候。

附、注進之節兼而渡置候印札持參いたし候樣可申渡置候。且驛々傳馬・人足等之儀有之候はゞ、不指支樣驛々へも可申渡置候。尤加州筋へも其段申談置候事。

付札に、本札追付出來可相渡事。

一、異國船見受候はゞ、其浦方に在之太鼓、寺庵等に有之鐘を打可申候。右鐘・太鼓の音聞付候村方々々へも尤相繼可申候。

一、右鐘・太鼓聞付次第、山入村々之者共、鳶口・棒・斧・猪鹿狩鐵持出、浦割之通無違失急速罷出、先づ小高所森林等を片取、水旗・神事等之旗を建擬兵をなし、尤組付十村等罷出、無油斷令指引、御人數を相待可申候。無謂猥に取懸候儀一圓在之間敷、若異國船急に近付においては、無據時宜次第精誠防方可有之候。勿論拙者共急速令出役可及指圖候事。

附、村々より罷出候割方之儀、別帳之通可相心得候事。

一、夜中は村々等に有之高提灯・松明立、濱方には捨篝を焼可申事。
一、右人數兵粮米之儀は、身元相應之者へ申談、指懸候處不指支樣に可相心得候。品定候上は、遂勘定可相渡候事。
一、異國船漂着之海岸村方妻子老幼之者ども、追々山手村へ爲立退、在所に罷在候村役人共等、猶心を付介抱方之儀念頃に可仕候事。
一、御收納御藏之儀、無油斷縮方可申付候。尤御藏番人晝夜勤番可仕候事。
附、人數爲相詰候儀時宜次第之事。
一、渡海船縮方之儀は、宮腰町奉行脇田善左衛門より可及指圖候條、無違失樣船肝煎等へ可申渡置候事。
一、海邊御鹽藏有之ヶ所は、口郡所口御代官山岸十左衛門・奥郡宇出津山奉行出役、御藏所人數入用之旨申聞候はゞ、馳集候人數百人計、先々手當にいたし可相渡候事。
附、其所切に人數可相渡事。
一、狩人最寄々々之浦人數之內へ、見計不同無之樣可罷出。尤猪・鹿威之爲相渡置候鐵炮等指出、才覺在之者共に爲主付可申候事。
一、異國人炮術專之由相聞候條、火術之防方相心得専要に候。時宜次第竹束等も可相用候

候、海邊筋竹木大小に不限其心得可有之候事。

一、異國船漂流之趣及注進候者、御郡境加州・越中之方へも向寄告しらせ可申候事。

附、御郡御境目御締方之儀、嚴重相守可申候。尤御郡方之儀も同樣之事。

一、支配所浦方之儀は數十里有之、其内所々嶮難之場所有之に付、右人數配之儀は、先靜を以上陸可相成程之所は相固め可申候。其外上陸難相成場所は、折々見廻可申候事。

一、御郡方に有之候外料醫者・杣并大工・鍛冶之類、相しらべ可置事。

一、十村等罷出候ヶ所左之通之事。

一、加州高松村境より粟生村領迄之内。

本江村　惣助　　酒井村　一樂

中川村　太郎右衛門

一、羽咋村領より瀧村領迄之内。

本江村　六郎右衛門　　武部村　彌兵衛

菅原村　行長

一、柴垣村領より赤住村領迄之内。

堀松村　平藏　　能登部下村　與三右衛門

一青村　孫右衛門　大嶋村　堺兵衛
土橋村　次右衛門
一、福浦村領より笹波村領迄。
三階村　覺右衛門　笠師村　九郎次
高田村　由五郎　笠師村　喜八郎
吉田村　良左衛門　田鶴濱村　丈助
一、鵜浦村領より御預所大野木村領境迄。
武部村　四郎太夫
一、野崎村領より祖母ヶ浦領大口渡を掛。
簑日村　五兵衛　同村　太郎次
野崎村　清兵衛
一、羽咋・鹿嶋兩御郡之者ども騒立不申様、尤火之元等御縮方相勤可申候事。
荻谷村　象次郎　芹川村　兵衛
中島村　與一
一、劒地村領より千代村領迄。

馬場村　喜右衛門　　馬場村　八左衛門
道下村　理左衛門
一、道下村領より深見村領迄之内。
走出村　友右衛門　　鹿磯村　藤次右衛門
道下村　茂作
一、吉浦村領より皆月村領迄之内。
皆月村　彥　　走出村　八郎左衛門
一、上大澤村領より光浦村領迄之內。
大澤村　直作　　本鄉村　善兵衛
一、輪嶋村領より瀧田村領迄之內。
鹿野村　恒方　　名舟村　九郎兵衛
一、大川村領より時國村領迄之內。
鈴屋村　九郎右衛門　　粟藏村　彥三郎
一、長橋村領より眞浦村領迄。
廣江村　宗次郎　　大谷村　賴　　彙

一、大谷村領より狼畑村領迄。

折戸村　源助　　同村　次助

高屋村　甚三郎　　若山村　延武

一、寺家村領より鳥越村領迄。

鶴川村　喜三兵衛　　蛸嶋村　川端

正院村　六郎右衛門　　上戸村　彌五郎

一、下鳥越村領より小木村領迄。

宗玄村　忠左衛門　　同村　新助

松波村　源吾

一、眞脇村領より藤波村領迄。

鹿野村　孫次郎　　宇出津村　藤三郎

宇出津村　佐藏　　藤波村　五郎兵衛

一、波並村領より矢波村領迄。

鵜川村　爲次郎　　木住村　八之丞

諸橋村　永四郎

一、宇加川村領より中村領迄大口渡り。

中　居　村　三郎兵衛　　中　居　村　金右衛門

中居南村　藤　藏

一、鳳至郡・珠洲郡走廻、御郡之者騒立不申様、尤火之元等御縮方相勤可申事。

中　居　村　三右衛門　　鵜　川　村　六　藏

鵜　川　村　清　三　郎

一、海立有之御預所之分は、右手合に而夫々手配可有之候得共、隣村之儀は相互に申合相守可申事。

一、島地与地方之内之浦々は手配不申渡候得共、村々縮方等之儀無油断様可申渡候事。

右之通内々申渡置候條可得其意候、以上。

高田彌左衛門

中　村　逸　角

能州四郡御扶持人・十村等・山廻り中

新田裁許中・無役御扶持人中

別冊心得方等之趣内々申渡候條、其方中より可申談候。尤封印を以可相廻候、以上。

三月廿日　　　　高田彌左衞門
　　　　　　　　中村逸角

本江村　惣助
武部村　四郎太夫
般日村　五兵衞
高田村　喜三次
鵜川村　喜三兵衞
折戸村　源助
鹿野村　恒方

右は文化五年三月被仰渡書。

三月廿三日。天德院に於いて前田吉德の子利和の五十回忌法會を執行す。

〔政隣記〕

心樹院樣五十回御忌御茶湯、今月廿三日一朝於天德院御執行有之候。右之節御家中詣請・鳴物等不及遠慮候。乍然御寺近邊に罷在候者は、御茶湯御執行之内自分に指扣可申候。此段組・支配江被申渡、組等之内裁許有之面々者、其支配江も相達候樣可被申聞候事。

右之趣可被得其意候、以上。

三月九日

三月廿八日。前田齊廣金澤に歸り老臣本多安房守の邸に着す。

〔政隣記〕

三月廿七日、今晩今石動御止宿、同夜九時御供揃に而同所御發駕、明廿八日御着与被仰出候段飛脚到來に付、爲承知御用番又兵衛殿より以御紙面被仰聞候事。

但、廿三日糸魚川御泊之筈に候處、風雨強、大和川出水橋落、俄に能生驛に御泊、廿四日糸魚川御泊。依之廿四日泊驛、廿六日東岩瀨、今廿七日今石動御泊に相成候旨、御道中奉行村杢右衛門等より、糸魚川より之飛脚に來狀之事。

明廿八日今石動より御着之筈に候條、御着之御樣子被承合、御座所江參出可被相伺御機嫌候。若御着七時以後に候者、翌廿九日四時より九時迄之内可被罷出候。病氣等之面々者御用番宅迄以使者可被申越候、以上。

三月廿七日　村井又兵衛

岩田傳左衛門殿

津田左近右衛門殿

〔政隣記〕

廿八日快天、昨日記之通に付、今日御座所御待請、揃刻限朝五時過不遲揃。依之同役岩田傳左衛門・自分、朝六時過出宅、爲御迎大樋松之門内中宿迄罷越、森下御着之旨告來候に付、金くさり橋手前之中宿江罷越居候處、四半時比御着。其節右中宿前少し下之方江出蹲踞之處、御例之通御意有之。且又町同心中も拙者共引離れ蹲踞。將又御道筋前記十四日に有之通に候處、從相公樣御途中迄被仰進候趣有之に付、尾張町より博勞町篠原彌助前、神護寺前通、七十間御門御入、金谷御殿江被爲入、八時頃右御門御出、前田伊勢守殿前通り尾坂江御入、夫より十四日記之通に而御座所江御着之事。

但、一先歸宅有之候處、御座所江御着之附人告來候に付出宅罷出、伺御機嫌之御帳に付候事。

〔齊廣樣御傳畧等之内書抜〕

三月十六日江戸表御發駕、同二十八日金澤表御着、尾張町より博勞町御算用場横通り、金谷御殿江爲御對顔御出被遊候。夫より本之通又御算用場前伊勢守門前通り尾坂御門江御入、河北御門より三之御丸より石川御門御通、新坂柵御門より本田安房守屋敷御座所江御着駕被遊候。御着日御作法等事長きにつき不記載、都而前々之通なり。

〔續漸得雜記〕

三月十六日御發駕に而、同廿八日御歸城、御座所は最初前田勢州公御舘に相成候趣に而、其御支度多分相調候處、又候房州公御屋敷に相成、房州公は御下屋敷江御退去に而、上御屋敷御普請相調、御座所に相成、尤御城内同然に、諸事御囲等其外御席・諸役所出來、二之御丸同然に相成申候。房州公御屋敷前左右共城戸出來、其内御城内之格に而、御馬廻御番所并與力番所等都而嚴重に出來、左右い木戸柵御門より都而出仕有之候事。尤供人者柵外に而殘り候事。且御母堂樣（眞珠院殿）にも右同御屋敷之内御引移。御廣式向御用都而御附は、表口疊屋橋の方に御門出來に而、是より諸事通用す。

但、御當日直に尾張町より金谷御殿江御上り、相公樣御對謁、御能等も有之旨にて、八つ半時頃御退去被遊、如毎大手御門より御通、三ノ御丸より、石川御門より學校前廣坂の上柵御門より御入被遊候事。

四月　金澤城殿閣造營主任の吏を命ず。

〔文化雜記〕

一、四月御用部屋關屋中務、御馬廻頭高畠五郎兵衛、組外御番頭永原七郎右衛門、御使番三浦助右衛門、御横目加藤三四郎、御作事奉行淺加三左衛門、御普請奉行上木金左衛門・石川

兵衛、右之人々御造營方主附被仰渡候段、爲御承知御城代又兵衛殿被仰聞候事。

五月朔日。畑柳泰、前田治脩の病を診する爲再び金澤に來る。

〔政隣記〕

五月朔日、畑柳泰今日重而罷越。茨野右衛門例之通於旅宿參着、當日御料理可被下筈に候得共、此度者依願暫歸京に而、新に依召之參着与者品違候故、今日者御料理不被下。且召連來候從者不殘柳泰逗留中爲詰候而者、御不益之筋有之に付、兼而申談候趣有之に付、小者之分不殘翌二日相返。依之御殿等江罷出候節は、小者九人御貸渡也。將同二日柳泰持參、相公樣御扇子一箱・樂燒茶具五品・藥草五鉢內獻上仕。拙者共取次可差上例に候得共、此度不押立儀に付、町同心中一人金谷御殿江罷出取次候而上之候事。

五月四日。安達良作出奔し、次いで越前に於いて自害す。

〔政隣記〕

付札、町奉行江

安達彌兵衛二男良作儀、若黨松原八右衛門召連、當四日大野水戸口江行歩に罷越候處、夜に入候得共不罷歸、行衞相知不申旨。且又雇分に而去年以來良作召仕候下女、當春暇遣候處、右女も同日より在合不申由等、彌兵衛より及斷置候。然處松平越前守殿御領地上新庄・長畑・

嘗領右三ヶ所地懸り往還道に、當六日男二人・女二人横死之者有之、武士躰之者懐中に別紙寫之通書付在之候旨、內々彼方御役人下役より湯原友之助下役迄申來候。良作に相違有之間敷躰に付、良作幷八右衛門死骸爲受取、家來等之內指遣候樣彌兵衛江申渡候。右女者才川下川除町秋元屋平助娘之由に候。今一人之女者右娘之母之躰に候條、親類等之內罷越、死骸請取候樣可被申渡候。尤於彼地表立不申、內々之趣に候條、可有其心得候。則別紙寫一通相渡之候事。

五月十一日

加州金澤才川角力町
安 達 良 作

同才川下川除町　秋元屋平助娘
良作妻　は や

右樣子有之、二人共相果申候。委細之儀は召連候家來八右衛門儀に申入置候間、何分に茂國元江死骸御遣被下候樣、立而奉願候、以上。

辰五月六日　　安 達 良 作 判

右に付良作等死骸爲受取、安達彌兵衛家來指遣、翌十二日曉發足、女兩人死骸爲受取、親類

并組合頭・肝煎等四人同時に發出。且於彼地彼是懸合、湯原友之助下役足輕大屋七兵衛儀も指遣候樣、友之助に被仰渡、同刻少前發足申渡。右七兵衛者彼方御役人下役より爲知候者也。附、右はや母儀者追手に罷越候處、於彼地良作に被切殺、八右衛門者良作自殺に致介錯候後、令縊死候由也。良作死骸は十八日夜連越、八右衛門死骸同斷。女兩人死骸は於彼地令火葬、親類等廿日に歸、其段及御屆相濟候事。

五月八日。前田齊廣初めて二ノ丸御殿の燒跡を見る。

〔政隣記〕

五月初而御城中燒跡御巡見、御歩行に而御出之事。

五月十三日。大鼓打坂尻屋佐六葛野流を學ぶことを命ぜらる。

〔政隣記〕

石井流大鼓役者　坂尻屋佐六

五月十三日、御當地に葛野流無之に付、葛野市郎兵衛に弟子入被仰出。

五月十三日。領内の秤檢査の爲守隨彦太郎の手代金澤に來る。

〔政隣記〕

江戸表守隨彦太郎爲名代、高畠清左衛門等加・越・能拜爲改、今月朔日江戸發之旨之觸、同十一日到來之處、今十三日夕右清左衛門等上下三人參着、旅宿片町大浦屋幸左衛門之事。

五月十六日。大聖寺侯前田利之金澤城に登る。

〔政隣記〕

五月十六日、備後守樣今曉七時御供揃に而、津幡驛就御發駕、爲御迎大樋茶屋橋迄罷越候處、六半時頃御着。御旅宿前ゟ者同役岩田傳左衛門罷出、夫より爲伺御機嫌、御宿金屋九兵衛方ゟ兩人共罷出候處、少々御勝れ不被成、御座所に者押而御出被成度御樣子に付、御逢不被成旨等、御用人寺田木工を以御意有之、罷歸。御同人樣八時頃御座所ゟ御出之處、御前少々御勝れ不被遊に付、御對顏無御座、御料理等被進候上御退出。翌十七日朝六時御供揃に而、同刻過御發駕。其節御宿前ゟ爲御見立罷出、野町々端ゟ者爲御送岩田氏被罷越候事。

但、金谷御殿ゟ御出、且御寺御參詣者無御座候事。

五月廿一日。前田齊廣の通過の際に於ける門番の作法を定む。

〔文化雜記〕

一、文化五年五月廿一日左之通割場御奉行申聞候に付、御步横目御供押ゟ爲承知申渡候事。

中將樣奉初御門外通御通之節は、御門縮不申、番人御門下ゟ罷出、內より出掛り候者指留、

蹲踞可仕候。御門内御通之節は、御門縮置蹲踞可仕候。右詮議之上御城代江及御達候所、可申渡旨被仰渡候事。

右之趣詮議之上御城代江御達申候所、可申渡旨被仰渡候に付、左之御門々江申渡候間、御達申置候事。

西町口御門　尾坂口御門　紺屋坂御門　新坂柵御門　坂下御門
金谷外柵御門　七拾間外柵御門　甚右衛門坂御門　不明門

五月廿二日。火災の際貞琳院の難を避けたる淺野屋宗平に金子を與ふ。

〔政隣記〕

五月廿二日左之通。

千五百疋　　淺野屋宗平

以上

當春二御丸御燒失之刻、貞琳院樣放生寺江御立退之節、宗平方江も暫御休被成候に付、右覺書之通御内々被下之候旨、御廣式御用永井貢一郎より以紙面申來候に付、宗平呼出爲申渡候事。

但、前記正月互見、且其節記に有之乘物屋小兵衛江者、六月九日御座所於御廣式金子二百

疋被下之候旨、留書足輕申渡。尤請書右足輕宛名に而指出候事。

五月廿六日、檢査の爲秤を秤座に提出すべきことを命ず。

〔政隣記〕

爲御領國諸秤改、守隨彥太郞名代高嶋淸左衞門与申者、御當地江罷越居候條、町人共所持之諸秤、石浦町秤座江持出改させ候樣可被申渡候事。

一、先年從公儀追々被仰出候通、新古不限守隨秤之外堅く用申間敷候事。

一、諸秤新古不限、修覆糸付等內々に而拵用ひ候儀、只今迄之通彌堅く仕間敷候事。

右之通急度相守可申候。違背之者於有之者、僉議之上曲事可申付候條、此段町中江嚴重可被申渡候、以上。

五月二十六日　　　　奥村助右衞門

岩田傳左衞門殿

津田左近右衞門殿

五月、明年朝鮮の國使來聘するを以て加賀藩より上納すべき高役・國役を五ケ年賦とすることを許さる。

〔諸事覺書〕

來巳年朝鮮信使對州迄來聘に付、被對外國候御大禮候得者、萬石以上高役金幷御料・私領惣國役可指出旨、尤御手傳等廉立候御用相勤候面々、幷領分其外非常之災害有之向者、高役・國役共に年限を以可被指延段、先頃御達御座候。然處加賀守儀聖堂向寄火防之儀、寛政十一年未年以來相蒙り、右手當永久不時立入用多、且近來作毛不熟之上、去年七十萬石餘之損毛に而、領國中困窮仕候上、當春居城燒失、參勤幷年中獻上物之內御用捨等之被仰出も御座候程之儀に而、存じ之外及困窮候族に御座候。乍然外國之御大禮之事に御座候へば、何れ御沙汰通に相心得可申儀に者御座候得共、前文御達之譯義御座候へ者、如何相心得可申哉、國許加賀守ゟ申越度奉伺候、以上。

御名內

五月　　　　　　牧　昌左衛門

御付札

書面高役・國役金共、當辰春居城燒失に付、當年より來る申迄五ヶ年差延、酉より丑迄五ヶ年割、上納之積可被相心得。

私考

百萬石餘之御高に合て、七千六百七十兩計歟。一萬石に付七十五兩充。

五ヶ年に割れば一ヶ年當、千五百三十四兩計歟。

御國役銀は百石之地より一兩充に付、一萬二千二百兩計歟。

五ヶ年に割れば一ヶ年當り、二千四百四十兩計歟。

二口合三千九百七十四兩歟。

五月。金澤城の殿閣燒失せしを以て特に省略を事とすべきを告ぐ。

[組用留記拔書]

付札、定番頭江

御勝手御難澁に付御省略之儀、近年段々被仰出候通に候。然處當春御城御燒失に付、御參勤等は御用捨之儀被仰出、段々結構之御樣子に候所、此末御公務等御指支之場に至候而は不輕儀に候。是迄御省略等之儀毎度被仰出置候上之儀故、其品譯而は不被仰出候間、猶更萬端聊無油斷緜密に相心得、遂詮議候樣可申渡旨被仰出。

右之通被得其意、組・支配之人々江可被申渡候。組等之裁許有之――事。

右之趣一統可被申談候事。

五　月

六月四日。先に出奔自殺したる安達良作の父彌兵衛遠慮を命ぜらる。

〔政隣記〕

六月四日左之通御用番横山山城殿於御宅、御横目飯田外記・岡田德三郞指引に而被仰渡。

安達彌兵衞

御手前二男良作儀出奔之躰、其上於越前表先達而召仕候女等及殺害、其身致自害候段、御外邊別而如何に候。良作儀常々不行狀之由被聞召候。御家中之人々子弟成立之儀者、前々被仰出之趣茂有之候得者、加異見相愼候樣可仕候處、踈略之至に候。畢竟常々內輪向締方不宜故、右之族不心得千萬成儀に候。依之御用人被指除、遠慮被仰付候旨被仰出。

辰六月

六月六日。百姓にしてその下人を養子とすることを禁ず。

〔筒井舊記〕

於御郡方に、是迄下人養子与申儀有之樣子相聞え候。右樣之名目一圓有之間敷儀に候條、以來心得方之ため申渡候條、可得其意候、以上。

辰六月六日

中村逸角

高田彌左衞門

能州四郡十村中

六月十日。金澤城殿閣造營に付き地鎭祭祈禱を修すべきことを議す。

〔御造營方日記〕

今般御造營被仰付候地鎭祭御祈禱、觀音院等ゟ申渡候樣被仰渡、則申渡候。其節被仰渡候者、寶暦十一年之節地鎭祭御祈禱被仰付、其後虎之御間等被仰付候節も、御祈禱被仰付候得共、今般者一度御祈禱被仰付迄に而、重而地鎭御祈禱は不被仰付旨被仰談候に付、其趣も爲心得觀音院等ゟ申渡置候。併虎之御間等被仰付者安永三年五月に而、地鎭御祈禱申に而は無御座候。御屋堅御祈禱被仰渡候。左候はゞ御表向御出來に付、先御成就与申所を以被仰付候儀与奉存候。地鎭御祈禱兩度与申に而は無御座、則其節御渡之御覺書等別紙懸御目申候。今般觀音院等も右之通に申聞、御屋堅御祈禱与申は、御成就之上必被仰付儀与申聞罷在候。先達而被仰談候与は趣意も違申事故、御詮議も可有御座儀与御達申置候、以上。

六月十日　　齋田掃部

御城代樣

一、先年虎之御間之時、白銀三枚宛被下段之寫も出る也。

六月二十日。諸士の家に傳ふる藩侯の判物・印物の寫を提出せしむ。

〔政隣記〕

本文政隣記六月二十日の條に記さる

付札、定番頭江

御先代様以来被成下候御判物・御印物、御家中一統所持仕罷在候分寫指出候様可申渡旨、被仰出候條、頭分以上者直々御次江持參、關屋中務等内江相達可指上候。平侍等者頭・支配人江取立、中務等江可相達候。右に付相尋度趣茂候者、尤直々右同人等江可承合候。寫調様者別紙草稿之通相認、來月中指上可申候事。

右之通被得其意、組・支配之人々江可被申渡候。組等之内裁許有之面々者、其支配江も不相渡様可被申聞候事。

右之趣一統可被申談候事。

辰　六　月

六月廿五日。犀川・淺野川の水暴溢す。

〔政隣記〕

六月廿五日、同夜淺野川洪水、小橋危候段追々就注進出馬之處、減水、右橋無違變。及曉天才川も洪水、所々切れ込、橋危旨等追々就注進、重而出馬、橋流失。

六月廿八日。二ノ丸御殿造營の工事に着手す。

〔金龍公記史料〕

六月廿八日。二城造營始。主任前田伊勢守・前田織江。定番頭並用部屋闕屋中務・高畠五郎兵衛。馬廻頭永原七郎右衛門・三浦八郎左衛門。大小將横目加藤三四郎。作事奉行淺加作左衛門等五人。

〔齊廣樣御傳畧等之内書抜〕

六月廿八日、御城御造營木作初御規式御祝有之なり。同七月廿五日御柱建、右兩日とも御城代・定番頭・御留守居物頭・定番御馬廻御番頭・御横目・御造營御主付・御作事奉行等掛り役人右御場所ゑ罷出るなり。同日御頂戴物有之なり。事長き事別記有るにゟゑ留畧すなり。

〔御造營方日記〕

三千二百二十五坪計

右二之御丸御殿御居間を初、奥御舞臺、御居間書院、桐之御間、船之御間、波之御間、奥御式臺、御膳所、御近習頭席等都而溜々、幷御廣式御居間等、御對面所、貞琳院樣御居間等、御末廻り高屋下段、御廣式御書院、同御式臺、部屋方御用所等溜之御杉戸、外は奥御書院を初松之御間等、御小書院牡丹之御間、萩之御間、御裝束の間邊、芙蓉之間、蔦之御間、檜垣御間、瀧之御間、矢天井之御間、柳之御間、つたの御間、竹之御間、虎之御間、御舞臺、御樂屋、多門、實檢之御間、表御式臺、裏御式臺、同所物置、御飾番所、奥之口腰掛共、惣坪數大躰

如斯に御座候事。

辰　六　月

〔齊廣様御傳畧等之内書抜〕

御城御造營に付人夫數千人御用に付、地廻り人拂底に付日用裁許より日用賃當七月より來春迄三分增之儀、御家中一統江願出候なり。是の年春より御城御造營御取掛りに付、御家中諸士壯健之者爲冥加砂持等相願日々罷出候なり。

〔寢覺の螢〕

一、大變後御領國御國恩を存、貴賤となく分限に應じ、御冥加として金銀・竹木、或は呉服・古書・器財思ひ／＼に獻上す。本町の番徒（肝煎の小遣を云。）何某銀二貫目を獻ず。卑賤の者には過分の志なりと稱譽す。此外加越能の姥嬶、布を織亭を獻ずるの類記するにいとまあらず。皆姓名を記し、太守の御聽に達しければ、其志不斜おぼしめすとて、帳面をいたゞかせ給ひしと承る。

一、木村左助百二十石の知行、御冥加の爲なりとて知分半分を指上し、下知には奇特なる事と稱美す。

一、爰にをかしき事の有ける。野々市村五左衛門といふ老人、本願寺燒亡後再興礎のどうづ

事を工夫して、至て便利なりとて、功を遂、京師にても其名高し。此事聞えて此度被召出といへ共、堅く辭して御請せず。扨退て人々にいふには、吾如來様のために晝夜心を盡して工夫したる事、漫りに凡夫の爲にほどこすべき哉といひふらしける。十村野々市村孫之丞忽これを聞、其儘のしとり大に怒て云。此度御殿の凶變、一國聲を立ず御笑止に奉存、人々寸志を獻じ國恩を報じ奉る時節、汝年來露命をつなぎ、妻子を安穩に指置御厚恩をも不存付、誠に此度御大切の御用に、汝等ごときを呼るゝ事難有御請可申處、却て違背におよび、剰雜言を吐ちらす國賊、夫々申上首を刎可申と言渡しければ、忽命のをしかりけむ、親類を頼み十村へ詫て御請をしたり。世にはかゝる虚氣ものも有し。

六月廿九日。大聖寺・富山及び領内各所に水害あり。

〔御造營方日記〕

閏六月朔日、前月廿八日風雨强、廿九日甚雨。就中富山御城内ゟ水付御立退、大聖寺洪水に而御舘ゟも水入由也。

〔政隣記〕

閏六月三日朝、大聖寺より以御飛脚奉札、御城三之丸并町中、廿九日曉より船往來、武士家等水附候所數多有之旨等、爲御知申來。依之御近習御使番駒井宇右衛門ゟ、爲御見廻早打御

淡路守は富山侯前田利幹

使被仰付、今日夕方發出。

同日昔、京都中使前月廿五日京發之才領歸着、越前金津邊より大聖寺・小松邊迄川々洪水、田地等江水一・二尺計宛あがり候。金津より上方迄も雨天續候得共、洪水与申程之儀者無之段申聞候旨、棟取石浦屋五郎兵衛より及屆候事。

〔諸事覺書〕

一、淡路守樣より左之通被及御屆候旨に而、聞番出之候に付記。

私領分先達而以來氣候不順、度々雨天御座候處、去月下旬甚雨打續、廿九日諸川一時洪水、城中江茂水押入、堤川除夥敷押切、侍屋鋪・在・町七八分通り水下に相成、家藏も押流、所々川瀾にも相成候場所有之。且圍米藏所之內水邊に相成候處も有之、飢人之手當等行屆兼候趣申越候。人馬怪我并損失之ヶ所、損毛高等之儀は、在々水未引切候に付而、其員數相知不申候得共、先此段申上候。委細之儀は追而御屆可申上候、以上。

閏六月八日　松平淡路守

六月、先に異國船手當を命ぜられたる諸士に費用を給す。

〔齊廣樣御傳略等之內書拔〕

六月、中川平膳御次江御呼立、御用部屋關屋中務を以左之通被仰出、拜領有之候なり。

異國船漂着之節、御人數御手當之覺悟被仰付、彼是費之筋も可有之儀に付、別紙覺書之通被下之候條、組中并子弟・與力江も覺書之通被下之候條、此段可被申渡候事。

六　月

右割合百石に百五十目平均、無息之面々江白銀三枚宛、代番人江は父知行當り被下之候。但定役江は不被下。三百三十石・三百石之面々は乘馬飼料一日一疋に付大豆三升之三の一宛、二百五十石江は三升之半分、内調理被仰渡候日より代銀圖りを以被下之候。其餘三百五十石以上は飼料御渡無之候事。

閏六月廿七日。能美郡小松の暴民、町年寄並久津屋三郎助等の家を襲ひて破壞す。

〔小松舊記〕

昨廿七日夜九時頃、私支配所小松八日市町久津屋三郎助・小杉屋六兵衛与申者方江、百姓躰之者二・三百人計押寄、家等打潰、今曉七時過退散仕候。右に付急速町附足輕等指出制し、右人數之内疑敷者三人召捕、縮仕置候。尤私幷町下代等罷出相□□、外異變之品無御座候。當時米高直に付、右三郎助等兩人之所爲之躰に輕き者共相心得騷立、前段之仕方に相聞え申

候。右三郎助等𛀁對し遺恨之品も有之、右之族に御座候哉、夫々遂吟味、委細之儀者追而可申上候。先爲御案内飛脚を以申上候、以上。

辰閏六月二十八日　　河村茂三郎

奥村左京様

〔政隣記〕

閏六月廿七日夜九時頃より、小松町年寄並久津屋三郎助、同所質商賣幷米中買小杉屋六兵衞方𛀁、人數三百計押寄、疊建具等打毀候。米方一件に付、右兩人之者不筋之取組有之故与云々。

〔政隣記〕

小松町方騷動之一件、同所御馬廻之內より告來候由之書面中要文左之通。

元來米直段高直下々致難澁、夫に付同所町奉行河村茂三郎等取𨻶方惡敷樣に取沙汰有之儀、夏已來之事に候處、閏六月中旬之比頻に其沙汰募、茂三郎方𛀁出入之町人久津屋三郎助・小杉屋六兵衞評判惡敷、毀し可申抔と申沙汰有之候。然處同月廿七日夜雨降闇夜成しに、九時頃三百人餘も寄來、兩家家財悉く打毀し、建具過半毀し退散。其爲躰一圓卑賤之者之仕形にては無之、最初勸歸寺之門內𛀁入鐘を撞人を集め、兩家共八日市町に付前後より押寄、相圖

は小兒之太鼓或は拍子木に而懸引致し、毀し候者初は少人數に候得共、後には二百人計懸り候躰。脩兩端之辻、其外八幡社・穢多町邊・淺井縄手邊等、所々に五十人或百人計、都合千人計も集來居候躰。是は毀し人引揚之節守護人躰与云々。其外寺町邊迄も裏々を徒黨人相廻り、誰にても提灯持行候者有之候得ば竹竿にて打毀し、曉八時過皆々引取。町附足輕町役人等罷出雖爲制之、長熊手或は棒・斧・竹鎗・古鐵等持寄候者に被打伏者も餘程有之、中々難制之。然れ共引後れ候者三人（能美郡西條村淸右衛門・同所次郎左衛門・同郡小屋村傳右衛門せがれ與四兵衛。）召捕、役所に連行令禁牢。右徒黨人、元來張本は町より出で、御郡方之者を誘き出せし躰。凡能美郡等十八ヶ村之百姓幷山方等よりも出たる躰也。如前記足輕等捕へに入らむとすれ共、中々難寄付に付、味方と見せて入らんと忍び行者有之候得ば、何者ぞと問ければ、味方と答て大に打れ候者も有之。其子細は何者ぞと問へば八十と答へ、問たる者三文と云て安心之躰也と云々。如何して此相詞を一統に示したるや不思議与云々。扨右之趣共にて存分に毀し、（土藏には不手懸由也。）終りて五十人或は百人宛堅まり退散。其砌町奉行茂三郎より出し置候足輕等幷人夫共追懸候得ば、徒黨人事共せず鐵炮之筒先を摑へ立て、今夜奉行を可打殺なれ共遲く成たり。又近々來りて兩家之土藏も毀し、鐵炮打て奉行を殺さんと言て靜に歸たりとなり。右之通に而同夜は事濟候處、翌日風說評判區々にて、御馬出しへ寄る抔と雜說申ならし候得共、廿八日・廿九日夜も無何事候處、晦日

閏六月廿七日なり

夜六半時比金平村又右衛門方より、同人方ゟ十八ヶ村之百姓八・九百人許、奉行之御貸家等其外ゟ、打毀し申様子に而道筋夥く出る也と告る者有と及注進。此事奉行聞与同時に、町中も騒立及大騒動。其夜は辰巳之風強く吹て砂等を吹立候故、物音も聞えぬ中又火事なりと呼騒ぐ。人々出て見れ共火は見えず。大風ゆゑ火之手不登と思ひ、侍中は家内之仕抹申付置、三之御丸ゟ罷出、御馬廻中并子弟等迄御番頭久田義兵衛之前へ出指圖を待しかども、元來無火事等ゆゑ退散候樣申談に付、四時頃各退散せり。然れ共若放火等有らん哉与、其夜は人々安き心無之處、何事も無之日々靜り候得共、惣躰人氣不穩事共也と云々。

〔梭覺の螢〕

一、文化五戊辰前年の不作にて米拂底、殊に御登せ米多、藏々の米乏しく上段々高價、わけて小松は外々より高直にて、五・六月に至り小賣米一升八十三文となる。町中の風評、是は利を貪り米を買しめし者ある故なりと。六月廿七日夜九つ火事よと呼て町中を走る。人々驚き出るに火見えず。人聞て言、扨こそ兼て沙汰せし相圖ならんといふより、いづく共なく人集り、八日市町久津屋三郎助町年寄・小杉屋六兵衛が大戸・蔀を打破て亂入す。家内周章ふためき、塀をとび垣をくゞつて逃去れり。雨戸・建具を微塵に砕き、天井・疊・簞笥・長持の衣裳、或は鍋・釜・箱の類は手送りにして戸外へ持出し、悉破却し、柱に疵を付、板敷迄も打破る。其音

二・三町もひゞき渡て凄じ。固めの役人出るといへ共制する事能はず漸明方に散失たり。早朝町役人等見分あるに、あたり隣の門々迄も衣裳共を蹂躪、銀錢を蒔散し、重器共を踏碎、目も當られぬ事なりし。又此騒ぎに事よせ盜せし者多し。追々顯はれて召捕られし者數人なり。扨又翌晩も押寄と流言せしかば、芒の穂にも搖ぎ震き、小松計の人數にては防がたしと、金澤への注進櫛の齒を引が如し。依之金澤より加勢として、足輕五十人に鐵炮を持せ、城付町足輕數十人・町役人等、是をさゝからに爰を晴と本折端に相つらなり、鐵炮に玉藥をこめ、噴と言はゞ打放さんと待懸しは、さながら軍義に似たり。家々簷々提灯を輝して祭禮の如し。郡方よりも郡足輕、十村は組下の人數を率て口々を警固す。十日ばかり晝夜共斯のごとし。

一、久津屋三郎助・小杉屋六兵衛小松にて入牢、夫より金澤公事場にて再々の御糺明中、八月廿四日より十月廿四日迄町奉行預りて、旅宿逗留組より代り〳〵出て勤番す。歸りて又組預、文化六年十月小杉屋六兵衛は無異儀落着、久津屋三郎助は小松御追放、今金澤に居住す。

一、此兩家を潰せし頭取を御尋、きびしく御吟味あれ共久しく知れず。程經て材木町高堂屋庄次郎と云者處々へ廻狀し、其使せし尾小屋薪賣（庄次郎、本折端迄出、人不知言傳遺。）の童より露顯し、庄次郎へ

朝六つ時捕手向ふ。庄次郎其躰を見て、迚も遁れぬ處と覺悟を究、食する間暫御免下さるべしと、心靜かに食をしたゝめ、妻子にもわかれを告て、尋常に縄にかゝる。公事場にて再三同類の御吟味拷問きびしけれ共、始終詞違はず私一人の了簡にて、同類とては一人もなしと言張て、終に人を誘はず。尾小屋村肝煎は、小童の持來りし狀を在所へ觸たるを越度にて、預とかい名目となる。柔弱癡愚の者にて何の辨もなく、心ならず此災難に逢へり。翌年五月廿七日縄付ながら輕尻馬にかき乘せられ、炎天に顏をさらし、八里の道を來り、庄次郎わが馴し材木町入口にて妻子の事を思ひしや、潸焉として振かへり／＼恨めしげに過行を見る人涙を添たり。羊の歩みほどなく晝九つ過今江村端にて磔にかゝる。尾小屋肝煎は不覺悟至極にて、此期に及んでもゆるし給へ／＼と泣叫ぶ。役人も哀がり、樣々すかして討首となれり。庄次郎は同類も多く有しと聞えしに、罪一人に受て最期も潔し。小松中哀まぬ人とてはなし。刑法場の前に毎夜々々線香・蠟燭立つゞけて萬燈のごとし。誦經絶えず、餘り騷がしかりければ、御禁止となりて止みぬ。

閏六月。江戸に於いて禁牢以後釋放せられたる者の處置を定む。

[公事場御定書之寫]

付札、公事場奉行に

江戸表禁牢者出牢之上御門外ゟ追拂候儀に付、先達而各紙面被指出候に付、猶更於江戸表割場奉行ゟ得与尋有之候處、前々より追拂与申儀は無之、出牢之日より御門外ゟ指出候振合に而、其節於外に彼是申分等不致、隨分稼、御屋敷ゟ御難題不申上樣嚴敷申渡、受書取立。尤御屋敷之內に召抱候者有之候得ば、其儀も不差支。且御國ゟ罷歸度旨相願候得ば、是又承屆候旨、別紙覺書之通申聞候。將又外々樣御振合聞番ゟ申渡爲承合候處、御三家樣を初、牢舍之者出牢之上は、本人願次第に而御國許ゟ相返し、又は江戸表に而拂度与申者は御門外ゟ指出、或は御屋敷中に而奉公在付候者は、自今急度心底相改候段申出候得ば、承屆候而指置候儀も有之。且又依不屆之品に門前拂に申付候者は、其段町奉行衆ゟ被及御屆置候振合之由。通例右之通に相聞え候旨、篠原勘左衛門申聞候段申來候。左候へば外々樣之御振合与同樣に而、本人願次第取捌申趣に付、右之趣委曲相達御聽候處、前々より仕來之通可被成置旨被仰出候條、可被得其意候。

文化五年閏六月

七月廿二日、諸士をして出雲日御崎社の勸化に應ぜしむ。

〔齊廣樣御傳畧等之內書拔〕

七月廿二日、出雲國日御崎社日本勸化、百石に付五厘二毛五絲五三宛之圖りに而御家中より

上納有之なり。

七月廿五日。二ノ丸御殿柱立の儀を行ふ。

〔政隣記〕

七月廿五日、今朝二之御丸御造營御柱立御規式、御作法書之通御首尾能相濟。且御大工役附左之通。

御柱建御規式役人

祭　主　井上庄左衛門　座　見　渡部伊右衛門　中山助九郎
助　行　吉田左六　幣　持　中山庄兵衛
寶鏡持　棟梁　清兵衛　本　酌　棟梁　源　助
加　同　久　平　三寸三方持　同　惣二郎
玉女三寸三方持　同　市之助　散米持　同　仕右衛門
土器三方持　同　五郎三郎　振幣持　同　庄　助
積机直　同　伊兵衛　明土器批持　同　甚　作
露　拂　屋根葺棟梁　清　七
飾　役　棟梁　久右衛門　同　權左衛門　同　彌右衛門　同　圓次郎　同　理右衛門

屋根葺棟梁　勘　助

以　上

七月廿六日。前田齊廣二ノ丸御殿造營の現場を見る。

〔政隣記〕

七月廿六日八時御供揃に而、同半時前御出、御普請所御巡見。夫より越後屋敷ゟ被爲入、鉛瓦打場等御覽、同刻過御歸。

八月十日。小松町奉行河村茂三郎指扣を命ぜらる。

〔政隣記〕

八月十日左之通被仰付。但前記閏六月廿七日之一件に付、小松町奉行河村茂三郎自分指扣伺置候處、今日左之通被仰付。

指　扣　　　　河村茂三郎

右に付指扣中、小松町支配方之儀、前々之通可相心得旨、御用番以安房守殿、以御紙面被仰渡、今月中者同役岩田傳左衞門儀、本役非番月に付小松主付相勤候段御達申置候事。

〔政隣記〕

前記十日に有之河村茂三郎ゟ被仰渡之御覺書左之通。尤頭中村九兵衞於宅申渡之。

付札、中村九兵衛〻

河村茂三郎

右茂三郎儀、支配所小松八日市町久津屋三郎助等方〻、當閏六月廿七日夜百姓躰之者大勢相集、家打毀相騷候儀、前方取鎭方も可有御座哉に候處、取捌方不行屆奉迷惑候。依之自分に指扣可罷在哉之旨紙面指出候。一人役之儀、御用支之儀も難計に付、及指圖候迄指扣之儀、先相見合候樣被申渡置候旨、御手前以添書被出之、委曲相達御聽候處、支配所及騷動候儀者不調法之至に候條、先指扣罷在候樣可申渡旨被仰出候條、此段可被申渡候事。

八月

八月十二日。犀川の漁撈者に公儀町中村屋善右衛門より鑑札を受けしむ。

〔政隣記〕

公儀町中村屋善右衛門与申者、當年より五ヶ年之間犀川魚殺生請負申付置候。然處前々御家中之人々を初、都而川殺生いたし候人々は、川師方〻相屆見合札を請可致殺生筈に候處、當閏六月迄暫請負人無之、不苦樣に相心得候者も有之、川役銀不指出、川師及難儀候間、投網・十日網・流し網・鮎飛網・ねり網・片瀨梁等に而殺生いたし候人、其川役銀定之通指出候樣致度旨町奉行申聞候條、以來右殺生致し候人々、都而札を請候樣相心得可申候。

右之通被得其意、組・支配之人々江可被申渡、組等之内裁許有之面々は、其支配江も相達候様可被申聞候。尤同役中可有傳達候事。

右之趣可被得其意候、以上。

八月十二日

八月十六日。京都の醫畑柳啓が資治通鑑出版の資を助く。

一、白銀五十枚　　畑　柳　啓

右故醫學院法印企置候温公資治通鑑板割全部不調に付、父之志を相繼ぎ追々彫刻之儀心願之處、不如意に而未至其場。依之爲上木料御助力有之様相願候に付、右之通年々柳啓江被下之。

右之趣明日畑柳泰致歸洛候條可被申談候事。

辰八月十六日

八月十七日。前田治脩の醫畑柳泰京師に還る。

〔政隣記〕

八月十六日陰、時々雨降。畑柳泰儀先達而被爲召、當時相公様御療用中に候得共、京都向無據用事有之に付、暫之御暇奉願候に付、彼地逗留十日之内夫々用向相辨罷越候様、一昨十四

日被仰出、明十七日發足に付、今日於金谷御殿二汁七菜之御料理被下之、御内々御袖下に而晒布三疋・かすていら一箱・羊羹一箱・白銀二十枚被下之。且御表向ゟ金子七十兩旅用、幷弟子柳榮ゟ爲旅用金子二十兩渡度旨之願書出之候處、於御勝手方兩樣都合金子九十兩御渡之旨に御聞屆有之。將又當二月立歸之御暇相願歸京之節は、旅宿ゟ御使番三浦八郎左衞門、其節は助右衞門ゟ去を以白銀百枚、從相公樣も同五十枚拜領被仰付、發足之節旅宿に而御料理被下候得共、此度は誠に暫時之御暇に付、右兩條は無之事。

附、去年十一月八日より今年二月廿五日迄之旅宿賄方等諸入用銀十貫二百三十六匁、五月朔日より今日迄之同斷入用右に准同斷之間、弟子等雇入用等一日金二兩之圖りを以都合三百十二兩、歸候節旅用金七十兩、五月朔日より今日迄は日雇下人之分相返、御殿等ゟ罷出候節は割場より御貸人渡候事に相成候に付、一日金一兩一步之圖りを以都合百三十一兩一步、京都發出前爲旅用金百三十兩於同所御渡之事。

八月。大乘寺開山徹通義介遠忌執行の爲に勸化を許す。

〔齊廣樣御傳畧等之內書抜〕

八月、大乘寺中古開山徹通和尙遠忌執行に付御領國中幷日本中勸化相願、御聞屆有之なり。

九月二日。學校の習學會讀に陪臣の隨意出席するを許す。

〔政隣記〕

享和三年學校御仕法就被仰付候、陪臣之人々講日不時出座之外、稽古日に出座之儀御僉議中に候間、當分出座不仕候筈之旨被仰渡置候得共、以來最前之通習學會讀日に出座勝手次第之旨、山城殿被仰渡候。此段御一統江私より可申談旨、御同人被仰聞候條、御承知被成、御同役・御同席方等御傳達、御組・御支配御申談可被成候。且又御組等之內裁許有之人々者、其支配江も相達候樣御申談可被成候。御廻達落着より御返可被成候、以上。

九月三日　　堀　三郎左衛門

岩田傳左衛門樣

九月七日、大銀奉行三輪釆男等保管銀の盜難に罹りたる際處置を謬りたるを以て閉門を命ぜらる。

〔政隣記〕

九月七日左之通被仰付。

三輪釆男

齋藤金十郎

右兩人於江戶表、大がね奉行相勤罷在候處、去々年八月十一日御土藏番人より、御土藏封前

しあり等有之趣相屆候者早速可致見分處、流例之旨に而翌日罷越、剩封前故障有之儀心付不申、封爲解候上封先合せ候節、墨引之處合候に付破却致し、御土藏入、御かね箱二つ封切落し有之、御かね二貫目紛失に付、重而得与封先合せ候處、繼紙等有之、切口之處合不申由。彼是等閑至極、見合に相越候詮も無之、其上御預之御かね紛失之上は、申譯難立不調法之至に候。依之急度可被仰付候得共、外より賊入申樣子にも候間、其儀者御用捨被成、兩人共御大小將組被指除、組外江被指加、閉門被仰付候條、此段可被申渡候事。

辰九月七日

右兩人共辻平之丞組に候得共、在江戸に付、相頭菊池九右衛門江御用番助右衛門殿於宅申渡之。

九月八日。去夏以來異國船手當に對する準備を命ぜられたるもの〻任務を解除す。

〔政隣記〕

九月八日、御用之儀有之候條、今日四時過御座所江可有參出旨、從御用番助右衛門殿、同役御用番傳左衛門江昨日依御紙面、則罷出候處、左之通御覺書等を以、助右衛門殿被仰渡。

付札、町奉行江

異國船御手當內しらべ有之樣申渡候付、人馬を張罷在候得共、當年は御在國之事、臨時に御下知可有之候間、去夏差懸り被仰付候內しらべ之分先被差止候。內しらべ不被仰付以前之通相心得候樣可申渡旨被仰出候事。附、小松町支配に付而も本文之通被仰渡、末々申渡候事。

御用番御口達之趣左之通。

去年御手當內しらべ被仰付候砌より、何も格別相進被罷在候。今般別紙之通被仰出候。不及申に候得共、以來無油斷相心得罷在候樣可申渡旨、御用番助右衛門殿被仰聞候事。

一、御呼出方同斷に而左之通。

付札、青木與右衛門・中川平膳。

異國船御手當內しらべ有之候樣、去夏申渡候に付、各初組中にも人馬を張罷在候故、小身之人々江は去冬より馬飼料代も被下候得共、當年は御在國之事、臨時之御下知可有之候間、去夏差懸り內しらべ被仰付候分、先被差止候。內しらべ不被仰付以前之通相心得候樣可申渡旨被仰出候事。

御用番御口達之趣右同斷。

右之外御先手・御使番・御横目等、其外都而去年內しらべ被仰付置候向々江、夫々今日右同准之趣を以被仰渡有之。

一、右御料代被下候小身之人々与有之者、二百五十石より三百石迄之人々也。三百石以上ゟ者不被下之候事。

九月十日。金澤高岡町に災あり。

〔金龍公記史料〕

九月十日夜高岡町災。五十二戸。自亥至寅。

九月十一日。前田治脩の病を診せしめんが爲津山侯の醫宇田川玄眞招聘の使者を命じ、次いで之を中止す。

〔政隣記〕

九月十一日、左之通御用番助右衛門殿、菊池ゟ以御覺書被仰渡。

御大小將　和田知左衛門

美作津山侯松平越後守殿醫師宇田川玄眞業術鳴世に。依之相公樣爲御伺被爲召度段、越後守殿ゟ爲御賴、津山ゟ之御使被仰付、近日發足之筈。頭菊池ゟ御渡之覺書左之通。

和田知左衛門

付札、菊池九右衛門ゟ

松平越後守殿御醫者宇田川玄眞儀被召、相公樣診被仰付度候に付、越後守殿江玄眞被召度候旨御賴之御使者知左衞門被仰付、右御在所江被遣候條、此段可被申渡候。發足日限之儀者追而可申渡候事。

〔政隣記〕

九月十二日、一昨日和田知左衞門江津山江之御使被仰渡候得共、取頻用意之儀先可見合旨、今日御用番被仰渡候事。

但、京都在住醫師之内御召之儀被仰遣、此者若不能越事に候得者、玄眞彌召候筈之由。依而本文之通与云々。

九月十四日。大乘寺開山五百年忌法會の爲參集せる衆僧を饗す。

〔政隣記〕

道元は徹通の師

九月十四日、寺地山大乘寺開山道元和尙五百年忌今日就相當、於同寺去る八日より今日迄法會執行、明十五日施餓鬼、十六日より廿二日迄授戒。依之八日以來參詣之旅僧、一ヶ日凡二千人餘宛之處、一統江一汁五菜之齋料理幷茶菓・牡丹餅饗應。右之外加越能三州之參詣人も夥數事与云々。

九月十九日。重罪の者に梟首・生胴等を宣告す。

〔政隣記〕

九月十九日公事場不時役所建候段申來、令出座候處左之通り。

竪町裏地に罷在候大瀧屋德兵衛せがれ

梟首　茂助

此者最前賊致し、入牢も有之處不相嗜、所々に而謀言を申入泊、着類等盗逃去、其外人々驚入る謀言を申、金子等取逃いたし、剩其身母之遺骨を上方ゟ持行、當町より奉公に罷越居申者方ゟ參り、右奉公人之母病死と僞白骨を渡、其節金子を取候儀有之畢。重々不屆至極に付如此申付者也。

九月十九日

石川郡松任町罷在候町醫師

生胴　白井良達

右之者二十九ヶ所ゟ賊入、其内御算用場御土藏破り候事。

今枝内記家來給人小川惣兵衛雇小者

斬罪　久次郎

右之者佐野久喜次方に罷在候内、小玉取逃能州ゟ罷越。坂井善五郎方に罷在候内、善五郎

手前を以米屋より米五斗謀取、能州に出奔。右小川惣兵衛方に而錢屋に罷越、惣兵衛方に銀子入用候間二百目持參候樣申、右持參之處受取之、透を見合柏野驛迄逃去候處被召捕、右之通に候事。

九月廿四日。人持組の士の無用の參會を禁ずる前令を恪守せしむ。

〔御觸留〕

人持中無用之參會等之儀に付、前々數度被仰出置候處、當時茂心得違之者有之、無用之參會致、其中に者與向に而惰弱之躰被聞召候。尤今般之處急度御糺可被遊候得共、其儀者先御用捨被成候條、愈々被仰出置候通、無用之參會無之樣、夫々急度被申渡候樣可申談旨被仰出候事。

辰　九　月

人持中無用之參會等之儀に付被仰出之趣、別紙之通拙者より可申談旨被仰出候付、右書立一通指進候條、御組之人々に可有御申渡候、以上。

九月廿四日　　　奥村助右衛門

奥　村　左　京樣

十月三日。一季居奉公人逃亡の際その處置に關する取調を嚴にせしむ。

〔政隣記〕

御家中を初一季居奉公人共欠落之儀、公事場ゟ斷有之候得者、請人共ゟ御法之通可申渡趣有之に付、受合狀に調有之候。町名幷受人之主人名前肩書に有之通に夫々召狀遣候處、請合狀之町名与違候儀も有之。或は以前其町に罷在候得共、當時は居不申与申儀も有之。奉公人は主人替致し罷在、小者抔は前々より之通の名前に而召仕候主人有之候に付、公事場ゟ召出候上人違有之。於公事場しらべ方混雜仕、第一人違に而公事場ゟ召出候儀、於先々にも心外に可存事に候條、都而奉公人召置候節、請人共之居町幷主人之名前得与承糺、請合狀爲相調、且又欠落仕候節者兩受人共主人方被呼寄、行衞尋方申渡儀に御座候得者、居町替り居申候歟、主人替居申儀其節相知申儀に候處、最初取立置候請合狀其儘指出候故間違有之候間、欠落有之節、請人共之居町幷主人之名前請合狀之通に候哉得与相糺、最前与相違之儀者其請合狀に付札を以、當時之町名幷主人之名前相記指出候樣、一統被仰渡候樣に与奉存候、以上。

戊辰十月三日

本多左近助

高畠五兵衞

伊藤内膳

水原久兵衞

中川清六郎

横山山城様

付札、定番頭江

別紙寫之趣被得其意、組・支配之人々江被申渡、組等之内裁許有之面々者、其支配江も相達候樣可被申談候事。

十月四日、能登の十村等に異國船手當に對する警戒を解かしむ。

〔筒井舊記〕

異國船御手當內しらべ有之樣申渡候に付、人馬を張罷在候得共、當年者御在國之事、臨時に御下知可有之候間、去夏指懸り被仰付候內しらべ之分、先被指止候。內しらべ不被仰付以前之通に相心得候樣可申渡旨被仰出候事。

異國船御手當內しらべ不被仰付以前之通りに可相心得旨等に付、別紙御用番より御覺書御渡に付相越之候條、得其意、寄々右之趣可申談候、以上。

辰十月四日　高田彌左衛門

鵜川村　喜三兵衛

異國船漂流候はゞ心得方御手當之儀被仰付置候得共、不及其儀、被仰渡無之以前之通に相心

得候樣、御紙面を以被仰渡、御別紙兩通相廻申候。夫々御承知可被成候。寄々申談候樣に与有之候得共、廻狀序有之、今度相廻申候。尤山廻中江も御序之節御申談可被成儀与存候。先々御順達、落着より御返可被成候、以上。

辰十月十六日　　鵜川喜三兵衛

仲間宛所

十月十五日。是日以後江戸に於いて前田重教夫人の七回忌法會を修す。

壽光院の忌日は十月十七日なり

〔政隣記〕

壽光院樣御七回忌御法事、當月於江戸表御執行有之候。御作事・御普請、其外三御丸御射手・御異風稽古、諸組弓・鐵炮稽古之儀相止候に不及候事。

一、御家中普請者不及遠慮候。諸殺生・鳴物等之儀者、當十五日より十七日迄自分に遠慮可然事。

右之通組・支配之人々江可被申渡候。且又組等之內裁許有之面々者、其支配江も相達候樣被申聞、尤同役中可有傳達候事。

右之趣可被得其意候、以上。

十月九日　　横山山城

十月十九日。前田齊廣慰能を行ふ。

〔齊廣樣御傳畧等之内書拔〕

十月十九日金谷御殿御慰御能有之、拜見人御能相濟直に御座所え御禮に罷出候なり。

十月廿七日。幕府罹災せる金澤城の復興工事を許す。

〔諸事覺書〕

一、昨廿七日土井大炊頭殿役人より以紙面、御城御普請方之御奉書御渡可被成候間、今日聞番一人罷出候樣申來候付、牧昌左衞門罷越候處、御老中御連名之御奉書御渡被成候に付、右御奉書幷御使書相添、同人持參指出候事。

但、明日出町飛脚早使を以御國え指上事。

御奉書折懸包

御　名　　　　御老中　御連名

以　上

加賀國金澤城火事之節、二丸家作不殘、同所北之方瓦塀四ヶ所、同所二重櫓一ヶ所、同所門一ヶ所、同所長屋一ヶ所、同所東之方二重櫓二ヶ所、同所長屋一ヶ所、同所東南之間瓦塀一ヶ所、同所門一ヶ所、同所東之方門一ヶ所、三丸北之方長屋一ヶ所燒失に付而取建之事、幷

二丸東之方瓦塀一ヶ所、同所續瓦塀一ヶ所取壊、且又櫓下・長屋下・塀下石垣平均高一間一尺餘、長延二百一間四尺燒損候所修補之儀、繪圖朱引之趣得其意候。願之通以速々如元普請可被申付候、恐々謹言。

文化五辰十月二十七日　土井大炊頭利厚　判

青山下野守忠裕　判

牧野備前守忠精　判

松平伊豆守信明　判

松平加賀守殿

金谷御殿は前田治脩の居館なり

十月廿八日。前田齊廣金谷御殿に於いて石橋の能を演ず。

〔政隣記〕

十月廿八日於金谷御殿、當春於江戸表中將樣石橋御能御傳授後初而被爲遊、年寄中等に拜見被仰付。

十月。與力遠藤七郎右衛門等、廣坂柵門勤番中その職務を誤るを以て遠慮を命ぜらる。

〔政隣記〕

付札、前田式部等江

廣坂柵御門御番人與力

遠藤七郎右衛門

橋　本　右　平

右前月十日夜、御座所御裏通外御番人定番御歩松井伊八郎夜具入葛籠、間違之趣に而兩柵御門内江持入候處、御座所中右名前之御番人無之に付、表御門外御馬廻御番人より同夜泊組頭江相斷、段々詮議有之候處、御裏通り外御番人に相違無之に付、中川平膳より御門相通候樣切手を以申渡候得共相通不申に付、段々事を分相通候樣同人より重而申入候躰に候得共、一圓不致承知相通不申内、翌朝に至其段平膳より及達候に付、相通候樣申渡爲相通候。與力御番人は寛文年中御定之趣裏に申立候躰に候得共、右定には御城中泊御番人夜具之儀は、頭印札を以相通可申旨被仰出候得共、葛籠之名目無之候。御番人共葛籠之儀は、必夜具与相心得居候躰候。既に當七月新番組御歩大宮源八郎葛籠印札間違之趣有之由に而、其節泊組頭より封付葛籠御門相通候樣申渡爲相通候。其比御城附與力を以、御番人以後心得方申入置候處、其儀をも致違失候躰。今般之儀平膳より段々事を分申渡候得共、不相當先例を申立相通不申、泊御番之組頭申渡方相用不申儀、彼是不心得之至に候。依之右兩人遠慮被仰付候旨被仰

出候條、此段可被申渡候事。

十　月

十一月十三日。前田齊廣、家老等の席に侍分の執筆を置かんとする申請を排す。

文化戊辰十一月十三日主附玄蕃被召出候處、被渡下御親翰拜寫。

［御親翰拜寫］

各席執筆之儀に付、吉左衞門・與一郎を以内分被申越候趣承之、委細令承知候。元來執筆共之儀は、調筆豎先例抔繰出申儀專要に相心得、何事も正路に相勤候得者、夫に而宜事に候處、席々何れも同樣とは乍申、別而年寄共席幷各席執筆内用に而も相勤候者は、兎角僭上に相成、諸役人應對にも彼是私知を加候。殊に年寄共席内用相勤候者抔は、中に御政事にも預り申程之存寄に相心得候躰も相聞え、左候得者侍分之者相勤候儀者、年寄共席すら可相成者指止候はゞ、却而害も可寡と存罷在候事に候。乍然此儀は成來申儀に候得者、今更彼是は無之事に候。各席は是迄一向無之儀に候へば、第一年寄共氣請も宜かる間敷、勿論此儀も候不申事には有之候得共、いづれにも是迄無之事に候得者、不可然候。殊に當時相勤罷在候執筆共、却而氣压致可申儀も可有之哉。執筆人少に而不辨に候はゞ、算用者之内相撰、加人に而も可

被申渡儀は承屆可申候。此段申聞候、以上。

十一月十三日

十一月十三日。二ノ丸御殿造營主任にその工事進捗に關して令す。

〔政隣記〕

十一月十三日左之通被仰出。

付札、御造營主附頭江

今般二ノ御丸御殿等御造營就被仰付候、來年三・四月頃御引移不指支樣可相心得候。且又竹之御間等御造營可被仰付ヶ所、不殘來年八・九月頃迄に致皆出來候樣、夫々可申渡旨被仰出候條、可被得其意候事。

十一月廿九日。前田齊廣金谷御殿に於いて能を演じ諸士をして之を觀覽せしむ。

〔政隣記〕

十一月廿九日於金谷御殿、中將樣御能被遊候付拜見可被仰付旨被仰出候條、九時より可罷出。若病氣等に而御斷申候者、御横目津田藤兵衛等內江可相達。且拜見人服は常服に候旨、

昨日勝尾半左衞門より紙面に付及應答。今日九時前より罷出、半左衞門を以御禮申上、參出之屆藤兵衞江申達拜見仕、昏六時頃相濟、御禮御近習頭を以申上。中將樣江之御禮御座所江罷出筈に候得共、詰合之御近習頭水野八郎左衞門を以同御殿に而申上罷歸。

十一月。物價高貴なるを以て江戸詰の諸士以下に金子を貸與す。

〔諸事覺書〕

一、此表米價諸物高貴に而、諸人一統難澁仕候に付、先達而より御小將頭初段々申聞候趣有之候に付、詮議之趣御勝手方へ及示談、今日左之通申渡事。

辻平之丞江

此表米價甚高貴、其外諸物も准じ高料、殊に金相場打續高直に而、彼是諸人一統甚難澁之躰に付、委曲先達而御手前初願之趣、金澤表江申遣置候處、御勝手御逼迫至極之上、當春御城中御燒失、不時御物入等に而彌增御指支に候得共、諸人何茂難澁之儀も無據相聞候に付、段々僉義之上相達御聽、格別之趣を以、御步並以上一人扶持に金一兩充御貸渡、足輕・小者江は一人に一兩充被下之候條、何分遂勘辨取續、此後一圓願ヶ間敷儀不仕樣相心得可申候。右之趣被得其意、組・支配之人々江可被申渡候。且又諸頭中江演述、組等之人々江茂申聞候樣可被申談候事。

辰十一月

十一月。富山侯前田利幹財政困難なることを以て供奉の人員を減ずべきことを報ず。

〔諸事覺書〕

一、淡路守樣御勝手連々御不如意之上、昨今兩年打續水災に而御損毛有之に付、旁當年より三ヶ年之間、平日御供立御減少被成候。右之趣御用番江別紙之通御屆書御指出に付、御案内被仰上候段、御使者武井多宮を以被仰進候旨、篠原勘左衛門申聞候事。

不旋本の儘

私儀勝手向連々不如意御座候に付、是迄儉約申付候得共、今以不旋御座候上、昨今兩年打續水災に而損毛有之候故、旁以是迄之仕來に而は、此後臨時御用向等被仰付候節、難相勤程之仕合御座候に付而、猶又萬端格別省畧仕、從當年三ヶ年之間平日供立之内人減仕、跡挾箱并供馬差略仕相減申度奉存候。尤式立候節者、是迄之通召連可申候。供立之儀は分限も御座候儀に付、右年限相濟候上者家格之通召連候樣可仕候。此段御聞置可被下候、以上。

十一月　　松平淡路守

十二月五日。領内に於ける米穀の減收を幕府に屆出づ。

〔諸事覺書〕
十二月六日、御領國之內當年作毛御損毛左之通、御書付を以昨日御用番青山下野守殿江及御屆候段、篠原勘左衛門御使書相添出之事。

覺

一、五十五萬百石　加賀・能登・越中・近江之內

右拙者領分之內、當夏已來不熟・水損・風損等有之、當年損毛高如此御座候。此段御屆申達候、以上。

十一月　御名

十二月八日　津山侯の醫宇田川玄眞金澤に着す。

〔政隣記〕
十二月八日、松平越後守殿御醫師宇田川玄眞前月廿二日美作發足、今月六日參着之筈に候處、雪途逗留有之、昨夜水嶋泊に而今夕旅宿堤町角屋太郎次方江着。御取扱去年畑柳啓之通に候事。

但、御使和田知左衛門江被仰渡有之候得共、聞番大地縫左衛門より、あなた御家來迄奉札に而往返有之相整、右御使被遣候儀者相止候事。

右玄眞十日九時過金谷御殿江被召、相公様御容躰診被仰付。

〔政隣記〕

十二月十日、一昨八日に記す宇田川玄眞召連來候從者左之通。

門人藤井芳亭、若黨篠岡茂助・飯嶋清六。藥箱持・長刀持・挾箱持一人宛。駕籠舁四人。以上十人。

芳亭は方亭

十二月十日、宇田川玄眞、前田治脩の病を診す。

〔政隣記〕

宇田川玄眞御座所江罷出候節

一、途中町下代誘引に而表御式臺迄罷出候はゞ、御小將出向誘引、虎之御間代御屛風囲之内江相通、間番罷出致挨拶可申候。給事御歩、御茶・たばこ盆出可申候。追付組頭之内罷出及挨拶可申候。其後御小將誘引、柳之御間代三之間江相通、組頭及挨拶可申候。其次年寄中之内罷出及挨拶可申候事。

一、柳之御間代御緣先江、手水桶・手拭懸指出置可申候事。

一、玄眞虎之間代後廊下續之間江、御横目誘引にて寄せ置、檜垣之御間代江御出、御目見披露(御奏者番)、御意有之。御用番御取合申上退去之事。

一、右御目見之節、定番頭以下御歩頭以上伺公之事。

一、右相濟、柳之御間代於三之間御料理等被下候節、給事御歩、指引小頭。其節組頭罷出及挨拶可申候事。

但、相伴御醫師之內。

一、御横目指引之事。

一、攜候人々布上下着用之事。

一、玄眞退出之節挨拶罷出候組頭幷取次御小將、御式臺階上迄送り可申候事。

右於御横目所披見申談有之。御用番岩田氏より町下代ゟ被申談、且御取扱都而去年畑柳啓召候節之通に候得共、御座所ゟ召候儀、町同心旅宿ゟ罷越申談等、少々違有之。

〔政隣記〕

右玄眞ゟ去る十日相公樣御容躰診被仰付候處、只今迄被差上候御補劑に而者、御本復不被爲在、御急症も難計候。石膏等之御濃劑指上候者、御快復之段申上。是迄御療治畑柳泰は附子等之御補劑指上候處、表裏之診案に付、御醫師中は不及申に、御家中醫・町醫鳴名之輩數十人ゟ診被仰付、御僉議之處、診案區々候得共、玄眞同之方多分与云々。

〔政隣記〕

前記十五日に有之通段々御僉議之上、宇田川玄眞江（年三十五、法躰、醫流は紅毛流に而、薬種細末煎湯、味多分辛あり与云。）相公様御療治被仰付候處、御言舌等御氣色も餘程御快然也。

十二月十八日。九條家の使者佐々木市正、諸士に貸附したる金子の返濟催促の爲金澤に着す。

〔政隣記〕

十二月十六日、九條様御使者佐々木市正御指下、去十一日京都發、當十八日御當地參着之圖。右御指下之趣意者、此方様御家中等江御貸付金滯有之、返納方御催促、右に付御口上も有之故、御使者之振を以罷越候に付、其段京都詰人より申來候條、急度御使者与申に而も無之躰に相聞え候間、御馳走方主付等者不被仰付候。依之町料理申付、着日者相應之料理、旅宿之者給仕に而可指遣候。町同心之内一人罷出、御口上振等之様子承合候様可申渡旨、御用番甲斐守殿被仰渡候事。

十八日右市正昨夜旅泊小松之處、今曉七時過發、今日七時頃御當地旅宿金屋九郎兵衛方江、上下三十三人參着に付、前記之通町同心清水鄉右衛門罷越、御口上振等承合候處、御家中之人々江御貸附金有之候處、返納滯一件、且御見廻之御口上も有之由に候事。

十二月廿一日。本年諸士より徴する借知・借米の一部を免除す。

〔政隣記〕

十二月廿一日、昨日御用番甲斐守殿依御紙面、人持組之筆頭・頭分筆頭一人宛、四時過御座所ゟ罷出候處、檜垣之御間代ゟ御用番甲斐守殿御出座、一人宛御呼立、左之御覺書之趣御演述之上御渡之。御禮申述退去、於御横目所左之覺書披見、八時過退出之事。

御家中之人々勝手難澁之段被聞召候に付、當年も全御借知被返下度思召に候得共、不時御物入等に而御指支に付、御借知・御借米之內別紙割合之通、當年一作被返下候條、此段可申渡旨被仰出。

右之趣被得其意、組・支配之面々ゟも可被申渡候。組等之內裁許有之人々者、其支配ゟも相達候樣被申聞、尤同役中可有傳達候事。

右之通可被得其意候事。

戊辰十二月

覺

一、自分知三百石以下、御借知幷增御借知共不殘。

一、同　三百石餘より五百石迄、同斷之內百石に付十石宛。

一、同　五百石餘より千石迄、同斷之内百石に付半減宛。

一、同　千石餘より都而增御借知五石宛之分。

一、御扶持方之分、知行に國り右割合之通。

一、御切米之分都而御借米不殘。

右之通被返下候事。

付札、御横目江

今日申聞候被仰出之趣に付、布上下着用爲御禮、人持・頭分明廿二日より二・三日中に御用番宅江相勤可申候。幼少・病氣・在江戶等之人々江者、同役又者筆頭代判人より可有傳達候。右人々御禮名代人、御用番宅相勤可申候事。

一、組・支配之人々之御禮は、其頭等宅江相勤、頭・支配人より御用番江以紙面可申聞候事。

一、與力江者其寄親より可申渡候。御禮も寄親迄罷出可申候事。

但、自分御禮に相勤候節、與力之儀も一所に可申述候事。

右之通夫々可被申談候事。

十　二　月

十二月廿三日　借知・借米返還の手續を定む

〔御觸留〕

今般御借知・御借米就被返下候、五百石以下代銀を以於當場相渡、五百石餘以上は、都而御米を以可相渡旨被仰渡候。依而草案目錄幷帳面等相達候條、急速可被指出候。

一、五百石以下代銀之分、一組切惣銀高に而、頭之手前ゟ全く可相渡筈に候へ共、月迫しらべ方致混雜候付、何百目迄中勘相渡、半銀之分は來春可相渡候。

一、指扣等之人々は不被返下候。

一、當十二月跡目・新知・御加增知等被下候人々、來春御藏返米を以可相渡候事。

但、御加增知等被下候人々は、先知に相當り候御借知相渡候事。

一、當十月以後病死之人々は、跡目被仰付候上、御藏返米を以被返下候事。

一、寄親附等與力之分は、當七月以後病死人半納之分は、半納に當る御借知相返、本納後病死之人々は、尤當り之通可相返事。

但、與力之分は、都而寺社奉行引受可書出事。

一、五百石以下代銀を以相渡候分は、都而越中平均直段を以相渡候に付、來春加・越・能平均直段を以本勘相極候に付、來正月中知行高・交名帳面に記可被指出候事。

但、百石に滿不申知行之分者、加州平均直段を以中勘相渡候事。

一、千石以上増御借知被返下候分は、別紙之通切手調指出候上、當場捌印を以可相渡事。
一、御切米・御扶持方被下候人々、當年御増米幷御引足米被下候人々は、當年之所先祿に相當り候御借米指上置候。且又當三月御下行等受取候以後病死人は、御借米之内三の一指上置候。十一月御下行等受取候已後病死之人々は、當年分全く指上置候間、病死月等但書にいたし可被指出候。將又當年被召出候人々は、御借米指上不申候間、名前相省き、案帳之通調可被指出候。
一、他國居住之人々、幷御借者・隱居之人々茂、前條之振合に而可相返候條、夫々相分り候樣可被書出候事。
一、御切米・御扶持方被下候人々は、前條之趣を以帳面別冊に可被指出候事。
右之趣被得其意、組・支配之人々江不相洩樣被申談、尤同役中傳達有之、落着より可被相返候、以上。

十二月廿三日　　御算用場

十二月廿五日。九條家の使者佐々木市正の待遇を改む。

〔政隣記〕
十二月廿五日夕、京都御屋敷より之早飛脚來着、木下彌一兵衛（京都在住）より之書面に、佐々木市

正儀諸大夫に而無之、無官に而御用人並之由申來候に付、俄に御作法書改り、御使番御用無之、御口上取次御奏者番的當に成、御給事新番も同斷、年寄中・御家老役挨拶に被出に不及事に相成、二の膳出候處に而は、御家老役挨拶に被出、御意之趣御使組頭相勤、相伴新番頭・御步頭之內に成、御返答御家老役的當に成、其外同斷に付署す。

附、市正儀諸大夫ゟ旅宿亭主金屋九郎兵衞等、先達而市正家來用人等より承受候處、本文之通に付相違之趣等、無急度申入候處、市正儀諸大夫に無相違由申張り居候由之事。

廿六日雨天、前記之通於旅宿佐々木市正御使勤之。御口上取次御奏者番青山將監、挨拶御家老役本多勘解由殿、御返答御家老役津田玄蕃殿、相伴御步頭武田何市、御意之趣組頭中村九兵衞申述、御横目請人蓑輪知太夫。其外前記御作法書等之通に而、夕七半時頃御返答等相濟候事。

但、自分儀最早引取候段、暇乞に市正ゟ逢候處、先刻御返答之內御滯銀一件御願之儀は、追而御左右可被及候間、御答相濟候上者勝手に歸京可致旨に御座候得共、右御左右不承致歸京候者、及月迫態与被指下候御使者之詮も無之、幷同役共ゟ對し候而も面目を失ひ候趣に候間、此儀に付相願度筋有之候間、拙者ゟ可申述哉、又は御用人ゟ可申述哉內談之由申聞に付、致思慮可及御答段申入致退出。翌廿七日御座所ゟ出、右之趣に候間、私近日之內旅宿ゟ

罷越、願之趣大綱承受、其上者町同心之内指遣爲懸合可申儀与存候趣、委曲甲斐守殿江及御内談候處、其通可然旨被仰聞に付、町同心清水鄕右衛門江右懸り申談置、廿九日旅宿江罷越市正江對面、大綱承候處、御取替被進儀難成候者、御取立之儀願之趣申聞候に付、來陽二日、清水鄕右衛門与申者右等之事に携候役人に候間、罷出候樣可申談候條、可被及内談旨申達退出。則正月二日鄕右衛門罷越對談之處、村井又兵衛殿等四十人計江之御貸附銀、元利都合五百貫目計之書付相渡、鄕右衛門受取歸候事。

文化六年

正月朔日、前田齊廣、年頭の儀を本多安房守邸に行ふ。

〔政隣記〕

正月朔日曉天より風雨、朝より終日風雪烈、積雪五・六寸計。

前々如御在國例、六時過出宅御座所江出、（舊冬御觸之通、御間狭に付年寄中初一統熨斗目・半袴着用也。）同半時過於御式臺御帳に付罷在候處、五時前御表江御出、於檜垣之御間代御座敷、年寄中等より若年寄中迄獨禮被爲請、御太刀・馬代目錄披露。夫より於御居間書院代、鶴之庖丁御覽。九時前於柳之御間代人持頭分獨禮被爲請。夫より平士一統座附之御禮一切に被爲請。都而御規式御例之通を以、七

時前相濟。夫より金谷御殿江被爲入。自分退出、七時過之事。

附、舊藤記之通就御間狹に、人持以下獻上物披露無之。

〔齊廣樣御傳畧等之内書拔〕

年頭御禮、當時御座所御間狹に付年寄中初長袴御指止、半袴着用一統御禮申上候。去春御城御燒失に付御家中一統越前萬歳爲舞不申、十一日吉祥も無之、萬端正月靜に有之なり。

正月二十日。御廣式に奉仕する中﨟を募る。

〔政隣記〕

十四五歳より二十二三歳迄　御中﨟

右二之御丸御廣式御用候條、御家中平侍以上娘・姉・妹等之内、相望申者御座候者、頭・支配人より私共江申聞候樣可被仰渡旨、先達而御達申候處、未相應之者無御座候間、右年齡に而も相望候者御座候者、早速私共江申聞候樣、重而被仰渡可被下候、以上。

正月廿日

本保六郎左衞門
林　源太左衞門
青地淸左衞門
渡瀨七郎太夫

關屋長太夫
永井貢一郎

本多安房守樣

別紙之通、二御丸御廣式御中﨟就御用、本保六郎左衞門等より紙面出候に付、寫相越之候條被得其意、組・支配へ可被申渡候。組等之内裁許有之面々者、其支配江も相達候樣被申聞、尤同役中可有傳達候事。

右之趣可被得其意候、以上。

正月廿六日　　　本多安房守

正月廿七日。二ノ丸御殿造營の爲江戸の繪師狩野友益等金澤に着す。

〔御造營方日並記〕

正月廿七日町奉行より紙面來り、狩野友益・同人せがれ狩野墨川、右兩人御造營方爲御用、當十四日江戸表發足、今日參着之旨案内有之事。

二月二日。二ノ丸御殿の上棟式を行ふ爲觀音院に命じて吉日を撰定せしむ。

〔政隣記〕

二之御丸御殿御上棟御規式當月廿日後就被仰付候、良辰吉日御撰御申越可被成候、以上。

二月二日　　江守要人

観音院

二之御丸御殿御上棟御規式就被仰付候、吉日之儀先達而御尋申候處、廿四日・晦日良辰吉日之旨御申越候得共、右之外廿六日・廿八日不宜候哉、今一往御尋申候。若當月吉日無御座候者、來月上旬之内御撰、一兩日日取御申越可被成候、以上。

二月七日　　長谷川三九郎

観音院

右江守・長谷川御作事奉行也。

二月三日。京都の能役者竹田權兵衞が金澤今町に建築したる稽古舞臺成る。

〔政隣記〕

二月三日京都御手役者竹田權兵衞（領知三百石、今春流也。去年以來御當地へ出在之。）儀、先代之時分當所荒町に稽古能舞臺有之候處、致中絶候に付、弟子今町中川忠藏宅地に、如先年稽古舞臺建度旨願之趣、御用番

奥村助右衛門殿去年九月十四日御開届に付、則建立いたし成就に付、今日舞臺開能興行、番附左之通、且後日五日も同斷、見物人布上下着。

〔政隣記〕

二月五日前記之通に候處、竹田權兵衛所勞に付興行能相止、實者爭論之趣等有之故与云々。

附、同月十七日興行。

二月四日。攝津四天王寺の勸化銀を割賦する爲民戶の數を上申せしむ。

〔筒井舊記〕

攝州四天王寺勸化銀御家中より可指出分、先達而御取替に而脇坂中務大輔殿江被遣候に付、今般右銀高軒數を以令割符候條、各支配所軒數、去九月廿五日之在高別紙之通相調、當廿八日迄に當場へ可被指出候、以上。

二月四日　　御算用場

高田彌左衛門殿

中村逸角殿

別紙之通申來候條、得其意、早速軒數相しらべ可書出候、以上。

中村逸角

能州四郡十村中

二月五日。組外組牛圓新左衛門の子左助出奔す。

〔政隣記〕

二月五日夜、御算用者御造營方御用懸り牛圓新左衛門組外也。嫡子左助儀、御大小將組前田義四郎妻与兼而密通躰之處、同道出奔。

但、法船寺町大橋屋小路に而、前田・牛圓隣家也。

右に付父新左衛門指扣相伺候處、共通被仰付置候處、同年六月九日指扣之儀御免許被仰付。

二月七日。前田齊廣金谷御殿にて能を演ず。

〔政隣記〕

二月七日、昨日金谷御近習御用山口清太夫より以紙面、今七日中將樣於金谷御殿御能被遊候に付、拜見可被仰付旨被仰出候條、九時より常服に而可罷出、若病氣等に而御断申候者、御横目津田藤兵衛等江可申達旨申來候に付、則罷出、御能左之通拜見、御禮之儀御近習頭奥田次郎左衛門を以申上、中將樣江之御禮も、於同所御近習頭水越八郎右衛門を以申上、七半時過罷歸候事。

能番組は畧す前田齊廣は白樂天を演ぜしなり

二月七日、前田齊廣、久しく斷絕せる寄親附與力の補缺を出願すべからざることを告ぐ。

〔御親翰拜寫〕

文化六年二月圖書江於御前被渡下御親翰拜寫。

先例も有之儀に付、此度青山將監願之趣は承屆候得共、向後寄親料簡に而、數十年代り不相願もい願出候儀は仕間敷筈に候。此段兼而夫々可被申聞置候、以上。

二月七日

家老中

右青山將監與力福岡何某數十年代り人不相願、此度依願被仰付候得共、向後之儀被仰出候譯也。天保三年永原求馬與力六十年餘斷絕之處、去年願出候得共、右御親翰に相當り三(い)一・二(い)無差別不相願譯に付、紙面相返不承屆候事。

二月七日、宇田川玄眞將に歸國せんとするを以て料理を賜ふ。

〔政隣記〕

二月七日宇田川玄眞御暇被下、近日發足に付、今晝於旅宿二汁六菜等御料理被下之、給事坊

主。爲挨拶等、御賄方與力篠井元右衞門・村井九右衞門相詰。且御料理人等は罷越不申、町料理人に而相濟候事。（發足之砌被下候筈に候得共、前件頂戴仕度旨依願也。）

二月七日　石川郡大豆田村に火災あり。

〔齊廣樣御傳畧等之内書拔〕

二月七日朝四時過大豆田村出火、長田村江飛火致し兩村過半類燒致候なり。

二月十日　宇田川玄眞金澤を去る。

〔金龍公記史料〕

二月十日宇田川玄眞歸鄕。

二月二十日　能登各地に煎海鼠の製造を奬勵す。

〔郡方御觸〕

於長崎交易御用に相成候煎海鼠・干貝等、國々出來近年次第相減、元來指定候請負高も有之儀に付、天明年中にも一統被仰渡有之候得ども、其後茂出來薄く、一兩年者交易御用茂指支候程之儀に付、長崎御奉行より御達之趣も有之候。依而於御領國出來之煎海鼠之儀、何分獵業出情、少に而茂多く致出來候樣可申渡。勿論獵業之事に候得者、捕揚高相減申儀者不及是

無數とは少數の義

非候得共、猶更格別に相稼、饑饉に相成不申樣相心得、常食用等に致候分迄も成限り致省略、煎海鼠に仕立候而、請負人塩屋清五郎方江指出候樣、下々迄品能申諭候樣有之度段、大坂町御奉行平賀信濃守殿より、彼地請人吉田兵馬等江被申渡候間、此旨一統可申渡由、御用番年寄中被申聞候。右煎海鼠近年無數に付、心得方之儀去暮も一統申達候儀に候得共、前文之通に付猶又申達候條、無油斷相心得候樣、夫々可被申渡候、以上。

二月二十日　　御算用場

右之通申來候條、得其意、右煎海鼠出來方を始、曁心得方等之儀に付、每度被仰渡之趣も有之、其時々申渡、一統嚴重に相心得居申由に候得共、此儀に付而者繁々被仰渡候趣も有之通、近年煎海鼠出來方無數に付而、交易御用も指支申程之族、今度譯而申來候條、是等之處末々に至まで、不相洩樣嚴重に可申渡候、以上。

中村逸角
高田彌左衞門

能州四郡十村中

猶々右煎海鼠近年無數等之譯、組々に而相糺、其譯可申聞候、以上。

二月廿四日、二ノ丸御殿造營の上棟式を行ふ。

御上棟御規式之節御作法

一、河北御門警固足軽二人。

一、石川御門警固足軽二人。

一、御規式中石川・河北両御門開、御節警固相立可申事。

一、三之御丸御番人当番之人々、并河北・石川両御門当番与力布上下着用。

一、四十間御長屋之方、三之御丸腰掛續小口警固足軽二人。

一、極楽橋下御門御歩横目一人布上下着用相詰可申事。

但、御門下警固足軽四人。

一、鯡木坂上警固足軽二人。

一、桧坂御門外警固足軽二人。

但、御規式御用懸り之外、御規式相濟候迄往來指留候事。

一、二之御丸裏之御門下警固足軽二人。

但、御規式御用懸之外、御規式相濟候迄往來指留候事。

一、二之御丸腰懸縮警固足軽二人。

一、御規式小屋外廻締警固足輕三人。

一、御作事所入口警固足輕二人。

一、當日御規式に付罷出候人々、二之御丸江召連候從者、御定之通相心得、都而同所腰懸江入置可申事。

一、御規式御假屋、出來御幕爲打候事。

一、御規式朝六半時相始可申事。

一、御規式に付罷出候人々、朝六時前揃之事。

一、御規式御當日頭分以上熨斗目・布上下着用、平士者御造營懸り之人々迄熨斗目、其外者服紗小袖・布上下着用之事。

但、二之御丸迄布上下着用之事。

一、御規式御當日着服等、紅・萌黄之二色除之、其外者可爲勝手次第之事。

一、御規式に付罷出候人々左之通。

前田伊勢守　　村井又兵衛　　定番頭三人

御造營主附頭　　御留守居番三人　　御用人一人

江上清左衛門　　林彌四郎　　定番御馬廻御番頭八人

御大小將横目一人　御臺所奉行一人　御普請奉行
御作事奉行　同所御横目　割場奉行一人
御造營方内作事奉行　御造營方懸り御醫者　定番御歩小頭四人
御城附與力六人　買手與力　御大工頭
御造營方御歩横目　御造營方御算用者　御大工
穴生　御壁塗　坊主小頭一人
御造營方御横目足輕　掃除裁許　御扶持人石切
御扶持人方大工　二十人石切　御造營方懸町肝煎
大工肝煎　棟梁等　御造營御用相勤候町人

一、御規式相濟、御飾之内御鏡餅六重・緤一折・瓶子一對・御熨斗昆布御前江指上候分、御城代着座上之方江最前より臺直し置、右臺之上御鏡餅等夫々直し置可申事。
但、木地三方祭主御大工持參直之、御鏡餅等者幣持・寶鏡持等相提直之可申事。
右之御品御城代退出之節、主付頭江引渡、受取候上御座所へ致持參候迄之内、御臺所御歩横目指添置可申事。
一、右御品途中長持に入、御横目足輕一人・才領足輕一人指添、御座所江者御造營懸り御算

用意、并取次足輕兩人、先達而罷越相詰罷在、御次入口ゟ爲持運、夫々取捌、主付頭罷出候上、御近習頭を以指上之候事、

但、御横目足輕・才領足輕者、御造營方ゟ受取置候者に而相辨候事。

一、御規式相濟、御城代ゟ御飾之内神酒徳利一對三方之儘、助行相勤候者持參、御城代着座之前ゟ直之可申事、

但、頂戴之節者給事坊主、右徳利等者直に御城代ゟ被下候事。

一、主付頭上座ゟ、前段之通に而一對、飾役之者持參、直に關屋中務より頂戴相始、內作事奉行迄段々頂戴、畢而引之。

但、給事持參飾役之者勤之、畢而同人引之。

一、定番頭等列居之所ゟ、前段之通に而飾役之者持參、上座ゟ直之、九里幸左衞門より頂戴相始、割場奉行迄段々頂戴畢而引之。

但、給事右同斷。

一、頂戴之砌、しぼり有之御幕下し可申事。

但、取捌棟梁大工相勤可申事。

一、御規式相始候儀、暨相濟候儀共、前後御作事奉行より主付頭へ申聞、主付頭御城代へ可

申達候事。
一、右頂戴相濟、御鏡餅・御酒・御吸物被下候事。
一、御城代者着座之處に而頂戴。給事坊主。
一、頭分以上御規式相勤候席ニ而一統罷出頂戴。給事同心。
一、右畢而同席ニ而平士等一統罷出頂戴。給事同心。
一、右畢而同席ニ而御歩小頭幷與力一統罷出頂戴。給事同心。
一、右畢而同席へ御歩組より坊主小頭迄一統罷出頂戴。給事小遣。
於御作事所頂戴。
一、御歩並以上御鏡餅・御酒・御吸物頂戴。給事小遣。
一、御造營懸り之足輕以下御鏡餅・御酒頂戴之事。
一、警固足輕幷小遣御鏡餅迄頂戴之事。
一、諸職人御鏡餅・御酒頂戴之事。
一、御臺所方右御用に携候分、於同所夫々頂戴之事。
一、御規式相濟候上、主付頭何茂御座所迄罷出、御規式首尾好相濟候段、御近習頭を以可申上事。

二月なり

以　上

右廿三日於御横目所披見申談有之。

〔政隣記〕

二月廿四日就御上棟御規式、諸役人朝六時前揃、御規式同半時頃相始り、首尾能相濟候事。

但、前記御作法書之外、繪師狩野友益・同墨川、御規式に付罷出候事。

附記、逗留中友益は十三人扶持、墨川江者六人扶持被下置。

〔政隣記〕

御殿御棟札表

文化六己巳年二月廿四日

無上靈寶神道加持、天水雨水天中地。

菅原朝臣斉廣公御代御城二之御丸御殿御造營天長地久壽命長遠德自在御棟札。

御城代前田伊勢守菅原孝友、村井又兵衛平長世。

御造營奉行關屋中務藤原政良・高畠五郎兵衛菅原厚定・三浦八郎左衛門源賢善・永原七郎右衛門藤原孝之・加藤三四郎藤原恭道。

物頭並御作事御用淺加作左衛門平中卿。

御作事奉行江守要人藤原隆屋・杉浦逸角藤原守政。
御作事奉行加人小堀左內源賴之・長谷川三九郎藤原一久。
御作事所横目高山伊左衛門藤原定功・村田源八郎藤原直之。
御造營內作事奉行村田三郎兵衛源恒升・金谷佐太夫紀健尙・中村武左衛門藤原直孟・井上淸左衛門源信實・熊谷少九郎藤原愼富・關彌左衛門藤原吉淸。
御大工頭高橋貞右衛門藤原孝年。
御大工大西久左衛門吉備政時・井上庄右衛門藤原時矩・淸水又十郎藤原篤郷・西田勘藏藤原安代・中村八郎藤原輝景・井上惣助藤原爲重・篠田彌三兵衛藤原和之。
御壁塗堀越吉太夫源保之・堀村儀右衛門藤原本固・堀越兵之助源一元。

棟札裏

加陽金城有二之丸殿閣造營之嚴命。而今玆文化五年夏六月初執斧集衆乃經之。同七月建柱掛梁勵其業營之。臻翌年春二月大半成就。實御武運長久國民安康之基也。仰願無風火雷震之難。永垂擁護。因各書姓名納之大棟梁間。祝曰萬歲萬歲萬々歲。
祭主井上明恒謹拜書。

二月　金澤城橋爪御門の造營成る。

〔御造營方日並記〕

陰陽和順　日月清明

菅原朝臣齊廣公橋爪御門御造營有嚴命。工匠相與圖之。文化五戊辰年十一月始執斧。及文化六己巳年二月而業功遂成就。依唱天長地久棟。

御城代前田伊勢守孝友、村井又兵衞平長世。

御造營奉行闔屋中務藤原政良・高畠五郎兵衞菅原厚定・三浦八郎左衞門源賢善・永原七郎左衞門藤原好之・加藤三四郎藤原恭道。

物頭並御作事方御用淺加作左衞門平中卿。

御作事奉行江守要人藤原隆晏・杉浦逸角藤原守政。

御作事奉行加人小堀左內源頼之・長谷川三九郎藤原一久。

御作事所御横目高山伊左衞門藤原定功・村田源八郎藤原直之。

御造營內作事奉行村田三郎兵衞源恒升・金谷佐太夫紀建尙・中村武左衞門藤原直孟・井上淸左衞門源信賓・熊谷少九郎藤原恒富・關彌左衞門藤原吉淸。

御大工頭高橋貞右衞門藤原孝年。

御大工大西久左衞門吉備政時・井上庄右衞門藤原時矩、入唐大工横山權頭吉春廿四代山上善

右衛門吉備吉順・山本久藏藤原比之。
御鐘奉堀越吉太夫源保之・堀越兵之助源一元。

三月二日。金澤大衆免に火災あり。

〔政隣記〕

三月二日微陰、南風吹暖和。夕七半時過大衆免町隊人森下屋長兵衛・能登屋市右衛門家之間より出火、段々及大火二百軒餘類焼。御郡支配地十軒計類焼、夜四時頃鎮火、右に付出馬。

〔金龍公記史料〕

三月二日大衆免火、自石屋小路發。夕七時至九時。延燒二百十一家。

三月廿二日。鹿島郡より金澤に運送する商荷物は邑知潟の水路を取るべからざることを告ぐ。

〔御郡典〕

近年所口并田鶴濱村等、其外在々より指出候商荷物類、金澤爲登候分、金丸村江指遣し、或は高畠邊より大町村へ出、潟下いたし、羽咋村・塵濱村へ着、夫より人足或は馬附に送候躰相聞え候。元來右商荷物等は、本道驛々潤色にも可相成品に候條、猥に潟下し致候儀は不相成

儀に候間、以後指留候條、此段可申渡候。右之外金丸・大町御藏米、竪金丸・高畠町藏米、木・竹・萱・薪之分は、裁許々々より縮方申付、可爲濁下は是等之趣共方中より可申談候、以上。

巳三月廿二日

高田彌左衛門

中村進角

本鄕村 惣助

武部村 四郎太夫

綾目村 左兵衛

三郎右衛門に利明

三月廿六日、江戸に於いて本多三郎右衛門を祿す。

〔政隣記〕

三月廿六日於江戸、左之通被仰付候段、前田織江殿御申渡之旨申來。

御合力米

一、二十人扶持　江戸浪人　本多三郎右衛門

三郎右衛門儀、天文學宜旨被聞召候に付、是以後御用可被仰付、依之爲御合力如斯御扶持方被下之。

〔金龍公記史料〕

三月廿六日於江戸給合力米二十口俸於本多三郎右衛門。以精天文學也。

三月廿九日。河北御門を修營するを以て通行を停む。

〔金龍公記史料〕

三月廿九日停河北門通行。十二月復之。

三月。一向宗西派に屬する能登安樂寺の住僧新儀を唱ふるを以て江戸に捕へらる。

〔政隣記〕

一、西本願寺古儀・新儀之爭ひ于今相止み不申候處、新儀方之末寺門徒共密に二條樣ゟ傳手を以入込、毎度參會致し、西本願寺に當時相勤居候家老・用人、其外小役人暨役僧退役被仰付、先達て御咎有之。其後御免許、當時無役之人々を役人に被仰付、何事も門末共取計致度段取組致候由、風聞有之に付、俄に今月十三日先達而御免許之人々十八人、重而閉門或押込に而、番人附等之嚴敷御咎御門主より被仰付、且又西派能州安樂寺与といふ僧も新儀に而、隨身之者取組江戸表ゟ罷出、駕籠訴可仕趣企之儀、脇坂中務大輔殿江戸寺社奉行御聞及に而被召捕嚴敷御吟味有之隨身之者名前申上候に付、京都御役所ゟ御申越に付、京・大坂門末之內被召

今月は三月

捕候。

右等一時に成甚騒が敷、畢竟御門主御不徳故与區説云々。

附記、能州高福寺等右新儀取組人之内与云々。

四月二日　大聖寺侯前田利之參覲の途金澤城に登る。

［金龍公記史料］

四月二日備後守東覲。途次過金澤。登城晤公。三日發。

四月五日、繪師佐々木泉景二ノ丸御殿の杉戸に描くことを命ぜらる。

［御造營方日並記］

四月五日、大聖寺繪師泉景御杉戸下繪十四通り上之樣に申渡事。

一、御廣式御二階波に千鳥岩に鷹。

一、眞琳院樣御書院床下袋卯の花時鳥。

一、御對面所袋棚梅に鳩墨繪。

一、御奥之御居間袋棚富士之墨繪。

一、御小間袋棚夕顔。

一、御寢所夏野に燕。

一、御居間書院奥御書院之下袋繪山水類。

一、御書院床の下袋今二ヶ所。

一、御棚之戸は不殘緣を被仰付候。右切れを入御覽候樣に与之事。

一、金箔千枚三段に差上候樣に被仰上候事。

一、畫繪之分は金地其外は砂子に御袋棚被仰付旨之事。

四月九日。二ノ丸御殿落成せしを以て移徙の期日を定む。

〔三壺御譜〕

今般二御丸御殿等御造營被仰付候處、段々出來に付、來月上旬御引移可被成候間、諸向夫々不指支樣可相心得候。將又御居間廻り全出來無之而も、先御引移之思召に候間、諸役所も右に準申儀に候條、其心得可罷在旨三月被仰出。（本文三月七日御用番村井又兵衛被仰聞旨にて、御横目觸あり。）

〔政隣記〕

付札、御横目江

二御丸御殿御造營段々出來に付、當月下旬御引移可被成旨、兼而被仰出置候通に候。依而當廿六日彌御移徙可被成候間、此段夫々可申渡旨被仰出候條、一統可被申談候事。

四月

當廿六日御移徙に付、御着城之節之通、御當日一統布上下着用之事。

別紙之通夫々可申談事、御用番山城殿被仰聞候條、御承知被成、御同席御傳達、御組・御支配御申談可被成候。且又御組等之内裁許有之面々は、其支配江も不相洩相達候樣御申談可被成候、以上。

四月九日　　　御横目

町御奉行衆中

御移徙之節御作法附、於御横目所夫々江披見申談有之。

御移徙之節、御座所奥之口より御出、表御門より石川御門御入、橋爪御門御通、表御式臺は未御造營前に付、裏御式臺より被爲入候筈之事。

一、二御丸江定番頭・御留守居物頭・定番御馬廻御番頭等、前々御着城之振を以罷出可申候事。

一、方々樣御附使者有之候は、是又右振を以罷出候樣可仕候事。

一、御造營御用頭幷同御用主付御普請奉行・御作事奉行内作事奉行二之御丸江罷出可申候事。

一、三御丸江御殿詰之役向、幷當番之人々等、左之通罷出可申候事。

年寄中等　　御奏者番　　當番組頭

御省略方頭　　新番頭　　同御歩頭

御用人　御射手裁許　御異風裁許
當番御使番　御横目　御臺所奉行
御弓矢奉行　御鐵炮玉藥奉行

右人々之内、御引移前御座所に御用有之人へも、尤振分り罷出可申候事。

一、御間之内御供等之儀も、御着城之節之通に候事。

一、御城附之人々を始、御當日二之御丸に相詰罷在候御歩並以上江、御祝白銀・御吸物・御酒・取肴頂戴被仰付、足輕以下江は大豆入强飯・御酒・取肴可被下候事。

但、御具足之鏡餅御頂戴之振を以可被下候事。

一、御當日御歩以上一統布上下着用之事。

一、御當日御歩以上、上下着用等御作法附有之候得共、江戸表より御着之節、御歩並以下上下致着用候者も、上下致着用可申候事。

四月十四日、鹿島郡長齡寺に相對托鉢を行ふことを許す。

〔筒井舊記〕

御付札に、御算用場奉行江

能州鹿嶋郡小嶋村長齡寺、御領國相對托鉢之儀、寶圓寺より願之趣有之に付、各へ遂僉議候

遠、委曲紙面等被指出候。仍之猶更僉議之上相達御聽、勸化之儀承届、當町を始百姓地之外勸化に相廻可申趣。御郡方之分は、從御上銀七十枚御取替御渡可被成候。且又御郡地之內に而も無高所之分は、志次第施物御郡奉行ゟ取立可指出旨、近年御當地大乘寺勸化之節之振を以申渡候條、被得其意、夫々可被申談候事。

巳 四 月

御別紙、今日御改作所より御渡に付寫相廻申候。夫々承知可被成候、以上。

四月十四日　　田井村　次 郎 吉

諸郡御請番中樣

四月十六日　立太子を奉賀する爲前田齊廣及び治脩使者を江戸に發せしむ。

〔政隣記〕

四月十七日、三月廿六日禁裡立太子御規式被爲濟候に付、江戸表ゟ從御兩殿樣御祝儀御使者被指出候筈に付、左之通仕立に被仰付。

昨十六日御當地發足相公樣御使者。

江戸御廣式御用人今般同役爲交代出府　小 倉 要 之 丞

江戸詰人之内組外梅
御居宅御廣式番　下村左兵衛

四月廿四日。江戸に於いて大鼓打飯島六之佐失踪す。

〔政隣記〕

四月廿四日飯嶋六之佐石井流大鼓役町役者坂尻屋佐六与申候處、去年五月十三日葛野流と流替被仰付、其後苗字名乗龍改名之儀、願之通若年寄衆被聞届、閏六月十一日發足、江戸江罷越、葛野市郎兵衛江弟子入。江戸御邸致御門出候處、翌廿五日迄も不罷歸候に付、師家葛野市郎兵衛等心當り宅々等爲相尋候得共、行衛不相知旨等、會所奉行在江戸西村清右衛門より同廿九日出便に申來候事。

文化五年五月十三日の條參照

四月廿六日。前田齊廣二ノ丸御殿に移徙す。

〔政隣記〕

四月廿六日五時不遲御供揃に而、同刻過御座所御出、五半時頃二御丸江御移徙。其節三之御丸橋爪江年寄衆等引離、御奏者番當番組頭堀平馬等御作法附に有之人々罷出、御式臺前等江も同斷罷出候處、頭分以上之者出ましたか与御意有之。鏡板へ御城代前田伊勢守、敷附へ若年寄前田播部罷出、同人御先立御居間へ被爲入、暫有之、夫々御間共等御覽、於御居間書院御城代伊勢守・村井又兵衛被爲召御意之趣有之。

一、左之通關屋中務を以、高畠五郎兵衛等江被仰出。

只今一篇御覧之處、御好通り夫々不相混、御好迄之外も隨分行届候間、先此段可申聞旨被
仰出。
一、於御居間書院、御造營方御用主附圖屋中務・高畠五郎兵衛等四人一列に被召出、左之通
御意。
何も出情に付、今日引移、夫々宜出來、何も骨折大儀思召旨。
右引退、御作事御用淺加作左衛門被召出、御意之趣同斷。
一、御造營懸之人々江、伊勢守殿於御別席左之通り御演述。
拙者共御前江被召、御造營夫々宜出來、御喜悦に被思召候。此段御普請奉行等江申聞候樣
被仰出。
一、貞[illegible]院樣五半時御供揃に而四時頃御引移之事。
一、廿二日山城殿依御廻文、今日九時より八時迄之內人持頭分登城、柳之御間於横廊下御帳
に附、御兩殿樣江恐悦申上退出。
但、右於御帳前、火事之節御定書幷左之覺書披見申談有之。
裏御式臺一方往來に付、退出供廻及混雜候條、嘉節・朔望等にも三四切に可致退出事。
一、御作法附にも有之通左之通年寄衆（於定席）等初頂戴被仰付。

年寄衆等は熨斗鮑
小皿秋之筋　御吸物ふかし　御酒
白粥　小皿香之物
塩なすび（年寄衆等は臥添）　取肴鰑

足輕以下は豆入强飯・御酒・取肴被下之。

右於御臺所續[illegible]司之間、席札夫々に有之、其下に而頂戴。足輕以下者下御臺所に頂戴被仰付候事。

〔御年譜〕

安房守宅、先達御庫所に被仰付置候に付、白銀五百枚・御時服、伊勢守に白銀二百枚、以御使者拜領被仰付。六月。

四月廿六日。二ノ丸御殿成るを以て金澤町等に盆正月を行ふ。

〔政隣記〕

前記有之候通廿六日朝御移徙、當町中同日・翌廿七日兩日遊祝申渡候。俗盆正月与云々。依之町之思ひ〳〵作り物并躍り狂言等致し賑敷奉祝、其あらまし左之通。

泉　町　挽山菊慈童の作り物、祇園ばやし。

野　町　築山躍り狂言はやし方種々。

寺　　町　築舞臺子供狂言。

河南町　作り物立花茶具の寄せ物。

片　　町　作り物獅子に牡丹寄せ物品々、大幟はた。

木倉町　築舞臺子供狂言床浄るり。

傳馬町　築山躍り。

法船寺町　式舞臺子供狂言。

公儀町　床上るり。

河原町　作り物築舞臺にて身振狂言。

竪　　町　大幟はた。

新竪町　大行燈繪品々。

百姓町　繪あん燈、幟はた。

才川河除町　床あん燈。

石浦町　幟十二本十二支附淺黄ちりめん。

南町・堤町　掩山子供狂言。

下堤町・安江町・横安江町　築舞臺躍狂言。

安江木町　黒羅紗轆吹ぬき出し、繪あんどう。
折違町　船形挽山、酒道具等寄せもの、内に子供七福神の出立にてぎおんばやし。
木ノ新保・堀川　築舞臺をどり。
鍛冶町・荒町・塩屋町・西御坊町　挽山狂言床淨るり等品々。
袋町　曲太鼓。
桶町　龍に波等、芋等品々寄せ物。
御門前町　作物行燈・御幣、生花摘。
十間町　曲馬輕業。
近江町・博勞町　築山躍り、同床上るり。
橋場町　築舞臺歌舞伎類之太平樂作り物。
新町・尾張町・今町　同山子供狂言身ぶり等。
下材木町　床上るり、築小屋傀儡師。
上材木町　生花摘。
御小人町　挽山祇園拍子。
石引町　築舞臺身振狂言。

鶴屋町　大行燈、
観音町　挽山鉾り。
森下町　作り物實盛、呉服物寄せ。
金屋町　作り物鯉の瀧登り色々寄せ物、幷大いし三方。
有之外品々略之。其外仮・おどけ踊り、囃子物等色々、尤町家一軒毎に釣提灯燈し星の如く、殊之外賑敷事數十年以來与云々。
一、宮腰町にも廿六日・廿七日遊祝有之。
一、小松町廿七日・廿八日遊祝有之。

四月廿九日　前田治脩の醫畑柳泰に歸京を命ず。

〔政隣記〕
四月廿九日左之通御用番山城殿被仰渡則申渡。
付札、町奉行江

畑　柳　泰

右被爲召、去年以來此表に罷在、相公樣御療養被仰付候處、御容躰御同樣之内御穩成方に被爲在、追日暖和相成宜時節にも相向候儀に付、兼而御暇之儀内々相願候趣も有之事、旁只今

之内一先京都江之御暇被下候。此段可申渡旨被仰出候條可被申談候事。

〔政隣記〕

一、翌十一日朝發足歸京。

五月朔日。前田齊廣、二ノ丸御殿の竣功を悅ぶとの意を傳ふ。

〔政隣記〕

五月朔日雨天、月次出仕登城、柳之御間於横廊下御帳に附、四時頃柳之御間一統列居之處、御出一統御目見、目出度与御意、年寄中御取合言上之處、重而今般造營何茂依志早速出來引移、大慶安堵に存る与御意。御取合年寄中言上、追付御入。

右別段御懇之就御意、御禮之儀如何可相心得哉之旨、惣筆頭今枝內記より御用番左京殿へ御尋申上候處、二・三人宛追々御席へ罷出御禮可申上旨御指圖に付、各御席江出御禮申上退出之事。

但、人夫等獻上不仕者は、尤御席へ出御禮不申上候事。

〔政隣記〕

同日八時前御用部屋人見吉左衛門より紙面、各儀御用之儀有之候條御次へ追付可罷出旨、岩田・自分連名に而申來、則罷出候處、被仰出之趣左之通吉左衛門演述に付、同人を以御請申

自分は津田政隣にして岩田傳左衛門と共に金澤町奉行なり

上之退出。

今般御造營早速出來、各格別入情骨折候故与御喜悅思召候。此段被仰出。

町同心ども、各より御意之趣可申聞旨、吉左衛門演述。

右に付御用番岩田傳左衛門宅へ、町同心淸水鄕左衛門等四人呼立、御意之趣演達之。

五月六日。前田齊廣、今明兩日能を演じて祝意を表す。

〔金龍公記史料〕

五月六日七日公觀猿樂。召老臣及督工群吏觀之。六日能曲翁・高砂・八島・羽衣・枕慈童公・國栖・金札。狂言末廣・不六駄・福神。七日能曲翁・淡路・田村・東北・卷絹・石橋公。狂言寶槌・千切木・井杭。

五月十五日。前田治脩、金谷御殿に於いて幼年の者をして能を演ぜしむ。

〔政隣記〕

五月十五日於金谷御殿、子供囃子幷狂言數番被仰付、畢而右子供共六人不殘江（子方役者竜素人町人子弟入交。）於御舞臺、御干菓子御廣蓋二つに載之被下之。子共頂戴之上、各持運御樂屋へ退。右之節御簾揚之、御覽有之。且又昨十四日も子供迄江夜討曾我能幷狂言被仰付、昨今共シテ・ワキ等拍子方は不殘子供に候得共、地謡は大人も入交候由。今日抔融早舞中に轉び候等之事有之、

却而御慰に相成候由云々。

左近右衛門は津田政隣

五月廿八日。去年小松の町家を打毀したる高堂屋庄次郎を磔刑に處す。

〔政隣記〕

五月十八日、前記去年八月廿九日等に有之小松町家打毀之一件、其後盗賊改方暨公事場において僉議之處、張本人小松中町高堂屋庄次郎等之旨及白狀、夫々禁牢申付置、吟味之上御刑法右奉行中より伺有之候處、今日伺之通与被仰出候由云々。

右に付來る廿八日能美郡須天村・今江村之間、往還より東之方御林之邊於空地、小松町之者磔に被仰付、且御郡奉行支配之者斬罪之上梟首に被仰付候條、廿七日朝公事場發足、同夜柏野村爲致止宿候。右儀檢使所奉行之前格に候條、拙者(前記に有之通小松町當分支配故也。)共之内一人爲檢使役所ゟ可罷越候、依而廿七日朝於公事場可相渡品有之候條、朝五時前公事場ゟ可出候。廿八日御刑法相濟候上、御横目初何も小松に可致止宿候條、夫々不指支樣可申渡置旨、今日公事場奉行御用番永原久兵衛より以紙面(同役岩田傳左衛門・自分連名。)申談候に付、左近右衛門右場所ゟ罷越候旨、岩田より返書遣し候事。

〔政隣記〕

五月廿七日快天暑甚、朝六時過公事場へ出候處、奉行中出座之上、左之通紙面兩通(内一通は明廿八日受取)

之趣可心得旨、公事場御用番永原久兵衛申聞候事。就被相渡候、受取之、五時過發出。

覺

於所縲　小松中町　高堂屋　庄次郎

右之通明廿八日被仰付候條、爲檢使可有御越候、以上。

文化六年五月廿七日

永原久兵衛

外御用にて不在合　高畠五郎兵衛

伊藤内膳

本多左近助　印

中川清六郎　印

津田左近右衛門殿

覺

於所縲　小松中町　高堂屋　庄次郎

此者去年閏六月久津屋三郎助等之家打毀候儀、所々落文いたし、又は村々江加勢相頼旨廻狀を調、相廻し候趣及白狀事。

於所梟首　同所細工町水越屋庄助方

借家人　沖屋庄兵衛

此者米高直之儀者、久津屋三郎助等之所爲と申儀風聞有之內、三郎助等之家打毀候者下直可成廻狀に而も出候者有之候者、村々よりも寄集可申旨申風聞有之旨庄次郎江相咄、且先年小松寺庵打毀候節廻文調候者有之由之處、終に顯不申由等咄候故、庄次郎儀廻文等之儀心付調出、併庄次郎より庄兵衛へ申談候儀は無之旨庄次郎申候得共、右咄に依而庄次郎儀品重き事を心付、庄兵衛其罪難遁事。

右之者共先達も於公事場禁牢申付置、遂吟味致言上候得者、落着如此被仰出候處、庄兵衛儀者先達而致牢死候。庄次郎儀今日其通申付候條、庄次郎家財闕所、庄兵衛所持之品闕所被申付、帳面二冊宛同樣に爲記、白紙一枚宛とぢ込、可有御指越候。

右庄次郎せがれ　七歲　忠太郎

同斷　四歲　金松

右之者父依罪可爲殺害御定法に候得共、命御助御貪着無之旨被仰出候。依之預置候儀相宥候。今般之儀者思召被爲在如此被仰付候旨、拙者共迄被仰出、誠難有事に候條、右等之趣各より母江可有御申渡候、以上。

巳五月廿八日　　永原久兵衛　印

就外御用不在合　高畠五郎兵衛

伊藤内膳　印

本多左近助　印

中川清六郎　印

岩田傳左衛門殿

津田左近右衛門殿

〔政隣記〕

五月廿八日快天暑強、朝五時頃旅宿出、御刑法場手前迄罷越、幕打敷物鋪之、公事場御横目不破東作等待合候處、四時過東作等科人爲牽罷越候に付、追付御刑法場に罷越候處、最初左之者御刑法。

梟首　能美郡尾小屋村　肝煎　太郎右衛門

前々之通與力申渡、御横目見届。

右斬罪畢而庄次郎爲牽寄、名前等、追付傑に申付、見届相濟引揚。

六月六日。江戸平尾邸内に陷穽を設けて猪を狩らしむ。

〔於江府毎日書立幷日記之內書抜〕

六月六日

一、御下屋敷邊先比より猪多出、畑物等荒候に付、狩捕方之儀百姓共相願申。先年も右樣之節、御屋敷內に所々落し穴を掘、落し突留候に付、此度も其通り可仕哉之旨、金澤表御次に奉窺候處、伺之通被仰渡候に付、五六ヶ處も落し穴を爲掘、狩捕可申候。此段御屆申上置候旨、與力榊原武兵衞申聞候事。

六月十二日。金澤大衆免に災あり。

〔政隣記〕

六月十二日曉寅下刻、大衆免新町前田權作家來小者丈右衞門家より出火、百七軒類燒、內八十七軒支配之者、二十軒支配違之者、外に二十二軒支配之者、二軒支配違之者、外に十軒御仲間・御小人拜領地之分類燒、九軒御歩地之分類燒。

右に付出馬、御細工人支配之分三軒見廻、幷組屋敷致巡見、六半時頃鎭火之上歸候事。

六月十五日。町奉行、繪師狩野友益の名を祐益と改めたるを通牒す。

〔御造營方日並記〕

六月十五日

御繪師　狩野祐益

友松は德川家齊の子

右友松儀、若君樣友松樣与奉唱候に付、友之字指支右之通相改旨及届候段、町奉行より申來る事。

六月廿二日　前田治脩の病狀良からざるを以て再び畑柳泰を招かしむ。

〔政隣記〕

六月廿二日相公樣御容躰御同篇之內、頃日者も强候故折々御出來御不出來之儀有之候間、畑柳泰被爲召診被仰付度思召候。致歸京間も無之候得共、用意出來次第早速罷越候樣可申遣旨被仰出候段、御用番甲斐守殿御紙面を以被仰渡候に付、則今日中飛脚御用所より出候事。傳附申遣候事。

六月廿二日。能登光德寺住持の弟三位、江戶に於いて築地門跡に預けらる

〔金龍公記史料〕

五月十八日。發途能州鹿島郡府中光德寺弟三位于江戶。因寺社奉行召喚也。

〔政隣記〕

六月廿二日能州光德寺弟三位幷役僧高福寺・百姓儀兵衛於江戶表脇坂中務大輔殿に御吟味之上、三位儀者築地門跡江御預、高福寺儀者牢揚屋へ被入置、百姓儀兵衛者町宿へ御預に相成候に付、高田彌左衛門等指添候人々、何も今月十二日江戶發出、今日罷歸候事。

六月廿六日。前田齊廣の女直姫金澤に生る。

〔政隣記〕

六月廿六日申中刻、於二之御丸御廣式御女子御出生。御母御馬廻組小野木助三（頭百五十石、中村九兵衛組也。）女やを、年廿三歳。御醫師中野又玄等。

七月四日。前田齊廣の女直姫の七夜の祝儀を行ふ。

〔政隣記〕

七月四日、前月廿六日御出生之御女子樣御七夜之爲御祝儀、今日御能被仰付。御番組左之通。年寄中・御家老中・若年寄幷定番頭・御用人、暨御次御杉戸之内へ入候人々拜見被仰付。且年寄中等江は御雜煮（五百八十之餅）・御吸物・御酒等、御近習頭・定番頭江は五百八十之餅五つ宛被下之。將又御女子樣御名直姫樣与被稱之。

但、御名御留守居物頭林源太左衛門より指上候樣被仰渡候に付、五字伺候處、此内与被仰出候に付、直姫樣与相調、生肴一折相添上之候事。

七月九日。金澤卯辰妙應寺より出火す。

〔政隣記〕

七月九日夜九時前、卯辰日蓮宗妙應寺より出火、翌十日朝六半時過鎮火。類燒家左之通。

附、奉書火消人持組之人々之内追々出馬、年寄中之内前田伊勢守殿・本多安房守殿・村井又兵衛殿、六時頃火事所近く出馬有之。但、尤火事所に出馬。九半時頃一頻烈風、風不定、最初者大衆免之方風下、及曉卯辰或は大樋之方風下に相成候事。

尤火事所に出馬は政隣のことなるべし

一、四百六十七軒　類燒家

内八十八軒　支配達

外

四十二軒　毀者家

内九軒　支配違

大衆免片原町　淨行寺

同所御馬廻組　佐垣八郎

二軒　同所　御小人

六軒　大衆免町　坊主組

定番御馬廻御番頭山崎十三郎請地之内井波瑞泉寺旅屋

二十三軒　心蓮社門前

五十二軒　　　山之上村領御郡地

右之通に而、町名は金谷町・高道町・後金谷町・山之上町・三ツ屋町・大衆免町　同竹原町・同竪町・同亀淵町等也。

金谷町は金屋町

〔茇々略曆〕

三月二日夕七つ過時より夜八つ時燒留る。家數三百八十許。是より三十五日目か朝七つ時より朝五つ時迄燒留る。家數二百七八十許。其日より又百八日目金屋町妙王寺臺所より燒出る。夜四つ半時より明六つ半時迄燒留る、山之上町竹屋にて燒留る。前田伊勢守樣御出馬。家數千餘。

妙王寺は妙應寺

其年大衆免町火事七度。

七月十一日。畑柳泰、前田治脩の病を診せんが爲又金澤に來る。

〔政隣記〕

七月十一日、前記六月二十二日記之通に付、畑柳泰今月五日京都發出、今日參着。

七月十四日。金澤八幡町の柳橋屋吉右衛門人を殺して銀子を掠奪し、後磔刑に處せらる。

〔政隣記〕

批は、さと訓む白米商なり

七月十五日、昨十四日夜、八幡町批商賣人柳橋屋吉右衛門（年三十歳餘父吉平八十歳餘）儀、大樋越中屋小兵衛を、河北郡松寺村に脇指を以切殺、懐中に有之銀四百目餘奪取立歸、無據趣に付右小兵衛二・三貫目餘所持之躰故及殺害候趣等、父吉平へ密に語置。于時公事場検使有之候處、吉右衛門紋付候提灯并名書、死骸邊に有之候故、検使所ゟ吉右衛門儀呼出僉議之處、及殺害候趣等致白状候に付、直に縮付、公事場ゟ引立禁牢。父吉平儀は先組合預に相成候事。

但、父吉平并同妻も廿二日より禁牢之事。

〔政隣記〕

十二月七日、前記七月十五日に有之柳橋屋吉右衛門一件落着被仰出之趣左之通、今日於公事場申渡有之。

八幡町組合頭　柳橋屋　吉右衛門

不届至極之者に付、兩橋之内にさらし、磔。

吉右衛門父　吉平

不届至極之者に候得共、極老之者に付御宥免。

右吉平妻　よん

夫に可隨者に付、吉平に准御宥免。

右吉右衞門せがれ　庄次郎

父依罪可爲殺害者に候得共、命御助、御貪着無之候。

右吉右衞門儀、大樋村越中屋小兵衞江可遣米代難遣に付、外江連出切殺し、且小兵衞より吉右衞門宅に預候銀子も取掠、吉平夫婦共儀乍承、不斷出押隱し罷在候事。

右於公事場吟味之趣言上之處、落着如此被仰出候處、吉右衞門前月廿九日致牢死、吉平夫婦今日出牢、庄次郎幷吉右衞門下女るい、拙者共江預之處指宥之儀、吉右衞門家財闕所之儀等、公事場奉行中より來狀之事。

七月十九日、本多三郎右衞門召によつて金澤に著す。

〔政隣記〕

七月十九日、前記三月廿六日於江戸御合力扶持被下候浪人本多三郎右衞門（前記に有之通天文學宜、且又蠻學も委細存々）云儀、御用有之候に付、用意出來次第江戸發足、金府江罷越候樣被仰出候旨、前月廿一日江戸詰御家老前田修理殿覺書を以、同御小將頭廣瀨武太夫へ御申渡。則武太夫より三郎右衞門江申渡候に付、今月八日江戸發足今日參着。主從三人歩行に而、旅宿御貸屋小立野石引町鹽屋太郎兵衞方江到着之事。

但、本文之趣寺社奉行竹田掃部より御用番安房守殿江以紙面御達申候者、廣瀨武太夫より

今日ゟ十一月十四日

申越候間、御當地ゟ着之上御貸屋等之儀不差支様、夫々被仰渡置候様仕度段御達申候條、御貸家暨諸方前々之振を以、不差支様可申渡置旨、安房守殿被仰聞候に付、同役御用番岩田より夫々申渡之。

右三郎右衛門年齢六十五歳、歩行等勇健壯實与云々。但八月七日三郎右衛門ゟ、在留中御扶持方十五人扶持也被下候間、不及町賄に旨、御用番助右衛門殿被仰渡。

「政隣記」

前記七月十九日記に有之候本多三郎右衛門儀、今日戸田五左衛門宅ゟ招有之に付、自分儀も蠻國等之珍話爲聽聞、八時過より罷越、夜五半時過退出、珍話等之趣粗左之通。

一、三郎右衛門今年六十六歳之處、いまだ五十歳計与相見え、皮膚肉脊潤澤有之、眼・耳・氣根・歩行等達者、歯は少々不宜候得共、大抵之剛物食事不指支旨。且年若き頃より、夜は子之刻前後に臥、寅之上刻に起、卯上刻飯二椀一合之由。食し、夫より半刻に二椀前記の通一合、都合一日に二合宛也。食し、此外一向に食し不申候。併寒氣等之節は、温酒至而少々、大抵三勺計を子刻臥候頃迄に飲、尤肴等一圓用ひ不申、茶・菓子類等曾而給不申候。兎角大食大酒甚不宜、畢竟夭死之基也。三郎右衛門儀、右之通相守候故か、是迄持病等煩候事一圓無之、風邪は折々有之候得共、不日に平復致し候。人は動物、兎角小食に而身を働動致し候儀何より之藥り、左候得ば長命之

共也。食量右之通極置候得者常に成、致而空腹にも成不申物に候。勿論右兩度之食事は甚相進み、添物用ひ不申而も美味至極に而、誠に肉膏運行之儀心に覺るが如く与云々。

附、戸田亭に而酒は小德利に入、小盞にはべん等五品飾、三郎右衛門之側に出し置候處、時々自酌に而微飲。肴は始終之内はべん一切、薯蕷一切ならで給不申、且又切魚之吸物出候處、一椀給べ候。右之外懸合飯一汁三菜之認出之。飯は勝手次第、何成共少々酒之肴に被給候樣、五左衛門再三挨拶有之候得共、忝旨慇懃之應對計に而、一向に箸付不申候。生質謙退揖讓至極、菓茗も給不申躰に各見受居候處、退出前に至りたばこ者不被用哉与尋候處、好物之由申聞候に付、何故先程より給不被申哉与尋候得ば、扣罷在旨申聞候に付、不被用事与心得不及御挨拶に候、早速御給候樣申入候得共、左候者御免与申聞、數ふく給べ、其外應對之要々に者、必手を突甚慇懃なる生質に候事。

一、韃國之風土、大洋廻船之話、（二千里餘韃國之方に漕廻候由、委細之話有之。）蝦夷地之話等品々有之候得共、長話委曲不能記臆。且布施川・片貝川（越中新川郡之內也。）之河原等田地に致し候得者、上田に相成候旨、宮腰・大野・黑津舟・木津・高松等之砂濱に薩摩芋植作候得ば、甚致蕃茂候旨、大船造立之事等、甚之御國益に相成候趣等仕法、是又長話一々不能記臆、爰に記錄不及候事。

七月廿九日。金澤城五十間長屋等成就す。

今日は八月十三日

〔齊廣樣御傳畧等之内書抜〕

七月廿九日、五十間御長屋并表御式臺御出來なり。

八月十八日、京都の醫曲直瀬亨徳院金澤に來る。

〔金龍公記史料〕

八月十八日。京師住醫師曲直瀬亨徳院至。

八月廿六日、京都の繪師岸越前介金澤に着す。

〔政隣記〕

京都畫師　岸　越　前　介

右越前介今般御當地へ被爲召候に付、今月中旬京都發足罷下候筈、日限十六日・廿日之内与云々。供廻り十九人（内四人若黨に而、箔押・表具師・紙細工之者。）且せがれ筑前介も召連候得共、門人同樣之趣を以召連候旨、門人者村上健亮・齋藤霞亭・松本文平・望月左近与申者召連候事。

右之趣京都詰人土師左膳・溝口藏人より申來候條、致承知、御貸家等不指支樣可申渡置旨、今日御用番奥村助右衛門殿被仰渡候事。

附、越前介儀元來御當地町人也。

〔政隣記〕

八月廿六日、前記十三日に有之通、京都書師岸越前介（禁裏衞士官）同筑前介（同上）等參着。御貸家袋町金屋專次郎方。且召連候人數者前記之通に候得共、今日は侍役人上田左兵衞幷侍分四人、鑓持・駕籠舁等十八人、外に宿次人足先拂兩人召連來。去廿日京都發足、七日路に而昨廿五日小松止宿、今日七つ時頃右專次郎宅へ參着。附、京都に而者一僕召連發足与云風說も有之。右越前介元來御國金澤產也。父は大衆免片原町（俗砂走せ与云。）に居住、仕立屋豐右衞門与て袴等仕立縫物家業、母は越中東岩瀨之者に候處、右豐右衞門江嫁す。男子二人有之。兄は彌左衞門、弟者乙次郎与云。乙次郎（後改健助、雅樂助、當時越前介也。）十二歲之頃母衣町長屋與左衞門といふ紺屋江丁稚奉公に入、染物紋上繪・裾形等手傳、二三ヶ年罷在。

但、母方之內緣も有之、旁與左衞門方に相勤居候由也。

右乙次郎幼少より畵に志深く、不習して能畵候由。就中父豐右衞門袋町永井屋太郎兵衞方に暫借家、其後下近江町三番町に家相求（當時木町肝煎に而、此度越前介主付御用相勤候處、先年之故を以指向對談之節者心易語合候由。且兄彌左衞門當時存命、委曲末に記す。）引移、其頃は乙次郎成長、改名健助与號し、賣畵を家業与して渡世。其後父死、安永九年健助上京、予の年子の日に生れ候由を以、大黑天之繪を書賣弘候處大に流行。其後江州彦根江罷越候處、大に畵行はれ、夫より歸京仕、佛光寺之襖張等畵候處、或時有栖川樣佛光寺へ御出、右繪御覽請、甚御感稱に而名前等御尋。其砌御衝立に繪被仰付候處、甚應御意に。依之

京都住人に相成、名も岸雅樂助与改稱し、其後禁中之衛士宮明所有之に付、株買求、於禁中は當時も衛士（六位与云々。）之由也。

一、於京都初には柳馬場蛸薬師下る所に借家し、母も引越居候處、次第に畫（掛物一幅畫謝禮金千疋、屛風一双畫謝禮金二十兩、右は絶品に而之畫物。彩色等に至て者段々上達与云々。）大に行れ、天明年中禁裏炎上御再營之後、御襖畫相調。其後關東御用畫も被仰付、文化元年京東洞院丸太町東側に家相求居住、名越前介与改之、年齢今年五十四歳与云々。子息太郎与號し、是又畫相應に宜、去年是も衛士宮株買求、筑前介与改稱す。

一、越前介兄彌左衛門儀者、父死後材木町に借宅、其後新町に家求、袴等仕立物を以渡世之處、兎角勝手難澁に付、十六ヶ年前舍弟越前介御當地へ下り候節、銀子二貫目合力、此銀子を以巨井主税人夫方扶足輕相成。右足輕株跡式譲受候爲代一貫三百目出し、殘而七百目は越前介江令返濟候由。彌左衛門今年六十二歳也。右十六ヶ年已前下り候節は、尤健助与申せし頃也。

扶足輕本のまゝ

一、右彌左衛門せがれに彌次郎与て、新町父家にて仕立物家業に致し居候處、今春尾張町に家相求引移、袴屋与號し、父彌左衛門儀もせがれ彌次郎宅へ同居之事。

一、今月廿一日岸越前介儀御會釋方、荻野左衛門尉御召候節之御格合に而、少し可也に可取計旨、御用番助右衛門殿被仰渡候に付、其旨夫々申渡置候事。

寛政四年九月廿一日の條參照

今月は九月

一、越前介登城之節、供人徒士二人・陸尺六人・侍四人、鑓・挾箱・長柄傘・草履取・笠籠、御門內江者侍二人・草履取一人・傘持一人・挾箱持一人、外に書御用被仰付候節者長持一棹爲持候と申越、御城代へ御達申置候事。但御門內より御玄關前迄、侍二人等本文之通召連候事。

一、せがれ筑前介儀、今般爲扶助召連候間、登城之節者草履取一人爲召連同道仕候、外に弟子共も召連候段申越候に付、筑前介事御用番へ及御屆之外、御城代江も御門入之御達申候事。但、筑前介迄罷出候節は、侍も一人召連候筈。弟子も其身迄出候節は、草履取一人宛召連候事。

廿七日、昨日記に岸越前介・同筑前介も衞士官与記置候得共、其儀相違、六位に而禁中勤向者新嘗（十月新穀を天照太神宮江被備候事与云々。）會之節、御別殿江御幸之砌、御輿之先江炬火持參、其外右に准候勤向有之由云々。

〔政隣記〕

岸越前介等今月廿六日初而二之御丸江召、虎之御間等襖張附に被仰付候繪被仰付、其節途中町附足輕二人指添、御玄關より御玄關番足輕溜所迄誘引、御賄坊主給事に而被下之。

但、御目見等に罷出候節は、御式臺より當番御歩誘引之筈に候得共、御繪書御用故本文之通也。翌廿七日より者御賄も相止、旅宿（御貸家也。）より辨當指遣候事。

一、右越前介儀、何卒御序を以御目見被仰付被下候樣相願候に付、前月御用番岩田氏より願紙面出置候處、右御目見者不被仰付旨、御用番又兵衞殿被仰聞候段、申渡有之候事。

九月七日。能役者等に石井流大皷の待遇に關する件を諭す。

〔政隣記〕

九月七日、石井流大鼓前々御家に被建置、先達而石井仁兵衞（京在住御手役者）儀下向之處、石井流者江戸表に家元無之等に付、亂以上之分者相手に成間敷旨、當時當地へ罷越居候御手役者小鼓役觀世仁九郎等へ家許より申越候由に而、御用たり共仁兵衞相手組亂以上指支候處、今日右石井流者御家御威光を以被建置候事に候得者、御手役者之者共相手組不指支筈、家元より申越候趣有之候共、可申斷筈に候。以來亂以上に而も相手組可仕旨改而被仰出、今夜御用番岩田氏宅において、自分立會申渡候處、何も（笛役藤木養五郎、わき尾上萬次郎、太鼓役佐々木壽六、小鼓役佐々木仁九郎等也。）被仰出之趣に付奉畏請書指出候事。

九月十日。前田齊廣、庭掃市右衞門の高齡を慰むる爲鳥目を與ふ。

〔政隣記〕

九月廿四日、今月十日左之通。

今年九十二歲　新堀川町　宮腰屋　市右衞門

右之者元來者河北郡大崎村漁師故傳四郞与申者之二男に而、市郞右衞門与號し、無妻に暮し、稼を以致渡世居候處、舍兄市右衞門者先達而より金澤江出、新堀川町に家持居候處、三十ヶ年以前病死之處、妻一人に而子無之、家相續可致者無之に付、右市郞右衞門儀兄之家江後家入致し、市右衞門与改名、日傭稼を以致渡世候に付、今月十日二之御丸御庭掃除方青木新兵衞役小者長右衞門与申者之代人に罷出、御居間先御庭致掃除居候處、御前御出、右之者御覽請、何者之旨等御意被遊候得共、極老耳遠に而不相分候內、近く出候樣御意に付、御側近く出候處、御近習より文字を書候樣申聞に候へ共、無筆之旨答候得者、筆硯等に手本を添、此通り可調与申聞候得共、無筆之旨再三申上候得共、見苦敷儀少も不苦、此手本に似寄候樣、いか樣共書上候樣强而申入候得者、不得止事を躰に而、手本之通り相調上之候。且又御直に出生所等之儀御尋に付、夫々申上、今年九十二歲に而、一昨年より御扶持頂戴、難有奉存罷在候旨等申上候處、御代紙を以鳥目一貫文拜領被仰付、御禮申上退候事。

但、最初者御前与不心付、恭敬も薄く候處、暫有之心付候に付、夫より匆諭平伏罷在候旨之事。

右市右衞門儀、元來正直律義一篇之生質に而、是迄難澁之稼を以渡世候得共、少も後闇き事無之、妻名ゆん今年七十九歲に相成、娘一人在之、今年三十歲に相成、最前暫奉公に出居候得

今月は九月

鉢ひらき本のまゝ

共、父及極老に、、段々勝手も難澁に迫り候儀を不堪見、奉公を止家に入、晝夜共菅笠を縫、其料を以父母養育之償とし、介抱等少も無麁略。將又段々年闌候間、入聟可致と人々勸候得共、若出生有之時者、父母之ため不宜、支候儀も可有之候とて不致承引、獨を慎み候儀專一に相守、親子三人睦敷相暮候事。右市右衛門江御意等之御禮者、手先三十人頭より、翌十一日御用部屋中を以申上相濟、支配先よりは不及御禮候事。

九月十日、金澤町奉行、孝子節婦數人を賞す。

〔政隣記〕

一、今月十日於町會所町同心申渡、左之書立横目肝煎爲讀聞候上一通宛渡遣、米は人々宅江爲持遣候事。

米五俵　　荒町道心者清心養女　ふく

右養父清心儀、僅町口九尺之小家に住貧窮者に而、日雇稼を以其日を過來候處、及老年力業も難成に付剃髪、鉢ひらき致し候内病身に成、彌々托鉢にも得出不申、無致方爲杯之處、養女ふく儀晝は團子餅類を拵所々賣步行、夜は綿がな賃引等入情、毎夜夜半に至迄勵み、幸苦を不厭相働、養父を孝養し、或は時として外江洗濯等に被雇、宜敷食品等被居候得者、其身は不食持歸、養父へ與へ候旨等、是迄色欲に心を牽れ候事も無之、數年只養父之養育方而已

嫁娶付はか
しづきなり

に心力を盡し罷在、貧窮旁夫をも不持過來候躰。去々年淸心七十餘歲に而終焉迄、全く孝養盡し、養父死後も今以實躰に相慕候樣子相聞え、誠に奇特之者に候。依而爲賞賜遣之候事。

巳　九　月　　　岩田傳左衛門
津田左近右衛門

米五俵　　　下材木町淺野屋德兵衛養母　ふ　さ

右ふさ儀、泉野寺町淨安寺門前菓子屋故五左衛門娘に而、淺野屋故德兵衛方江嫁娶付、生質柔和實情厚く、夫を初舅姑江もよく事へ、親元養母へも深切仁孝心を盡し來候處、父は先達而病死、母一人存命に候。就中夫德兵衛及老年病死、隨而其身も及老年候得共、下材木町より泉野寺町迄遠方之處日々罷越、母に安否を尋ね、或者外より宜敷食品珍菓之類等到來有之節者、歸宅後休息之間も無之に、其儘に引返し、重而致持參母に進め、風雨寒暑を不厭、數十年訪ひ通ひ不怠、尤姉妹弟睦敷して孝志を盡し來り、母死後今以忌日每に親元江罷越內佛江參詣、追孝之志深く、當年六十餘歲に相成候迄如斯不怠、誠內外孝道厚く奇特之至に候。依而如斯與之候事。

巳　九　月　　　岩田傳左衛門
津田左近右衛門

米五俵　　大衆免亀淵町井波屋又右衛門後家もよ娘　はつ

右はつ家貧窮に付、幼少より外奉公に出居候處、十九歳之時父又右衛門致病死跡に者、母幷妹等四人罷在、甚貧窮之爲躰之處、はつ儀生質孝心厚、此躰を見に不堪、奉公を斷家に入、日夜菅笠を縫ひ、其代料を以漸家内を養育し、女之儀、若し人不義をも被申懸等之事有之候而者、孝養之障に可相成与、數年來聊爾之不外出に付、同町内にもはつ家に在之事を不知ものも有之様子、年中元日幷祭禮之節半日より外は休候事無之、晝夜笠縫而已相勵、今年迄十五・六ヶ年、年難澁はつ一人之手に而、母初家内全遂養育、町役銀等もわづか之笠縫代等之内より毎日二錢宛除之置、是迄無滯年々全致上納。勿論人に對し無心・借方等申懸候儀無之、操正敷盡孝道候旨、誠孝心之程奇特之至に候。依之爲感賞書面之通與之候事。

巳　九　月　　岩田傳左衛門
津田左近右衛門

米五俵　　法船寺町赤井屋三右衛門娘・孀　いち

右いち儀、父母幷祖父江孝順に事へ候旨、家業前々より煎餅致商賣、細き渡世に候處、祖父致病死、父も次第に病身に相成、彌增難澁に迫り候處、いち儀甚相働、父に代り家業致入情、妹一人有之候も他へ嫁娶付、親之心を安んじ、其身年頃候得共夫をも不持、尤行狀相愼、聊

猥之風評も無之、明暮盡孝養、就中父母より之任指圖致入聟、男子出生候得共、聟儀父母之心に不叶に付、睦敷中を致離縁、其後父病死、相殘る母も及極老に、且起居も不叶族之處、いち儀孀暮に而彌家業入情相働、日夜母を深切に介抱し、艱難至極之内より、母之儀に付而者食品等も費を不厭、成限り調之、尤著寒着類も不自由無之樣兼而備之、或は嚴寒之砌抔、其身着類薄候得共、家業に骨折聊不寒躰を申、母之心を爲致安堵、右一子江之教導方も宜敷故、是又孝順之風押移、父死後是迄三十餘年之間、飢寒辛苦を忍び、晝夜家業入情孝養を全し、母當年八十餘歳に及び候旨、且又雖爲貧窮、他に無心・合力等難題ケ間敷儀聊不申聞、組合之者共初ゟ人皆感入候旨、誠に孝心之程神妙之至に候。依之爲褒美如斯與之候事。

巳　九　月

岩田傳左衛門

津田左近右衛門

米五俵

火除町談義所屋長右衛門せがれ　五郎右衛門

右五郎右衛門儀、桶屋職を以致渡世、父子兩人艱難に相暮候處、父及極老桶細工も不得致、せがれ五郎右衛門毎日外へ出、輪入細工相勵盡孝養候旨。且父常々酒を好候故、其身は下戸に候得共、難澁之内より毎日酒を買、外より歸先父に與へ、父之悦を待て後自分洗足食事等致し候旨。都而父之好候品は、假令密に所持之衣類等賣代成候而も、成限調之其求に應じ、

常に父之心を令悅事而已樂とし、歲三十餘迄妻等も不持愼罷在、父より妻を可娶旨申聞候に付任其意、尤妻江も申付方宜故、是又無殘所心力を盡し、父死後も追孝之志深く、全躰五郎右衛門儀慈悲之心厚、近邊孤獨之者等愍而人々艱苦見候へば、其身難澁之內より、成限色々致世話取扱候旨相聞え、誠に輕き者に者奇特之至に候。依之爲褒美與之候事。

巳　九　月　　岩田傳左衛門

津田左近右衛門

米五俵　　神谷町　能登屋　長右衛門

右長右衛門儀、日雇稼を以漸其日を送候族之處、父母に孝心厚、曾而私之心に戻り候儀聊無之、貧窮之內より衣食等萬端親之ため成限り調之、難澁之中妻を娶候而者孝養に可支を慮り、無妻に暮し、其身之不自由を不厭、只管親之氣を樂す事而已心懸、從來睦敷相暮、父母共八十歲餘に而終焉に至り候旨。就中母病死以前一兩年は致老耄、寒氣之節にも不斗着居候衣類を脫、水に入候而濕候事抔有之處、長右衛門聊聲を荒し候事も無之、其儘自身着せし衣類を脫ぎ母に着せ、彌痛はり介抱し、右水に入候衣類者絞り上、火に干其身着し、其外辛苦樣之處聊其身之難儀を不厭、彌孝心を盡し候旨、且乍貧困是迄苦惱を申立る事も無之、萬端獨を愼み實躰に暮候段相聞え、誠に輕き者に稀成志令感入候。依而爲褒美如書面與之候

事。

巳九月　　　　　　　　　　　　　　岩田傳左衛門
　　　　　　　　　　　　　　　　　津田左近右衛門

米五俵　　　　田井新町後町越中屋九兵衛後家とよ娘　まつ

右まつ儀、幼少之節父致病死、母は後家暮に而苧納等を紡績、久々艱難に致渡世來候處、まつ甚孝心厚、倶に苧納をうみつむぎ、就中娘まつ江致入聟候處、母之心に不叶事共多有之に付、間柄睦敷候得共無是非致離縁、其後松春公に出、纔之給銀も不殘母江送り、其外日用之米錢等、家修理之事共迄萬端氣を配り、孝養を盡し候躰、近邊之者共も常に感入候樣子相聞、誠に奇特之志に候。依而爲褒美如斯與之候。松は當時主人持之儀に付、母とよ江遣之候條、まつへ此段可申聞候事。

　　　　　　　　　　　　　　　　　岩田傳左衛門
　　　　　　　　　　　　　　　　　津田左近右衛門

米五俵　　　　淺野水車町能登屋理助娘　やそ

右理助儀前々貧窮に暮候處、娘やそ儀幼稚之頃より孝志篤く、父之難儀を見兼、自分菅笠を可縫旨相進み、不手馴内より其縫代少分ながら親江致合力來候處、五ヶ年前より親共病身に

相成、必至与困窮彌增に迫り候に付、やて晝夜となく笠縫方出情、全く致孝養、常に笠縫等之ため寸陰を惜み出情之中与いへ共、親之呼り等之節者、其儘笠を打捨、何事も心よく親之氣に隨ひ、尤聊言葉に逆らひ候事無之、親子睦敷相暮候旨。春以來所々火災も有之に付、萬一此邊にも火事有之節は、如何して親を可介抱哉与涙に迫り候躰、人皆感入候旨相聞え、常に親を大切に存候孝情之實意より發り候儀、旁以年若之女には彌奇特之至に候。依而爲感賞如斯與之畢。猶彌可盡孝志を事。

巳　九　月　　岩田傳左衛門
津田左近右衛門

六枚町　淺野屋　宗　平
安江木町　淺野屋　仕右衛門
十間町　淺野屋　宗四郎

右兄弟三人致別家罷在候得共、互に甚睦敷、舍弟共兄宗平方へ、親存生之內は孝順之志を盡し、毎日相見廻、勿論兄弟互に安否を尋、いつとても快く心得方等日々に申談、年中病氣之外は一日も怠る事無之、實義厚きゆゑ、家內もおのづから其風儀に致感服、奴婢に至迄心立宜敷成立候樣子。且又例春等一類打寄り、面々家業之勘定損德等無底意互に打明し、其內に

損失有之方ゟ者助合、全く取續方等取計候儀例年不怠旨。誠に同姓を重んじ、眷屬を親しみ候儀等、則先祖・父母ゟ之孝道に叶ひ、奇特之至令感入候事。

巳九月　　岩田傳左衞門
　　　　　津田左近右衞門

附、右宗平等三人ゟも可令褒賜處、三人共富有之者に而、米等與へ候に者不及者共、外品指支之譯合も有之に付、先此度者褒詞迄に候事。

右前々忠孝幷善行之者、於公邊孝義錄に官刻被仰付候處、今般續編御書繼に付、先年書出候以後之者而已に不限、しらべ方不屆出之後れ候向等も、新古共可書出旨、去々卯十月に被仰渡候に付、寛政年中以來及御達置候分等相しらべ、幷前々善行之樣子近年及聞候者得と相糺、此度褒美申渡候分共帳面に仕立、猶此外にも格別善行奇特之志等追而相知候者、重而御達可申旨、今月十五日御用番ゟ添紙面を以指出候事。但、去年中本文帳面御達可申處、調方御好等有之、延引に相成候事。

九月十四日　宇田川玄眞、前田治脩の病を診せんが爲金澤に着す。

〔政隣記〕

九月十四日宇田川玄眞儀、相公樣爲御病用重而被爲召候に付、昨夜大聖寺止宿、今晩御貸家

角屋太郎次宅江参着。召連候従者等弟子藤井芳亭、若黨兩人、小者九人。

［政隣記］

十月朔日宇田川玄眞登城に付、御殿四時揃之事。

宇田川玄眞登城之節

一、途中町下代誘引に而、表御式臺代裏御式臺迄罷出候はゞ、御小將誘引に而虎之御間代へ相通、間番罷出致挨拶可申候。給事御歩御茶・たばこ盆出し可申候。追付組頭之内罷出及挨拶可申候。其後御小將誘引、柳之御間三之間江相通、組頭及挨拶可申候。其次年寄中之内罷出及挨拶可申候事。

一、柳之御間御縁先江、手水桶・手拭懸指置可申候事。

一、玄眞御横目指引に而寄せ置、檜垣之御間江御出、御目見披露御奏者番、御意有之、御用番御取合申上、退居之事。

一、右御目見之節、定番頭以下御歩頭以上伺公之事。

一、右相濟、於柳之御間三之間御料理等被下候節、給事御歩、指引小頭。其節組頭罷出及挨拶可申候事。

但、相伴御醫師之内。

一、御料理出、退出迄に見計候而間番罷出、及挨拶に可申候事。
一、御横目指引之事。
一、携候人々布上下着用之事。
一、玄員退出之節、挨拶罷出候組頭并取次御小將、御式臺階上迄可申候事。

九月廿八日。公事場奉行等刑の適用に關する慣例を上申す。

[高田氏藏文書]

此一卷は、文化六年巳九月於御次人見吉左衛門を以、高畠五郎兵衛ゟ御刑法方之儀、何罪は何刑与御定被仰出置候儀茂無之哉与、御尋之趣有之に付、此紙面同月廿八日中川清六郎御次ゟ持參、外に文化元年指上置候御刑法大綱書帳面寫一冊、人見ゟ相達す。

但、大綱書を茂寫置候筈に候得共、寛政七年に何々罪之者は何刑与共品を有増先例を寄せ候三冊を寫置候。大綱書は不寫取候。右御刑法帳之三冊者、於公事場誠に秘錄に相成、品重き事故宅々ゟ借用寫置候儀は不相成、先年被仰出茂有之候由与、留書鈴木五兵衛より承罷在候儀茂有之。然者寫候儀は可相事に候得共、退役後者早々火中之圖りに而穩密に書寫。

公事場御刑法之儀、何罪者何刑と往古より御條數を以相定り居申儀有之候哉、又は時々之伺を以御刑法被仰付候譯に候哉、御尋之趣奉畏候。萬治·寛文之頃迄は、公事場主附之年寄中

等奉行示談之上、釜煎・火罪迄も申付、跡言上仕候處、延寶之頃より都而言上仕、時々先例を書上、先例無御座分は先例無御座と調、奉行評書等も不仕、言上書指上候處、時々御下知を以御刑法相極り申候。元祿六年迄年寄中ゟ言上書指出不申、封印を以直に指上申候へ共、右六年より以後は都而年寄中ゟ指出候樣被仰出、年寄中に而僉議之上落着相伺候事に相成、尤先例無御座儀は例無之旨調出候得共、時々落着被仰出之趣、年寄中連印之物を以申渡候處、延享之頃より先例無之儀者、奉行僉議之趣評書を以相伺候樣に相成候故、寛延三年奉行僉議之上、先例無之儀は先年之通評書仕間敷旨年寄中ゟ相達候處、是非刑附僉議之趣評書を加指出候樣年寄中申聞、夫より以來先例無御座儀は、刑附評書を加言上仕候。右評書は、色々御刑法被仰付置候不屆之者共を以、其時々科人に引競、刑附評書仕來申候。惣而先例之引方、たとへは賊物十品之者には、先例十品より以上之例は引當不申樣に仕來、都而的當に而無之例は、重き例を輕き方ゟ引當候儀者不仕、輕き方を引申事故、次第に御刑法輕き方ゟ可押移道理之所、前々より御刑法之ゆるぎ申事は、御改之御底意にも御座候哉、正德三年之被仰出にも、御刑法次第にゆるまり、以後は譯も無之可罷成と思召候旨被仰出候儀も御座候。其外延享三年之被仰出に、向後は寶永より以前之例を可書上旨被仰出、此所に而又如元古き御刑法に立歸候得共、次第に先例之輕き方に引來候故、いつとなく輕き方に相成候處、天明五年以

後は重き方に被仰付候旨被仰出、寛政三年又候是以後先例寛延以前之例可書出、右年間に相當之例無之候はゞ、寶暦以後之例書上候樣に被仰出置候處、隨分舊例を引當言上仕候得共、品に寄舊例迄に而は不釣合に相成儀は、僉議之趣評書を以奉伺候。右之譯候而御刑法方之輕重くるひ附申事故、寛政七年何罪之者は何刑と其品を有增先例を寄、三冊に仕立、右帳面に御座候儀は先例書上不申、刑附迄言上可仕哉と年寄中江相達置候得共、其後何等之被仰出も無御座候故、今以時々先例を以御刑法奉伺候儀に御座候、以上。

九月二十八日　　　五　人　無判

人見吉左衛門樣

九月、十村等の駕籠に乘ることを嚴禁せしむ。

〔河合錄〕

秋縮御請以前村廻之刻、前々御扶持人等病氣之節は、無據駕籠へ乘候儀も有之候へども、多分は押而も歩行仕候所、當時は何も駕籠に而相廻り候体被聞召、御不審に被思召候御樣子、各樣迄被仰出候段奉得其意候。前々極老之者、或は痛所等に而歩行仕兼候節は、所に寄駕籠に乘候儀も御座候。猶更當年之儀詮議仕候處、石川郡野々市村孫之丞儀、久々痛所に而難儀仕候へども、押而罷出候處、半途より甚難儀仕歩行不得仕候に付、無是非輕き指駕籠に乘候

旨申聞候。且射水郡五十里村庄右衛門儀、癃疾相滯罷在候へども押而罷出候に付、立毛之場所は歩行に而見分仕候へども、山方之内山越等往來筋に而は、折々駕籠に乘申儀御座候。暨同郡中川村善左衛門儀、久々濕瘡相滯、其後痔疾に而難儀仕、是亦押而相廻候に付、庄右衛門同樣立毛無之場所等駕籠に乘申候旨申聞候。能州口郡鰀目村兵衛及老年、其上去年冬より相滯、今以全快不仕に付、廻口組等相廻候節、所に寄無據駕籠に乘候旨申聞候。此外諸郡十村共當年駕籠に乘候者無御座候。猶更以來成限り四つ手等に乘申儀無之樣、急度可申渡与奉存候。先此段御達申候事。

九　月

十月十二日。許可を經ずして新開を行ひたる村方の調査を命ず。

[筒井舊記]

御郡村々領之內、山添・野毛或者海邊等之場所、新開願出受御聞届開立可申處、何与歟樣子有之、誠々試等に開立、植付も致出來候處、願方等閑に相心得、未表向願出不申分有之躰及御聞、甚不埒之至に候。以來見聞次第無泥御內意申上候樣、嚴敷御紙面を以被仰渡に御座候間、若右樣之村方有之候哉御糺、萬々一株付之場所等有之候はゞ、願出候樣仕度、自然外より相顯候而者品重き儀に御座候。村方により心得違之程も難計、何れ得与御聞糺御座候樣仕

誠々は精誠歟

度候。若重而御察當有之時は、誠に六ヶ敷場に至り可申候間、左様御承知被下度如此に御座候。此段先々御頓達、落着より六藏方迄御返可被下候、以上。

十月十二日

鶫川村　六　藏

鶫川村　清　三　郎

走出村　彌　五　郎

仲　間　宛　所

十月十八日。曩に能美郡小松に於いて暴民の爲に家を毀たれたる久津屋三郎助を所拂に處す。

文化五年閏六月廿七日の條參照

〔政隣記〕

十月十八日小松表去年町家打毀一件、今日於公事場左之通落着申渡有之。

最前小松町年寄並　久津屋　三　郎　助

所追拂、家藏御取揚、指預免許。

小杉屋　六　兵　衞

指預免許。

右之外御郡方等懸り合之者共、夫々落着。

右三郎助儀、家元者金澤堤町角屋太郎次方に付、直に居留り、妻子五人追付太郎次方へ引移候筈之事。

十一月朔日。前田齊廣の女直姫の色直・箸初の祝儀を行ふ。

〔齊廣様御傳略等之内書拔〕

十一月朔日、直姫様御色直・御箸初御祝有之。同日御生母屋尾御宛行御改、直姫様御産婦之方と相唱候様被仰出有之なり。

十一月十五日。佳節・朔望に出仕するものゝ列居を遲滯することなかるべきを命ず。

〔政隣記〕

付札、定番頭江

佳節・朔望出仕之人々、所々に散罷在、列立之儀御横目より申談候而も不行屆、及遲々候人々も有之躰被聞召、不作法之儀に被思召候。以來四時を限列相立候様被仰出、自然列居に洩候者は、其者之可爲不念旨、享和二年申渡置候通に候處、近來又々列居及遲々候躰に候條、尚更列居不致遲々様可相心得候。

右之趣被得其意、出仕以上之諸頭へ夫々可被申談候事。

巳十一月

十一月十五日。佳節朔望出仕人々參列遲延。申享和二年之令。

〔金龍公記史料〕

十一月十六日。領國寺社に許可を得ずして相對托鉢を行ふを禁す。

〔御郡方御觸〕

御領國寺社等之內、不押立相對托躰之趣を以相廻り、或者內々に御扶持人裁許等江、少々宛施物取集之儀賴入候族も有之哉に相見え候。元來相對托躰等之儀者、御郡方御定も有之儀、若村役人等心得違に而、少々たり共施物指出候族有之候而者、不輕儀に候條、以來之儀等嚴重可申渡候。且御扶持人・裁許等賴入候儀有之候はゞ、早速拙者共江も可申聞處、誠に不押立內々之儀に相心得、申聞之儀も無之哉、其內には心得違之人々有之哉にも相聞え候。以來之儀相心得、右躰之儀有之候はゞ、早速可申聞候。將又一向宗祖師五百回忌之由に而、右寺庵法會致執行、就夫施入之儀申入候躰も粗相聞え候條、此等之趣無之樣一統嚴重可申渡候、以上。

巳十一月十六日　　林彌四郎

吉田兵馬

諸郡御扶持人・十村中

十一月廿二日　代官の下代等収納米に就いて不正の手段を行ふを禁ず

〔眞館留帳抜書〕

諸代官御収納米納方之儀に付、被仰出之趣有之、文化元年一統嚴重申渡置候處、全く相改不申、不正之族相聞候に付、猶更其後時々申渡置候處相改不申、當年別而不正之躰に相聞ゑ、且下代・手代等之内、こぼし米は不多候得共、用米与名付追而斗下村々より米取請候族も有之、御印切手等居するゑ顯候て相向候節も、雑用米与名附米取請候躰。是等之儀不届至極、尤代官々々一様にも無之躰、其様子も粗相聞、第一悪米多相納置候躰に候。夫に付相考候處、下代・手代共今以こぼし米拵いたし、不正之族有之に付、米撰も出來不申躰に候。百姓分もこぼし米仕儀斷可出筈に候得共、左候而者後來下代・手代等宿意を以、米撰念に入申趣を申立、爲致難儀可申与相泥、斷出不申、悪米御収納に難相立分を持參いたし、右含を以御収納いたし候躰、双方不屆至極之事に候。此儀代官心付不申哉、最前被仰出之趣有之、嚴重申渡、其後も度々嚴重に申渡置候處、甚等閑至極不埒之儀、勿論表立相顯候はゞ一圓申譯無之筈に候。猶更當場詮議有之、重而此段入念に申渡候條、急度相心得、下代・手代共手前深く心を付可申

候。百姓共之儀は改作奉行所へ申渡候得ども、納方に付心得違有之候はゞ、尤其段承糺、委曲速に可被申聞候、以上。

十一月二十二日　　　　御算用場

十一月廿四日。金澤城菱櫓の造營に從事する大工等濠中に落つ。

〔政隣記〕

十一月廿四日九時過、御城中御造營所菱御櫓之足代、雪なだれ等に而毀れ、右足代之上に而御用相勤罷在候大工等十二人、御堀之内へ落入、内二人は中に而柱竹等に取付無難、一人者胸等を强く打痛候躰に而吐血多く、用藥も治り不申候處、鹽川鯉一郎療治に而吐血止、用藥も治り、多分助命可有之与云々。殘九人は無難に候得共、水中へ落候事故大に凍え、戰慄甚く候に付、於御堀際草を焚、右十人共裸に致し薦を着せ、温酒藥等用候處、無程九人は平復、一人は前記之通鯉一郎療養に而快方也。

十二月十日。本年諸士より徵する借知中の一部を免除す。

〔政隣記〕

十二月十日、昨日御用番左京殿依御紙面、人持組（身當之分者本多求馬之助等迄に候得共、與力之儀に付如此。）之筆頭、頭分御用番或筆頭一人宛、四時過登城之處、檜垣之御間ゟ御用番左京殿御出、一人宛御呼立、左之御覺

書之趣御演述之上御渡之。御禮申述退去、柳之御間於横廊下、左之覺書披見、八時頃退出之事。

御家中之人々勝手難澁に付、當年も御借知被返下度被思召候得共、今年者別而御運方御指支に付、一統全者被返下儀難被爲成趣に候。乍然小身之人々者一入難澁之躰に付、御借知・御借米之內別紙割合之通、千石以下之人々江一作被返下候。此段可申渡旨被仰出。

右之趣被得其意、組・支配之面々江も可被申渡候。組等之內裁許有之人々者、其支配江も相達候樣被申聞、尤同役中可有傳達候事。

右之通可被得其意候事。

己巳十二月

覺

一、自分知三百石以下、御借知幷增御借知共不殘。

一、同　三百石餘より五百石迄、同斷之內百石に付十石宛。

一、同　五百石餘より千石迄、同斷之內增御借知五石宛之分。

一、御扶持方之分知行に圖り、右割合之通。

一、御切米之分都而御借米不殘。

右之通被返下候事。

十二月十四日。借知等返還に就いてその手續を定む。

〔政隣記〕

今般御借知・御借米就被返下候、五百石以下代銀を以於當場相渡、五百石餘より千石迄御米を以可相渡旨被仰渡候。依而草案目録幷帳面相違候條、急速可被指出候事。

一、五百石以下代銀之分は、組切惣銀高に而頭々手前江全可相渡筈に候得共、月迫しらべ方致混雜候に付、何百目迄中勘相渡、半銀之分は來春可相渡候事。

一、指扣等之人々は不被返下候事。

一、當十二月跡目・新知・御加增等被下候人々は、來春御藏返米を以可相渡候事。

但、御加增知等被下候人々は、先知に當り候御借知相渡候事。

一、未跡目不被仰付人々は、跡目被仰付候上、御藏返米を以被返下候事。

一、寄親附等與力之分は、當七月以後病死人半納之分は、半納に相當り候御借知相返、本納後病死人は尤當り之通り可相渡候事。

但、與力之分は都而寺社奉行引請書出、代銀も右奉行江相渡候條、受取方之儀寄親等より寺社奉行江承合可申事。

一、五百石以下代銀を以相渡候分、都而越中平均直段を以相渡候に付、來春加越能平均直段を以本勘相極候事。

但、百石に滿不申知行之分は、加州平均を以中勘相渡候事。

一、御切米・御扶持方被下候人々、當年御增米幷御引足米被下候人々、當年之處先祿に相當り候御借米指上置候。且又當三月御下行等受取候以後病死人は、御借米之内三之二指上置候。十一月御下行等受取候以後病死之人々は、當年分全指上置候間、病死月等但書に致し可被指出候。將又當年被召出候人々は、御借米指上不申候間、名前相省、案帳之通調可被指出候。

一、他國居住之人々、幷御儒・醫・隱居之人々も、前條之振合に而可相返候條、夫々相分り候樣可被書出候。

右之趣被得其意、組・支配之人々江不相洩樣被申談、尤同役中傳達可有之候。落着より可有御返候、以上。

十二月十四日　　　御算用場

津田左近右衞門殿

十二月十四日。二ノ丸御殿樂屋多門の造營に從事する大工等濠中に墜落す。

〔政隣記〕
十二月十四日晝頃、二之御丸御造營所御樂屋多門足代損じ落、大工等六人御堀之内江落入候得共、四人は怪我無之。堀川川除町日雇寶屋九兵衞与申者落候上江、足代木等落重り、泥中江押沈め候處、暫形顯不申に付、十分泥水を呑、良有之見付引上候得共、助命無之、右に付爲療治代鳥目五貫文、御造營方役所より與之。淺野町越中屋長右衞門与申者も強く致怪我、但命は可助哉与申事也。依之爲療治代鳥目三貫文、同役所より與之。

十二月十四日、繪師岸越前介に歸京を許す。

〔政隣記〕
十二月十四日、岸越前介儀歸京之御暇被下之候に付、今日御貸家江御使御大小將齋藤甚十郎を以、左之通被下之。

白銀百五十枚　生絹五疋　串海鼠一籠

一、明十五日御目見被仰付候條、五時過二之御丸江罷出候樣申渡。拙者儀も可致登城旨、御用番奧村左京殿より御紙面到來に付、其段申渡。翌十五日越前介儀登城、裏御式臺續御廊下に屛風圍出來、其處に爲溜、檜垣之御間三之間に而御太刀馬代獻上之、（御禮銀は青銅献上之振也。）御目見被仰付、目錄披露、御奏者番岸越前介与唱之。

右相濟、於御次左之通被下之、人見吉左衛門御意之趣演述、御目錄渡之、自分誘引、取合御禮申述。

白銀二十枚　　生絹二端

相公様より左之通被下之、人見吉左衛門一集に演達。

白銀十五枚　　染物三端

附、外に金三十兩爲旅用被下之。

十二月十六日。繪師岸越前介金澤を發して歸京す。

〔政隣記〕

十二月十六日、岸越前介儀今朝發足歸京。依之於御貸屋御料理被下之。挨拶人御臺所懸り與力、給事坊主。

十二月廿九日。金澤城内なる會所小拂所盜賊に侵さる。

〔政隣記〕

十二月廿九日夜會所小拂所江賊入候躰、翌元日朝相知れ、小拂奉行之御大小將水野庄五郎・山田万作、年頭爲御禮御城江罷在候得共、右に付御禮斷之處、夫々申達小拂所に罷越、夫々相しらべ候處、簞笥等之內帳面等散亂し有之候得共、金銀等紛失無之候事。

但、於小拂所金銀並要用之書面等は、毎日役所仕廻候節、御土藏に納之、鎖前下し、鍵は二本有之に付、一本宛兩奉行懷中袋に入置之例格に而、小拂役所に付夜中抔金銀類一圓無之事に候處、不案内成賊与云々。尤御土藏内外共異變無之候事。

十二月廿九日。能役者の座列を改む。

〔政隣記〕

十二月廿九日。諸橋・波吉兩大夫家之二・三男は、京都・江戸等在住之御手役者上列に以前より定り有之に付、當時波吉故宮門二男五郎兵衛儀も、京都御手役者之上列与、先達而若年寄衆御指圖も濟居候處、京都御手役者共より右之列不相當之由、去々年以來再往願出、若年寄衆於御手前僉議中に相成。依之年頭御禮別日に而先濟來候處、今日右五郎兵衛儀江戸・京等御手役者之下列与被仰出候段、翌元日若年寄前田掃部殿被申聞候に付、其旨五郎兵衛等江申渡落着之事。

是歲　楠部屋金五郎等、金澤柳原の非人の爲に小屋を建築す。

〔政隣記〕

金澤犀川々下柳原非人共は、曾而一通り之乞食与申に而も無之、古來より右柳原に居住、小屋數四十二軒、外に惣小屋も有之、妻子老少一軒に八・九人暮し候者も有之、都合人數二百

四・五十人計も居候。尤時々増減は有之。常に男女共草履等を作り口を糊し、其内達者之男は川除方之人足、或は木呂流し等に被雇、又公事場等牢死人等死骸持人足、或は乞食・行倒れ者等埋方抔致し候。于時去年犀川洪水之處、天明年之洪水にも小屋流失不仕候所、何も油斷致し居候處、右等之洪水之節は川上にて流水切れ込み、減水致し來候處、去年は無其儀洪水押來り、皆々不意之驚騷、やう〳〵命助り候族に付、椀・鉢類等僅之品も悉く流失、尤小屋共不殘流失、哀れ千萬之爲躰に候處、大勢之事故可佇所も無之、水落候後河原にこも筵等之類貰集候物を以、三つ俣小屋やう〳〵之事にしつらへ、入居候得共、風雨を凌兼、就中狹き等に而草履等作候事も難成、誰一人世話致し遣す者も無之、老人子供は明暮泣暮し候由及承、楠部屋金五郎橫目肝煎當學等有之、陰德を好む生質也。など何卒救ひ遣し度致工夫居候內、同人心易く致し三十人組菊左衞門与申者、甚慈悲深き生質に付兼而申合置候處、堂形御廐建替り、右古木共商賣人入札に而買受置候旨承出、金五郎江咄候に付、是幸与兩人申談、則商人江懸合利を付買受候約束致し置、夫より陰德之志有之人々、并質屋棟取等へ寄々申勸め、不依多少に施錢等を集め、依之右古木下之方等朽候木は村方之馬小屋等入用に賣拂、其餘之木は水に而洗ひ淨めさせ、勿論材木不足に付材木買足候て、幅三間半餘に長さ二十五間之惣小屋に建、內は四十二圍に分け、尤火之用心等宜き樣に壁に而仕切。且又御郡方等之乞食佇方無之類之者、當分入居候

間も別に二間しつらへ、屋根も板屋に而は年々修覆可難成に付、丈夫なるくず屋葺に致し、大風・大水等にも倒れ不申候樣に、一間々々にしきりに筋違木を穿込、成限建方丈夫に申付、今年迄に多分出來之事。

一、右小屋近邊に、非人幷出所不知之行倒候乞食抔死骸埋候茅原有之候處、年々雨露に晒し見るに不堪爲躰。畢竟寄所無之寃氣亡靈は所謂遊魂爲變与有之如く、時として疫癘流行之祟等可有之道理。雖鳥獸与畜ひ馴候分は塚に築等之習ひ、况や人間之屍無慙成事与金五郞・菊左衞門心付、右小屋入用施錢之餘分も有之候者与心懸、彼茅原之前に小き石塔に而も可建与申合候得共、今年はいまだ出來不申候事。

一、右之通に而、質屋棟取等より、向寄々々を以質屋等へも申勸候處、皆々奇特之企とて、追々施入銀等集り候間、來年は多分右石塔も出來可申躰に候事。

一、越中高岡町年寄横町屋彌三左衞門与申者も聞之、銀子二兩可施入由書越し、密に金二兩致加入、外々江沙汰無之、小屋入用に用ひ呉候樣賴越候。此者常に甚陰德之志深き者之由等、金五郞申聞候事。

一、今年正月十一日夜五時頃、金五郞居宅之戶を敲き候に付、下人立出候處、亭主在宅哉与尋候故、在宅之旨答候處、銀二百目取出し、承候得ば柳原小屋一件御世話に成候由、依而此

銀子有入用之内ゟ加へ呉候樣に而渡候に付、名を尋候處、先々其段亭主ゟ達候樣申候故、家來內ゟ入、則金五郎へ申聞候に付、金五郎承之、どなたに候哉內ゟ御入候樣可申旨申付、則下人其段申通候處、銀子は亭主御受取候哉与申に付、慥に渡候段申候得ば、然上は名前云に不及とて、自身与戶を引立逃行候由家來申に付、金五郎幷其夜咄に來り居候者二・三人、諸共戶外へ走出候得共行方不知、何も不思議与申合候。夜中之儀、其上帽子に而面を包み居候故、家來も一向不見分、今以誰共相知れ不申候由之事。

一、右之外追々施入有之候由之事。

一、右世話取持等致し候人々。

千日町 御長柄小頭 庄村與兵衛　　同　町 津幡屋 宗　兵　衛

六斗林 井筒屋 茂兵衛 此者商人に候得共慈悲心深く、此度小屋建くす屋葺等之儀、利潤も不取甚骨折致世話候由之事。

質屋棟取 八　人

野　町 扇子屋 權右衛門　　本堅町 酒　屋 三郎右衛門

堤　町 淺野屋 次　平　　安江木町 佐賀野屋 平　兵　衛

堀川町 直江屋 權四郎　　袋　町 富津屋 六左衛門

下材木町 田井屋 宗兵衛　　橋場町 紙　屋 清兵衛

右取集方等夫々致世話候。共内にも下材木町田井屋宗兵衞、別而張込致世話候事。

一、右之外最初に繩・こも・筵等爲取候者も多有之候由之事。

一、小屋建候節之大工・日雇等大勢懸り候得共、此者共は賃料取候者に付名前不記候事。

文化七年

正月朔日。前田齊廣金澤に於いて年頭の儀を行ふ。

〔三守御譜〕

正月元日公御裝束御直垂被爲召、長甲斐守・前田伊勢守・本多安房守大紋着用。於御奧書院年頭御禮被爲請、御太刀持御奧小將素袍。此時前田土佐守出仕無。於桐之間鶴之庖丁被仰付、御覽被遊。夫より於御小書院、橫山山城等暨御家老・若年寄御禮被爲請、御大廣間御上段に御着座、人持・頭分獨禮被爲請、相濟、同上之間に御着座、御大小將等一統御禮被爲請。

此時御大小將以上長袴、御馬廻八百石以上長袴着用。本文外御奧小將・御小將等御禮如御例被爲請。今以同樣。二日・三日・四日・六日共夫々御規式あり。今般御造營初て御先規之通と被仰出候に付荒々記。

〔袖裏見聞錄〕

今春諸大夫之面々、五十年來（寶暦八年以後中絶なり。）裝束にて御禮被爲請候付、何れも不案内、進退等茂無覺束可有之と被思召、御前於殿中御禮被仰上候節之御樣子、人見吉左衛門・戸田與一郎を以被仰出、御口傳之趣を以御禮申上。

正月二日。前田齊廣松囃子の儀を行ふ。

〔政隣記〕

正月二日、御禮人六半時揃、御表宜候段御用番より言上、四時前御大廣間へ御半袴被爲召御出。昨朔日御用に而相殘候頭分并御大小將等、且御馬廻組一統列之通並居御禮。其節年寄中を初御緣頰伺公昨日之通。

　但、青銅贄御太刀目錄着座之前に置、御禮申上。末同斷。

右相濟被爲入候節、御通掛り柳之御間往來之間後之方を御屏風にて仕切、御役者竹田權兵衛・寶生彌三郎・諸橋陸之丞・波吉甚次郎・波吉五郎兵衛・竹中甚助・小杉次三郎並居候而、檜垣之御間之方へ被爲入候節御禮。尤獻上物青銅。五郎兵衛は無息に付扇子一箱臺居、各着座之前に置之。年寄中壹人伺公、披露唱御奏者番一人。町奉行・御横目は、矢天井之御間入口御杉戸際喰違之御屏風を後に仕伺公之事。

一、右役者御禮濟被爲入候刻、於御居間書院三之間等に御近習向御禮二切に被爲請、御作法等昨日之通。

〔政隣記〕

正月二日夜御松囃子に付、惣役者八時揃年寄中等を初、罷出候人々七半時過より追々長袴等着用登城。御表宜候段御用番安房守より言上、五時前御大廣間江御熨斗目長袴に而御出、御上段下に御着座。年寄中長袴着用に而、御大廣間上之間御緣頰之方江何も罷出、于時進み寄候樣御意之時、御鋪居際三尺計隔て列居。其儘御前江二獻・鰤御吸物御三方に載せ上之。年寄中幷前田土佐守江も二獻・鰤之御吸物出之。御嶋臺御肴出之、長柄御銚子・同御提も出之。年寄中・土佐守江も御土器被下之候に付、御土器御取被遊候時、座上之大夫權兵衛四海浪之小謠を謠ひ、直に高砂之御囃子始る。右土佐迄は御土器返上被仰付。其節御土器取次若年寄替々相勤之。御家老より若年寄迄御土器被下、返上は不被仰付。御肴は若年寄迄御直に被下之候。畢而長柄御銚子・御提二つ宛御大小將指出之。其砌御前御酒御請、少被召上被指置候を、御前之御銚子役御銚子江移し、右御大小將之指出候御銚子二つに又移之入、御大小將御左右江別れ、一之御間御敷居之内二疊目之下に居る。其時數之御土器、同御肴、御大小將四人二行に持出し、御銚子之際御左右に置之。其時年寄中右御肴之所御左右江一人宛出、御流頂戴人兩人

宛一度に御左右ゟ出候而、御土器を取御酒を請、御前ゟ向頂戴し而飲之、御土器下に置時、御肴年寄中被挾之、手に請戴き懐中へ納め、御酒を加へ飲候而、御土器を持退く。段々右之通に出、半ばに又二御銚子出、最前之御二銚子と替る。其時右二銚子向合、最前之御流酒を移入退く。御囃子之間に而小謡を諷ひ、御規式相濟候時分、猩々之御囃子与一度に相濟、座上之大夫權兵衞拜納之候處ゟ、若年寄前田掃部御目錄持出之、於御前相渡之。頂戴仕時、竹田權兵衞御目錄頂戴難有奉存旨取合言上。御前御吸物等、段々年寄中吸物等も夫々右御目錄頂戴以前に引之。右相濟候而、今晩は天氣も靜に而首尾能相濟候旨御意有之。年寄中座上より御挨拶申上、四時前相濟被爲入候。

但、寶生彌三郎・諸橋陸之丞・波吉甚次郎ゟは白銀二枚宛被下之、御目錄御用所より受取置、於虎之御間に直に渡之。御手役者幷町役者ゟは白銀一枚宛之惣目錄等三通、是又受取置、同心中ゟ渡、同人より名上等之者ゟ渡之。何も御禮受、其旨若年寄中を以申上。且又權兵衞等何も御用無之候哉与、若年寄中を以伺候處、御用無之旨被仰出候由被申聞候に付、何も退出申渡、自分儀も罷歸候事。

右御規式之內、御着座之御間横御緣頰に、御家老役・若年寄幷御近習頭伺公。矢天井之御間に御表小將相詰。御大廣間御緣頰に御小將頭一人・御大小將御番頭・同御横目伺公。御勝手に

は御用人等相詰。御かよひ出口御小將頭一人・同御番頭・御横目・御表小將御番頭・同御横目相詰申候事。

一、御流頂戴之人々は、寺社奉行・御奏者・假奏者・御算用場奉行・定番頭・御馬廻頭・御小將頭・組頭、并町奉行・新番頭・御歩頭・御近習・大組頭・御持方頭・御用人・御留守居物頭・御近習相勤候御先手物頭・御近習相勤候物頭、并學校御用相勤候物頭並以上・物頭并聞番。

一、役者ゟ被下候土器、御流初り候上に而御大小將指出、上座之大夫ゟつぎ、銚子脇に指置之、退き、猩々之囃子方出候時分罷出引之。

一、御流被下候人々、竹之御間二之間等於御勝手列居、二獻・鯣御吸物・御酒・御取肴・卷鯣被下之。御かよひ御大小將長袴着用に而勤之。但御流頂戴之上、又御吸物膳に向列す。御吸物膳引候上退出。尤初而頂戴人は相殘居候而、御用番安房守殿ゟ御禮申述罷歸、再頂戴人は御禮に不及候事。

一、御家老役・若年寄中ゟは御吸物被下候事。

一、御給事人并役者給事迄も長袴着用。右指引之御番頭等は半袴、御緣頰伺公之御番頭・御横目も半袴。

一、御流頂戴人尤長袴、小さ刀帶しながら罷出頂戴之。

一、御表小將役付。御前御吸物三方鈴木治左衞門。御嶋臺中村五兵衞。御押由比勘兵衞。御滴小谷義一郎。御銚子片岡助左衞門。御銚子代扣坂井要人。御加佐藤丈五郎。御肴直坂井要人。數之御土器澤田忠左衞門。御座之間初田忠太郎・葛卷佐六郎。しん切恒川外二郎。附半袴着用勤之、幷御間詰相兼。

正月二日。御禮人等をして新造の二ノ丸御殿を觀覽せしむ。

〔政隣記〕

正月三日、御禮人等今般御造營之御間共拜見之儀、頭・支配人等同道に而不致混雜候樣相心得、爲致拜見候儀勝手次第に仕候樣被仰出候段、御横目中申談各拜見仕候事。

但、昨日之御禮人江は、御横目より御間縮御横目足輕指出置不爲致拜見儀等達御聞候故、右之通昨夜被仰出与云々。

同日五半時御供揃に而、四時前奧之口より御出、寶圓寺・天德寺江御參詣、同刻過御歸殿之上、御表宜段御用番安房守より言上、御大廣間江御半袴被爲召御出。昨二日相殘候御馬廻・定番御馬廻・組外等、町同心・御厩方・火矢方・御歩小頭等、御料理頭・御細工者小頭、寄親附與力列之通、組附幷平士之與力、本組與力、幷當時頭欠之組附與力、御大工頭迄竹之御間に並居、一統御禮被仰付。年寄共・主税伺公、御奏者番披露、定番頭等伺公昨日之通。

右相濟、柳之御間に而昨日役者御禮之節、御通り懸り御作法之通りに而檢校、少離れ金澤・小松・高岡・宮腰・松任・所口町年寄等、御目見被仰付候分、幷御造營懸肝煎幸藏・與右衞門・仁右衞門・伊助・八郎兵衞一代御目見与舊臘廿八日被仰付候分、幷府中町・今石動・氷見・城端・魚津町肝煎、津幡御旅屋守、御通掛御禮被仰付。

但、金澤町肝煎は本町肝煎之內より一人爲惣代罷出。

正月四日。前田治脩の病狀大に漸む。

〔政隣記〕

正月四日、相公樣御所勞御指引就被爲在候、夕七半時過俄之御供揃に而金谷御殿江被爲入、暫被成御座、一先御歸。重而暮六時過被爲入、夜四時前御歸。御供は建切与被仰出。

〔政隣記〕

相公樣就御指引、今月四日より御醫師中晝夜詰切、畑柳泰・宇田川玄眞儀も相詰診被仰付。

翌五日御醫師橫井元亮・內藤宗純・大石慶庵・長甲斐守醫師田中大玄・橫山山城醫師津田隨分齋・本多勘解由醫師三宅良雄・町醫師三ヶ所御用相勤候臼崎玄水江診被仰付。

正月五日。前田治脩の病況稍佳良を見る。

〔政隣記〕

正月五日朝五時頃金谷御殿に御出、四時前御歸。今日者少々相公樣御容躰御宜与云々。然處晝夜又御指引被爲在、八半時頃金谷御殿ゟ御出、暮六半時過御歸。前御供建切与被仰付。

一、明六日年頭御禮被爲請候儀、御延引被仰出。

一、今夜より御年寄衆御兩人宛御詰切、（半日半夜宛御代合。）依之御表向御仕廻之儀、御番組頭水原孫太夫・御横目笠間源太左衛門申談、御年寄衆ゟ御尋申候處、常之通御仕廻可申談旨御指圖有之候事。

但、御年寄衆晝之内は常之通各御詰、八時後より夜半暨早朝等御席無御明、晝夜御詰切之筈に候事。

正月七日。前田治脩卒す。

〔政隣記〕

正月六日相公樣御容躰敢而被爲替候御儀も無御座內、少々御宜御樣子に付、今曉より年寄衆御引取、先御詰切相止。然處御同篇には被爲在候得共、次第に御疲被爲出候に付、今日より又御年寄衆御兩人宛詰切等之儀、昨日記之通。

一、御前今朝四時過金谷御殿ゟ被爲入、無程御歸。重而九時過被爲入、直に今夜御詰切。相公樣今夜四時比後御指引被爲在、翌七日曉甚强御指引被爲在、同日晝八時頃實は御指詰被遊

候与云々。
同夜二之御丸表向御仕廻、常之通四時之事。

前田治脩行狀

〔能州古文書〕

上包に（時次郎樣利有公御眞筆）

春　怨

籬外青々楊柳新。鶯聲花色入西隣。淚痕常濕錦帳下。空立庭前對晩春。

秋日獨座無題

日暮重雲起。冥々細雨來。獨望北庭座。風有鳴蒿萊。

〔太梁公御詠〕

安永九庚子歲十一月十八日戸田與一郎を以拜領被仰付候御作之御詩。

首尾吟

北方封國富春秋。千里由來大隊留。花映金樓充上下。鳥群水殿匝中流。
彈丸發矢蕭川際。用弋飛鷹巖瀨頭。十月可憐晴日暖。北方封國富春秋。
右安永九年庚子十月於越中御泊御鷹之節、御作多有之内一首。

〔太梁公御詠〕

天明六年丙午の年元日朝

國富て萬代經べき春は來てかぜぞゆたかになびく民草

君子之德風也。小人之德草也。草尙之風必偃。　北　藩

〔擢萃錄〕

一、明和五年御養子の御沙汰有し節、金岩嘉太夫・久田忠太夫・神保幸左衛門等各申談、村井又兵衛殿へ存寄之趣申達、數日色々と申合候節、小寺武兵衛其頃いまだ無息にて、前田才記・生駒內膳抔申談書物の會讀いたし、武兵衛頭取にて各申合候て存寄之趣申達す。殊之外功有し。しかれども無息ゆゑ世上知る人なし。一器量有之人にて、後に御馬廻頭相勤候節、同役十一人と不和に相成、其段達御聽候處、太梁院樣御意に、十一人にて一人を服せざる事は、武兵衛方に一理有之故と被思召候よし御意にて、和順いたし候也。

〔袖裏雜記〕

荻野典藥大允、去秋御國へ被爲召、御容躰診察被仰付、御容躰書等三通上之。其一通左に抄出之。文中御前之御行狀等大畧見ゆ。是典藥大允之虛譽にあらず。

去秋は寬政六年

咨　文

元凱以醫藥。私見君公之在便殿。寬仁溫厚。接下假顏色。恭順之心。須臾不離身。殆乎有漢文之風。而易事之君也。既而視近臣之給事。容止可觀。進退可度。手不離席。目不仰視。苟不言。苟不動。正色克勤。罔有慢容。禮法之嚴。臨仰之正。恒如坐於廟堂上而享祭祀承政事也。多士之濟々。各具大臣之體。敬畏之心見于四容。端莊之麗。懦夫將立志。美則美矣。雖然君之在便殿也。君之所休息。而與宗廟朝廷有所異焉者矣。夫便者便利之謂也。君在于此。輒釋朝服。逞顏色。申々如也。容々如也。便利爲事也。故必殺其禮數。抑其儀容。降其志氣。愉々如也。若子之事父。仰奉顏色。以使令焉。見志之所向。先行之。則上下和睦。情誼相通。君苟欲有所問而問焉。臣苟欲有所言則言焉。莫有所忌憚焉。而擇在君之心矣。君如有所好而欲爲之。亡害於政則俾爲之。君如有所欲行而行之。無妨於事則俾行之。百事乃便利。則君之心可怡悅也。故詩曰。嘉樂君子民之父母。謂民亦悅君之悅也。假使爲臣者有少過。失於諸便殿不敢尤矣。苟存敬畏之心。直道以事乎。何有。語曰。禮之用和爲貴。書曰。同寅協恭和衷哉。是之謂也。非余爲取媚諛而出斯言也。今夫君公小心翼々。敬愼質實。毫罔有奢侈之體。常以損抑爲心。雖一言一行有害於國事。不敢爲焉。後宮無專寵。女謁不行。仁孝聞於天下。是以頃年有勤勞之疾。神氣不和。抑鬱不豫。至于使小官診之。雖內藥而爲之。外不扶之以道。而希其病之瘳。譬猶惡熱而添薪也。所謂道者用和也。昵近者與執匕劑者。非同心看護。難輒

爲功也。經曰。標本不得其病不服。是之謂也。此以係治術。不得已而言而已。非爲取媚而言也。請詳焉。

典藥大允　源元凱草

〔太梁院樣御墓誌幷銘附考案〕

加賀能登越中國主參議正四位下。行左近衞權中將兼肥前守菅原朝臣治脩卿之墓。

加賀能登越中國主參議正四位下。行左近衞權中將兼肥前守菅原朝臣諱治脩。初利有。字愼甫。號郁郁齋。又號恒嶽。護國院之季子。母園田氏。延享二年正月四日生。幼領越中古國府勝興寺之寺務。先朝以多病之故。請傳位于公。明和八年四月廿三日入卽位于征夷府。六月廿五日公方賜御名之字。更名治脩。叙正四位下行左近衞權少將兼加賀守。安永元年十二月十八日轉權中將。寛政四年十二月十五日任參議。權中將如故。享和二年三月九日傳位于今朝。改兼肥前守。文化七年正月九日薨于西城金谷。葬于石川郡野田山宗兆之域。春秋六十六。夫人前田氏。大聖寺侯利道女。晩有子。曰利命。宮人武村氏所生也。

今朝養爲嗣。幼卒。諡曰香隆院。先朝之子公養其二子二女爲子。長曰齊敬。正四位下行左近衞權少將兼佐渡守。不立而卒。諡曰觀樹院。次乃爲今朝。女一適會津侯世子源容詮。一適高松侯源賴儀。公在位三十一年。居方岳之極。懼臣民之心。薄一身之奉。爲邦家之先。政從寛

厚。
朝無倖進。中[illegible]無閒。居常曰。我爲先朝守宗社。覗傳位于今朝。以爲復辟。至若創興學校。
廣康濟之路。振士風復民業。自
國初所未曾有也。天性至孝仁惠。寡慾恭儉。則祖宗之訓。遜讓有過如徵商周之際。侔廟宗
矣。

銘曰

否德固號。允若亦高。文思遠逃。重華屢勞。
霜寒透德。枯草生脊。息姑不遭。牛氏僅操。
杳冀方豪。云仰彼陶。

明倫堂助教臣大島維直謹撰

［太梁院樣墓誌并銘考案］

菅原朝臣御諱。

臣謹て按じ候處、御諱の上に御氏號を書し申候こと常の例に御座候へ共、梅御居宅の御事を紀し候へば、其體事宜に嫌ひあること無きにも非ず候。春秋婉曲以示大順と云ふ例に傚ひ候て之を書し不申候。且菅原朝臣と書し候へば、姓氏倶に具り申ことに御座候。或は分支の系

明かならずなど申す説も候はん歟。皇朝の初より北方に於て大國を有ち候菅家はこれなく候へば、紛るべくも無きことに御座候。呂尙齊國に封じられ候其後の史書、齊の姓を紀して姜を以し候へども、呂を以し候は之なく候。されど齊國呂氏の後たること知らざる者なき如く、御家の御氏號千萬歲の後に至り候とて隱るべき樣の有べく候や。又號の御事は、大坂の御時豐臣の姓を諸侯に賜り候ごとく、一時之を親近するの義に候へば、漢に劉敬、唐に李績に姓を賜りし如く、此によりて御氏號改り候御事にてはこれなく候へば、書し申さゞるところ勿論に御座候。

領勝興寺之寺務。

臣謹て按じ候處、此御住職の事、彼門中に私して、當住は先朝の御養子にて、先朝は當住の御父なりと妄りに申唱へ候と聞え申候。言語道斷の至りに御座候。先朝此寺務を領せられ候御事は、將軍義昭公の南都一乘院の門主たる同然の事にして、假令ば親王にして職掌有らせられ、法親王の聖護院寬永寺を領せられ候如くたるべく候。親王の寺務、先御門主より嗣法相承の儀これあり候とも、元と其事宜に從ひ候のみの御事にして、一旦入て帝位に卽せられ候御事はこれあり候とき、如何ぞ之を私して、今上は本寺の先住又は師父法弟なりなど申し得ることは成るべく候や。此等の事は、君治の事に御座候あひだ、大義を明かに示して之を書

し申候。名正からざれば事亂るゝにて候。右の如くに彼門中に唱へ成し候故に、此般御葬禮行はせられ候御棺前燒香の次第、勝興寺願ひを立て導師の次に在て香を上り候など申候。いかゞ御座候や。（世俗棺前燒香の次第、導師に次て了たる者香を焚き申候。）孔子必ず名を正うせんと仰せ候も、衞國の君父子の名分紊るゝ故に御座候。然るを高弟子路の如き猶迂なることゝ心得申候。通明ならずしては、名實の義左までも無きことに存候。是非に及ばぬ事どもに候。

征夷府。

古へは鎭守府・太宰府の如きは、其將帥の治を置し所を申候。總て將軍の府は、其官號を以て稱し申すことに御座候。江戸を稱して此號を以し候ことは、已に先輩の言に御座候あひだ、これに從ひ申候。

居方岳之極。擢臣民之心。

此れ先朝此高極に在らせられ、三十餘年一日の如く、業業兢兢として御心を危うせられ、御家中より下々までの心にも厘せられ、御社稷を善く保たせ候御事を申候。方岳は堯の時の四岳、周の西伯、偕に諸侯を總べて長たるの號に御座候あひだ、これに據て文を採り申候。御家を稱して如此仕り候こと、從る所のこれ有候にては御座なく候へ共、事に由て義を取候ときは、所謂雖不中不遠矣とも申べく候歟。

薄一身之奉。爲邦家之先。

菲飲食而致孝乎鬼神。惡衣服而致美乎黻冕。卑宮室而盡力乎溝洫。とは禹王を稱して孔子の仰せ言に候。漢の文帝を宮室苑囿。車騎服從。無所增益。身衣弋綈。所幸愼夫人。衣不曳地。帷帳無文繡。以示敦朴。爲天下先。とは本紀に贊したる所にて候。先朝浣濯の御衣を召し御膳兼味を上らず。他は何事も御嗜好の事あらせ給はず。質素を示して四民を御先導あらせ候こと、彼二君に視て稱し奉り候とも、孰れか後れさせ給ふと申すべく候や。

政從寬厚。

後漢書に章帝の長者なるを論じて、厭明帝苛切。事從寬厚。と申す所の文に取てこれを叙し申候。先朝寬厚の御政績、四民の耳目に留り申す處に御座候へば、敢て煩言仕らず候。

朝無倖進。中冓無聞。

此二句は内外の御治を申候。漢の文帝・唐の太宗は三代以後の君にてわたらせ候へ共、猶此二事に於ては免れさせ給はぬ御事に候。先朝の御時勤勞有て御取立の者共、一も興情に厭足仕るばかりに至り候はで、私幸に出候はこれなく候。宮闈嚴整にして紀律分明に候をば、古へに稱して閨門如朝と申候。先朝此際に於ては何事のおはしますことも聞えさせ給ふ御事の候はず。一に穩便の御事どもに候。上天之載。無聲無臭。と詩人の贊し候は、此等の境より

こそ申も仕候はん歟。邈の代にも超させられ、至極の御事に有らせ候ほどに、詩人の意に傚ひ候て無間の二字を以てこれを稱し奉り候。

居常因より爲復辟に至る。

御意の趣は人々拜聽仕る處に御座候。復辟は伊尹より起り候事にて、政を君に還すを申候。後世これを成語と仕り、人君御父子の際に於て申たるも御座候。今此語を假借仕り之を叙し候もいは、先朝至誠微妙の極處、髣髴たるをも觀るかと申ばかりに御座候。

創興學校より未曾有也に至る。

此一段は御功業を紀し申候。士風を起させ候には、最も御骨折らせられ、愛物の心を以先とせられ候故に、事察察にわたらせ給はず。故に物情動かずして、習俗化に趣き、書を誦み物の恥をも知り候ことには易り申候。従來困窮の諸郡、始めて賑恤の令を出され、石川郡より事始めとして三州に及び、各其業に安堵させられ候。これを號けて御仕立村と申候。又新川郡今井新村百數十年失ひ來り候故業に復し、及び津幡・箱野荷物改所を始として、下民疾苦する所の深害固弊數十條を除かれ候御事ども、一つ／＼には著し申さず候ほどに、廣の字を以て之を包ね申候。別國の君にも學校を興し井田を修め、一時の耳目を喜ばし候ごとき新政はこれ有候へ共、一處も事の調はせ候は之なく、躬親らも頓て怠廢なされ候。臣が經歷仕り候

陸奥・出羽・越後の間にも、所々見聞仕る處に御座候。先朝學校を御草創なされ候へば、金谷御舞臺の舊材を以て纔かに講堂を營まれ、天明中御調度逼迫の御時、諸士の內より寸志を表し金銀上り候ことの御座候に、奇特の事に思召し、常の御料には成さるべからず、御用立ち申處あるべきとて、終に愛本新川水の大畀を起され候。先朝の事業、其機隱昧にして功績顯赫たること、皆此類ひに御座候。誠に絕代の御事にこそ奉存候。

天性より末句に至る。

此段は御德性を敍して、稱讚してこれを結び申候。諸宗は殷の中宗・高宗祖甲及び周の宣王を申候。偕に中興の君にて在らせ候。臣今萬死を抱いて先朝の天德を議して如此贊し奉り候こと、班固が宣帝の功業を論じて此諸宗に比し、中興を稱し候に視候へば、差等いかんと奉存候。

銘。

第一の句は先朝の御至誠を擬し、第二の句は泰雲院樣御質慤の高妙を擬し、第三の句は先朝御退休の後遠く清閑を樂まれ候御風蹤を擬し、第四の句は御前百務の御事總て御定裁を願はせ候御至誠を擬し申候。先朝御承統の御大事、大孝大義と與に、觀奉るべき樣これ無く候あひだ、恐れながら三朝の御上に及びてこれを明かし申候。第五・第六の句は事を敍し申候。

寛政三年八月廿日新川郡大風にて、百姓共家吹潰れ、樹下或土手陰に指掛いたし歳を明かし申候。其節の御事にて、或る寒夜に夜半ばかりに御外縁に御久座あらせられ、霜露に御衣を浸され、寒氣を尊體に透させられ候て、今夜は殊に寒くあらせ候、彼の風災を受け候者共は何と仕り居候と御意なされ候。これを窮民共三十里外に傳承仕り、蘇生仕り候心を生じ、各聲を立て泣申候事を、小民は草に比して申候故に、枯草生膏とは仕候。第七・第八の句は、御位を受授あらせられ、始終善道を盡され候御事を申候。息姑は魯の隱公の名、不遭は不幸と云ふ如く、牛氏は晉の元帝を指て申候。末の兩句は五子之歌の惟彼陶唐有此冀方と云ふ語を假り、北方の州を有たせ候に因て、帝堯に視て稱贊し奉り候。冀は北方の州にて、陶は堯の都の名に御座候。

右撰述の考案上之申候。

先朝欽文恭儉の御德、臣が愚陋淺劣の固より窺ひ測り奉る處にござ無く候ところ、敢て鄙言を賛し候こと、萬死の罪遁るゝ所を知らず候。特に入て大統を承させられ候御事は、御家の大義に御座候ところ、事を紀するのみにて御座候こと、尊靈には適はせ給ふべき御事と存じ奉らず、誠恐誠惶仕候。然うして大寶受授の御事は、異朝にも天子諸侯數多これあり候へども、唐虞の禮讓と革命の受禪は置て論せず。其他或は善意あつて禍を得、(魯の隱公。宋の太祖。)或は傳へ

て後內難起り、（趙の武靈王。北魏の獻文皇帝。）或は强ひてこれを受（唐の肅宗皇帝。）るの類ひにして、事を終始なされ候ものは、僅に東晉の元帝のみに御座候。元帝晉室內難の際に在て、恭儉退讓を以奇禍を免れ、愍帝胡虜に蒙塵せられ、司馬氏殆んど覆亡に及び候とき、帝宣傳して大寶を託せられ候へども、讓つて受け給はず。諸王羣僚宗社の爲に固請するに因て、止むことを得ず晉王の位に即て萬機を攝せられ、後愍帝の崩問至り候て始めて帝位に登り、遂に中興を成され候。又南宋の孝宗皇帝の如き、先朝に親奉り候ごとく、三朝受授の君にて渡らせ候ところ、位を傳へられ候は不肖の君に御座候。三朝受授の事、堯舜禹の後例し無きことに御座候ところ、孝宗已にかくの如くに候へば、上下四千年の間事の至極を盡され候は、唯り御家にのみ御座候。然れば則ち御前無疆景福は申すに及ばず、上宗廟在天之靈に於ても、御滿足に有らせ候べく、誠に有り難き御時節にぞ存じ奉り候。誠恐誠惶謹言。

文化七年春二月　　大島維直　謹上

正月七日。諸士に命じ登城して前田治脩の機嫌を奉伺せしむ。

〔政隣記〕

七日七時頃、左之通急御廻文到來。

猶以病氣之人に者、御用番宅ゟ以使者可被申越候、以上。

相公樣御滯御指引被爲在候條、各追付登城可被相伺御機嫌候、以上。

正月七日　　本多安房守

岩田傳左衛門殿

津田左近右衛門殿

右に付追付登城、於表御式臺伺御機嫌之御帳に附、退出。

但、當日之服に付熨斗目・上下着用登城之事。

附、右伺御機嫌之登城者頭分以上之事。

右御樣子に付、江戶表大御前樣ゟ爲御案內、二之御丸御表小將神田忠太郎ゟ早打御使被仰付、今夜四半時頃發出之事。

一、火之元尙更嚴重相心得候樣被仰出候段、於御橫目所諸席之人々ゟ申談有之候事。

同夜御表向御仕廻、當之通四時之事。

正月八日。再び諸士に命じて前田治脩の病狀を奉伺せしむ。

〔政隣記〕

正月八日八半時比、左之通急御廻狀到來。

猶以病氣等に而難罷出人々者、其段名之下に可被書記候、以上。

相公様御氣色御指重被遊候間、追付各登城可被相伺御機嫌、幼少・病氣等之人々者御用番宅ゟ以使者可被申越候、以上。

正月八日　　本多安房守

岩田傳左衛門殿

津田左近右衛門殿

右に付追付登城、於表御式臺伺御機嫌之御帳に附、退出。但頭分以上登城之事。組・支配ゟ爲承知夫々より申觸。

一、相公様御氣色御指重に付、別而町中火之元之儀嚴重被申付、夜中一時番指出可申旨、町中ゟ早速可被申渡旨、町同心御用先竹村三郎兵衛ゟ以書面申達候事。

一、同斷に付富山・大聖寺より御醫師一人充被爲召候間、於宿之儀申付置、夫々不指支様可相心得旨、御用番安房守殿より以御紙面被仰渡候に付、其段竹村ゟ申談候事。

一、同斷に付公儀ゟ御屆、幷御醫師爲御願江戶表ゟ之早打御使、御大小將神田才次郎ゟ被仰渡、今夕七半時過發出。

一、今夜御表向御仕廻之儀、泊番組頭河内山久太夫・御横目笠間源太左衛門申談、御席ゟ罷越御尋申候處、常之通可申談旨、伊勢守殿就御指圖、常之通四つ打御仕廻申談候事。

正月九日。前田治脩の喪を發す。

〔政隣記〕

正月九日相公樣御容躰御大切に付、江戸表ゟ之早打御使御大小將吉田直九郎ゟ被仰渡、今夕八時前發出。

相公樣御氣滯不被爲叶御療養、今日辰ノ中刻就御逝去に、江戸表ゟ之早打御使、二之御丸御近習御使番小林豬太郎、幷副使御馬廻組山本石之助（長瀨五郎右衛門組）ゟ被仰渡、今夜六半時過發出。

一、此度者天德院に而御葬式等有之候儀、御當りに候得共、思召を以寶圓寺に而御葬式等可被仰付旨被仰出。

一、御葬式等泰雲院樣御例を以相しらべ、夫々可書出旨、御葬式等御奉行奥村左京殿諸向ゟ被仰渡。

〔政隣記〕

九日七時前、左之通急御廻文到來。

猶以病氣に而雖罷出人々者、其段名之下に可被書記候。將又別紙之趣も可被得其意候、以上。

相公樣御氣色不被爲叶御療養、今九日御逝去被遊候。此儀可申聞候條、各追付可有登城候、以上。

正月九日　　　　　　　　　　本多安房守

岩田傳左衛門殿

津田左近右衛門殿

覺

一、普請・鳴物幷高聲等遠慮之事。

一、諸殺生無用之事。

一、御家中さかやき可爲遠慮候。又者は其儀に及申間敷候事。

一、不及申候得共、此節之儀に候條、火之元之儀別而入念可申事。

右之趣被得其意、組・支配之人々江可被申聞候。組等之內裁許有之面々者、是又夫々申聞候樣可被申渡候。日數之儀者追而可申達候事。

正月九日　　　　　　　　　　本多安房守

右に付町同心・火矢方等十五向江觸出之儀申渡、追付七時過登城候處、及暮於表御式臺御帳に附、夜九時過人持・頭分竹之御間列居（昨七日之通）之處、御年寄衆御出座に而、安房守殿左之通御演述。畢而一統退出之事。

相公樣御氣色不被爲叶御療養、今九日辰ノ中刻御逝去被遊候。此段申聞候。

右之趣組・支配之人々江も夫々可被申聞候事。

正月九日

右御覺書人持筆頭・定番頭筆頭江一通宛御渡、并竹之御間四之間も右寫御横目所より出有之、人々披見等致し退出。

右支配人中江夫々觸出候事。

付札、町奉行江

一、普請・鳴物并高聲等遠慮之事。

一、諸殺生無用之事。

一、御家中さかやき可爲遠慮候。又者は及其儀に申間敷候事。

一、不及申候得共、此砌之儀に候條、火之元之儀別而入念可申事。

一、町中見せに簾おろさせ可被申候。肴商賣仕もの指留可被申候事。

右日數者追而可申聞候事。

右安房守殿御渡に付、町中江急速可被申觸旨、御用先同心竹村三郎兵衛江申渡候事。

覺

一、今般御凶事に付而、頭分以上爲伺御機嫌、明十日五時可有登城候。幼少・病氣等之人々

者、御用番宅江以使者可被申越候。且今日登城無之人々江者、演述之趣夫々向寄可有傳達候事。

一、平士者御機嫌相伺候におよひ不申候事。

一、御先祖様方御忌日御寺へ參詣、且又自分先祖之寺江參詣之儀も當分指扣可申事。

一、頭分以上之人々者、此例之儀に候間、居屋敷之大門をたて小門より出入、小門無之者は大門をたてゝ寄置候而可然候。年寄中も右之通に候事。

右之趣夫々可被申談候事。

正月　　　　本多安房守

御横目中

〔御觸留〕

覺

一、今般御家中普請、御三十五日過候はゞ不苦候事。

一、諸殺生・鳴物五十日過候はゞ不苦候事。

一、鐵炮稽古之儀も、五十日過候はゞ不苦候事。

一、御家中精進五十日たるべき事。

一、年寄中且又御近習相勤候人々月代五十日、其外は御三十五日過候はゞ月代剃可申候事。

一、頭分以上之人々居屋敷之大門をたて候儀、御葬式相濟候翌日より可爲常之通候事。

正月十一日

正月十五日。前田治脩の病を問ふ爲夫人より使者を發す。

〔金龍公記史料〕

太夫人問太公病急使加藤亥右衞門。十五日發江戶。廿一日至金澤。醫佐々正益共焉。

江戶邸急使土屋彌四郞。十五日發。廿一日至。夫人急使神戶嘉平亦同至。

正月十六日。前田治脩夫人再び使者を發す。

〔金龍公記史料〕

太夫人聞太公病革。發急使毛利猪右衞門候之。以十六日發。廿二日至。

正月十六日。前田治脩中陰法會に大赦及び施行を行ふべきことを告ぐ。

〔政隣記〕

正月十六日御用番岩田御呼出、左之御覺書左京殿御渡之に付、しらべ之儀町下代江申渡、豎

同心江も爲承知披見談有之。

付札、町奉行江

太梁院様御中陰御法事御執行に付、非常之大赦被仰付候條可有其心得候事。

正　月

付札、町奉行江

太梁院様御中陰御法事御執行に付、於玉泉寺御施行米被下候者、若過ち人等有之節之ため、非人小屋江罷出候本道・外科一人宛罷出候様可被申渡候事。

正　月

右左京殿御渡に付、前日白井宗碩・白崎玄水、後日白井宗碩・高澤仙立罷出候段、岩田氏より左京殿江紙面達有之。

正月十七日。徳川家齊、前田治脩の病を問ふ爲奉書を下し及び醫師を派遣す。

〔三守御譜〕

正月十七日老中奉書を以て御尋問あり。且御使番日根野織部をして御尋、御肴鯛粕漬を賜ふ。御醫師河野良意來らんとす。十七日江戸を發し、廿日落合新町にて薨ぜられしことを聞歸府。

日野根のことは十八日に係る

〔金龍公記史料〕

正月十七日幕府許遣醫之請。發奥醫河野良以。自新町歸。

正月十八日。德川家齊使者を遣はして前田治脩の病を問はしむ。

〔續德川實紀〕

正月十八日、松平加賀守父肥前守病により、糟漬鯛魚一桶を金澤におくらせらる。使番日根野織部、御使の事命ぜらる。

前文と日附を異にす

〔金龍公記史料〕

正月十八日大將軍問太公疾。遣使番日根野織部。貽粕漬鯛之報出。至倉ケ野歸。

正月十九日。前田治脩夫人弔使を江戸より發す。

〔金龍公記史料〕

太夫人弔使廣式番青山主鈴。以十九日發江戸。廿六日至。

正月廿一日。前田治脩夫人落飾す。

〔齊廣樣御傳峯等之内書拔〕

正月廿一日、大御前樣御飾りをはらかれ、法梁院樣与御名御改被遊候段被仰出。

正月廿二日、徳川家齊、前田治脩の卒去を弔して香典を賜る。

〔政隣記〕

今月廿二日江戸御上邸江、上使御奏者番本多豐前守殿を以被蒙上意、御香奠白銀五十枚御拜領。御名代織田大學殿御作法前々之通。

同日御樣中御尋之御奉書渡り、二月二日夕金澤江到着。

〔續德川實紀〕

正月廿二日、松平肥前守うせしかば、その子加賀守のもとに、奏者番本多豐前守御使して、香銀五十枚をおくらせらる。

正月廿二日。先に德川家齊の發せしめたる奉書金澤に達す。

〔政隣記〕

正月廿二日暮六時頃、相公樣就御指重に、御尋之宿次御奉書十七日相渡、同日發到着之處、就御逝去に御返上之早打御使、御馬廻組前波瀨八郎同夜四時過發出。

〔金龍公記史料〕

大將軍問太公疾奉書。廿二日至金澤。以太公既薨。發使前波瀨八郎返之。更請留之。

正月廿六日。宇田川玄眞・畑柳泰に暇を賜ふ。

〔政隣記〕

正月廿六日、松平越後守殿御醫師宇田川玄眞御賄被下、近々罷歸候に付、今日御使御大小將杉山又吉を以、白銀二百枚・染物十端被下之。

但、別段御内々金百兩被下之。附、二月六日發足罷歸候事。

同日畑柳泰御暇被下、近々發歸京に付、今日御使御使番岡田德三郎を以白銀百五十枚・染物十端被下之。

但、別段御内々金百兩被下之。附、柳泰願書之内金小判九十兩御開御渡。

二月五日。前田治脩の葬儀を寶圓寺に行ふ。

〔政隣記〕

太梁院樣御葬式之節御作法附、

御尊骸御供宜候段御葬送掛り迄申達候はゞ、御出棺之節御見立被遊、左京儀は奥之口御式臺續板に伺公御見立仕。御供安房守儀、御出棺之御樣子承り、御先に立場迄罷出候。御出棺以後御前金谷より御出、七十間御門通御先に被爲入、左之廻廊より御裝束之間に被爲入、御棺大音帶刀前に被爲入候附人參候而、玄關迄御出向。御葬式奉行山門之内迄御迎に罷出、外年寄中・主税・御家老中は、惣門之内右之方に御迎に罷出。寺社奉行初諸頭・御横目・御作事奉行

等繪圖之通罷出、御棺被爲入候而、御葬式奉行御先立仕玄關迄爲入候事。御前には御裝束之間江被爲入、夫より御棺龕前堂御棺臺に被爲入、御葬式奉行幷外年寄中等、式臺之上御右之方に伺公。寺社奉行は其後ろ之方に列居。且又淡路守様・備後守様御代香之御使者、年寄中等相詰候次に引離可致列居候事。

一、御巡堂御供之年寄中・御家老中は、階上右庫裏之方を上座にして列居、宜時分右之方廻廊より中場江相廻り、御供相勤可申事。

一、大御前様初御代香相勤候面々、玄關右之方に罷在可申候。將又諸頭・御横目も庫裏之方に列居之事。

一、御巡堂御供人は、色着用、萬字當て可申候。尤刀を帶し、徒跣に而御供可仕候事。

一、御前御用之萬字も、御寺に而用意仕置可申事。

一、御表小將は、龕前堂に而御棺之兩脇に相扣、御巡堂之御供可相勤候事。

一、右之外御供之人々は、御火屋兩脇に扣、右御供可仕候事。

一、御巡堂之節、中場左之方に御葬式奉行外年寄中・主税・御家老・若年寄相詰、寺社奉行は又其次に相詰可申候。大御前様始御代香之御使者は、年寄中等列居之後ろに相詰、淡路守様・備後守様御使者は其次引離列居、諸頭・御横目は中場右之方列居之事。

但、御火屋之方上に仕各列居に候。
一、御前堂に而式相濟御巡堂之節、御前御座之間御簾之所より被遊御出、御天蓋之跡に被爲附、暫御供被遊、關屋中務等內御太刀持等御供仕、假御溜江被爲入、御巡堂相濟御棺臺に被爲入。式相濟候而御葬式奉行より御案內申上御燒香。夫より大御前樣を初御代香、御附等之頭々相勤可申候事。
但、夫々御代香之儀、寺社奉行より御附之人々江可申達候。
一、淡路守樣初御使者御代香可相勤候事。
但、御使者詰方等之儀は、都而御奏者番指引可仕候。
一、御葬式に付天德院等誦經可有之事。
一、右相濟、御裝束之間江被爲入、御直垂等被遊御直、左之廻廊より山門御出、桃雲寺迄御先江被爲入候事。
一、御棺山門御出之節、御葬式奉行幷外年寄中・主稅・御家老中等、幷寺社奉行等、諸頭・御横目・御作事奉行等、繪圖之通惣門外右之方江罷出蹲踞可仕事。
一、御葬式奉行幷寺社奉行を初、御廟所江御用有之人々は、御先江可罷越候。
一、御棺祇陀寺邊江被爲入候附人參候而、桃雲寺より御出、大應院樣御墓横之道橋に而御下

乘、御葬式奉行若年寄香隆院様御墓前江罷出伺公。夫より御溜江被爲入、御棺大應院様御墓横之道橋迄被爲入候而、御葬式奉行香隆院様御墓前江罷出御待受仕、御前には御棺右橋之邊江被爲入候を被爲御開、太梁院様御霊際江御出向御待受被遊。其節若年寄御先立仕、御棺御火屋江被爲入、式相濟、御棺御納り之上御忌鷹揃罷出、和尚讀經相濟放之。其節若年寄勘解由見屆。夫より御葬馬牽出、和尚誦文相濟牽退。御天蓋御塚穴之上暫釣有之、追付燒所江可遣候事。

一、右相濟、御葬式奉行より御先立若年寄迄申上、御前御見屆之上被遊御燒香、御葬式奉行御供之年寄中等伺公。御溜江被爲入、大御前様初御代香年寄中初寺社奉行、且又頭之人々有之候得ば御近習頭迄拜相濟、御石蓋仕候を御葬式奉行見屆、其段御先立若年寄を以申上、御前被遊御見屆被遊御燒香。夫より御戻、年寄中等追々退出。御葬式奉行は始終見屆、御火屋之内御葬式奉行且又御作事奉行罷出、御穴半分計埋立候節、晩景に相成候得ば、御作事奉行より御葬式奉行江申達相仕廻、御作事奉行・同斷御横目相對に而御柵鎖おろし、御葬式奉行・御横目見屆退出仕候。日高に候得ば不殘埋立候迄罷在候事。

以上

御出棺之節、御居間より奥之口御式臺迄之儀、勝尾半左衛門等萬事取捌、右人々初御近習之

行列附略す

面々御式臺迄御見送可仕候事。
一、御出棺前後御供人等大勢罷出候儀に候間、惣御縮方御横目諸事指引可仕事。
一、右之外指懸り候儀は、勝尾半左衛門等及指圖可申候事。
一、役者之分金谷御門外明屋敷之邊に集置、歩御供之面々乘馬等込合不申樣、御横目足輕制止置、御棺御行列押出次第見計、夫々繰出可申事。
一、金谷御門火役、與力幷足輕兩人・小者兩人罷出、御用相勤候事。
但、與力服之儀服紗小袖・布上下着用、尤足輕も上下着用之事。
一、雨天に候はゞ、年寄中・御家老中も長柄傘用可申事。
一、下馬縮物頭は番所前に罷出蹲踞之事。
一、御先乘等年寄中從者を初、惣而又者之分は、寶圓寺下馬邊に指置候而は可致混雜候間、町之内に指扣置、御行列之順に隨ひ、夫々込合不申、繰出方押横目指圖に隨ひ可申事。
一、備後守樣・淡路守樣御使者有之候はゞ、取次御小將罷出、御使者之間に致誘引置、御奏者番に相達、御奏者番罷出御口上承り候事。
右二月二日、御葬式等御奉行左京殿御渡被成候間、御横目所へ罷出披見可致旨、飯田外記等より申來候に付、同役御用番岩田氏登城、且末に有之御行列附も同斷之事。

二月四日夜より、於寶圓寺御佛殿番、左之通但隔日勤番。

定番御馬廻

不破勝左衛門　水野五十郎　廣瀨五郎兵衛　大村壯助

組外より坂倉・長屋組

佐藤助左衛門　原　玄之助　岡田權五郎

同　斷　神保・山崎組

有澤與八郎　笠間半五郎　奥村求馬

同　斷　大田・大脇組

中村七左衛門　横地勘左衛門　竹田七郎左衛門

同　斷　本保・眞田組

森　勝十郎　堀部孫三　多胡小三郎

［政隣記］

覺

一、御葬送御供揃、當四日夜四つ半時之事。

一、御葬送之節御供之人々、御歩以上者くゝり股立・わらんじ之事。

一、御寺より野田迄御供之人々、一統わらんじ・かうかけ之事。
一、金谷御殿より御寺幷野田迄御供之人々、新番以上自分白張手傘、幷家來之合羽・笠籠等爲持不申人々は、割場ゟ取集御行列跡より爲持罷越筈に候。尤才領足輕に爲御渡可有之候。御寺より野田迄相增御供之人々は、どゞめ木橋より手前足輕町之內右之通詰方、是又御行列外に野田迄爲持罷越筈に候。尤交名付札に而、當四日夕方割場迄御差出可有之候。野田ゟ御供相增候面々者、御供揃之節右どゞめ木橋邊に而受取申筈に候間、其節爲御渡可有之候。右之趣割場ゟ申談置候。
但、金谷より野田迄直々御供之面々、且又御寺迄御供之面々、其分御申達、右才領ゟ爲御渡可有之候。御寺より罷歸候面々者、右之所に而請取候品相返申筈に候事。
一、金谷御殿より御寺迄御供に罷越候人々者、御棺山門之內ゟ被爲入候者、蹲踞之所より直々御供爲引可有之候事。
一、野田迄御供之面々者、御棺御火屋ゟ被爲入、寶圓寺和尙退去次第、下々迄作法宜御供引可申候事。
一、御醫師・外科等桃雲寺に相詰罷在候間、是又御承知可有之候事。
一、惣而御供之人々從者等殘所之儀、御步橫目・御橫目足輕等指圖之通相心得可申候事。

一、石川・河北御門・七十間御長屋御門、金谷御門、御供揃之節指支不申候間、左様御心得可有之事。

右之通夫々可申談旨、御葬式等御奉行左京殿被仰聞候條、御承知被成、御同役御傳達、御組・御支配御申談可被成候。且又御組等之内裁許有之面々者、其支配ゟも相達候樣御申談可被成候、以上。

二月朔日

飯田外記

嚢輪知太夫

岩田傳左衛門様

〔政隣記〕

二月五日、前記之通に付、予上刻出宅二之御丸ゟ相揃候處、同刻過金谷御殿御横目中申談に付、追付七十間御門之内松坂口橋より少し金谷御門之方御堀を後に致し、定番頭より御細工奉行迄一列に罷在候處、曉七半時少し前就御通棺に蹲踞。夫より直々爲御見送十一屋端ゟ罷出候に付、中宿禪刹祇陀寺ゟ兼而申談置罷越居候處、九時過才川大橋ゟ被爲入候由に付、同寺門向客地ゟ出居候處、八時前就御通棺蹲踞。但下之方に罷在、後ろに引離爲使役召連候町附足輕兩人、其後に自分家來共指置、馬者場所狹候に付祇陀寺門内ゟ入置。且自分より上之

方二間計引離、町同心竹村三郎兵衛・淸水鄕右衛門も可罷出處、煩引に付不罷出、其段今日從岩田氏左京殿江達置有之。佐久間五郎八・木村左助者御道筋爲縮御行列跡に引離罷越、此所より退散。又引離道橋方與力一人罷越蹲踞。將又自分裝束熨斗目・布上下着用、尤家來常服、使役足輕合紋羽織着用之事。

一、寶圓寺江朝六時頃御着棺、四時頃同寺御發棺、八時過野田御着棺、御作法書之通無御滯被爲濟。

中將樣六時過御還城、御葬式御奉行等諸御役人六時頃退散之事。

但、依役向夜四半時過迄に追々退散之事。

二月七日。前田治脩の中陰法會前日なるを以て寶圓寺の見分を行ふ。

〔政隣記〕

二月七日

一、今日寶圓寺に而御中陰御法事惣見分遲く相濟候譯は、當五日御葬式之節、古國府勝興寺儀格別之御由緒有之趣を以、諷經に被罷出候處、一向宗に付淸僧に而無之候間、椅子に被掛候儀難相成旨、役僧座見共申募候得共、格別成御由緒を以諷經に被出候事に候間、椅子可指出旨御葬式奉行等僉議之上、寺社奉行より附、御由緒与申儀、先年勝興寺被遊御住職候御意味を以、是迄勝興寺諷經に被出候例無之候得共、格別之趣を以被出候由云々。

申談候處、御由緒之譯合に候はゞ、淡路守樣等之次に可被列筈抔与彼是不致會得候得共、やう〳〵格別之趣に而椅子出候筈に相極候處、御葬式之節勝興寺中場ゟ被出候處椅子無之。右等之趣に付、座見三人指扣相窺、自分に指扣罷在候に付、今日彼是混雜之趣有之、惣見分遲く相濟候事。

但、座見共指扣相伺候處、御法事中之儀に候間不及其儀に候。追而可被遂御僉議旨被仰出之趣申渡有之。翌八日より出勤御法事御用相勤。

二月八日。本日より前田治脩の中陰法會を寶圓寺に行ふ。

〔御觸留〕

太梁院樣御中陰御法事、當月八日より二夜三日、於寶圓寺御執行之節拜禮之刻限。

一、八日　巳の上刻より同下刻迄　人　持

一、同日　卯の下刻より巳の刻迄　物　頭

右刻限無相違樣可相心得候。服幷從者之儀、先達而御横目より申談候通に候。役儀等有之、右刻限難罷出人々者、三日之内可爲勝手候。且又病氣等に而難罷出面々は、其段直に拙者迄以書付可及斷候事。

二　月　　　　　　　　　　　　　奥　村　左　京

〔政隣記〕

太梁院様御中陰御法事に付御參詣之刻御作法。

一、御法事過半宜時分、惣御奉行より御近習頭迄以紙面御案内申上候ば、御裝束に而御參詣之節、假山門下ゟ寺社奉行一人罷出、中廻廊中程迄御先立、御近習頭夫より御先立、若年寄・和尚階下庫裏之方ゟ罷出、左京御佛前ゟ向左之下階下敷居際ゟ罷出、詰合之年寄中等は左之方緣頰に伺公。被爲入候時分、和尚ゟ御意無之、直に緣頰通御裝束之間ゟ被爲入、追付御法事初可申哉之旨若年寄を以相伺候上、御法事初御聽聞被遊、相濟候上御香爐火宜旨寺社奉行申聞、左京より若年寄を以申上、追付御燒香被遊、年寄中・主稅・御家老中等緣頰に伺公、左京儀は年寄中等着座之下に引離罷在。其節御佛前ゟ向客殿之內御左右知識等着座、御會釋有之御歸被遊候刻、階下最前之所ゟ和尚被出、其所に而御蹲座、和尚ゟ御意有之、御請被申上、左京御取合申上、御先立最前之通に而、御手水役御刀持御表小將之事。

但、御戾之節も年寄中等は最前之通緣頰ゟ罷出候事。

九日

一、御作法等都而前日之通に候事。

但、辰之刻頓寫初り候ば、御近習頭を以申上、硯水和尚迄御次被遊、其外は御名代甲斐守

禮之間木のまゝ

相勤可申事。

附記、平僧江は座見次之。

十　日

一、御參詣之節、御先立此間之通に而、御裝束之間江被爲入、追付御燒香被遊、知識等着座御會釋有之。重而御裝束之間江被爲入、和尚被罷出候樣可仕哉之旨、若年寄を以相伺、被仰出之上御大小將兩人罷出、御簾揚之候事。

一、和尚江被下候白銀五十枚・御時服三つ、取次御大小將持參、御裝束之間緣頰に並置。和尙左京誘引に而罷出、右被遣物頂戴、御禮左京申上、其上に而御意有之、御請被申上、左京御取合申上退去。被遣物御大小將引之。

但、淡路守樣初御使者相詰罷在候得共、此節之儀に付御目見は不被仰付、年寄中之內罷出及挨拶可申候。

一、御歸被遊候砌、御先立等被爲入候時分之通、年寄中・主税・御家老中左之方緣頰に伺公、和尚階下江罷出御意有之、左京御取合申上、左京江も御意有之、御請申上候事。

一、御歸以後、上座見・下座見之僧江被下候御時服等、禮之間に而一人充寺社奉行渡之。下座見江被下候節は、上座見之僧江被下候所よりは少引下相渡之。

但、右之節左京儀は、御法事之砌相詰罷在候所より、右被下物之間敷居之内ゟ進出、其外年寄中等も際に在之候事。

〔政隣記〕

太梁院樣御中陰御法事差定

二月八日

寅刻轉讀　大般若經
卯刻上粥　般若心經
同刻獻粥　大悲神咒
辰　刻　圓通懺法
午刻上供　般若心經
同　刻　奠湯法語
同　刻　奠茶法語
同　刻　拈香法語
同刻獻供　楞嚴遶行

同　九日

寅刻轉讀　大般若經
卯刻上粥　般若心經
同刻獻粥　大悲神咒
辰刻頓寫　大乘妙典
巳刻　法問商量
午刻上供　般若心經
同刻獻供　楞嚴遶行

同十日

寅刻轉讀　大般若經
卯刻上粥　般若心經
同刻獻粥　大悲神咒
辰刻　上堂提唱
巳刻　大施餓鬼
午刻上供　般若心經
同刻獻供　楞嚴遶行

同刻放生　秘密神咒
以上

二月八日。玉泉寺に於いて貧民に米を施行す。
右衆三千指。但三百僧之事也。

〔政隣記〕
二月八日、今日・明日於玉泉寺御施行米四百俵。奉行御先手物頭中村宗兵衛・岸忠兵衛勤之。

二月十四日。前田治脩の三十五日法會を寶圓寺に行ふ。

〔御觸留〕
猶以服之儀は、熨斗目・布上下着用之筈に候、以上。
太梁院様御三十五日御法事、當月十四日於寶圓寺御執行被成候。其節人持之嫡子・二三男、頭分之嫡子前々御目見相濟候面々、拜禮に罷出筈候條、十四日卯之刻より巳之刻迄之內、拜禮罷出候樣、御組等え御申渡可被成候。罷出候面々、并病氣等に而不罷出人々も、被書出可有御指出候、以上。
二月八日　奥村左京

二月十六日。二ノ丸御殿造營の費用缺乏するを以て速に工事を竣るべきを議す。

〔御造營方日並記〕

二月十六日、今日左之通被仰渡。

付札、御造營主付頭江

御造營方此末追々可被仰付候處、御入用御運方御指支之旨等、御勝手方より段々申上候趣等も有之候に付、此末可被仰付候所之分被指止、追而可被仰付候。乍併仕殘之分は可被仰付候間、御入用方月何程与申處遂詮議可申候。緩々取懸り居申候而は、御不益之筋も可有之候間、早速相仕廻可申候。

一、唐御門之儀者、若假に申付候樣成僉議に而、是迄有之候樣成御門に相成候而者却て思召に不應候間、至て輕く只今之圍同樣に致置可申候。右之通に相成候而も、御入用不少儀にも候者、やはり去年圖之通可被仰付候。

右之通被仰出候條、被得其意、月々御入用等遂僉議可被申聞候。將又仕殘り之分、先御やねを先与致仕候而も、溜之御間御杉戸抔は一筆に而無之而者不相成候間、是は迫り込候而、筑前介早く歸候樣遂詮議可被申候事。

二　月

二月十八日。前田治脩の卒去以後中止したる學校の授業を開始すべきことを告ぐ。

〔政隣記〕

今般御凶事に付學校稽古相止居候得共、來月四日より稽古相初候。此段御一統に私より可致演達旨左京殿等被仰聞候條、御承知被成、御同役・御同席方等御傳達、御組・御支配に御申談可被成、且又御組等之内裁許有之面々者、其支配に被申渡候樣、是又御申談可被成候。御廻達落着より御返可被成候、以上。

二月十八日　　　　戸田五左衛門

岩田傳左衛門樣

二月廿一日。公事場及び町會所の牢に於ける罪人に赦を行ふ。

〔政隣記〕

二月二十一日、昨日御用番助右衛門殿依御紙面、四時過致登城候處、左之御覺書等於御席御渡之。

付札、町奉行に

此度之義者、太梁院樣御中陰御法事に付而、非常之御大赦に候條、可有其心得候事。

庚午二月二十一日

右に付、直に町會所ゟ出座、夫々申渡出牢申付候者は、爲御禮寶圓寺ゟ指遣、町下代森助三指添、尤同寺ゟ之書付（印章先所 寶圓寺）并寺社奉行御用番竹田掃部等ゟ之紙面も渡遣候事。

同日於公事場非常之御大赦に付、出牢者都合五十二人。

但、牢屋に殘候者三人与云々。外預等宥數人有之。

於町會所牢屋殘候者二人、出牢者一人、外預等宥候者數人有之。

二月廿三日。流刑・閉門等の士に赦を行ふ。

〔金龍公記史料〕

二月二十三日赦流刑閉門等者。

二月廿七日。先に失踪したる町役者飯島六之佐金澤に歸る。

〔政隣記〕

二月晦日、前記去年四月二十九日記に有之通、町役者飯嶋六之佐儀、去々年五月江戸表葛野市郎兵衛方ゟ弟子入等に被遣、御上邸之内御貸小屋に罷在、同月二十四日より行衛相知不申候處、今月二十七日一類森下町京屋市十郎宅ゟ立歸。去年四月二十四日師匠市郎兵衛ゟ可罷

越与存、御門罷出候處、於途中知音之者に出合、共者に誘れ候而品川東海寺ゟ參詣。夫より右道連之者に別れ、可罷歸与存候途中に而煩出、町家ゟ賴入致保養候得共、病氣指重り熱氣に被犯、人事も不相分、舌頭も不相調族に候處、一兩日相立候而漸正氣付候得共、最早日も後れ、御屋敷表御門格之儀も承罷在候事故難罷歸、無是非江戸三河町松本義兵衞与申者之方に相潜ミ居候處、老母大病に取結ひ候樣子仄に承候に付、何卒在命之內今一度對面仕度与存込、竊に罷歸候段申に付、御縢中之儀故先一類共ゟ指預置、猶更江戸表御屋敷內外に而何廉取組候儀等も無之哉、爲指取組等も無之候者、此節之事故品輕取曖之筋も可有之哉之旨、江戸請會所奉行竹田彥六郎ゟ等に遣置候旨等、岩田氏より申迖之事。

［政隣記］

右飯嶋六之佐儀、去々年五月葛野市郎兵衞ゟ入門被仰付候處、稽古方入情等に付、重き習事も相傳置候處、去年四月廿四日前記之通出奔躰。元來重き被仰出を以、於御國に新に流儀興立仕候儀、諸家元ゟ對し甚以面目を施し候儀。六之佐藝道器用に而、いまだ年月不立候得共、全流儀之意味に至り、急度御用立被仰出通に可相叶者に付、新參に者候得共、此上重き傳授も爲致、御用立候樣可仕与、格別心力を盡し爲致修行候處、不存寄前段之族數ヶ敷仕合奉存候。就夫に奉願候。全外之事に而出發仕候に而も無御座、病氣に而如在も無御座儀に候

間、如最前町役所に而私弟子に被仰付置候樣奉願候。六之佐儀重き被仰出之者に付、乍新參累代之弟子或は累年熱心之弟子共与同樣に、重き習事相傳置候處、右不調法に而御役者御指除、下素人に相成候而は、藝方輕々敷迷惑至極仕候。是等之趣只々萬端御憐憫宜敷奉願旨、市郎兵衞より岩田・自分江之書面、諸橋陸之丞・波吉甚次郎迄、藝方無據意味之儀者互之儀に付、巨細に者不申進、宜引受、私に成替り御願、何分相整候樣別紙奉賴候樣に而、添紙面を以到來に付、諸橋陸蔵等よりも委曲以紙面出之、曁樣子も有之に付前條之通取曖置之。將又六之佐儀病氣に而無是非儀とは乍申、出奔躰に而立歸候者に付、格之通禁牢可申付處、御膝中曁非常之御大赦に而、死刑之者も命御助、其上太梁院樣御在世之內御用も相勤候者、就中病氣之樣子桧木義兵衞よりも告越候儀、旁先一類預に申付置候處、市郎兵衞よりも願之趣無據趣に候間、於江戸表外に惡事等無之儀、會所奉行より返書來候旨。願之通御聞屆御座候樣仕度段、若年寄中江紙面指出。右等之趣奉達御內聽にも置候事。

一、右之通に候處、六之佐儀於江戸表外に惡事等無之趣、會所奉行竹田彥六郎より返書到來之事。

一、六之佐前記之通に付、呼出可遂吟味處、病氣に付延引之內、五月十二日泰雲院樣廿五回御忌御取越、非常之就御大赦書上候處、同日一類預御宥免之事。

二月。一向宗遠祖年忌に付き郡中に令し濫に費用を失ふこと勿らしむ。

〔郡方御觸〕

一向宗遠祖年忌之由に而、於寺庵追々法會致執行候躰、右に付中には過分之施物等いたし、且檀那寺等を相招、於自宅法事相營候儀を相企、或者勸方之儀、人々割符等を以相集候取持等に携候儀も有之躰粗相聞、不埒之至に候條、都而右法儀に拘り、費之族等聊無之樣、夫々不相洩急度可申渡候。元來右等之儀者、前々申渡承知之儀に候得共、猶更今般之儀愈聊心得違無之樣、綿密に可申渡候、以上。

午二月　中村逸角

高田彌左衛門

萩原源太左衛門

大村友右衛門

能州四郡十村・新田裁許・山廻中

三月朔日。前田齊廣使者を幕府に發して先に弔問せられたるを謝せしむ。

〔金龍公記史料〕

三月朔命遣江戸謝使小將頭菊池九右衛門謝弔問奉書。大小將番頭辻市右衛門謝賜香奠。寄

令戸田治兵衛謝問疾奉書。組外番頭神保縫殿右衛門謝西城問疾奉書。定番馬廻番頭前田牽次郎謝發使于封地。大小將中川又三郎謝貸齎。是日公開齋。老臣獻魚。

三月二日。能登に於ける幕府領の政治を加賀藩の法によつて行はしむ。

[續漸得雜記]

一、能州御預所一萬石之處、今度御私領同樣に御取扱被成候樣、當午三月二日牧野備前守殿江御開番御呼出被仰渡候。

御　　名

能登國御預所村々取扱方、是迄之通に而者品々指障之筋も有之由に而、內意被申聞趣も有之候に付、以來御預所政事向者、私領同樣に被取扱、御普請所・損地・新開之儀者被申聞候ヶ條書之通被相心得、御取箇は永定免皆金納、諸帳面之儀も重立候分者是迄之通可被差出候。猶委曲之儀者御勘定奉行可被申談候事。

付札、遠田誠摩江

能州御預所村々御取扱方之儀に付、御願之趣有之候處、以來御取扱方御私領同樣被成候樣、當月二日牧野備前守殿江開番被召呼被仰渡候間、御預地村方江今日中可申渡旨被仰出候條、可被得其意候事。

午三月十一日

三月二日、能登の國内公領（六十二村）政事は御國法に任せられ、永く定免を以て金納せらるべき旨台命あり。（此儀等達許合あり。）

【異本三守御譜】

此起り、稲武先年加州御郡奉行被仰付、改作奉行等類役にて、公領の者共此方様御領の人々に對し不屆之事共折には在之候得共、向ふは公領風、兎角其處を忍て罷在事どもなから／＼見聞、其時よりして何分工夫も在之樣子。然處幸成哉聞番被仰付候に付、公領之者共不法成儀共、御内々太梁公へも御内聽在之樣子、其節右御仕法之儀御内々被仰付、（太梁公か公よりか不詳追て可考。）依て則稲武主附被仰付置、右御用取捌罷在候内、不斗文化三年三月十三日江戸表に於て風症相發、（此時上使あり、御退出後御出門可致節、右風症發するなり。）其節蒙命、御内用在之に付、同役大地縫殿左衛門出府待受、夫々申達候上、五月□日御國へ歸着、同四年に至り追々快候て、正月十日より出役。然處二月廿四日二御丸にて重風症再發。依て御役儀御斷申上候處、同年七月十三日結構之被仰出を以御役御免除。右に付牧昌左衛門（聞番）へ其跡御用被仰付候處、此時に至りて本文に記す通り被仰渡。しかし政事は御國法にまかするといへども、此時刑罰之儀は此方様御まかせに不相成。依て又其後岡田十郎左衛門（聞番）昌左衛門退役後取懸り、文政□年右刑罰之儀も此方様御まか

かせに成たる由。此儀長瀬融翁内々咄あり。

三月八日。江戸にて前田齊廣夫人の行列、鳥居丹波守の行列と衝突す。

〔政隣記〕

三月八日、江戸下谷廣德寺江御前樣御參詣之處、御屋敷之内谷筋に有之地藏堂江御參詣、いまだ御通行無之所に付、追分口御門より御出、本郷通り、夫より湯嶋切通し、下谷中町より上野廣小路江御出之處、鳥居丹波守殿上野江參詣に付罷通り懸候處、御行列上野山下之方江横行に御通故、丹波守殿暫扣被居候得共、本御行列に付餘程間有之。就中御前樣御挾箱等之御紋牡丹に付、（津輕家与心得候由云々。）外大名御内室方与鳥居殿先徒之者相心得候躰に而、侮り候爲躰有之。理不盡に御輿跡御行列之内、從者若黨先之所を割切通り懸候に付、御供人御大小將丹羽伊太郎若黨某進み出指押へ候處、徒之者帶刀を拔懸候に付、奪取候得者竹刀に付折捨候處、亜而又拔懸、是又奪取候處、是も竹刀に付同斷折捨候得者、又候拔懸候に付奪取之、是者眞劍也。右三人共餘程令打擲相濟。于時鳥居殿徒之者等致方甚不法之族に付、内濟之儀被仰込之趣有之、内濟に相濟与云々。

三月十六日。前田利命の生母智光院と稱す。

〔齊廣樣御傳系等之内書拔〕

三月香隆院様御袋之方、今般院號付候様就被仰出候、前々之振合を以寶圓寺ゟ申遣、智光院と相改候。同三月十六日向後殿付に唱候様一統ゟ被仰渡、年中二十人扶持・白銀二百枚、御合力御引直被遣。同月廿一日今般格式御改に付御城外等ゟ被罷出候節、指添御鎖口番御歩横目可致旨被仰出候。

四月八日。非人小屋に收容する者の送狀に就いて令す。

〔御郡典〕

非人小屋入之者共、家等相求出人之節、相調遣候送之儀、於町會所に詮議之趣有之、妻等由緒をも相調相渡候様申添に付、是以後御郡方等之者右小屋入之節、妻幷養子等いたし置候はゞ、其養子之由緒共相調指出候様致度段等、右裁許與力申聞候に付、別紙寫一通相達候條、以來小屋入之節送紙面、其譯委細相調候様夫々可被申渡候。

右之趣被得其意、先々順達落着より可被相返候、以上。

四月八日　　御算用場

高田彌左衞門殿

中村逸角殿

非人小屋御救人之内、家等相求出人仕候節送調方、其株頭之者迄由緒調相渡候處、町會所依

御詮議、妻有之者は妻由緒をも遂相調、出入之者ゟ相渡候樣被仰渡候。依而是以後御郡方之入人々遂之儀も、妻有之者は妻由緒をも遂に調、養子等致置候者は其養子之由緒をも調可申儀与奉存候間、此段早速御郡方ゟ被仰渡御座候樣仕度奉存候。町方之分は、町會所より被仰渡御座候。且又右被仰渡中、是迄之通に而御救に相向候者も可有御座候間、此分は役所に而其者手前承糺、由緒遂に書加置可申趣に、町會所ゟ御達申上置候。是上入人々之分も、右同樣役所に相調、出入之節相渡趣に町會所より被仰渡置候。此段も御達申置候、以上。

午　三　月　　北庄亦助

澤崎左太夫

佐雙武太夫

中村源左衛門

御算用場

四月十八日。二ノ丸御殿の杉戸の繪畫を定む。

〔御造營方日並記〕

四月十八日、今日伺被仰出候御杉戸繪配り如斯之事。左に記。

一、御裝束之御間御廊下。

間材木のまゝ

御裝束之御間之方る印は朝日に波、裏へ印は王義之。狩野墨川。

一、同御間御廊下より鏡之御間境。
御廊下の方は、は印林和靖。
鏡の御間の方は、ぬ印麝香。狩野墨川。

一、御小書院御緣側より檜垣の御間取續之御廊下入口。
御小書院の方れ印は、芦に鷺。望月左近。
裏ら印は瀧に獺。佐々木泉景。

一、松の御間一・二の御間境御緣側。
松の御間の方ね印は山雀。森間材。
裏そ印は芭蕉。同人。

一、松の御間御緣側より奧御書院御緣側境。
松の御間の方へ印は若松。早川泉流。
裏つ印は雲龍。佐々木泉景。

一、松の御間御緣側より內談所入口。
松の御間の方片面ほ印桃園結義。佐々木泉景。

一、奥御書院御縁側より拜見所入口。
奥御書院の方わ印は車に牛。
裏か印は陶淵明。佐々木泉景。
一、奥御書院一・二の御間境御縁側。
上の御間の方り印は寒芦に鷺。佐々木泉景。
裏に印は山鳥に長春。早川泉流。
一、蔦の御間入口。
檜垣の御間御縁側の方片面ろ印は宇治橋に千鳥。佐々木泉景。
一、檜垣の御間御縁側より柳の御間御縁側境。
檜垣い御間の方を印は檜に猿。佐々木泉景。
柳の御間の方柳に燕三羽計。同人。
一、御居間書院三の御間より波の御間御縁側境。
御居間書院の方た印は漁夫。佐々木泉景。
裏よ印は樵夫。佐々木泉景。
一、柳の御間後御廊下より御次へ入口、荒波に舟。

櫛の御間の方と印は牡丹獅子。狩野墨川。

四月廿五日。二ノ丸御殿表式臺等竣功するを以て祝儀を行ふ。

〔三守御譜〕

四月廿五日今般表御式臺・竹之御間等御造營就出來、御祝有之、御能被遊。此日朝於御居間書院、御造營御出來に付前田伊勢守被爲召御意、拜領物被仰付相濟。長甲斐守・奥村左京且前田織江御家老被爲召、拜領物被仰付。

〔政隣記〕

付札、御造營方主付頭江

今般表御式臺竹之御間等御造營就出來、當廿五日御祝被仰付、各初右御造營相勤候人々迄頂戴被仰付候條、被得其意、夫々可被申談候事。

四　月

〔御造營方日並記〕

一、御作事奉行手合、今般御祝頂戴人數、御作事奉行淺加作左衞門等五人、同所御横目高山伊左衞門等兩人、內作事金谷佐太夫等五人、買手方與力渡邊左兵衞等三人、寺社方修理裁許與力久世傳三郎等六人、御大工頭大西久左衞門等兩人、御大工井上庄右衞門等十三人、御壁

塗堀越左源太等六人、御造營御作事方御横目足輕八人、御作事所留書足輕三人、同御造營之分四人、御作事所御門番人足輕桐木御門脇入口番足輕四人、御作事所前入口番足輕四人、河北御門外入口番足輕四人、元御細工所入口番足輕四人、二御丸大工丁場諸職人たばこ呑所火番足輕四人、御作事所小遣八人、御造營御作事方定小遣十人、日懸小遣四人、御作事所釜小屋番人小者安房守殿家來紙細工御雇四人、御扶持方大工二十人、六十七人棟梁、御造營棟梁四十八人、屋根棟梁廿七人、御造營方屋根棟梁等三人、左官棟梁廿四人、疊棟梁十五人、大工肝煎等八人、建具師棟梁兩人、表具師棟取三人、鉛延板師三人、鉛水戸師一人、鍛冶肝煎一人、日用頭六人、宮腰御材木肝煎・同持裁許・傳馬肝煎等六人、町方大工棟取十二人、御引移以後より懸之大工□□□より續而出候七百五十八人、屋根葺八十七人、左官四十四人、板批三十七人、木挽二百一人、建具師四十三人、表具師七十四人、鍛冶三十人、日用廿一人、御造營方幷御作事所定御用聞町人、右之外表具方御雇足輕廿二人、同小者十三人、〆千七百九十九人。外御扶持人十村沼保村彦四郎、同人せがれ次郎左衛門。

右手合々々より書出之事。

〔政隣記〕

四月廿五日今日表御式臺竹之間等御造營出來之御祝被仰付候に付、躑躅之間正面人持、左之

方御近習人持・御近習頭、右之方表向頭分与席札張有之。御臺所之内平士より御歩並迄夫々席札張有之。其所に而各頂戴之。

但、年寄中等於席頂戴之、席懸坊主給事。

御吸物みそ調 切身 山椒の葉　御酒　御取肴鯣

右御歩並以上、御造營方御用相勤候人々、幷（但頭分以上卷鯣、平士以下折鯣。）當番之人々且足輕以下も同斷に而、赤飯・御酒・裂鯣頂戴被仰付、都合頂戴人三千人計与云々。

一、給事躑躅之間足輕、御臺所士列之分同頭、御歩並以下小者。

一、右御禮御臺所奉行溜に罷越演述。

同日御奥舞臺に而御能有之。

四月。諸士の邸内に同居する奉公人以外の員數を屆出しむ。

〔政隣記〕

覺

一、御家中侍中屋守或長屋等借罷在候者之内、奉公人之外都而十五歲以上之男女、當月之在人高可被書出候。何程男・何程女与可被書分候事。

一、寺社奉行・町奉行・御郡奉行等支配地に罷在候侍中家來之儀者、右奉行中不及貪着候間、

宅を貸置候内右族之者有之候者、其主人々々より不相洩樣、前條之趣を以可被書出候事。

一、人高郡分に調申に付、侍屋敷淺野川橋よりあなた居住之者は河北郡、橋より此方者石川郡に候事。

一、右人々借俗・穢多之類迄都而男女之人高に候故、内書に其品々書分候に不及、則紙面調樣左に記候事。

右文化元年相觸候通に候間、其趣を以當五月廿日迄之内、有無之儀可被書出候事。

四　月

五月二日。穎姫の生母慧照院、金谷御殿に移るべきことを命ぜらる。

惠照院は慧照院

〔齊廣樣御傳略等之内書拔〕

五月二日穎姫樣御產婦之方惠照院、二之御丸御廣式より金谷御廣式ゑ引越候樣被仰出有之なり。

五月二日。一向宗本山より敎化の爲に發したる書翰到着せしを以て百姓等の群參することを戒む。

〔郡方御觸〕

一向宗宗祖年回に付、本山より門末爲敎化宗意之趣書翰到來之由、右に付御郡方ゟも追々致披露候躰相聞え候條、勿論御郡方之者共群集等いたし不申樣、嚴重可申渡候。別而此節農業最中之儀に候間、早速夫々入念可申渡候、以上。

五月二日　　改作奉行

諸郡御扶持人・十村中

五月七日。二ノ丸御殿の裝飾に從事したる繪師村上健亮等賞賜せらる。

〔御造營方日並〕

五月七日

一、先達而御達申置畫師岸越前介弟子村上健亮等、御用相濟候に付、被下方御達申置候所、本文御付札を以、左之通今日御渡被成候事。

一、白銀五十枚　　村上健亮

一、同斷十五枚　　齋藤霞亭

一、同　斷　　望月左近

右被下銀、御造營御入用之内を以可相渡旨御聞屆に付、町會所渡之内取揚可相渡筈に付、夫々肝煎共ゟ申渡。且又右に付、明八日彥左衞門等之内罷出候樣申渡置候事。

前田重教の忌辰は六月なるを引上げたるなり

五十枚代　岸越前介弟子
一、二貫百五十目　文丁銀　村上健亮
十五枚代　同
一、六百四十五匁　同　齋藤霞亭
同　同
一、同　斷　同　望月左近
右被下方、御造營方御入用之内より遣候に付、町手合渡にいたし、印章入紙面遣事。

五月十二日。昨今兩日前田重教の廿五回忌法會を寶圓寺及び江戸廣德寺に行ふ。

〔政隣記〕
五月十一日於寶圓寺泰雲院樣二十五回御忌御法事就御執行、卯上刻より相詰、未上刻退出。
且御法事今明日差定左之通、僧數百僧也。
寅刻　轉讀　大般若經
辰刻　上粥　般若心經
同刻　獻粥　大悲神咒

巳刻　水陸勝會
午刻　拈香法語
同刻　上供　般若心經
同刻　獻供　楞嚴遶行
十二日
寅刻　轉讀　大般若經
辰刻　上粥　般若心經
同刻　獻粥　大悲神咒
上刻　上堂提唱
午刻　上供　般若心經
同刻　獻供　楞嚴遶行
以上

一、今十一日御法事御奉行より御案内に而、四時比御參詣、水陸勝會御聽聞之上被遊御燒香、追付御歸殿之事。
十二日昨日同斷御參詣、上堂提唱御聽聞之上、被遊御燒香御歸殿。

〔政隣記〕

泰雲院様二十五回御忌御法事、今月ゟ御取越、十一日・十二日於下谷廣徳寺御執行。依之御郷内三ヶ日鳴物等遠慮之事。

五月十二日。前田重教の廿五回忌に付き赦を行ふ。

〔政隣記〕

五月十二日、昨日御用番左京殿依御紙面、四時過致登城候處、非常之御大赦に付、先達而御達置申候於町會所禁牢等申付置候者共、罪之譯書付可指出旨被仰出候趣、御年寄衆等御連印之御付札物、且此度之赦者泰雲院様廿五回御忌御法事に付而、非常之御大赦に候條可有其心得旨之御覺書御付札物、左京殿御渡に付、直に町會所ゟ不時致出席、夫々申渡、御寺ゟ御禮に指遣候儀等、都而二月廿一日記之通に付略記す。

　但、公事場奉行御用番永原久兵衛も御呼出等同斷。

右に付於公事場出牢者六人有之。

於町會所出牢者三人。米中買鍋屋助七・福光屋豐右衛門・賊木屋九郎右衛門下女すゑ。

五月十三日。大聖寺侯前田利之歸邑の途金澤城に登る。

〔政隣記〕

五月十三日、備後守樣御登城八半時比御出、御對顏有之、七半時比御退出、直に天德院・寶圓寺江御參詣に而、暮比御歸宿之事。

但、御居間廻り等御間共御覽。且御料理二汁五菜加御引菜。御膳は木具。

〔金龍公記史料〕

五月十三日備後守歸藩途次。過金澤登城。又詣天德院寶圓寺。

五月十六日。前田齊廣學校に臨みて諸士の武技を觀る。

〔政隣記〕

五月十六日八時過より武學校江御出武藝御覽、劍術・鎗術・馬術等都合三十人餘御覽。畢而何も心懸宜、達者に仕候段御意之趣申聞候樣、御主附奥村左京殿江被仰出候段、學校主附頭江左京殿被仰聞、主付頭より夫々江演述。依之蒙御意候爲御禮、明後十八日横山山城殿・左京殿御宅江、布上下着用相勤候樣、主付頭より夫々申談有之。

五月廿三日。一向宗門徒宗意に關して紛議を生ずるなかるべきを諭す。

この末寺は西濠別院なり

〔郡方御觸〕

今般於末寺本山祖師年回執行有之候所、先達而宗派申分有之後に付、使僧下り候等之儀に付而も、隨分穩便に相濟候樣寺庵方江も取扱有之、品能執行可相濟躰に候。然所頃日俗人等之

内、何与歟申者も候哉之沙汰いたし、不圖心得違之者有之候而者如何に候之間、御郡方にも其心得有之、若支配所之者參詣いたし候共、宗派申分之儀等無之樣可申渡旨、此間左京殿より御算用場奉行中ゟ被申聞候旨に而、拙者共ゟ右之趣被申談候間、申遣候條、早速十村中等ゟ可被申談候。猶更其筋氣を付、麁忽之儀無之樣有之度候、以上。

五月廿三日　　　中村逸角

　　　　　　　　高田彌左衛門

能州四郡御扶持人中

五月廿九日。飯島六之佐再び町役者を命ぜらる。

〔政隣記〕

五月廿九日、前記二月晦日記に有之飯嶋六之佐儀、五月十二日依非常之御大赦一類預御宥免之儀申渡候刻、町役者之儀者追而申渡趣も有之段申渡置、僉議中之處、今日若年寄前田掃部殿左之覺書御渡有之事。

付札、町奉行ゟ　　　飯嶋六之佐

右六之佐、葛野流入門被仰付、爲稽古江戸表ゟ被指遣置候内、不埒之儀有之候處、今度就御

被御宥免被仰付候儀、各存知之通に候。先達而思召を以流替も被仰付候者、右躰之儀別而不屆之至に候得共、於師家段々習事も相濟、藝道達者に仕様子に付、右流儀御用立候處を以、格別之思召に而役者共儘被仰付置候條、以來彌以藝道相勵、御用立候樣急度相心得可申候。各も可申渡段被仰出候條、此段可被申渡候事。

右に付町同心中江可被申渡旨可申談處、格別之被仰出之趣に付、拙者江六之佐呼出、御用方家來指引幷橫目肝煎久左衛門誘引を以、直々申渡之、引受之御請書若年寄中江相達。尤六之佐請書判形爲致候事。

但、町同心御用先清水鄉右衛門・諸橋陸之丞等江も爲承知以書面申達候事。

六月二日。越登賀三州志その他領國の事蹟に關する記錄の提出を命ず。

〔政隣記〕

六月二日

付札、御橫目江

越登賀三州志　富田權佐著述

右之書致所持罷在候者、頭分以上者御次迄持參指上可申候。其外者頭・支配人より相達候樣、一統可被申談候。

一、草稿等に而見苦敷儀者不指支候間、所持之者は其儘指出可申候。且又右之外にも、御領國三州之事蹟等調置候記錄在之候者、是又見苦敷儀者不指支候間不殘指上可申候。
一、右之書等、又家中之者致所持有之候者、其主人々々に取上指出可申候。
右之趣一統に可被申談候事。

庚午六月

六月二日。割場附足輕小森彥三郎、御馬廻組の士坂井斧吉と爭ひて互に創傷を受く。

〔政隣記〕
割場附足輕小森彥三郎与申者、帶刀(町割場附足輕近藤鐵五郎宅に同居年二十二歲。)之處、六月二日夜才川下大豆田邊に螢捕に罷越候處、川中に螢多所持之者有之に付、一・二羽貰度旨申候處、不相成段答に付、再貰懸候處、陸薹食らへ与及雜言候に付、彥三郎儀奉公人之處、彼者も帶刀奉公人躰之處、惡口を受難堪、川より上り候所を待受、居宅に誘引之心得に而引立候處、彼者刀を拔打懸候に付、不得止事を拔合戰ひ候內、手疵を負ひ、闇夜之儀相手見失ひ、無是非令歸宅候旨等、翌三日公事場檢使(檢使宿は一向宗法船寺町等雲寺に、與力多田權八・鈴木冀次郎三日罷越、翌四日晝迄引取。)前に而申述候處、先割場に指預之、彥三郎都合十三ヶ所手疵を負ひ有之。且相手は定番御馬廻組坂井斧吉与申儀相知れ候に付、

多田權八等直に斧吉居宅（領知五拾石。居宅竪町 實父武藤伊織方同居。）江罷越、樣子相尋候處、相手彥三郎方より打懸候に付不得止事拔合候由申聞、手疵五ヶ所負ひ有之。右之通申分相違に付、重而最前之檢使衆江立歸、彥三郎手前相糺候處、最前申述候通、相手より打懸候旨等答候由之事。

一、坂井斧吉宅江も、頭定番御馬廻御番頭村田三郎兵衞より、夫々及御屆候に付、三日爲檢使御大小將橫目笠間源太左衞門・松原牛兵衞罷越、見屆樣子相尋候處、前段之趣に而相手逃去候に付、追懸候得共闇夜に付見失、無是非令歸宅候旨等云々。且相頭は前田牽次郎、定番頭岡田牛右衞門も右宅江罷越候事。

一、前記之通闇夜に而互に面を合せ不申事に付、双方共口上書之表、相手者誰共不存辨旨等云々。

六月六日。前田齊廣、學校に臨みて諸士の武技を閱す。

〔政隣記〕

六月六日八時御供揃に而武學校江御出、武藝御覽、都合三十人餘に而七時前御歸殿。

六月八日。前田齊廣、諸士の諸願を當分聞屆けざるべきを告ぐ。

〔諸事留書〕

一、左之通御親翰寫、月番江被相廻。

昨日とある親翰は見當らず

諸願之儀當分難承届旨、昨日申遣候通に候。尤存寄を以申付候品は、右に不拘申付候儀は、各承知之通に而不及申事に候得共、右等之用向しらべ等いたし候者共、心得違有之候へば、存外政事之指障にも相成候事故、爲念重而此段申出置候。勝手方等へも可被爲渡達候、以上。

六月九日

本多安房守殿

〔諸事覺書〕

六月十八日、左之通表方ゟ被仰出。

願之趣御聞届難被成旨被仰出候儀は、近年諸願方表向ゟ相願候品を、又御次へも相願、或は此儀者いつ頃被仰出候抔与、先知いたし候樣成風俗に相成、爲指儀に而も無之儀迄も相願候樣成儀故、御下知等にも甚御面倒成御事も被爲在候に付、至而無據分迄爲相願、爲指儀に而も無之儀は指押へ申樣有之候へば宜候。何共此儀も六ケ敷事に被思召候故、先達而被仰出之通に候。然共誠に無據分に而も一圓御聞届無御座候樣に而は、御不仁之形候間、右樣之分は口上に而申達候歟、入組申儀は其趣意を爲書出可相達御聽候。左候はゞ思召を以被仰付候歟、又は爲相願申樣にとか御指圖可有之候。右之通に被仰付候はゞ、少は風俗も直り可申哉

与被思召、被仰出儀に候。此趣に候間、先達而被仰出候通、下々へ申聞せ候儀は不苦候。何分御趣意之趣下々迄奉會得、筋合相立候樣各にも取計ひ有之樣に与被思召候旨、勘解由を以被仰出事。

六月十五日、本年より老臣以下諸士の借知高を減ず。

〔政隣記〕

一、當十五日被仰出之趣、年寄中ゟ者百石に付五石宛被返下、十石充御借知被仰付、御家老・若年寄中者平人持組之通十石充被返下、五石充御借知被仰付候事。

〔政隣記〕

前記十五日に有之通頭々より組・支配人ゟ教諭方之儀、於御次御内々被仰出之趣に付、御馬廻頭より組々ゟ申談方左之通之由。

今般被仰出候趣、御用番安房守殿被仰渡候覺書別紙之通に候。先以御上御勝手御難澁、別而當時御遣方等御指支之御樣子之處、格別之思召を以如斯被仰出候儀、誠以難有仕合恐入候儀に候。然上者不及申候得共、人々家内仕抹方猶更嚴重至極に被相心得、質素に被相慕、尤是迄申談候通參會付合之儀、譯而新入之衆有之節相番中參會之儀者、前々堅制置候通に候。併親類始格別入魂に被致來候人々等、折節事輕被出合候儀抔難成と申譯者無之候。將又收納方

本文は老臣に關するものなり

之儀、元來不輕品に候條、麁抹成筋無之樣被相心得、別而御當節前段之通御樣子之處、如此結構に被仰出候儀深被奉恐察、以來勝手取續之儀肝要に候。是以後拙者共より容易願ヶ間敷儀も難致候條、此所得与被相辨、諸事是迄申談候通り、御了簡違無之樣被相心得、御奉公專一に可被相勤候事。

〔諸事覺書〕

御親筆寫

家中一統難澁之處、過分之借知申付置候儀、大身之面々は家中仕置方等別而可爲難澁与、兼々令心勞候に付、今般於勝手方に格別僉議申付、各〻者今年より相改、百石に十石充借知に申付候。此段申聞候。

六　月

〔諸事覺書〕

御家中一統難澁之所、過分之御借知被仰付置候儀、御心勞被遊候付、今般於御勝手方格別御僉議被仰付、今年より御借知高御改、人持以下百石に付五石充に被仰付、二百石以下者御借知等被指止候條、此段可申渡旨被仰出。

右之趣被得其意、組・支配之面々へも可被申渡候。組等之内裁許有之人々者、其支配へも相

達候樣可被申聞候事。

庚午六月

付札、定番頭江

御借知之儀今年より御改に候得共、逼塞・遠慮等之人々江者不被及御沙汰候條、此段諸頭江可被申談候事。

六月十五日。寶曆九年以後諸士の献納したる人足賃銀を徵せざることゝす。

〔諸事覺書〕

寶曆九年御類燒に付、御城御造營被仰付候處、御勝手御難澁至極、御要脚御指支被成候に付、格別之御普請之儀故、御家中之人々より、年々人足賃銀指上來候。未御城御造營全くは相濟不申候得共、今般二ノ御丸御普請大方出來候付、當年より不及指上候。久々人足指上、御喜悅之御事に候。此段可申聞旨被仰出候。

右之通被得其意、組・支配之內人足指上候人々江可被申渡候。組等之內裁許有之面々者、其支配江も相達候樣被申渡、尤同役中可有傳達候事。

六月

付札、御横目江

今日申聞候被仰出候趣に付、布上下着用爲御禮、人持・頭分明十六日より二・三日中に御用番宅江相勤可申候。幼少・病氣・在江戸等之人々江者、同役又は筆頭代判人より可有傳達候。右人々御禮名代人、御用番宅江相勤可申候事。

一、組・支配之人々御禮者、其頭等宅江相勤、頭・支配人より御用番江以紙面可申聞候事。

一、與力江者其寄親より可申渡、御禮者寄親迄罷出可申候事。

但、自分御禮に相勤候節、與力之儀も一所に可申述候事。

一、人足賃之儀に付御意之趣御禮之儀者、一統申渡相濟候上、筆頭又は頭・支配人等より引請口上に而、御用番迄可申聞候事。

右之通夫々可被申談候事。

六月十五日

本年十二月十九日の條參照

六月十七日。學校に於いて大村乙四郎、遊戲の際傷けられ遂に死す。

〔政隣記〕

六月十七日於文學校、大村武次郎四男乙四郎年十三歳、定番御馬廻組脇本乙次郎嫡子長次郎年十一歳少々及口論、双方幼年之習俗に而狂遊躰、組附抔致し候內、乙四郎帯し居候脇指鞘走り抜落

候に付、長次郎取上、乙四郎ゟ渡し候に付、同人鞘ゟ納之。于時右拔落候節、乙四郎之足に障り、少々疵付令破血候得共、元來幼年同士之所業、其上自身之怪我に付、學校附頭當番横山引馬等、同御横目松平左仲・中村平兵衞取計を以、血留藥用之內濟。畢而乙四郎儀袴を脫帶を締直し可申与致候節見受候得ば、服之中胸下に突疵有之、臟腑出懸り有之。此躰を見付驚氣分惡敷相成。右族に付內濟難整、夫々及御屆候處、爲檢使御大小將横目笠間源太左衞門・松平平兵衞罷越見屆、樣子委曲相尋候處、乙四郎儀帶解き候迄疼みも無之に付、疵付候儀一圓覺不申候。脇指身拔落候節、長次郎より受取鞘に納候節過而疵付候哉、又は長次郎相渡候節受取候刻疵付候哉、一圓覺無之旨云々。長次郎申口之趣も同斷。且亦右檢使以前、學校附御横目等僉議之上、御醫師白崎玄水ゟ診察等申談候處、餘程之深疵、其上血裏ゟ廻り候間難及療治段申聞。公事場等三ケ所御用懸り町醫師高澤仙立は、可致療治旨申に付同人ゟ療治申談。右檢使相濟候上、乙四郎・長次郎宅々ゟ相返候事。

一、白崎玄水儀、元來外科に而本科兼、高澤仙立も同斷。將亦突疵に而候故、破り廣め不申而は療治難納め段仙立申聞候得共、裂廣め候儀乙四郎母苦痛を厭ひ會得不致に付、猶豫之內段々氣力等指重り、翌十八日暮前乙四郎儀致死去候に付、重而爲檢使笠間・松原、大村宅ゟ越見屆。

一、大村武次郎就任江戸、代判同役山岸七郎兵衛儀學校江罷出。

一、岡本乙次郎儀も同斷。頭は別所宗右衛門尤罷出。且長次郎儀外出不爲致候樣、御用番安房守殿頭江被仰渡、則宗右衛門より父乙次郎江申渡之。

六月十八日。米預證書を僞造したる大河原傳九郎等牢揚屋に收容せらる。

[政隣記]

六月十八日、今日大河原彌太郎舍弟傳九郎、毛利融次郎致厄介遣候叔父融左衛門、幷彌太郎家來若黨深谷用左衛門、於公事場御吟味被仰付候處、傳九郎儀は藏宿鍋屋伊兵衛米預印紙贋拵、融左衛門儀者藏宿石浦屋五郎右衛門・油屋平兵衛米預り印紙贋物拵、銀子謀取候旨等夫々申顯候に付、今日より兩人共牢揚屋江被入置、用左衛門儀も改方より引受禁牢申付有之。

七月朔日。豫て諸士の提出したる諸願書を却下す。

[政隣記]

七月朔日出仕後、松之間二之間に而、御勝手方御主附本多勘解由殿左之通御演述。

御勝手向御逼迫之內、御城向御燒失に付御造營被仰付、其上當春不時御物入、彼是別而御指支に候得共、御家中一統過分御借知被仰付置、御心勞被思召候に付、今般御借知御改被成、

本年九月四日の條參照
土州は前田土佐守

彌増御逼迫、一圓御運方無之に付、於御勝手方格別御詮議被仰付候。依之乍御心外、諸向願之趣當分御聞届難被成候。此段願有之向々江可申聞旨被仰出候由、月番安房守演述。且又右之通被仰出候とて、一圓に願之筋御取上不被成と相心得候而者、御上御不仁之貌に相當り、全左樣之儀に而者無之、前條被仰出候通之御運方に付、不被得止事願之趣難被仰付譯に候。此段末々能く致會得候樣可申聞旨、重而被仰出候旨も、同人演述有之。此段申聞候事。
右畢而退去之處、御勝手方執筆坂井源兵衛、先達而より指出置候願紙面指出、只今勘解由殿御演述之趣に付、御返之段申聞、夫々相返之。且御家老中幷若年寄中江指出置候願紙面共者、當分難被遂御僉議旨等御申聞、前月□日是又勘解由殿同役御用岩田傳左衛門江御返之。

七月十日。御勝手方本多勘解由等、金銀の融通を促すべき件に關し意見を徵す。

〔政隣記〕
七月十日御勝手方於御別席、右之兩通本多勘解由殿被相渡。是者土州幷拙者存寄之趣覺書に候。猶更各方了簡之程承度旨等、御申聞之事。
今般御借知之內をも被返下、且當年之因氣候に米價も劣り可申、左候而者御借知被返下候詮

も無之程に下料に而者如何に付、御召米も被仰付、下々には買進み候而融通も致しよき筈に候處、近年之商方之風俗に而、金銀をしめ、人々利分計に心懸候族多く、手段をなし申氣味合に一統相心得申躰に候。何となく右之意味も有之、武士之方に而は商方に敷付られ申樣に而、彌增之及困窮に申族。何程是迄御憐愍有之共其驗し不相見儀者、惣而商家之利に陷られ申故に候。奉行等ヶ樣之處第一に心掛候而、商家ゟ可被申付筈に候。此弊俗不立復內は、惣而商家に利を得申而已に候。隨而融通甚不自由之旨申立候儀、不届之事に候。米價之高下者格別、於融通米價に拘はる事は有之間敷事に候。商家にて奸利を致す習俗之儀を、奉行等心付不申儀者、心掛薄き躰にも候哉。其證據有之儀共、世間に申唱候事共有之儀に候。

一、若又商家之者共相衰候而、融通之手段甚難儀之筋も萬一有之歟、金銀貯置候者共融通を支へ申樣之氣味に有之事に候。是等者奸賊之類に而、横目肝煎等聞出之置、夫々可相達事に候。近年之商方には、融通滯り金銀好候て貯置申族も多躰に申唱候。元來金銀は融通第一之ための物に候處、右樣之儀に而者商家之仕置不届と申ものに候。左樣之者は急度懲しめ、世の害を除べき事に候。拙者共存寄右之通に候間、各にも已來此處第一に可有心付事。

庚午七月

町方之ゆるやかに成候樣に有之度事は、御城下之融通之ために候。町中困窮と申事も近來不

相開、利潤も品々有之事に候得者、融通相塞り申譯は有之間敷事に候。町方近來之習俗、手前ゟ引取申樣之事に相成、惣躰商賣方之品高料に相成申も、元來武士之困窮より、拂方不行屆よりしての譯も相聞え候得共、元價に不應樣に賣なし候故、拂方も不指引に相成候。是は諸運上抔も中には相增申品も有之哉、御益抔と唱候品に御仕置に背き申品ども多有之故、却而御費用多に相成候。諸物高價と申も、元價を不相辨候故、勝手に申度儘を申候而賣成申故に候。ヶ樣之處相調、運上等之品も其筋能相分り候而、奸利無之樣に相成候上に、町家も豐かに相成可申事に候。御城下之習俗三州ゟわたり候故、豪富巨商も甚以商方にわだかまり有之事とも相聞え候事。

庚午七月

七月十七日。能登の藤内が盜賊を逮捕護送する場合の慣習を調査せしむ。

〔筒井舊記〕

今度笹川村藤内共御郡所ゟ御呼出、先達而眞久村に而賊を捕へ、所口ゟ召連候節、爲造用村方より錢請取候儀御詮議之處、藤内共申上候は、是迄召捕人有之節、遠近に違有之候得共、所口御役所ゟ賊引連候時分は、村方より爲造用錢二貫文宛貰請申候。眞久村之儀、道程遠く、增一貫文相貰、都合四貫文貰請候段申上候旨。御郡所に思召候は、藤内共は役料与申茂無之

儀に候間、左樣之儀に而も候はゞ、何れ成共迄り屆、罷歸候上村方より貰受可申儀に而も可有之哉、何れ是迄之所如何有之候哉、組々相尋早速可申上旨、御郡所より被仰渡候間、御組々村々之内に而、是迄藤内共賊を捕へ所口へ召連候節、爲造用村方より何程々々相渡候哉御聞しらべ、當月中恒方方迄御申越可被成候。此書狀先々御順達可被成候、以上。

七月十七日　　折戸村　源助

鹿野村　恒方

仲間宛所

去年のことは小拂所の賤難に關す

七月廿二日。御算用者山本清八郎を刎首の刑に處す。

〔政隣記〕

七月廿二日於公事場、前記去年十二月廿九日末々有之候御算用者山本清八郎左之通被仰付。

前記之趣共無十方次第に付刎首に被仰付。

御算用者　山本清八郎

右御書立於吟味所、公事場御用番永原久兵衛爲讀聞候上、於土壇場刎首。公事場奉行中幷御算用場奉行勝尾半左衛門吟味所に列座、御横目飯田外記、（場附不破東作當病に付出座。）場附御横目鷹栖武兵衛、檢使與力は土壇場邊に出見屆之、切人は公事場附足輕。様し者無之、死體者仁藏等境内

に埋之。

七月廿七日。江戸に於いて蘭學醫吉田長淑を祿す。

〔政隣記〕

付札、菊池九右衛門ゟ

一、二十人扶持　　吉田長淑

長淑儀御醫者に被召出、如斯御扶持方被下之。江戸居住可仕候。前田式部等支配被仰付。

右之通今日申渡候條、於此表可有支配候事。

庚午七月廿七日

右藤井芳亭同流之蘭學醫也。療養方は芳亭之方宜、學は長淑之方宜与云々。

右江戸より申來候に付寫之、且右御覺書者前田兵部殿御渡之事。

七月廿九日。前田齊廣金澤城内を巡覽す。

〔政隣記〕

七月廿九日、御大廣間御舞臺且菱御櫓・五十間御長屋夫々御成就に付、今日從御造營方御城代伊勢守殿ゟ御引渡申候。右御受取以後、御前夫々御覽。其節御先立伊勢守。

右に付御造營皆濟。依之御造營方役所今日切に而相止候事。

但、當分跡御用有之に付、明晦日より四時より九つ時迄之內、高畠五郎兵衛・三浦八郎左衛門・加藤三四郎之內替々一人充右役所江出座之外も、右に准じ罷出候筈之事。

〔三守御譜〕

七月廿九日、橋爪御門後三疋建御厩・五十間御長屋・橋爪御櫓・菱櫓・唐御門・表御舞臺・猿樂御門、御城代前田伊勢守御先立にて御巡見被遊。此時判左衛門被召連。

八月三日。前田吉德の側室實成院の五十回忌法會を修す。

〔金龍公記史料〕

八月三日。於實成寺修實成院五十回忌法會。

八月六日。諸郡に於いて製織する織物及び機具の數を錄上せしむ。

〔郡方御觸〕

各於支配所織立候絹・紬・布・立絹等、當時織元機具數何程、并機具一本に而年中織立高何程之圖与申儀、委細帳面に記當月廿八日切當番江可被指出候。近年絹・布等織主共、商人共江申談相對仕入を以致交易等躰に付、一通り被相糺候而も全員數難相知儀茂可有之哉、是等之趣精誠被遂詮議可被書出候。勿論今般被書出候外に員數洩等有之、後日於相顯者急度糺方可申渡儀も候條、得与被相糺、早速書出候樣夫々可被申渡候、以上。

御算用場

午八月六日

高田彌左衞門殿

中村逸角殿

八月十九日。卯辰蓮昌寺の住僧壽潤追院を命ぜらる。

〔政隣記〕

加州金澤卯辰町蓮昌寺壽潤儀、現住之身分に而隱居之趣に申立、下谷徳大寺致住職候段入御聽、一同被召出御吟味之上、左之通被仰渡候。

一、蓮昌寺壽潤儀、檀林致勤學候儀者、江戸寺院住職に相成候得者、程近勝手宜候迚、蓮昌寺隱居之儀者表向之申立も不致、同寺現住之身分に而蓮昌寺隱居相濟候旨、法縁幷下谷徳大寺組合寺江申聞、同寺住職願書身許糺書にも、法縁組合加印を請、觸頭江差出、徳大寺住職本寺より申付を受候後、蓮昌寺隱居願可致積り加州江罷越、病氣之由に而徳大寺江隱居いたし度旨、法縁江申越候始末、不法之至不屆に付、妙法寺配下を御構追院被仰付候。

一、宗由寺日詮・大恩寺日健・安立寺日要儀、下谷徳大寺無住に相成、(中略)日詮者法縁之身分、加印之儀不埒に付、日詮は逼塞被仰付、大恩寺日健・安立寺日要者、一同急度御叱被置候。

右者八月十九日蓮昌寺御請書之略文也。

八月廿五日。德川家治の二十五回忌法會を金澤神護寺に行ふべきことを告ぐ

〔政隣記〕

八月廿五日

付札、御横目江

來月八日濬明院樣廿五回御忌御法事に付、神護寺門前幷不明門甚右衛門坂往來、來月七日より指留可申事。

但、御法事御用に而罷通候者は、御番人承屆相通可申事。

一、甚右衛門坂御門御用懸り之面々者、來月七日迄可被相通候。御法事御執行之內、諸役懸り之面々に候共指留可申候。

一、七十間御長屋御門御番人、其外金谷御屋敷幷御廣式御用等に而不明門罷通候者、御番人承屆相通候樣可被申渡候。此度割場奉行江も可被申談候事。

八　月

付札、御横目江

來月八日於神護寺御法事之時分、近例之通御寺詰人中御步並以上御賄不被下、足輕以下江者

御贈一度被下候條、夫々可被申談候事。

八　月

〔政隣記〕

付札、町奉行ゟ

覺

一、鳥目十五貫文　　座　頭・ご　せ

右浚明院樣廿五回御忌御法事に付被下之候事。

八　月

右左京殿御渡。

〔政隣記〕

八月廿八日。來月八日浚明院樣御法事に付赦被仰付候條、可書出旨等、先達而御法事御奉行左京殿御覺書を以被仰渡處、可書出禁牢者等無之段、今日同役連判之紙面を以左京殿ゟ御達申候事。

八月晦日。米穀の俵裝を精良ならしむべきことを命ず。

是月は大盡なり

〔筒井舊記〕

御藏米俵拵繩・かわ之儀定も有之、前々申渡候趣も數度に候內、享和二年八月委細に申渡置候趣等、百姓者不及申、御代官之人々茂承知之通に候。其御暫者相改候樣に候得共、無程不宜所江押移り候躰、不埒之至に候。其內當形人下新川之分は相應に候得共、其餘は不宜候に付、大坂御廻米に相成候而茂、菰薄く候故こぼれ米多く、おいづから御拂米直段に相障り、甚御不益之儀に候間、當納より急度相改、米症者不及申、俵拵蘼物に候はゞ、幾度も爲取替相納候樣夫々可被申渡候。右に付今般土佐守殿等御覺書を以、段々被仰聞候趣も有之候條、向後俵拵等不宜分於有之者、急度咎可申付候。勿論手代共江も申渡候樣可被申渡候、以上。

八月晦日　　御算用場

改作御奉行中

八月。百姓の新米賣出を容易に許可せざるべきことを命ず。

〔部方舊記〕

村々百姓より新米容易に賣出候而者、畢竟皆濟之手支に茂相成候儀に付、夫銀・打銀上納手當之外者、堅爲賣不申樣前々より急度御締方有之、時々申渡置、右手當に相拂候節者、裁許之十村指紙を相渡爲賣拂、新米改役人茂相立置候處、近年新米出來之上拂方多、其內に者無指之米も取捌候躰。此儀者別而不屆之儀、相顯次第双方咎等茂申付候。畢竟右躰に到り候而

者、第一裁許十村より村役人ゟ穿鑿方薄、縮方等閑に致置候故に候。其内にも心得違之人々、夫銀等手當指紙相渡候節、人々手前委敷不遂詮議、村役人より願出候儘指紙相渡置、請取に向候節手代より爲相渡候分も有之様相聞え候。自然右躰之儀有之候得者不屆至極、急度相咎可申儀勿論に候。此儀に付裁許之手前可遂穿鑿儀に候得共、是迄之儀は不及其沙汰候條、當年より一統格別に遂詮議、容易に指紙不相渡、聊茂等閑之族無之様嚴重に相心得可申候。如斯申渡候上に而等閑に相心得、百姓作高に應、過分之指紙相渡候様相聞候はゞ、少茂無用捨手當可申付儀に候條、村役人ゟも譯而嚴重申渡可遂穿鑿候、以上。

午八月　　　　改作奉行

諸郡御扶持人・十村中

八月。重ねて一向宗宗祖遠忌に付き濫に金品を寄附することなかるべきを令す。

〔筒井舊記〕

東・西本願寺使僧之躰に而、御郡方寺庵ゟ宗祖年囘に付勸方有之躰相聞候。前々申渡置候通、金銭を費過分之寄附いたし候儀は有之間敷儀。門徒之内心得違之者有之、强而相勸候者も有之哉に相聞え候。畢竟右躰之儀に金銭を費候而者、自然与難澁之場に至り、取治方指障り候

儀に候。手次寺等より如何躰相勧候共、一切相用申間敷、若過分に費候儀於相聞候者、夫々急度相糺、品により持高迄も取揚候儀も可有之候。聊も心得違不致様厳重に可申渡置候、以上。

午八月　能州御郡奉行

改作奉行

能州奥郡御扶持人・十村中

九月四日　町奉行等金銀融通に關する諮問に答ふ。

〔政隣記〕

前記七月十日に有之候、前田土佐守殿・本多勘解由殿存寄之趣覚書御渡之答書、左之通。

當年米價下料に付、御召米も被仰付、下々に者買進み融通も致しよき筈与被仰渡候儀。

米價之儀者、其年之作柄暨大坂諸國之釣合を以米價相立申儀に而、御當國而已下料与申儀者無御座候得共、買進み或者不買進等之儀者、三州人氣見込有之年柄者、米中買共江旅人注文多申込候故、人々自然に買進申躰に御座候處、當年者旅人注文薄由承申候。併當年者御召米例年与者餘計被仰付候故哉、兼而米價風評に申平均候より者少々直段も宜敷、御召米之詮も御座候樣奉存候。融通之儀者、尤米價高下に不拘、大躰御當所にも米方通用銀定數兼而相しらべ置候處、銀仲取次仕候銀高凡二千貫目計、半納之節三州旅人より入立申銀

旅人といふは金澤以外より來れる米相場師なり

銀仲は貴木家の金銀を米相場師に仲介貸附するもの

半納は七月朔日

千貫目計、例年御算用場より御召米代七・八百貫目より千貫目計も相渡、彼是都合に而四千貫目計に而、半納拂米十四・五萬石代取捗申躰に御座候。然處當半納者、去年より御算用場御手操切手に而千貫目計、古米延御召米に而五百貫目計御借延に相成候に付、夫切通用銀之內引居申形に、內々米方役人共申聞候。其上近年船手打續損分に而、此金銀取入方も餘程不運に相成申儀与承申候。

一、近年商方之風俗に而、金銀をしめ、人々利分計に心懸候族多、手段をなし申氣味合、武士は商家之利に陷られ申故之旨。

此儀米方に而者、半納御年寄中拂米八ヶ所を立物と仕、月々中買共大坂米價之高下を以、前々より商いたし來候。其中に者金銀しめ申樣之儀も有之躰に候得共、先者米方切之儀に而、右商方には前々より仕法相立居、時々手を入候得者却而騷ヶ敷相成、色々奸曲之申込抔も出來仕候に付、前々仕法通に仕置申候。併右立米商者、風俗不宜ものに御座候得共、右商指止候而は、久々成來候儀、惣樣不景氣に相成、半納・本納共賣捌も決而不宜、曁右商方に付而、旅人も入込通用之ためにも相成儀に御座候。其上町人は利に趨候者故、當地商指止候者大坂抔に而商仕、却而金銀他邦江漏可申哉共奉存候。御本文武士・商家之利に陷候哉之旨、此儀甚御尤に奉存候。夫故半納・本納之節者、密々役人廻し相しらべ申候。

先者金銀相貯能在候者は、増歩次第所持一ぱいに指出候形に而、しめ申譯は無御座候。且又米價下料に買取申儀者、諸國釣合を以直立仕、其上者其砌之旅人方進樣次第に而、近年既に七月高貴、末に成下落損分之爭も連年御座候而、不得止事高下過分之損分に而、近頃町方疲弊之一條に御座候。

一、於融通、米價高下に拘り候事者有之間敷、若又商家之者共衰候而も、融通にも手段甚難儀之筋も萬一有之候哉之旨。

融通米價高下に拘り不申儀者、前段申上候通御座候。商家衰候儀者、近來手廣御家中取替仕候中買共も、近年打續潰れ申儀は誰彼見聞之通に御座候。畢竟御家中取替も年々不勘定故、終に者取替候者損失に相成、末々旅人向等江之借り出返濟指支及潰、右不議定より融通も支申儀、近年甚難事に御座候。

一、商家に而奸利をいたす習俗与申儀。

此儀前段にも申上候通、米商毎月五日切取引仕候處、米價高下により損益有之事故、種々無實事儀を申ふらし、買しめ・賣崩抔与申立、世上にも拘り、融通にも指障、奸利も仕候者有之、不容易事之樣中買共相互に申合候事も、畢竟五日取引高下をいたし可申工に而、五日過候得者、色々申込候儀は虚言与相成、何等之申分も出來不仕故、前々米方格合之通

に、押付嚴重爲遂指引申候。

一、近來町中困窮与申事も不相聞、利潤も品々有之事に候得者、融通相塞申譯者有之間敷与申儀。

町中諸商賣人數多之內、融通に拘り申商賣は中買第一に而、幷質商賣人等に而、其外大商与相見え候者、多分者上方より仕送を請商賣仕候者共等に而、見分者宜敷御座候得共、誰々手厚之仕込与申者も、實は絕々成躰に御座候。中分以下共日稼之者共、近年御造營も御座候に付、相應に渡世も仕躰に御座候得共、其者共渡世相應に仕与申迄に而、世上融通之所江者響不申、小まへなる者共に御座候。兎角右中買共者、前段にも申上候通近年難澁仕候故、旅人等江幾度も損分を懸申躰に而、年々旅人等より入銀も薄相成候故、融通塞易奉存候。

一、惣躰商賣方之品高料に相成申儀、元來武士之困窮より拂方不行屆して之譯与相聞え候得共、元價不相應に賣出候故、拂方不指引に相成候旨。

物價高直之儀者、武士ども困窮之基に而御本文御尤至極、則每度被仰渡も御座候儀。然處魚問屋抔に而、元價之樣子しらべ見申候處、寬政三年魚鳥入高、文化六年入高と引競候處、入高者同樣之儀に而、代料に而者倍近元價に相成居申候。右は諸浦より入込候魚高よ

り買人多故、元價倍にも相成、暨奢侈に而高貴に而もはびき強き故哉与奉存候。其外衣類抔も品物華美に相成、質素之品々者無御座、此風俗上方或江戸より押來候而、以前之直段に引當之品は無御座様相成、畢竟衣食住共末々輕き者迄も、自然与宜相成風俗に成來候儀者、全御國に限不申、諸國一統之風共可申哉。尤先々拂方不全故より、自然直段にも拘り申儀与奉存候。暨江戸表御門外之物價は安く、御門内に而格別高直之儀者、年々詰人家來末々迄不指引之人々も有之故、其價を取申儀与奉存候。町人之風俗何方も同様之儀与奉存候。併元價不應様に賣出候處、或元方高直に無之様之僉議方も可有御座哉与奉存候間、猶更遂詮議可申与奉存候。

一、諸運上抔も中に者相増申品も有之哉、御益抔与唱候品に、御仕置に背申品ども多有之故、復而御費用多に相成候旨。

此儀町方に而諸運上に、前々より嚴重に上來候小物成銀之外は無御座候得共、享和二年御用番江御達申儀者、前々御用銀幷先納銀書上銀之方江一萬石充御渡之筈之處、其後古々米千石充御渡、右受取人之内少々之銀子受取、過分上切之顯抔可承届手段無御座、以前富貴之妻子も路頭に立候族、不便至極之趣に付、旁質屋株銀・呉服株銀打込書上、御用銀等御返濟之方に右千石代与打合、去年迄相渡、右取計に而書上銀等餘程御返濟之譯も相立居申

候。尤右御渡方相濟候上者、諸方御土藏江上納仕候趣も、其節御達申置候。此外料理屋株銀貸附利足取立候分者、他國御使者等之御入用に引足申儀、文化元年御用番御聞届之上、當時右之趣に相成居申候。町會所切に而運上等取立申品無御座候。

右今般御覺書を以被仰渡候品、兼而承置候趣共相調申候。勿論夫々被仰渡候趣、猶更以後得与相心得詮議可仕候。猶又時々御聞之儀も御座候者、時々被仰聞被下候得者、私共心得に茂可相成儀、其時々詮議追々申上度奉存候、以上。

九月四日

岩田傳左衛門

津田左近右衛門

右紙面相調御達可申處、樣子有之先見合置候得共、重而又樣子有之、九月四日御城江持參、左之添紙面共勘解由殿江、於御別席同役岩田氏申談、猶口達相添御達申候事。

通用方等之儀に付、先達而御覺書を以被仰渡候趣、奉得其意候。兼々僉議仕置候譯合者道理合迄に而、申譯而已仕候樣に相當り、却而被仰渡御趣意に相違も仕儀に御座候得共、相調指出候樣被仰渡候に付、別紙上之申候。併元來僉議方未熟不行屆故と奉存候。已來萬端僉議之筋心得方も可有御座、夫々被仰渡之趣奉得其意候、以上。

九月四日

岩田傳左衛門 判

津田左近右衛門　判

前田土佐守樣

本多勘解由樣

本文等紙面御達申候處、重而被仰聞之趣有之に付、重而又御達可申筈之處、兩人共十月轉役被仰付候に付、跡役水越八郎左衛門等ゟ申達候事。

九月六日。繪師岸筑前介將に歸京せんとするを以て物を賜ふ。

〔政隣記〕

九月六日左之通。

京都畫師　岸　筑前介

白銀百枚　染物五端　外に御內々を以白銀二十枚・生絹三疋。

右筑前介御用相濟御暇被下、近々發足歸京之筈に付、今六日旅宿ゟ御使御大小將北川榮太郎を以被下之。

九月十五日。前田齊廣の女直姬卯辰山觀音院に宮參を行ふ。

〔政隣記〕

九月十五日朝五半時之御供揃に而、長谷觀音院ゟ直姬樣御宮參。御道筋等左之通に而九時頃

御歸、右主附御用御留守居物頭永原七郎右衞門勤之。

御道筋。御廣式より土橋御門・御宮坂御門・西町口御門御出、博勞町・尾張町・淺野川橋より觀音町通、觀音院江被爲入。

御還り最前之御道筋に而、博勞町篠原彌助横通り、神護寺前・七十間御長屋御門より金谷御廣式江御立寄被遊、御戻、右御廣式より七十間御長屋御門、甚右衞門坂御門より御廣式江御戻被遊候事。

附、道橋方與力御先例之通出候樣、從御用番被仰渡。

〔政隣記〕

九月十六日御居間續於御舞臺、左之通御能有之。昨日直姫樣御宮參被爲濟候御祝之御含与云々。

（番組略す）

九月十五日。犀川に漁撈を行ふ者に川役運上請負人より鑑札を受くべきことを命ず。

（本文のことは九月十五日にあり）

〔政隣記〕

付札、御横目江

公儀町中村屋善右衞門与申者、去々年より五ケ年之間犀川魚殺生請負申付、川役運上銀致上

納候に付、都而致川殺生候人々者、見合札を受致殺生候樣一統相觸置候處、無札之殺生人猥に入込、締方行屆不申、運上銀相勤兼候間、嚴重川役銀指出、札を受可申候。若無札に而入込候者は、急度相糺候樣致度旨、町奉行申聞候條、致殺生候人々者、去々年申渡置候通、急度可相心得候。

右之趣一統可被申談候事。

九　月

九月廿二日。二ノ丸御殿造營竣成を祝する爲明年二月儀式能を擧行すべきことを告ぐ。

〔政隣記〕

九月廿二日、昨日左京殿より被仰談儀有之候條、四時過可致登城旨依御紙面、則罷出候處、松之間二之間御屏風圍之內、御規式御能御用御取噯之席に而、左之御覺書左京殿御渡之。

御城御造營茂御成就之儀、御家督幷御入國御祝之御含旁、以來二月御能可被仰付旨被仰出候條、萬端享保十年・延享五年御祝御能之節之趣に被相心得、御用意可有之候。尤其節之樣子可被書出事。

九　月

九月　他國者に對し入墨の刑を施すべき手續を改む。

〔公事場御定書〕

付札、公事場奉行ゟ

他國者御領内ゟ入込致賊、召捕候上入墨申付候儀、住所慥成者は御代官所等曁其御領主ゟ御屆有之、無構者之段申來候上、入墨可申付儀之段、寛政十一年申渡置候得ども、今般於江戸表右入墨刑有之御方ゟ御聞合有之、自今は御料・私領共生所等慥に申候者に而も、一何とか不及懸合而難成子細有之者は格別、一通りに而者其先々ゟ御屆無之、入墨可被仰付候旨被仰出候條、可被得其意候事。

文化七年午九月

十月十日。金澤城内の越後屋敷を復興すべきことを命ず。

〔政隣記〕

十月十日、越後屋敷御造營之儀被仰出。

越後屋敷は藩侯の留守中老臣の會合する所

十月十日。能登各浦に於ける煎海鼠・干鮑の產額增加したることを賞す。

〔郡方御觸〕

御預所能登國小嶋浦外六十一ヶ所。

右者煎海鼠・干鮑出方之役に付、去々冬相達候之所、浦方江之申付方行屆、浦方之者も心を用候事与相見え、出方も相増、都合宜敷候間、此段國元江相達、浦方江も右之段申聞、猶致出情候樣可被申付候。

大坂町御奉行平賀信濃守殿御役所江、同所詰人之内御呼出、別紙之通御申聞之旨に而、御用番年寄中被相渡候に付、寫相達候條、被得其意、夫々可被申渡候、以上。

十月十日　　御算用場

高田彌左衛門殿

中村逸角殿

右寫之通申來候條、浦方之者江右之趣夫々申渡、猶又此後致出情候樣、是又可申渡置候。此紙面落着より可返候、以上。

高田彌左衛門

能州四郡十村中

十月廿八日。山伏に勸進許可を證する爲の紙札を授く。

〔郡方御觸〕

山伏勸進札之儀に付、寺社御奉行江懸合候所、別紙之通申越候に付、承知之旨及返書、則山伏勸進札二十八枚指越候條、得其意、先達書出候村方江相渡置可申候、以上。

十月二十八日　高田彌左衞門

能州四郡十村中

〔郡方御觸〕

山伏見合札御渡置之ヶ所付

劒地村　門前村　大澤村　輪島村

鈴屋村　折戸村　飯田村　松波村

宇出津村　鵜川村　甲村　中居村

曾福村　〆十三ヶ村

一、十三枚　山伏見合札

右ヶ所之通、山伏見合札一枚宛御渡置に御座候。尤右に付御郡所より添御紙面相渡候得共、四郡一紙に付、口郡より順達に御座候間、御組當りヶ所御順達可被下候、以上。

午十月二十八日　番代清藏

十村中宛所

山伏勧進見合札相改度之旨、先達而山伏頭共願之趣承屆、則相改候紙印札去冬相達候處、於御郡方勧進与申儀御制禁に候。先年相達置候札之内にも勸進与申儀書載候札も有之候得共、左候而者於御郡方一統指障候趣も有之候間、右名目爲指省相達候樣、其節御返書之趣致承知候。勸進与申趣於御郡方指障候儀者、左樣にも可有之候得共、元來山伏共之勸進与申者、一派之御掟茂有之躰、其上且家等も無之、回旦を以成立候者共に而、外並勸進与者差別も可有之事に候。既に越中筋者、夫々今般相改候見合札与、先年札取替相濟、當時越中筋迄一派之者共回旦いたし候族に而、山伏共甚及難儀候に付、能州筋茂是迄之通見合札相渡り候樣仕度段、每度願出候。御郡方においても其最寄々々与不一樣候而者、山伏共致迷惑候儀に候間、今一往申達候。格別之御詮議有之樣にと存候。且紙札に而者永く取扱方不宜、木札に取替有之候樣有之度旨も御申聞、致承知候。乍去今般相改候趣意者、配下之山伏共江永く渡置候而者、御締方にも指障申趣致出來候躰。依而時々相改渡置度旨に而、今般紙印札相改候儀に候間、是又左樣御心得有之度候。猶御報次第重而見合印札相達可申候條、早速否御申聞候樣有之度候、以上。

十月二十日　　前田式部

中村逸角樣

本文の申渡は十一月朔日に在り

高田彌左衛門様

十一月朔日。前田齊廣、諸士の教養を重んじ風儀を改善すべきことを諭す。

〔政隣記〕

御付札、組頭江

延寶之頃より惣士民共御教養之儀被仰出、組頭等心得之儀も委細に被仰聞、連々申達、何れも承知之通に候。然共最早百年餘にも及ひ申事に候得者、時勢人情次第に相降り、右被仰出をも自ら違失に至り候哉無覺束候。尤今更改而申聞るに不及儀に候。右條目之儀聊無違失急度相心得、子弟者不及申、何れも文武之心懸第一に、風俗等之頽敗少に而も立復り候樣有之度存事に候。何れも精誠凝丹誠、日夜無他事樣有之、御教養被仰出等之御主意堅可相守候。就中諸士勝手仕損之子細、五十ヶ年餘も借知申付候故之樣に面々存込申族も相聞、難澁之程も深く令心痛、當年より借知も相改、尤勝手方運ひ次第、往々全く可相返存寄に候。何れも彌以質素に罷在、驕奢共に相防、義にまかせ申心得專要に候。且又頭たる者、組・支配之人々之儀、褒貶共正路に可申聞儀者必然之事に候。乍然近年別而頭等手に及がたく故に候哉、何となく强願等多相成躰、先以不本意之仕合に候。今度願方之儀當分難承届趣申渡置候。是以後と

ても容易難聞届儀者可為同事候。此後改而申聞候品無之候條、其心得可有之候。畢竟者仕置にも指障候族、是等者頭々不心得之事に候。其境能々會得いたし、常々急度可致指引事に候。以來者頭方之儀强而申立候意氣無之、年寄共等可任指圖候。如此申出候上、若不吟味之頭方於有之者、尤以頭等可為越度候。時宜に寄急度相咎申儀可有之候條、可存其旨候。將亦延寶之頃より被仰聞候條目等、當時に而者取扱兼申品も可有之候條、若難及趣者精誠遂僉議、追而可及言達候。實に皆々奉公之心懸第一に候。併教養之儀無之而者、頭々もとづき申處無之事故、借知相改、今般又々存寄之趣申聞候。當代度々申聞候品も有之候得共、于今其主意難相立儀、皆以我等之不才是非之外に候。何れも嚴密遂穿鑿、此度之儀者申聞候主意相立候樣、連々可申談候。暨古來被仰出候制法、急度相守候樣可相心得候。取分て組頭之儀者、常々萬端相愼、政事之助成に茂相成候樣、心懸肝要に候事。

庚午十一月

御付札、組頭江別段。

近年別而諸士一統難澁を乍申立、次第に奢侈之方に相移候躰。夫故買懸り等自ら相重み、町方に者彌諸物高價に至候而、交も〳〵不義不埒之族に候。後々は次第に米價も劣り、諸士及困窮に候樣に相成候儀、畢竟一統不心得之第一に候。剩其虛に乘じ、商家に財貨之權を取候

様に相成、依之自然与不届之事共致出來候躰。諸士者文武之心懸薄く、奢侈に至り候故与相聞え候。元來五十ヶ年餘借知申付候を申立候儀、別紙に一統申聞候通に候。奢侈を戒め、奉公之心懸第一に候者、勝手甚取亂し申所ゟ者至り不申筈に候。是等之儀、延寶以來委く被仰出候儀者、別段申聞候通に候。然處致忘失、上之儀を批判候人々茂有之哉与、皆以不心得之事に候。尤當時之躰に而者、何程敎養之儀申聞候共、奢侈之風躰に心附も無之、殊更漸々文武之心懸薄く、自ら子弟之成立も惡敷相成、隨而困窮深く、往々如何共致方無之場に可至段者必定之儀に而、先以不忠至極之事に候。家中に而申立候處に而者、人々之放埒等に心附無之、仁惠之薄様に心得候哉にも候得共、いか程相救候とも共しるし有之間敷候。諸士は連々不義之族に而、商家者奸利而已に相成候意氣者心外之事に候。依之町中風俗等之儀に付、町奉行ゟ急度申渡候譯も有之候條、諸士之儀も其心得に而、頭々嚴重之指引尤に候事。

文化七年庚午十一月

付札、組頭ゟ

諸場・諸役所等夫々御定之通急度可相守處、中古以來古格相紊、剩享和二年格別御省畧之儀被仰出候砌、舊例古格に不拘遂僉議候樣被仰出候儀有之に付、別而右被仰出候にかこつけ、中に者私を構へ、下として手廻しなる仕法を相立候而、畢竟御勝手御難澁を申立候族、或者

其場等之仕癖を以舊例古格抔と申募り、諸向ニ私与して強而及懸合申儀も有之。其上諸願抔も中古以前と者段々嚴敷相成候風俗に押移り、當時之處に而者誠に御大家之樣に無之、正に御小身之御家中之如く、第一諸役人等も御上を不奉恐樣に相聞候。殊更御上之儀を色々唱申躰ニ隨而年寄中等申渡候儀をも、何となく等閑に相心得候姿に成來候より、御奉公を大切に不存候意氣にも自然与相移り、且又諸返上方等も人々難澁を申立候而ハ返上方も猥に相成候族も有之。是等皆以御家來として御難澁に成候樣に致し申貌に候。箇樣之儀をも人々嚴重に心懸、私を捨公に從ふ心得專要に候者、深く御難澁と申所ニ者被爲至間敷譯。暨江戶詰幷御供御使に而も、雜等分限相應何分細かに心得候而、以來不時願方抔も可成丈け精誠相減申心得肝要に候。就中諸場・諸役所も前段之通、其面々之下役等に至迄、甚私欲多に相成候而、種々手段をなし、頭・奉行等者下を制し申儀及がたく、自ら不用之費共多相成事に候。尤古來より之御定等を守り、下々迄一切私を捨、誠實御奉公心懸候得者、別に御儉約と申儀も有之間敷候。前々右等之趣に準候被仰出も有之候得共、何れも忘失いたし申族多、此儀者頭・奉行等不心得之故之事に候。右等之趣得与相心得、諸場・諸役所等も嚴重に風俗相改り候樣、各より一統可被申談候。此段可申聞旨被仰出候事。

庚午十一月

付札、組頭江

從御先代格別之思召に而、兩學校被建置候而、文武稽古被仰付候處、次第に出座人薄く相成、不情之段不應思召候。子弟之儀者不及申、何れも心懸不絕出情尤に候。如當時に而者、學校被建置候詮も無之儀に候條、何れ茂以後者心懸出座可仕事に候。此段各より一統可被申談旨被仰出候事。

庚午十一月

付札、組頭江

今日御直之被仰渡に而被渡下候御書出之趣等、急度被奉得其意、夫々申談有之、今般之儀者嚴重何茂相心得、幾重にも風俗等相改可申事に候。此度格別に被仰聞候上、若相改不申、不心得之人々も有之候得者、實に侍に不似合心底与被思召候條、其節者乍御心外、不被得止事可被加御嚴制候。此段拙者共より譯而可申聞旨被仰出候間、夫々不相洩樣可被申談候事。

庚午十一月

前記に有之御意之覺。

今日何れ茂江書立相渡候。今般之儀者其方共に茂格別嚴重に相心得、組・支配有之人々江夫

々可申談候。且又町奉行も此度申渡候儀、格別嚴重可相心得候。

十一月朔日。前田齊廣、金澤町奉行の職務に關する心得を諭す。

〔政隣記〕

十一月朔日於御前、町奉行江被渡下候御書立左之通。

御付札、町奉行江

諸士難澁せしむるも、商家に財貨之權を得て、米價をも自由を致し、高價の品をも賣買し候故、奢侈之至に相成より之事に候。金銀通用方不宜抔と申も、米中買等之唱申候哉、金銀をもしめ申候、虛唱も相交り、不埒之躰共に候。附而は諸士も買掛多く相成候族に而、諸物之高價に至り候品茂有之樣に申唱候由。是等之意氣者夫々役人之不穿鑿故之事に候。町家之者共申に者黨をなし、面々江取入申樣之事共甚以惡敷躰に候。士は不義をなし、商は不埒之商を以相懷候樣に而、諸士次第に困窮之基に相成事に候間、以來商家嚴密可及穿鑿候。就中奢侈之事は、商家江多寄、高價之品を以夫々賣買申にも、自然与右風俗も移り候品共も可有之哉。是等之本元に心付、制し可申事に候。町役人之內等にも、不心得之者共有之候者、追而無油斷相糺、邪曲之者は取拉候樣に候者、商家之德に茂可相成候事に候。萬事嚴密可遂穿鑿候。奉行たるもの右等之心懸專要に候事。

鼠多御門は鼠御多門ともいふべきを誤りたるなり

十一月四日。金澤城鼠多門附近の工事成る。

〔齊廣樣御傳略等之內書拔〕

十一月四日鼠多御門續等御出來有之也。

十一月九日。昨今兩日前田治脩の一周忌法會を寶圓寺に豫修す。

〔政隣記〕

來月太梁院樣御一周忌御法事御取越、於寶圓寺御執行之節拜禮刻限等。

一、八日　卯刻より辰刻迄　各

一、同日　辰刻より巳刻迄　御大小將御番頭　御大小將四組

一、同日　未刻より申刻迄　御大小將橫目　御大小將二組並支配共

右刻限無相違樣被相心得、各幷御番頭等は長袴可有着用候。且又組等之人々拜禮之節、其頭等御寺江相詰候儀、其外萬端前々之通可被相心得候、以上。

十月廿一日　長甲斐守

津田左近右衞門殿

但同役五人連名

〔政隣記〕

十一月八日五半時御供揃、御法事御奉行御案内に而寶圓寺ゟ御參詣、讀經御聽聞、八半時御歸、御法事は七時過相濟候事。

〔政隣記〕

一、御法事差定左之通。

太梁院殿一周御忌御法事差定

十一月八日

卯刻轉讀　大般若經

辰刻上粥　般若心經

同刻獻粥　大悲神咒

巳刻修禮　達磨講式

午刻　水陸勝會

同刻　拈香法語

同刻上供　般若心經

同刻獻供　楞嚴逶行

同　九日

卯刻　轉讀　　　大般若經
辰刻　上粥　　　般若心經
同刻　獻粥　　　大悲神咒
巳　刻　　　　　上堂提唱
午刻　上供　　　般若心經
同刻　獻供　　　楞嚴遶行
同刻　放生　　　秘密神咒

以上　　　　　　寶圓寺

〔政隣記〕

昨八日辰刻之御法事初り之頃、御法事御奉行より御案内之上御參詣、惣持寺等諷經御聽聞相濟、重而巳刻之御法事達磨講式御聽聞相濟、御燒香之上御歸殿。夫より法梁院樣御代香。
一、今九日昨日之通御供揃に而、辰刻御法事中御案内之上御參詣、紫野芳春院等諷經御聽聞相濟、重而巳刻之御法事より終り迄御聽聞之上御燒香。夫より和尚江於御前被下物有之、披露御大小將。畢而淡路守樣・備後守樣御使者御目見被仰付、御歸殿。夫より法梁院樣・御前樣・直

姫様・貞乗院様御代香、淡路守様・備後守様御代香有之。畢而座見ニ夫々拜領物上座見ニ銀三枚、下座見ニ同二枚充。有之、七時過被爲濟。頭分以上之諸人御法事御奉行席ニ出、兩日共無御滯被爲濟候恐悦申演退出之事。

十一月十日、前田齊廣の明年參覲の期を三月と定められたる報金澤に達す。

〔金龍公記史料〕

十一月十日。來年東覲期爲三月之奉書至。

十一月廿一日。明年より諸郡に一萬石の籾納を命ず。

〔郡方御觸〕

御付札に、御算用場奉行ニ

一、一萬石　籾納

右之通以後毎歲籾納被申渡除置可被申候事。

庚午十一月

右之通御算用場より被申談候に付、寫相達候條、可得其意候、以上。

十一月　　　　改作奉行

諸　郡

今日御改作所より御別紙御渡被成候に付、當年之儀者最早時節も後れ、迚も籾納不仕得候段御達申上置候間、來年より以前籾納有之候節之振を以、諸郡割符いたし籾納可爲致旨、御入念被仰渡候間、爲御承知如此に御座候、以上。

午十一月廿一日　　田井村次郎吉

諸郡御扶持人中様

十一月廿五日。二ノ丸御殿の造營成就せしを以て關係者等に酒肴を與ふ。

〔政隣記〕

十一月廿五日、御造營皆出來之御祝、今日就被仰付候、御普請懸り之人々幷外御殿詰之面々一統、御吸物ふかし・御酒・御取肴（巻鯣等年頭御具足鏡餅御祝之節之通。）頂戴被仰付、御普請懸り之人々、幷道成寺御能拜見物共未仕人々、御能拜見被仰付御番組左之通。

但、本文之通に候得共、道成寺御能御馬廻頭之内拜見願候人々も有之。同役に而者堀平馬朝詰之處、自分年當番御番頭・御横目拜見之儀引取相願候處、御聞屆に而拜見被仰付。

高砂 御　八島 良之助　六浦 彌三郎　道成寺 御　祝言岩船 庄九郎

三本柱 次郎吉　盆山 長左衛門

右御能八時頃初り、暮六半時比相濟。

十一月廿五日。老臣本多安房守、金澤城の造營成るを以て算用場奉行・町奉行に覺書を與ふ。

〔政隣記〕

十一月廿五日、御算用場等ゟ御用番安房守殿左之御覺書御渡被仰渡。

付札、御算用場奉行ゟ

御城御造營も、士民之志により全く御成就之儀、誠感被爲思召候事に候。乍去不今更御財用之御手操故、是に被爲報候御恩澤も薄く、急に思召之通に難被爲成、朝暮恥被爲思召候。然共追々思召之通に至り候樣、庶民安穩之御政事逐年被仰出度思召候。就中來春は久々無之御入國御祝儀等之御含に而御能被仰付候事茂、御造營御成就故之儀与御喜悦被思召候。旁以先般志に而指上候金銀等、町・在之分は來春より御手操次第少々充往々可被返下候事。

右之通被仰出候條、被得其意、町・在之内金銀等指上候者共ゟ申聞候樣、遠所町奉行・所々御郡奉行ゟ可被申渡候事。

午十一月

金澤町奉行江の覺書は、末段左の通。

右之通被仰出候條、被得其意、當町之内金銀等指上候者共江可被申聞候事。

十二月朔日。前田齊廣諸士に金澤城造營成就を悅ぶの親翰を下す。

〔政隣記〕

十二月二日五時過、昨日之依御廻文人持・頭分一統登城、御横目所江及案内扣罷在候處、九半頃松之間續御小書院横御廊下、瀧之間・矢天井之間・柳之御間御廊下裏、御式臺之方江懸列立、八時過松之間二之間に年寄衆御列座、中央に御親翰披き在之。右拜戴之儀御用番助右衛門殿被仰聞、列之通人持・御馬廻頭等は人多に付五・六人充、其外定番頭は一役充罷出候處に而、前記之通拜戴之儀助右衛門殿被仰聞、進み寄一集に拜戴、畢而退居。且御横目中指引之事。

難有仕合之旨、上に列し候者助右衛門殿江申述。

御親翰拜寫

一統之志によりて城造營最早全致成就、追々古來より之作法も相整、殊更來春者六十年來無之規式も申付候事、偏に何れも志にて、相應之城と成し申す儀、專ら國恩を存付故之儀与、朝暮感じ存る事に候。何れも厚き志之程深く令大慶候段、一統江可被申聞候、以上。

十二月朔日

年寄中

十二月二日、前田齊廣又老臣に金澤城成就を悦ぶの親翰を與ふ。

［諸事覺書］

一、御渡物有之候間松之間江各列座候様、關屋中務申聞候に付、年寄中・御家老中列居いたし候處、左之御親翰御披、中務持參指出候に付、各拜戴之上、結構之被仰出難有仕合奉存候、土佐守等不罷出人々江拜戴爲仕、追而御請可申上旨當座之及御請候事。

城造營も、士民之志によりて不日に成就之儀、大慶之程深く可被察候。何れも國恩を厚く存付候儀は、偏に各常々政事に被盡丹誠候故之儀与、寔に感悦不少候。此段譯而申聞致書付候而遣候、以上。

十二月二日　中将

前田土佐守殿　長甲斐守殿
前田伊勢守殿　本多安房守殿
村井又兵衛殿　奥村左京殿
横山山城殿　奥村助右衛門殿
本多勘解由殿　津田玄蕃殿

前田織江殿　　前田修理殿

前田兵部殿

追而主税・掃部　龍山ゟも今大慶候段可被申聞候、以上。

一、主税・掃部ゟ奥之間において、右御親翰拜戴月番被申談。

一、龍山儀八時過登城、右同斷之事。

十二月七日。従來諸士に貸與したる金銀の返納方法を寛にす。

〔齊廣様御傳略等之内書抜〕

十二月朔日、中將様思召被爲在、御家中之人々拜借之金銀上納、諸方御土藏ゟ打込返上之年賦、以來半分宛上納、跡半分は被下切に被仰渡候。足輕・坊主・小者は拜借方上納之分都而被下切に被仰渡候。去丑の年難澁之面々ゟ町會所より御貸渡銀も、思召被爲在、以後不及返納御用捨被成候段被仰渡、御仁惠乎一統難有がるなり。

〔御觸留〕

定番頭ゟ

思召被爲在候條、享和二年諸返上打込に相成、百石三十目充上納いたし來候分、幷其後御使人定式御貸渡金を初、品々年賦、又は知行割等を以諸方御土藏ゟ返上之分、且詮議中返上方

未決之分共結込、自今百石に付十五匁充之圖りを以、年々右御土藏江可致上納旨被仰出候。
猶更委曲之儀者、御算用場可被承合候事。

但、知行當りより少銀之分者、是迄之通可致上納候。且當年當り全返上相濟候分は其通、
當年當りに而茂未返上不相濟分者、打込に相成候事。

一、足輕・坊主自他國御扶持方返上取立方之儀者、是迄之通取立、其外享和二年打込に相成
候分返上銀、曁其後品々御貸渡之分、都而被下切之事。

右之通被仰出候條、被得其意――

右之通一統――

午十二月七日　　奥村助右衛門

〔御觸留〕

御家中之人々、享和二年諸返上打込、知行百石に付三十目充之圖を以上納之分、以來百石に
付十五匁充之圖を以、每歲是迄上納限月之通上納被仰渡候事。

但、足輕・坊主・小者之分は被下切之事。

一、享和二年打込返上相改候以後、別紙之通御貸渡之分者、享和二年打込返上當時殘高之内
江結込、前段同樣上納之事。

但、足輕・坊主・小者之分は被下切之事。

一、知行當より少銀之分は、是迄之通に候事。

一、當年分返上相濟候分は、其儘に而指引無之候事。

一、證文は不及相改候。享和二年已後借用有之分は、人々印形之紙面を以、當場江可及屆事。

右自他國御扶持方返上之外、右之通上納方之儀、改而被仰付候段被仰渡候條、被得其意、急速同役中傳達可有之事。

右之趣被得其意、落着より可被相返候、以上。

午十二月　　　　御算用場

〔政隣記〕

覺

一、早打御使人定式御貸渡金、卅ヶ年賦返上之分。

一、當御使人定式御貸渡金、廿ヶ年賦返上之分。

一、御使人幷御使人並不時御貸渡金年賦等品々、暨僉議中返上方未決之分。

一、御家中之人々之內、御預所黑嶋村善右衞門より借用銀御取替を以相渡り候付、知行百石に付廿五匁充之圖りを以返上之分。

一、大坂詰人役地除銀借用年賦返上分、暨同様之趣に而此表に而小拂銀借用之分。

一、文化四年以來爲御内用海邊役人等江、百石に付二百五十目充之圖りを以御貸渡、廿ヶ年賦返上之分。

一、江戸町人伊勢屋與三右衛門江、御家中之人々之内飯米代等滯金御取替を以相渡候に付、三ヶ年賦を以返上之分。

一、他國詰人御國江之御暇相願、罷歸候節御貸渡金、三ヶ年賦返上之分。

一、他國詰人不時交代等に而罷歸候節御貸渡金、七ヶ年賦返上之分。

一、他國詰人等役向物入等多有之に付御貸渡金年賦等品々有之、暨僉議中返上方等未決之分。

一、御歩小頭死去跡、會所裁許御貸銀せがれ引受、每歳五匁充諸方御土藏江上納之分。

一、豐島小十郎稽古所致修覆候に付、依願御貸渡銀、十ヶ年賦返上之分。

一、江戸表より交代等に而罷歸候節、仍願御貸渡金銀年賦返上、暨返上方未決之分。

一、御造營方御用烈敷相勤候御醫師諸入用多、仍願御貸渡銀、十ヶ年賦返上之分。

一、御前様御着輿之節、御供又者女中指添等御用相勤候に付御貸渡金、十ヶ年賦返上之分。

右享和二年諸返上打込に相成、百石に付卅目充諸方御土藏江上納仕來候處、今般相改右ヶ條之分も打込、百石に付十五匁宛之圖りを以取立可申候。尤知行當りより少銀之分者、是迄之

通取立可申筈に候。

但、當年當り全返上相濟候分者共通、當年當りに而もいまだ返上不相濟分者、打込に相成候間不及返上候。

一、足輕・坊主・小者、地・他國御扶持方返上取立方之儀者、是迄之通取立、其外享和二年打込に相成候旨返上、暨其後品々御貸渡之分都而被下切に候。

右之通被仰出候事。

午十二月

十二月十日。金澤城燒失以後免除せられたる幕府の獻上物を復すべきことを告ぐ。

〔政隣記〕

十二月十日、前月廿九日江戸發之御用狀到來。

依御燒失五ヶ年御獻上物御用捨之處、御獻上被成度旨御願之通御聞屆。依之御禮御使札を以可被仰上哉等之儀御伺之處、御使札に而可被仰上旨、御用番御指圖之段今便申來。

別紙御用番助右衛門殿御渡、御一統江私より可申談旨被仰聞候。則御渡之覺書寫三通指懸申候。御承知被成、御同役・御同席方等御傳達、御組・御支配御申談可被成候。且又御組等之內

七日とあるは十日なるべし

裁許有之面々者、其支配江も不相洩相達候樣御申談、早速御廻達、落着より御返可被成候、
以上。

十二月七日　中村九兵衛

十二月十四日。種油缺乏するを以て木實油を賣らしむべきことを告ぐ。

〔御觸留〕

御横目江

木實油爲致商賣候儀に付、別紙之通町奉行申聞候條、人持・諸頭幷役儀御免之頭分、暨隱居之面々江茂、不相洩樣可被申談候事。

十二月十四日　奥村助右衛門

當年油拂底に付、木實油も爲賣申候。右油者食物に用申儀難相成、暨燈火抔に而たばこ等給候儀不宜由に御座候。當年菜種拂底に付、小賣之者江は、木實油當二十日より相交爲賣申候。寛政三年・享和三年に茂取寄候節、御家中一統被仰渡御座候間、今般も一統被仰渡候樣仕度奉存候。且又菜種油望之者は、金澤町元江相向候樣、是又被仰渡御座候樣仕度奉存候、
以上。

十二月十二日　水越八郎左衛門

奥村助右衛門様

本年六月十七日の條參照

十二月十九日。脇本長次郎流刑を命ぜらる。

〔政隣記〕

附札、別所宗右衛門ゟ

脇本乙次郎せがれ　長次郎

右長次郎儀、當六月於學校大村武次郎四男乙四郎与、字突取遣之儀に付戲長し、互に彼是爭申内、乙四郎脇指鞘離れ、乙四郎怪我に而疵付候に付、療養も相加候得共、深疵にて相果候に付、其場之首尾段々相糺候處、長次郎紙面取立重而被指出、則委曲達御聽候處、幼少者ながら其節之致方不都合之至に候。仍而遠嶋被仰付候旨被仰出候條、此段可被申渡候。但、長次郎儀いまだ幼少に付、及十五歳候迄父乙次郎幷一類共ゟ御預被成候條、急度縮仕置候樣。及十五歳候はゞ、及斷候樣可被申渡候事。

午十二月十九日

十二月廿一日。德川家齊、前田齊廣等に歲暮の祝儀を贈る。

〔政隣記〕

十二月廿一日歲暮爲御祝儀、從御臺樣御使御廣式番之頭桂山三郎兵衛殿を以、干鯛一箱・白銀

十枚御拜受。三郎兵衛殿九時前御出、御名代淡路守様御出向等有之。從公方様・御臺様、法染院様江上使御廣式番之頭折井吉右衛門殿を以、御卷物等御拜領。御前様江御廣式番之頭筑山伊右衛門殿を以、御卷物等御拜領。御首尾能夫々被爲濟候事。

附録年表

享和元年　辛酉　皇紀二四六一

正月　○朔日前田治脩風邪に罹るを以て登營年賀を廢す。(一)

○四日郡奉行能登に於ける猪・鹿の狩獵實行を督促す。(一)

○十日金澤城の西町口門倒壞したるを以て通行を禁す。(二)

○廿三日百姓驅落を爲したる者ある場合に於ける十村等の取捌を嚴にせしむ。(三)

○廿五日金澤の町人にして家中諸士の名義を借り傳馬人足を徵發することを禁ず。(五)

○廿九日二朱判の通用等に關する幕府の令を傳ふ。(六)

○十村等、名字帶刀を許されんことを請ふ。(七)

二月　○三日石川郡の十村等、百姓の名跡相續の手續に關する件を定む。(一三)

○七日足輕小頭にして勤續五十年以上に及ぶ者の切米を增給す。(一五)

○十四日去年不作なるを以て、諸郡に夫食米の貸與を許す。(一五)

○廿三日金澤に於いて改元の事ありしを告ぐ。(一八)

○廿六日能登の諸郡に道路を修理すべきことを命す。(一九)

○藩侯の參覲又は歸國に供奉する諸士に、土產物を携ふる等のことを禁ず。(一九)

○諸郡十村組に奉公人座を設くべきことを命ず。(二〇)

三月　○百姓の高方仕法に關して定む。(二三)

○五日金澤火除町に火災あり。(二八)

○十三日前田齊廣金澤を發して江戸に赴く。(二八)

○廿六日前田齊廣江戸に着す。(三〇)

○廿九日前田治脩就封の期を延ぶ。(三〇)

四月　○五日前田齊廣の江戸に着したる報金澤に達す。(三一)

○十一日前田治脩就封の暇を受け、齊廣は出府を勞せらる。(三一)

○十三日前田治脩病むを以て就封辭見の爲登營し難きことを届出づ。(三三)

〇十五日前田齊廣登營して出府の禮を行ふ。(三三)
〇十五日年寄村井又兵衛、御先弓頭吉田彦兵衛等に命じて同僚と和解せしむ。(三三)
〇十七日前田齊廣、德川家齊の紅葉山參詣に豫參す。(三六)
〇廿二日前田利命の爲に建つる幟の觀覽を許すことを告ぐ。(三六)

五月

〇朔日前田治脩明年八月までに退隱すべき豫定なることを告ぐ。(三八)
〇五日金澤城二ノ丸の石垣を修理するを以て、附近の往來を禁ずべきことを告ぐ。(四〇)
〇十日能登の諸郡に令し、本願寺の使僧を款待し又は寄進・參詣をなすを制止す。(四一)
〇廿八日町會所より諸士に貸附したる銀子の返納方法を改定す。(四二)

六月

〇能登惣持寺の財務困難なるを以て一ケ年を限り領内の勸化を許す。(四三)
〇十三日前田治脩、今秋まで滯府すべき願意の許されたることを告ぐ。(四四)
〇十六日前田齊廣初めて嘉祥の登營を行ふ。(四五)
〇廿二日十村等の公事場に提出する書類の宛所記載方を定む。(四五)
〇廿四日石川郡宮腰の漁夫等、同町奉行玉井主馬の家に手引騒擾す。(四六)
〇廿九日昨今兩日天德院に於いて前田齊敬の七回忌法會を營む。(四七)

七月

〇四日十村等が改作奉行の諸郡に出張する前後にその邸を訪問することを禁ず。(四八)
〇十一日割場支配の足輕・小者に貸與したる銀子返納延期の請を卻く。(四九)
〇十八日德川家齊使者を遣はして前田治脩の病を訪はしむ。(五〇)
〇廿二日十村以下年頭以外に郡奉行等の私宅を訪問するを禁ず。(五一)
〇廿六日諸士の借用したる町會所銀は、本年限り返納を要せざることを告ぐ。(五二)
〇家中諸士難澁するを以て上納銀の一部を緩くすることを告ぐ。(五三)

八月

〇村肝煎の任免に關する取扱を改定す。(五四)
〇朔日金澤に於いて諸士に、前田治脩の德川家齊より起居を問はれたることを告ぐ。(五七)
〇十三日前田治脩、保養の爲時々下屋敷に行歩することを許さる。(五八)
〇二十日能登口郡に、町人が家中諸士又は寺院の名を借りて傳馬を徵發するものなきやを調査せしむ。(五八)

九月

○二十日金澤に於いて暴風樹を折り家を倒す。(五九)
○能登諸郡に於ける山方の取締法を改定す。(五九)
○三日富山侯前田利謙卒去の報金澤に達す。(六一)
○廿五日金澤城石川御門附近の石垣を修理するを以て通行を禁ず。(六二)
○廿八日百姓等の緣組及び養子願の手續に關し上申せしむ。(六二)
○百姓・町人の名字帶刀に關する幕府の令を傳ふ。(六四)
○家老前田內匠助、江戶在府中に於て知行萬石の待遇を與へらる。(六五)
○金澤町奉行、城內を通行する銀座小者に脇指を帶せしめんことを出願す。(六五)

十月

○五日前田治脩、來春まで滯府するの請を許可せらる。(六七)
○十四日明春より鳳至・珠洲二郡の政務を混同して取扱ふべきことを令す。(六八)

十一月

○三日藤內の平人に交際することを禁ず。(六八)
○十四日藩の收納する米穀の調製を完全ならしむべきことを令す。(六九)

十二月

○晦日諸士難澁するを以て貸銀を許す。(七〇)
○廿九日明年菅公の薨後九百年に當るを以て、人持組前田璿三を京都北野社に派遣すべきことを命す。(七二)
○御扶持人十村の悴、及び組を有せざる御扶持人十村列の序位を定む。(七三)

是歲

○麻疹流行す。(七四)

享和二年　壬戌　皇紀二四六二

正月

○朔日前田治脩病に依り滯府中なるを以て登營年頭の禮を缺く。(七四)
○二日前田齊廣登營して年頭の禮を行ふ。(七四)
○四日前田木工、母の服忌中學校に於いて聖像を拜したるを以て自分指扣を伺出づ。(七五)
○二十日九十歲に達したる者に扶持を與ふる際、その趣旨を訓示すべきことを告ぐ。(七五)
○廿八日種籾の池入は之を彼岸中日に於いてすべきことを命ず。(七六)
○家中諸士の遠所收納米にして一石に滿たざるものに限り該地方にて賣却することを許す。(七六)
○收納米皆濟以前に新米を賣出したる百姓の處罰を定む。(七七)
○先に改めたる高方の仕法を守らざるものゝ有無を調査せしむ。(七九)

二月

○十二日昨今兩日寶圓寺に於いて前田重熙の五十回忌法會を營む。(七九)
○廿五日前田治脩北野天滿宮に太刀等を獻納す。(八〇)

〇廿五日諸郡の作毛見立及び引免の仕法に就いて告ぐ。(八二)
〇御扶持人十村・平十村等の切高若しくは取高する場合の取扱方を示す。(九一)
〇能登幕府領の百姓等に、加賀藩領の百姓より村御印を質物として金銀を貸附するを禁ず。(九三)
〇二日前田治脩、隠居願を幕府に提出す。(九三)
〇二日前田齊廣本郷邸内北居宅より居間書院に移る。(九四)

三月

〇三日前田齊廣登營の途火災に會す。(九四)
〇四日年寄長甲斐守、前田治脩の將に致仕せんとするを以て江戸に向ひ出發す。(九五)
〇九日前田治脩致仕を許され齊廣家督を承く。(九五)
〇十一日前田齊廣は筑前守の稱を加賀守に、治脩は加賀守を肥前守に改む。(九九)
〇十一日諸士に命じて新たに先祖由緒一類附帳を提出せしむ。(一〇〇)
〇十八日前田治脩の隠居と齊廣の家督相續とを許されたる報金澤に達す。(一〇〇)
〇十九日自分諸伺書は凡て前田齊廣に宛て差出すべきことを命ず。(一〇一)
〇廿二日金澤に於いて諸士に前田治脩の隠居と齊廣の家督相續とを公示す。(一〇三)
〇廿七日金澤に於いて前田齊廣の加賀守、治脩の肥前守と改めたることを告ぐ。(一〇四)
〇領内の富豪に調達銀の上納を命ず。(一〇五)
〇是月以後金澤に風邪大に流行す。(一〇七)

四月

〇十三日前田齊廣家督相續を許されたることを謝する習禮を行ふ。(一〇八)
〇十五日前田齊廣登營して家督相續を許されたことを謝す。(一〇八)
〇十五日諸郡に課する打銀の額は、御扶持人十村等綿密に調査の上之が許可を求むべきことを告ぐ。(一一〇)
〇諸郡村々に於いて徵集する萬雑の決算を明らかにし、村肝煎の屋前に公示すべきことを告ぐ。(一一二)
〇廿五日金澤に於いて諸士に前田齊廣の家督相續を謝する爲に登營したる次第を告ぐ。(一一三)
〇廿八日前田齊廣初めて月次登營を行ふ。(一一三)

五月

〇五日前田齊廣初めて佳節登營の禮を行ふ。(一一三)
〇十二日昨今兩日寶圓寺に於いて前田重教の十七回忌法會を執行す。(一一四)
〇二十日能登口郡に一村一ヶ所の御林山を選定すべきことを告ぐ。(一一四)
〇二十日諸色の價格を米穀に準じて低廉にすべきことを命ず。(一一五)

〇廿四日大小將横目大脇六郎左衞門等、供奉登營の際規律を紊すを以て處罰せらる。(一一五)
〇廿五日前田齊廣、登營の際に於ける供奉諸士の心得を諭す。(一一八)
〇廿五日前田齊廣當年就封の暇を賜はるべきことを豫告せらる。(一一八)
〇廿八日前田治脩、その子利命の成育したることを幕府に屆出づ。(一一九)
〇前田齊廣使を京師に上りて家督相續の恩を謝す。(一一九)
〇織田主計頭、前田齊廣に利家所用の鎧を贈る。(一一九)
〇前田治脩に對する諸士の獻上物の例を定む。(一二二)

六月

〇三日前田齊廣の本年就封すべき報金澤に達す。(一二三)
〇四日能登七ッ島の鳥糞を試みに肥料に供せしむ。(一二四)
〇六日金澤に於いて諸士に前田齊廣の本年就封すべきことを告ぐ。(一二五)
〇七日前田利命の成育を幕府に屆出でたりとの報金澤に達す。(一二六)
〇八日前田齊廣の生母貞琳院に對する格式を改む。(一二七)
〇十一日前田齊廣の入國に際し供奉の諸士の器什・着服等を調ふるを禁ず。(一二七)
〇十三日前田齊廣左近衞權中將に陞任す。(一二八)
〇十五日前田齊廣使を京師に上りて左近衞權中將陞任の恩を謝す。(一二九)
〇十六日前田齊廣供奉の士の刀劍の裝具に就いて令す。(一二九)
〇二十日前田齊廣左近衞權中將に陞任したるの報金澤に達す。(一二九)
〇廿一日前田齊廣登營して左近衞權中將陞任の恩を謝す。(一三一)
〇廿二日金澤に於いて諸士に前田齊廣の左近衞權中將に陞任したることを告ぐ。(一三一)
〇廿六日前田齊廣家督相續及び陞任を謝する爲使者を日光山に派す。(一三三)
〇廿八日前田齊廣就封の際供奉すべき士を命ず。(一三三)
〇廿八日旱魃に付き用水の使用を節すべきを告ぐ。(一三三)
〇輕罪の者の刑は成るべく速に判決せしむべきことを命ず。(一三三)

七月

〇四日前田齊廣家督相續後初めて治脩等を招請す。(一三四)

○四日諸士に役・出銀以外は當分上納を要せざることを告ぐ。（一四〇）
○十二日御算用場奉行、收納代官及び藏宿の不正手段防遏の方法に關し稟議す。（一三六）
○十四日前田齊廣就封の際供奉する諸士に銀子を貸附すべきことを告ぐ。（一四二）
○十七日能登奥郡の御扶持人等、前田齊廣入國の際迎馬を發せしめんとすることを告ぐ。（一四三）
○廿二日前田齊廣入國の後謁見する諸士の服裝に就いて告ぐ。（一四三）
○廿五日前田齊廣就封の暇を受く。（一四四）
○廿八日前田齊廣登營して就封の辭見す。（一四五）
○内檢地施行の方法に關して示諭す。（一四五）

八月

○三日前田治脩湯治の爲歸國の許可を得んことを請ふ。（一四七）
○六日金澤城二ノ丸・金谷御殿の廣式を互に交換す。（一四八）
○七日金澤に於いて諸士に前田齊廣が就封の暇を得たる等のことを告ぐ。（一四八）
○十二日前田齊廣將に就封の途に上らんとするを以て老中に廻勤す。（一四九）
○十三日前田齊廣江戸を發して就封の途に上る。（一四九）
○十五日金澤に於いて諸士に前田齊廣の江戸を發駕するを告ぐ。（一五〇）
○二十日前田齊廣の江戸を發したる報金澤に達す。（一五〇）
○二十日山方より金澤等に出で、冬稼に從ふ者は十月より二月に至る間を限らしむ。（一五一）
○廿二日百姓の二男を嫡子とすべき願を許されたる近例を通牒す。（一五二）
○廿五日前田齊廣金澤に着す。（一五三）
○廿六日前田齊廣入國後初めて寶圓寺・天德院に詣づ。（一五四）
○廿八日前田齊廣の入國を祝する爲郡方に一日の休暇を與ふることを告ぐ。（一五四）
○前田治脩歸國の際東海道を經由すべきことを決す。（一五五）

九月

○四日前田重教夫人の爲に新築せる本郷邸の居館を梅之御殿と稱せしむ。（一五五）
○五日昨今兩日天德院に於いて前田重靖の五十回忌法會を執行す。（一五六）
○十日能登山方の仕法を改め、社寺の七木及び村々の宮林伐採の手續を定む。（一五六）
○十一日前田治脩湯治の爲歸國するの許可を受く。（一五七）

○十五日是日以降前田齊廣諸士をして獨禮を行はしむ。(一五八)
○十五日前田齊廣、賜謁の士の刻限に遲るゝを戒む。(一五九)
○十五日前田治脩の名代大聖寺侯前田利考登營して湯治歸國の辭見す。(一六三)
○廿四日請人なき質物を預ることなかるべきを告ぐ。(一六四)

十月

○朔日金澤に於いて諸士に前田治脩が湯治歸國の許可を得たることを告ぐ。(一六四)
○朔日前田重敎夫人本鄕邸内の梅之御殿に移徙す。(一六五)
○六日前田治脩江戸を發し東海道を經て歸國の途に就く。(一六五)
○六日百姓に土肥を用ふべきを諭す。(一六七)
○十日金澤に於いて老臣等、前田重敎夫人が梅之御殿に移徙したるを祝す。(一六九)
○十六日前田齊廣諸頭等の行狀に就いて戒む。(一七〇)
○十七日前田重敎夫人逝去す。(一七一)
○廿二日前田重敎夫人の病重體なる報金澤に達す。(一七二)
○廿四日前田齊廣一統難澁の際なるを以て家老等に能囃子を行ふべからざることを告ぐ。(一七三)
○廿五日前田治脩金澤に着す。(一七四)
○廿七日前田重敎夫人危篤の報金澤に達す。(一七五)
○廿九日江戸に於いて前田重敎夫人の喪を發す。(一七五)
○學校都講長谷川準左衞門老年を以てその職を免ぜらる。(一七五)

十一月

○四日前田齊廣及び治脩、急使を發して重敎夫人の病を問はしむ。(一七六)
○五日前田重敎夫人逝去の報金澤に達す。(一七七)
○十日前田齊廣、家老津田玄蕃を派して重敎夫人の葬儀に列せしむ。(一七九)
○十二日德川家齊が前田治脩等の喪中慰問の爲に發せしめたる奉書金澤に着す。(一八〇)
○廿二日西本願寺が松材の寄進を求めたるを謝絕せしむ。(一八〇)
○廿七日前田重敎夫人の葬儀を行ふ。(一八一)
○廿七日鹿島郡河崎村百姓牛助の妻三子を生む。(一八二)
○諸士に命じてその家の系圖を錄上せしむ。(一八一)
○村肝煎選定の心得に關して告ぐ。(一八二)
○諸郡に於ける奉公人召抱の手續を令す。(一八三)

十二月

○十六日前田齊廣初めて入國せしを以て、諸士に本年の借知・借米を返却すべきを告ぐ。(一八六)

○十六日前田齊廣、人持組の士の行狀に就いて戒む。(一八九)

○二十日流浪者の諸郡に入るものあらば藤内をして之を捕へしむべきを令す。(一九〇)

○廿二日村肝煎の達狀を有するものにあらざれば奉公人として召仕ふべからざることを告ぐ。(一九〇)

○廿八日前田齊廣風邪に罹るを以て來年頭の賜謁を襃することを告ぐ。(一九一)

○火災の際無用の者の現場に集るを禁ず。(一九三)

享和三年　癸亥　皇紀二四六三

正月

○朔日前田齊廣微恙を以て年頭の賀を受くることを襃す。(一九四)

○朔日諸士の風俗に關して示諭す。(一九四)

○朔日諸士の衣食に關し規定す。(一九六)

○朔日諸士・町人及び百姓の衣類に關し豫め禁止すべき條項を示す。(一九七)

○十一日御步平田孫助の弟八右衞門、人持小幡雅樂助の給人を殺害す。(一九九)

○十九日降雪により年頭の廻禮を來月に亙りて行ふべきことを告ぐ。(二〇〇)

○廿八日改作奉行等百姓に屎代銀貸附の方法を改むべきことを告ぐ。(二〇一)

閏正月

○五日前田重教の女頴姫逝去し、十日發喪す。(二〇二)

○六日前田齊廣本年の參覲を九月に延期することを告ぐ。(二〇三)

○六日新に十村を命ぜられたる者の祝意を表する爲饗宴を催すを禁ず。(二〇三)

○十二日木實油を賣ることを許し、その取扱に關する心得を示す。(二〇四)

○十三日徳川家齊、奉書を以て前田齊廣の喪中を問はしむ。(二〇五)

○十三日前田齊廣人持組の士に對しその心得を諭す。(二〇五)

○十三日前田齊廣諸頭に對しその心得を示す。(二〇六)

○十四日前田重教の女頴姫危篤の報金澤に達す。(二〇八)

○十四日百姓に對し火の元の注意を嚴にすべきことを命ず。(二一〇)

○十七日前田重教の女頴姫逝去の報金澤に達す。(二一〇)

二月

○重ねて内檢地執行の手續に關して令す。(二一一)

○七日七十間長屋御門附近の石垣を修繕するを以て下馬下乘に關して告ぐ。(二一二)

○八日徳川家齊の前田齊廣に贈れる鶴金澤に着す。(二一二)

○十日前田齊廣去秋初めて入國せしを以て百姓に米を與ふることを告ぐ。(二一三)

〇十五日前田齊廣の生母貞琳院を樣付にするの命を傳ふ。(二二五)
〇十七日幕府伊能忠敬を遣はして加賀藩内を測量せしむべきことを告ぐ。(二二六)
〇十八日郡方に於いて盜賊改方與力及び足輕等に不正の擧動あらば屆出づべきことを命ず。(二二六)
〇廿四日德川家基の廿五回忌法會を神護寺に營む。(二二七)

三月

〇二日紫野芳春院宙寶和尚金澤城に登る。(二二八)
〇十一日江戸詰の諸士難澁するを以てその貸渡金返納を免除すべきことを告ぐ。(二二八)
〇十八日前田治脩夫人、本鄕邸内梅之御殿に移る。(二二九)
〇十八日學校に於いて當分儒學の稽古を停めしむ。(二二九)
〇二十日學校諸役人の行狀に就いて諭す。(二三〇)
〇廿四日本鄕邸の物見櫓類燒の難に罹る。(二三〇)
〇廿六日諸士及び町人の嫁娶を行ふ家に石礫を投ずるを禁ず。(二三二)
〇廿八日伊能忠敬將に領内を測量せんとするを以てその待遇方を定む。(二三二)
〇火消の勤方を記して提出す。(二三五)

四月

〇六日前田齊廣、治脩と共に石川郡粟ヶ崎に行歩を行ふ。(二三九)
〇六日諸士の上納すべき借用銀を凡て一紙證文に改め提出することを命ず。(二三九)
〇十日三寶院門主明年入峰せんとするを以て領内の當山派山伏に通牒せんことを求む。(二三〇)
〇十五日御禮人列居の件に關し御用番年寄より戒告す。(二三二)
〇十六日學校の組織を改むべきことを議す。(二三四)
〇十八日所口町奉行が能登口郡十村配下の者を召喚し得る場合を制限す。(二三六)
〇廿二日犀川・淺野川の川除取締方に就いて令す。(二三七)
〇廿四日金澤城七十間長屋御門附近の石垣修理を終りたるを以て通行を舊に復せしむ。(二三八)
〇廿六日前田齊廣諸士に對し行狀及び節約の件を諭す。(二三八)
〇廿七日寛政十一年地震の際諸士に貸與したる銀子の一部返納を命ず。(二四三)

五月

〇六日前田齊廣、治脩を招請す。(二四四)
〇七日前田齊廣入國後初めて生母貞琳院を招請す。(二四五)
〇十日老臣等の能囃子を行ふ際役者と共にすることを禁ず。(二四五)

〇十四日伊能忠敬測量の爲來るべきを以て能登の十村等に主附を命ず。（二四六）

〇十九日御横目足輕岸本喜右衞門先年寶圓寺檢分の際高足を用ひたるを以て指扣を命ぜらる。（二四七）

〇廿九日江戸の請人等難澁を訴ふるも貸銀等の方法より救濟すること能はざるを告ぐ。（二四八）

〇晦日文武學校に出席の手續書を令す。（二五〇）

〇前田齊廣の近習の士にして家内に麻疹患者あるものゝ勤仕を指扣へしむ。（二五四）

六　月

〇九日領内の御扶持人十村及び十村に賞賜す。（二五五）

〇九日領内に麻疹流行するを以て村方に藥劑を頒つことを議す。（二五七）

〇十日金澤の町人にして諸士の名を借り傳馬人足を使用する者あるを戒む。（二五九）

〇十五日伊能忠敬領内測量の際西村太仲の補助を得んことを求めしを以て之を謝絕せんことを議す。（二六〇）

〇十七日寺家社家等の濫に藩侯の家紋を用ふるを禁す。（二六一）

〇十八日卯辰八幡神主等子供角力の興行を出願して不許可となる。（二六三）

〇廿二日十村等の非違に就いては盜賊改方にて干與せしめざる慣習を繼續することを告ぐ。（二六四）

〇廿七日道中川留解除以後出發を爭ふことなかるべしとの幕令を傳ふ。（二六五）

〇御扶持人十村・十村以下先に藩侯より賜與せられたる米穀を貧民に頒たんとの請を許す。（二六六）

〇晦日文武學校の制度を改めたるを以て修業に心を致すべきことを告ぐ。（二六七）

七　月

〇二日伊能忠敬金澤に來り宿す。（二六八）

〇十一日前田齊廣、步組の士は世襲すべきものにあらざることを告ぐ。（二七〇）

〇十七日儉約奉行を廢し省略方御用主附を置く。（二七一）

〇十九日學校の會學稽古に當分諸臣をして出席せしめざることを告ぐ。（二七二）

〇十九日前田齊廣步士等の增俸願に關する事務に就いて告ぐ。（二七三）

〇廿三日諸場・諸役所に於ける一切の支出を停止し、その必要あるものは凡て伺出さしむ。（二七四）

〇廿五日御省略方御用主附等、財政整理の良法を得ざるを以て指揮を老臣に仰ぐ。（二七五）

〇自今他國に出張する者に貸與すべき會所銀の額を定む。（二七七）

〇衣類食料中賣買を禁止する品目を定め、且努めて藩内の製産を用ふべきことを告ぐ。（二八一）

〇町人に儉約を勸むる爲、二日讓定書中の十七ヶ條に脇書を加へて之を示す。(二八二)

八月 〇朔日前田治脩の子利命を齊廣の嫡子とすべきことを發表す。(二九〇)

〇四日町人にして門構の家に居住する等のことを禁ず。(二九一)

〇七日前田齊廣が先に諸郡に米穀を下賜したる恩を謝し、百姓等に一日の業を休ましむ。(二九二)

〇八日他國詰の者の扶持方人數高を改定す。(二九三)

〇廿九日江戸詰の者の物品買上代は現金拂とすべき前令を恪守せしむ。(二九六)

〇晦日金澤町奉行、諸士の需要する塩は之を當町以外の問屋より購入せざらしむることを議す。(二九七)

〇晦日御郡所詰番に當る十村の勤務を缺くことを戒む。(二九八)

九月 〇五日前田治脩、齊廣を招請して送別の宴を行ふ。(二九九)

〇十三日前田齊廣金澤を發して參覲の途に就く。(二九九)

〇廿四日諸浦に戻船の砂錢を輸入すべからざることを令す。(三〇二)

〇廿六日前田齊廣江戸に着す。(三〇三)

〇廿八日德川家齊使を遣はして前田齊廣の參覲を勞せしむ。(三〇三)

〇江戸に於ける諸士の奉公人は三年以上滯在せざるべき舊例を實行せしむ。(三〇四)

十月 〇朔日前田齊廣登營して參覲の禮を行ふ。(三〇五)

〇五日前田齊廣、上野東照宮等に參詣す。(三〇六)

〇五日二條治孝の使者金澤に來る。(三〇六)

〇七日前田治脩夫人上野附近に行歩を行ふ。(三〇八)

〇十五日前田齊廣、尾張侯德川宗睦の養女琴姬と婚禮の期を定む。(三〇八)

〇十六日干鰯の桝を一斗五升入とし御算用場の檢印を受けしむ。(三〇九)

〇十九日二條治孝の使者金澤より歸路に就く。(三一〇)

〇廿二日江戸に於いて用聞町人の猥に算用者等を訪問するを禁ず。(三一二)

〇廿五日德川家齊、前田齊廣に鶴を贈る。(三一三)

〇廿九日昨今兩日江戸廣德寺に於いて前田重敎夫人の一周忌法會を修す。(三一四)

〇江戸詰の諸士に、商賣人の賣物を預り置くべからざることを令す。(三一四)

十一月 〇五日藩の財政困難の狀を告げ、諸士も亦儉約を旨とすべきことを令す。(三一五)

〇十五日前田齊廣、尾張侯德川宗睦の養女琴姬と結納を交換す。(三一六)

○十六日前田齊廣、江戸詰の者の救濟を議せしむ。(三一六)

○十六日前田齊廣夫人の入輿後、治脩夫人を大御前と稱すべきことを告ぐ。(三一七)

○廿八日本郷邸内なる梅之御殿を梅之御居宅、北之御殿を北之御居宅と改稱す。(三一七)

十二月

○朔日前田齊廣夫人入輿す。(三一八)

○六日德川家齊、前田齊廣の成婚を祝して物を贈る。(三二三)

○七日前田利命、紀伊侯德川治寶の女と緣組を内約す。(三二三)

○九日近習御用坂井克昌精勤を以て知行を加増せらる。(三二四)

○十日前田齊廣、職務に適せざる吏は嚴に黜陟すべきことを示す。(三二四)

○十五日金澤に於いて諸士に前田齊廣の成婚を告ぐ。(三二五)

○十五日前田齊廣、柳營に上りて成婚を謝す。(三二五)

○廿一日德川家齊夫人、前田齊廣に歳暮の祝儀を贈る。(三二六)

○廿八日前田齊廣登營して初めて歳暮を祝す。(三二七)

○江戸詰人等の扶持方を特に増貸す。(三二七)

○諸士にして會所銀の貸與を得たる者の返濟方法を定む。(三二九)

文化元年　甲子　皇紀二四六四

正月

○朔日前田齊廣、江戸に於いて元日の儀を行ふ。(三三一)

○十八日前田齊廣、治脩夫人を招請す。(三三二)

○廿一日前田齊廣、治脩の子利命を世嗣とすることを許さる。(三三三)

○廿六日郡方に於ける人別の取締を勵行すべきことを命ず。(三三三)

○廿六日幕府に報告するの要あるを以て酒造高を調査すべきことを命ず。(三三八)

○廿八日御歩横目山口才次その職務を誤るを以て指扣を命ぜらる。(三三九)

○廿八日能登奥郡より輸出する尿物の入津する場所を上申す。(三四一)

○廿九日前田利命、紀伊侯德川治寶の女豐姫との緣組を許さる。(三四二)

○御歩等の増米給與を出願するも容易に許さゞるべきことを告ぐ。(三四三)

○諸士以下に對して嚴に博奕禁止の令に背くこと勿らしむ。(三四三)

○能登に手上高又は手上免を命じ、田租を増徵す。(三四四)

二月

○二日金澤に於いて諸士に、前田齊廣が治脩の子利

命を養子とすることを許されたるを告ぐ。(三四四)

○九日徳川家齊、前田齊廣の利命を嗣子とせるを祝し物を贈る。(三四五)

○十三日金澤に於いて諸士に前田利命の緣組を許されたることを告ぐ。(三四六)

○十四日能登奥郡に千歯斗り升の極印を受くべきことを告ぐ。(三四七)

○十五日前田齊廣、登營してその養子を許されたること等を謝す。(三四七)

○十五日前田治脩、湯治在國延期の請を許さる。(三四八)

○十九日徳川家齊、前田齊廣に鶴を贈る。(三四八)

○十九日前田齊廣登營して改元のことを告げらる。(三五一)

○足輕の養子にして單に名義のみに止るものは、父・の死刑に連座する例より除外すべきことを定む。(三五一)

○十村以下濫に名を改むることを禁ぜらる。(三五二)

○十村等、その着用する衣服等に就き申合を行ふ。(三五三)

三月

○朔日金澤に於いて諸士に改元の事ありたるを告ぐ。(三五四)

○四日前田齊廣、家老に命じて年寄等の風儀を監せしむ。(三五四)

○四日能登奥郡に、百姓の屋敷に生ずる槻木を伐るべからざることを告ぐ。(三五五)

○六日博奕に關する處分を郡奉行に於いてする例を改め、自今公事場奉行の指揮を受けしむ。(三五六)

○十三日前田齊廣就封の暇を受く。(三五八)

○十五日前田齊廣登營して就封の辭見す。(三五八)

○十八日前田齊廣江戸を發して歸國の途に就く。(三五九)

○廿三日郡方に於いて僧侶を招き法談聽聞の爲集合するを禁ず。(三五九)

四月

○二日前田齊廣金澤城に着す。(三六〇)

○六日能登所口の小代官が盜賊改方として廻村の際、村役人出迎の件に關して調査を命ず。(三六一)

○七日前田齊廣、自今毎日御居間書院に出勤せんとするの意を告ぐ。(三六二)

○八日不用の作食藏を賣却すべきことを告ぐ。(三六四)

○十三日前田齊廣學校に臨む。(三六五)

○廿四日諸士の鷹所持に關する制限の勵行を命ず。(三六五)

○御鷹場にて鳥を捕へ及び留場に投網を用ひ漁撈するを禁ず。(三六六)

○諸士の鷹匠にして郡方に出づる者不法の擧動ある

を成む。(三六八)

○町人等の鷹を遣ひ及び藩の忌日に鳥を捕ふるを禁す。(三六九)

○張切網を以て鳥を捕獲するを禁ず。(三七〇)

○奉公人以外諸士の邸宅に同住するものゝ數を屆出でしむ。(三七一)

五月

○三日前田齊廣學校に臨む。(三七二)

○六日山伏頭乾貞寺・醫王寺將に入峰せんとするを以て銀子を下附す。(三七二)

○十一日大聖寺侯前田利考金澤城に登り前田齊廣を訪ふ。(三七三)

○十二日百姓に召使はるゝ下人等にして給銀を前借し義務を履行せざるものゝ取締を嚴にせしむ。(三七四)

○十八日前田齊廣、年寄等の參會及び行歩は豫め之を屆出づべきことを命ず。(三七六)

○廿四日足輕及び坊主の衣服に關する制限を令す。(三七七)

○廿八日年寄前田伊勢守職務を免ぜらる。(三七八)

六月

○十五日東本願寺末寺の看坊より道場の取締に就いて稟請す。(三八〇)

○十八日寺庵にして百姓より濫に募財するを禁ず。(三八二)

○學校に於いて勸教討論の席を廢し、對策を課すべきことを告ぐ。(三八四)

○十村等をして前任者にその職務に關する書類の引繼を要求せしむ。(三八五)

七月

○朔日前田利命將に卯辰山觀音院に宮參を行はんとするを以てその主付役人を命ず。(三八六)

○七日寺院門前地に居住する者の宗門改證文に關して告ぐ。(三八七)

○十一日前田齊廣、御馬廻頭及び御小將頭の職務に關し心得を諭す。(三八八)

○廿三日小鳥網の禁止區域に關する疑義に就いて議す。(三八九)

○廿六日御步吉田茂右衛門試斬に長ずるを以て賞賜せらる。(三九〇)

八月

○十四日前田齊廣、婦人の服裝を華美ならしめざるべきことを老臣等に諭す。(三九〇)

○十七日金澤城内に於いて夜間伴ふべき提灯持の人數を定む。(三九二)

○二十日前田齊廣、老臣を召して藩政改善に關する親翰を授く。(三九三)

○廿二日諸士の鳥構を行ふものゝ松山を荒廢せしむるを禁ず。(三九五)

○晦日能登の質業者にその定書を示す。(三九六)

○前田齊廣、頭分等をして政事を議せしむべからざ

ることを老臣に告ぐ。(三九八)

九月 ○二日金澤城の土橋御門を修營するを以て通行を禁止す。(三九九)

○二日能登奥郡の十村等に民間に藏する鐵炮の員數を調査せしむ。(四〇〇)

○六日前田齊廣、治脩と共に金澤城下に行歩を行ふ。(四〇〇)

○六日前田重教の女穎姫の生母慧照院金澤に着す。(四〇〇)

○十三日前田齊廣の世嗣利命宮參を行ふ。(四〇一)

○十六日前田治脩近習の士に帶佩を行はしむ。(四〇二)

○十七日儒者木下槌五郎、學校の助教を免ぜらる。(四〇三)

十月 ○盜賊改方奉行その所管に係る犯罪の種類等を上申す。(四〇三)

十一月 ○七日前田齊廣石川郡粟ヶ崎に放鷹す。(四〇八)

○十五日前田利命着袴の儀を行ふ。(四〇八)

○毎日石川・河北兩郡に於ける諸士の鳥構場に關して令す。(四〇八)

○省略に付御作事所内の役所を減す。(四一一)

十二月 ○十四日前田齊廣、家中諸士が町會所より銀子を借用する手續等に就いて質す。(四一一)

○十九日郡方に明年西本願寺前門主七回忌の爲上洛することを禁ぜしむ。(四一五)

是歳 ○十村より百姓に衣食住の制限に關して告ぐ。(四一六)

○能登浦々にて船舶舟人より徵する口錢等の銖上を命じ、その額を減ぜしむ。(四一八)

○石動山と山麓諸村との境界問題落着す。(四二三)

文化二年　乙丑　皇紀二四六五

正月 ○朔日前田齊廣金澤城に於いて元旦の禮を行ふ。(四二五)

○廿七日前田齊廣越中井波瑞泉寺の寶物を觀る。(四二五)

○廿八日村々の算用を嚴に監督せしむべきを告ぐ。(四二六)

○廿八日前田齊廣、年寄及び家老に限り明年増借知を命ぜんとの意を告ぐ。(四二六)

○廿九日前田齊廣、老臣等を召して儉約の勵行に關する意見を徵す。(四二九)

二月 ○三日前田齊廣、御馬廻頭・御小將頭に對し藩の省略方針を達成せしむべきことを告ぐ。(四三一)

○金澤町に於ける料理屋の増加を許し、その仕法を定む。(四三二)

○三日年寄及び家老等増借知の命に從ひ得ざることを上申す。(四三五)

○四日前田齊廣、老臣等の増借知の命に從ひたるを

賞す。(四三六)

○十五日富田景周自著の越登賀三州志を献す。(四三七)

○十八日親鸞上人の遠忌將に近きにあるを以て百姓の過分なる法會を行ふべからざるを令す。(四三七)

○十九日藩士小野木助三の娘中臈として召出さる。(四三九)

○二十日老臣等行粧省略の實行に關して上申す。(四三九)

○廿日郡方出火の際の死人は御郡所の見屆を得べきことを定む。(四四〇)

○御小將の士他國に使する際藩より刀持足輕を附せし例を廢す。(四四〇)

○學校に於ける讀師討論の席を廢す。(四四一)

三月

○四日前田齊廣、治脩と共に白山比咩神社に詣づ。(四四一)

○十一日前田齊廣、留守中に於ける心得を家老前田兵部に示す。(四四一)

○十一日前田齊廣金澤を發して參覲の途に就く。(四四三)

○十六日金澤城石川御門の石垣を修築するを以て通行を禁ず。(四四四)

○廿一日鹿島郡永光寺の山林を沒收し、境域を定めたる繪圖を下附す。(四四四)

○廿六日前田齊廣江戸に着す。(四四八)

○廿八日德川家齊、老中青山下野守を遣はして、前田齊廣の參覲を勞せしむ。(四四八)

四月

○朔日前田齊廣登營して參覲の禮を行ふ。(四四八)

○十五日金澤に於いて諸士に前田齊廣が着府以後の狀況を告ぐ。(四四九)

○廿四日前田治脩草鹿を行はしむ。(四四九)

○廿八日能登に於ける幕府領と加賀藩領との百姓が互に婚姻養子する手續を議す。(四四九)

五月

○九日前田齊廣、陪臣の衣服に就いて令し、次いで之を撤回す。(四五二)

○十六日前田齊廣、十ヶ年以上皆勤の士に賞詞を傳へしむ。(四五四)

○廿一日前田利命金澤に逝去す。(四五四)

○廿七日前田利命逝去の報江戸に達す。(四五七)

○廿九日德川家齊、前田齊廣に使を遣はして利命の逝去を弔せしむ。(四五八)

○郡方の者の空米商賣を行ふことを禁ず。(四五八)

六月

○八日百姓の法寶物を觀る爲寺院に參詣するを禁す。(四五九)

○九日前田利命の葬儀を寶圓寺に行ふ。(四六〇)

○十四日前田利命逝去せしを以て赦を行はしむ。(四六一)

〇二十日御林山の竹木を盗伐したるものある時の處置を定む。(四六一)
〇江戸に於いて禁牢の後放免せられたる者の處置に就いて議す。(四六三)

七月 〇七日江戸に於いて御先手物頭堀萬兵衛の若黨酒狂を以て小者を傷害す。(四六四)
〇能登奥郡より毎年浮塵子を生ずる田地の面積を上申す。(四六四)

八月 〇二日他國流浪人の能登に徘徊する風聞あるを以て警戒を命ず。(四六六)
〇五日藩士等の忌日に當るとも河川漁撈者にその業を營むことを得しむ。(四六七)
〇十二日諸士の河川に漁撈を爲すものは役銀請負の川師より鑑札を受くべきことを命ず。(四六九)
〇十三日前田治脩倘在國二十ヶ月の請を許さる。(四七〇)
〇廿七日前田齊廣、從來發したる命令の當否を上申せしめ、その不可なるは之を改めんとすることを告ぐ。(四七〇)
〇廿八日石川御門櫓下の修理急に成就せざるを以て諸士通行禁止の令を解除す。(四七二)

閏八月 〇八日百姓等の賴母子に類したる所行を停止せしむ。(四七三)

〇十四日物品を拾得したる時は往還に札を建てゝ公告せしむ。(四七三)
〇廿二日前田齊廣夫人高須侯邸に赴き病と稱して歸らず。(四七四)
〇廿二日外海及び湖潟に於ける諸船に郡奉行をして燒印を施さしむ。(四七五)

九月 〇廿三日前田光高夫人の百五十回忌法會を行ふ。(四七五)
〇諸士の家作に關する件を定む。(四七六)

十月 〇八日能登奥郡の十村等、一向宗西派の門徒騷擾の憂あるを以て警戒すべきことを通牒す。(四七七)
〇廿三日前田光高夫人の遠忌の爲に非常大赦を命ず。(四七八)
〇廿六日河北郡百坂村に於いて磔刑を行ふ。(四八〇)
〇廿七日家中諸士直接に知行所の百姓を使役すべからざる前令を守らしむ。(四八一)
〇河北潟の漁撈に關する細則を定む。(四八二)

十一月 〇朔日金澤城土橋御門の工事竣成したるを以て通行を許す。(四八七)
〇十一日村々貯用林の取捌方を定む。(四八七)
〇十四日諸士困窮するを以て救助の方法を議す。(四八九)
〇十八日江戸廣德寺に於いて前田吉德の生母淨珠院

の廿五回忌法會を營む。(四九三)
○廿二日細小の網を用ひて幼魚を捕獲するを禁ず。(四九四)
○廿六日足輕及び坊主の着衣に就いて令す。(四九四)

十二月

○十一日前田齊廣、德川家齊夫人より歳暮の祝儀を受く。(四九五)
○十一日人持組三田村縫殿不謹愼を以て役儀を除き逼塞を命ぜらる。(四九六)
○廿二日江戸に於いて物價高直なるを以て扶持方を增給す。(四九六)
○廿四日諸士の困窮するものに町會所仕送銀の借用を許す。(四九六)
○越中古國府勝興寺の住僧が江戸築地門跡に預けられたるを以て、能登の門徒の騷擾を警戒せしむ。(四九六)

文化三年　丙寅　皇紀二四六六

正月

○朔日前田齊廣登營して年頭の禮を行ふ。(五〇〇)
○八日鳥廻頭等町會所仕送銀の借用を許されんことを前田齊廣に訴ふ。(五〇〇)
○八日是日以後越中の百姓等、金澤西本願寺末寺に參集し藩に訴ふ所あらんとす。(五〇四)
○十一日金澤西本願寺末寺に參集したる越中の百姓等に退散を命ず。(五〇五)
○二十日鳳至郡總持寺燒失す。(五〇九)
○廿一日江戸に於いて大聖寺侯前田利考の喪を發す。(五一三)
○廿七日德川家齊、前田齊廣に鶴を贈る。(五一四)
○廿七日前田齊廣、足輕・坊主・小者等の作法を正しくすべきことを告ぐ。(五一四)
○晦日大聖寺侯世嗣前田利之を弔問する爲の使者金澤を發す。(五一四)

二月

○二日年寄中等の關川・碓氷兩關所を乘物にて通過することを許されたる報至る。(五一五)
○二日他國の商人にして米穀を買入れ漕運せんとする者を妨げざらしむ。(五一五)
○四日前田齊廣、西本願寺派門徒の處置に關して令す。(五一六)
○四日金澤城土橋御門の工事關係者に賞賜す。(五二一)
○十二日越中の西本願寺派門徒に、その願書を藩侯に執達したるを以て敢て騷擾する勿らしむ。(五二三)
○十四日學校に於いて助敎・讀師等缺勤の場合の手續を改む。(五二三)
○十四日諸士の道中往來に關する心得を示す。(五二四)
○廿六日魯西亞船の來着するものあらば諭して退去せしむべき幕命を傳ふ。(五二五)
○前田齊廣、物價高直なるを以て歸國御供人に旅費を給す。(五二七)

三月 ○二日能登に於ける幕府領百姓と加賀藩領百姓との縁組手續を通牒す。(五二八)
○四日廣式に使役する御次女中の志願者を募る。(五二九)
○十三日前田齊廣就封の暇を受く。(五三〇)
○十六日前田齊廣江戸を發して就封の途に上る。(五三〇)
○廿八日前田齊廣金澤城に着す。(五三一)
○金澤の山伏源法院、弘法大師と稱して詐僞を行ふ。(五三二)

四月 ○五日前田齊廣、諸士一般に今明年の借知を廢せんことを告げ、次いで老臣の諫止により一たび命を撤す。(五三三)
○七日普請中の石川御門に佳節・朔望出仕の輩の通行を許す。(五三四)
○十一日道中繼人馬に關する前令を改む。(五三五)
○十三日前田治脩金澤千日町口に行歩を行ふ。(五三五)
○廿四日再び廣式に使役する御次女中の志願者を募る。(五三六)
○廿七日前田齊廣の命により諸士に今年に限り借知を徵せざるべきことを告ぐ。(五三七)
○學校に於ける讀書生に諭示する條々を定む。(五三八)

五月 ○二日今年諸士の借知を免除せられたるを以て町會所よりその費途に關して通牒す。(五四〇)
○十二日諸士に今年の借知返附の手續を告ぐ。(五四一)
○廿一日昨今兩日前田利命の一周忌法會を行ふ。(五四二)
○學校に於ける學頭・學監の職を廢す。(五四二)

六月 ○四日組外組森榮左衞門亂行を以て流刑を命ぜらる。(五四三)
○六日收納米を取扱ふ代官に日拂米を與ふる手續を改む。(五四四)
○十六日大聖寺侯前田利之金澤城に登る。(五四五)
○二十日家老等、老臣にも本年の借知を免除せらるべきことを進言し、次いで容れられず。(五四七)
○藩臣・醫者等の學校に出席出願の手續を改む。(五四九)

七月 ○五日御馬廻組金子十郎左衞門その妻の妹と出奔す。(五五〇)
○九日火災の際に於ける心得を恪守すべきことを命ず。(五五一)
○九日江戸に於いて物價高直なるを以て詰人に金子貸與を許す。(五五二)
○十一日馬廻組金森大作城中にて誤つて他人の刀を帶し去る。(五五三)
○十三日前田重教の夫人及び女穎姫の忌日を改

む。（五五四）
○廿二日收納米の調製及び枡目を嚴にすべきことを告ぐ。（五五四）
○廿三日能登一宮に附與すべき山林に關して議す。（五五六）
○廿四日拘禁中の北村屋淺右衞門病むを以てその女の代牢を許す。（五五八）
○廿六日前田齊廣、政務の伺書に對し急に決裁せざることあるべきを告ぐ。（五六一）

八月
○四日村々にて祭禮に際し踊・相撲等を催すを禁ず。（五六二）
○六日組外組森榮左衞門能登島に流さる。（五六三）
○九日前田齊廣、諸士娯樂の爲自由に能囃子を行ふことを許す。（五六四）
○九日前田齊廣、御歩の名跡人伺出に關する前令を改む。（五六五）
○十一日本郷邸内大銀藏に於いて銀子紛失す。（五六五）
○十一日森幾太郎小立野嫁坂の火災に赴く途上足輕を殺傷す。（五六五）
○十三日犀川・淺野川出水す。（五六八）
○十三日馬廻組和田長助能登島流刑を宣告せらる。（五六八）
○十三日前田齊廣、その夫人を離縁したることを告ぐ。（五七二）
○諸寺院檀那にして故なく住僧に反抗するを禁ず。（五七三）

九月
○八日金澤神護寺に於いて德川家治の廿一回忌法會を執行す。（五七四）
○九日本郷邸内なる梅之御居宅を梅之御殿の舊稱に復せしむ。（五七四）
○十九日金澤卯辰圓光寺相對勸化を許されたるも若し强請せば之を却くべきことを郡中に告ぐ。（五七五）

十月
○十三日三十人組喜兵衞曩に人を殺害したる罪を許さる。（五七六）
○十八日諸方土藏奉行等保管の銀子を紛失せしめたるを以て閉門を命ぜらる。（五七七）

十一月
○九日江戸に於いて諸士の琉球人見物の爲外出するを許す。（五七八）
○十日領内の船舶税を改めたることを告ぐ。（五七九）
○十二日前田齊廣、その乘馬檢閲に關する老臣の進言を憚らずとす。（五八一）
○曩に足輕及び坊主の綿衣着用を令したるを緩和す。（五八二）

十二月
○十六日前田治脩在國の期限延長を請ふ爲に使者を命ず。（五八三）
○廿一日金澤城石川・河北兩門に於ける與力番人の

作法に關して賞す。（五八三）
○廿二日賭博及び類似の行爲を禁止するの令を新たにす。（五八五）
○廿六日貴び子を殺害したる女を磔刑に處す。（五八五）

是歲　○十村等、百姓の葬・奉公に從ふもの以外に送狀を與へざるべきを協議す。（五八六）
○町奉行歌舞伎狂言興行を許すべきを提議し、家老等之に反對す。（五八九）

文化四年　丁卯　皇紀二四六七

正月　○朔日前田齊廣金澤城に於いて年頭の禮を行ふ。（五九二）
○二日松囃子の儀を城中に行ふ。（五九二）
○廿八日德川家齊の前田齊廣に贈れる鶴金澤に着す。（五九四）
○前田齊廣、諸士の風俗を正しくし文武を勵むべきことを諭す。（五九五）
○幕府前田治脩の今二十ヶ月在國すべき請を許す。（五九六）

二月　○十日前田治脩二十ヶ月在國を許されたる報金澤に至る。（五九六）
○十八日前田治脩の病を診する爲京都の醫畑柳啓金澤に着す。（五九六）
○廿五日畑柳啓、前田治脩の病を診す。（五九七）
○廿八日河北郡南森下の百姓傳兵衞ばんどりを製して藩侯に上る。（五九九）
○晦日前田齊廣經武館に臨みて武技を閱す。（六〇一）
○晦日畑柳啓に物を與へ、明日を以て歸京の途に就かしむ。（六〇一）

三月　○十三日前田齊廣金澤を發して參覲の途に上る。（六〇三）
○十七日道中繼人馬の數は、今回江戶より歸國するものに限り增加するを許されたりとの報金澤に達す。（六〇四）
○十八日公事場奉行、羽咋郡一宮の社地に關する處置を年寄等に報す。（六〇五）
○十八日船舶を賣却し又は破損したる際に於ける極印の部分の處置法を定む。（六〇六）
○學校に於ける醫學稽古の日割を定む。（六〇七）

四月　○朔日前田齊廣登營して參覲の禮を行ふ。（六〇八）
○朔日畑柳泰、前田治脩に投藥奏功したるを以て三十人扶持を給し、次いで歸京せしむ。（六〇八）
○二日大聖寺侯前田利之、本鄕邸に前田齊廣を訪ふ。（六〇九）
○十五日金澤に於いて前田齊廣が出府以後の狀況を告ぐ。（六〇九）
○廿六日火の元の警戒を嚴にし、殊に山火事を生ぜ

ざらしむべきことを諭す。(六一〇)
〇京都の陶器師青木木米を招き窯を金澤春日山に興さしむ。(六一一)

五月
〇朔日前田治脩の病稍癒えたるを以て老臣以下之を親す。(六一二)
〇七日前田治脩の表小將等、能役者のツレたるべき命を拒みしを以て指扣を命ぜらる。(六一三)
〇廿一日昨今兩日前田利命の三回忌法會を修す。(六一四)
〇廿八日大小將組三輪釆男・齋藤金十郎自分指扣を命ぜらる。(六一四)

六月
〇八日前田齊廣使者を以て鷹司政煕の女と婚せんことを求む。(六一五)
〇九日前田齊廣、海防の爲船舶その他の準備をなすべきことを命ず。(六一七)
〇十四日能登奥郡海岸の形勢を調査すべきことを告ぐ。(六二二)
〇十六日前田齊廣、金相場騰貴するを以て江戸詰人の増扶持に就いて議せしむ。(六二三)
〇廿一日淺野川に洪水あり。(六二四)
〇廿一日武具奉行に命じ藩有の侍具足及び足輕具足の數を調査せしむ。(六二四)
〇廿一日馬廻頭青木與右衞門等に非常の際出陣すべき準備を命ず。(六二六)
〇廿一日領内三州の海岸に各船舶を準備し置くべきことを命ず。(六二六)
〇廿二日火矢方小川丈作をして豫め防備に關する調査を行はしむ。(六二七)
〇廿三日能登奥郡の奉行、海岸巡視の爲に出發す。(六二八)
〇廿四日馬廻頭青木與右衞門・中川平膳に海岸防備の內調理を命ぜらる。(六二八)
〇廿四日前田重靖の生母善良院の五十回忌法會を經王寺に行ふ。(六二九)
〇廿六日非常の事變に處する爲本道・外科の町醫師各一人を選定せしむ。(六三〇)
〇廿七日非常事變に處する爲御步橫目及び火矢方等に準備を命ず。(六三〇)
〇廿七日金澤にて馬匹を有する者に當分賣却し得ざることを命ず。(六三二)
〇廿八日非常の際出陣を命ぜられたる一番組馬廻金森量之助自殺して死す。(六三二)
〇廿九日昨今兩日前田齊敬の十三回忌法會を天德院に執行す。(六三三)
〇廿九日犀川及び淺野川の水暴漲す。(六三四)

七月
〇二十日海岸防備の爲大筒方の準備を命ず。(六三四)
〇廿二日前田齊廣、鷹司政煕の女と縁組を內約す。(六三五)

○能登諸村民に命じ、異國船着岸するときは一定の所に參集せしむ。(六三五)
○能登の海岸に於ける防備の方法に就いて議す。(六三八)

八月　○廿八日是夜以降彗星西天に現る。(六四三)

九月　○二日老臣長甲斐守邸等に落雷あり。(六四四)
○十三日前田齊廣鷹司政熙の女との緣組を許さる。(六四四)
○十五日石動山論所の裁判方法に關して稟議す。(六四五)
○十七日犀川及び淺野川出水す。(六四七)

十月　○二日脇坂義堂金澤に來り心學を講ず。(六四八)
○十日德川綱吉の百回忌法會を神護寺に行ふ。(六五二)
○十二日昨今兩日前田利常の百五十回忌法會を寶圓寺に行ふ。(六五二)
○廿八日金澤町奉行孝女知氣地屋てつに米三俵を賞賜す。(六五三)
○前田齊廣夫人來嫁の際に於ける行列附を定む。(六五四)
○鷹司政熙その女の前田齊廣に嫁するに先だちて教訓を與ふ。(六五六)

十一月　○朔日前田齊廣の成婚の際諸士の獻上すべき金品に就き定む。(六六五)
○八日京都の醫畑柳泰、前田治脩の病を診せんが爲金澤に來る。(六六五)
○廿二日諸士より徵する本年の借知を免除すべきことを告ぐ。(六六六)
○廿三日前田齊廣、鷹司政熙の女に結納を贈る。(六六七)

十二月　○四日本年の借知返還の手續を定む。(六六七)
○上旬、能美郡小松附近に於いて越後の縮賣惡漢の爲に燒殺せしめられんとす。(六六八)
○十五日歲末祝詞の爲登城すべき期日に就いて告ぐ。(六七〇)
○十八日前田齊廣、鷹司政熙の女夙姫と婚す。(六七一)

文化五年　戊辰　皇紀二四六八

正月　○二日金澤に於いて諸士に前田齊廣の成婚を告ぐ。(六七三)
○四日金澤町奉行、孝子能登屋三右衞門等を賞す。(六七四)
○十五日金澤城二ノ丸の殿閣悉く燒失す。(六七七)
○十六日老臣等の用部屋を前田伊勢守の邸に移す。(六八五)
○十六日昨日火災の際諸役人の功勞ありし者を調査せしむ。(六八六)
○十六日二ノ丸御殿火災の當日宿直せる者に指扣を命ず。(六八六)

〇十七日越前・越後の領界に吏を派して警戒を嚴にせしむ。(六八七)
〇廿一日金澤城の燒失を報ずる急使江戸に着す。(六八七)
〇廿三日用部屋を老臣津田玄蕃の邸に移す。(六八七)
〇廿七日德川家齊、前田齊廣に使者を遣はして居城燒失に付慰問せしむ。(六八八)
〇廿七日老臣本多安房守邸を以て藩侯の居館に充つべきことを告ぐ。(六八八)
〇異國船の手當に關する幕府の令を傳達す。(六八九)
〇淺野屋宗平、金澤城火災の際その家に貞琳院の避難せる事情を上申す。(六九〇)
〇火災後士庶多く金品を獻納す。(六九四)
〇鳳至郡大澤村の長太、老狸を殺したることを屆出づ。(六九九)

二　月

〇朔日老臣長甲斐守、前田齊廣が災後に於ける下民の特志を賞するの意を傳ふ。(七〇二)
〇三日德川家齊が前田治脩慰問の爲に遣はしたる奉書金澤に達す。(七〇三)
〇五日德川家齊、前田齊廣に鶴を贈る。(七〇三)
〇七日金澤城災後の整理終りたるを以て火事裝束の着用を廢せしむ。(七〇四)
〇十五日金澤城の災後日を經たるを以て市中家屋造營等凡て平常に復すべきを告ぐ。(七〇五)
〇廿三日藩侯歸國後の住所本多安房守邸を城内格とすべきを告ぐ。(七〇五)
〇廿五日前田治脩の醫畑柳泰京に歸る。(七〇七)
〇前田齊廣、幕府より殿閣復興の資を借らんとの老臣の請を却く。(七〇七)

三　月

〇九日災後初めて學校を開く。(七〇八)
〇十三日前田齊廣就封の暇を受く。(七〇八)
〇十三日金澤城罹災の爲金品を獻納したるものを賞す。(七〇八)
〇十四日本多勘解由・前田織江二人、前田齊廣に謁しその政令の嚴肅ならんことを進言す。(七〇九)
〇十四日前田齊廣、金澤に歸着の際の順路を定む。(七一一)
〇十五日前田齊廣登營して就封の辭見し、向後三ヶ年在國することを許さる。(七一一)
〇十六日前田齊廣江戸を發して就封の途に上る。(七一三)
〇十六日年寄中席を本多安房守の邸内に設く。(七一三)
〇二十日異國船來着の際に於ける心得を能登四郡に通牒せしむ。(七一三)
〇廿三日天德院に於いて前田吉德の子利和の五十回忌法會を執行す。(七一二)
〇廿八日前田齊廣金澤に歸り老臣本多安房守の邸に

着す。(七二三)

四月 ○金澤城殿閣造營主任の吏を命ず。(七二四)

○朔日畑柳秦、前田治脩の病を診する爲再び金澤に來る。(七二五)

○四日安達良作出奔し、次いで越前に於いて自害す。(七二五)

五月 ○八日前田齊廣初めて二ノ丸御殿の燒跡を見る。(七二七)

○十三日大鼓打坂尻屋佐六葛野流を學ぶことを命ぜらる。(七二七)

○十三日領内の秤檢査の爲守隨彦太郎の手代金澤に來る。(七二七)

○十六日大聖寺侯前田利之金澤城に登る。(七二八)

○廿一日前田齊廣の通過の際に於ける門番の作法を定む。(七二八)

○廿二日火災の際眞琳院の難を避けたる淺野屋宗平に金子を與ふ。(七二九)

○廿六日檢査の爲秤を秤座に提出すべきことを命ず。(七三〇)

○明年朝鮮の國使來聘するを以て加賀藩より上納すべき高役・國役を五ヶ年賦とすることを許さる。(七三〇)

○金澤城の殿閣燒失せしを以て特に省略を事とすべきを告ぐ。(七三二)

六月 ○四日先に出奔自殺したる安達良作の父彌兵衛遠慮を命ぜらる。(七三三)

○六日百姓にしてその下人を養子とすることを禁ず。(七三三)

○十日金澤城殿閣造營に付き地鎭祭祈禱を修すべきことを議す。(七三四)

○二十日諸士の家に傳ふる藩侯の判物・印物の寫を提出せしむ。(七三四)

○廿五日犀川・淺野川の水暴溢す。(七三五)

○廿八日二ノ丸御殿造營の工事に着手す。(七三五)

○廿九日大聖寺・富山及び領内各所に水害あり。(七三八)

○先に異國船手當を命ぜられたる諸士に費用を給す。(七三九)

閏六月 ○廿七日能美郡小松の暴民、町年寄亜久津屋三郎助等の家を襲ひて破壊す。(七四〇)

○江戸に於いて禁牢以後釋放せられたる者の處置を定む。(七四五)

七月 ○廿二日諸士をして出雲日御崎社の勸化に應ぜしむ。(七四六)

○廿五日二ノ丸御殿柱立の儀を行ふ。(七四七)

○廿六日前田齊廣二ノ丸御殿造營の現場を見る。(七

四八)

八月 〇十日小松町奉行河村茂三郎指扣を命ぜらる。(七四八)

〇十二日犀川の漁撈者に公儀町中村屋善右衛門より鑑札を受けしむ。(七四九)

〇十六日京都の醫畑柳啓が貫治通鑑出版の費を助く。(七五〇)

〇十七日前田治脩の醫畑柳泰京師に還る。(七五〇)

〇大乘寺開山徹通義介遠忌執行の爲勸化を許す。(七五一)

九月 〇三日學校の習學會讀に陪臣の隨意出席するを許す。(七五一)

〇七日大銀奉行三輪釆男等保管銀の盜難に罹りたる際處置を誤りたるを以て閉門を命ぜらる。(七五二)

〇八日去夏以來異國船手當に對する準備を命ぜられたるものゝ任務を解除す。(七五三)

〇十日金澤高岡町に災あり。(七五五)

〇十一日前田治脩の病を診せしめんが爲津山侯の醫宇田川玄眞招聘の使者を命じ、次いで之を中止す。(七五五)

〇十四日大乘寺開山五百年忌法會の爲參集せる衆僧を饗す。(七五六)

〇十九日重罪の者に梟首・生胴等を宣告す。(七五六)

〇廿四日人持組の士の無用の參會を禁ずる前令を恪守せしむ。(七五八)

十月 〇三日一季居奉公人逃亡の際その處置に關する取調を嚴にせしむ。(七五八)

〇四日能登の十村等に異國船手當に對する警戒を解かしむ。(七六〇)

〇十五日是日以後江戸に於いて前田重教夫人の七回忌法會を修す。(七六一)

〇十九日前田齊廣慰能を行ふ。(七六二)

〇廿七日幕府罹災せる金澤城の復興工事を許す。(七六二)

〇廿八日前田齊廣金谷御殿に於いて石橋の能を演ず。(七六三)

〇與力遠藤七郎右衛門等、廣坂柵門勤番中その職務を誤るを以て遠慮を命ぜらる。(七六三)

十一月 〇十三日前田齊廣、家老等の席に侍分の執筆を置かんとする申請を排す。(七六五)

〇十三日二ノ丸御殿造營主任にその工事進捗に關して令す。(七六六)

〇廿九日前田齊廣金谷御殿に於いて能を演じ諸士をして之を觀覽せしむ。(七六六)

〇物價高貴なるを以て江戸詰の諸士以下に金子を貸與す。(七六七)

〇富山侯前田利幹財政困難なることを以て供奉の人

員を減ずべきことを報ず。（七六八）

十二月 ○五日領内に於ける米穀の減收を幕府に屆出づ。（七六八）

○八日津山侯の醫宇田川玄眞金澤に着す。（七六九）

○十日宇田川玄眞、前田治脩の病を診す。（七七〇）

○十八日九條家の使者佐々木市正、諸士に貸附したる金子の返濟催促の爲金澤に着す。（七七二）

○廿一日本年諸士より徵する借知・借米の一部を免除す。（七七三）

○廿三日借知・借米返還の手續を定む。（七七四）

○廿五日九條家の使者佐々木市正の待遇を改む。（七七六）

文化六年　己巳　皇紀二四六九

正月 ○朔日前田齊廣、年頭の儀を本多安房守邸に行ふ。（七七八）

○二十日御廣式に奉仕する中﨟を募る。（七七九）

○廿七日二ノ丸御殿造營の爲江戸の繪師狩野友益等金澤に着す。（七八〇）

二月 ○二日二ノ丸御殿の上棟式を行ふ爲觀音院に命じて吉日を撰定せしむ。（七八〇）

○三日京都の能役者竹田權兵衞が金澤今町に建築したる稽古舞臺成る。（七八一）

○四日攝津四天王寺の勸化銀を割賦する爲民戸の數を上申せしむ。（七八二）

○五日組外組牛田新左衞門の子左助出奔す。（七八三）

○七日前田齊廣金谷御殿にて能を演ず。（七八三）

○七日前田齊廣、久しく斷絶せる寄親附與力の補缺を出願すべからざることを告ぐ。（七八四）

○七日宇田川玄眞將に歸國せんとするを以て料理を賜ふ。（七八四）

○七日石川郡大豆田村に火災あり。（七八五）

○十日宇田川玄眞金澤を去る。（七八五）

○二十日能登各地に煎海鼠の製造を奬勵す。（七八五）

○廿四日二ノ丸御殿造營の上棟式を行ふ。（七八六）

○金澤城橋爪御門の造營成る。（七九三）

三月 ○二日金澤大衆免に火災あり。（七九五）

○廿二日鹿島郡より金澤に運送する商荷物は邑知潟の水路を取るべからざることを告ぐ。（七九五）

○廿六日江戸に於いて本多三郎右衞門を祿す。（七九六）

○廿九日河北御門を修營するを以て通行を停む。（七九七）

○一向宗西派に屬する能登安樂寺の住僧新儀を唱ふるを以て江戸に捕へらる。（七九七）

四月 ○二日大聖寺侯前田利之參覲の途金澤城に登る。（七九八）

○五日繪師佐々木泉景二ノ丸御殿の杉戸に描くこと

を命ぜらる。（七九八）

○九日二ノ丸御殿落成せしを以て移徙の期日を定む。（七九九）

○十四日鹿島郡長齢寺に相對托鉢を行ふことを許す。（八〇一）

○十六日立太子を奉賀する爲前田齊廣及び治脩使者を江戸に發せしむ。（八〇二）

○廿四日江戸に於いて大鼓打飯島六之佐失踪す。（八〇三）

○廿六日前田齊廣二ノ丸御殿に移徙す。（八〇三）

○廿六日二ノ丸御殿成るを以て金澤町等に盆正月を行ふ。（八〇五）

○廿九日前田治脩の臣畑柳泰に歸京を命ず。（八〇八）

五月 ○朔日前田齊廣二ノ丸御殿の竣功を悦ぶとの意を傳ふ。（八〇九）

○六日前田齊廣、今明兩日能を演じて祝意を表す。（八一〇）

○十五日前田治脩金谷御殿に於いて幼年の者をして能を演ぜしむ。（八一〇）

○廿八日去年小松の町家を打毀したる高堂屋庄次郎を磔刑に處す。（八一二）

六月 ○六日江戸平尾邸内に陷穽を設けて猪を狩らしむ。（八一四）

○十二日金澤大聖免に渋あり。（八一五）

○十五日町奉行、繪師狩野友益の名を古益と改めたるを通牒す。（八一五）

○廿二日前田治脩の病狀良からざるを以て再び畑柳泰を招かしむ。（八一六）

○廿二日能登光德寺住持の弟三位、江戸に於いて築地門跡に預けらる。（八一六）

○廿六日前田齊廣の女直姫金澤に生る。（八一七）

七月 ○四日前田齊廣の女直姫の七夜の祝儀を行ふ。（八一七）

○九日金澤卯辰妙應寺より出火す。（八一七）

○十一日畑柳泰、前田治脩の病を診せんが爲又金澤に來る。（八一九）

○十四日金澤八幡町の柳橋屋吉右衞門人を殺して銀子を掠奪し、後磔刑に處せらる。（八一九）

○十九日本多三郎右衞門召によつて金澤に着す。（八二二）

○廿九日金澤城五十間長屋等成就す。（八二三）

八月 ○十八日京都の醫曲直瀨亨德院金澤に來る。（八二四）

○廿六日京都の繪師岸越前介金澤に着す。（八二四）

九月 ○七日能役者等に石井流大鼓の待遇に關する件を諭す。（八二八）

○十日前田齊廣、庭掃市右衞門の高齡を慰むる爲鳥目を與ふ。（八二八）

○十日金澤町奉行、孝子節婦數人を賞す。(八三〇)
○十四日字田川玄眞、前田治脩の病を診せんが爲金澤に着す。(八三七)
○廿八日公事場奉行等刑の適用に關する慣例を上申す。(八三九)

十月 ○十村等の駕籠に乘ることを嚴禁せしむ。(八四一)
○十二日許可を經ずして新開を行ひたる村方の調査を命ず。(八四二)
○十八日黄に能美郡小松に於いて暴民の爲に家を毀たれたる久津屋三郎助を所拂に處す。(八四三)

十一月 ○朔日前田齊廣の女直姫の色直・箸初の祝儀を行ふ。(八四四)
○十五日佳節・朔望に出仕するものゝ列居を遲滯することなかるべきを命ず。(八四四)
○十六日領國寺社に許可を得ずして相對托鉢を行ふを禁す。(八四五)
○廿二日代官の下代等收納米に就いて不正の手段を行ふを禁ず。(八四六)
○廿四日金澤城二の丸の造營に從事する大工等濠中に落つ。(八四七)

十二月 ○十日本年諸士より徵する借知中の一部を免除す。(八四七)
○十四日借知等返還に就いてその手續を定む。(八四九)
○十四日二ノ丸御殿樂屋多門の造營に從事する大工等濠中に墜落す。(八五〇)
○十四日繪師岸越前介に歸京を許す。(八五一)
○十六日繪師岸越前介金澤を發して歸京す。(八五二)
○廿九日金澤城内なる會所小拂所盜賊に侵さる。(八五二)
○廿九日能役者の座列を改む。(八五三)

是歲 ○楠部屋金五郎等、金澤柳原の非人の爲に小屋を建築す。(八五三)

文化七年 庚午　(皇紀二四七〇)

正月 ○朔日前田齊廣金澤に於いて年頭の儀を行ふ。(八五七)
○二日前田齊廣松囃子の儀を行ふ。(八五八)
○三日御禮人等をして新造の二ノ丸御殿を觀覽せしむ。(八六二)
○四日前田治脩の病狀大に漸む。(八六三)
○五日前田治脩の病況稍佳良を見る。(八六三)
○七日前田治脩卒す。(八六四)
○前田治脩行狀(八六五)
○七日諸士に命じ登城して前田治脩の機嫌を奉伺せしむ。(八七六)
○八日再び諸士に命じて前田治脩の病狀を奉伺せしむ。(八七七)
○九日前田治脩の喪を發す。(八七八)

○十五日前田治脩の病を問ふ爲夫人より使者を發す。(八八二)
○十六日前田治脩夫人再び使者を發す。(八八三)
○十六日前田治脩中陰法會に大赦及び施行を行ふべきことを告ぐ。(八八三)
○十七日德川家齊、前田治脩の病を問ふ爲奉書を下し及び醫師を派遣す。(八八四)
○十八日德川家齊使者を遣はして前田治脩の病を問はしむ。(八八五)
○十九日前田治脩夫人弔使を江戶より發す。(八八五)
○廿一日前田治脩夫人落飾す。(八八五)
○廿二日德川家齊、前田治脩の卒去を弔して香典を贈る。(八八六)
○廿二日先に德川家齊の發せしめたる奉書金澤に達す。(八八六)
○廿六日宇田川玄眞・細柳參に暇を賜ふ。(八八六)

二月

○五日前田治脩の葬儀を寶圓寺に行ふ。(八八七)
○七日前田治脩の中陰法會前日なるを以て寶圓寺の見分を行ふ。(八九五)
○八日本日より前田治脩の中陰法會を寶圓寺に行ふ。(八九六)
○八日玉泉寺に於いて貧民に米を施行す。(九〇一)
○十四日前田治脩の三十五日法會を寶圓寺に行ふ。(九〇一)
○十六日二ノ丸御殿造營の費用缺乏するを以て速に工事を竣るべきを議す。(九〇二)
○十八日前田治脩の卒去後中止したる學校の授業を開始すべきことを告ぐ。(九〇三)
○廿一日公事場及び町會所の牢に於ける罪人に赦を行ふ。(九〇三)
○廿三日流刑・閉門等の士に赦を行ふ。(九〇四)
○廿七日先に失踪したる町役者飯島六之佐金澤に歸る。(九〇四)

三月

○一向宗遠祖年忌に付き郡中に令し濫に費用を失ふこと勿らしむ。(九〇七)
○朔日前田齊廣使者を幕府に發して先に弔問せられたるを謝せしむ。(九〇七)
○二日能登に於ける幕府領の政治を加賀藩の法によつて行はしむ。(九〇八)
○八日江戶にて前田齊廣夫人の行列、鳥居丹波守の行列と衝突す。(九一〇)
○十六日前田利命の生母智光院と稱す。(九一〇)

四月

○八日非人小屋に收容する者の送狀に就いて令す。(九一一)
○十八日二ノ丸御殿の杉戶の繪畵を定む。(九一二)
○廿五日二ノ丸御殿表式臺等竣功するを以て祝儀を

行ふ。(九一五)
○諸士の邸内に同居する奉公人以外の員數を屆出しむ。(九一七)

五月 ○二日嬪姫の生母慧照院、金谷御殿に移るべきことを命ぜらる。(九一八)
○二日一向宗本山より教化の爲發したる書翰到着せしを以て百姓等の群參することを戒む。(九一八)
○七日二ノ丸御殿の裝飾に從事したる繪師村上健亮等賞賜せらる。(九一九)
○十二日昨今兩日前田重教の廿五回忌法會を寶圓寺及び江戸廣德寺に行ふ。(九二〇)
○十二日前田重教の廿五回忌に付き赦を行ふ。(九二二)
○十三日大聖寺侯前田利之歸邑の途金澤城に登る。(九二二)
○十六日前田齊廣學校に臨みて諸士の武技を觀る。(九二三)
○廿三日一向宗門徒宗意に關して紛議を生ずるなかるべきを諭す。(九二三)
○廿九日飯島六之佐再び町役者を命ぜらる。(九二四)

六月 ○二日越登賀三州志その他領國の事蹟に關する記錄の提出を命ず。(九二五)
○二日割場附足輕小森彦三郎、御馬廻組の士坂井斧吉と爭ひて互に創傷を受く。(九二六)
○六日前田齊廣、學校に臨みて諸士の武技を閲す。(九二七)
○八日前田齊廣、諸士の請願を當分聞屆けざるべきを告ぐ。(九二七)
○十五日本年より老臣以下諸士の借知高を減ず。(九二九)
○十五日寶暦九年以後諸士の献納したる人足賃銀を徴せざることゝす。(九三一)
○十七日學校に於いて大村乙四郎、遊戲の際傷けられ遂に死す。(九三二)
○十八日米預證書を僞造したる大河原傳九郎等牢揚屋に收容せらる。(九三四)

七月 ○朔日豫て諸士の提出したる諸願書を却下す。(九三四)
○十日御勝手方本多勘解由等、金銀の融通を促すべき件に關して意見を徴す。(九三五)
○十七日能登の藤内が盜賊を逮捕護送する場合の慣習を調査せしむ。(九三七)
○廿二日御算用者山本清八郎を刎首の刑に處す。(九三八)
○廿七日江戸に於いて蘭學醫吉田長淑を祿す。(九三九)
○廿九日前田齊廣金澤城内を巡覽す。(九三九)

八月 ○三日前田吉德の側室實成院の五十回忌法會を修す。(九四〇)

○六日諸郡に於いて製織する織物及び機具の數を録上せしむ。(九四〇)

○十九日卯辰蓮昌寺の住僧壽潤追院を命ぜらる。(九四一)

○廿五日德川家治の廿五回忌法會を金澤神護寺に行ふべきことを告ぐ。(九四二)

○晦日米穀の俵裝を精良ならしむべきことを命す。(九四三)

○百姓の新米賣出を容易に許可せざるべきことを命す。(九四四)

○重ねて一向宗宗祖遠忌に付き濫に金品を寄附することなかるべきを命す。(九四五)

九月

○四日町奉行等金銀融通に關する諮問に答ふ。(九四六)

○六日繪師岸筑前介將に歸京せんとするを以て物を賜ふ。(九五一)

○十五日前田齊廣の女直姫卯辰山觀音院に宮參を行ふ。(九五二)

○十五日犀川に漁撈を行ふ者に川役運上請負人より鑑札を受くべきことを命す。(九五三)

○廿二日二ノ丸御殿造營竣成を祝する爲明年二月儀式能を擧行すべきことを告ぐ。(九五四)

○他國者に對し入墨の刑を施すべき手續を改む。(九五五)

十月

○十日金澤城内の越後屋敷を復興すべきことを命す。(九五六)

○十日能登各浦に於ける煎海鼠・干鮑の產額增加したることを賞す。(九五七)

○廿八日山伏に勸進許可を證する爲の紙札を授く。(九五八)

十一月

○朔日前田齊廣、諸士の教養を重んじ風儀を改善すべきことを諭す。(九五九)

○朔日前田齊廣、金澤町奉行の職務に關する心得を諭す。(九六〇)

○四日金澤城東多門附近の工事成る。(九六五)

○九日昨今兩日前田治脩の一周忌法會を寶圓寺に修す。(九六六)

○十日前田齊廣の明年參覲の期を三月と定められたる報金澤に達す。(九六七)

○廿一日明年より諸郡に一萬石の籾納を命ず。(九六八)

○廿五日二ノ丸御殿の造營成就せしを以て關係者等に酒肴を與ふ。(九六九)

○廿五日老臣本多安房守、金澤城の造營成るを以て算用場奉行・町奉行に覺書を與ふ。(九七〇)

十二月

朔日前田齊廣諸士に金澤城造營成就を悦ぶの親翰を下す。(九七一)

○二日前田齊廣又老臣に金澤城成就を悅ぶの親翰を

與ふ。(九七二)
○七日從來諸士に貸與したる金銀の返納方法を寛にす。(九七三)
○十日金澤城燒失以後免除せられたる幕府の獻上物を復すべきことを告ぐ。(九七七)
○十四日種油缺乏するを以て木實油を賣らしむべきことを告ぐ。(九七八)
○十九日脇本長次郎流刑を命ぜらる。(九七九)
○廿一日德川家齊、前田齊廣等に歲暮の祝儀を贈る。(九七九)

就業

侯爵前田家囑託　日置謙

昭和十二年十二月十六日印刷
昭和十二年十二月廿一日發行
（非賣品）

著作者　東京市目黒區駒場町八百六十一番地　侯爵前田家編輯部

發行者　東京市淀橋區東大久保町二丁目三百十七番地　石黒文吉

印刷者　石川縣金澤市高岡町九十番地ノ二　高橋覺吉

印刷所　石川縣金澤市高岡町九十番地ノ二　明治印刷株式會社



